齋藤茂吉編

萬葉集研究 下

岩波書店

凡例

「萬葉集研究」下は、上卷に續き、その二十より四十七までを收めた。右は、雜誌アララギに發表されたもので、二十は、昭和十一年一月、二十一以下は、昭和十一年四月から十三年六月に亙つてゐる。各項がアララギの一月分宛に當り、各項の終にその年月を記した。本書に纒めるに當つて、部分的に訂正した箇所もある。

萬葉集の歌に用ゐられた數字は、國歌大觀の番號である。

卷末に、執筆者索引と所載歌索引とを附した。歌を示すに、前者に於いては初句、後者に於いては初二句をあげ、之に國歌大觀番號を附した。所載歌索引は、本文にその一句か二句或は題詞乃至番號のみをあげた場合でも採つたものがある。但し、萬葉集以外の歌は省いた。太字を以て頁數を示したのは、當該歌を主題とした箇所である。

なほ上卷の序文を參照されたい。

萬葉集研究 下 目次

二十　人麿の歌十首

齋藤茂吉

○

編輯者の土屋君から話があつて、私に人麿の短歌十首を出題せよといふことであつたので、以下の十首を選出して見た。人麿の短歌は、私はすでに「柿本人麿」評釋篇で愚見は述べて置いたのであるが、愚見はアララギの若手の意見を徴するいとまがなかつたので、今回の出題を好機會として諸君の意見を今日聞くことを得るのは、私にとつても有益なことと思ふ。

○

ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人に亦も逢はめやも　（卷一、三一）

齋藤茂吉

何故この歌を問題にしたかといふに、この第二句第三句の「志賀のおほわだよどむとも」の解釋に二通りあるからである。先づ「大わだ」の解釋について言へば、季吟の拾穗抄の說であつて、これは大わだは

大海の義となし、近江の海即ち琵琶湖をさすといふのである（僻案抄・燈・攷證・美夫君志・講義同說）。もう一つの說は、代匠記の說であつて（考・略解・古義等同說）、これは、近江の海の一部分の入江を指したものといふ說である。それから第一の說と關聯して、この「よどむとも」の意義は、僻案抄では、近江の湖水の水が宇治瀨田の方に流出して居るから、さういふ流出が止る狀態、即ち近江の湖水が淀む狀態であらうともといふ、未來にかかる條件の意味だと解釋して居る（燈・攷證・美夫君志・講義等同說）。それから第二の說と關聯して、この「淀むとも」は現在入江の水が淀んでゐるけれどもといふ位に解釋してゐる。以上の二說は結果から言へば大いに違ふのであるから、今夜は一つ諸君の說を聞きたいのである。

○

鹿兒島壽藏

問題の中「志賀の大わだ」に就ては私が、今まで取つて來た解釋は、今の第一說即ち琵琶湖全體を指すのではなく、第二說の湖の一部分、具體的に云へばやや廣い灣入を指すといふ方であつた。「大わだ」は語の氣持から云つて無論湖全體を度外視するといふわけにいかないところが幾分感じられはする。然し、第一の說のやうに湖全體とは考へにくい。第一の說のやうに取れば、氣持の上から背景が强くなり、意味も深げに思はれはするが、すぐ前の「ささなみの志賀の辛碕幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」（三〇）の歌も參考し、作者の凝視してゐると思はれる現實を考へると、今いつた一部に限定する方が一首が生々としてくるやうに思はれる。一體湖水の水の流出などを考慮に入れてゐると、作者も作品も地に着かなくなりはせぬかと思ふ。「淀むとも」には尙問題があるのだと思ふが、大體に於て第二の說に從はねばならぬ

のではないかと考へる。

○　落合京太郎

「志賀の大わだ淀むとも」といふ句がこの歌の重點でもあり、解釋にも齋藤氏のいはれたやうな二様の意味があるのである。志賀の大わだといふのは、自分はやはり「志賀の大きな入江」の意味に解していいのではないかと思ふ。さう解しても勿論鹿兒島氏が言はれた如く、一局部の入江のみでなくそれに續いた沖邊の方の光景も作者の眼前にみえて居ること勿論であらう。「淀むとも」は「現在淀んで居るけれども」の意に自分は取る。現在は淀んで居ないけれども縱令淀むことがあつてもといふ說には左袒出來ない。詰り昔ながらの志賀の入江の現實に對して人の移ろひ易きを嘆いて居る歌の意に解したい。

○　柴生田稔

私も「湖水の流出がとまることがあつても」といふ解釋には不贊成であるが、それに對立する說として擧げられた「現在入江の水が淀んでゐるけれども」といふ解釋にも不滿を感ずるので、その點に就いて一言したい。一般に「とも」は或る事柄を假定していひ、「ども」は事實を擧げていふ用法だと說明されてゐるが、その「とも」の場合に於ける假定といふのは必ずしも現在の事實の反對であることを要しないと思ふ。「八田の一本菅はひとり居りとも大君しよしと聞こさばひとり居りとも」（仁德記）、「山川を中に隔りて遠くとも心を近くおもほせ吾妹」（三七六四）などの例に於いて、現在やはり「ひとり居る」のであり、「遠

い」のであつて、それに對して「とも」が用ゐられてゐる。それで、今の歌の場合も、現在淀んでゐる光景に對して「淀むとも」といふ表現を用ゐたものとして差支ない。然し又、この場合の「とも」を、全然「ども」と同じにとつて、「淀んでゐるけれども」と解釋してしまふのは如何なものであらうか。澤瀉久孝氏の新釋では、明かに「淀むとも。淀めどもといふに同じ。人待ち顔に淀んでゐるけれどもの意である」として居られるが、「淀めども」と「淀むとも」は氣持の上にかなりの相違があるのではないか。私見では、この「とも」は、現在の事實如何の問題とは無關係に、ある條件を提出して來るもので、そこに、ただ現在の事實を擧げて言ふ「ども」との相違を認むべきではないかと思ふ。この歌の場合、「たとへそのやうに淀んでゐても」といふ位に口譯して見れば無理がなく通ずるのではあるまいか。「とも」に就いては、なほ考へるべきことが殘つてゐるが、兎に角「淀むとも」をただ「淀んでゐるけれども」としてしまはずに、「とも」といふ詞の特殊性を認めて味ひたいと思ふのである。

○

佐藤佐太郎

かういふ擬人的手法を嫌味に感じたこともあるが、現在ではやはり人麿の歌の中でも佳い方の部類に入るのではないかと思つて居る。「志賀の大わだ淀むとも」の「とも」なども、多くは弱く理窟めいて響く所であらうけれども、さういふことを云々させない底の強い感情に統一された所がある。先程の落合氏の大わだを沖の方まで纏めるといふ說があつたが、僕はやはり彎曲した或一角をみた光景として、それが停滯して居るといふ趣ではないかと思ふ。

○　　　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

この人麿の長短歌は恐らく大津の舊都の其場で作つた歌と思はれるが、私はどうも自分の三井寺あたりから湖水を望んだ記憶が先に立つて來て、人麿の湖水に對する位置がはつきりしない。しかしそれは餘り眺望の上に變化がないものと見て解釋して置かう。すると、この「大わだ」を海とする說も強ちに捨てたものではないと思ふ。勿論あの邊から見える琵琶湖は南方の灣入した一部分ではあるが、人麿は五萬分一地圖などを持つて居ないから、見える所を直ちに近江の海と感じて居るといふ方が却つて自然ではあるまいか。「夢のわだ」などいふ地名もあるが、特に「大わだ」と「大」の字を冠らした所は單なる灣入の入江といふ感じではないやうに思ふ。なほこのことは「オホワダ」「ワタ」の用例を一應調べて見てからにしたいと思ふ。

○　　　　　　　　　　　　　　　　吉田正俊

「ささなみの志賀の大わだよどむとも」と言ひそれから「昔の人にまたも逢はめやも」とつづくのだから、「逢はめやも」の主格は、「志賀の大わだ」であるといふ從來の說が或は正しいのであらう。しかし、私は人麿の手法として必ずしもさう嚴密に解釋する必要がないのではないかと思つてゐる。人麿は「ささなみの志賀の大わだよどむ」といふ情景と「昔の人にまたも逢はめやも」といふいはば漠然とした感情とを結付けるのに「とも」と云ふ言葉を利用したので、この時の人麿の心持は、「逢はめやも」の主格は大わ

だであるといふやうな的確さはなくて、自分でも、一般の人でも、或ひは大わだでも、それはどうでもよかつたのではあるまいか。尙又さういふ點からも「淀むとも」は將來にかかる條件ではなくて現在の狀態をいつたものと考へる。だから淀んでゐるけれどもといふ風に解しては、調べといふ點を度外視すれば以上の理由で强すぎるのではあるまいか。これはやや後世風の解釋のやうであるが、人麿にはかういふ手法があるやうである。例へば、「小竹の葉はみ山もさやに亂げども吾は妹おもふ別れ來ぬれば」(一三三)の「ども」、「稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀ほしき可古の島見ゆ」(二五三)の「ば」などは、この「とも」などと同種類で、感情縮壓と言はうか感情集中と言はうか、さういふ表現技巧である。

○

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ　(卷一、四八)

齋藤茂吉

この歌の初句は、舊訓「アヅマノノケブリノタテルトコロミテ」と訓んで居た。然るに賀茂眞淵は考で「ヒムガシノヌニカギロヒノタツミエテ」と訓み、爾來殆ど定訓の相になつたのであるが、私の興味を覺えたのは、この眞淵の訓はすでに代匠記にその萌芽があるので、代匠記には「又案ずるに東野と書き、西渡と書けるは相對する詞なれば、ヒムガシノノとよみ、ニシワタルと字のままによむべきにや」と云つてゐる。眞淵はこの訓から暗指を得て、それを捨てずに新訓を樹てたのは興味あることである。それ故嚴密な意味で云へば、この訓は代匠記の訓といふことになるのかも知れぬ。ただ、契沖は決斷し得ずに數種の

訓を提出してゐるのに止まつたのだからして、やはり眞淵訓と云つてよいのであらう。この事はなほ後にも一寸觸れる。

私のこの歌を出題したのは、舊訓のままで解釋して居ればどういふ歌になるだらうかといふのが主眼であつたのである。即ち

アツマノトヘ、東國ノ野ヲコソ申侍ルニ、此野ヲアツマノトヨメルイカニ侍ニカ。モシアツマウトヲイフニモ、邊鄙ノアツマナトイフコトモ侍レバ、コノ野モミヤコニアラサル、イヤシキ野トイヘソトテヨメルニヤ。(仙覺抄)

東野は阿騎野に近き野にや、長歌にみ雪ふる阿騎の大野とよみて、皇子の出ます時は多なれば野を燒く、烟のみゆるにつけて日並ノ皇子の御狩の御供せし折の事ども思ひつづけてねられぬままに飽かずながめやる程に月の傾く程になりぬとなるべし、案ずるに火田とて火を放ちて草を燒て獵をもするなり、又西都ノ賦に獵を云へる所に擧レ烽命レ爵、李善注云云、吳都ノ賦云、鉦鼓疊(フルヒ)レ山(ラ)火烈熛(モユ)レ林、飛爓浮煙載(アリ)霞陰、是も狩にいへれば煙を見て昔の屬望に擧し烽火の煙を思出て慕ふ心にや、西渡とかきて傾クとよむは義訓なり、又案ずるに東野と書き西渡とかけるは相對する詞なればヒムガシノノとよみニシワタルと字のままによむべきにや、阿騎ノ野にしてあづまのと云ふ處たとひありともよむべからず、阿騎ノ野は淨御原ノ宮よりは東に當れば摠じて東の野とも云ふべし、又其野の中にも東の方を指しても云ふべし、東と云ふは月の西に渡りて夜の深けたる由をいはむ爲なり、又東に向て煙の立つ方を見て頭を回らせば月は西に渡りぬと、日並ノ尊御世の須臾(シバシ)なりし事をたとふるやうによまれたるか、又按ずるに第六にかげろふの春にしなればと云ふ歌に炎乃春とかけり、東の字を義訓してハルノ野ノカゲロフタテルと點ずべきにや、心は春の御狩の時を思ひ出つるなり、第二にかげろふのもゆるあら野とよみたれば、上の歌に眞草かるあら野にはあれどと云へるやうにも心得べき。(萬葉代匠記)

このやうに契沖もいろいろ工夫をして解釋してゐる。現在諸君が、この眞淵訓が出現せずに、假りに舊訓のままであつたと假定せば、どういふ具合に解釋し且つ鑑賞するであらうか。これは問題としては稍々常軌を逸してゐるけれども、萬葉の訓のまだ一定しないのがあるから、かういふ場合をも顧慮していいやうにも思ふ。

それから、この歌は、左千夫先生はあまりよく評價して居なかつた歌であるが、現在の諸君はどう評價するか。

○

藤森朋夫

この歌の訓については、それが現在のやうに訓まれるまでには、多くの試訓を經てゐるのであるが、吾吾は最初からそのよき訓によつて敎へられ、又味ひつつ現在にいたつてゐる。然し今は提案に從つて舊訓のままで解釋して見ると、まづ第一句「アヅマノノ」は、代匠記には、「阿騎野に近き野にや」とあるが、これは普通に、東の方の野とみてよいだらう。「ケブリノタテルトコロミテ」は、何か野原などを燒く煙の立ちあがるのを見ての意としたい。東の方の野末あたりに上る、寂しい煙のすがたを見て、しみじみとした感慨にひたりながら、かへりみると月は靜かに傾いてゐるといふ工合に解したい。かうみても、一首としては情趣ふかいものがあり、心をひかれるのであるが、現在の訓に比較すると、やはり一種の均らされない荒さがあるやうに感ぜられる。

○　　　　　　　　　　　　　　山口茂吉

この歌は、第四句の「カヘリミスレバ」の句が俳優の身振りめいてゐて具合が惡いと左千夫が評し、赤彦も大體同じやうな意見であるが、この歌は三句まで先づ光景を敍べて來て、四句で一轉して五句で更に光景を說いて結んでゐる所に大きな力が籠つて居て、非常にいい歌であると私は思つて居る。そこで舊訓の「アヅマノノケブリノタテルトコロミテ」のままで味つて見ると、現在の訓よりも印象の明瞭を缺き、調子もたるみ、歌の價値が落ちること勿論であらうが、何か稚拙なやうなところがあつて棄てがたいやうでもある。前にも言つたやうに四五句だけを以てしても、なほ人麿を髣髴せしむるに足る作と思ふ。私はいつもこの歌を讀むと、渾沌たる太古の原野を見るやうな感じがして來るのであつて、左千夫、赤彥よりはもつと高くこの歌を評價して居るものである。

○　　　　　　　　　　　　　　五味保義

舊訓のやうな歌にすると、「トコロミテカヘリミスレバ」といふ續き具合が、現在の訓よりも更に、第四句に態とらしい身振を感じさせる。私は現在の訓に依つて、最初からこの歌を味ひ、それが眞淵の名訓であるといふ風に、簡單に考へてゐるのに止つて、舊訓と比較して考へたことがなかつた。然し今提出された所によつて考へて見ると、「野にかぎろひのたつ見えてかへりみすれば」といふ續き工合が案外單純であり、率直に受取り得ると思ふのである。これは提出された問題に依つて少しく益せられる所があつたやう

に考へる。左千夫の非難する程、私には外形的な歌ではないやうに思はれるし、第四句の「かへりみすれば」にしても「漠然たる大きな景色を描く句法にしては甚だ拙である」とか、凡作ではないが、「内部の組織に缺點多く稚氣を脱せぬ」とかいふ非難は當らないやうに思はれる。赤彦說に「足びきの山川の瀨のなるなへに弓月が嶽に雲立ち渡る」（一〇八八）の方が渾然一如の作でこれは稍〻上下句間になほ分岐の跡がある、「かへりみすれば」の力もなほ及び難きの感がある、と云ふのも左千夫說に示唆された所があるのではあるまいか。「足引の」の歌との比較はこの場合適切な比較であるかどうか。兎に角、私はこの歌を比較的順直な調子として受取つて、すぐれた作と思ふやうになつた。

○　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

私は、舊訓の通りに訓むと、曉方の東の方の野原に、炊ぎの煙か何かが立つのが見えて、かへり見ると月が傾いてゐるといふ風に解釋して、それでもなかなか面白い歌だと思ふ。殊に「ケブリノタテルトコロミテ」といふのは大變心を惹かれる句であるから、すでに無斷借用して居る。それから左千夫先生の批評であるが、俳優云々といふところまで行けば異論も出て來ようが、評された時の氣持は充分尊重出來るやうに思ふ。さうかと云つて、この句をとれば、缺點はなくなつても、力がなくなつて來るのではないかと思ふ。それは、よくこの歌と比較される蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」を見れば分りよい。蕪村の句は、執拗い嫌味らしいところを避けてゐるが、感銘は非常に弱くなつてゐる。それは「菜の花や」など置く發句の慣用手段にも依るのであらうが、それればかりでなく、作者のねちねちした感動が、餘り自然

を自然をと狙つた爲に、去勢されて終つた爲ではないかと思ふ。

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも　（卷二、一六九）

○　齋藤茂吉

「あかねさす日は照らせれど」に二通りの解釋があつて、一つはこの句は天皇を申し奉つたのだと解し、一つは單に第三句以下の句を呼び起す爲に云つたのだと云ふ說である。兩說に皆相當の理由があつて、何れに卽くか諸君の意見を聞きたい。殊に作者人麿の心持になつたと假定してどちらを採用すべきか。

○　柴生田稔

歌の價値といふ問題を離れて、語句を順當に解釋すれば、この歌は、日と月とを對照させたととるのが自然であり、從つて「夜渡る月の隱らく惜しも」を、皇子の薨去を悼み申上げたものとすれば、「日は照らせれど」はやはり天皇の御事を申上げたのだとなるわけであらう。從來の註釋が多くこの第一の解釋をとつてゐるのは、おのづからの歸結だと思ふ。第二の單に第三句以下を呼び起す爲だと云ふ解釋の、最も熱心な主張者は眞淵であつたが、眞淵の說の根據は、第一に、この場合天皇を引合に出し奉るのは不謹愼の嫌があると云ふのと、第二に、この時は天皇空位の時期に當つて居るから不合理だと云ふのである。第二の理由の空位云々の方は解決がつくと思ふが、第一の方は、道德的な理由ながら、やはりこのやうな性質

の歌にあつては無視することの出來ないものであつて、第一說にとつて一つの支障となるものであらう。山田孝雄氏は、この眞淵の言葉を「天皇を日にたとへて申すは無禮なりとは如何なる意味なるか」(講義)といつて、眞淵の意の存する所を疑つて居られるが、皇子の薨去を悼み奉るのに天皇はいらせられるがといふやうなことを言ひ出すのは、眞淵ならずとも何か不穩當の氣持がするのではあるまいか。更に、私はかういふ道德的の問題を離れ、詩として味ふ上から考へて、日と月とを對照させ、日を天皇に、月を皇子にたとへ奉るといふのは、餘りに平俗な構想であつて、この點から第一の解釋に依るとどうも物足りない歌になつて終ふやうな氣がする。眞淵の他の場合に於けるすぐれた鑑賞眼を考へれば、或は眞淵も、無意識のうちにさういふ不滿を感じた結果第二說をとつたので、理由は後から考へ付いたものだといつていいかも知れない。されぱと云つて一二句を單に第三句以下を呼び起す爲のものだとして終ふのは、この歌の表現上から云つて、どうしても無理であるやうに思はれる。集中の序歌の例などを考へて見ても、さういふことは結局云へないのではないだらうか。それで私はやはり第一說に從ひ、さう解釋した上での不滿を述べて置く外はない。卽ち土屋文明氏の萬葉集總釋に於けると同樣の結論に到達するわけである。

○　　　佐藤佐太郎

第一の解釋の、日を天皇に譬へ月を皇子に譬へたと云ふのは、前評者の周到な意見もあるが、僕もやはり受け入れられない。僕は結論としては、結局第二の解釋に落著くけれども、その過程は皇子の「日竝」といふ文字からの比喩で、「日竝」卽ち「月」が隱れたことを嘆く意味に一首を結構したものととるのであ

る。月が隱れて惜しい、卽ち皇子がお隱れになつて嘆かはしいといふ意味で、月が隱れたと云ふことの氣持の上の說明として、「日は照らせれど」としたものであらうといふ氣持がする。それであるから、解釋としては文字通りに解してよいが、「日」は天皇を指し奉るといふ具合にしないで濟むのである。これは明日香皇女がお隱れになつた時の明日香川の歌などと相扶けしめて、必ずしも牽强と云へないのではなからうか。それから「日竝皇子」は御諱であるけれども、御生前既に行はれたものとする伴信友の說に暫く依れば、これも僕の解釋に都合がよいわけである。

○　　　　土屋文明

私は止むを得ぬから所謂第一說に依つて說いてゐたのであるが、然し又考へて見ると、日は比喩に用ゐたのではなくして實際の日輪を指すので、天渡る日は照つてゐるのであるが、月に譬ふべき皇子尊はと云ふ考へ方もあり得るかと思ふ。一方は實際のものを言ひ、一方は比喩を用ゐて居ては、釣合がとれぬと云ふやうであるが、さういふ點は古人は意に介して居なかつたと思へばこの解釋も成り立つ。

○　　　　鹿兒島壽藏

佐藤氏の日竝皇子の日をとつて比喩としたと云ふ說は、面白いのであるが、私がこの一二句をこのままのものとして、つまり現實として味つたのは、前に舍人等の歌を鑑賞した時に經驗をしたのであつた。然し四五句の比喩をその現實とどう纏めて鑑賞していいかに迷つて、この一首が現實的でありながら、渾沌

としてゐるといふやうな意味のことを書いたやうに記憶する。日を天皇に譬へ奉ると云ふのは、有り得ることであるかも知れないが、柴生田氏が云はれたやうに、我々が詩を味ふと云ふ點からみると、「あかねさす日は照らせれど」の聲調は非常に迫力と魅力とのあるもので、この場合は私は日輪として味つたのであつた。單に一、二句を序とする時は、一首の力を稀薄にするやうに思はれる。

○　藤森朋夫

この歌の二通りの解釋については、以上示唆に富む新しい檢討がなされ、私も亦再吟味してみたが、結局は第一說にとどまる狀態にあり、これをはなれるまでの考にいたつてゐない。詩として味ふ方面からの觀察は、すでに前評者達の言に盡きて居ると思ふ。尙、私は一言附け加へるならば、一首の中に、二つもの枕詞を使用してゐるが、それが割合に自然に使はれて居り、長歌が比較的に敍事的に歌ひ上げられてゐるのに對して、この歌は、聲調上に一種の抒情味が流れてゐるのを汲み得られるやうである。形式的であると云ひのけて了へないやうな情感も、何かしら一部にはあるやうに思へる。

○　山口茂吉

眞淵の「日はてらせれどてふは、月の隱るるをなげくを強むる言のみなり」と云ふ第二說に贊成である。もつとももこの歌は人麿作歌年次明記の最初のものの一つで、「柿本人麿總論篇」の人麿作歌年次配列では人麿二十七歲の作なのであるから、人麿もこの當時に於ては或は、第一說のやうに日を天皇に譬へ奉り、月

を日並皇子に獻へ奉つて作歌したものではなからうかとも云へるだらう。しかし、人麿は日並皇子の薨去を悲しむ氣持を全力的に歌ひあげてゐるので、さういふ問題を考へる餘地のないまでに到り得てゐるのではあるまいか。なほ卷九（一七一二）の作者未詳の「天の原雲なき夕にぬば玉の夜わたる月の入らまく惜しも」は人麿と同時代（萬葉集年表によれば、藤原宮文武年次未詳）の作であつて、この歌と三句以下が殆ど同じであり、參考になる歌と思ふ。

○　齋藤茂吉

小竹の葉はみ山もさやに亂れども吾は妹おもふ別れ來ぬれば　（卷二、一三三）

この歌を提出したのは、第三句を「サヤゲドモ」と訓むのは最も有力なる訓であつて、舊訓の「ミダレドモ」に從ふのは、童蒙抄、講義、總釋（土屋）、私等であるが、「サヤグ」と訓む方の鑑賞家は、サ音の連續に依つて特有の聲調を得て居ると、論ずるのであつて、「ササの葉のサヤグ霜夜に」などといふ例がその證例になつてゐるらしく思へる。この點について諸君の說を聞きたい。

○　五味保義

「さやげども」に比較して「みだれども」と云ふ訓は、重厚でよいやうに考へられる。ただ「みだれども」にすると私は語感の上で、視覺より外に受けとれなくなり、從つて「さやに」といふのと、意味の上

で乖離するところなく連續するかどうかが疑問であつた。最近、土屋氏說に「みだれども」の訓を採つて「さやに」も視覺として無理がないとされ、それから「みだれども」は小竹の葉が起伏する山の上にあきらかにみだれ動いてゐるのが見えるのであらう、と有るのに依つて、比較的無理がなく考へられるやうになつた。かういふ經路は、今まで「サヤニサヤゲトモ」として賞讃されたのを、その儘從つた習慣にも依るのであらうと思ふが、そこに聽覺の問題を、なほ捨て得ないのである。

○　　土屋文明

私の訓もあげられて居て非常に光榮であるが、實を云ふと私は「サヤニサヤゲドモ」と云ふ頭韻はどうも輕くなり過ぎるやうに思つて疑があつた。然しこの歌は全體として非常にいい歌であるから、その位の疵はどうでもいいと云ふことにして、「サヤゲドモ」の訓に從つてゐた。ところが山田博士の講義を讀むと、文字の上から「ミダレドモ」と訓む方が正しいと云ふ說が敍べられて居るので、それならば何も嫌なのを我慢して、「サヤゲドモ」と訓まなくともいいと云ふ氣持になつて「ミダレドモ」の方に卽いたのである。つまり私のは學問的根據は借物であるが、氣持の方は突然に變說したわけでもないのである。

○　　吉田正俊

「ミダレドモ」とどうしても訓むべきだと云ふ風に徹底した學說があれば、私などはそれを土臺にして自分の鑑賞の態度を決めた方が、容易であり且つ都合がいい。「サヤニサヤゲドモ」と訓んで、聽覺のみ

に訴へた表現のやうにとると、一首の調子は流麗に透り、人麿の澁滯しない心情を餘計に感ずるやうに思ふが、現在の私は、さういふ純粹にほのぼのとした感傷には時あつて不滿を覺えるせゐか、「ミダレドモ」といふ具合に視覺に訴へた方がその一途なるほのぼのとした心持にいくらか屈折を與へたやうで面白い。それだから私はまことに慾張つた鑑賞の仕方のやうであるが、「さやに」と云ふ言葉に聽覺を感じ、「みだれども」と云ふのに視覺を感じて解釋したい。尤も人麿は「さやにみだれども」を一體として聽覺とか視覺とかの區別を意識しなかつたこと勿論であらうが。

○　落合京太郎

「ミダレドモ」と訓んで、視覺の意が多分であるといふ說には敎へられる所が多い氣もするが、「サヤゲドモ」の訓をとつても、これが聽覺にのみ訴へて、視覺の意がないものとは思へない。僕の如きは「サヤゲドモ」と訓んでも、小竹の葉のみだるる音と共に、蒼然たる景色を眼前に彷彿すること充分であるやうに解して居た。「ミダレドモ」と訓んでも、僕にはその解釋に於いては、「サヤゲドモ」と訓んだ場合と、一方は視覺のみに訴へ、一方は聽覺のみに訴へるといふ程、しかく差別のある解釋になるとは思へない。「サヤグ」「ミダル」と云ふ語のみを切離せば或ひは聽覺或ひは視覺のみとの論も出ようが、一首全體の醸す雰圍氣から解すれば、その一方をのみ採るのは如何なものであらうか。それ故僕一個の獨斷的鑑賞に從へば「みやまもさやに」の「さや」にも視覺、聽覺混合したやうな意に從來とつて居つた。この例は卷六の「み山もさやに落ちたぎつ」などに就いても云へるのではないかと思ふ。

○

明日香川明日だに見むと念へやもわが王のみ名忘れせぬ　（巻二、一九八）

齋藤茂吉

この「明日だに見むと思へやも」の「やも」は、疑問のかかりと解して「思へばにや」の意味とするのが最も有力な説であるが、契沖等はこの「やも」を反語と解して、「見ることが出來ると思へるだらうか、思へない」と解してゐる。私の聞きたいことは、若しこの「やも」を疑問とすれば、明日見奉ることが出來ないとすると、御名を忘れてしまふことになる、忘れてしまつてもいいと云ふことになる、さういふ心理狀態はその當時の人々の心を支配して居つたかどうか。その證例が欲しいやうに思つてこの歌を出題した。土屋君の總釋の口譯を讀むと、「亡き皇女をせめて明日だけでも見ようと思つて居れば」とある。この「思つて居れば」は極めて簡直であつて、これならば心理的に解釋がつくが、ただ「思へやも」を「思つて居れば」と口譯し得るかが疑問である。土屋君の意見を聞くを得ば幸である。

○

藤森朋夫

第三句の「思へやも」は、文法的に分析して見ると、「思へ」は「思ふ」の已然形を以つて既定的事實を條件として、それに疑問の助詞「や」を加へたもので、更に、それに感動の助詞「も」が添つたものである。それで、この「やも」と響應する箇所を探索すると、第五句の「せぬ」といふのがそれであつて、連

體形で結ばれて居る。それで、一首を極めて平凡に讀み下してみると、第三句の「やも」は疑問と見るのが普通であつて、ここに反語的の意味を持たせるのは不自然であると思ふ。古義では「やは後世のやはに同じ」と云ひ、この説を支持する者もあるが、それは全體的に見れば極めて僅かのものであつて、大勢の向ふ所やはり疑問としてゐるのである。今齋藤氏の出題に對して、一應は考へて見たのであるが、現在の自分の解釋に於いては、反語ととることには、賛成出來ないやうに思ふ。それならば、この部分を口譯する場合に、如何なる工夫を施したならばいいかといふに、別にこれと云つて、事新しい解釋も出來ないのであるが、先づ最近の諸註釋書について三、四の例をあげて見ると、「明日だけでも見奉りませうと思へばにや」(新解)、「明日にもお眼にかかることが出來るといふのであらうか」(新釋)、「見ようと思ふせゐかして」(評釋)、「見奉らうと思ふからか」(全釋)、「せめて明日なりとも又も見奉ることもあらむとわが心の奥に思へばにや」(講義)などが擧げられる。此等を通して見ても、大體疑問として解釋を施してゐるやうである。そこで拙解を附記すると、「明日だけでも見奉らうと、心深くも思ふのであらうからか」としたい。更に「明日だに」の「だに」といふ助詞は、特にそのものを強く言ひ表してゐるのであつて、この場合山田博士が言はれる通り「せめて……なりとも」といふのに從つて、「せめて明日だけでも」と解釋するけれども、その「だに」には、ただ「明日だけ」といふ限られた一日を云ふのではなく、ここに歌ひ上げた作者の心の奥には、更に時間的にももつと長いものを言ひ含めての「明日」であると思ふ。

○　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

私も、この「やも」を反語と見れば、却つて一首は自然になるのではないかと思ふが、さういふことは文法上無理だと云ふ説を破るだけの用意がないので、しばらく反語説を差し置くことにした。そこで「やも」を疑問ととるとすれば、餘りにそこの氣持が廻りくどくなるので、「やも」をば疑問から來たところの感動と取り、感動のみが主としてひびく場合と考へ、示されたるが如き口譯をしたのであるが、要は「やも」が疑問の意を捨てて單なる感動としてのみ受取つてよいか、どうかであるが、私はそれでもよいと思つて居るのである。

○

柴生田　稔

「思へやも」を反語だとすれば、文は「やも」で終止して、この歌は三句切となる。一、二、三句だけに就いて見ればそれでも差支はない。然し四、五句の表現法を考へ、「御名忘れ世奴」と連體形で終つてゐる點を考へると、この歌はやはり三句切にせずに、「やも」は「せぬ」に應ずる係りの言葉であるととる方が自然である。もつとも、上に係りの助詞を持たずに連體形で終つて、特殊の餘韻を含ませる用法も、集中に存在してゐる。「ほととぎす何のこころぞ橘の珠貫く月し來鳴きとよむる」(三九一二)「天地と相榮えむと大宮を仕へまつれば貴くうれしき」(四二七三)等の如きである。それでこの歌の場合も、「やも」を反語として上句が一つの文として成立し、下句はまた別の文が連體形で終つて餘韻を含ませたものだとすれば、一應筋道は立つやうに思はれる。然し「わが大君の御名忘れせぬ」といふ具合の表現では三句切に對して更に新しく呼び起して來た句だとは、どうも取りにくいのではないか。もし人麿が「思へやも」を反

語としてそこで切るつもりなら、下句は當然もつと異なつた表現をとつたことであらう。私にはやはりこの歌の「やも」が反語だとは考へられないのである。そこで、これを「せぬ」に對する係りだとしたならば、どういふ事になるかといふに、前に藤森氏があげられた處で解るやうに、從來の諸註釋書の解釋は大體「明日でも御目に掛れるやうな氣持でゐるせゐか」といふやうな具合にとつてゐるやうである。それでは「御名忘れせぬ」との關係が何だか平凡で物足りない氣持がして來る。齋藤氏が「若しこの『やも』を疑問とすれば、明日見奉ることが出來ないとすると、御名を忘れてしまふことになる、忘れてしまつてもいいと云ふことになる」といはれたのは、卽ちさういふ從來の解釋に從つての感想であらう。然しこれは、「明日だに」のあたりに注意して、少し補充して解釋して見ると、從來の解釋とは少し色調が變つて、さう不可解な心理ではなくなるのではあるまいか。卽ち「せめて明日だけでもお眼にかかりたい。それほど切にお慕ひ申上げてゐる、そのせゐか御名が忘れられない」とこのやうに解釋して自然に理解出來るのではあるまいか。藤森氏が先に氏の解釋を述べられた氣持も恐らく私と同じなのであらうか。「やも」を反語とすれば「もう明日にも明後日にも永久に御眼にかかれないと思ふ。それでいよいよ御名が忘れられない」といふことになつて、痛切な感じが成程濃くなつて來るわけであるが、先に述べた私の解釋でも、切實な氣持は表れるのではあるまいか。齋藤氏は、土屋氏の總釋の口譯を、簡直で心理的に解決がつくと評されたが、その「せめて明日だけでも見ようと思つて居れば」といふ解釋と、前述の私の解釋との相違は、「やも」を感動にとるか、疑問にとるかといふ點の相違であり、私解の「そのせゐか」を「そのせゐで」と改めれば、卽ち土屋說になるのではあるまいか。そこで土屋說が心理的に解決がつくならば、疑問說の

方でも同様のことが言へるのではあるまいか。處で、土屋說の「やも」を感動にとるといふのは、どうも無理のやうに思はれる。係助詞の「や」の起原も感動にあるといふ考へ方からすれば、色々の段階があつていいわけだともいへようが、實際に於いて、かういふ場合の「やも」を純粹の感動のみを示すものと取つてしまふことはどうであらうか。それから、名を忘れるといふ觀念がこの時代に於いてどんな風に人々の心理を支配してゐたかといふ出題は、「御名代」の制などと關聯して考へて見たら相當成果があがるかとも思はれるが、今はこれ以上私見を述べる用意がない。

○

佐藤佐太郎

「明日香川明日だに」といふのは、皇女の御名「明日香」に關聯せしめ、同時に御名と同音の「明日カ」といふ事、つまり期待の情をも籠めてゐると見ることが出來る。「明日カ」といふ語を一見熟しないやうに見る傾もあるかも知れぬが、「吾背子をいまかいまかと」(二三二三、二八六四)の例もあるから此想像は割合當つてゐるやうに思ふ。さうすれば「念へやも」を反語と解するのは無理のやうである。第三句を疑問として解釋しても、感情が割合に順直で、それから一首を詠み下した感じが、僕にはやはり疑問とする方が自然である。それはそれとしてここに僕の素人說があるから敎を乞ひたい。それはこの歌は皇女の夫君に獻じた歌で、夫君を主として歌つたものと受取るので、「皇女はおかくれになつてもうおあひすることが出來ない。それだのに明日だけでも逢はうと思ふのであらうか、わが大王は明日香といふ御名をお忘れすることがない」といふ程の意ではなからうかといふのである。

○ 落合京太郎

僕の第一印象から言へば「思へやも」は、どうも反語の意にとりたい。さうとる方が、感情として直截であり、疑問にとると、僕は何か感情の直截でないものを感ぜしめられる。僕は獨斷で從來から反語の意味に解してゐたが、疑問説の諸氏も、なほ萬葉の諸例に鑑み、多少の「疑問」は持たれて居るらしいので、自分もなほ今後勉强して自説を支持すべき材料に出會ひたいものだと思ふ。

○ 五味保義

藤森君の云はれる所によれば、「やも」は疑問のかかりとしてうたがふ餘地がない如くであるが、萬葉集中の「や」「やも」の用例中特に動詞、助動詞の已然形につく形は、形の上の論據だけではさう簡單にはゆかぬやうだ。

見むといはば否といはめや梅の花散りすぐるまで君が來まさぬ　（巻二十、四四九七）
つるばみの袷の衣裏にせばわれ强ひめやも君が來まさぬ　（巻十二、二九六五）
伊豆の海に立つ白雲の絶えつつも繼がむと思へや亂れそめけむ　（巻十四、三三六〇或本歌）
百世（ももよ）しも千代しも生きてあらめやも吾が念ふ妹を置きて嘆かむ　（巻十一、二六〇〇）

これらの「や」「やも」は、直ちに疑問のかかりと決しかねる節を含むのである。一首の意味からして反語か疑問か、いづれに依るべきかを決しなければならないのである。そこで右の四例中反語と考へて差支

ないものがあるが、さて之をめぐらして今の歌の「やも」を反語と解するには到らない。例へば柴生田說の如く、「明日香川」の歌を第三句で反語とすると、四五句が獨立してしまつて工合がわるいが、右の「伊豆の海に」「百代しも」の歌に於ては、形式上「明日香川」と似て居ながら、四五句は獨立して考へられ、この「やも」は反語でもいいやうだ。所がこれは私の意味の取り方に在つて、語感の變化によつてまた變つて來るかも知れないのであるから、或はこの例をもつて「明日香川」の「やも」を反語と取りたい時が來るかも知れない。しかし又思ふに一九八の「ぬ」は明かに連體形であるが、三三六〇の「けむ」、二六〇〇の「む」は終止形連體形いづれにも取れ、終止形とすれば必ずしも「やも」のかかりでなくともよくなり、一九八の「やも」を反語とする例にならなくなつてしまふ。從つて今の所、一九八の反語說に左袒すべき好例を知らないのである。「やも」を疑問とすればもつとも順直であり、又出題の如き支障を現實上抱かないが、ただ反語說に同情を有するので、それに例證となるべきものはないかと思ふのである。

この一首は語法上の問題があるにしても、さう平凡な作品ではないと思ふ。なるほど古く「いかるがや富のをがはの絶えばこそわが大君のみ名忘らえめ」（上宮聖德法王帝說）があつて、この一首よりは順直であるが、しかしこの「明日香川」の一首には聲調上どこか切實な所があつて捨てがたい。

猶以上小文の「や」「やも」の用例は殆ど中島光風氏の研究發表に賴つたものであることを附記する。

秋山の黄葉（もみち）を茂み迷（まど）ひぬる妹を求めむ山道（やまち）知らずも　（卷二、二〇八）

○　齋藤茂吉

この歌は、いろいろの意味に於いて有益であり、私にもよく分からない歌であるが、兎も角も私の「評釋」では評釋して置いた。この歌がよく解決が出來れば、「羽易の山」「引手の山」の問題も自然解決に導かれると思ふのである。この問題に就いては、土屋君の總釋に新說があるが、この機會に少し詳しく聞きたいのである。

○　五味保義

この歌は、妻の死を哀しんだ長歌の反歌であるが、萬葉集にはこの歌の次に、同じく妻を悼んだ長歌と反歌二首が載せられてゐる。その方に今出題された羽易の山、引手の山が出て來るのであつて、この歌及びこの歌の附屬してゐる長歌には、二つの山は全然表れてゐない。だからこの歌の「秋山」も、その二つの山と關係なく味つてかまはないわけである。然しこの二つの長歌が從來說のあるやうに同時の歌とする時は、聊か關係して來る問題であらう。つまり、「羽易の山に吾が戀ふる妹はいますと」といふのは葬られたのでなく、「引手の山に妹を置きて」の方が葬られたのであるといふのが、土屋氏の解釋（萬葉集總釋）であるが、この歌の「秋山の黃葉を茂み迷ひぬる」はその何れに根據を與へるかといふのが、出題の意味のやうに私は思ふ。私はやはりこの歌では葬られた場合よりは、稍〻ゆとりのある氣持を感ずる。

○　土屋文明

「羽易の山」と「引手の山」とは異つて居り、引手の山は葬所、羽易の山は死者の行きて住する所と私は思つて居るが、この歌の「秋山」は、その何れに卽せしめるとしても、上述の私の說には影響がない。寧ろこの「秋山の黃葉」は、妻の死去の當時の四圍の山々の黃葉の茂きを云つて居るのであらう。その黃葉の中に迹を沒した妻を探ね行かむに云々といふことで、ただ妻の死去を黃葉に關聯せしめただけの歌だと解して居る。

天數ふ(あまかぞふ)大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき（卷三、二一九）

○　齋藤茂吉

この歌の「天數ふ」といふ枕詞については諸說があるが、これは普通の注釋書に讓つて、私の問題にするのは、「逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき」といふのにあるのである。「逢ひし日」をどういふ場合と想像するか。「おほに見しかば今ぞ悔しき」といふことも、その場合と人麿の心境をやや具象的に若手の意見をききたい。つまり何故悔しいのであるか、もう少ししみじみ見たかつたのであるか、或はもつと接觸を欲したのであるか云々である。この前の合評（九月號所載）の時に、私が「釆女の袖ふき返す」の歌を云々して、釆女等の顏容が端麗であつたことを强調した傾きであつたが、その後山田博士の講義を管見し

たに、博士は身分のよいことを云々して、顏容の端麗云々は從屬的に說いてあつたやうである。そこでこの大津の歌の場合をも提出して見たのである。

○　　柴生田稔

この歌は、吉備の津の采女の死んだ時の長歌（二一七）の反歌であるが、長歌に「時ならず過ぎにし子等が」といふ句があつて、やはり從來言はれて居るやうに、この吉備津采女の死は何か不慮突然のことであつたらうと想像される。それから「梓弓音聞く吾も髣髴見し事悔しきを」といふ句などから見ると、兎に角當時衆人に認められた佳人であつたと見做して差支へないのであらうか。現代のジヤーナリズムに於ける狀態などから類推して見ても、さういふ佳人に關する何かの事件といふやうなものに對して、一般男性といふものは、一種の興味を持つものらしい。人麿も恐らくさういふやうな氣持であつて、「髣髴見しこと悔しきを」といふのだから、恐らく「逢ひし日に」と云つても極く單純な遭遇に過ぎず、思ひがけない死に接して今更のごとく思ひ出して見たといふ程度の關係ではないのであらうか。それを「今ぞ悔しき」と非常に感動的な句法で結んで居るのは、人麿一流の行き方として、「柿本人麿」に於ける「全力的」の評語を當はめるべきかも知れぬが、私はやはり其處にある誇張を認めざるを得ない。偶然意味もない遭會に深い追憶が殘されるやうな場合を、勿論私は否定しないが、この歌の表現はさういふ工合にも考へにくい。また考へれば、人麿はこの一連の製作過程に於いて、漸次自らの詩境に興奮して來て、つひに最後の反歌に至つて、實際の自己の愛人の如くに采女を取扱ふに至つたものとも受取れる。然しさう見ても、この歌に

はどこかよそよそしい感じが殘るやうである。兎に角「おほに見しかば今ぞ悔しき」などといふ言ひ方は、何だか一般男性の女性に對する好奇的心情ともいふべきものを見せつけられるやうな氣がして、私はあまりいい氣持はしないのである。以上の言は、この「天數ふ」の歌一首に就いての讀後感であつて、この一聯全體に就いての評價だと云ふわけではない。

○　五味保義

「逢ひし日に」の「逢ひ」は、外の用例もかなり多いのであるが、この場合は「宵に逢ひて朝おも無み」の如き意味のものではなく、寧ろ「宮道に逢ひし人嬬ゆゑに」の方に近い意味のものと思ふ。然し、「天數ふ大津の子が逢ひし日に」の調子には、今擧げた「宮道に逢ひし」の如き作品に比較して、ずつと切實なところが感ぜられる。殊に「津の子が逢ひし日に」の「が」といふ助詞が、それを助けてゐるやうに思はれる。その意味も、多くの注釋書が云つて居るやうな單純なものだと、私も初めから思つて居つたので、ただそれを人麿の作品の力が、もう少し複雜なもののやうに感ぜしめるところがあるのかも知れない。これは、長歌の「髣髴見し事悔しきを」を特に考慮に入れないでも、考へ得られる事のやうに思ふ。「おほに見しかば今ぞ悔しき」も、上句の調子から續いて比較的順直にひびくのであつて、私は柴生田君の言はれる程には氣にならない。

○　土屋文明

「今ぞ悔しき」は實に強い感動の句であるが、これは恐らく人麿はこの「津の子」の夫の感動を述べて居るのであらう。「天數ふ大津の子が」といふところは、作者が自らを主格として割合によそよそしく云つて居るのであるが、「逢ひし日に」以下は「津の子」の夫が主格となつて居るのである。これは、現在の常識から云へば支離滅裂の句法であるが、人麿の頃の句法としてはあながち例のないことではあるまい。從つて「逢ひし」は、五味君の提出されたやうに面倒なことを言はずに、「妻と夫が逢ひし」と解すべきであらう。單に有名佳人を望見したのみの感慨を述べるにしては、どうしてもこの下の句は強すぎるのであるが、さりとて長歌の方から考へると、津の子が人麿の妻の一人とも考へられない。極めて主觀的の解釋であるが、以上の考へに到達して、はじめてこの歌が落著いて來るやうに信ずる。

○　　　　　　　　　　　　齋藤茂吉

大君は神にし坐（ま）せば天雲の雷（いかづち）の上に廬せるかも　（卷三、二三五）

この歌は、一般に誇張の歌と云はれ、形式歌と云はれ、藤原京より三十分もかからぬ低い小山を詠ずるのに、このやうな大袈裟なことを云ふのは、宮廷歌人としての申訣的技巧のやうに論ずる向もある。然るに私は、私の「評釋」の中で、少しく意見を述べて置いた。又、近時藤森君と親しく雷丘を踏査して、一の根據を得たのであるが、諸君の忌憚なき意見を聞かうと思ふ。

○ 藤森朋夫

まづ最初に、この度齋藤先生と實地にこの地を踏査したので、その結果をここに述べる。雷の丘は、かつても二囘ばかり飛鳥川を隔てた道から眺めたことがあり、あまり高くないといふ感じがしてゐた。今度實際にその丘にのぼつてみると、なかなか眺望のよい形勝の地であつて、三山は勿論のこと、飛鳥地方も望まれて、割合に高いといふ感じを抱かせられた。雷の丘は、現在城山と云はれてゐる高地と連續した土地であつて、その低目の場所などは相當に廣くなかなか地勢のよい場所である。私はそこで想像を描いてみた。巻三のこの歌、及び或本の歌としてあげられてゐる「大君は神にしませば雲隱る雷山に宮しきいます」巻十三の「月も日もかはりぬれども久にふる三諸の山の離宮地（とつみやところ）」（三二三一）の歌などを想ひ合せ、全釋や總釋などにもある通り、或はこの地に離宮などがあつたのではなからうかと。

雷といふ地名から天雲の雷を感じ、それと天皇を「現神」として崇敬し奉る感じとが、よく結合して、莊重味をかもし出してゐるやうに思はれる。構想が雄大で、むしろ人の意表に出たやうなうたひ方が、或は大袈裟に言ひ過ぎてゐるとも見られるかも知れないが、私にはさうはとれない。むしろ既に述べた所でもあるが、私の想像の中には、この丘の實景をさへ想ひ含めて感じたい氣持も動いてゐるのである。

○ 柴生田稔

私は實際の地理には暗いので、ただ現在の雷丘が低い小山だといふ説明を知つて居ただけのことであつ

た。いま藤森氏の實地踏査の結果を聞いて、得る所が多かつたやうな氣がするが、然し勝手な私見を述べて見れば、結局現實の雷丘がどんなに貧弱なものであつても、人麿の詩の世界に示された雷丘を吾々が受容する支障とはならないやうな氣もする。譬へば、巻一の舒明天皇が香具山に上つて國見し給へる時の長歌なども、現實の香具山は、雷丘とは比較にならないとは言つても、兎に角それ程の大山ではないのに、その御製から受ける感銘は、漠々たる天地の間にただ香具山とその上に立ち給ふ御一方のみ、といつたやうな寫象を生ぜしめる。甚だ平凡きはまる議論であるが、常凡普通の現實世界から強烈な個性の經驗を引出して來るのが、詩人の境地なのだから、一般論的に云へば、人麿のこの歌に於ける雷丘の實際地勢などは問題にならないと言へる。ただ個々の作品に就いて見ると、それが眞實に強烈な內面經驗から發してゐるか、そこに或る概念上の誇張があるかといふことになつて來て、それが作品の表現を通じて檢討されるべきであらう。そこで、人麿のこの歌に於いて、從來その誇張が云々されてゐるのは、雷丘といふ地名に對して「天雲の雷の上に」などといふ表現をとつた點、對象が天皇にある點、更にその氣持を「神にしませば」とまで言つた點などが、人麿の他の場合の作例とも關聯して、先に述べた舒明天皇の御製の場合のやうに素直に受け入れられ難いためであらうか。さういふいはば人麿的とも云へる、鑑賞者を壓迫するやうなところは確かにあつても、結局人麿は、その異常を、十分に眞實として押し切つてゐるのであつて、この歌に對して一部の人々の述べてゐるやうな反感は甚だ常識的概念的なもののやうに思はれる。

○　　　　　　　　　　五味保義

萬葉集の歌に所謂「誇張」を感ずることは、それが山嶽丘陵の如きを詠む場合に限らない。しかもその「誇張」は、作者にとつてきはめて自然な表現であるが故に、玩賞の上には殆ど障礙を生ぜしめないと思ふ。私はむしろさういふ古代人の態度に教へられこそすれ、反感を以て云爲する心持などは起らない。雷丘の曾遊を回想しても、その小丘陵から、暮色すでにおほうた西方の平原をのぞみ見て、豫想よりは高い感じはしたが、この「天雲の雷の上」の語義には到底及ぶ所でなかつた。しかしそれで少しもかまはないのであつて、人麿の當時の感情はこの蒼古の趣ある一首に十分生動してゐることが感ぜられるのである。現在の雷丘に立つた感じがこの歌の印象をつよくするのでなく、むしろその逆な效果を有するが如くに思はれる。特に「天雲の雷」の句は獨特であり、これらこそ實感實情の所產として重要視せられるべき個所とおもふ。「天雲の」は意味上、分解して云々することはむづかしい。それで居て十分な現實感を有する句なので、かういふ所は所謂人麿的といふべきであり眞似しようとしても仲々眞似られない境地である。誇張を感ずる人は、或は「神にしませば」の「ば」などを、程度以上につよく條件的に取り、ついで雷丘の地勢に想到して、さういふ結論に到達するのではないかとも思ふ。私はこの歌に卽くことの久しきにつれて、心理的に平常自然なるものと思はれて來るのである。

淡路(あはぢ)の野島(ぬじま)の埼の濱風に妹が結びし紐吹きかへす　（卷三、二五一）

○

齋藤茂吉

第三句以下の句について、文法的に議論のある歌である。これも私はどうにか片附けて置いたが、稍〻牽强のきらひがあると思ふから、諸君の精細なる解釋を願ふ。

○　　　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

私は、この歌は文法などは顧慮せず、つまりカヘスもカヘルも自他混用否自他未分の一つの例位に考へてゐた。今この問題にあつて省みると、それも少しく亂暴な考へであつたやうである。さりとて古義の説のやうに、「濱風に」といふところで、「濱風の中に心寂しくしてゐる」といふやうにはとりたくない。それは三句切に慣れた歡賞法から三句の「に」に間(ポーズ)を置くので、人麿や萬葉の歌ではやや不自然たるを免れないやうに思ふ。自他混用若くは自他未分の例であるといふ說は、今の所亂暴な說であるが、或はさういふことを許す證據が學者に依つて拾ひ出されれば、結局それが一番いいやうに思ふ。これは將來の研究に期待する次第である。差當りこのカヘス・カヘルと云ふ語では自他混用若くは自他未分が許されないとすれば、結句を「ヒモフキカヘル」と改訓したらどうであらう。ここの原文は「紐吹返」であるが、この返は集中さう澤山用ゐられて居らない字のやうである。古寫本に依つては反歌を返歌と書いたのがあることは、いろいろの場合に引合に出されるのであるが、私は恐らく反・返は通用の文字であつたのだらうと思ふ。さすれば、ここの「紐吹返」も「紐吹反」と書いてもよいところであらう。反はカヘスとも、カヘルとも兩方に用ゐられたことは總索引などで一目瞭然である。であるから此を「ヒモフキカヘル」と訓むのもさう無理な訓法ではあるまい。

あとで武田博士の新解を見ると、博士もこの訓をあげられ、それでは「吹く」が迷惑するからとの理由で結局それは捨てて居られる。しかしこれは「フキカヘル」といふ熟語とすれば、それでも收るやうに思ふが如何であらう。

なほまた考へると、これは「濱風にて紐を吹きかへす」とだけ云つて主格の現れて來ない、一語法と解釋出來ないであらうか。若し例があつて立證されれば都合がよい。

○　五味保義

土屋氏の訓は、用字の上からも語法の上からも許されるものと思ふ。さう訓めるとしたら「濱風に」と「吹きかへす」の喰ひ違ひを問題にする要もないやうである。

しかし私には今、「フキカヘル」よりは「フキカヘス」の方が緊つてやや強く、この一首にはしかあるべき訓のやうに感ぜられ好感が持てるのである。これは「フキカヘス」の訓の習熟より來てゐるかも知れず、しばらく時が經たぬと本當の所はわからない。一體「濱風に」「吹きかへす」は一讀して自然に受取られる句法で、前評の如く古義說も却つて煩はしくなり、その後の說でも、人麿の省略的技巧とか、「カヘス」と訓んで意味は「カヘサル」になるとか、感情切迫のための文法超越とかの諸說はどうも直接でないやうに思はれる。むしろ古來この喰ひ違ひに氣づかなかつた事實は、「濱風に」「吹きかへす」に案外な自然さがあるといふ風に考へられる。「自他未分」とこれを云ふには、今少し用例を用意したいものである。また人麿の特殊語法とこれを云ふには一首の鑑賞になほ說明を必要とするやうである。

土屋氏の「主格の現れて來ない一語法」云々の出題は大變興味のあるものであるが、これも早く中島光風氏がこれと同一問題を取扱つて居られる。中島氏のあげられた例の中

水莖の岡の葛葉を吹きかへし面知る子らが見えぬ頃かも（三〇六八）

の如きは好例と思はれる。又人麿の長歌中の「神風にい吹きまどはし」（一九九）の如きも一用例と思はれる。中島氏の研究も用例少くして斷定まで行つて居ないが、ここに報告して置く。

稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀しき可古の島見ゆ（卷三、二五三）

○　齋藤茂吉

この歌の「行き過ぎがてに思へれば」は、普通は稻日野の佳景に心を惹かれて去り難い執着を持つてゐると解釋してゐる。然るに、武田博士の新解及び私は「稻日野」が廣くてなかなか通過し得ないと解釋した。これは兩方とも萬葉に證例があつて何れとも決し難い。かういふ場合は心理上「錯覺」が現出するので、第一說がいいやうに思へることもあり、第二說がいいやうに思へることもある。夏目漱石の「門」に、宗助と云ふ男が文字のことについてしきりに錯覺を起してゐることを書いてあつたが、この歌の「行き過ぎがてに」なども同じやうな場合であらう。私もこの歌については、しばしば同じやうな場合に遭遇してゐる。然しかういふ場合に、第四句の「心戀しき」と云ふ主觀句が、第二句の「行き過ぎがてに」とどういふ有機的關係にあるかと云ふことを類推すること、全體の情緒が風光愛玩の氣持であるか、或は覊旅の

心情をこめて家郷を思ふ情を織込ましてゐるのであるか等々のことを目中に置いて、然る後に諸君の新鋭なる說を聞くを得んか。

○

山口茂吉

私は、この歌は故鄕の播磨の國に關係ある歌なので、初めて萬葉集を讀んだ頃から心惹かれた歌であつた。そしてはじめから海路舟行の歌と解し、また西に向ふのでなくて京に上る時の歌と解して、何等不思議に感じなかつたのであつた。これは註釋書などを全然見ないまへのことであり、また幾らか所謂印南野加古あたりの地理的關係を知つてゐてこの歌に接した時の直感であるから、自分ではこの考へは割合正しいやうに思つてゐるのである。その後、この歌には齋藤氏が問題を提出されたやうにいろいろ解釋上問題のある歌であることを知つて、却つて不思議に思つた位であつた。つまり、私の解釋は武田、齋藤兩氏の解釋に同じである。一首全體の氣持から云つても、地理的に考へて見ても、どうしてもこの歌は、印南野の佳景に心を惹かれて去りがたいなどといふ氣持の歌でなく、海路の旅が捗らず難儀しつつ上つて來るのに、加古の島のやうやく見えはじめたときの云ふに云はれぬうれしさが、句々のうへに現れてゐるやうに思ふのである。またその方が解釋としても自然で、歌も一層よくなるのではなからうか。なほ古義の二五五の歌「天ざかる夷(ひな)の長道(ながち)ゆ戀ひくれば明石の門(と)より大和島見ゆ」の註釋のところに、藤井高尙の「歌のしるべ」の說を頭註として擧げてゐるのに、「よき歌の情と云は、柿ノ本の大人の歌に、あまさかるひなの長ちゆ云々、とあるを見てもしるべし。萬葉集の諸註、みなよくとき得ねば、ここに此歌の情をときあか

してくはしくさとしてむ、はやく家にかへりて、おもふ人々にもあひ見むと、ひなの長きみちのあひだ日數へて、夜晝こひつつくれば、明石のとよりはじめて、我すむ方のやまと島見ゆ、あはれうれしさいはん方なし、といへる心なり、一うたの、おもての詞の、ことわりのかたにつきては、三の句、こひくるにといふべき事ぞ、その故は、こひつつ來ずとも、あかしのとにいたりては、やまとしまは見ゆべければなり、さるをこひくればといひて、やまとしま見ゆといひとぢめたるは、あはれうれしさいはむかたなし、といふ餘情をしらせたるなり、かかることたれかはおよぶべき」と云つてゐるのは、大いに參考になる說と思ふ。なほ、私は印南野は明石郡にも跨つてゐたとしても、それは加古川流域の僅かの地であつて、大部分は加古川より西卽ち加古郡より印南郡の地を稱したものと考へて居るのである。

○

吉田正俊

私は人麿の羇旅の歌八首を通讀して「玉藻刈る敏馬を過ぎて」や「天離る夷の長道ゆ戀ひくれば」などの句法と、「過ぎがてにおもへれば」の調子とは何處か作者の感じ方に異つたところがあるやうに漫然と感じてはゐたが、風光愛玩の氣持を主とした歌であると云ふ解釋を讀むに至つてどこかその方が心持に近代的なところがあり、いささか萬葉人としては纖細な感覺にすぎるとも疑つたのであるが、又思ひ直せば人麿には調べの豪宕に似ずさういふところが多分にあるから、さう解釋出來れば、その方が現世の私などの鑑賞には一層具合がよくて、あまり疑ひたくなかつたやうである。さういふ慾望のせゐか、矢張「行きすぎがてにおもへれば」といふやうな表現方法には、單に家鄕を思ふといふ心情よりも、もう少し何か眼

前の風景に對しての人麿のもやもやとした心情を感じ、從つて更に「心戀しき」にも、「いふにいはれぬうれしさ」などの感慨でなしに、可古の島そのものに對する人麿の心の傾きといつたものを感じたいのである。

○　　五味保義

出題に從つて、風光愛玩か、羇旅郷土を懷ふの情を自然によせたか、その何れかと考へ出すと、私はこの歌に對する今迄の玩賞の心持に混亂を生じて來る。しかし結局私は山口君の云ふ所とはちがつた方に考へがおちつくので、風光愛玩といつてしまつては少し工合がわるいが、旅中に於ける「心戀しき」情が、自然風光におのづから寄つていつた歌と取るべきものと思ふ。藤井高尙の說も「戀ひ來れば」の對象をあまり限定しすぎた傾があり、人麿の眞情は必ずしもその說く所の如き「嬉しさ」ではなかつたと思ふ。所謂解釋には高尙のやうに云つた方がはつきりするが。從つて「心戀しき可古の島」も旅の道の遠くしてゆきすぎにくい心持から發したものではなからう。「稻日野も」の「も」も、單なる並列、又は感動の一方に取るべきでは勿論なく、又「思へれば」も、旅行難の「ゆきすぎがたい」に附屬する「思ふ」にしては重すぎるやうに思ふ。「稻日野も」「思へれば」あたりに微妙なゆらぎがあり、「心戀しき可古の島見ゆ」へむしろ淡如として流動してゐる。恐らく舟行であらうが、それが上京の折と考へられるにせよ、その事實が「心戀しき」の意味を山口君の說の如くにはしないと思ふ。

齋藤氏の評釋は、武田博士の新解と一致する所ある如き出題であるが、新解に「思へれば」には上京の

旅故、早く着きたく思ひ稻日野の變化のないのに退屈した心持だとされ、「心戀しき」は變化を求め、先を急ぐ心だとされてあつて、今の出題者の解釋がこれと同一なのか否か、やや疑問に思ふ。私は今のところ直ちに武田博士說に從ふ事が出來ない氣持である。

（昭和十一年一月）

二十一　人麿の歌五首

○

眞草(まくさ)苅る荒野にはあれど黄葉(もみぢば)の過ぎにし君が形見とぞ來し　（卷一、四七）

山口茂吉

この歌は意味合がはつきりしてゐて、難解なところがなく、調子の通つたいい歌である。初句の「眞草苅る」も、人麿は枕詞の如きつもりで使つてゐるものと考へられるし、更に第三句に枕詞を用ゐたりして調子をとつて居り、大まかな歌であるから、ややもすると輪廓的であるといふやうな批評に傾く人も多いかも知れず、不滿に感ずる人もあると思ふが、さういふ無駄なやうな技法も、一首全體の上から見れば、表現の單純化に役立つて居り、沒細部の妙味を飽くまでも發揮してゐるところはこの歌の特長であると思ふ。こせこせして居らず、人麿らしい線の太い流動性のある歌で、厭味を感ぜしめない。そして大まかでありながら氣持の細かく働いた歌で、日並皇子尊を偲び奉る深い感慨が籠つてゐるところは、人麿聲調の然らしむる處であり、人麿の作歌態度の眞率と內部衝迫に基く表現の結果であらう。

この歌の君は勿論日並皇子尊を指し奉つてゐるのであるが、人麿自身の戀人か何かを偲んで作つた歌のやうにも取れるのは、人麿の感情が切實で、作者自身に即したやうな氣持で作つてゐるためで、この日並皇子尊を偲んでゐるのも人麿一人のみの積りではなく、輕皇子も人麿も群臣もこめて客觀的に云つてゐることは、「おのがうへをのみいふがほにて、皇子の御うへをば、よそにしたるやうなる詞つきなれど、實は皇子の御うへを、いとほしみ奉れること上の歌のごとし」と古義で云つてゐる通りである。

なほ、人麿歌集の中にある卷九(一七九七)の「鹽氣立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とぞ來し」は、この人麿の歌に非常によく似て居り、これも佳い歌で、この歌を味ふうへに參考になるところ尠くないが、人麿の歌に比較するとやはり劣るやうに思ふ。これは結局聲調の點に歸著するものではあるまいかと私は考へるのである。

○

吉田正俊

人麿の作には、絢爛で情緒の波打つた大柄な歌をのみその特長と感じて居たが、この歌のやうな、堅く緊つた、いはば地味な作風とでも言ふべきものもあるのである。絢爛と地味とを對蹠的に取扱ふのは甚だ表面的な見方のやうにも思ふけれども、この歌に對するこの先入感は當分の間除くことが出來ないやうである。かういふ地味な作風から何か自分の作歌に資したい氣持がしきりに動いてゐるのであるが、尙考へれば、これは或は目をそばだてしめるやうな作歌技巧の持主にして始めて可能なるところかも知れぬ。前評者が「鹽氣だつ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とぞ來し」とその優劣を比較するに聲調の點

を云々されたが、言ふところあまりに暗示的にすぎて、私の理解に困難なるところがある。今少し詳細なる比較論を聞きたいと思ふ。

○

柴生田　稔

山口氏の言ふ氣持は、巻九の歌が、人麿の歌と同じやうな觀念を同じ發想法で表現してゐながら、人麿の歌よりも劣つてゐるといふ理由は、意味の點よりも音調の關係にあるのではないか、つまり「鹽氣立つ荒磯」「行く水」「妹」といふ、人麿の歌と異なつてゐる詞句の音調、乃至それらの詞句と他の部分との音調の融合狀態が、人麿の歌に及ばない爲ではないか、といふやうな意味に解釋すべきかと思ふ。さういふ純粹に音の連續上の優劣といふものも存在するのではあらうが、それを實證的に說明することは餘程困難である。私は別に、この二つの歌の異なる部分に於いて、意味上の優劣が指摘出來ると思ふ。「鹽氣立つ荒磯」といふ寫象は活動的で刺戟が强過ぎ、「眞草苅る荒野」に比較して、「過ぎにし妹(君)が形見とぞ來し」といふ靜かに湛へた感慨に不適切な感がありはしないだらうか。それから「妹」と「君」とに就いても、この歌全體の構想は、やはり妻乃至愛人に對する場合よりも、日竝皇子の如き關係の場合とする方が適切のやうに思はれる。この點は山口氏が人麿の歌を許して「人麿自身の戀人か何かを偲んで作つた歌のやうにも取れる」と言つたのに贊成出來ない。これは何もこの場合人麿の感情が切實でないといふ意味ではなく、同じ切實でも對者によつて當然色調を異にすべきであつて、切實だから戀人に對するやうだとは必ずしも言へないわけである。「行く水の」と「黃葉の」との比較は、私の主觀では人麿作の方が優れて

ゐるやうに思ふが、これは或は根據のない個人的な好惡に過ぎないかも知れず、すべて枕詞の感じといふものは、萬葉集當時と現在とでは餘程違ひはすまいかと考へられるので、この場合も優劣の決定は困難だと思ふ。ただ、私もやはり土屋氏の曾て發表された說の如く、この卷九の歌は人麿の原作の詞句を改變して成立したもののやうに考へるのであつて、この點から憶測をほしいままにすれば、原作で「眞草苅る荒野」に對して「黃葉」となつてゐる關係に應じて、「鹽氣立つ荒磯」の場合には、その寫象に對して「黃葉」より關係のある、「水」などといふ言葉の入つた句を持つて來たのではないだらうかと考へられるのである。更に考へるに、以上のやうに意味上から優劣を比較して來たが、その際四五句を「靜かに湛へた感慨」云々と感じたのは聲調を通してのことであり、又愛人或は皇子に對しての適不適の感じも、構想のみならず聲調からも來てゐるのであるから、結局聲調上の問題にもなつて來るのである。山口氏の言ふのは、むしろかういふ意味に於ける聲調をさしてゐるのかも知れぬ。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　五味保義

「眞草苅る荒野」と「鹽氣立つ荒磯」とは、意味の上では同じ成立に取られるけれども、各作品に於ける要素としての效果から言ふと、「眞草苅る」の方が或る情緒的なゆとりがあり、「鹽氣立つ」の方はより具體的に、實景として迫り來るものがあるやうに思はれる。又「黃葉の過ぎにし」といふ言葉は、當時好んで用ゐられた語であるらしく、勿論人麿の發明ではなかつたであらうが、「行く水の過ぎにし」に比較するとずつと落著いた感じがあり、人麿が形式的に用ゐたのではないことが感ぜられる。さうして表面は

技巧の歌のやうに見えながら「過ぎにし君が形見とぞ來し」あたりの音調は沈痛な響があつて、巻九の歌とはその邊かなり違ふやうに思はれる。以上は前評者のいはゆる「主觀」に終始した批評であるが、聲調の如何を今私の考へとして具體的に言ふとしたら、かやうな點に留まるのである。

○　　　　土屋文明

柴生田君の論の要旨は、聲調には意味的内容が關與して來ると言ふのであるなら、私もそれに賛成である。短歌の聲調は單に音韻上の條件にのみ左右されるものでないことは私の持論であるが、この問題になつた二首の比較に就いても、この根據から理解出來るやうに思ふ。巻一の歌は反歌であるから、外面的には必ずしも長歌の方に關聯させなくともよいわけであるが、作者の心の狀態は長歌を成し來つたといふことによつて規定せられて居ることは言ふまでもない。この規定せられたる心の狀態から發せられた心の聲は、必ずこの心の狀態によつて形體づけられて居るに違ひない。その細かい條件は所謂音韻の分析等によつては到達出來ないものだと私は考へて居る。聲調が音韻だけの條件に從はないと言ふのはこの意味である。さてこの狀態といふものを、どの點まで作歌の上に許すか又歡賞の上に再現し得るかは、中々むづかしい問題で、學理ではなく技術と稱する部分に屬するものかと考へて居る。我々は幸に技術家であるから、問題なしにこの二首の分別が容易につくのであるが、これを學理的に說明せよと言はれれば何人も難しとするところであらう。私は巻九の歌は巻一の歌が崩壞した一つの形と考へて居つたが、或は又人麿歌集を習練期の人麿作と見る齋藤氏の說に從へば、巻九の形が一度激情の火を蒙つて巻一の形に上昇したと

考へられないこともあるまいが、現在の自分の分別力に頼れば、やはり今までの考へを棄てるわけにはいかない。

○

藤森朋夫

この一首に對する鑑賞上の問題については前評者たちの言に譲り、私は「過ぎにし君が」の四句に就いて一言したい。「過ぎにし」は言ふまでもなく「死んだ」の意味であつて、集中にはかく用ゐられた例が約十七首ほどある。そしてこれを分類してみると、挽歌に用ゐられたもの十一首、雜歌に四首、相聞に一首が見られる。この結果からすると、主として使はれて居るのは挽歌であつて、人の死を哀傷する場合、死そのものを露骨に表明しないで、成るべく目立たないやうに、間接的に使用してゐる。はかなく逝ける人間の命を、例へばこの歌に見るやうに、黄葉の散り過ぎるのに例へ、或は流水の過ぎ去るのに例へてゐる。卽ち亡きものに對してその靈を慰め、しかもそれを美的に表現しようとするのは、古くから見られる風習の一現象である。これが「相聞」の歌になると、「死する」といふ言葉を隱さずに自由に使用してゐる。これから推すと、人の死を云ふ場合に特に注意したであらうことが想像される。さきに言つた十七首の中、人麿の作歌は四首(四七・一九五・二〇七・二一七)、人麿歌集の歌は四首(一一一九・一二六八・一七九六・一七九七)である。本歌(四七)及び一九五の二首は皇族に就いての歌であり、二〇七は妻の死に就いてであり、二一七は吉備津采女の死に就いての作である。これらの例から見ると「過ぐ」といふ言葉はひろく一般にも、又高貴の方々に對しても、使はれたやうである。なほこの古語が現在にあつて全く同樣の意

味に使はれてゐるのが、新潟縣彌彦の邊、新潟市（古老の間）、佐賀縣佐賀郡の一部などに殘存してゐることは、すこぶる興味深い現象である。この言葉については、かつて私はある會報に記したところであるが、今本歌を問題とするに當つて、この部分をとりあげてその要旨をここに加へた次第である。

○

敷妙の袖交へし君玉垂の越野に過ぎぬまたも逢はめやも　（卷二、一九五）

山口茂吉

島木赤彥先生が「萬葉集の鑑賞及び其批評」の中で、「劈頭、直に敷妙の袖を交はして相寢たことを敍して、同棲親愛の現實感を提示し、それが忽ちにして小市野に殯宮の主となられたことを敍して、目前世相の轉變迅かなるを歎き、更にそれを押し進めて、九泉の門一たび掩へば再見するに由なきの感慨に入つて、人間の無常觀に痛切な息を吹き入れてゐる云々」と評されてゐるやうに、かくも復雜な事柄を單純化して一首にまとめた人麿の力量は、流石に大歌人の面目躍如たるものがあると云つていいと思ふ。しかし一首全體から受ける重厚沈痛そのものとも謂ふべき歌調から、讀んでゐて重苦しさを感じることがある。これは餘り濃厚な味の上等の料理は時に飽きることがあるのと同じやうなものかも知れず、また、かういふ氣持は時によつて變ること勿論である。

しかし心をしづめて味へば、味ふ程いい歌であり、人麿の佳作の一つに入るものと思ふ。第四句は「をち野過ぎ去く」よりも「をち野に過ぎぬ」が聲調のうへから云つてもよいやうに思ふ。この歌は勿論第三

者に示すために作つたといふやうな跡は見ることが出來ず、また作者自身が悲しんでゐる氣持さながらに作つてゐる歌であるが、現在の私の氣持から云へば、やはり「もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行方知らずも」(二六四)や「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ」(二六六)の如き獨詠的の無限の哀愁の調べの歌が好ましい氣持である。

○　　吉田正俊

この歌は人麿のおのづからなる短歌表現技巧の發揮せられたものであつて、間然するところのない表現のやうである。「敷妙の」「玉垂の」といふ枕詞も、不識のうちにその效果を現して居るし、「又も逢はめやも」の結句の重厚さもその處を得てゐるやうである。「敷妙の袖かへし君」の豪宕にして艷冶なる趣は、正に人麿一流の感がある。この歌は泊瀬部皇女に奉つた歌の反歌で、泊瀬部皇女の御心に代つて詠んだ歌と言はれてゐるが、人麿の大才を以てしても全く泊瀬部皇女御自らに成り切れない事は短歌本來の運命であつて、この點小說戲曲とその趣を異にしてゐることを感ずるのである。言葉を換へて言へば、「敷妙の袖交へし君」といふやうな表現が、その心持は女性のそれでありながら果して女性その人がかくの如く表現し得るかどうか、なほ進んで言へば、作者が當事者にしてなほよく此を言ひ得るかどうか、さういふ處に私はみづから解決し切れないものを持つてゐる。卽ちこの作品一首としては上述の如く間然するところなき完璧のものでありながらなほさういふ事が言へるやうに思ふ。

○

柴生田　稔

今吉田君は、この歌は泊瀬部皇女の御心に代つて詠んだ歌であるとする立場から意見を述べたが、これは萬葉集總釋に於ける土屋氏の解釋もその通りで、土屋氏は更に明瞭に「代作」とまで言ひ切つて居られる。しかし私はさういふ解釋には贊成出來ないのであつて、この歌はやはり、人麿が人麿の立場から、御夫君を失はれた皇女その人に同情し申上げてゐる氣持であると思ふ。即ちこの場合の人麿の感情の流れは、人麿より皇女へ向つてゐるのであつて、人麿より皇女の御夫君へ向つてゐるのでも、皇女に代りたる人麿より御夫君へ向つてゐるのでもない。「敷妙の袖交へし君」といふ表現の心持は、正に人麿その人の心持なのであつて、決して「女性のそれ」ではないのである。從つて「果して女性その人がかくの如く表現し得るかどうか」云々といふ疑問は不必要なわけである。實際もし土屋、吉田說のやうに解しなければならないとしたら、私にはこの歌の魅力はかなり減ぜられるやうに思はれる。そして從來の註釋書等の多くが私と同樣に解釋してゐることを考へても、これは決して不自然な受取り方ではないと思ふ。但し以上のやうに解しても、「敷妙の袖交へし」といふ狀景の說明はやや敍事的描寫的であつて、現在の私達の作歌態度とは何か異つた感じのある所は否定出來ない。吉田君の意見もやはりこの感じに基づくものと考へられるが、それは人麿の一般作歌態度から來てゐるので、代作的態度によつて始めて生じたのではないと思ふ。これは以前にも一言したやうに、決して人麿の態度を非とする意味ではなく、さういふ態度から一流の迫力を產み來るところの「製作の秘密」に至つては、どうしても私などには窺ひ知ることの出來ないものが

あるのである。

○　五味保義

この一首の作歌態度について前二評者の異つた考へが出て居るが、率直に作品に即した所からいつて、私は後説に傾くのである。しかし萬葉集總釋に於て土屋氏が明かに「代作」といふ言葉を出して居られるのは、一は長歌の解釋に次いでこの一首を釋かれた點にもあるのではないかと推量される。即ち長歌には「嬬の命の　たたなづく　柔膚すらを　劔刀　身に副へ寢ねば」や「そこ故に　慰めかねて　けだしくも　逢ふやと念ひて　玉垂の　越の大野の　朝露に　玉裳はひづち　夕霧に　衣は沾れて　草枕　旅宿かもする　逢はぬ君ゆゑ」とあり、皇女の心持になつた詠み方であり、土屋氏の所謂「規定せられたる心の狀態」といふ考へをもつてすれば、「袖交へし君」の方にも「代作」云々の評言があてはめられる事にならう。だから私が今、後説に傾くといふのも、今までのきはめて主觀的な好みによつての感じであるかも知れず、さういふ點で確に問題を存するものと思ふ。それはともかくとして、この一首の優れて居ることは諸說ある通りで、人麿の力量手腕を窺ふに足りる、立派な作品であると思ふ。但「萬葉集の鑑賞及び其批評」に說かれたやうな處へ落着くのには、何かしら理解に訴へなくてはならぬやうな感じをいつも免れないが、これは如何なる點に起因するのであらうか。柴生田君の一、二句に對する指摘もその一であらうか。又第四句の「をち野に過ぎぬ」の「に」助詞、及び「過ぐ」の語感に、現在の私にうときものがあるのではないか。「過ぐ」については先に藤森君の說もあつたけれど、私は當時の用法では割合普通に死及びそれに

○　　　　　　　　　　柴生田　稔

今吉田君は、この歌は泊瀬部皇女の御心に代つて詠んだ歌であるとする立場から意見を述べたが、これは萬葉集總釋に於ける土屋氏の解釋もその通りで、土屋氏は更に明瞭に「代作」とまで言ひ切つて居られる。しかし私はさういふ解釋には贊成出來ないのであつて、この歌はやはり、人麿が人麿の立場から、御夫君を失はれた皇女その人に同情し申上げてゐる氣持であると思ふ。卽ちこの場合の人麿の感情の流れは、人麿より皇女へ向つてゐるのであつて、人麿より皇女の御夫君へ向つてゐるのでも、皇女に代りたる人麿より御夫君へ向つてゐるのでもない。「敷妙の袖交へし君」といふ表現の心持は、正に人麿その人の心持なのであつて、決して「女性のそれ」ではないのである。從つて「果して女性その人がかくの如く表現し得るかどうか」云々といふ疑問は不必要なわけである。實際もし土屋、吉田說のやうに解しなければならないとしたら、私にはこの歌の魅力はかなり減ぜられるやうに思はれる。そして從來の註釋書等の多くが私と同樣に解釋してゐることを考へても、これは決して不自然な受取り方ではないと思ふ。但し以上のやうに解しても、「敷妙の袖交へし」といふ狀景の說明はやや敍事的描寫的であつて、現在の私達の作歌態度とは何か異つた感じのある所は否定出來ない。吉田君の意見もやはりこの感じに基づくものと考へられるが、それは人麿の一般作歌態度から來てゐるので、代作的態度によつて始めて生じたのではないと思ふ。これは以前にも一言したやうに、決して人麿の態度を非とする意味ではなく、さういふ態度から一流の迫力を產み來るところの「製作の秘密」に至つては、どうしても私などには窺ひ知ることの出來ないものが

あるのである。

○

五味保義

この一首の作歌態度について前二評者の異つた考へが出て居るが、率直に作品に即した所からいつて、私は後說に傾くのである。しかし萬葉集總釋に於て土屋氏が明かに「代作」といふ言葉を出して居られるのは、一は長歌の解釋に次いでこの一首を釋かれた點にもあるのではないかと推量される。即ち長歌には「嬬の命の　たたなづく　柔膚すらを　劔刀　身に副へ寢ねば」や「そこ故に　慰めかねて　けだしくも逢ふやと念ひて　玉垂の　越の大野の　朝露に　玉裳はひづち　夕霧に　衣は沾れて　草枕　旅宿かもする　逢はぬ君ゆゑ」とあり、皇女の心持になつた詠み方であり、土屋氏の所謂「規定せられたる心の狀態」といふ考へをもつてすれば、「袖交へし君」の方にも「代作」云々の評言があてはめられる事にならう。だから私が今、後說に傾くといふのも、今までのきはめて主觀的な好みによつての感じであるかも知れず、さういふ點で確に問題を存するものと思ふ。それはともかくとして、この一首の優れて居ることは諸說ある通りで、人麿の力量手腕を窺ふに足りる、立派な作品であると思ふ。但「萬葉集の鑑賞及び其批評」に說かれたやうな處へ落着くのには、何かしら理解に訴へなくてはならぬやうな感じをいつも免れないが、これは如何なる點に起因するのであらうか。柴生田君の一、二句に對する指摘もその一であらうか。又第四句の「をち野に過ぎぬ」の「に」助詞、及び「過ぐ」の語感に、現在の私にうときものがあるのではないか。「過ぐ」については先に藤森君の說もあつたけれど、私は當時の用法では割合普通に死及びそれに

關聯する觀念を呼び起す語であつたと思はれる。だから「をち野に過ぎぬ」も人麿自身は別に工夫する所がなかつたのに、今はその氣持に同感するには多少補足しなければならないのではあるまいか。いづれにせよ玄人の藝といへるやうに思ふ。

○　　　　　　　　　　柴生田稔

五味氏の意見に對し、私はなほ長歌の方をも人麿の皇女に對する氣持と取りたいのであつて、五味氏の引用した箇所でも、それからまた「ぬばたまの夜床も荒るらむ」などといふ表現でも、皆私のやうに解する方が自然だと思ふ。註釋書の多くもさう解釋してゐるやうである。長歌も短歌も敬語の使つてない處が問題になるであらうが、これは解決出來ないことではない。そして土屋氏等の解釋の出つて來る根本は、「君」といふ言葉の感じであると思ふが、これも、必ずしも多くの相聞歌などに於けるやうに、直接その人に向ふ氣持と取らなくてもいい。この短歌の場合は「その御方」ぐらゐに譯すべきところでないだらうか。なほ「君」の用例に就き、又代作歌の作例に就き、比較說明したいのであるが、今は省略する。

去年(こぞ)見てし秋の月夜(つくよ)は照らせれど相見し妹(いも)はいや年さかる　（巻二、二一一）

○　　　　　　　　　　佐藤佐太郎

この歌は「去年見てし」と言ひ、「いや年さかる」といふ處から、古い註釋書は妻が死んだ翌年に作つ

ものと解釋して居り、例へば「此歌拾遺の詞書は妻に罷おくれて又の年の秋月を見侍りてとあり、今の端作に妻死之時と云はずして後とある上に歌の心も然るべし」（代匠記）、「妻を失し明年の秋よめるにて」（攷證）といふごときであるが、然しこれは死去の後間もなく作歌したものと見る方が順當であると思ふ。「去年見てし秋の月夜」と言ひ、「相見し妹」と言つてゐるのであるから、どうしても作歌時の一年前に死んでゐると見るのは不自然である。この一首は、人麿の歌に多い枕詞や序歌の形式が無く端正とでも言ふべき姿である。「妹はいや年さかる」は一般共通の感じで、常識的といへば言へるが、「出雲の子らが黑髪は吉野の川の奥(おき)になづさふ」（四三〇）とか「山の際(ま)にいさよふ雲は妹にかもあらむ」（四二八）といふやうな感じ方よりは、現代の僕等には直接に響くといふことになり、この點は一面から言へばそれだけ所謂人麿的渾沌がないといふことが言はれるやうにも思ふが、一首の音調は緊張して居りどこか哀切である。この歌は或本の反歌（二一四）に三句が「渡れども」となつて出てゐるが、この方は一見表現が氣が利いてゐるやうでも、「照らせれど」に比すれば具象的な感じが不足して居り、稍理知的分子の混入があるといふ事が出來る。「照らせれど」の方は、感じが直接具象的である上に音調も痛切である。それから、結句の「いや年さかる」も又緊張したいい句である。萬葉集中には「さかる」を空間の上から言つた例は相當あるが、時間的な感じを現した句としては他に用例が見えないやうである。これは尙徹底した調査を待たなければならぬが、この如き不卽不離の言語をたくみに平然として驅使して居るあたりは何といつても人麿の力量を思はしめる。

○　　　吉田正俊

前評者は、妻の死んで後、間のない感じのやうに解釋をしてゐるが、それは「相見し妹はいや年さかる」といふ句に對する感じの相違によるのであらうか。「いや年さかる」といふのが、現在の作者の感慨を主として將來に及ぶとするか、時間推移の懷古的感情を主として現在或は將來に思ひを致すかの相違であらう。私は一年前といふやうに限定した時間的推移を解釋上考へる必要がないと思ふが、やはり相當の距離を置いた方が自然な解釋のやうに思ふ。「いや年さかる」といふ調子は甚だ氣の利いた處があり、人麿は時に重厚であり、時に輕快であり、その表現技巧は沈思の末に出づるものでなくて、おのづから口をついて出づるといふやうな趣がある。「照らせれど」と「ど」で重く止めて、「いや年さかる」と心持を流した處などはやはりおのづからなる技巧であらう。

○　　　鹿兒島壽藏

前者の說では、妻の死んで間のない時の氣持とし、後者の說では、それよりも多く時間を含んだ事とされてゐるが、「いや年さかる」といふ五句を明瞭な說明の下に置かうとすれば、どうしても無理が出來て味はふ上にも具合が惡いやうに思はれる。兩者の說は結局時間の程度の問題に歸するのであらう。私としては、從來の說の一年前に死んだといふのは無論とらない。又それを縮めて數箇月後の氣持として取つてもいいやうであるが、これもまだしつくりして來ない。少くも妻が死んでしばらく日數を經過した（七日

とか十日以上の）時にこの歌の氣持が作者に湧き出でたものと思ふのである。月光を見ながらさういつた感情を述べるのであるから、「いや年さかる」といふ如き渾沌とした句が生れるのはうなづけるやうに思はれる。分析すれば、これは過去にも將來にも亙ることになるのであらうが、一首を讀んだ感じから言へば、現在の現在として見るべきではなからうか。佐藤氏の說に、人麿の他の歌と比べて端正といはれたが、それは表現技巧の上に多く見られるもののやうであつて、結局のところ單なる端正ではなく非常に深みがあると思ふ。

○　　　　　土屋文明

妻の死後經過してゐる時間が問題になつて居るが、それは吾々が作品に對する個別の問題であつて、期間を測定するなどといふことは、勿論問題にならないことであらう。一周忌の作といふ見方は全く理智的な根據に基づくので、それを否定すれば足りると思ふ。年といふ言葉が現在の用例よりも幾分異なつて、月とか日とか言ふのとほとんど同樣に用ゐられて居るのではないかと思ふ。この一首は前評者が言はれたのとは異つて、人麿作としては幾分音調上の流暢さを缺いて居るのではないかと思ふ。そこに技巧を超絕した眞實があつて、私はそれに心を惹かれるのである。それは前評者が端正といふ言葉で現したのとは私は違つたものとして受取つて居る。もつと自然な格を拔出た構へのやうに思ふのである。さういふ點で、この歌は人麿の諸作品中では、幾分行き方を異にしてゐるのではあるまいか。もつともそれはこの一首ばかりでなく、この時の長短歌には皆その色合が濃いやうに思はれる。さういふ點で、この歌は吾々の氣持

に近いものであるといふことは、前評者と一致するのであるが、その筋道は幾分異なるのである。もつともかういふことは言葉に現して言ふから違つて來るので、本當は一致してゐるのかも知れない。結句の二二三などもたどたどしいやうで自然に据つてゐるといふことになるのではあるまいか。

山の際ゆ出雲の兒等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く　（卷三、四二九）

○　五味保義

溺死した出雲娘子を吉野に火葬した時の歌である、一讀順直な歌に感ぜられるが、「山の際ゆ出雲」や、第三句の「霧なれや」あたりを吟味すると、人麿が工夫して詠んだ迹があるやうに思はれる。麻續王の配流を悲しんだ歌「打麻を麻續王白水郎なれや伊良虞が島の珠藻苅りをす」（二三）の如きも、同巧の作品であるが、之に比して人麿の作品の方が、工夫といふべきか、意圖といふべきか、さういふ點が感ぜられる。さうしてその工夫は目立たず成功して居ると思はれる。聲調がおだやかで、肌理のこまかい歌である。ただ勁直な所はない。第三句の「霧なれや」は、特にその感を與へる。同じく人麿の「隱口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」（四二八）の方が、さういふ點ではより直線的な音調に成つて居ると思ふ。處女の死から起つた哀切の情を、山の際の雲霧によせた所は兩者ひとしくして、その表る所には變化があつて興味がある。二首共題詞に火葬の時とあるから、雲も霧も實は火葬の煙を見つつ詠んだのかと思ふが、吾々はさういふことに拘ることなく、自然より湧起する一種の情緒的感懐をいだき得るのであ

り、やはり人麿の才分によつて成つたものといふ感じがする。結局は先に佐藤君の言及されたやうに背々に直接でない所もあるが、いづれかといへば私は「いさよふ雲は妹にかもあらむ」よりは「出雲の兒等は霧なれや」の方に、氣持の上で親しみを持つて居る。

○

佐藤佐太郎

前評者の言及された「隱口の泊瀨の山」の歌の「山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」、それからこの歌の「子らは霧なれや吉野の山の嶺にたなびく」といふやうな感じ方なり技巧なりは、軌を一にするもので、かういふ場合に於ける人麿作歌の型を見ることが出來る。時を異にした作歌であつて、かうも同じ手法で行つてゐる點などからすれば、人麿が他の依賴によつて作歌したといふ說の根據となり得るやうにも思ふが、しかしこれは、人麿が感動の動くに從つて直ちに一首を成すといふ作歌態度から出てをり、一首を成して直ちに思ひを遣るといふ狀態なのではなかつたらうか。それであるから、時期を異にしてゐても對象の條件が同じであるから自然前形を踏襲して、その言ひ方に人麿自身よつてゐるといふやうにも解釋出來るのではあるまいか。題材が戲曲的で、僕の言ひ方もいくらか主觀的になつたけれども、一首の響はやはり讀者の同情を要求してゐる。前評者は「霧なれや」を、事實は火葬の煙であるけれどもさういふことに拘ることなく、もつと自然的な現象として受取りたい意見であるが、この「霧なれや」は火葬の煙をさして言つてゐるのであり、それを重ねて妹に例へてゐると見るべきであると思ふ。ただ現在としては比喩が廻りくどいので、直接に響かないうらみがある。初句の枕詞は、同時に意味內容を伴つてをり、さう

いふ點もややわづらはしい感じがある。さういふ處から見れば、前評者と違つて私には「隱口の泊瀨の山の」の歌の方が哀憐であると思はれる。

○

柴生田　稔

同じ時の歌になほ「八雲刺す出雲の子らが黑髮は吉野の川の沖になづさふ」(四三〇)の一首があるが、この二首を通じて私に感ぜられるのは、人麿のこの場合の作歌感動は、直接出雲娘子を悲しんでゐるといふよりも、それを人生に於ける一つの相として情懷を動かされてゐるといつたやうな點である。五味氏の「一讀順直な歌に感ぜられる」と言ひ又「工夫して詠んだ迹がある」といふ批評は共に同感出來るが、その感じの由つて來る處は今述べた作歌態度に存するのだと思ふ。卽ち、五味氏はその「順直」を好い意味に取られたやうであり、又「聲調がおだやかで肌理のこまかい歌」とも言つて居られるが、それは寧ろこの場合の人麿の態度が、前述のやうな一種冷靜とも評すべき性質のものであつて、感動の渦の不足する處に起因するもののやうに解せられる。「隱口の泊瀨の山の山の際に」(四二八)の歌が比較されてゐるが、これも大體同種類のものではあつても、今の歌よりは娘子への氣持が自然に行つてゐて一種綿々とした情趣があるやうに思ふ。その點は五味氏よりも佐藤君の方に贊成である。極端に言へば、この歌に於いては人麿の氣持は少し興味的にさへ感ぜられるのである。既に昨年十二月號(上卷十九)に土屋氏等が指摘されてゐるやうに、この出雲娘子の二首に於いて「山の際ゆ」「八雲さす」と枕詞を使ひ分けてゐる處などは、かなりさういふ言ひ懸けの效果を意識して作つてゐるやうに思はれる。この「山の際ゆ」に就いては、今

佐藤君の意見もあつたが、萬葉集に於ける枕詞の效果は、現在の私達の感ずるのとは一般にかなり異なつてゐて、懸り方の興味が働いてゐる場合が案外多いのではないかと思はれるが、その中でもこの「山の際ゆ」などは一番さうした色彩が濃厚なのではあるまいか。もつとも私達の感じとは異なるだらうといふ以上、かういふ具合にも容易には言ひ切れるものでないことは勿論であるけれども。

○

鹿兒島壽藏

一首の歌の味ひ方は時に從つて變遷があるものらしいが、私のこの歌と次の「八雲刺す」の歌に對する考へ方は從來と非常に變つたやうである。從來は、枕詞等の問題や火葬の烟、或ひは自然現象の霧等に對する問題を離れて、人麿の觀照といふやうなものが感ぜられて好きであつたのである。が、今はこの歌にしても「八雲刺す」の歌にしても、いま柴生田氏が指摘されたやうな、枕詞に對する「效果を意識して作つた」の評言が二首全體の評價として私には考へられる。又內容の興味的戲曲的等といはれる點も考慮していいやうに、人麿といへども、さういふ點に止まつてゐる事は、さう批難する事でもあるまいが、歌の結果から言つてこれらの歌によそよそしさがないとは言はれまい。「出雲の子らは霧なれや」に對する五味氏の「自然から湧起する情緒的感懷」は、この結句を切離して見た時首肯出來る。さうはいふものの人麿の作として受取る時、私のこれ等の歌に對する言は尙考へ直す必要があるかもしれない。なほ土形娘子の火葬の時の「隱口の泊瀨の」の歌の「山の際にいさよふ雲は」は「出雲の子らは霧なれや」よりも心に迫るものがあるやうである。又結句を「妹にかもあらむ」といつたのも實感があるやうに思はれる。

○　土屋文明

私もこの歌に全體としての不滿を感ずることは前評者たちと同じである。その不滿は或は先に言ひ現された以上であるかも知れない。さういふ點で前の「去年見てし」の歌に惹きつけられるのである。この邊の消息は結局獨斷で、分析的に言ふことが難かしいのであるが、理論で組み上げたものより強く自分だけには響いて居るやうに思はれる。前評者達が土形娘子の火葬の時の歌をあげられたが、私はむしろそれはこの歌と同一類のもののやうに感じて居る。

珠衣（たまぎぬ）のさゐさゐしづみ家の妹にもの言はず來て思ひかねつも　（卷四、五〇三）

○　藤森朋夫

「珠衣の」は枕詞であつて、衣ずれのさやさやとする音から二句の「さゐさゐ」に掛けたものである。この「さゐさゐ」は「さわさわ」などと同じであつて、この邊に音律的な諧調を漂はしてゐる。旅立に際して喧騒や焦燥の內に愴惶として別れて來たのであるが、やがて孤獨の自分を寂けさの中に意識するとき、懷かしいもの、こひしいものへの哀感はしみじみと湧き上つて來る。このあはれの心情が眞率に詠まれてゐる作であると思ふ。この歌と同時に想起されるのは、卷十四の「ありぎぬのさゑさゑしづみ家の妹に物言はず來にて思ひ苦しも」（三四八一）であつて、その左註には「柿本朝臣人麻呂歌集中出見上已詮也」と

ある。この二首は一見してほとんど同一形の作品であることが知られる。それで、東歌の中にかかる歌の見出さることは問題視していいと思ふ。既にこの點に就いて先進の間にも意見があり、夙く眞淵は、卷十四の歌に就いて「人麿歌集も云々この撰より後に顯はれし物なれば此卷に東歌に載しを本とす」(考)といひ、結局、人麿歌集が東歌から採用したのだと言つてゐる。雅澄も「四ノ卷には人麻呂が歌とあれど、本は東歌にのせありけむを、彼集に取載たらむを、即人麻呂が作として混しにやあらむ」(古義)とし、何れも東歌の方を本形と見てゐる。これに對して、佐佐木博士は「人麿歌集の歌が、東國地方に謠はれてゐて、東歌の中に入つてをるのである」(萬葉漫筆)と述べてゐる。この問題はなかなか面倒で、まだ決定的に述べるまでには至つてゐないのであるが、兎に角、ほとんど同一形とも思はれる作品が卷四と卷十四とに見られる事實は、人麿歌集と人麿作歌との間に緊密な關聯のあることを知り、そこに共通的色彩を特に意識させられるのである。又一方には、卷四にある歌が人麿歌集の中から出たものであるとも、直ちに決定してしまふことも出來ないやうである。そこで更にこの歌と類型的なものを他に求めて見ると、同じく卷十四に、「水鳥の立たむよそひに妹のらに物言はずに來て思ひかねつも」(三五二八)があり、卷二十の防人歌に「水鳥の立ちのいそぎに父母に物言ず來にて今ぞ悔しき」(四三三七)が見られる。これに就き赤彥は、東歌の三四八一は「人情の機微に入れるゆゑ、當時關東に流行し、人麿も聞き傳へて、その手記に入れおきしが、後、人麿作として傳はつたものであらう」(萬葉集の鑑賞及び其批評)と述べ、傳播力の強い民謠としての成立、生長に言及し、これらの東歌が東國人の間に民謠的に謠はれたものかも知れないと言つてゐる。人麿歌集の歌は、民謠的色彩を持つ作者不明の卷、例へば卷十一、十二、十四などに多く見受けられ

る。これは一說には、人麿が自身の作品や、他人の作品、また民謠的の作品までも採錄して、人麿歌集を成したものではなからうかと推定してゐるが、もしさうとすると、その歌集から卷四に取られたとも見られるやうである。この邊の關係がなかなか複雜である。また容易に決し兼ねる問題でもあるが、今は諸氏の意見を聞きたい。ただ附記すれば、本歌と他の類歌とを比較して見ると、やはり卷四の歌にはどこか角の取れない、傳播によつて磨られてしまはないものがあるやうに思へる。さう見ると又それだけに個性的であり、從つて民謠風でないとも言へるやうである。

○　鹿兒島壽藏

藤森氏が諸學說をあげられたので非常に參考になつたけれど、卷十四と卷四とに於ける關係は結局のところ私には解り兼ねる。然しながらこの歌の姿は、民謠的である點から言つて、卷十四の小異同のある歌とそれほどの隔りがあるやうにも考へられない。ただこの歌の方が、語句といひ聲調といひどことなく心に觸れるものがあつて、且つ品位があるやうに思ふ。さういふことを基として少し敷衍すれば、一首の氣持が非常に單純であるのに對して、「珠衣のさゐさゐしづみ」といふ音覺を追ふ氣持は少しも煩しくなく、對者を思ふ心情の中に溶けこんでゐるやうに思はれる。「家の妹に物言はず來て」の實情に對して心ゆく表現だと思ふ。ただ結句の「思ひかねつも」が果して成功してゐるかどうか。然し「思ひ苦しも」よりもいいといふことは言へさうである。この歌は百首選の時に、岡、土屋兩氏に選出されてをり、百人の選者の分では九點となつてゐる。その時私はこの歌を取らなかつたが、それはやはり民謠的な點が氣に入らな

かつたやうに記憶する。然し今見るとやや心を惹かれるものがある。

○　　　　　　　　　　　　　　　五味保義

「あり衣のさゑさゑしづみ」の歌とこの歌との間に非常な差異があるとはやはり言へないであらう。人麿の作とすれば、この歌と並べて載せられてある「處女らが袖振る山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき吾は」（五〇一）、「夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや」（五〇二）にも感ぜられるやうにあるゆとりがあり、更に言へば民謡的な作風として、人麿自身の作か否かを疑ひたくなるところもあると思ふ。然しこれは巻十四、人麿歌集及び人麿の作品の關係が明瞭でないと等しく、決定出來ないことであるし、第一義の問題でもない。この歌は巻十四の歌を考慮しないでも今言つたやうに民謡風なところが感ぜられはするが、どこか氣持の上で落着いた徹るものがあると思ふ。「思ひかねつも」は「思ひに堪へられない」といふ意味であると思ふが、そこが割合に要領のよい纏り方をしてゐると思ふ。從つて「思ひ苦しも」に比してやや纏り過ぎたやうにも感ぜられる。「家の妹に物言はず來て」あたりの音調は、先にあげた五〇一の聲調に認められると同じやうなものがあつて、この三首は切離して味はふべきではないやうに思ふ。「珠衣のさゐさゐ」は「しづみ」の序詞であらう。その序詞の懸り方が、從來色々に言はれて居るが、衣ずれの音の中に靜かな感じがあることから「しづみ」に掛けたのであらうといふ說が、私にはうなづかれる。「さゐさゐ」に出立の折の騷ぎといふやうな意味を入れて考へることは混亂するやうに思はれる。それから「しづみ」の意味は、「思ひかねつも」まで懸けて、たとへば藤森君の說にあるやうに騷ぎがしづま

つた時に一人寂しさに堪へかねると解するのもあるけれども、私は「しづみ」は「家の妹に物言はず」の際の作者の心理狀態と取つた方が歌として徹るのではないかと思ふ。この序及び「しづみ」以下の解釋について以上の如く考へるのであるが、なほ疑問の點が少くない。

○　吉田正俊

前評者たちの言はれてゐるやうに、卷十四の歌との關係もしくはこの歌の四五句に類似した諸作との關係を考へて來ると、決定的なことは言ひ切れないやうに思ふが、その具體的な反證が未だ見出されない限りは、この「珠衣の」の歌は題詞の通り「柿本朝臣人麻呂歌」ととるべきであり、他はその轉訛と見なすべきであらう。轉訛と見なすべき理由は、甚だ主觀的になるが、かういふ技巧は作者不明の民謠などに簡單に使用されたとも思へず、やはり人麿のごとき相當に作歌經驗の深い、その技巧を體得した者にして始めて爲し得ると考へられるからである。然しながら如何に人麿の力量を以てしても、常に個性の横溢した作を得るとは限らないので、時あつてかその內部衝迫の稀薄にして表現技巧の勝つた作を成さないものでもない。これは短歌形式の避くべからざる陷穽であつて、しかも世の追隨者はこの缺點に心を惹かれて自己の思ひを托しやすいものである。私の他の諸作がこの歌の轉訛であるとする主觀的理由を此處に持つのである。先に「思ひかねつも」を「思ひ苦しも」に比較して、「やや纒り過ぎたやうにも感ぜられる」といふ感想も出たが、私は「思ひ苦しも」ではやや窮屈であるやうに思ふ。「思ひかねつも」といふ表現が、集中如何に用ゐられてゐるかを審にしないが、やはりこれは言はば心持の餘韻を殘した表現法であつて、

「思ひ苦しも」のやうに決定的でないだけ餘情があるやうに思ふ。かういふ點も、强ひて言へばこの歌が原形であるといふ一つの理由にもならないものでもあるまい。ともあれ私がこの歌に對して第一に思ふことは、前にも言つたやうに結局その原形云々を保持出來ない弱みが全體としてあることである。作者の個性を保持する爲に、この保持しやすからざる短歌詩形をどう取扱つて行くべきか、これは短歌製作者に永久に懸けられた問題であらう。

○　　土屋文明

この歌及び卷十四の人麿歌集所出歌に就いての議論は、私には只今論ずるだけの用意がない。かつて私は卷四の人麿作は人麿歌集から收錄したのではないかといふ風に考へたことがあるが、それとて結局根據の少い、例の獨斷に過ぎない。さてこの二首を比較して見るに、東歌の方は恐らく「さゐさゐ」が「さゐさゐ」に應ずる東語であつたので、卷十四に取られたのではないかと思ふ。さういへば結句の「思ひ苦しも」も、粗野な言葉づかひのやうに思はれる。五味氏と吉田氏の見解の分れるのもそこから來るのではあるまいか。さりとて「思ひかねつも」ではあまりなだらか過ぎはすまいか。その點でこの卷四の方をも民謠風ととる考へに私も贊成したい。ただこの歌は、人麿の圓滿無碍なる作風が一層完備されて居るので、その音調の言ふに言はれぬ美しさが何時も棄てがたいものに思はれるのである。現在の自分の製作といふこととは幾分の距離を置いて樂しみ弄ぶといふ氣持になるかも知れないがどうも棄てがたい。

（昭和十一年四月）

二十二　人麿の歌五首

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む　（卷一、三七）

〇

山口茂吉

この歌は長歌の內容を再び短歌に盛つて繰返したやうなところのある歌である。つまり長歌の「この川の絶ゆることなく……瀧の宮處は　見れど飽かぬかも」を反對にしたやうに思へる處がある。左千夫先生が、「長歌の結句で只一句見れど飽かぬかもと云うただけでは、未だ感激の情を遣るに飽き足らぬ。どうしても一言云つたぎりでは物足らない。そこで反歌に其の餘情を移して、更に『見れど飽かぬ』と云ひ次いだのである」と云つて居られる。その氣持は分るが、云ひ次いだといふよりは繰返して云つたやうに取れること前言した如くである。だから長歌から引離しても、一首の短歌としてまた獨特の價値があるものと思ふ。「見れど飽かぬかも」といふ句は、集中にも多く用ゐられて居るが、結句に使つてゐるものが多いやうである。初句に、「見れど飽かぬ」を用ゐたのは集中この歌と、卷七の人麿歌集中の「見れど飽か

ぬ人國山の木の葉をし已が心から懐しみ念ふ」（一三〇五）の二首のみである。これは、初句としては一音字餘りとなるばかりでなく、重く强い句であるから、なかなか初句には使ひこなせなかつたためかも知れぬ。それを人麿など平氣で用ゐたものとも考へることが出來る。そして初句から「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなく」と强く一氣に押して來てゐる力量を思ふべきではあるまいか。しかし、これを受けてゐる結句の「また還り見む」は、上に比してやや弱くなつて居りはしないだらうか。若し幾分でもさういふ點がありとすれば、そして人麿の力量を以てしても猶かくの如しとすれば、歌一首作ることの豈容易ならむやといふことを沁々考へさせられる次第である。「常滑」に就いては古來種々の說があるさうであるが、さういふところはやや專門的になつて來て、私などには簡單に解決することが出來ないが、さう難かしく考へずに、字義通り、常に滑らかなる吉野川の巖石といふやうに解して、味つて少しも鑑賞上差支へないやうに思ふ。

○　　吉田正俊

「見れど飽かぬ」といふやうな一見重い句を初句に置いた人麿の奔放な技巧は、前評者もこれに言及したが、これが一首の上に調和を保つてゐるのは「吉野の川の常滑の」と一氣呵成で言はば息の長い句法に依るのであらうか。「絶ゆることなく……見む」といふ句は集中その例に乏しくなく、然も「絶ゆることなく」は例へば「秋津の川の」「激ち流るる泊瀬川」「八十氏人も吉野川」「痛足の川ゆ行く水の」の如くすべて河流に續いて居つて、言ひ古された技巧であるが、前述の例は皆何々川と大まかに表現して、この

歌に於けるが如く「常滑」と云ふやうな特殊な見所を缺いてゐるやうである。かういふ些細な點が、この歌を特殊づける一原因にもなつてゐることも、短歌製作者として重要視していいところであらう。なほ結句が上句に對して見劣りがするといふことも言はれたが、この一首に於いてはさうまで非難しなくてもいいやうであり、かういふ平凡な句で止めてゐることなどもかへつて嫌味がなくて、力量といふことになればそこまで穿鑿して言ふべきであらう。

○

落合京太郎

この歌は、いはゆる賀の歌であらうから、作者としても氣を伸ばして詠じてゐる態度が窺はれるので、その點を顧慮しないと「長歌から引放して一首の短歌として見ると人麿の歌としては餘り價値のある歌ではない」といふやうな左千夫先生の非難も生れるかも知れない。然し前評者たちが述べた如く、直線的に且つ大らかに他奇なく詠んでゐる態度は、この種の歌としても上乘なものではないかと思ふ。「絕ゆることなくまた還り見む」を物足らぬといふやうな非難もあるやうであるが、この點に於いては僕はむしろ吉田說に同意したい。集中にこれと同じ結句を用ゐた作が何首かあり、言はば既成句となつてゐるので、その點が我々の神經に觸れるのであらう。「また還り見む」だけならば有間皇子の作にも既に出てゐるが、「絕ゆることなくまた還り見む」と言つたのは人麿に始まるのであらう。常滑の解釋に就いて何れの說をとるかといふ點によつて、この歌の價値が多少異るかとも思へるが、その點に就いては專門の士の意見を聞きたい。常滑を岩などに着いた水垢の類と解すると、歌柄が小さくなるやうな感じがするのである。

○　鹿児島壽藏

「見れど飽かぬ」といふ句を初句に据ゑた技倆に就いては山口氏も言はれたが、これはやはり非常な力と言はねばなるまい。そしてそれ以下を大きな息吹をもつて言ひ下してゐる處にこの一首の人麿らしい迫力が感ぜられる。四五句が他の歌にあることから問題を惹起しやすいと注意されたのは首肯出來ないではないが、この一首の迫力はさういふいざこざを通り拔けて一貫したものとなつて現れてゐるものと思ふ。無論宮讃（みやぼめ）の歌であらうから、歌の形から言へば形式味が加はるのであらう。然し人麿はさうした形式を呑み込んで居つて、かかる場合に心持を縛られてゐるやうな所は少しもないやうに思はれる。少くともかうした見方を以てこの歌を讀むのはこの歌を味ふ上に最も必要ではないかと思ふ。只思ふのにこの歌は常滑といふ風な特殊な見所ある言葉を用ゐてゐるが、全體的に言へば主觀の勝つてゐる歌で、一寸言ひ方が變であるが、賴りにする手掛が幾分少いのではなからうか。常滑に就いてはなほ詳しい說が出る事と思ふが、これは岩そのものを指したのか、水に濕れてゐる（水苔・川海苔などの著いてゐる場合も考へられる）岩をさしたのか。どちらであつても意味は通じるのであらうが、今の場合私は岩石のみと解するのは物足りなく思ふ。

○　土屋文明

「見れど飽かぬ」と初句に置いたのは長歌からの連續で、私はそれを人麿の特別の手腕力量といふまで

に考へなくともよいと思ふ。その間の消息は山口君が引かれた左千夫先生の文がよく言ひ盡してゐると思ふ。長歌を作らない我々にはこの續き工合の體驗はないが、連作の各首のつながり工合などからその氣持は理解出來るやうに思ふ。「絶ゆる」は、吉田君の引かれたやうに川に關聯し、河水の絶えることらしいから、ここでは幾分使用例が他と異るのであるが、「常滑の上を行く水の絶ゆることなく」といふ位の氣持を直ちに「常滑の絶ゆることなく」とつづけたのであらう。人麿には多い技法の一つである。常滑は色々說があるが、岩のことを言つてをるのであらう。ただ現在殘つてゐる滑川などといふ地名は必ずしも岩川ではないらしいから、細かく言ふと我々には解らなくなつて了ふ。越後に常浪(とこなみ)川といふのは或はトコナメと通ずるのかも知れない。床浪(とこなみ)といふ地名は周防にもあるやうだ。さういふところからこの常滑を解釋することが出來ないであらうか。尾張の常滑は或はこの歌の句などから來た地名ではあるまいか。

この歌は簡素な力の籠つた歌で、短歌のもつとも本格的な行き方の一つであると思ふが、あまり直線的な技法のために、ややともすればその眞價を多數の人からは逸せられる傾きもあるのであらう。かういふ行き方の歌を、我々の現在の生活とどういふ風に結びつけて行くことが出來るであらうか。心が惹かれるのであるが中々むづかしい問題のやうに思ふ。つまり表面だけ模すると無味乾燥の輪廓のみのものになつて了ひがちである。

英虞(あご)の浦に船乘りすらむをとめ等が珠裳(たまも)の裾に潮滿つらむか　（卷一、四〇）

○　　　　　　　　五味保義

持統六年伊勢行幸の折、人麿が京に留つてゐて詠んだ歌の一である。詠風が堂々として居て迫らず、氣品の高い處など尊敬すべき作品と思ふ。遠く行幸地の有樣を思ひやるといふ時に、これだけの氣力の充滿した作をなすことは、後世人としてはかなりむづかしいであらう。作者はその心象を粗放に取扱つてゐないこと勿論であるが、そのために神經が細部に拘泥して執拗な感じを持たせるやうな所は些もない。少しくこまかに詞句の斡旋を注意して見ても、「船乘りすらむ」「潮滿つらむか」の二つの「らむ」が煩しく感ぜられないし、殊に四五句の「珠裳の裾に潮滿つらむか」の內的把握のたしかなこと等雋敏なるものがうかがはれる。さうして居て全體に穩かな敍景に終始してゐる。心ゆく聲調といふべきであらう。「をとめ等」の「ら」に就いて、從來親しみの意を示す添へ詞であり、人麿の戀人として特定の「をとめ」一人に對する歌であるといふ說がある。從駕の官女の中にさういふ人麿の戀人が居たのかも知れないが、この歌ではただ「をとめ」達として解する方が、素直であると思ふ。私は現在この一首の內容から甘美な情緖を感ずるよりも、むしろ作者の表現技巧の雋敏さと迫らざる聲調に感ずる方が多い心持になつて居るので、人麿の作歌時に於ける心持を今から忖度して、をとめ等に對する同情愛憐にまで言及することを欲しない。

第三回安居會に於てもすでに論ぜられたが、この場合の三首と、輕皇子に人麿自身供奉して安騎野に於て詠んだ作、「阿騎の野に宿る旅人うち靡きいも寢らめやも古おもふに」(四六)以下三首とは、比較して興味あるものと思ふ。行幸地を偲ぶ時も、行幸に從つた際も、夫々に特徴ある作をなした自在な力量を想

ふことが出來る。

○　鹿兒島壽藏

この時の三首は、無論作者が供奉しなかつた爲の特別の心動きであるが、それをば同じ時に京に留まつた人々に特に示すための作歌ではなかつただらうか。だから、他の人麿作にある如き、沈痛なものや、迫力的なものが、この場合表現されなかつたのも自然であらう。全く想像力に依る歌で、美しい語句の驅使力は流石に人麿だといへる。清澄な感情で遠地の狀況を髣髴したものとして素直に響いて來る歌だと思ふ。尙「をとめ等」は私も複數に解してゐる。一人の情人を指すと解したのは私にはどうも受取りにくい。

○　藤森朋夫

この歌の「をとめ等」は、私も問題なく複數の意味に前から解釋し、今もまたそれに變りがない。そして全體から受ける感情は、やはり明るくむしろ朗かな氣持であつて、繪畫的色調的のものをより深く感ずる。京にあつて、旅する人々に思を馳せ、そこに自然に浮び來る情感を率直に言ひ現してゐるのであるが、それが單なる想像に留まらないで、所謂人麿的の豐醇なる詩的想像力から眞實味のある氣氛が釀し出されて、この種の境地に立つ歌によく見るやうな、技巧的の乾燥した氣持といふやうなものが少しも見出されないやうである。本當にその旅を體驗してゐるかのやうな情感が感じられるやうに思ふ。新考には「三首の調を思ふに人麿は曾てこの地方に遊びしならむ」といふやうな說を示してゐるが、この歌に表現された

ものからはさうした想像さへも爲し得るやうに思ふ。

○

山口茂吉

第三句の「をとめ等が」の「ら」を、普通に複數として從駕の宮女達多くを指すものと解するか、或は親しみの意を示す單なる添へ詞であり、人麿の情人としての特定のをとめ一人を指すものと解するかが、問題になつた。そして前評者三氏とも複數とするのである。右に就いて手近なところからアララギ先進の說を引用して見ようと思ふ。赤彥先生は、萬葉集の鑑賞及び其批評で、「『玉裳の裾に』と如實に想像してゐるのはその少女が人麿と相思の間であらう」と云ひ、「ら」を單に添へた詞と解して居られる。左千夫先生は、萬葉集新釋で、「供奉の女房達多くに對しての歌ではない。吾が情人一人に對しての歌と解するのがよいのである」と云はれ、その結論として「相思ふ人などは美しい裳の裾に潮がみちて、さだめてわびしく苦しいことであらう。あはれなさまが眼に見えるやうぢやといふ如き意で、痛く情人を憐れがつた歌である」と云ふことになるのである。この左千夫先生の說に對し、新選秀歌百首の中で、齋藤氏は、「少し穿過ぎてゐるやうにおもへる。此歌はもつとほがらかな聲調を有つてゐるものなのである」と評して居られるし、土屋氏も、萬葉集名歌評釋で、「持統天皇は女帝であらせられるから、供奉にも少女たちが多く仕へたので、人麿の注意も自然其所に向けられ、この作を成したのであらう」と云つて居られる。つまり左千夫・赤彥は、人麿の情人一人を指すものと解し、齋藤・土屋兩氏は宮女のをとめ達多くを指すものと解して居られる如くである。而して前者の如くに人麿の情人一人を指したものとする人々、特に左

千夫先生が、この歌をわびしく苦しいことだらうと憐れがり思ひ遣つて詠んだ歌であると強調し、後者のやうに複數と解する人々が概ね明るくほがらかな氣持の歌として受容れてゐるのは、短歌鑑賞上甚だ興味あることではあるまいか。

私は現在の氣持から行けば、「等とは數人をさしていふごとく聞ゆれども、猶心にさす女ありけるなるべし」と云ふ古義の說に從ひたく、多數の宮女の中に一人の情人があり、その情人を念ふ遣瀨ない熾烈な戀心を籠めての作と解したいのである。左千夫先生は同じく戀情を含んでゐる歌と解しても、「わびしからんとの心に戀の意味が含まれ」と云つて居られるが、私は寧ろ反對に、樂しからむとの心に戀の意味が含まれてゐると解するもので、つまり、たまたま京を離れて佳景の海邊に船遊びする供奉の若き男女の群の樂しい狀態を思ひ浮べ、その中に交じつてゐる自分の戀人はどうして居ることであらうか、定めし樂しく過してゐることであらう。今頃は自分のことなどは忘れるともなく忘れて居りはしまいか、或は思ひ出しても多くの供奉員の中にあつて春の海邊に賑かに朗らかに舟遊びなどに興じてゐると、直ぐまぎれてしまつて何の屈託もなく氣安く過してゐるのではあるまいか、といふやうな氣持で、もつと細かく云へば、その邊の海は潮の荒いところだと聞くが、舟の乘り降りの際などには他し男に手を取られ助けられなどして居るのではあるまいか、いろいろ考へるとどうも離れてゐることがもどかしく堪へがたいといふやうな氣持を含んで居るものと解したく思ふが、これは餘りに穿ちすぎた解釋であらうか。私はどうも、「珠裳の裾に潮滿つらむか」といふ句は、朗らかな聲調といふよりは、何か思ひつめた切實悲痛な一種の哀韻のこもつたひびきが感じられるやうに思ふのである。

○　落合京太郎

この一首とこれと同時の二首をつづけて讀むと、歌の調子といふか作者の感情といふか、さういふものが後の作になるに從つて順次切迫してゐるやうな感じを與へるし、且三首目に「妹乘るらむか」と言つてゐる點などよりして、この一首を自己が思ふ供奉のをとめに對する戀情を基調とした歌であるとの解釋も成立ち得るであらうが、この一首のみを切放して味つて見ると、その解釋はかなり無理で、鑑賞者の體驗や想像などより割出した解釋となるやうに思へて、自分には贊成出來ない。やはり京にゐて遠く供奉のをとめ等の舟遊の光景を想像しての歌なのであらう。藤森氏の言はれた如く、豐醇なにほひのする歌ではあるが、「技巧的な點が見出されない」といふ點には僕は左袒出來ない。或は言ひ過ぎかも知れないが自分には四五句あたりに何か匠氣といつたやうなものがあるやうに以前から感じられてゐた。今もなほその感じが捨て切れないやうに思へる。この點は示教を乞ひたい。

○　吉田正俊

前評者が匠氣を感ずると言つたのは「珠裳の裾に潮滿つらむか」といふ工合に、あまりに具體的な鮮かな光景を作者が眼前に畫き出した點にあるのであらう。然しながら私はこの歌はひとり京に留まつて、遙かに伊勢の國行幸の人々の行動を想像して僅かに思ひを遣ると言つた、作者人麿の心ゆらぎの方に思ひが及ぶので、その狀景の明朗云々は、作者の心に再現せられた陰影を交へて鑑賞せられるのである。かうい

ふ風にこの歌をとれば、匠氣云々の評はその作歌時の人麿の感情にある反撥を覺えたせゐに歸せられるかも知れない。

○

黄葉の落りぬるなべに玉梓の使を見れば逢ひし日念ほゆ　（卷三、二〇九）

柴生田　稔

人麿が妻（愛人）の死を悲しんだ長歌（二〇七）の反歌である。その長歌には、人麿の相愛の人が輕の里に住んで居り、人麿は人眼を憚つて屢〻おとづれることも出來なかつたが、使が來て始めてその愛人の死を知つたといふ趣が述べられてあつて、この反歌はさういふ事實を豫備知識として味ふやうに出來てゐるものである。この歌は、一種浪漫的な情趣の中に沈潛した悲哀の感情が流れてゐて、所謂人麿的な、鑑賞者を壓迫するやうな處はなく、おのづから惹きつけられて來た作品であつた。然し今特に注意してこの一首に對して見ると、意味內容の上に少し疑問の點も出て來るのである。「玉梓の使を見れば」といふのはどういふ事實を指してゐるのであらうか。代匠記には「告來る使を見るにつけて、相見し日の事を思出て悲しき心なり」とあつて、卽ち妻の死を傳へたその使と解してをり、最近の解釋では、山田孝雄氏の講義、土屋文明氏の總釋等は最もその點を明瞭に說明してゐる。「この使は今計報をもたらしたる使なるが、その使を見れば、昔を想起すとなり」（山田氏）、「黄葉の落るのと共に妻の死を傳へる使を見れば、かつての逢ひし日のことが思はれる」（土屋氏）。然し愛人の死を突然に聞かされた時の感情としては、この一首の

感じはあまりに追懐的に過ぎるやうに思はれる。一體「ねもころに見まくほしけど　止まず行かば人目を多み　數多く行かば人知りぬべみ　狹根葛後も逢はむと　大船の思ひ憑みて、玉かぎる磐垣淵のこもりのみ戀ひつつあるに」といふやうな、その當人が突然に死んだといふ報知を受取つたその時の感情が、「逢ひし日念ほゆ」といふやうな呑氣なものであり得るだらうか。私にはどうも理解出來ないのである。それで私はこの歌を、妻の死を聞いた後相當の心的過程を經て、人麿の感情が幾分落著いて來た頃に、偶〻曾ての日によく愛人の便りを傳へたところの使に出會つて、この歌のやうな感情が湧き起つたものととりたいのである。それには、當時かういふ使といふものが一種の職業的なものにでもなつてゐて、今の田舍などの顏を覺えてゐる郵便配達とでもいつたやうな關係ならば、理解に好都合のやうに思はれるが、當時の風習から見て如何なものであらうか、今はその點を考察する用意がない。人麿とその愛人とに關係のあまり密接な使だとすると、「玉梓の使を見れば」といふやうな、使自身は全然感情的に取扱つてゐない態度が、一寸呑み込めない氣がするのである。從來の解釋では、先に引用した外に「共に顯し身なりし時使を待得て行て逢たりし日に、もみぢ葉の散たりけん、それが並にけふも黃葉のちるに使の來たるを見れば、忘れては、かの逢し日の心持するといふ也」(考)などといふのは、私と同じ氣持のやうにも思はれるが、はつきりしたことは解らない。「黃葉の落りぬるなべに」は「ちりゆく」とも訓まれるが、その優劣は私には俄に言ひ切れない。この一二句は、幾分華麗に過ぎ情趣本位的に過ぎるやうにも思はれるが、これは從來說かれてゐるやうに、愛人の生前かういふ光景に關して、二人にとつては深い或る印象があつたものと見るべきであらうから、第三者のかかはるべきところではないと云へるかも知れぬ。さういへば、「玉

梓の使」の句に對しても同樣で、事實は今不明にしろ人麿の場合としては、さういふ事が是非言はれなければならなかつたものかも知れぬ。そしてかういふ意味上の不足は、或程度まで短歌の本質から來てゐるので、必ずしも表現の不足といふべきではなく、むしろ鑑賞者の側の理解力と補充とが要求せらるべきものかとも思ふ。それにしても(私のやうな工合に解釋しても)、この歌は妻の死を悲しむ場合としては、少し餘裕がありすぎるやうな感じを私としては否定し難いのである。「逢ひし日念ほゆ」などは非常に優れた表現だとは思ふのであるが。

○　落合京太郎

作者が諦念のなかにしづかに感情を湛へて居る詠風に心を惹かれる。きはめて淡々と敍しながら、而も含蓄してゐる所の多い點は、殊に注意すべき點であると思ふ。人麿の所謂沒細部的描寫といふことは、この一首についても云ひ得ると思ふ。「黃葉の落りぬるなべに」の「なべに」なども、この語自體フレクシブルなものらしいので氣にしなくてもいいと思ふ。「玉梓の使」は今度はじめて長歌の中にある「玉梓の使」と同一に解すべきことを敎へられたので、僕も柴生田君の說には同感する所少くないのであるが、今の所山田、土屋說に從つて解する方がよいと思つて居る。

○　土屋文明

「ちりぬるなべに」は「ちりゆくなべに」といふのが舊訓であるが、今の訓の方がよいと思ふ。初二句

などは、柴生田君のいはれたやうに餘裕がありすぎるとも考へられるし、わるく取れば芝居がかつてゐるといへないこともあるまいが、ここはもつと當り前に取つて、黄葉の散りつつある時も時、悲しみを告げ來し使に面接して、その使のいふ所をきいて居る人麿を想見することが出來ると思ふ。問題は柴生田君のいはれる餘裕が、事實とその言語的表現の間には當然避け得られない餘裕であるか、或はそれ以上不必要の餘裕までが加へられて居るかといふことになるのではないかと思ふ。しかもそれは理論的の問題でなしに、技術的の問題であるから、斷案を下しづらいのであるが、私はこの位は言葉であらはす時になれば仕方のないものではないかと思つてゐる。勿論その中間物を寸分でも押しせばめてゆくことは吾々の製作上の目標であるが、他の作品を味ふときには幾分許容する氣持もうごいて來ると思ふ。落合君が沒細部的といつたが、「逢ひし日念ほゆ」の句は沒細部中の沒細部といふべきではあるまいか。近代人ならば、ここをもつと感覺的に表現するであらうし、それも亦たしかに新鮮なものを與へるのであるが、ただ「逢ひし日念ほゆ」と云つて、その句にあらゆる感情を安んじてよらしめて居る氣持も亦考へてみるべきことであり、學ぶべき一の技法ではあるまいか。

あらたへの藤江の浦に鱸（すずき）釣る白水郎（あま）とか見らむ旅行く吾を　（卷三、二五二）

○　　鹿児島壽藏

羇旅の歌八首中でこの歌は內容が興味的で一般的、常識的なものへ傾いてゐるやうに思はれる。それ故

網引する海子とや見らむ飽浦の清き荒磯を見に來し吾を（巻七、一一八七）
濱清み磯に吾が居れば見む者は白水郎とか見らむ釣もせなくに（巻七、一二〇四）
潮はやみ磯回に居ればあさりする海人とや見らむ旅行く我を（巻七、一二三四）
白妙の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行く吾を（巻十五、三六〇七）

等の如き傳播的な結果を招來してゐる。それが、當の人麿が幾通りにも時に應じた故であるとしても、この一首のうちには概念化されるものが包含されてゐると見ていいと思ふ。結果的に見ると引け目の多い歌と云へるやうである。（この歌の一本曰や巻十五の異傳は今問題にする必要を感じない）又、

漁する人とを見ませ草枕旅行く人に妻とは告らじ（巻九、一七二七）
藤浪を假廬に造り灣廻する人とは知らに海人とか見らむ（巻十九、四二〇二）

等の如き歌も生れ來つてゐる。この二首などは、上掲の何れよりも價値の低いものであらうし、直に關係附けるといふ譯にはゆかぬかも知れぬが、とにかく、「漁する人とを見ませ」「海人とか見らむ」といふ所は、前述の一般的興味になり易いことを裏書してゐると云へよう。さういふやうにこの一首は羇旅歌八首中では一番、形式的だとも云へるし、他の七首よりも劣るのではないかと思ふ。然しこの一首を一首として味はつてみると、やはりこれだけの單純な表現の中に旅の哀愁を盛込んだ點は捨て難くて、愛惜出來るやうに思ふ。

　さて、この歌の解釋であるが、契沖は「此浦ノ面白サニナガメヲレバ、旅人トハシラデ釣スル海人トヤ人ハ見ントナリ」と云ひ、守部は、「久しく風待などして浦馴れたる態を述ぶる心ときこゆ」といふ風に

大體なつてゐるらしい。私は始めのうち守部說を面白く思つてゐたが、「浦にすずき釣る白水郞」を、風待ちして浦馴れてゐると迄考へなくもいいと思ふやうになり、後、契沖說に傾いた。けれ共、契沖の「面白サニナガメヲレバ」や「旅人トハシラデ……人ハ見ン」をそのままにも受入れかねてゐる。「白水郞とか見らむ」は、海人として他人が見るだらうかといふ風に解するのが正しいやうに思ふが、私は此處のところを、もう少し何とかならぬかと考へた。つまり、作者が、藤江の浦を舟航しつつあるとき偶々鱸釣りの船の幾つか居る邊りを過ぎて、旅人としての氣持から、それらの海人の生活を自己に引きつけて「白分を海人の一人として」見ようとしたと考へ、結句の「旅行く吾を」なども、感動として受取りたいのである。つまり作者の感動の中心は、人が見るといふことなどは實際に於ては顧慮しなかつたやうに思はれる。再言すれば、作者自身が自己を指して自問自答的に旅愁を述べて居るのではないかといふのである。これは現代に近づけすぎた解釋で、或は作者の、又は當時の考へ方と幾分違つて居るかも知れない。猶右にあげた例歌によれば、他人が見るといふ方が多いやうである。

○　　　　　　　　　　　　吉田正俊

この歌は、作者が藤江の浦に於て鱸を釣つて居る光景を見て、旅愁を覺えたその感慨であらう。それを「海人とか見らむ旅行く吾を」といふ風に、自己の心持を外側から表現した技巧は、（かういふ技巧は、後代表現の多樣性を誇示しつつ意識的に用ゐられて、嫌味に陷つたやうだが、人麿の場合は恐らく無意識で、そこに後世との差異があるわけだが）直ちに訴へること少きものと思ふのである。かういふ所を除外

して味へば、何か淡々たる旅愁は感ぜられるやうな氣がするが、これはかなり一首から自分の好みに合はない挾雑物を取り除いての感じであるから、一首の歌としてはそこに問題があることにならうと思ふ。

○　藤森朋夫

羇旅歌八首をいま改めて讀み直して見ると、この一首は他の作品に比較してどうもぴつたりと來ない。鹿兒島氏が詳しく云はれたやうに、私もこの歌から汲み得るものが少いやうに思ふ。何か人麿らしくないうるほひの缺けた、自然にわき來る感情をうたひあげたといふのではなく、むしろ人麿としては一種の技巧にたよりすぎた作のやうに思へて仕方がない。「玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に船近づきぬ」（二五〇）、「淡路の野島の埼の濱風に妹が結びし紐吹きかへす」（二五一）、「天ざかる夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ」（二五五）等には、幾度よみかへしても常に新しさを覺える人麿の歌風を痛感するのであるが、これらと比照して味ふときは、その藝術的價値ははるかに劣るやうに思ふ。好意的にこの歌を見る見方からすれば、前評者のいはれたことも首肯出來るが、現在私のこの一首から受ける感じは以上の如くである。

○　落合京太郎

この一首を見ると、現在の我々には到底歌に出來さうもないことを平然としてやつてのけて居る點に驚く。現在の自分等がものしたら隨分と厭味になるだらうと思へる事柄を、さういふ感じを與へないで詠ん

で居る點は時代といふこともあるにしろ、矢張その力量を想ふべきであらう。寧ろ巧みに過ぎる程の作品ではあるまいか。さういふ所から、人麿の作品としては多少輕いといふ様な感じもしないではない。

○　　　　五味保義

吉田君の所謂「外側から心持を表現した技巧」を中心として見る時は、吾々にはすでにうとい作品のやうに思はれるだらうが、一首の氣持は、必ずしも吾々として手に附かない境に入つて居るとは思はない。「藤江の浦に鱸釣る白水郎」などは地味で心ひかれる句である。旅地に於てさういふ情景を自分から離して見ずに、みづからその中に交(まじ)る心持から、「白水郎とか見らむ旅行く吾を」といつたのであらうか。淡々として居ると同時におちついた寂寥感がうかがへる。私は長途の旅行に於て今の吾々もこれに近い氣持をいだき得ると思ふ。また技巧としてもさう輕妙とは私は思はない。むしろ「淡路の野島の埼の濱風に妹が結びし紐吹きかへす」（二五一）の方が輕いと思ふ。この歌の調べはやはり人麿的なものを多分に含蓄してゐる。なほ鹿兒島氏の「自問自答」説についていへば、「白水郎とか見らむ」の「らむ」の一般的用法を考へると、さういふ解釋にはおちつきかねると思ふ。

古にありけむ人も吾が如か妹に戀ひつつ寢(い)ねかてずけむ　（卷四、四九七）

○　　　　藤森朋夫

この歌からは、聲調上に一種の滑らかさを感ずる。人麿調の流露した歌であり、輪廓のおほらかさを思はせる作である。自己の經驗をうたつてゐるのであるが、その表現形態は、情感の直接的表示によらないで、「古にありけむ人も」の如く、ひろく自己を基準として他者にも擴充した、むしろ自己を客觀的に諦觀する方法によつて、疑問的に描出してゐる。現在にあつて現在のみをうたはず、戀愛の苦悶を過去にまでさかのぼらしめ、時間的に永く眺めて沈潜してゐる。

卷七には、柿本人麿歌集の歌として、「古にありけむ人も吾が如か三輪の檜原に插頭折りけむ」（一一一八）が見られるが、これを對比すると下句が異つてをるだけで、卷七の作の方は表現が具象的である。それだけに歌の内容も亦判然として來るが、内にこもるものは割合に稀薄であると思ふ。尙この歌の類歌として、卷七の「いにしへにありけむ人のもとめつつ衣に摺りけむ眞野の榛原」（一一六六）が擧げられる。

次にこの歌は作者が如何なる時にうたつたものであらうか。人麿自らが旅にあつて愛人を慕つたものであるとの說、或は、人麿の愛人が旅にあるのを戀ひ慕つたものであるとの說が見られる。題詞にも、ただ「柿本朝臣人麿歌四首」とだけあり、その間の消息は明にすることが出來ないが、私はやはり、人麿自身が旅にあつて、妻に思慕の情を寄せて作つた歌と思ふ。それで、前歌「み熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へど直に逢はぬかも」（四九六）と同時の製作であるとすれば、それには序詞の中にではあるが、「み熊野の浦」といふやうな地名がよみこまれてゐるので、これを關聯せしめて推測すると、その地に行幸か何かあつた際に、人麿がこれに供奉し、かかる時にものした作と見られよう。

尙、武田博士は四九六は、獨立しては歌情の判然しないものありとし、本歌がその作歌内容を明示して

ゐることから兩者を關聯せしめて、この二首は連作であるとの一説を提出してゐる。更に又別説を樹て「今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて哭にさへ泣きし」(四九八)、「百重にも來及けかもと念へかも君が使の見れど飽かざらむ」(四九九)の二首は、四九六、四九七の二首に對する妻女の返歌ではなからうかとの意見をも述べられてゐる。歌の内容上からして問題になり得るであらう。

○　　吉田正俊

前評者がおほらかな調子を持つて居ると云つたが、私はそれに同感である。いかにもゆつたりとした歌ひぶりである。神經のとげとげしさがない。だからこれを「ひろく自己を基準として他者にも擴充した、むしろ自己を客觀的に諦觀する」「現在にあつて現在のみをうたはず、戀愛の苦悶を過去にまでさかのぼらしめ」といふ風にのみ感嘆する氣持にも心が傾くのであるが、一方から之を觀れば、作者の氣持がぢかに讀者にひびいて來ず、どこかよそよそしい感じを與へるやうな所もある。これは現代人の心を以て古人をはかるそしりも得ようが、さういふ弱みもあるのではないかと思ふ。また作者自身が旅に在つて作したといふ説、妹が旅に在るのを戀ひ慕つて咏んだといふ説に就いては、私はこの歌の場合、さう穿鑿をすべき性質のものではあるまいと思ふ。さういふ作歌時を考慮に入れる餘地のない程、戀愛の一般感情をうたつてゐて、時とか場所とかの特殊感情は表現されてゐないのではあるまいか。

○　　土屋文明

この一首も、巻四に於ける他の人麿作歌と同じく民謠風の要素が著しく感ぜられる。その點が前評者の「調子におほらかな所がある」といふことにもなるのであらう。「古にありけむ人」といふいひ方の直接でないことは、「古の人にわれあれや」などと比較しても直に理解がゆくのではあるまいか。巻四に四首列記されてゐるのは、勿論同一時處の製作を示すものではあるまい。從つてこの歌と「み熊野の浦の濱木綿」の歌を關聯させるのは不可能事ではないかと思ふ。ただ「今のみのわざにはあらず」の方はこの歌と關聯して考へることが出來、この歌につくせなかつたことを受けてうたつてゐるともみられるし、又二首で問答形式を取つて居るともいひ得るであらう。結句の「寢ねかてずけむ」といふのは、舊訓の如く「寢ねがてにけむ」と訓みなれて居るが、語法上それが許されないならば改訓する外あるまい。しかしその改訓によつて一首の感銘の上にいちじるしい變化があるとは思はれない。この歌の類歌を藤森氏が人麿歌集中からあげて居られるが、それらの點もこの歌の民謠的要素を立證するに足ると思ふ。巻三以上にみえる人麿の作にはもう少し荒削りの所があり、感情に直接であることは繰返して云つた如くである。

○　五味保義

吉田君の提出したこの歌の一面に對する不滿は私も近來之を感じてゐたのであるが、この歌にせよ、又「み熊野の浦の濱木綿」の歌にせよ、姿が端正で、何處かに品格の掬すべきものがあるやうに感ぜられて、その間の關係をどう仕末つけて味つていいか疑を存してゐた。いま土屋氏が「古の人にわれあれや」を以て之と對照されたので、大變はつきりして來たやうに思ふ。この歌は決して傳來の淺いものではないと思

はれ、その點相當に尊重されていいものと思ふのであるが、「古にありけむ人」「妹に戀ひつつ寢ねかてずけむ」の非直接性は、やはり作歌の本道といふことは出來ないかと思はれる。卷七の「三輪の檜原に挿頭折りけむ」もほぼ同樣な歌柄の如くみえるが、この歌に比するとかなり直接な所があつて、むしろ情緒的に流露した點で卷七の方に分があると思はれる。「妹に戀ひつつ寢ねかてずけむ」が普遍的な感情をむしろ硬直な調子に表現したのよりは、「三輪の檜原に挿頭折りけむ」の表現はその內容に自然に一致してゐて、反撥するところが少いと思ふし、又淡如としていい感じである。ただ前述したごとく卷四の四首には單に輪廓的であるといつて捨ててしまへない氣品があるので、妙な云ひ方だが、輪廓の好さといふやうなものが感ぜられ、それは作者の住した時代の古さを思はせられる。「寢ねかてにけむ」は語法上許されないと思はれない。「寢ねかてずけむ」の方が新鮮に感ぜられたこともあるが、必しもよき訓とは思はれなくなつた。「カテズケム」「カテニケム」いづれも用例が稀なやうである。四九六、四九七と四九八、四九九とが二首づつ問答で、一方が人麿で一方がその妻の作とする說もあるが、少し氣が利きすぎた推測のやうに考へられる。

（昭和十一年五月）

二十三　人麿の歌五首

奥つ波來よる荒磯を敷妙の枕と纏きて寢せる君かも　（卷二、二二二）

柴生田　稔

○

讃岐狹岑島に石中の死人を視て作つた長歌一首反歌二首中の一首で、「寢せる君」はその死人をさしてゐる。この一聯は、人麿の作としては、幾分材料の興味が先立つて感動が割合に稀薄なやうに思はれ、この一首なども一見平凡の感があつて、そのせゐかこれまでも佳作といふ意味では餘り問題にされなかつたやうである。然しあらためて注意をこの一首に集中する時、やはり要核を捉へた「單純化」の鮮さに驚かされる。これは

家人の待つらむものをつれもなき荒磯を纏きて伏せる君かも（卷十三、三三四一）

浦浪の來寄する濱につれもなく伏したる君が家道知らずも（卷十三、三三四三）

の二首と比較すれば一層明瞭である。この卷十三の歌は、丁度人麿の作を二首に引伸したやうな感じで、

兩者を並べて見れば「家人の待つらむものを」「家道知らずも」などの通俗的、概念的であり、「つれもなき」などの無駄な感傷に過ぎない所以が、自明のことのやうに思はれて來るのであるが、一度自己の製作の實際に省みるときは、この「單純化」の道程の實は容易ならざるものであることを悟るのである。卷十三には、人麿の場合と同じく海濱の屍を詠じた歌が長短九首あつて(三三三五―三三四三)、その中、或本備後神島の濱にて調使首の作と題した長短歌中の二首が、即ちここに比較に擧げたものであるが、人麿作とこの二首とを全然無關係の成立とは考へ難いやうに思ふ。調使首は傳不明であるが、私は前に卷十三と人麿との關係に就いて述べた時のやうに、この場合も卷十三は人麿作の變形だと考へる方に傾くのである。勿論これは私一個の主觀的な推量に過ぎないが、作者類別年代順萬葉集でこの調使首を第一期(壬申の亂平定まで)の作家と假定してゐるのも如何なものであらうか。

「奧つ波來よる」は、生動した寫實の句であつて、集中他に「沖つ浪來寄る白珠」(三三一八)、「沖つ浪來寄る濱邊を」(三二三七)等があるが、明確に人麿以前の用例はない。人麿には猶「夕はふる浪こそ來寄れ」(一三一)、「明け來れば浪こそ來寄れ　夕されば風こそ來寄れ」(一三八)等がある。「枕と纏きて」は私には幾分派手な表現のやうに思はれるが、これは現在と作歌當時との感じ方の差違を考慮すべきであらう。「敷妙の」といふ枕詞が一首の單純化に役立つてゐることも注意すべきであらうが、枕詞を使へなくなつた私達がさういふ效果の代りに何を得てゐるかといふことも考へさせられる。「痩せる君かも」といふやうな「體言十かも」の結句は

み吉野の象山の際(ま)の木末(こぬれ)にはここだも騷ぐ鳥の聲かも(卷六、九二四)

夜くだちに寢覺めて居れば河瀬とめ心もしぬに鳴く千鳥かも（卷十八、四一四六）

等集中に相當用例が多く、後の

遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな（古今集）

いそのかみ古のわさ田をうちかへし恨みかねたる春の暮かな（新古今集）

などとの關聯を思はせるのであるが、夙く人麿に於いて使用されてゐるのである。この技法はなほ

梯立の嶮しき山も我妹子と二人越ゆれば安席かも（仁德紀）

の如きものもあるが、萬葉集中では明確に人麿以前と認むべきものはない。そしてこの人麿の場合を後の作例と比較檢討して見るのも興味あることだと思ふ。なほ、この歌は「沖つ浪寄る荒礒を敷妙の枕と纏きてなれる君かも」として拾遺集に採錄されてゐる。

○　　　　藤森朋夫

素材として扱つた對象が特異なものであるが、これが作者の深い感動によつて生かされてゐる。長歌ならびに反歌にみられる歌情には、底に湛へる抒情の强さを充分に意識されるが、一面實景に對する的確なる把握がなされてゐる點注意すべきである。描寫は簡潔であつて、聲調にも人麿らしい豐かさを覺える。この一首は、長歌に「浪の音の　繁き濱邊を　敷妙の　枕にして　荒床と　より伏す君が」と寫述した情感が、さらに短詩型によつて表されたものである。「沖つ波來よる荒礒」は極めて簡素な寫生であるが、中々に力量あつての上になされたる單純化であつて、音調の齋す諧和も自然である。「敷妙の」は、石原

正明の「年々隨筆」には、枕詞としないで、夜の衣は下に引敷くものである故、「敷たへ」といひ、「敷妙の衣」と續けて意味をもつのであるとし、この場合にはその敷物の上の物卽ち枕に接續したものとあるが、見るべき說である。尙三句以下には沈潛した感情の中に悲劇的な哀憐同情の氣が生動してゐる。

○　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

狹岑島の死人を見ての人麿の長歌は、多少煩瑣に聞える所もあるのであるが、反歌殊にこの一首の方は單純で感じが直接であると思ふ。「敷妙の」は藤森氏は「年々隨筆」を引いて說かれてをるが、私は單純な枕詞であると思ふ。然も餘り意味の方に重きを置かずに受入るべき使用法であると思ふ。人麿の歌としては單純ではあるが、線の軟かい歌で、今月の五首中の二五〇などとは其の行き方が相當に距つて居るとは思ふが、さりとて卷四の相聞歌などほど柔軟でなく、今日の我々にさへ現實的な迫力を以て向つてくるやうに思はれる所がある。死人を詠んだ歌では、卷三（四一五）の聖德太子の御歌「家にあらば妹が手まかむ草枕旅にこやせるこの旅人あはれ」なども感銘の深い作であるが、「奧つ波來寄る荒磯を」とこの歌に歌つて居る所は時代と共に寫生の進んだ迹を見ることが出來るやうに思ふ。或は時代といふものを離れてここまで寫生を進めた人麿個人の意義を汲むことが出來るといふやうに解してもよいであらう。「風速の美保の浦廻（うらみ）の白躑躅見れどもさぶし亡き人思へば」（卷三、四三四）の方は和銅四年で人麿よりは時代は進んで居るのであるが、寫生の力量はひどく萎縮して居る。つまり作者河邊宮人の個人としての意義が稀薄なのである。この一首などは人麿が前後に絕して居る樣子を知るに便利な場合のやうに思はれる。

ひさかたの天行く月を網に刺しわが大王は蓋にせり　（卷二、二四〇）

○　藤森朋夫

人麿の作歌的力量の豊かさを知り得る作品の一である。形式的に製作したとか、理的に手法を凝らしたとか、さまざまの批評が今迄にも下されてゐるやうであるが、著想の珍しく、その表現が雄大であつて、少しも隙間のない點は流石にと思はせる。「天行く月を網に刺し」は、一見理智的にもとれさうな句法であるが、これはよく生かされて、下句の「わが大王は蓋にせり」と重々しく据ゑられたのに呼應し、一首には聲調上に圓滑さを覺えしめられる。これと、他の作「大君は神にしませば天雲の雷のうへに廬せるかも」（二三五）とからは、如何にも同一作者としての構想と驚嘆とが直感される。第三句「網にさし」は問題の多い句である。眞淵は、網は綱の誤字であるとし、その後この說によるものが多いのであるが、古寫本にはかかる文字は一向に見當らない。中島光風氏が嘗てこれが研究を「文學」（一卷六號）に發表したが、それによると誤字說を排し意味は「天行く月を網でさし捕へて」としてゐる。

○　藤田清

この一首は雄大な調であり莊重な感を受ける人麿らしい歌であるといへよう。唯幾分誇張の感があり形式的なところが感じられる。作歌の場所とか人麿の位置—宮廷歌人としての—等を考慮に入れるならば、

矢張そこにかうした感を受ける原因があるのであらうが、むしろ作者と我々との間の時代の差といふものが更に強く働くのではあるまいか。

大君は神にしませば天雲の雷の上に廬せるかも（巻三、二三五）

大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも（巻三、二四一）―二四〇の或本の歌

等とも歌つた作者の共通の感慨がここにもあらはれてゐるのである。吾々はここに古代日本人の眞の姿を見ることが出來るやうに思ふ。なほこの歌は、一二句の强い調子が三句で一旦小休止し、四五句の堂々たる格調を以て一首をつらぬいてゐるのであつて、三句の小休止は一首全體に極めて微妙な働をなすものといへよう。

長歌において狩獵の狀をうたつてきて、ここに突然月を詠じたのは、恐らくは歸路の感などでもあらうか。長歌に比しても反歌は遙かにすぐれてゐる。

○　　　　五味保義

「天ゆく月を綱にさし」は、その着想に漢詩風なところがある。「わが大王は蓋にせり」の方になると、猶更さうした趣が感ぜられる。作者に漢詩漢文よりの暗示がいくばくかあつたと考へてよいかも知れぬ。しかし「天ゆく月」の語や、「綱にさし」と中止法で第三句を靜かに止めて、さて「わが大王」はと詠むあたりの技巧は、短歌獨特なもので心にくい程である。何氣なく詠んでゐて中々氣が利いた所があつて、人麿の本領である莊重とか沈痛とか絢爛とかいふ趣はないが、才氣のはたらいた輕雋な作であると思ふ。

この歌は反歌でその長歌を見ても何か氣分を樂にして作つたやうな所があるが、人麿としてはかういふ歌の出來た時は割合愉快だつたのではあるまいか。

○　藤田清

玉藻刈る敏馬（みぬめ）を過ぎて夏草の野島（ぬじま）の崎に船近づきぬ　一本云、處女を過ぎて夏草の野島が崎にいほりす我は（卷三、二五〇）

羇旅の歌八首それぞれに優れてゐるのであるが、この一首は特に輕快新鮮な感がある。この歌においては「玉藻刈る」「夏草の」の二句は枕詞ではあらうが、鑑賞する際にはむしろ實質的な意味を以て働いて來る様に思ふ。然し實景として強く意識する時には、また一種重苦しさが伴ふやうである。

この一聯に於いて地名が極めて巧に詠みこまれてゐることは驚くべきものであるが、特にこの一首に於いては二つの地名が二つの枕言葉と相俟つて極めて輕快なひびきをあたへてゐる。「一本云」の歌は、卷十五（三六〇六）の歌の第一句を缺いてゐるものであるが、これを比較して考へるとき「いほりす我は」といつて今宵の宿をはつきり指示してゐるのは、到底「船近づきぬ」と結んだ餘韻のある趣には及ぶべくもない。二五三、二五四、二五五などと共に一聯中の傑作であり、集中の羇旅の歌の中にあつても異色のある作と思ふ。

○　五味保義

かういふ單純な手法、土屋氏の所謂「記述的」（名歌評釋）な表現であつて、一讀愛好の情を忘れ得ないといふのは、どういふ所にその因由が有るのか不思議な位に思ふ。人麿の作品は息長く、結句に到つてなほ切斷し閉止することのないのを特徴とするとは既に云はれた事だが、この歌が「船近づきぬ」といふ結句、特に「ぬ」といふ助動詞を用ゐながら、脈々として餘韻ある氣息を感ずるのは味つてみるべき所と思ふ。この歌を一讀する時私の腦裏には直ちにその情景と雰圍氣が明瞭に浮び來り、淡如たる哀韻をその聲調より感得するのである。敏馬でも野島崎でも實によく生きて居り、よくおちついてゐる。「敏馬を過ぎて」の「過ぎて」や、結句の「近づきぬ」といふ動作は、平常にして他奇なき類のもので、それがかういふ味ひと氣韻を生ぜしむるのは、單に高手といつてすまされない、人麿その人の人柄のゆたかさを想はしめるのである。「野島之埼」を「ヌジマガサキ」と訓む說もある。「ヌジマノサキ」の方がよいと思ふ。

○　　土屋文明

この歌の意味は、敏馬を過ぎ野島の崎に船が近づいたといふだけで、極めて單純なのである。それを、二つの枕詞を用ゐて餘白を多く取り、意味で表す所よりも寧ろ聲調で表す情意的のものに力を入れて居るのである。枕詞は、人麿の時代でも、最早實質的の意味よりも、單なる聲調的のものとして用ゐられたのではないかと思ふが、この歌などもさう取りたいと思ふ。尤も、この問題は個々の場合でその度合が各々異るらしく、一概に人麿の枕詞は實質的であるとか、聲調的であるとかは決めてかかれないのであるが、少くとも聲調的のものにならうとする傾向が強いといふことは言へるのではあるまいか。

古事記の「あをによし　奈良を過ぎ　小楯大和を過ぎ　我が見が欲し國は　葛城高宮　吾家のあたり」や、萬葉卷十三（三二三〇）の「幣帛（みてぐら）を　奈良より出でて　水蓼　穗積に至り　鳥網（となみ）張る　坂手を過ぎ　石走の　甘南備山に　朝宮に　仕へ奉りて」云々等は、同じく行路通過のところを並べて居るのであるが、全體が敍事的といふよりも、作者の態度は素朴傍觀的で、自らの意力の下に自然を統轄制御してゐるといふ點が少いが、人麿の作になると簡素ではあるけれども、素朴といふよりも寧ろ雄勁とでも言ふべきで、對象は全く作者の意力の下に慴伏して居るとでも言ふべきであらう。隨つて、そこに形式的と言へば言へるが、さりとて普通考へるやうに模樣的といふのとも違ふものを感じさせる。これは、この歌一首に限つたことはなく、「稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀ほしき可古の島見ゆ」（卷三、二五三）や、人麿以前では「吾が欲りし野島は見せつ」（卷一、一二）の歌などにも、やや似たものを感ずることが出來るのであるが、これは萬葉時代殊に人麿時代の一つの圓熟した形とでも言ふべきではあるまいか。同じ人麿作でも「淡路の野島の崎の濱風に」（卷三、二五一）などに比すると一層强いものを感ぜしめる。この詠風は人麿以前にも見えること前述の如くであるが、人麿以後になると、黑人赤人其他にやや其おもかげを留めるだけで、次第に姿を沒して居るやうに思はれるが、若しさうとすれば、これは人麿の詠風のうちでも最も特色ある一面といひ得るのではあるまいか。

もののふの八十（やそ）氏河（うぢがは）の網代木（あじろぎ）にいさよふ浪の行方（ゆくへ）知らずも　（卷三、二六四）

○　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

萬葉集に於ける枕詞は、歌そのものに暢達の感を與へてゐること、發生的にも必然性をもつてゐることなど今更云ふ迄もないが、中でもこの歌に於ける「もののふの八十」の如きは悠々として大きく、讀者の感受を妨げる所がない。「もののふの八十氏河」といふのは、集中この外短歌に一首（二七一四）、藤原宮役民の長歌中に一箇所あるのみであるが、八十氏人などの語から宇治河へ省略的に連ねた所は、單なる懸詞の興味などと解すべきではなく、人麿の精神的な工夫と見るべきものかと思ふ。「網代木にいさよふ波」の自然現象の具象的な觀照、適確な表現は、一首の成立の根本的な條件を具備してゐる。此處にそれだけの成功した力點がなければ、頂點的歌句とも云ふべき「行方知らずも」が甘く流れ去るところであつたかも知れないのである。この歌は人麿の人麿らしい、波動的で一貫したものと云へる。尙無常觀說も佛教のそれに强ひて關はらしめないがいいと云ふ說に贊成である。

○　　　　　　　　　　吉田正俊

この歌については、正岡子規は、「四たび歌よみに與ふる書」の中で、「全體の上より見れば上三句は贅物に屬し候。『足引の山鳥の尾の』といふ歌も前置の詞多けれどあれは前置の詞長きため夜の長き樣を感ぜられ候。これは又上三句全く役に立ち不申候」と言ひ、齋藤茂吉氏は「新選秀歌百首」中に「それから、この『もののふのやそうぢ河』といふごとき技法が、どうしても邪魔になるなら、この歌が眞に鑑賞出來

ないといふことになる」と述べられ、二つの見方が存在してゐるといつていいだらう。後者は、所謂短歌聲調に重きをおき、「もののふの八十」といふ序詞の技法にこだはらない態度であつて、この點は、子規の鑑賞に一歩を加へたもので、現在の私どもは專らかういふ批評態度に敎へられ傾きつつあるのである。しかし時あつて未だ正岡子規の贅物といつた感が起きないでもない。勿論、子規は當時短歌の革新乃至啓蒙に急なる餘り、言ふところ稍〻行き過ぎの點もあり、「足引の山鳥の尾の」と比較して論究したあたりは肯けない節がある。卽ち「もののふの八十」は、「足引の山鳥の尾のしだり尾の」の如く下句に續く意味的關係が少いだけそれ丈聲調を主として味はれ、全體として嫌味を感じさせなくなつてゐるのに留意すべきであらう。それにしても、この贅物云々の問題は、今後序詞の技法といふものに益々緣遠くなるに從つて、再び問題になつて來はしまいか。これは、この一首の價値に何等關係するところがないとも言へようし、又かなりの交渉があるとも言へないだらうか。今は疑問のまま保留するより他ない。

○　五味保義

子規が「一氣呵成の調にて少しも野卑なる處無く字句もしまり居り候」といつたのはいかにも要を得たよい批評であると思ふ。但子規が次いで「全體の上より見れば上三句は贅物に屬し候」と云つた點は、詞句の意味內容にややとらはれて居るやうに思はれる。この考へもしかし「この『もののふのやそうぢ河』といふごとき技法が、どうしても邪魔になるなら、この歌が鑑賞出來ないといふことになる。」（新選秀歌百首）といふやうな言葉によつて暗示され敎へられた結果によるのかも知れない。「行方知らずも」は一首全

體の姿態を端正にしてゐる。餘りに端麗な調べであるために、讀者としては何等か意味上の補足をここに求め勝になる。佛教の無常觀云々もその邊より發するのかも知れない。ただしづかに味へば、作者卽物の咏嘆は句々に浸透してゐて、氣韻生動の趣を感得出來得るのである。この結句は「大伴の三津の濱べを打ちさらし寄り來る波の行方知らずも」（一一五一）の外には、同じ人麿の「皇子の宮人行方知らずも」（一六七）があるのみである。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

「網代木にいさよふ波」は、この一首の核心を成す寫實句であるが、子規はこの「網代木に」の句までをもふくめて「上三句は贅物に屬し候」「上三句全く役に立ち不申候」と言つてゐるのだから、現在の私たちとしては先づ子規の理解の程度を問題とすべきである。子規は後に「人々に答ふ」の中で再びこの歌を論じてゐるが、其處では「此歌の如き調に倣ひたるは後世にありては戀歌に最も多し」と言つて「ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな」他二首の序歌を擧げ、また「宇治川網代木其物を現はさんとの意にはあらで單に下二句の感慨を引き出すための道具に過ぎざれば」とも言つて居るから、子規は上三句を序と考へてゐたらしいが、「網代木に」までを序とすることは全然意味を成さず、率直に言つて子規のこの歌に對する理解は無茶苦茶だと言はなければならぬ。且又、當時の子規は未だ俳句の如き實質的な歌を理想に描いてゐたのであらうから、「山鳥の尾のしだりをの」の歌との比較の如きもこの角度から見るべきであつて、「もののふの」の意味內容にすら拘はりを感ぜざるを得ない氣持とは、

贅物といふ評語は同一であつても實はかなりの相違があると思ふ。

この「もののふの八十氏河」といふ技法は、序と言つていいか枕詞と言つていいか、一種特殊なものであるが、普通の二句三句に亘る序に比べると、一首の中心への關聯が遙かに稀薄なものであることは確かであると思ふ。その意味内容の一首に於ける效果が、人麿當時どの程度のものであつたかといふ問題は、今日最早解決困難であらう。後に家持が「もののふの八十をとめらが汲みまがふ寺井の上の堅香子(かたかご)の花」(四一四三)と言つて、「をとめ」の修飾句に使用してゐるのを見ると、少くとも家持時代には餘程非實質的なものであつたやうにも思はれるが、また家持が「もののふ」と「をとめ」との意味的對立に一種の興味を持つて使用したものかも知れぬ。現在の感じとしては、この人麿作に於ける「もののふの八十」の意味内容は、一首の主要感情に別段妨害を與へて居ないやうに思ふが如何であらうか。

○　　吉田正俊

大君の遠(とほ)の朝廷(みかど)と在り通ふ島門(しまと)を見れば神代し念ほゆ　(卷三、三〇四)

この歌は例の人麿の堂々たる格調の歌であるが、やや私には全體としてマンネリズムにおちいつてゐるやうに思はれる。作者の心持より形が先きに來るのである。これは或ひは、餘りに整然とせる格調と、古人の太々しき神經に壓倒せられた、現代の私などの一種の動搖心理狀態からの反撥の故かも知れぬが、さうばかりも言へない所があるやうにも思へる。ただ「遠の朝廷と在り通ふ」邊の表現技巧は學ぶべきもの

を持つてゐるやうである。

○

鹿兒島壽藏

この歌を味はふには、その時代の諸事情を前提として一應受け容れるのが至當のやうに思ふ。理論的には、現代に於てもかやうな場合なしとしないかも知れないが、最早事情も條件も「大君の遠の朝廷と在り通ふ」といつた具合にはいくまい。つまり我々の現在の創作心理から云へば、例へば「もののふの八十氏河の」の歌の如く、讀者と作者と對象の世界とが直ちに一緒になり得ないものが感じられる。さういふやうに、この歌には味讀の心理過程に條件が附くのではないかと云ふのである。それ故ものさびた感懷を感ずるし、この歌の素因へ同情を以て寄りゆく見方も生ずる。又さうすると、「在り通ふ島門を見れば」でも「神代し念ほゆ」でも、人麿といふ大きな作者の心持が理解出來るやうに思はれるし、この歌の對象の世界にも條件を少くして入つてゆけるやうである。一通りの受け容れ方、或は率讀の儘でも感銘深い歌であるが、やはり、この蒼古、純心さは易々として讀過してはならぬやうに感ずる。

（昭和十一年六月）

二十四　人麿の歌五首

ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らに戀ひわたるかも　（卷二、二〇〇）

鹿兒島壽藏

〇

集中に於ける最大量の長歌の反歌として、この歌は、我々が滿足讃嘆するだけの、長歌の壓力を受ける力があるかどうかは問題だが、繰返して讀んでみると、さう氣にする所もなく、相當に認むべき歌のやうに思ふ。この歌は事項的には應詔の歌かと思ふが、味つてゐると自發的の感動の分子が多いやうに思ふ。つまり、題材の關係上、自己中心の感動とはなり得ない點もあるが、それよりも作者の精神の活動してゐることを見逭す譯にいかぬ。

「ひさかたの天知らす」といふのは何も人麿に限らぬ云はば形式的な表現だが、それから連續する「知らしぬる君ゆゑに」によつて、畏みながらも他人事でないといふ或る親しみを感じた人麿の抒情的な氣息が窺はれて、成功してゐると思ふのである。「君ゆゑに」といふのが一層それを感じさせる。此處を假に

「大君を」などとしたら如何にその氣持が薄れたことか。「日月も知らに戀ひわたるかも」は一面形式的にも考へられないではないが、此處では餘り個人的な感情句を出さない方がいいかも知れない。これは他の同題材の歌の場合も同じだと思ふ。それを一のタイプだと云へばそれ迄だが、散漫を避けて眞實に集中しようとする、まことを見ることが出來るのではあるまいか。尙同時の作「埴安の池の堤の隱沼（こもりぬ）の行方を知らに舍人は惑（まど）ふ」（二〇一）と比較すると、この歌の方がよいやうに私には思はれる。

○　藤森朋夫

三句までの、「天を知領する君によつて」との意は、即ち神去りましし皇子の天にあるをいふのである。これをうけて「日月も知らず戀ひ渡るかも」は、時間的經過も忘却してひたすらに思慕し奉る、繼續作用がありのままに表明されてゐる。天と日月との歌語の間には、緣語的關聯を技巧的に持たしめてゐるやうに見る說もあるが、そこまで特に意識して究めようとするのはどうであらう。一首の調べは圓滑で、形も整齊されてゐるが、人麿の作としては比較的に潤ひが乏しいやうにも感ぜられる。もつともこれは、前の構想雄大な長歌に於ける敍事的抒情的表現に壓せられるやうな氣持の後に、想起する感じかも知れない。むしろ「短歌二首」とある後の「埴安の池の」（二〇一）の歌の方が、序詞などを使用はしてをつても、自然の攝取と心情の表出とが自然に行はれてゐて、私はすぐれてゐると思ふ。

○　五味保義

一讀平坦な感じのする歌で、所謂人麿流のうねりは非常に乏しい。殊にこの歌は反歌で、その長歌は長大な布置結構より成るものである關係上、獨立した一首としての力が乏しいやうに思はれ、從つて次の一首「はにやすの池の堤の隱沼の行方を知らに舍人は惑ふ」と相待つてやうやく意を完うするものだといふ說（山田博士、講義）さへある位である。山田博士は更に、「天知らしぬる」と「日月も知らに」は「天」と「日月」を取り合せた詞のあやであると云はれた。

これはしかし萬葉集を見渡した上で猶且さう云へるか否か。これはむしろ、すぐれた作家の平常作は時として程度以下に評價され勝な一例になるのではなからうか。もつとも「あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも」（一六九）の如き作のある人麿であるから、この歌も多少形式的な點のあることは認められようが、獨立性の缺如とまでは云へないと思ふ。

「天知らしぬる」は高貴の方の薨去をいふ言葉であるが、用例は有りさうで案外乏しい。家持の「久方の天知らしぬれ」（四七五）、「天知らさむと思はねば」（四七六）等はその稀なる例で、これらは人麿を踏襲したものと思ふ。記紀では神の御名に「天知」等の言葉があつたり、「知（シラス）二天上之事（ヲ）一」の如く領知の意味に用ゐられてゐる。人麿の舊作（持統三年故今の作よりは數年前にあたる）には「天皇（すめろぎ）の　敷きます國と　天の原　岩戸を開き　神上り　上り坐（いま）しぬ」（一六七）とあり、これは日並皇子の薨去を記述したので、記紀祝詞の文脈を思はせつつ、而も人麿の新工夫がうかがはれる。今の歌の「天知らしぬる」は右の長歌の詞句を更に單純化したものとして、これも作者の工夫があり且つ手垢のつかない言葉のやうに思はれる。「天知らしぬる」や「日月も知らに」の用例が少いからと云つて、直ちに全く人麿の新工夫に成るとは云

へないが、かういふ簡單一途にみえる詠風と雖も、人麿の作などになるとその由來する所さして淺いものとは思はれないのである。

○

柴生田　稔

この歌はこれまであまり高く評價されてゐないやうに思ふ。雄渾莊重な長歌に較べて見劣りがするといふ論者も一人二人ではないやうである。然し私は既に久しくこの歌に心を惹かれてゐる。單純一直線に詠み下した聲調から、作者の純粹切實な思慕の情が脈々として傳つて來るのを覺えるのである。同じ反歌の他の一首「埴安の池の堤の隱沼の行方を知らに舍人は惑ふ」(二〇一)や、日並皇子殯宮の時の「ひさかたの天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも」(一六八)、「あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも」(一六九)等の、同性質の作品の何れよりも切迫した感情が流れてをり、又その他の佳作と定評のある手法構想の妙を盡した作品とも別種の、純粹な響を聞くことが出來るやうに思ふ。成程この歌には、他の佳作に見るやうな渾沌とか豪壯とか絢爛とか所謂人麿的な特色は認められず、感情表白の形式も極く平凡普通のもののやうに見えるが、その單純平直の感は卽ち作者の悲哀の純化された所から來てをり、發想の一見常識的な形は、寧ろ效果を意圖する餘裕のないひたすらな氣持に基いてゐるとも言へるのではあるまいか。この氣持のもとに私は、第四句の「不知」は「しらず」よりも「しらに」と訓むのに從ひたく、又「所知流」を「しらしぬる」と訓んだ眞淵に敬服するものである。「君ゆゑに」などの邊りの聲調は實に言ひがたい心の顫動が感ぜられるやうに思ふ。その邊の效果を今「朝霧のおほに相見

し人ゆゑに命死ぬべく戀ひわたるかも」(五九九)などと比較して分析證明することが出來ないのが殘念である。そして層々百數十句の長歌を敍事的に疊み上げた後の人麿の感動が、この歌のやうな端的な表出法を取るに至つたその間の消息にひそかに興味を覺えるのである。

○　　　土屋文明

簡素莊重であり然もよそよそしくなく、感慨が出て居るのは、「君ゆゑに」といふ句に主に關係するのではないかと思はれる。今急いで總索引を見ると「ゆゑに」は卷十一、十二の相聞往來の歌にもつとも用例が多く見られるやうである。やはりこの言葉にはさうした纏綿たる感情が伴ふのではあるまいか。これは用例についてもつとくはしく分類して見ることも出來るであらう。人麿は一面形式的であつたにも拘らず、その形式を空疎なものに終らしめなかつたのは、この歌の例などによつても知り得るであらう。

ささなみの志我津(しがつ)の子らが罷道(まかりち)の川瀬の道は見ればさぶしも　(卷二、二一八)

○　　　五味保義

この一首には現實に卽いた沈痛な響がある。一、二句に序詞的な工夫が加へられてゐるけれども、一首全體に着實な氣持の一貫した感じのいい歌である。「罷道」といふ言葉は集中に例なく、光仁紀の藤原永手を弔ふ詔に見られるのみである。卽ち「美麻之大臣乃罷道母宇之呂輕久心母意太比爾念而平久幸久罷止富

良須倍之」といふ句で、これはあきらかに黄泉に赴く道を云つて居る。それを諸註はみとめ乍ら、人麿の作品の方は葬送の道と解するのだが、一首の解釋は土屋氏の如く「釆女の子が死に行いた川瀨の道」(總釋)と說く方がずつと現實的になつてよい。勿論「罷道」と「川瀨の道」は同格であるが、ここに在る二つの「の」が夫々違つた意義を有つてはたらいて居り、「罷道」の方は、すでに幽冥界に赴いた人の影を腦裡に描いての傷心をあらはし、「川瀨の道」の方は、現在作者の對つてゐる寂しい自然である所など、實に味ひの深い句法である。「子らが」の「が」は、第三句を「罷道の」と訓み、宣長の如く「罷りにし」などとせぬ以上は、所有格の「が」であるが、口語譯に於ては、例へば前掲土屋氏の譯の如く主格の「が」とされてしまふ。一讀してそれで少しも不穩當を感ぜぬのであるが、意譯をすれば當然さうなる所が作者の心中に生動してゐたのであつて、人麿の詞句使用の粗く且新鮮なる所以を想ふことが出來る。因に「川瀨の道」は獨特な句ですぐれた寫生の手腕に成る名句だと思ふ。

○　　　　　　　　土屋文明

「ささなみの志我」は、「津」の序詞といふか枕詞といふか、恰も「もののふ八十」が「氏」に冠せられたのと同じつづき方であらうと思ふのであるが、これは學者の說がどうおちつくか確かなことは吾々には斷言出來ない。「川瀨の道」は、「川を渡つてゆく道」か、「川添ひの道」か、或は川瀨を直ちに道と見て居るのか、罷道の解釋によつて違つて來ると思ふ。私は假に罷道を「黄泉への道」と見、「川瀨の道」を川瀨を直ちに道と見て居るが、多くの說はさうではないやうである。川瀨に添ふ道か、川瀨を横切る道かと

いふやうなことも、勿論作者はさう明確に意識しないで用ゐたのであらうから、今日それをきめるとなれば、說く者の經驗を基礎とする主觀論になつてしまふ。用例によつて確定されるまではいづれでもよいと思ふ。罷道は「黃泉への道」としての用例が一つあげられて居るのであるから、それに從つて解釋するのが穩當のやうに思ふ。しかし作者の感動は死者に、殊にその死に關係の深い川瀨を現前に見て居る所から來るのであるから、實は罷道の解釋はいづれでも、吾々に傳へられる感動はさう變らないと思ふ。その感動は、咏嘆深く單純であり而も現實的である所が、人麿の作中でも特色あるものであらう。

○

鴨山の磐根し纏（ま）ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ（卷二、二二三）

鹿兒島壽藏

「鴨山の磐根し纏ける」は、齋藤茂吉氏が云はれたやうに、寫實的な表現ではなく、「死に臨みし時、自ら傷みて」の心中なのであらう。又、同氏が急性の病氣であつたらうとされてゐるのも領かれる。土屋文明氏は「意識の確としてゐるところはそんな事情であつたかも知れぬ」と云はれてゐる。私はこの歌の「磐根し纏ける」のあたりを十分に理解し得ないままに心ひかれてゐたのであるが、「鴨山考」を讀むに至つて、わかつて來たやうである。今、想像してみると、急病で生死の境に直面したら、大體の意識は確りしてゐても、もう自分は死んでゐるのだと思ふ事があるに違ひないのである。俗に云ふ死にかかつてゐる狀態で、人麿のやうな氣持（齋藤氏の解釋の如く）は起り得ると思ふ。さう考へれば、この歌の「磐根

し纏ける」を全く死んでゐなければならぬことと解するのや、此處では病臥してゐる意味にとることなどは、少しく理にこだはつてゐると云へるのであらう。

○

藤森朋夫

かつては狭岑島の石中の死人に憐愍の情をそそいだ人麿も、ここには自らが石見の國にあつて、ひとりはかない死に臨んでの感慨を披瀝してゐる。齋藤先生はこの歌については「これは透明に流露してしまつてゐる。これも或る意味での全力的である。人麿の歌としては寧ろ巧でない、素人的なにほひのあるほどの歌である」云々と批評されてゐる。尚「柿本人麿」によると、この時の作者の年齢は、大體四十六七歳と推測されるやうである。この感慨には、一種の沈潜した落著きがみられるやうであるが、これはその年齢に伴ふ心境から自ら齎されるものであらうか。一首は直截にうたつてあるが、よく味つてみると、この靜肅にも似たるものの中から、却つて心熱の强さが滲み出て來るやうに思へる。内に深くこめるといつたものは、すぐれた他の作などに比照すれば、確かにもの足りない點も出て來るが、それはそれとして、二三句に於けるあるがままの切實感には、彼獨自の緊張味が現され、四五句にも、どうにもならぬ寧ろあらめに似た心の裡にも、尙愛する者への純情が率直に表白されてゐる。四句の舊訓は「しらずといもが」で、これを宣長が「しらにといもが」と試訓したがこの方がはるかによい。「講義」によると、この「に」は古代の連用形と認められるものであつて、中止的述法をなし、下にいふべきことを省略した形で、含蓄があるのである。この四句も、「知らにと妹が」の方が、調子もいいし、右のやうな意味も感ぜられて工

合がよい。

○　藤田清

この歌、鴨山の所在については、現在齋藤先生の新説をめぐつて諸説のあるところであり、人麿臨終の作として著聞せるものである。「岩根をまく」といふことは集中にも例がある。三句までの一氣に詠み下した強い調が、四句の屈折した句法によつてやはらげられ、五句の落付いた調となつてあらはれた點は極めて自然である。特に三句には「我をかも」と思はず發した嘆きの聲が已自らを強く意識してゐるが、それが四五句に至つて、自らにしてその時遠くはなれてゐる妹の上に思ひ及ぶとき、靜かな感情の中に深い哀をたたへてゐる。恐らく作者はこの時すでに萬事を諦觀しつつ死期を待つてゐたものと思ふ。人麿の年は判らないけれどもこの歌の感などすでに老境に達した感の作ではあるまいか。

○　柴生田稔

既に藤森氏が引かれてゐるが「柿本人麿」の「これは透明に流露してしまつてゐる」云々（一七五頁）といふ言葉は味ふべきものだと思ふ。この「透明」と「渾沌」との關係は種々の重要な問題を含んでゐて、輕々に論じがたいことであるが、それは兎に角として齋藤氏の言はれるこの歌に於ける「透明」は、やはり病による精神狀態の變化といふことを考慮すべきであらうか。かういふ内容の歌としては今少し煩悶執着の痕を止めてゐさうなものだとも一應考へられるが、恐らく病苦との爭鬪に疲れ切つた人麿の神經は既

に雜多感情の介入を許さず、半ば世を隔てた如き意識のうちに遠き妻の面影を髣髴してゐるのであらう。そして「吾をかも知らにと妹が」邊りの聲調には切々の響きがあり、「鴨山の磐根し纏ける」「妹が待ちつつあらむ」などの單純化には、さすがに凡ならざる作歌力量がうかがはれるのである。この單純化の消息は「高山の磐根し枕きて死なましものを」（八六）や「思ひ佗ぶらむ妹が悲しさ」（三七二七）などを想起すればおのづから明かであらう。「死に臨みし時自ら傷みて作れる歌」が卽ち家に待つ妻を對象としてゐる點も、人間的で好い感じが持てるのである。

○

矢釣山木立も見えず落り亂る雪に驪うつ朝樂しも　（卷二、二六二）

藤森朋夫

人麿が新田部皇子に獻じた歌の反歌である。矢釣山は、大和高市郡飛鳥村大字八釣の山であつて、皇子の宮殿はおそらくこの山の麓にあつたものであらう。昨年はからずも若葉の頃と紅葉の頃とをこの地に遊び、ひそかにこの歌を聯想したのであつた。確かのことはわからないが、八釣山として敎へられた山は、際立つてさう高いといふ感じもないが、樹がよく茂つて割合に目に立つ形をしてをり、雪に色どられたこのあたりを想像して感深いものがあつた。少しく餘計のことを書いたが、さて三句以下について見る。この歌句は從來も問題となつてゐる所謂難訓難解の句である。一々の試訓についてはこれを省き、今は年表にある「落り亂る雪驪なる朝樂しも」によつて試評する。一二句は極めて單純な表現であるが、やはり自

然に對する寫象を經ての上になつた句であり生きてゐる。冬の朝の雪景に接して、心から樂しんでゐる氣持が、素直にあらはされてゐる。「矢釣山」といふ固有名詞も自然に詠みこまれて、初二句には快い聲調が感得される。前の長歌に比べると、實景を生かして把握してをり、それに現實感が伴つてゐるので、この方がすぐれてゐる。新訓の「落り亂る雪に驪うつ朝樂しも」の「雪に驪うつ」にもなかなか滋味があつて心を惹かれる。この方は動的であつて淸爽たる朝の雪に驪のすがたさへ髣髴せしめられる。

○　　　　　　藤田　淸

この歌は、第四句の驪の訓に就いて古來から種々の說があるので、これを決定してかからねばこの眞髓に觸れるわけにはゆかぬ。然しさう早急に決定出來るものとは思はれないから、一應「雪はだらなる」と讀んでおくことにする。なほ「はだら」若くは「はだれ」の集中の用例には、「雪はだらなる」の如き用例はないが、卷十には「庭も薄太良爾み雪降りたり」(二三一八)とあるのは參考になる。

この一首は新田部皇子に獻れる歌の反歌であるが、長歌の方には「雪じもの往きかよひつついや常世まで」とはつきり獻る歌としての氣持があらはれてゐるのに對し、短歌の方にはひたすらに雪を詠じて、第五句「朝樂しも」の一句には如何にも朗かで單純な上代人の心持を感じる。なほ第一句がすつかり地名で助詞を省き、二句三句も一氣に强く詠み下して來てゐるところなど如何にも人麿の詠風である。然し「雪はだらなる」の訓には何か落付かぬ氣持がするやうである。或は更に他に訓を考ふべきであらうか。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

この歌の第四句は難訓とされてゐる。それは兎に角として、この一首の感じは清明爽快で氣持がよい。「矢釣山木立も見えず落り亂る雪」は表現としては左程特色のあるものではないが、坦々たるうちに古樸な味も含まつてゐる。結句の「朝樂しも」は、人麿としては珍しく喜悅の情を舒したものと云へよう。此の點に人麿的なものが或は薄いのかとも思へるが、遽には云ひ切り難い。

第四句は「雪に驪うつ」にしても「雪驪なる」にしてもまだ安心し切れない氣もするが、讀んで受ける一首全體の感じは、兩方とも其程の相違はなく、大體前言の如くであつて、私としては好きな歌である。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　五味保義

近江のうみ夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬに古へ思ほゆ　（卷三、二六六）

一首に流動するものが何となく若々しく、姿態が端麗で心を惹かれる作品である。形式的にまとまつたやうに見えて居て、詞句の連續の工合に中々こまかい且澁い味ひがあり、それが何でもなささうでゐて粘りがある。すでに云はれたやうに戀愛の氣持に通ずるものが漂ひ、恰も赤人の出來のいい作品に見られるやうな、清楚纖細な抒情的作品である。然し「ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く」（九二五）と比してすぐわかるやうに、赤人の方がずつと柄が小さくなつてゐる。これは一方に「い

にしへ思ほゆ」があり、一方は「千鳥しば鳴く」以外なにも云つてゐないといふ、世にありふれた主觀的と客觀的、抒情的と敍事的等の比較をするつもりではない。「いにしへ思ほゆ」のやはらかさと彈力性はこの句が主觀句故に出て來たとのみいへない、つまり作歌の根本に赤人よりゆたかなものが藏されてゐることを云ひたいのである。「汝が鳴けば」の用例は集中に幾つかあるが皆人麿より後のもののみである。「心もしぬに」もいくつかある。その半が家持の作品にみられ、外は湯原王、市原王及び卷十一、十三の歌の中にあることも興味がある。さうした人々に好まれたといふのが、この句の持味を暗示してゐよう。「夜くだちに寢覺めて居れば河瀨尋め心もしぬに鳴く千鳥かも」（四一四六）、「夜くだちて鳴く河千鳥うべしこそ昔の人もしぬび來にけれ」（四一四七）、家持のこれらの作は人麿の「夕浪千鳥」と血脈的相關あるものと云つてよくはあるまいか。人麿の作品が「夕浪千鳥」とか「汝が鳴けば」とか「心もしぬに」とか、主情的な詞句が多くして、然も甘美にすぎてしまはぬ點は、かうして家持の作品と對比してみると一層あきらかになるやうである。

○　　　　柴生田　稔

思ひ切つて感情の高揚に任せたともいふべき趣の歌で、「夕浪千鳥」といひ「汝が鳴けば」といひ「心もしぬに」といひ、私たちにはその一つでも容易に使ひこなせさうにはない、派手な甘美な光澤のある表現である。「夕浪千鳥」を、人麿の造語として稱歎する評家が相當多いやうであるが、かういふ技巧は實は歌としてはかなり危險であつて、まづくすると友禪模樣のやうな美しさに終つてしまふところである。さ

ういふ句々を情の趣くままに遲疑なく驅使して、然もなほ「切實」「沈痛」のひびきを保持してゐる處に、私たちは最大の關心を持つべきではあるまいか。

〇　　　　土屋文明

「近江の海夕浪千鳥」は、「近江の海の」といふ意味か、「近江の海に」といふ意味か、或は單に「近江の海」と呼びかけて居るのか、穿鑿するとはつきりしない云ひ方であるが、初句にてにをはを略する格は非常に例が多い。作者の氣持では勿論さうした穿鑿にまで及んでゐないのであらうが、現在吾々がこの格を踏襲することになれば、作者の氣持には既にその分化が出來てゐるのであるから、何か助詞のあるべきのを省略することになるので、萬葉の助詞をはじめから要しない格とは幾分ちがつて來るのではないかと思ふ。やさしいやうに見えて萬葉調をそのまま用ゐるのは中々問題が含まれて居る。とにかくこの歌は初二句共名詞句を並列して調子をとり、更にその調子を「汝が鳴けば」と滯りなく持つていつて居るので、その爲に音調がきはめてなだらかになつて居る。この歌に對する評價の相違は、そのなだらかさに對する評價の相違に由來して居るやうに思ふ。卽ちなだらかすぎると思ふ人はこの歌に不滿を感じ、然らざる人はそのなだらかさから纏綿たる情趣を汲み取らうとするのであらう。「いにしへ思ほゆ」といふのは、巻一の近江の荒都を過ぎての作と同じ心持で、近江朝廷の古が思はれるといふのであらう。四五句に就いては何人も餘り不滿を感じないのではあるまいか。

○

吉田正俊

この歌のやうな作風は人麿以前に於ては勿論、人麿の作品中に於ても珍しいと言つていいだらう。その感情表現の纖細さは前評者達も既に言及して居るが、言はば短歌の表現技巧ならびに短歌的感情の一完成に到達し、やがて一つの類型に陷らむとする一歩手前に止まつた頂點とも言へよう。流石に人麿の個性はその危さを救つて、讀者を一種の恍惚的雰圍氣に誘ひ、その詩的精神に同化せしめる力を持つて居るが、此處から幾多の危險が生れて來る素因を含んで居るといふ見方も或は成り立ちはしないか。現在の吾々は時あつてかういふ詩的雰圍氣に言ひ知れない魅惑を感じ、叉時あつて一種の警戒心を覺える心持がある。今この歌から學ぶべき點は、その完成された表現の結果ではなくして、それに至る詩的精神の高騰的狀態を採つて以つて現代にどう適應せしむるかといふ點にあるのではないか。かういふ考へは、實は一つの作品に對する正しい素直な鑑賞方法でないかも知れず、更に言へば横道に外れた態度とも思はれるのであるが、記して再考の時を得たいと思ふ。

（昭和十一年七月）

二十五　人麿の歌五首

石見のや高角山（たかつぬやま）の木の間より我が振る袖を妹見つらむか　（卷二、一三二）

○

土屋文明

この歌は異傳のあること或本の歌として擧げられた如くであるが、本文の歌が最も簡素單純で、恐らくは此が人麿の作つた原形であらうと推測される。訓にも說があるが、舊本の訓が一番素直でよいのではないかと思ふ。竝べられた反歌「小竹の葉はみ山もさやに」などに比較しても、更に簡素なところがある。或は餘り簡素に過ぎて、素つ氣なさ過ぎると思はれる時もあるのであるが、それだけにこの一首からは褪色して行くやうなものを感ずることが少い。「み山もさやにみだれども」（訓は何れにても）などは巧であるだけに、此方の心構に依つてはその巧みさが褪せて見えることもあるのであるが、さういふところはこの一首にはない。短歌の到りつくべき頂點と言ふものは、多數で、樣々で、それを一二に要約してしまふ必要はないのであるが、この一首などもさういふ頂點の一つであると言ふことだけは言へるであらう。

○　吉田正俊

「石見のや高角山」の「や」は語勢を强める詞であるが、現在の我々の語感から云ふとやや氣になるやうである。「千葉の葛野を見れば」のやうに行きたい氣がするが、これは一首全體の結構や調子から考へるとこの場合案外むづかしい問題にならう。「木の間より我が振る袖」は作者自身の動作を述べてゐるから、「紫野ゆき標野ゆき……君が袖振る」などと比較すれば、强ひて言へば嫌味を感ずるやうでもあるが、古人の純粹な感情の高昂はさういふ餘地を與へない。この點は現代の我々の製作の時に、問題にもなり參考にもなると思ふ。

○　藤田清

「木の間より」の解釋は「木の間より妹見つらむか」の意味にとつておく。反歌としては長歌の最後の二句「妹が門見む　靡けこの山」などの激しさに對して一種物足りなさがありはしないか。次の反歌に比してもその感がある。四五句の解釋としては、土屋先生の萬葉集總釋に於けるものが理解の行屆いた說と思ふ。「恐らく高角山の木の間で振る袖は角の里からは見えぬ位置であらう。疑ひながら激情を吐露して居るのである」。然し「木の間で振る袖」は語法上如何であらう。先生も口譯では「木の間から私の振る袖を妻は見たであらうか」とあり、どちらにでもとれぬことはない。四、五句には激しい感動があらはれてゐる。

「木の間より」を直ちに「わが振る袖」につづけて解する說と、「妹見つらむか」につづけて考へる說とが從來あつた。即ち前者は近頃の註釋者が從ひ、後者は江戸時代の諸註の主なるものが殆ど從つたものであつた。契沖がこの後說を樹てた因由を憶測するに、長歌の方に「いや遠に里は放りぬ　いや高に山も越え來ぬ」とあつて、作者人麿はすでに山には居ないので、從つて「木の間より袖振る」如きことは事實上存在せぬと考へたのかとも思ふ。しかしもしさうならば、長歌と反歌の關係を誤解し餘り窮屈に考へすぎたのであると思ふ。更にいへば此一首の感銘も、人麿が「木の間より袖を振る」のでなくては、ずつと落ちて來るのである。藤田氏のやうに解すると角の里は高角山に在るといふことになりはせぬか。それでは少し困るであらう。さて三四句にあらはれた人麿の動作咏嘆は、きはめて微妙な單純化に到つて居るのであり、殊に「より」といふ助詞の幅のある活用など滋味がある。むしろ明るくうるほひのある一首でありながら、切實な所があつてよい。自然草木の中に交りつつ寂寥の心を遣る作者の姿が見えるやうである。

初句の「石見のや」と間投助詞の「や」を用ひたのは、珍しい句法ではないが、「あふみのや毛名の若子」(紀)、「あふみのや矢橋の小竹」(一三五〇)、「湊のや葦が中なる」(三四四五)の如きとは違つて、石見といふ地名を咏ずる上の氣持が十分に到つて居たことがうかがはれる。

島の宮勾(まがり)の池の放ち鳥人目に戀ひて池に潜(かづ)かず　(卷二、一七〇)

○　藤森朋夫

これは持統三年、草壁皇子が薨ぜられた時、人麿の作つた歌、長歌一首、短歌二首の次に、「或本の歌一首」として掲げられてゐる。この題詞については先學の間に異說あり、「考」には、「是はかならず右の反哥にはあらず、次の哥どもの中に入しものなるを、此所亂れてここに在也」云々とあり、「皇子尊の宮の舍人等、慟傷して作れる歌二十三首」中の一首が此處に紛れこんだものと認め、更に「檜嬬手」は、これに準據して次の題詞をさへこの歌の前に移動して、歌數も二十四首と書き改めてゐる。しかしこれらの說は、俄かに從ふことは出來ない。今暫くはこのままにして判斷するより他はない。思ふにこの歌も、一本には、人麿の作として、草壁皇子の薨去を哀傷しまつつた挽歌として擧げたものと想像されよう。

「人目に戀ひて池に潛かず」は、一首に於ける感慨の焦點である。水鳥の動作の異態を眺め、これを寫實的に把捉してゐる部分で、作者の主的感情が集注せられてをり、其の句法は極めて自然に製作せられてゐる。「柿本人麿」によると、作者の年齡は約二十七歲位と推量され、年次を明確に記錄した作品として最初のものである。既に土屋氏の批評にも「大河は既に大河の相を具へて居るが如くに、調子に鷹揚のところがあつて、小休止さへない一直線の句法もゆくゆくと進んで居る相である」(名歌評釋)と指摘されてある通りで、些の滯るところなく自然に流動する聲律が感得される。「島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君坐さずとも」(一七二)は舍人等の慟傷歌の一首であるが、この作と素材も殆ど同じであり、歌情も亦類似してゐる。しかるに吾々がこの二首から感受するものは如何なるものであらうか。特に兩者の下句

に於いて、その抒情的差異が認められる。一七二にあつては、禁止法を用ゐて、切實感を强調すべく自然物に呼びかけてゐる。ところが、それは幾分理智的になされてゐるので、挽歌的氣寡がよく浸潤して來ない。一首として單獨に味ふよりも、二首を對照比較させて翫賞すると、どうもかかる感が生じて來るやうである。「柿本人麿」にも、この點については「この二十三首から一つ氣附くものがある。それは全體としての聲調に、人麿の沈痛に不足するところがないだらうかといふことである。いろいろ骨折つて歌つてゐるが、力が滲徹しなかつたといふところがある。若し人麿が入つて居るとせば幾らか力を拔き、調子をおろしたといふ點がないだらうか」と微妙所にいたる觀察をされてをり、尙又土屋氏も「『人目に戀ひて池に潜かず』と極めて印象の明かなる具體化を行つてゐるのと、『荒びな行きそ君坐さずとも』と寧ろ概念的に言つて居るのとは、比較して始めて氣のつくことではあるが、その差は甚だ大きいのではあるまいか」(名歌評釋)と明確な評言を提示されてゐるが、吾々がこの歌を味ふ場合大いに啓發されるのである。

更に附言するならば、上句には、「島の宮」「勾の池」「放ち鳥」とたたみかける名詞の布置も、一向に不自然でなく、これらの素材は調べにのりながら素直に接續されて、下句へと押流して行く氣息は注意すべきであらう。物の見方、扱ひ方が的確順直で、そこに釀し出される哀愁が感じられて、私にはすきな歌である。

○　　　　　　　　　　　　　　　藤田　淸

すぐ後に出て來る皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首中にも同じ情景が詠まれてゐる。古義では、その爲

位置を改めて、二十三首中の「島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君まさずとも」(一七二) の次に或本歌一首として移し載せてある。然し題材が關聯してゐる以上その表現が似て來ることは或程度までは止むを得ない。一概に人麿の作にあらずとも云へまい。ただ一六七の長歌に對する反歌としては前の二首に比して適應しないやうである。若しこれを人麿作と考へるにしても、一六七の長歌とは別にして考へた方が樂に了解出來ると思ふ。

一七〇の歌に比して一七二の歌は極めて率直明快である。然し云はむとする所がややあらはである。一七〇の歌も四句の如き危い云ひ様ではあるが、五句の寫實と相俟つてしつかり坐つてゐて、同事實を詠んだ舍人等の作中に置いてみても異色のある歌品である。放ち鳥に關しては代匠記の「もとより翅など切て放置せ給へる水鳥なり」といふ說に從ひたい。

○　　　　　　　　　　土屋文明

第四句の「人目に戀ひて」が問題を含むのではないかと思ふ。擬人であり、感情投入であるが、見方によつては此句は安易とも思はれ、輕いとも言はれるかも知れない。一二三句と讀み下して來た勢は人麿獨得の力を持つて居るが、四五句になるとその調子が幾分小刻みになつて居るのではあるまいか。例へば、「磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや」の如き句に比較すると、以上のやうなことが言へるのではないかと思ふ。然し人麿當時の物の感じ方からすれば、かういふ擬人は吾々が考へるのとは餘程違つて居たと言ふことも肯へる。然し吾々は吾々の現在の心持で解釋するより外結局解釋法がないのであるから、さうい

ふ斟酌は第二にしてもよいのであらう。

○　　　　　　　　　　柴生田稔

人麿作中、「或本」から採られたものは概して見劣がするやうである。「或本」にのみ見出される「家に來て吾屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕」(二一六)なども人麿としてはやや低調のやうに思はれる。然しこの「島の宮」の歌は、右の「家に來て」と同じく「或本」にのみ傳へられたものながら、十分に人麿の特色を具へたものと思ふ。これは藤森氏の引用されたやうに、同じ時の舍人等の類似の歌(一七二)と比較すれば、非常に明瞭になつて來るのであつて、今更人麿作か舍人作かの詮議などは論外である。眼前池上に游弋する水禽等に對して、直ちに「人目に戀ひて池に潛かず」と斷定したところは、「志賀の大わた淀むとも昔の人に亦も逢はめやも」(三一)などの場合と同じやうな、自然に加へられた藝術の壓力をうかがふことが出來る。これは一般擬人的な表現技法とはその動機を異にするものではあるまいか。勿論土屋氏の言はれたやうな、より眞率湛然たる作品との比較考察はまた別種の問題である。「人目に戀ひて」といふ句は集中この一例のみであつて、他の「人目」を用ゐた「人目を多み」(二〇七)、「人目を繁み」(五九七)、「人目人言こちたみ」(七四八)、「人目難(かた)みすな」(二七六七)、「人目守る」(三一二二)、「人目乏しみと」(四一五四)等の場合に比べて、趣を異にしてゐるやうに思へる。「講義」のやうに「人に見られむことを戀ひて」と解釋して了ふのは如何であらうか。ここはやはり、面影を戀ふ、姿を戀ふなどの場合と同じく、文字通り直接に、人の目を戀ふと取れないものであらうか。「君が目の戀しきからに泊てて居て斯くや戀

ひむも君が目を欲り」（齊明紀）、「君が目に戀ひや明さむ長きこの夜を」（三二四八）、其他「母が目見ずて」（八八七）、「妹が目離れて」（三七三一）等とも關聯させても少し考へて見たいのである。

○

妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや　（卷二、二二一）

鹿兒島壽藏

この人麿の歌は集中旅人の死を題材として取扱つた歌どもと同じやうに、その死人の妻を想起して一首の氣持を成就してゐる。死人を見てその近親者に心を向けてゐることは、現代の生活樣式と作歌意識とを以つてすれば、やや戲曲化に近く、わざとらしさや氣取りといつたやうな批評眼で見られるのかも知れない。然し古代の旅行の事情では人情の必至といふべき事柄であつただらう。長歌の方を讀んでこの歌に接するとすれば、第一句に「妻もあらば」などと云つてゐるのが突然のやうな氣がしないが、直に我々の作歌に資するとすれば、非常に困難な問題がそのへんにあるのではないかと思ふ。前にも云つたやうに、時代の事情を認識した上でこの一首全體を味ふと、情緒的で悲哀を湛へてをり、それが過度の感傷とならず、親しく接し得られるのがよいと思ふ。又、他の旅人の死を詠んだ歌に比べて特色とするのは、時過ぎたうはぎを捉へ得て風土的環境をも示した力量にあらう。

○

藤森朋夫

第二句「採みてたげまし」の「たぐ」は諸説あるが、古義説の通り飲食する意味の古語と見做すのが妥當のやうである。二三の例をあげると、

斑鳩（いかるが）の富の井の水生かなくに多義（たげ）てましもの富の井の水（上宮聖徳法皇帝説）

神の御酒を多義（たげ）と言ひけばかもよ我が醉ひにけむ（常陸風土記）

岩の上（へ）に小猿米燒く米だにも多礙（たげ）て通らせ山羊（かましし）の老翁（をぢ）（皇極紀）

の如くである。

この歌、第二句までで一段をなしてをり、海濱にはかなく横はる行旅者の屍に對し、作者は直ちにその妻を想起して、ひたすらな同情を注いでゐる。「うはぎ」といふやうな春の嫩葉を素材として、すでにその摘みとるべき時季の推移したのを凝視し、そこに一種の嘆きをこめて現實的哀傷感を訴へてゐる。この「うはぎ」の取材は一首にある軟かみを持たしめ、三句以下の純粹な寫象にあつて效果的である。集中にはこの植物を詠み込んだものとては、この他に僅か一首卷十に、「春日野に煙立つ見ゆをとめ等（ら）し春野のうはぎ採（つ）みて煮らしも」（一八七九）が見られるのみである。

○　　五味保義

既に云はれたやうに、この一首が有間皇子の作（一四二）、聖徳太子の御作（四一五）に示唆された所があつたかも知れないが、その流動の趣には特殊な平明さと哀調がある。それは作者が比較的易々とした氣持で作したためとも思はれる。たとへばこの一首を長歌から獨立させてみるとはじめて、意味の上で長歌に

依寄するところの多いのを知るのである。この邊は現在の連作の呼吸などと似てゐる。易々としてたのしんで作したといふのは氣持の上の事で、把握の力や表現の深さはそのために衰へてゐないのは云ふ迄もない。例へば結句の用例をみても、

梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや（卷五、八一七）
泊瀨女の作るゆふばなみ吉野の瀧の水沫に咲きにけらずや（卷六、九一二）
此花のひとよの中は百草の言もちかねて折らえけらずや（卷八、一四五七）

等と對照すると、人麿の作には香氣があり生き生きしくゆらぐ心持が感ぜられると思ふ。其外「さくら花つぎて咲くべくなりにてあらずや」（八二九）、「吾は死ぬべくなりにたらずや」（四〇八〇）の如きになれば愈々「理」の臭味があつて不可である。

この一首の何處にか存在する氣品を尊重する。しかしそれも井上博士之を云はれ、山田博士之に贊せられた「その死人を假に餓死したるものと斷定し、その傍によめ菜の多く生ひて盛過ぎたるを見て若し妻を具したらば、此よめ菜をつみて食はすべく、さらば餓死にも及ばじをといへるなり」の如く解しては氣品がなくなつてしまふ。やはり眞淵の「此臥て有あたりにうはぎ多く生て時過ゆけどつみて得さする人なしと、そこに有物をもていへるに、所のさまさへ思ひとられてあはれなり」位がいい。これはかなり製作時の實際に迫つた批評と思ふ。

○　　柴生田　稔

五味氏の言はれたやうに、この歌は前の長歌への依存關係が甚だ密接であつて、現代の製作に比較して餘程一首一首の濃度が濃厚に感ぜられる人麿にも、なほかういふ連作意識が働いてゐるのである。この傾向は、注意すると他の長歌と反歌との間にも種々の程度に存在してゐるやうであつて、連作一般の問題とも關聯させて、この角度から人麿乃至萬葉集の作品の種々の場合を考察して見ることも有意義ではないかと思つてゐる。

「家にあらば妹が手纏かむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ」(四一五)に比較すると、神經が餘程こまかく特殊的に働いてゐるのが觀取される。そして「家にあらば」の古樸眞率とは又別種の洗練された技法と感情とを味ふことが出來る。「過ぎにけらずや」には強い悲しみの咏歎が籠つてゐて、「うはぎの時過ぎたことを云つて居るが、其の背景には勿論死人を悲しむ心があるのである」(土屋氏、總釋)といふ解説にもうなづくことが出來、更に「野の上のうはぎ」を序として「過ぎにけらずや」を死者のことを言つたものだとする説の發生動機にも同情されるのである(解釋としては勿論從へないが)。一二句は「たげまし」を「新考」のやうに「食ハセマシなり……又食ふことをもタグといふ」と解釋出來れば普通の言ひ方になるが、「たぐ」に右のやうに「食ふ」「食はす」の兩義を認め得るものであらうか。やはり「たぐ」は「食ふ」だけの意味として「採みて食はまし」と解すべきではあるまいか。さうすればこの「妻もあらば採みてたげまし」といふ表現法も注目に價するもののやうに思ふ。

天(あま)ざかる夷(ひな)の長道(ながち)ゆ戀ひ來れば明石の門(と)より大和島見ゆ　一本云、家門のあたり見ゆ　(卷三、二五五)

○　藤田清

これは筑紫の方から大和へ向つて來る時の作と見るのが自然なやうである。古義の說の如く大和から下つてゆく時の歌ととるのは無理である。この歌は人麿の作品として常に思ひ出す作の一つである。極めて明快にして然も作者の喜がそのままに感じられる。ただ全體として極めて單純であるため幾分形式的な感がする。これが卷十五（三六〇八）に別の傳來を以て採錄せられた所以であらう。歌としてはこの方がよい。

この歌も枕詞が實質的な意味を以て感ぜられる。この枕詞の場合などは枕詞自身が實質的な感がする語である上に、この歌には特にその感が强く働く樣である。

○　柴生田稔

卷三の「柿本朝臣人麻呂羇旅歌八首」中の一首であるが、この一團の作品は一體どのやうに製作され、どのやうに傳來したものであらうか。卷一卷二の人麿作とどのやうな關係にあるのであらうか。これは今日解明し難いことながら、この一團の作品の鑑賞に相當關係して來る問題だと思ふが、然し今は只この一首を抽出して鑑賞するのである。この歌はやや整ひすぎたやうな感じはあつても、やはり人麿特有の强い調子が響いてゐて輕快に滑らない處があるやうである。「戀ひ來れば」の主觀句によつて一首を統率した點をも注意すべきであらうか。この表現は「戀ひ渡る」「戀ひ居る」「戀ひ暮す」また「戀ひ亂る」「戀ひ侘ぶ」等の複合とは又別種の效果を示してゐるやうに思はれる。

吾妹子に吾が戀ひ行けばともしくも並びをるかも妹と背の山（巻七、一二一〇）

吾が舟の梶はな引きそ大和より戀ひ來し心いまだ飽かなくに（巻七、一二二一）

の特に後者などは相似た氣持であらうが他には類例を見ない。

天の川川門に居りて年月を戀ひ來し君に今夜會へるかも（巻十、二〇四九）

の「戀ひ來し」は時間的に用ゐられてゐて、用例の多い「戀ひ渡る」「戀ひ居る」の範疇である。

○　　　　土屋文明

これも一本云の「家門のあたり見ゆ」は細かい説明になりすぎていけないのであらう。「明石の門より大和島見ゆ」は實際の景色で、生駒あたりが見えるのであらう。私は今年の春、明石から岩屋へ往復したが、六甲あたりまでしか見えなかつた。しかし晴れた時には、大和の方がよく見えるとのことである。又さういふ事實問題の穿鑿は置いても、大和の方を差して漕ぎ來る舟中の人が、何所にもあれ見えるところを、直ちに「大和島見ゆ」と歌ひ上げても一向差支へないことである。この歌は内容調子ともに明快な歌であるが、前の「高角山の」などに比べると何處か雰圍氣が淺いやうに感ぜられる。

み熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へど直に逢はぬかも（巻四、四九六）

○　　　　藤森朋夫

「み熊野の浦の濱木綿」は、「百重なす」にかかる序詞である。濱木綿の葉が幾重にもかさなつてゐる自然の姿態を想起して接續させた工夫がみられるのであるが、この序が單純であり淸楚であつて、しかも融合が緊密に行はれてゐる。「心は念へど直に逢はぬかも」は、何等特異のものではなく、寧ろ一般的な戀情を表示したもので、從つて民謠的色調が濃く認知される。それ故誦するにまことに調べよく、滑らかさを覺えしめられる。この歌の類歌としては、卷十一の「安太人の魚梁うち渡す瀨をはやみ心は念へど直に逢はぬかも」（二六九九）が擧げられる。下句は全く同じであるが、序詞の趣は異つてゐる。後者はやはり吉野河畔の魚梁の實景を寫生し以て序詞となしたのであるが、前者に對比するとその聲調に圓滑味が不足するやうである。人麿の作には既に自らにして具現される快律が生動し感知される。しかも結句を八音止めにしてある點なども、何かゆとりを見せて民謠風の歌としての自然の落着きを充足せしめてゐるやうである。

○　　　　鹿兒島壽藏

この歌の「み熊野の浦の濱木綿百重なす」は後代に影響を與へたものであり、一見して集中にも幾つかの類句があるのではないかとさへ思はしめる調子のよさがあるが、他にはない歌句である。此歌や同列の「古にありけむ人も」などの歌が、戀愛の一般的感情を出でぬといふことに就いては私にも異論がない。又、民謠的な要素を含んでゐることも否定出來ないやうに思はれる。然しこの歌が人麿作であるか何うかは別として、決して無感動概念的な歌ではないやうに思ふ。序詞の調子のよさも何だか汚れぬ美しさで、

一首が單純に構成されてゐる。この歌には個人的の感情がないけれども、人間感情の普遍性の味へる、いい聲調のある歌だと思ふ。さういふ風に味はつていいのではあるまいか。

○　　吉田正俊

「み熊野の浦の濱木綿百重なす」といふ序は、我々はかうした技巧から最早可成の距離を感ずるのであり、これを現在に應用して生かす爲には別の方法を考慮する必要があるのではないかと思ふ。それから、「心は念へど」といふ句は、集中その例があるかどうか。實にうまい表現句で、古人の言語に對する感覺乃至嗜好の鋭さにおどろくばかりである。しかし一首としては個性の旺溢した作とは思はれず、その點かやや物足らない思ひがする。

○　　五味保義

古樸に思はれやすい、重々しい所がなくもないが、一體に流暢で、句法の魅力の方を多く感じ勝な歌である。讀者の心に喰ひ入るやうな所も、永く餘韻をのこすといふ所も少い。比較的清潔で整つてゐる。

安太人(あだびと)の魚梁(やな)うち渡す瀨を早み心は念へど直に逢はぬかも（卷十一、二六九九）

吾が戀は夜ひるわかず百重成す心し念へばいとも術なし（卷十二、二九〇二）

の如きと本歌とはどういふ關係にあるものであらうか。第四句の「心は念へど」には屈折があつて、そこに面白味があり、相聞歌としての味ひも出て來ると思ふが、これはすでに古くから用例があつて、古事記

に「ちはや人　宇治の渡に　渡瀬に　立てる　梓弓檀(まゆみ)　い伐らむと　心は思へど　い取らむと　心は思へど」とある。集中では

　恨みむと思ひて背なはありしかば外のみぞ見し心は念へど（巻十一、二五二二）
　百津島(ももつしま)足柄小船歩行(あるき)多み目こそ離(か)るらめ心は念へど（巻十四、三三六七）

の如きより

　鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉おちて浮べる心吾が念はなくに（巻四、七一一）
　安積香山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわが念はなくに（巻十六、三八〇七）
　あからひく膚もふれずて寢たれども心をけにはわが念はなくに（巻十一、二三九九）

のやうに變化し複雜化してゐる。そして殆ど相聞の歌に用ひられてゐる所を見ると、餘程この句法に魅力があつたものと思はれるが、吾々にはすでにわざとらしい感じになつて居るのではあるまいか。

（昭和十一年八月）

二十六　人麿の歌五首

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ　（卷一、三〇）

○

五味保義

此歌は「過近江荒都時作歌」の長歌の反歌第一首である。「辛崎幸くあれど」は以前から同音の繰返しで、作者が意識して調子を整へたやうにも云はれて居るが、事實はそれ程の考へがあつたものかどうか。卷九に「白崎は幸く在り待て」(一六六八)、又卷十三に「志賀の辛崎幸くあらば」(三二四〇) といふのがあつて、これと同巧であるけれども、さういふ用例の存在によつて人麿がここをなだらかにしようとしたと斷定するわけには行かないやうに思ふ。然し結果としては餘り流暢に行過ぎない程度の快適の調があると思ふ。「船待ちかねつ」は船を待ち得ないといふ意味であつて、その調べの平坦ゆゑに看過され易い傾きはあるけれども、案外一首として特殊な味ひを持つて居るのではないかと思ふ。從來もすぐれた作品として擧げられて居るが、接するに從つて艶のあせることなどの聊かもない立派な作品であると思ふ。よく萬

葉集の擬人法の歌の例として擧げられるのであるが、さういふ點を取上げて特に人麿の力量を云々されたのは、既に古く伊藤左千夫の萬葉集新釋に論じて居られる。さうして擬人法でありながら、全く理智を離れて、現在の光景が全く感慨の主因となり、技巧の上にも表現の上にも遺憾なく成功せる二首であると、さう批評されながら、最後には「然しながら斯くの如く極端な巧者な作法はその弊を釀し易く、人麿其の人の如きも、此の上手な手際が災して、其の作風に幾分の匠氣を脱し得ざりしことを注意して置かねばならぬ」と云はれた。これは長歌の方の批評に引かれた附言であると思はれ、この二首だけとしてはさうした匠氣を感ずるところの殆どない歌と私は思ふ。

○　　　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

この時の反歌二首は、どこから言つても人麿の人麿らしい作歌であつて、堂々たる歌調をなして居る。「志賀の辛崎」を眼前にしながら、そこに「大宮人の船待ち兼ねつ」と云ふ如き心底から出づる詠嘆は心に沁みるものがある。然もそれが一種摑へられないやうな大きな氣持さへ含まれて居る。ただこの二首等の歌に一讀して明快に來ない模糊たるところのあるのは、人麿の特色の一面に違ひないが、この歌に於ける「幸くあれど」「船待ちかねつ」といつたやうな言ひ方は今、五味氏が左千夫の萬葉集新釋を擧げられたやうな點でやはり考へさせられるのである。自分の好みで言へば次の「大わだ淀むとも」の歌の方が好きである。

○　竹尾忠吉

五味氏が「辛崎幸くあれど」のところで「幸く」が調子を合せて居ると云ふ說を反駁してゐるのに同感である。これは人麿の辛崎に對する感慨から自然に流露した調子であつて、調子の爲に人麿が持ち出した言葉と解釋するのは、歌の調子に對する考へ方の根本に何か相違があるやうに思はれる。

○　土屋文明

擬人の點が問題になる歌であるが、かういふ自然の見方はその時代の風であつて、これを以つて一個人たる作者の功罪を論ずることは出來まい。然しながらかういふ點を以つてすれば、吾々が人麿と時代を隔てて居ると感ずるのは、これ又止むを得ぬことであらう。ただこの歌でも人麿の歌調と言ふものは、さういふ時代の考へ方と云ふものをある點までは超絕してゐる所がある。それが抒情詩たる短歌の意味のある所で、單にこの歌のとつて居るやうな擬人的自然の見方を思想の一片として見るとしたら、それは唯幼稚素樸といふことで蔽ひつくされて了ふのでないかと思ふ。

山川もよりて仕ふる神ながらたぎつ河内（かふち）に船出するかも　（卷一、三九）

○　吉田正俊

例によつて人麿は短歌の調子と云ふものを體得して居るから、吾々は一讀してその聲調に心を惹かれるのであるが、今かりに内容と調子といふものを二樣から觀察すると、何と言つても、この歌の内容は形式的と言つていいであらう。かういふところも、吾々作歌者にとつて常に心にかかる疑點であり、かういふ場合これ以上の、言はば作者の個性といふものを無理に出さうとすれば、或は嫌味に陷ることを十分に知りながらも、何か不足感を同時に覺えるのである。以上のやうな不足感を覺える一方、かういふ何等奇を衒はぬ心情を、短歌なればこそその聲調によつて文學化することが出來、そこに魅力を覺えることを否むことも出來ないのは、極く客觀的に考へれば、私の短歌觀が、すでに一種のマンネリズムに陷つて居るやうな氣もするのである。この矛盾をどういふ風に調節して行くか、更にかういふ矛盾を感ずる心そのものが、間違ひであるかどうか、この歌を機緣として示教を得たいと思ふ。

○

佐藤佐太郎

吉田氏の出題は、吾々が古歌に對する時屢々逢着する問題であるが、吾々の短歌に對する態度と言ふものは一元的であり直接であつて、力倆のある鑑賞者はそこを大體無理なく處理して行くものと思ふ。この一首は、聲調が緊張して居り、作者の感慨が透徹して居て、人麿の人麿たる一面を遺憾なく現して居る歌である。「神ながらたぎつ河内に」といふところは「大君」といふのが省略された手法と思ふが、これは人麿の「妹が結びし紐ふき返す」の歌などもやはりこの省略の手法であり、人麿は意識して效果をねらつて居ると見るべきではないが、後世の僕等が見れば、何とも言ひ難い素樸で、然も重厚な氣息を感ずる。

第二句を「まつれる」と讀み、結句を「船出せすかも」といふ訓もあるが、それでは調子がやや穏かになり過ぎるやうに思ふ。

○　　　　五味保義

佐藤氏が、前評者の出題を古歌に對する時云々と云はれたが、これは古歌に限らないことは勿論であらう。寧ろ現在吾々が製作に從ふ場合に、常に生起する問題で、その製作或は批評が卽ちこの問題の解決になつて居る場合が多いのであると思ふ。然し今のやうに問題として取上げられることは決して無駄なことではないと思ふのである。例へば萬葉集の歌を鑑賞する場合に、私などはこの歌の如きを先づ勝れた作品として受け入れて了つて居る。さういふことは往々にして自力に非ずして、先進に依つて教へられたところに不識の間に賴つて居ることに依る傾向も多いのだと思ふ。これだけ言つたのでははつきりしないと思ふが、故中村憲吉氏などが言はれて居たやうに、萬葉集に接したはじめ、卷一、卷二などよりは、卷十、卷十一などの方にずつと多くの魅力を感じて居つたといふやうなことは、輕々に看過出來ないところと思はれる。私は現在この歌の評價に於て、寧ろ形式的とする方に引かれるのであるが、今はそれを肯定してゆきたいのである。

○　　　　柴生田稔

「奉流」をツカフルと訓むかマツレルと訓むかは、もつと他の用例によつて客觀的に定むべき問題である

と思ふが、今はこれに觸れず、ただこの「よりて仕ふる」といふ句の下句への連續關係に就いて一言したい。「古義」では、これを「神長柄の句へ直に續て意得べからず、第四句へつづけて聞べし」と言ひ「歌ノ意は、一二四三五と句を序でて意得べし」と說いて居り、山田孝雄氏の「講義」も同說であるが、いくら歌調の爲だからと言つて、かういふ語の倒置が語法上許されるものだらうか、甚だ疑はしい。これは旣に佐伯梅友氏が、昭和十年九月の短歌研究に於いて詳細に論ぜられた通りである。(「萬葉語研究」收錄)それで、これは佐伯氏も考慮されたことであるが、やはり「よりて仕ふる」は「神ながら」の「神」に續く連體修飾語であると解釋するのが、もつとも合理的で歌調も自然になると思ふ。卽ち、はやく眞淵が「山川のもろ神だちも仕奉る大御神におはしまして、唯今船出し給ふを見奉るが貴きと申す也」と言ひ、近時では、澤瀉久孝氏が、「山川の神もあひよりてお仕へ申す現つ神としてこの瀧の川内に舟出を遊ばすことである」(新釋)とされた解釋に從ふのである。佐伯氏の難點とするやうに、「神ながら」は熟して一つの副詞のやうに用ゐられ、集中他の用例に於いて、これに連體修飾語がついた場合は見出せないが、もともと「神」＋「ながら」の形なのであるから、その「神」に修飾語がついても差支ないわけではあるまいか。それに、「神ながら」を歌語に用ゐたのは人麿が最初だとも考へられ、その人麿の用例でもこの場合はもつとも初期のものと考へられる點に於いて、この「神ながら」は現在私たちの感ずるやうには熟語化しない、「神」＋「ながら」の感じの濃いものではなかつたらうかと思はれるのである。佐伯氏に比べると亂暴のやうだが、一先づ右の如く記し、この方向に向つてもつと研究して見たいと思ふ。武田祐吉氏の「新解」にも「奉れる神ながらと、連體法で續くところである」とあるが、これは「山の神も川の神も、慕ひ寄つて獻上物

をする、その神意のままに、大宮人も、激流の河中に船出をすることである」といふ解釋になるのであつて、これには從ひがたい。

○　竹尾忠吉

釵著（くしろつ）く手節（たふし）の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ　（卷一、四一）

この歌を內容的に見ると「大宮人」や「玉藻」などといふ言葉は使はれて居ても、時代的の距離をあまり感じさせないのは、如何にも現實的に取扱はれて居るからであると思はれる。材料が材料であるから、人麿の何時もの剛快な響きは求められないけれども、明快にして澁滯のない一首の調子は、現代の私にも身近い感じがするのである。この歌を人麿の代表的諸作に比べてその同列に持つて行くことは出來ないかも知れないが、この歌から受取られる現實的內容の取扱ひ方が、何か吾々が對照に對する心の向け方に脈がつながつて居るやうに感じられる。

○　佐藤佐太郎

前評の「明快にして澁滯のない」といふ點は同感を以つて言ひたい所である。此處に並んで居る三首中最も簡潔、平淡な歌である。さういふ意味からは吾々に身近いといふ感じもするのであるが、やや內容の稀薄な感じもあり、前の「山川も」の歌で吉田氏が不足感云々と言つた事が、寧ろこの歌などについて言

ひ得るのではなからうかと言ふ氣もする。これは一聯三首を通觀した上の要求であり、三首の中ではこの歌がやや劣つて居るやうに思ふ。

○　鹿兒島壽藏

兩者の批評に僅かの相違があるやうであるが、私にとつてはどちらにも肯ける所がある。結論を先に言つて了へば、內容から言つて不足感を感ずるといふ說に贊成である。然しながら又飜つて考へると「大宮人の玉藻刈るらむ」などは、現在の吾々から見れば形式的で古いやうな感じが起るのであるが、作者の境地に立つて見れば、十分な情緖も感じて居ただらうと思ふ。なほ「今日もかも」と何でもなく言つて居るやうに見えるが、これも作者にとつては、情緖を釀成したのではなかつたらうか。つまりよく見て居ると言ふことは言へるのではあるまいか。要するに歌は平凡であるが、格調には捨て難い所が感じられる。

日並（ひなめし）の皇子（みこ）の尊の馬竝（な）めて御獵立たしし時は來向ふ　（卷一、四九）

○　土屋文明

安騎の大野に輕皇子に從つた時の歌の反歌であり、この反歌の中には「ひむがしの野にかぎろひの立つ見えて」（四八）の如き名歌を持つて居るのであるが、私はその中でもこの一首が、深く感ずる作だと思つて居る。「皇子の尊の馬竝めて」といふ言ひ方は如何にも眼に見えるが如くであつて、此句で見ると或は

人麿は日竝皇子の御獵にも從つて、眼のあたりに御獵のさまを見て居つたのではないかと思はせられる程である。勿論「馬竝めて」といふ句は他にも例があつて、比較研究などをすれば却つて句の據つて來るところが分らなくなつて了ふか知れないが、この歌の中にかう生々としてゐるところを見ると、前言の如くに感じられるのである。時といふことについて、一年の中のその時期といふ說と、一日の中のその時間といふのと兩說があつたやうに思ふが、「時は來向ふ」といふ勢からすれば、私はこれは言ふまでもなく一年の中のその時期といふことを意味するものだと思ふ。一見事實の報告のやうに見えるのであるが、全體の歌調の上に作者の主觀は溢れる程盛り上げられて居ることは直ぐに感受されるであらう。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　吉田正俊

人麿の調子は、大體に於て屈折があり、ゆらぎがあり、そこから釀し出す抒情味は讀者の心に訴へずに置かないものがあるのであるが、この一首はさういふ屈折のところがなくて、一直線に一首を構成して居る。見樣によつては何だかぶつきらぼうのやうに考へられるが、どこか切々たる哀韻が流れて居るところは情滿ちて隱るるとでも言はうか。かういふ表現は求めて達せられないものと思ふけれども、一つの新しい行き方を暗示する心情であり、表現であり、發達せしむべき一つの途であらう。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　五味保義

前評にすでに精しい如く、此歌の聲調は味ふべきものを多々持つて居ると思ふ。特に全體が引きしまつ

て直線的であり極めて端正である點などは、私は以前から好きでならなかつた所である。その引締つた所の形の中に、のびのびとした迫力が包藏せられてゐる點などは特に見落す事が出來ない。太虚集の終りの方の作品、滿洲の歌、諏訪湖の歌、燕嶽の歌、あたりに見られる調子には、此歌などの聲調を目指したとも思はれる節がある。卽ちこの一首の心氣高く目指す風格が太虚集の作者に與へたところがあるやうに思はれる。然し人麿の聲調に在るのびのびした迫力乃至新鮮な生活力といふものは、十分に學び得たとは言はれまい。特に結句の「時は來向ふ」の「は」が「來向ふ」と柔かに融合して強く響いて居る所は、現代の吾々が容易に及び難い氣息である。

この一首の含まれる一聯最初の「阿騎の野に宿る旅人打ちなびき寐(い)も寢(ぬ)らめやも古へ思ふに」（四六）の「旅人」は、輕皇子及びその供奉の人を指すのは勿論であるが、人麿自身もその「旅人」の中に入つて居るのであり、この四五句のひびきには、他人のことを言つたやうで實は人麿個人の感慨が新鮮に出て居る。この氣持は四首全體に通じて居るものであるが、この歌の「皇子の尊の馬竝めて」といふ現實的表現に特に著しく現れて居る。從つて土屋氏の此句に對する批評に私は肯くことが出來る。

ともしびの明石大門(おほと)に入らむ日や榜(こ)ぎ別れなむ家のあたり見ず　（卷三、二五四）

○　佐藤佐太郎

これは羇旅歌八首中の一首であり、この一群の歌は佳作が多くどれも人麿一流の格調を有してゐるが、

この一首でも矢張さうである。「ともしびの」は明石の枕詞である。「ともしびの明石大門」といふ表現は意味合ひを離れて、一種不可思議な音象徴を成就して居る。それから「入らむ日や」の「や」は「別れなむ」に照應した句法であるけれども、此の「や」で小休止があり、ここに嘆きの停滯があつて、又四句で休止があつて結句を強く据ゑたあたりは、堂々と押切つた大歌人の力量と云ふことが出來る。調子が重厚切實で人麿の感慨がさながら聲調に同化して居ると思はれる程である。「入らむ日や」について從來の註釋書は「榜ぎ入る日には」といふやうに解釋して居るが、私は現在船が明石大門に向つて近づきつつある時の感慨として受取りたいやうに思ふ。つまり「入る今日よ」といふところである。私の解釋は「や」をば感嘆詞として受取るので、四五句が意味上倒句の形式になつてをり、三句で休止する句法として受取るのである。かう解釋して「明石大門に入らむ日」の「入らむ」といふ表現がはじめて強く生きるであらうと思ふ。

○　鹿兒島壽藏

「明石大門に入らむ日や」のこの「入らむ日や」について、太陽をさしたものとする新説があるやうであるが、現代の吾々から言へばかやうに感ずることに依つて新しい刺戟を受けるし、內容的に何となく滿足を感ずるのであるが、人麿の意圖は果してさういふやうにとつていいであらうか。古代の舟航と云ふやうなことを顧慮するとしないとにかかはらず、日數がかかるといふことは當然であるから、「こぎ別れなむ家のあたり見ず」と感慨を述べてゐるのが、私にも佐藤氏の言つたやうな時日の意味にとれるやうであ

る。結局は舊い說より出ないわけであるが、此方が私には自然に響いてこの一首のすぐれて居る感を新にするのである。

○　　　　　　　　　　　　五味保義

「入らむ日」の意味は私はやはり前二評者の如くにとつて居る。然しこの第三句及び四五句には意味の上でやや茫漠とした所があると思ふ。即ち「明石大門に入らむ日や漕ぎわかれなむ家のあたり見ず」といふ情景はかなり大柄な所を摑へて居るのであるのに、「入らむ日や」にしても、「漕ぎ別れなむ」或は「家のあたり見ず」にしても、その一々は豊かな細かい心のゆらぎが感ぜられるのである。その二つの間の關係が明快に私の腦裏に映じて來ないからであると思ふ。上の句には前途の遙かなるを思ひ、日々に過ぎゆく旅程の寂寥感があるのであり、四五句は大和の島山の見えなくなるのを惜しむ切實な感じであり、そして全體が大きく幅があつて、その咏嘆の響きに底がないやうな寂しさがあつて、大變すぐれた歌だとおもふ。佐藤氏の言はれた音象徵といふことは、この一首を誦する時にかなりよく生きて來る。つまりさういふ態度で味はないと意味の上で躓き勝ちな點があると思ふ。然し佐藤氏の「入らむ日や」の解釋は少し細か過ぎるやうに私には思はれる。

（昭和十一年九月）

二十七　人麿の歌五首

○

阿騎の野に宿る旅人うち靡き寐も寢らめやも古おもふに　（卷一、四六）

藤森朋夫

これは輕皇子が、亡父日並皇子の生前狩獵をされた阿騎の野に深い追慕の念をよせて、供奉のものと共に野宿をされた時、人麿が製作した短歌四首中の第一首である。「打ち靡き」の「打ち」は接頭語で、「靡き」は、草木の風に靡く姿態から聯想した言葉とみられ、手足をさしのべて安らかに臥すのをいふのであらう。「寐も寢らめやも」の「寐」は、寢るの名詞であり、「寢」はその動詞であり、此の兩者の間に助詞を挿入して續けた形であつて、當時に行はれた。他に「ねをなく」なども、それと同一形態の言葉である。「寐を寢る」の意味は、今日普通に云ふ「寢る」と同じである。第五句「古思ふに」は、倒置句であつて、安眠出來ない理由を、深い感動をもつて表白してゐる。阿騎の野の自然に對して、現實的に窮迫する感慨を表現するに當つても、反語を用ゐ、さらに倒置法を採擇して工夫を施してゐる。しかもその形式はあま

り目立つこと無く、極めて自然に行はれて、この場合の感傷を現すのに効果的な「も」「やも」「に」などの助詞の驅使がある柔か味をもつてなされてゐる。

「宿る旅人」とか、「古思ふに」とかの句には、その表現に一見焦點を究極まで結晶せしめず、おほらかに纏めてゐる處があるやうにも感ぜられるが、然しよく味つてみると、このおほらかな把握の中にも、この歌としての獨白の響が感得出來る。從來も問題とされた處であるが、矢張「やどる旅人」には論議が多い。左千夫はこれを餘所餘所しい言方とし、この一首の如きは全體が輪廓的になりすぎてゐると見做し、又あるものは、一種の歌人としての誇張であるとまで評言してゐるやうであるが、其ほどまでに、此を缺點として非難すべきではないであらう。

○　　　　　鹿兒島壽藏

「阿騎の野に宿る旅人うち靡き寐も寢らめやも」は、實に詩の精神の律動の波が押し寄せて來る思ひがする。「宿る旅人うち靡き」といつて客觀してゐるのがその表面だが、みづからを含めた全體的の感情をかく迄に渾然と握つてゐるのは感歎していい。人麿の全力的といふのは此邊にも云へるのであらう。又、「古思ふに」と引締つた聲調の中には、さながら大樂器の低音部をふるはせるやうなところもある。以上やや派手な言葉を用ゐたが、何といつても此の如きクラシックは尊敬すべきものであると思ふ。

○　　　　　柴生田稔

藤森氏が、「打ち靡き」は「手足をさしのべて安らかに臥すのをいふのであらう」と云はれたが、このやうに「打ち靡き」に心のやすらかな狀態を含めたものとして解釋するのは、契沖の「打解けてもえ寢させ給はずとなり」以來の通說のやうであるが、これは、井上通泰氏の新考に「ウチナビキは横になることにて寢る事の形容なり」、武田祐吉氏の新解、總釋等に「横臥して眠る有様を打ち靡くと形容したのである」とあるやうに、ただ身體の狀態だけをさすので、安らかにとか、打解けてとかいふ氣持までは含まれて居ないのであらう。「心ゆも思はぬ間に打ち靡き臥しぬれ」(七九四)、「打ち靡き一人や寢らむ吾を待ちかねて」(三五六二)、その他の用例は、あきらかに人麿以前と認められるものはないものの、「安らかに」「打ち解けて」等の意を含めて解すべきものは一つもない。契沖以來の說は、恐らくこの「打ち靡き寐も寢らめやも」の歌全體の感じから主觀的に補足して出來たものと思ふが、この歌の歌調としても「打ち靡き」に(美夫君志のやうに蹶轉反側の意があるとするのは行き過ぎであるとして)「打ち解けて」云々の感じまでこめない所に、「寐も寢らめやも」といふ感動がつよく生きて來るのではないか。これは「打ち靡き」の他の用例に於ける上下の句との關係からも歸納して考へられることのやうに思ふ。

○　　　　五味保義

「宿る旅人」は、やはり從駕の人々、或はその中に輕皇子をいれて解すべきものと思ふ。長歌の方に、「阿騎の大野に　旗薄　しのを押しなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて」とあるのからこの歌に連續する勢を見ると、人麿の氣持の中に自分以外の人々の心持といふものを詠嘆してゐる部分がかなりあつたやう

に思はれる。しかしこの歌は一首の聲調の上から、さうした他人の心持の方よりも、人麿個人の詠嘆にうつりゆいてそれが「宿る旅人」の中に響いてゐるやうに考へられる。少くともさういふ見方をする餘地がかなりあるのではないかと思ふ。左千夫の新釋には、「長歌の餘勢で出來た凡歌であり、打靡きは言ひ過ぎであり、又宿る旅人は餘所餘所しく響く」と批評されてゐるが、以上の缺點のために「作者の同情的感情の表現がさまたげられてゐる」とある言葉が私には興味があるのであつて、評者はそこに、人麿が全然自身以外の詠嘆によつて歌をなした如く見られた爲に、さういふ批評も出たのではないかと思ふ。新釋で長歌の餘勢といふことをいはれたのはむしろ注目すべき點であつて、この長歌及び反歌四首には、連作的な傾向が否定出來ないのであるから、作者人麿の氣持が、長歌の方から反歌に移り行くに從つて、個人的な感慨が濃くなつて行つたと考へていいのではないかと思ふ。

青駒（あをごま）の足掻（あがき）を速（はや）み雲居にぞ妹があたりを過ぎて來にける　一云、あたりは隱り來にける（卷二、一三六）

○　山口茂吉

この歌は、順直に句を重ね來つて滯るところがなく、分かりいい歌であるが、それでゐて輕く上滑りがしてゐないのは、妻に別れて來た深い悲しみを内に潜めて、極めて眞率な態度を以て強い感動を歌ひあげてゐるためであらう。

洗練された句を連ね、人麿一流の重厚な調べを以てして、單純化が行き屆いてゐるので、戀愛情調の歌

のやうなところがなく、況して現代の人々の作るやうな獨りよがりの戀愛歌などとは全く趣を異にしたものである。强ひてこれに近いものを求めるならば、「夕ぐれの三日月のうみ雲しづみ胸しづまりぬ妹に逢ひし夜は」とか、「黒姫は越の戀しき鯖石のわが思ふ人の郷の上の山」などの左千夫先生晩年の作を擧げ得る位のものではあるまいか。

それからこの歌は、一般的すぎるとか、形式的になつてゐるとかいふやうな批評もないではないが、これは「青駒」とか、「雲居にぞ」などといふやうな句から受ける先入主により支配されるためで、「青駒」は大體「黑毛の駒」といふので具象的になつてくるし、「雲居」は普通は、雲の居るところ、空、遠く又は高くへだたつた所など云ふのであるから、この歌では、遠く別れて來てしまつたことを言つてゐるので說明がつくのであるが、これは遠く隔つたといふばかりでなく、實際に「雲の居るところ」を黑駒で通過してゐるときに歌つたものと、考へると一層具象的になつて來るやうに思ふ。

○　　鹿兒島壽藏

「萬葉集の鑑賞及び其批評」によると、第一句の「青駒の」は、「青駒の」ではいけない。「青駒が」と高く揚るべきである、前の歌（一三三）の第一句は「笹の葉」であつて「笹が葉」であつてはならぬ、皆聲調の上に係つてゐるのであつて、斯樣な問題によつて歌の調子を解するのは有益であるとある。これに就いて前から氣に懸つてゐたが、赤彥先生が、「が」を以て高く揚るといふ聲調のことを說かれると、成程と感歎したのであつた。しかし、何ういふものか、「妹が」の「が」と突き合ふやうな感じがして落着け

ないのであつた。これは今もさういふ感じがしてゐる。「笹の葉」の場合とは同じに論じられないのではないかと思ふ。この歌は人麿の傑作中に數へらるべきだと私も思ふが、內容表現共に完成の極にあり、何れからいつても近づき難い氣がする。「笹の葉」の歌はこの歌よりも數等いいと思ふが、そんなに近づきにくい氣はしない。これに就いてはなほ考へてみたく思つてゐる。

○　藤田清

この歌の傑作であることには異論はないが、形式的であるといふ見方にも、注意すべきものがありはしないか。「青駒の」或は「雲居にぞ」などの詞にも、具象性が無いとは云へぬが、兎に角やはり何處か形式的に感ぜられるものがある。餘りに整つてゐるといふことの持つ不安さを感じさせられるやうに思ふ。尙、「青駒が」とよむべきであると斷定することは、困難ではあるまいか。强ひてさうよまなくても、全體を流れる氣持には十分高揚した氣持が出てゐるのであるから、寧ろそれまでに力をいれる必要はないやうに思ふ。

○　土屋文明

「雲居にぞ」といふのは、山口說の如くに雲霧の中に居るといふよりも、たなびく空をとほく見た感じではあるまいかと思ふ。從つてこの歌では妹があたりが雲居に見えるのであらう。「雲居にぞ來にける」といふ風に句はつづく如くであるが、そこはあまりに理論的に考へなくもよくはあるまいか。この一首は

單純な行き方のものであるが、形式的といふのとは少し違ふのではあるまいか。次の「明日香川しがらみ渡し」の歌とは行き方が隨分違つて、現實的であり力がある歌と思ふ。私はこの歌を幾分一般的すぎると評したことがあるが、それは前後の數首卽ち「石見のや高角山の」「小竹の葉はみ山もさやに」「秋山に散らふ黃葉」などとの比較を念頭に置いての批評であること言ふ迄もない。今合評の席上で人麿短歌中から十首を選ぶとすればこの歌が入るか入らぬかといふことが話題になつたが、私は入らないと思ふ。がその點ではすでに會者の意見が區々である。

○

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水も長閑にかあらまし　一云、水の淀にかあらまし（卷二、一九七）

鹿兒島壽藏

明日香皇女の薨去にあひ、第三者としてではあるが、その悲しみを、明日香川といふ實體を媒介として詠んだ歌である。つまり皇女の命を塞きとめる方法はないといふのを、露はに云はずに、川水の流れに悲しみを託したのであるが、この技巧とそれから來る聲調は人麿自身の哀しみを反映してゐるものと思ふ。「しがらみ渡し塞かませば」は、自然に對する人間の活行を具體化した言葉だらうと思ふが、此を一首の內面表象の上に擇つて來たのは、矢張この作家の力の考へられるところである。しかし挽歌にしても、直接的な心情の吐露でないだけに、技巧勝りの(內容取扱ひの上に於ける)感がするし、幾分の形式化が見えるのである。人麿作中、傑作の上位には入らぬにしても、何かしら後髮をひかれる歌ではなからうか。

○

吉田正俊

前評者が「その悲しみを明日香川といふ實體を媒介として詠んだ歌である」といふのは正に其通りであるが、「自然に對する人間の活行を内面表象の上に擇つて來た」云々といふのは、この場合作者の平生の力量といふものを信じすぎての結果であらうか。勿論現在の吾々の希望もし實行もして居る作歌心理との間の間隙の故をもつて、さうむきになつて反撥する必要もなからうが、結局かういふ種類の技巧では象徴の域には達し難いものではなからうか。形式的であるとか、よそよそしいとか評する以外に、もつとかういふ流儀の歌に對しては根本的に考へるべき所があるのではないか。ただ前評者も云はれたやうにその調子は悠々と迫らない所があり、そこに作者の大膽と云はうか、腹の据わり所といはうか、さういふ不敵な所が感ぜられるのであつて、そこがどこか作歌態度に考へさせられる所があるといへば云へる。

名ぐはしき稲見の海の奥つ浪千重に隱（かく）りぬ大和島根は　（卷三、三〇三）

○

藤田清

この歌の訓に就いてはさして異說がなく、初句の訓も、四句の訓も、今の處ではほぼ一定してきてゐるやうである。

第一句「名細寸（ナグヘシキ）」は、總索引によれば集中ではこの一例あるのみで、他は「名細（ナグヘシ）吉野の山」「名細之（ナグヘシ）狹岑

の島」の二例があるが、何れも「名細しき」と訓み得べきや否や不明である。この句については冠辭考には枕詞とし、古義も攷證も之を踏襲してゐるやうであるが、古くは代匠記近くは全釋や新解では、枕詞としないで「名の精巧なる」「名のよい」の意に解してゐる。枕詞とすべきか否かに就いては、單にその意味からのみ考へないで他の方面からも考ふべきである。印南の用例は集中に多く、この作者にも印南野を歌つた二五三の歌もあり、其處には「行過ぎがてに思へれば」ともある。印南野は當時に於て著名の地であり、また思ふに難波あたりから船出してこの邊に來た時漸く旅情を催したのではあるまいか。斯く考へる時この一句を枕詞と解することは如何と思ふ。勿論他の二例から推しても枕詞とすることは無理のやうである。然し鑑賞する者の立場から云へば、枕詞と考へた方が一首を通じて力強くひびくものがある。あまり「印南の海」に力を入れると單純さが持つ力强さを失つて來るのではないかと思ふ。枕詞としてしまふことは出來ぬまでも、味ふ上からは出來るだけ「名細しき」を輕く見る方がよいのではあるまいか。

次に問題となるのは、第三句と第四句の接續である。意味の上からは勿論第三句で切れ、更にそれを受けて第四句を起すのであるが、この接續はよく考へると少し變である。「奥つ浪」が「千重にかくりぬ」でないことはあきらかであるが、考へ出すとそこに無理がある。近頃見た總釋では、人麿特有の省略の語法として「淡路の野島が崎の濱風に妹が結びし紐吹きかへす」(二五一)などと一緒に考へてゐるやうである。然しこれは一二句からつづけてきた三句の休止が持つ勢を考へて見ると、理窟臭く考へなければ却つて自然に受取れるのではないか。例置法を用ゐてゐる點などをも併せてよく味つて見ると、さして無理を感じさせないだけの力があることがわかるのである。

一首全體としては人麿羇旅の作中に於てもすぐれた調の高い作である。調がきはめて莊重であつて「アア心細イ」（全釋）などといふ浮淺な感ではない。寂寥の中にも雄渾な作者の氣魄を感ずることが出來るかと思ふ。

○　鹿兒島壽藏

この歌は、同じ時の作「大君の遠の朝廷（みかど）と在り通ふ島門を見れば神代し念ほゆ」に就て述べたところと大體同じやうな考を起すが、この歌の「奧つ浪千重に隱りぬ」は簡單なやうで、內實の深い感慨がこもつてをり、人麿らしい强靱な語法によつて迫つて來る力を持つてゐるやうに感じられる。「奧つ浪」のする方でも、「千重」などの言葉の用ひ方でも、表現としては大きな力ではなからうか。

「名ぐはしき稻見の海の奧つ浪」と讀下して來て、一種の重壓を感ずるところに「千重に隱りぬ」と次いだのは、大きな吐息をしたかのやうであり、「大和島根は」と結んで、寂しさに徹した思ひがする。旅愁のあきらめの如き感じが漂うてゐると共に、自然への感歎をも味へると思ふ。

○　藤森朋夫

海路を遠く筑紫に下つたとき故鄕の山々に離別するさびしい感慨が直ちに感得出來る。三句までの句法は實に緊密であり些の隙もなく、一氣に押し流してゐる調子にはふかく打たれる。渺々たる海原の實景を凝望して、そこにおのづから衝迫する作者の感慨が、特に「奧つ浪よ」と恰も呼びかけてゐるやうにも感

ぜられる。三句から四句へは内容的には順直に接續してゐるのであらうが、吾々が今迄この歌を誦する場合には何かしらある無意識の中に、「奥つ浪」で切り、しかる後「千重にかくりぬ」と訓んで自然に感じてゐた。しかしよく考へてみれば、このつづき工合は「奥つ浪千重に大和島根はかくりぬ」となるのであるから、切るのは無理であらう。猶この歌と同じく海上羇旅の歌として「天離る夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ」(二五五)が想起されるが、これは作者と大和島との關係が今の逆であるが、私には共に感慨ふかく思はれる。

○　吉田正俊

藤田氏は「名ぐはしき」を、なるべく意味がなく輕くとりたいといはれた。その氣持には私も同感出來る如くであるけれども、さうすれば「稲見の海の奥つ浪」邊の調子がもつとかはつて來、「千重に隱りぬ」あたりを中心にしてもつと別の行き方にならなければ、物足りないのではないか。言葉を換へていへば、藤森氏が一二三句を間然する所なきまで緊密であると評された、その一二三句が何か手慣れてゐてなめらか過ぎ、一種の不足感を讀者に抱かせるのではないか。「千重に隱りぬ」といふ句は實景に卽して巧い表現法であるが、その巧みさにも拘らず、一首全體として衝迫する作者の感慨が案外稀薄のやうに思ふ。どこか表面的で感動が句々を掩うてしまふやうな魄力が缺けてゐるやうに私は感ずる。比較としては不適當とも思ふが、同じく羇旅の歌の「印南野も行き過ぎがてに思へれば心戀しき可古の島見ゆ」(二五三)にみえるやうな抒情味がこの一首では表現し切れなかつたか、或は又そこまでの感動に作者が切迫しなかつた

か、さういふ所があるやうに思ふ。甚だ主觀的な評價になつたが、鑑賞力を隱さずにいへば現在の所からなるのである。

〇

夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて念へや（卷四、五〇二）

鹿兒島壽藏

「夏野ゆく牡鹿の角」といふのは素材的に見ても可成新鮮なもので、一つの纏つた感じを持つてゐる。少くもこれだけを云々すれば、立派な寫實眼と言へるのであらう。唯これを古代人は敍景のみに一首を纏めなかつただけである。然し一首全體を味ふ場合其處にこだはつてはゐられない。矢張之を一首の中の構成分子として取扱はねばならないわけである。さうすると、この序詞は一首の情意を釀し出す調子の美といふ點で效果がある如くに思ふ。一首の主眼たる「妹が心を忘れて念へや」は、戀愛の一般的感情であつて、特殊性はないけれども、上の序詞の美しさのために、この歌は後世に於て「忘れずぞ思ふ妹が心を」（新古今）、「見ねば戀しき君にもあるかな」（古今六帖）といふやうな下句の變形をうけてまで取扱はれるに到つたのであるらしい。やはり民謠的要素の多い歌といふべきであらう。

〇

佐藤佐太郎

一二句は「束の間も」の「束」に續けた序詞で、春季に生替つた鹿の角が夏になつても未だ短いところ

から「東の間」に續けたのである。序詞は「音」の效果を主にする場合が多いとはいひながら、この續け具合には理智の介在が目立ち過ぎて直觀の端的なるところを缺き、それがやがて一首の上に影響してゐるやうに思ふ。「束」に續けた序には「苅る草の束の間」といふ例も二三あるが、人麿の序詞の句法は獨自のものである。しかし、それも思ひつき程度で別に手柄といふべきものでない事は以上の如くである。この一首は所謂「對詠歌」であり、對者を目標とした實際的效果を主としてゐるが、歌柄は稀薄な感じが多く、同じ卷四に前後して並んでゐる「少女等が袖振山の」とか「珠衣のさゐさゐしづみ」の歌などと比べて見劣りがする。之等は倶に序詞の形式をとり傾向の非常に近似した歌でありながら、「少女等が」の歌などは如何にも圓みのある、豐かな愛すべき歌で、人麿短歌の諸相のうちに一代表となし得る程のものと思ふが、飜つてこの歌となると既に言つた如き不足感がある。この評價の相違は、一に聲調に基くものであるが、結句の「忘れて念へや」といふ語法が現代の私に幾分うとく響くといふ點もあるかもしれない。

○　　　　五味保義

この歌の序詞は、美しい意味内容を持ち、一讀して直ちに記憶にのこる種類のものであるが、結極價値としては、佐藤氏の言はれたやうな處に止るものと思ふ。一首として内容不足の感をまぬがれない。ただかうした技法の歌としては、何處にか才の見える新鮮な感じもなくもない。參考としてその類歌を二三あげれば、卷一の「大伴の美津の濱なる忘貝家なる妹を忘れて念へや」(六八)などは、これよりもやや時代を後にするやうである。卷二の「大名兒彼方野邊に刈る草の束の間も吾忘れめや」(一一〇)はこの歌より

前の作とおもはれる。歌の品はずつと高いやうである。「妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れておもへや」（三六〇四）、「越の海の信濃の濱を行き暮し長き春日も忘れて念へや」（四〇二〇）、「たるひめの浦を漕ぐ船梶間にも奈良の我家を忘れて念へや」（四〇四八）などは、人麿の歌の影響であるらしい。最後の歌が、その中で最も類似してゐる。四〇二〇は、最後の歌とともに家持の作であつて、家持らしい所が見えるやうに思ふ。

（昭和十一年十月）

二十八　人麿の歌五首

潮騒に伊良虞の島邊榜ぐ船に妹乘るらむか荒き島囘を　（卷一、四二）

○

藤　森　朋　夫

京に留つて遠く旅する宮女たちの姿を想像して歌つた作であるが、描寫に一種の明確さがあつて、しかも視覺的に訴へる氣氛が漂うてゐる。自ら實景に臨むことなくしてこれまでに寫實味と緊張せる眞情とを纏めあげた力量を思ひ見るべきであらう。感情に少しも弛緩するところがなく、悠揚たる所謂人麿のよき聲律が、一氣によみ下されてゐるのを感じる。「妹乘るらむか荒き島囘を」の句法には、優れた表現力の强さを知る。四句に於いて一旦休止した形をとり、「らむか」と疑問を含めた推量をなしてゐるのであるが、これまでに籠めた抒情が、ここに置かれた屈折によつて、變化をもちつつ結句に押流されて、この歌の持味を釀し出してゐる。一見明快で、深くこもるといふ歌ではなく、人麿の秀歌に加へられるには至らないであらうが、一聯三首のうちでは前歌「釼著く」などよりは勝つてをり、特色も出てゐると思ふ。

○　柴生田稔

既に五月及び九月號に批評された「英虞の浦に」（四〇）及び「釼著く」（四一）の二首につづく作品で、はやく左千夫はこの三首を連作の一種であると說き、最近では山田孝雄氏の如きもこの三首があきらかに相關聯した創作であることを主張して居られるが、これは餘り意識的な組立てと取らない限りに於て贊成出來る說であつて、前にも述べたことであるが、人麿の作品にかういふ連作的の傾向がかなり認められるのは味ふべき所であると思ふ。前の「英虞の浦に」の歌の時も論ぜられたことであるが、この歌の「妹乘るらむか」に就いても、廣く宮女等を指したものであるか、特別に人麿の念頭にある一人の女性を指したものか、といふことが問題にされてゐる。前の歌の「をとめ等」に對してここでは「妹」といひ、又前の歌の一種快適な調子に比べて、この歌では「潮騷に」といひ「荒き島囘を」といつて、その旅苦を想ひやる氣持が或程度まで明瞭であるために、前の歌よりも人麿愛人說の可能性が濃厚になり得ることは考へられる。さうして餘り强辯に陷らない限りに於て、この歌の背後に一種の戀愛情趣を想像するのは鑑賞者の自由であらう。但、妹といつても必ずしも自分の愛人をあらはさないことは、人麿の「いさよふ雲は妹にかもあらむ」の例などでも明かであり、また直接自分に關係がない場合でも「か依りかく依り靡かひし嬬の命の」（一九四）とか、「若草のその夫の子はさぶしみか念ひて寢らむ」（二一七）とかいふ工合に異性關係を中心に感ずるのは人麿の一性向であるから、この場合も「作者人麻呂の心に、特にある一人の妹と呼ぶべき人が」云々（武田祐吉氏）とまで想定する必要はないと思ふ。妻に別れる時の歌などに比べて、何處か

餘裕があつて情趣的であるのは、はなやかな宮廷旅行に取り殘されたさびしさを、さういふ戀愛情趣的想像によつてみづから慰めて居るやうな、作歌態度から出て來て居るとも云へるのであらう。「妹乘るらむか」あたりは甚だ鮮かな單純化である。初句及び三句に「潮騷に」「榜ぐ船に」と重ねたのはそれだけ、拔き出して見ると音調がよくないやうにも思はれるが、一首としてはかういふことは實は末の問題でかういふ一字一音の機械的な效果などといふものより、もつと別種の要素が價値を決定するのだと思ふ。結句の「荒き島囘を」は、「島囘であるものを」といふ工合に、例へば最近の山田氏の講義などでも說いて居るが、これはもつと輕く普通の格助詞の「を」のやうには取れないものであらうか。

○　　　　五味保義

結句を山田博士のやうに解するのは「榜ぐ船に妹乘るらむか」といふ三四句の解釋の仕方に原因があるやうで、「船に妹が乘る」といふ意味で一つ切つてそれから結句を考へる爲に、「を」助詞を「なるものを」としなければ落ちつかなくなつたものであらうか。作者人麿の氣持はさういふ風に理詰めにいつてゐるのでなく「妹が船に乘つて荒き島囘を廻るであらう」と一氣に詠嘆してゐる氣持で、そこには結句だけを獨立させる餘地はないのである。初句に「潮騷に」と出てゐる點が、この一首に何か清新なすがすがしいものを與へてゐるやうな氣がする。さうしてその力が一首を通して生き生きしく動いてゐるやうに感ぜられて好きな歌である。

○　土屋文明

この一聯に就いては他の二首は既に講評が終つたのであるが、人麿は京に留まつて實景を見ずに、持つて居る經驗を材料として色々にその光景を組立てて居るのであるから、そこは想像と言へば言へるのであらうが、それを見ぬのを見たやうにはきめてしまはずに、「船乘すらむ」「潮滿つらむか」「玉藻刈るらむ」「妹乘るらむか」等、自分が見てゐるのでない、事實は事實でも心内の事實であることを、そのまま直接に言つて居ることは、所謂想像の作とは根本が違ふので、實に正直なありのままの表現法であると思ふ。このことは曾て永平寺の安居で、この一聯が研究題目となつた時出した意見であるが、今思ひついたので再び記す次第である。

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも　（巻二、一六八）

○　五味保義

持統三年日並皇子尊殯宮の時の長歌の反歌第一首である。長歌は比較的内容が混雜して居るのに比して、この一首は極めて淡々とした調べを持つて居る。作者は長歌の方でさまざま苦心した氣持を放つて、かなり自由に詠み下したかの感がある。從つてその音調に伸々とした趣があるので、何處となしいい感じがするのであるが、それだけに心に深く止まる處は少い。一二句は多少形式的になつて居る。山田博士が之は

長歌の方の「天つ水仰ぎて待つに」の「仰ぎ」は「天を仰ぎ見る實際をいへる語」とし、この短歌の方は「尊び敬ふ態度を形容する語」であると言つて居るが、私にはそれ程差違あるものと思はれない。もつと淡々と單に「仰ぎ見る」意味にとつていいのではないか。この一二句は、人麿が後に長歌の中で「ひさかたの　天見るごとく　眞十鏡　仰ぎて見れど　春草の　いやめづらしき　わが大君かも」(二三九)と再び用ゐて居る。長歌の中に用ゐられた場合の方が却つて落着を得るが如く思はれる。四五句の味ひは、淡々として居りながらやはり心持の沁みて居る處があつて、人眞似の點が感ぜられないのが好いと思ふ。

○　　柴生田稔

五味氏の云はれたやうに、ごく尋常一樣の內容でありながらどこか重厚な迫らない風格を感ずる。これは人麿の名が先入主になつて居るのではないとすれば、いかなる所に由來するのであらうか。從來の多くの意見のやうに單に聲調の力などと云つてしまふのでは物足りないし、齋藤茂吉氏の所謂全力的作歌態度の評語もこの場合私にはまだ呑み込めないものがある。或はかういふ一種の風格といふものは、作者が飽くまで自己の力量に自信をもつて、餘裕を殘して歌ひあげて居る所から來るものかとも思ふ。「高光るわが日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも」(一七一)などとの相違も、つまりさういつた點に歸着するのではなからうか。さうしてこれは人麿の年次明白の作品の最初のものであるから、更に問題が殘るわけである。五味氏は「天見るごとく仰ぎ見し」に精神的な尊敬の氣持を餘りみとめたくないかのやうであつたが、これはやはり單に「御門」をふり仰ぐだけではないと思ふ。山田氏の比較した「天つ水仰ぎて待つ

に」でもやはり尊崇の氣持が存するのだと思ふ。なほ高市皇子尊の挽歌（一九九）に於ける「天の如振り放け見つつ」の句なども同樣であると思つて居る。

○　土屋文明

この一首は、言はれた如くに人麿の年代の分る製作の最初のものであるが、さう思つて見るせゐか後年のものよりも形式的な所が目について、粘り氣が足りない樣に思ふ。「ひさかたの天見る如く仰ぎ見し」は言葉の上では「御門」にかかる事になるのであらうが、その「皇子の御門」はやがて皇子を感じて居るのであらうから、氣持の上ではこの上の句が單に形の上に御門をのみ仰いでゐると解釋したくないと思ふ。

衾道（ふすまぢ）を引手（ひきて）の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし　（卷二、二一二）

○　藤森朋夫

初句の「衾道」は、これを「引手山」の枕詞とする說と、衾田（ふすま）に通ふ道とする說とがある。後者は、延喜諸陵式に「衾田墓」とあるのによつて推定された地名說（註疏）であるが、これは「講義」にも云つてゐる通り實證的に解明は出來ない。又前者の枕詞說に落着かせようとする試論、例へば「夜のもの衾には、紐をわたし着て、そをもて引きひろげて覆へば、その紐を引手といふ意にて引手の上に冠らせたりとせむにや」（冠辭考）などもあるが、第二句に懸る意味に就いては、未だ定るまでに至つてゐない。おそらくこ

れは枕詞として使用したものではないかと思はれるが、何れにしても今後に確たる說の出現を期するより他ない。齋藤先生の人麿評釋にはこの句を如何に扱はれてゐるかが期待される。次の「引手の山」は、大和志によつて山邊郡にある龍王山であらうとする說がある。この龍王山といふのは、今の朝和村大字藤井邊に在るが、これが所謂古の引手山と一致するものであるかは疑はしい。前の長歌では羽易山とよんでをり、ここに又引手山と云ふ。この二山は異名同一の山であると推測してゐる說もあるし、又異る山にしても極めて相接近した山であらうと見てゐる說もあり、さらに羽易山の一部を引手山といつたのであらうとの說さへもあつて、未詳である。自分も地理的に少し考へもしてみたのであるが、どうも落着くに至らず問題としてまだ迷つてゐる。齋藤先生の研究や、實地踏査によつて得られた發表が、この場合ひたすらに待たれるのである。

此歌、事實に卽した感慨が素直に現されてゐる。二句までは今日に於いて地理的實景を明確にし得ない狀態にあるが、作者にあつては、あるがままに遭遇した事實感を直露したものであるから、その內に籠められた抒情は、生き生きしさをもつてさながら感得出來る。特に「山路を行けば生けりともなし」には、新しい感動の響がきかれる。恐らくこれは妻の死後時間的に幾何も經過してゐない時のものであらう。

○ 柴生田稔

「衾道を」は藤森氏のいふやうにあきらかでないが、いづれにしても效果としては、枕詞乃至枕詞的な形容語であらう。「衾道を引手の山に」と起したところには、何か一般的な餘裕が感ぜられないでもない

が、これは恐らく、歌に對する感情の時代的相違に由來するのであらう。三句以下は實に端的直截であつて、作者當時の感情が寧ろ凄氣を帶びて迫つて來るやうな感銘を受ける。人麿の作品中最も率直直線的な種類のものとして心を惹かれる歌である。「山路を行けば」なども、自然であつてまた妙手といひ得るかと思ふ。「生けりともなし」といふ結句は集中に用例が多いが、これも勝手な想像が許されるならば、當時の一般的表現法を人麿が借り來つたといふよりは、人麿のこの作品の如きが源となつて一般化したものとさへ考へたいのである。この句の訓み方及び解釋については諸說あること、山田氏の「講義」に精細であるが、「生けりともなし」と訓めるならば、さう訓んで味ふのがもつとも好ましいと思ふ。

○　　　　　五味保義

この歌は把握の確實な點に於いて優れた歌だと思ふけれども、今まで比較的注意されなかつたやうに思ふ。それは一二句の意味の不明快といふことが第一の原因であらう。またこの歌の前に置かれた「去年見てし秋の月夜は照らせれど」の歌の方に注意が惹かれて、見逃し勝になつたのではあるまいか。「去年見てし」の歌は典型的な佳作ではあらうが、この歌の有する眞實或は切實さは注意して味ふ値打あるものと思ふ。私は第三句の「妹を置きて」といふ句に心を惹かれる。「置きて」といふ句は集中に非常に多い。けれどもかうした深切な味ひは珍しい。人を葬つた場合、或は人の屍の様子を詠む場合、萬葉集には相當切實な表現があつて、「荒磯を敷妙の枕と纏きて」「石川の貝にまじりて」「朝蒔きし君」などあるけれども、この第三句の如くごく尋常に述べて響くところの深い趣はすくない。第四句「山路を行けば」は前評

者の說に贊成である。或本（二一五）の歌に「山路念ふに」とあるのと比較すると、それがはつきりして來るやうに思ふ。また卷九の挽歌田邊福麿歌集出の歌に「あしひきの荒山中に送り置きて還らふ見れば情苦しも」（一八〇六）など參考になる歌であらう。

○　　　　　　　　　　土屋文明

「衾道を」は解釋に苦しむのであるが、一首に對する役目は結局枕詞風に考ふべきであらう。よしんば地名としても、それは地名から來た枕詞のやうに味へば足るのであらう。「妹を置きて」に就いて五味氏が言はれたところはあるが、私はむしろこの言ひ方は生死の境をはつきりさせない、言はば「引手の山に妻を住まはして置いて」と考へてもいい位な氣持であらうと思ふ。であるから屍を捨ててとか葬つてとかいふ言葉は避けて味ふべきであらうと思ふ。これは石見國より上京の長歌の「玉藻なす寄り寢し妹を露霜の置きてし來れば」（一三一）などと並べて味ひたい。「生けりとも」に就いても前評者に說がある通りであるが、私もやはりこの通り訓んで「生きてをるともない」と解釋するのが一番直接で自然でよいと思ふ。しばしば言つたことであるが、作者自身が既に簡素な感じ方をし簡素な表現をして居るのは萬葉集の歌の大道である。それをあまり理によつて說き、解釋によつて溯つて訓むといふ遣方はどうかと思ふ。

隱口（こもりく）の泊瀨（はつせ）の山の山の際（ま）にいさよふ雲は妹にかもあらむ　（卷三、四二八）

○　五味保義

この歌は土形娘子の火葬の折の挽歌である。一首が大變整つてゐて、それで形式的な感じが無く心持の流動した歌である。この歌は挽歌ではあるけれども、「妹」に對する永逝の悲しみを感じさせるといふよりは、作者の自然に對する寂寥感が感ぜられるのであつて、一讀泊瀬の地形が念頭に浮び、「隱口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲」といふのが、自然を大きく摑んで物寂しい氣持をよく表してゐると思ふ。いはゆる情景一致といふべき作品である。「泊瀬の山の山の際に」のあたりが極めて自然で、「わがゆく川の川隈の八十隈落ちず」（七九）などの調子と似てゐるのであるが、それは長歌の構成から川を重ねる必要があつてさうなつた弱さがあるので、それに比するとこの人麿の歌の詞句の驅使は素直で且强靱である。

○　柴生田稔

この歌及び次の出雲娘子を詠じた歌も共に「泊瀨山に火葬せし時」「吉野に火葬せし時」と特に題詞に說明してあるのは、少くとも題詞の筆者は火葬といふ事實に興味を持ち、これに關聯させてこれらの歌を味つてゐたものだと想像され、更に一般鑑賞者のさういふ鑑賞法を豫想してゐるものと思はれるが、これを人麿自身の作歌態度にまで押し及して考へるべきであらうかどうか。私自身としては、火葬などといふ事實とは無關係に、即ち雲に火葬の煙を聯想したりなどせずして、この歌が製作され鑑賞出來るものであつたならばと思ふ。前に「山の際ゆ出雲の兒等は」の歌の批評の時、これら相似た性質の作品中では今の

「隱口の」の歌が割合自然な感銘を受けるといつたのも、さういふ氣持が働いての感想であつたやうである。人麿の死後依羅娘子作の「直の逢はあひかつましじ石川に雲立渡れ見つつ偲ばむ」(二二五)其他の例もあるのだから、題詞に火葬とさへなければ私のやうな解し方も出來るのではないか。即ち人麿の作がその詞句上から後人によつて火葬のことなどに關係せしめられたものと考へるのである。さうすれば次の歌の「霧なれや」もやはり火葬の煙と無關係にとるのであるが、かういふ解釋は結局自分勝手なものにすぎないのであらうか。この歌は五味氏も云つた通り何かしづかな哀調のこもるものが感ぜられるが、火葬の煙といふことを意識してからの作だとすると、どうしても純粹に鑑賞出來ない氣がするのである。

○　土屋文明

柴生田氏の、火葬といふことをあまり强調すると享受を妨げるといふのは、一理あるやうに思ふが、或は人麿は火葬と雲、すなはち煙との關聯を、我々が考へる程理論的に因果的に考へないで、もつと素朴に驚歎的に感じて、この「いさよふ雲は」の句が出たのではあるまいか。さうすれば「妹にかもあらむ」といふところもそれほど苦にせなくもいいやうにも思はれる。五味氏は泊瀨の山の姿を關聯させて味ふと言ふが、私はその地理を知らないがそこは餘り不便を感じずにこの歌は味へると思ふ。序ながら柴生田氏の引かれた「石川に雲たち渡れ」といふのも、もしこの歌の火葬を動かぬものとして考へれば、依羅娘子は人麿の火葬の煙を見、それが記憶にあるので、石川の雲を見て煙を思ひ然して人麿を思ふといふ風にとれないこともあるまい。これも考へ方によつては煩雜すぎる筋道であるが、實際のことに會つてる人は理論

によるのでないから、入組んで居る筋道も割合單純に感じとるのであらう。

今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて哭(ね)にさへ泣きし　（卷四、四九八）

○　柴生田稔

卷四に柿本朝臣人麿歌四首と題せられた作品の一つで、既に批評の濟んだ「古にありけむ人も吾が如か妹に戀ひつつ寢ねかてずけむ」（四九七）と自問自答のやうな關係の作品である。實際この歌一首だけを獨立させては意味の理解も困難であると思はれる。人麿の製作に、連作的に構成されたものが割合に目につくといふことは、すでに述べたことであるが、この一首はさういふ他の例とも又異つたものを感ずる。すなはち製作時の感情の自然的な推移によつて生じた連作的省略といふよりも、何か意識して理智的に問答體に整へたやうな氣がするのである。とにかく、先の「古にありけむ人も」の歌に於いて常識的人情的な臭味を覺えたが、この歌ではそれが反省されて一層濃厚になつて居るやうに思はれ、これら卷四の作品を人麿個人の製作ではないとする說に愈々同感を覺えるのである。

○　五味保義

この歌は並載された四首の中で、一番印象のよわい歌である。前評の如く「古にありけむ人も」に依存するところ多く、これは度々云はれてゐる。しかしたとへば武田博士の「新解」にも「連作」とされてゐ

るやうな意味は、製作に從ふ者の考へる連作と多少違つてゐると考へる。少くとも左千夫以來唱へられて居る連作は、かうした意味あひではあるまい。しかし現在歌壇流行の連作中には、これに類するものが多分にあることを思ふと、この一首の價値批評もさういふ意味で參考になるやうに思ふ。この歌とこの次の「百重にも」とが、前二首の人麿の歌に對する女の返歌であるといふ説もあるやうだが、この四首の根幹にはさういふ個人製作といふ考察を越えた所があり、むしろ民謠風な所産とする考への方が更に犀利である。其外一首としての味ひといふ點では汲み得るところは乏しいと思ふ。一二句にしても結句にしても、どうも理智的な感じがする。ただ「み熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へどただに逢はぬかも」(四九六)とか、前述の「古にありけむ人も」の歌などにも感ぜられる、淺膚でない氣持がこの歌にもあり、相當の古さを感ぜしめる。

○　　　　　　　　　　土屋文明

前の「古にありけむ人も」の一首と、連作といふよりはむしろ問答體をなすものではないかといふことは、私も贊成である。從つて人麿の作そのままといふよりは、人麿歌集あたりを經て相當に變形を加へられたか、或はまた人麿の作ならぬものが混入したかといふ事も考へ得られることと思ふが、それは理論よりも一首からの感銘が決定的であるやうに私は思ふ。表現法などが大體直接性を失ひかけて居ると思ふ。部分的であるが「人ぞまさりて」などもさういふ氣がする。結句の「哭にさへ泣きし」も、「哭に泣く」といふのを割つて「さへ」を挿入した言葉づかひは工夫があり變化があり特殊な表現法ではあるが、本來

が「哭泣く」といふ言葉の成立であるから、それにあまり意味の複雜を伴ふ表現の色合をつけるのは、無理が伴ひ意味を弱めるのではないかと思ふ。實際の用例が、「哭に鳴く」「哭を鳴く」「哭のみし鳴く」「哭のみを鳴く」など、割つてゐる言葉が「に」「を」「のみ」等の比較的單純な意味の語に限られて居るなども、省みて好いことのやうに思ふ。それに比べると「にさへ」はいくらか複雜になつて居るから、その邊からも一首に對する間接な感じが釀されるのではないかとも思ふ。

（昭和十一年十一月）

二十九　人麿の歌五首

家に來て吾屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕　（卷二、二一六）

○　　　　　　　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

「家に來て」と云つて「吾屋を見れば」としたのは、表現として入念であり、心持も沈潛の趣がある。「玉床」といふのも、語感としても輕燥でなく、何處となく押し包むやうな氣がする。四五句は寫生して餘す所なく、氣持として云ふべきを云ひ終つて居るやうに思はれる。同時の二一一や二一二の歌に比べると、家、吾屋、玉床、木枕といふ如き材料を列べ過ぎた點が氣になるし、筋書の哀れさが眼立つ。つまり動作的に感じられるのが「去年見てし」や「衾道を」の歌などよりも落ちると思ふのである。然し哀調には人麿獨得のものがある。

○　　　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

「妻死之後泣血哀慟作歌二首」に並載された或本歌の反歌中の一首である。或本歌の他の二首及び長歌は、前に夫々之に對應する作品が出てゐるが、この歌だけは或本だけに傳へられたものである。第二句の「吾屋」は集中にこのやうに續けた字面がなく、また「ワガヤ」といふ假名書の例もない。「吾家」といふ字面は相當あるが、これは「ワギヘ」といふ假名書の例に從つて訓むべきであらう。それでここの「吾屋」を「ワガヤ」と訓むとすればこれは集中唯一の例となるわけである。古くから「ワガヤ」と訓まれて來て居るが、右の點で考、古義のやうに「妻屋」の誤と考へる説も徒な誤字説とのみは片附けられない所がある。さて「家に來て吾屋を見れば」と訓むとして味つてみるに、「家」といひ、更に「吾屋」といつたのは、今更のごとく之が自分の家かといふやうな感動が含まれてゐると解すべきであらうか。さう解して曾てこの表現に心惹かれたこともあつたが、今ではこの一二句はやはり混雜したところがあつて洗練された表現とはいへないやうな氣がする。第四句の「外に向きけり」は「外向來」とあり、他に「ヨソムキニケリ」「トニムカヒケリ」などとも訓んでゐるが、やはり「ホカニムキケリ」が妥當なのであらう（ソトといふ言葉は萬葉集にはない）。「木枕」は集中二三の用例があるが、これは文字通りに「木の枕」と解すべきであらうか。「玉床」は勿論床を美化したものと考へられ、これも他に例があるが、この場合美化した表現はふさはしくないと評した考の意見にももつともな所があるやうな氣がする。なほ當時の床や枕の工合その他生活樣式や習慣に就いての知識が十分あつたならば、この歌の理解に都合がよく「外に向きけり」といふ狀態も、より明瞭になるのであらうが、今私にはその用意がない。この歌はすでに總釋に於て評された通り、容易に理解し得る寫實であると同時に通俗的といふ感じをも免れ得ないもののやうに思ふ。

代匠記に白氏文集の例などをあげ、古義で「まことにあはれに悲しくこそ」と感歎してゐる。さういふ訓詁學者に共鳴される所などが、反面この歌の一般性を示して居るやうである。つまり寫實といつても日常人情世界の事實に止まつてゐて、文學的眞實にまで到つて居ないといふやうな氣がする。これは一首の聲調が平板單調であることにも現れてゐると思はれ、「外に向きけり妹が木枕」といふ工合に結んだあたりは何か人麿らしくない感じがある。先に述べたやうにこの歌一首だけが或本のみによつて傳へられて居ることも併せ考へられるのである。

○　五味保義

「家」と「吾屋」それから「玉床の外に向きけり」の「の」あたりの具合、それから結句の「妹が木枕」といふ据ゑ方などが、細かすぎて、この歌の內容に必要であるところの現實的な悲哀感を弱くして居ると思ふ。私は吾屋の句に於いてもやはり誤字說によらぬ方がよいと思ふ。たとひこの句が前評にあげられた如く唯一の用例であつても、それは誤字說を助けるものとは限らないと思ふ。「玉床の外に」云々の如き言ひ方が、あらぬ方に枕が向いてゐたと解するのは今のところ一番穩當だと思ふけれども、その邊の表現に可なり無理があるやうに思ふ。少くとも他の人麿の歌の中にはかういふ調子はないのではあるまいか。この歌を讀む時に私は憶良の「家に行きて如何にか吾(あ)がせむ枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも」(七九五)を想起するのであつて、憶良はこの人麿の歌に直接影響を受けたかどうかは斷定出來ないにしても、この二一六の歌の長歌(二一三)の中に「枕づく妻屋の內に」といふ句があるのを見ると、二一六と七九五の歌

柄は異なつてゐても、一種の類歌として擧げて見てもよくはあるまいか。

○　藤森朋夫

この歌は、作者の製作動機とか、環境とかいふものを想像してみると、そこに現さうとする悲劇的な氣氛感情にも想到し得られ、また亡き者のあとにのこされた事物に觀入つての寫生も、あるがままになされてゐると思はれるのであるが、一首から受ける感じに直ちに寄り得ることの出來がたい何物かが潛在してゐるやうに思はれる。これはここに扱はれた素材が特殊的なものの爲であるからか。三句以下に見る描寫も極めて平明に行はれてゐることが肯かれるが、さて少しくたち入つて、その家、床、枕といふものの狀態を想うてみると、一應判然としてゐたやうにみえたものが、案外しかと把捉出來がたいのである。「家に來て吾屋を見れば」も問題の語句であると思ふ。疑をもつてこれをながめ「考」に誤字說を唱へてからそれによつて妻屋とする說のあることは、既に言はれた所で、これも亦一通りは考へてみたが、しかしもとの儘でみても情意は通じ感じられる。人麿の手腕としてはこのあたり單純化が行屆いてゐないやうに考へられる。「家に來て」「吾屋を見れば」と、同類の語を短い間に疊みかけるがごとく續けてゐるが、自分にはこれが自然にとれないで、一種の氣がかりといはうか、重々しさといはうか、さうしたものが感じの一面につき添つて來るのである。

大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも　（卷三、二四一）

○

鹿児島壽藏

この歌は「長皇子遊獵路池之時」人麿作長歌の反歌「ひさかたの天ゆく月を網に刺しわが大君は盖にせり」（二四〇）の或本反歌である。「大君は神にしませば」といふ詞を用ゐた歌を萬葉集年表から順次に引いてみると、

大君は神にしませば赤駒の匍匐ふ田井を都となしつ（巻十九、四二六〇、大作御行）

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ（巻十九、四二六一、作者不詳）

大君は神にしませば天雲の雷の上に廬せるかも（巻三、二三五、柿本人麿）

大君は神にしませば雲隱る雷山に宮敷います（二三五或本歌）

大君は神にしませば天雲の五百重が下に隱りたまひぬ（巻二、二〇五、置始東人）

となつて居つて、最後に人麿のこの二四一の歌を擧げることになる。東人の歌は明らかに人麿の二三五の模倣といつてよいのであらう。唯、御行の歌と人麿作とには同想としての問題があり、も一つは御行作が人麿作よりも年代が先んじてゐることに注意されるわけである。然しこれは何れが前の製作で何れが後の製作かといふことに就いては疑問がある。御行作は素樸な調子があつて相當の歌と思ふのであるが、何だか傳承的な洗練のあとがあるやうに感ぜられる。事實上人麿作と前後して作られたとしても、萬葉集の記載として後れてゐることも、さういつた觀方を裏附けるやうに思はれる。そこにゆくと、この人麿の歌は御行の歌に比べると判り易いとは云へない。このことによつて之等の歌の優先權を定めようとは思はない

が、愚考としては先づさういふ感じがするのである。人麿のこの歌は發想から一首の結構に到るまで形式的ではあるが、莊重で森とした聲調が漂うてゐて、故知らぬ感動を胸元に湧きあがらせるやうなところがある。そこが私のこの歌に惹き附けられるところである。ただ、内容(意味)を辿る場合は、御行作や同じ人麿の雷岳の歌ほどすつきりと入つて來ない不滿がある(御行作と雷岳の歌とが同列と云ふに非ず)。註釋書など讀んでもまだ釋然としない。この點「柿本人麿」の今度出る評釋で何ういふ風に示敎を受けるかと私に待望される。

○

柴生田　稔

鹿兒島氏の云はれたやうにこの歌は或本の傳であるが、やはり同じく長皇子が獵路池に遊ばれた時の作であるとするならば「海をなすかも」は從來の說のやうに獵路池をさしたと見るべきであらう。一方「大君は神にしませば」は皇子のことではなく、天皇を讚へたものであると說く說が案外多いやうであるが、前述のやうに他の二首と同じ場合の作品だとすれば、これは少しをかしい。卽ち長歌で「やすみしし吾大君」「いやめづらしき吾大君かも」、短歌で「吾大君は」といつてゐるのは、いづれも長皇子をさしたものであるから、この短歌に至つて同じ言葉が違つた内容をあらはすのは不自然だと思はれる。「神にしませば」といへば、如何にも天皇に限るやうな氣がするのは、他の人麿の作などからの先入感が働くのであつて、現に先にひかれた置始東人の場合は、弓削皇子をさしてをり、二三五の或本歌は忍壁皇子をさしてゐるのであるから、この場合皇子であつてはならぬといふ理由は考へられぬ。もつとも結句の「海をなす

かも」を獵路池を造られたことを意味すると考へる說からは、造池を命ぜられたのは卽ち天皇といふことにもなるのであらうが、この「海をなすかも」はさう實際に細かく當嵌めないで、只山中の池邊に皇子の立つてをられる御姿をこのやうに表現したものととるべきであらう。卽ち「天ゆく月を網に刺し」が單に皇子の頭上に月のかかつてゐる光景を表現したのであるのと同一のやり方であるととるのである。もつとも、或本とある點を重視して、この歌だけは何か違つた場合の製作が混入したものと考へ得る餘地は、十分存すると思ふ。私は獵路といふ土地が如何なる地勢であるかよく知らないのであるが、或はそれを明らかにすることによつて「眞木の立つ荒山中」といふ表現が適切か否かの方面から、この歌は獵路に於いての作か否かを論ずることは出來るかも知れない。さて「大君は神にしませば」云々といふ表現法の作品群についてば鹿兒島氏も曩に云はれたが、これは「柿本人麿」中に大伴御行作と人麿の雷山の歌(或本歌)とを比較して「大伴卿のは、事實を餘り細かく云つたために、理に墮ちて、歌柄を小さくしてしまつた。赤駒の腹ばふ田井などいふことと、大君は神にしませばの句との調和が取れない」「然るに人麿のになると、愚直に眞劍に大まかに云つたために、却つて初句の大君は神にしませばと調和がとれ、一首全體として落着いたのである」とあるのが甚だ明快な分析的說明であつて、この基準をもつて此等相似た諸作品の價値を比較批判出來るやうに思ふ。さうすればこの歌の三句以下は(殊に「海をなすかも」を前述のやうにとるとすれば)、人麿的な強い作意が窺はれて、大伴卿の作などよりは優れてゐると考へられるが、「天雲の雷の上に」に比べると、「眞木の立つ荒山中」などはやはり寫實に過ぎるし、「の」といふ助詞なども聲調を弱めてゐる點があるやうに思ふ。

〇　土屋文明

大君は、柴生田君の證據をあげて說かれるが如くに、勿論長皇子を指したと解すべきであらう。「海をなすかも」は、私はもつと單純に考へて、池塘を造られたことをさしてゐるのではないかと思ふ。即ち獵路の池の邊は、長皇子の御料地かなどで、その爲に御狩にもゆかれたので、皇子の力によつて新しい貯水池の築造等を考へることは、さう突飛でもないやうに思ふ。「荒山中に海をなすかも」といふ言ひ方は、「雷の上に廬せるかも」、「赤駒の匍匐ふ田井を京師となしつ」などと同じく、事實について歌にしてゐるので、「大君は神にしませば」といふ大がかりの表現が形式に流れないのであらうと思ふ。

飼飯の海のには好くあらし苅薦の亂れ出づ見ゆ海人の釣船　（卷三、二五六）

〇　藤森朋夫

人麿の羇旅の歌八首中の一首である。四句「亂出所見」の訓は、考に「ミダレツルミユ」槻落葉に「ミダレイデミユ」略解に「ミダレイヅルミユ」攷證に「ミダレイヅミユ」とそれぞれに訓んでゐるが、これは攷證の訓に從ふべきであらう。赤彥は略解訓に從つてゐるが、この「ミダレイヅルミユ」も中古の文法にはさうした連體形に接續する例も見られるのであるが、上古に於ては動詞助動詞の終止形をうけてをり、集中にはその用例はまことに多い。一二例を擧げると「沖つ浪かしこき海に船出爲利見ゆ」（一〇〇三）、

「いとまなく海人の漁火は燭し安倣里見ゆ」(三六七二)の如くである。
この歌は自然に對する觀取が素直であつて、表現にも無理なところがなく、聲調も如何にも人麿らしい響が汲みとられる。二句と四句との二箇所で區切れてゐるが、これには自らに流動する獨自の氣息が感じ得られる。二句「には好くあらし」の「らし」は、現實的に眼前に展開する自然の景相を見つめての上に、作者が心象に映じたそれを表現するに當つて、あるがままの決定的實相描寫法にのみ終らせないで、この「らし」に、作者の内に籠る感情を餘韻を漂はしめつつ自然に表出してゐるやうに思はれる。この呼吸は實に微妙であつて、一首に深さとか重さとかいふべきものを包含せしめる。覊旅歌八首の中、二五〇、二五一、二五三、二五四、二五五の如き作品に比べると、この歌の方が劣るかも知れないが、またこれはこれでよく味つてみると仲々の滋味を持つてゐる。從來この歌に對して抱いてゐた自分の評價も、いまはより以上に高く認めたい氣持になつてゐる。試みに人麿が「らし」を使用してゐる歌を探してみると、この他には「この山のいや高からし」(卷一、三六)がある位で、更に人麿歌集にまで及んでみれば、「痛足河」(卷七、一〇八七)「彦星の」(卷九、一六八六)「家人の」(卷九、一六九七)「巨椋の」(卷九、一六九九)「さ夜中と」(卷九、一七〇一)「ひさかたの」(卷十、一八一二)「古の」(卷十、一八一四)「天漢」(卷十、二〇二九)等が抄出されるであらう。
　結句は「海人の釣船」と名詞止にしてゐるが、この形も人麿の短歌には極めて少く、他には「家に來て吾家を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕」(卷二・二一六)、「大船に眞楫繁貫き海原を榜ぎ出て渡る月人壯子」(卷十五、三六一一)が見られるだけで、或は人麿作と云はれるものに「吾妹子が赤裳ひづちて植ゑし田

を刈りて藏めむ倉無の濱」(卷九、一七一〇)がある。これらの作と對比してみると、この二五六の歌にあつては、名詞止としての結構もよく据つてゐることが認められよう。

○　五味保義

羇旅歌八首の中では比較的平坦な感じのする歌であるが、一首の聲調には淸らかなところがあつて、氣持のよい歌である。第二句第四句に小休止があり、また前評にあつたやうに結句の形といふこともあるけれども、不思議に氣持の流動したものをなくしてゐないやうに私は思ふ。かういふ種類の歌は黑人などにも少くないのであるが、人麿のものはどこかに自分で道を開いてゐるやうな處が感ぜられる。「亂れ出づ見ゆ」は、當時の用例によつても又現在の主觀的な味ひ方から言つても、この訓でその聲調の上に少しも差支ないと思はれる。「鑑賞及び其批評」に「出づる見ゆ」を斷定的に可として居られるのは、その理由を詳細に述べてないので、評者の氣持をはつきり了解出來ないけれども、「見ゆ」の上に連體形を置くのが語法上自然であるといふ考への外に、連體形の「出づる」の方が餘裕が生ずるやうに考へられたのではあるまいか。この歌の「一本云」は「武庫の海のにはよくあらし漁(いざり)する海人(あま)の釣船浪の上ゆ見ゆ」とあるが、この歌と如何なる關係にあるものであらうか。他の人麿の「一云」の如くこの歌に對する作者の別案であるとすれば、矢張「亂れ出づ見ゆ海人の釣船」の方がすぐれてゐると思ふ。「亂れ出づ」といふ句は、「浪の上ゆ見ゆ」といふのよりは少し派手ではあるが、それだけに固定しない生動の趣があるのではなからうか。船の動きに「亂れ出づ」といふ語を使つたのは人麿以外には例がないやうである。「一本云」の

歌の第二句は、本文「船爾波有之」とあるのを神田本によつて訓み改めてゐるのである。

〇　柴生田稔

今五味氏がいはれたことではあるがこの「苅薦の亂れ出づ見ゆ」といふ句はいかにも人麿的な寫實の手法だといふ氣がする。「苅薦の」といふ枕詞をここに置いたのも、他の容易になし得ぬところではなからうか。そこで思ふに前の「玉床の外に向きけり妹が木枕」といふのは、つまりこの場合の一本の「漁する海人の釣船浪の上ゆ見ゆ」の程度の寫實なのではあるまいか。私は八首の中でこの歌が劣るとは思はぬ。

〇　土屋文明

「には」はひろい場所をいふので、地面にも海上にもいふとの事である。「にはよくあらし」は海上がよく凪いでゐるらしいといふのであらう。作者は勿論現前に飼飯の海を見渡して居るのであるが、今日は海上がしづかなのであらうと推測の心を加へて居る、それがその心持が「らし」で現されて居るのであらう。かなり複雑な氣持なのであるが、それをよく「らし」の一語であらはしたものだと感嘆されるのである。作歌の場合にのぞめばかういふ所は非常にむづかしく、仲々單純にあらはせないので、時には日本語が不完全であらうなどと思ふことさへあるのであるが、人の作つた所を見ると「らし」の一語でぴたつとはまるのであるから、日本語もさう不完全なものではないかも知れない。しかしかういふ所の表現力は人麿の手腕を裏書するので、言葉に對する敏感の度合が思ひみられる程である。

八雲さす出雲の子等が黑髮は吉野の川の沖になづさふ　（卷三、四三〇）

○　　　鹿兒島壽藏

高田浪吉氏は「萬葉集鑑賞」の中で「溺死した娘子のことを想像するの餘り……悲んで」云々と云はれてゐるが、創作心理の過程に頷かれるものがある。この歌は一つの事件に取材した歌であるから、契沖の云ふ如く、黑髮なれば男の手にこそふれぬべきとか、或は身を投げしにはあらで、川を渡り損ね云々等の甚しくくどい解釋も成立ち、或は讀者としての感動の爲方には多少の相違は生じるのであらうが、餘り潤色して受容れぬ方がよいのではあるまいか。とにかく停滯のない表現力には正に頭が下るが、今の私の好みのみに從つて恣のことを云へば、それ程好きな歌ではない。

○　　　藤森朋夫

同じ時の他の一首（四二九）は既に本年四月號（本書五四頁）に批評されたところであるが、それに對する評言の一部はこれにも適用される。歌材となつたものが事件的であり、悲劇的であるため、そこに表明されたものは、作者が幾分さうしたものに興味を惹かれての上になされたといふ感じを抱かしめる。

一首の聲調は溫順であり、徹りもよい。これは一面人麿の深い沈潛の後に纒められたといふよりも、むしろ事件に接してそこに起つた感情を案外輕快にうたひ上げたと見られるのではあるまいか。黑髮が河の

中になづさふといふ表現は、現實的視覺的であつて、この直接性には一種の哀音がこめられてゐる。集中にも黑髮の語句を用ゐて歌つた歌は十二ばかりあるが、この歌のやうに特殊な境地を描出するのに用ゐられてゐるものは他に見當らない。

尙二首について比較するならば、やはり比喩などを使用して比較的婉曲に云つてゐる前作（四二九）よりは、この方が歌ひ方も順直で、親しみが持たれる。

○　五味保義

娘子の黑髮が、川の流れになづさふといふのは、それだけで一種の詩的な感じがあつて、心の惹かれるところがある。さうしてその表現からうける印象が、作者人麿が眼前に流れになづさふ黑髮を見てゐるか否かの思慮をさしはさむ所がないやうな、鮮かな印象をうける。しかしこの歌は、この前の「山の際ゆ出雲の兒等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く」（四二九）の歌と同じやうに、粗いところが少く、どちらかといへば形がおだやかに整つてをるのであつて、よく言はれるやうに調べの停滯しない所に良い味はあるにしても、一面全體としての不滿があるやうに感ぜられる。作者の創作心理の動き方が細かくあつたといふこともあらうし、表現の上からいへば「兒等が黑髮は」と「川の沖になづさふ」とが、對應してゐすぎるやうな氣がする。第三句に「何々は」と据ゑた例として「吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき」（四四六）の如きがあるけれども、結句の形がこの人麿の歌のごとく三句との對應を明らかにしてはゐない。又「月重ね吾が思ふ妹に逢へる夜は今し七夜を續ぎこせぬかも」（二〇五七）、「秋萩の咲き

たる野邊にさを鹿は散らまく惜しみ鳴きぬるものを」（二一五五）のやうなのも人麿の歌の趣とはちがふ。少し「は」の働きはちがふけれども、「御食向ふ南淵山の巖には落れるはだれか消え殘りたる」（一七〇九）、「み吉野の象山の際の木末にはここだも騒ぐ鳥の聲かも」（九二四）の歌の構成からうける感じがこの歌（四三〇）の感じとよく似て、多少その助詞の用法の煩はしさを感ずるのである。この例は集中凡六十四首あるが詳細な論は後日に讓る。又思ふに現在私の感じてゐる「は」の響きと作者人麿のそれとはちがつたものであるのかも知れない。つまりもつと詠歎の這入つた寧ろ輕い意味のものであつたかも知れぬ。例へば人麿の「去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる」（二一一）の歌に於ける二つの「は」が、この一首の感じを混雜せしめてゐないのをみると、人麿はさういふ點案外易々としてこの助詞を驅使してゐたやうに思へる。

○　　　　　　　　土屋文明

作者はやはり溺死の樣子を見たのであらう。前の「吉野の山の嶺に棚引く」にしても、この歌の結句にしても、さういふ力を持つてゐる。この一首のごときは、前の「出雲の子等は霧なれや」よりも更に所謂主觀的の詞がないので、少しそつけないやうにも感ぜられるのであり、それが主となつて前評諸氏の不滿も生ずるのではないかと思ふが、私はやはりこの歌でも人麿の線の太い表現力は十分に現れて居るやうに思ふ。吾々自身の作歌の問題として、かういふ行き方をした時の一種の自らの物足りなさといふものは、私もしばしば感ずるのであるが、さうかと云つてその感慨を主觀的の言葉をもつてあらはすのがいいか、

この位の所で踏み止つてゐるのがいいか、勿論一首一首に異る問題ではあるが、一般論としても實は私に解決がついてゐない。漢詩などには、かなりそこをしつこく咏嘆して居るものがあるが、さういふものを讀んで行くとその部分がどうもしつくりしない。どうもその手際では人麿あたりの頃合が丁度いいのではないかと思はれる。これは短歌の形式、日本語の性質などに深い關係があるのではあるまいか。規模の大きさや、現實に透徹する力などでは、短歌ではもどかしいやうに感ずることもあるが、餘りしつこくない咏嘆の表出法に就いては、萬葉集の歌は獨特のやうに思はれる。

○

百重(ももへ)にも來及(きし)かぬかもと念へかも君が使の見れど飽かざらむ　（卷四、四九九）

藤森朋夫

第二句「來及毳常」の訓は諸說があつて、一定するに至らない。舊訓「キヲヨヘカモト」であつたのを、代匠記精撰本に「キシケカモト」と訓み、新訓、年表、全釋、總釋（石井氏）等はこれによつてゐる。又、考に「シキシケガモト」玉の小琴に「キタリシケカモト」と試訓し、古義に「キシカヌカモト」と改め、新解、新釋、新講、作者類別年代順萬葉集、新校等多くこれに從つてゐる。古義に斯く訓んだのは、集中から具體的例證を擧げて、縱令原文には「ヌ」と訓むべき文字は存しなくとも、例へば「人相鴨」（一二八七）の如きを「ヒトモアハヌカモ」と補つて訓んでゐること等から推測して、ここにもそれを應用したのである。代匠記訓も現在從つてゐるものが多いが、これは新釋にも指摘してある通り、命令形に「カ」の

ついた例は無いので、よくないであらう。「キシカヌカモト」と訓む場合の「ヌ」は否定の助動詞で、「カモ」は感動の助詞である。つまり「ヌカモ」はここでは否定的に述べた願望の意を示してゐるものである。

題詞によると人麿作といふことになるが、歌の内容から察すると、おそらく女性の作とみられるのではあるまいか。四句「君が使の」とあるのからしても男の來るのを待つ女の語と見たい。原文にも「キミ」に「公」の字が用ゐられてゐるが、これは多く男の場合に見られるやうであるから、これも一の裏付けになるであらう。

「百重にも」とか「來しかぬかも」とか、「思へかも」とか何回も感動的助詞を採用して、戀情の吐露を試みてゐるあたり、技巧的であつて洗練されないところもある。尙言へば、歌ひざまには手腕を思はせるところはあるが、感情に緊張したところが幾分缺けてゐるやうで、このことはひいて戀愛に關する一般的感情を表明してゐるとまで云ひ得るのではなからうか。

○　土屋文明

「來及けかも」は語法にもとるといふことであるが、しかし舊訓の如く「來及べかも」とは訓めないのではあるまいか。文法のことは他の評者に任せて、私はやはり意味は「しきりに來るやうに」といふ風に解釋する。「君が使」の「君」は女から男を呼んで居るのであるといふが、一首の意もその趣であらう。大體この卷四の人麿の作といふ相聞歌は、人麿の作そのままかどうか疑はしく思はれるので、これなども

人麿歌集などから拾ひ上げたものではないかと思はれる。女が男の使を待つ歌は、古今相聞往來歌などに數首あるやうに思ふが、それらのものに較べると、この初二三句はどこか大まかでつよい所があつて、同類の歌としてはすぐれて居るやうに思ふ。よしんば女の立場の歌であつたとしても、人麿に全然關係のない歌とも思はれない。

○　　　　　　　　　　　　五味保義

第二句の訓については、私にも今の所決定した訓み方がわからない。但し「キシカヌカモト」といふ訓が、語法上からも、一首の意味の取り方から言つても一番順當であるやうに思ふが、第二句の原文に「ヌ」に當る文字がないことや、また「ヌ」を直ちに否定の助動詞と考へ、そこから願望の意味が生じて來る、即ち口語の「ナイカナア」に當ると解するのも、未だ確定的に言へない弱味もあつて、その點甚だ自信がない。前評に初二三句の强さをあげられたが、私はこの一首全體にわたつて案外ねばり氣があるやうに思ふ。「見れど飽かざらむ」の如き言ひ方は、考へやうによつては理智的な表現に思はれるかも知れないが、私には比較的特殊な表現のやうに思はれる。集中でも例の少い手法ではなからうか。つまり「思へかも」に對して、「見れど飽かざらむ」と結んだのではあらうけれど、そこには心持の流動するものが、句々の脈絡の底に潛んでをる。これはかういふ句法に對する私の好みに止るものであらうか。前評に言はれる如く人麿歌集の出かも知れないし、それは武田博士の新解にも文字扱ひの點から人麿歌集に似てゐるといはれてもあつて、さういふ說が自ら定つて行くのではあるまいかと考へられるが、さういふことの爲に一首と

してとるべき所を見逃してはならない。この邊の歌はたとへ作者が人麿でないと定まつても、そのことだけで一概に棄ててしまへない何物かをもつてゐないであらうか。この歌が前の「今のみのわざにはあらず」（四九八）とともに、「みくまぬの」（四九六）「古に」（四九七）に對する返歌であるとする說については、先月號（本書一六九頁）にも擧げた所であるが、新解に「百重にも」といふ歌の初句は、四九六の「百重なす心は思へど」の語を用ゐて返歌をつくつたとあるのは、餘り平仄が合ひすぎる批評だと思ふ。

（昭和十一年十二月）

三十　大伴旅人の歌八首

昔見し象（きさ）の小河（をがは）を今見ればいよよ清（さや）けくなりにけるかも　（卷三、三一六）

○

五味保義

今月から三四箇月にわたつて大伴旅人の歌を研究することになつた。最初にあげた八首は、大部分が太宰帥在任中と思はれるものであつて、それ以前と考へられる歌一首を含んでゐる。漸次號を追つて九州より歸京途次の歌、歸京後の歌、及びその他卽ち讃酒歌の如きに及ぶ筈である。その後旅人の作風に對する概論があるかと思ふ。

この歌は、旅人の年次明かな作品の最初のもので、神龜元年三月に吉野に幸された時のものと推定される。旅人は此時既に六十歲、人麿歿後いまだ二十年を出でない年に當る。この歌は人麿が持統五年行幸に供奉して詠んだ「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絕ゆることなくまた還り見む」（三七）と同じ境涯の歌であるが、人麿の作に比するに、極めて淡々とした且つ新鮮な趣があり、今まで永く人麿の作品の研究に從

つて來た眼から見ると一變化を歌風の上に見ることが出來る。この歌は極めて清澄な感じを持つて居り、それが少しも乾燥したとか空虛なとか感じられない平淡味を有してゐる。これは當時の作家の中にも珍しい作風で、憶良と作歌上の交涉がまだ始まらない頃のものと思はれるのであるから、この風格は旅人の性格獨得のものであつたと考へられる。特に「象の小河」といふ固有名詞の響が一首の中に生動してゐる趣などは、誰の影響とか感化とかの批判をさしはさむことが出來ない程、出來上つて手堅いものであると思ふ。固有名詞の歌詞中に生きる效果といふものに就いて、土屋氏がこの歌及び三三二の「象の小河」の句をとつて言つて居られることは、大變味ひ深い批評であると思ふ（名歌評釋一三七頁）。旅人は前に言つた通り既に六十歲であつたことを考へると、人麿の生存活躍時代にその青年期を過したことになるから、その作品にも接したのであらうし、さういふ意味で人麿の影響下に生れた歌人と言ひ得ようが、その歌によつて思ふに、旅人が人麿に對して抱いた作歌上の興奮と言ふべきものは、憶良や家持とは多少類を異にしてゐたのではないか。この歌は色々旅人の作風を考へる上の暗示があり、見遁せない一首であるが、その形の單純なるために見落され勝であるのは殘念である。近來の選釋書では多くこの歌を採らず、又全釋書でも新考の如く註釋も批評も一言も述べない如き事實がある。

○　　　　山口茂吉

すでに五味氏の批評によつて言ひ盡されてゐるといふ感があり、附加へて云ふべきこともないやうに思ふ。清澄であるとか、乾燥してゐないとか、空虛さが感じられないとか云ふことも謂ひ得るであらうし、

また平淡味を有してゐることも五味氏の言はれるとほりである。しかし一言にして云へば、やや平板すぎるやうに私は思ふのである。あながち無内容であると云ふわけではないが、何か不足したものが感ぜられるのは、四五句が上句に比してやや伸びて緊密を缺いてゐるためではあるまいか。そのために形式的の感がして物足りない點があるやうに思ふ。つまり上三句の佳調を受くべき四五句が、上句に比して少しく精神的にたるんだ感があると思ふ。この四五句の「いよよ清けくなりにけるかも」は、恐らくこの作より約十數年前に作られた、志貴皇子の有名な「懽の御歌」（卷八、一四一八）「石激る垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりにけるかも」の影響により、苦心せずして容易に纏まつたものではあるまいかと私は考へる。一見感慨のこもつた作のやうに見えてさうでなく響くのは、「なりにけるかも」の句が弱いとか緊つてゐないとか云ふのではなく、「なりにけるかも」を活かして使つてゐないためであるといふ事になるだらうか。これは志貴皇子の御歌とこの一首と比較して見れば分かるやうな氣がする。

序を以て云へば、「なりにけるかも」といふ句は萬葉集中に六例あり、何れも結句に用ゐられて相當の效果を收めてゐるのは、この句の結句として据わりのいい名句であることが分かるやうに思ふ。參考のため掲げれば、この旅人の一首（三一六）及び右の志貴皇子の御歌（一四一八）の外、次の四首である。

妹として二人作りし吾が山齋(しま)は木高(こだか)く繁くなりにけるかも（卷三、四五二、大伴旅人）
うち上(のぼ)る佐保の河原の青柳は今は春べとなりにけるかも（卷八、一四三三、大伴坂上郎女）
秋萩の枝もとををに露霜おき寒くも時はなりにけるかも（卷十、二一七〇、作者未詳）
萩が花咲けるを見れば君に逢はず眞(まこと)も久になりにけるかも（卷十、二二八〇、作者未詳）

○

落合京太郎

萬葉集所載の旅人の歌は、一二の例外を除き、殆ど全部が太宰帥としての赴任以後薨去に至るまでの間に製作せられたものと見て誤はない。其期間も十年を出でない。この歌は太宰府赴任前の作である點に於ても、旅人の作品を通觀する上に注意すべきである。淡々として一見平板かと思はしめる敍法のなかに、眞率清澄な咏嘆の盛られて居ることを看過し得ない。題詞に依れば神龜元年吉野行幸の際奉勅の作でありながら、それを意識したやうな點があらはでなく、何か自由な態度が感受せられる。然も「いよよ清けくなりにけるかも」と一氣に敍したあたり勅に答へ奉る意も盡して居り、「昔見し象の小河を今見れば」と小休止して居るところにも、齡耳順に達した作者の感懷も想はれるのである。此歌と赤人の「神代より芳野の宮に在り通ひ高知らせるは山河をよみ」(一〇〇六、天平八年)などと比較すると、旅人の作の豊醇に引かへ赤人の作は如何にも薄手であると言はれても仕方がない。人麿に見られる自然に對する鋭い把握力や流動性や乃至は蒼溟といつたやうな持味は、この一首を例に採つても、旅人の作には尠い。清醇な調べのなかに、感じやすく傷きやすい人間の感懷を吐露して居る所に旅人の面目があるらしい。

「昔見し象の小河」の句は、同じ作者の「昔見し象の小河を行きて見むため」(三三二)にも使用されて居り、「いよよ清けく」の「いよよ」は、「いよよますます悲しかりけり」(七九三)にも用ひられて居る。其他、「旅にまさりて苦しかるべし」(四四〇)「旅にまさりて苦しかりけり」(四五一)。「行きて見むため」(三三二)「行きて來むため」(八〇六)、「忘れぬがため」(三三四)。「ひとりや飲まむ友なしにして」(五五

五）「あなたづたづし友なしにして」（五七五）。「醉ひ泣するになほ若かずけり」（三五〇）「芳野の瀧になほ及かずけり」（九六〇）。又三三五と九六九との如く同一語句、同一題材を繰返して居ること一再でない。此事實なども旅人の作品を論ずるには一顧して宜い點であらう。ただ之よりして直ちに旅人の作歌態度を論結しようとならばそれは早計を免れまい。然し是だけのことは言へるだらう、此點（題材語句の變化）を人麿の作品に比べて見ると少くとも旅人の作歌態度は人麿の峻嚴さに及ばないこと迥であつたと。

○

吾が盛また變若めやもほとほとに寧樂の京を見ずかなりなむ　（卷三、三三一）

堀内通孝

これは旅人が太宰帥として在任中の作であつて、一聯五首中の第一首である。旅人が太宰帥に任ぜられた時期は不明であるが、古義は天平二年に再び上京する五年前、卽神龜三年の間なるべしと言つてゐる。「マタヲチメヤモ」は原文「復將變八方」であるが、宣長がこれを右の如く訓んだ。略解に「此二の句、マタカヘラメヤモと訓みては調ひがたし。宣長云、卷五、わがさかりいたくくだちぬ雲に飛ぶ藥はむともまた遠知めやも。又雲に飛ぶ藥はむよは都見ばいやしきあが身また越知ぬべし。其外には初に返る事を乎知と言ふ事有りて、ほととぎすのヲチカヘリ鳴クなども此類ひなり」云々とある。槻落葉、古義等は、若の字の脫字であるとして、これを補充し「復將變若八方」としてゐる。

大體旅人の歌は萬葉集中にあつても、その表現の率直性と、内容の單純性といふ點を特質として考へら

れると思ふ。「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（七九三）にしても、「妹と來し敏馬の埼を還るさに獨して見れば涕ぐましも」（四四九）にしても、誠にその感が深い。一面から云へば旅人は非技巧派といふ事が出來よう。この歌も、われ又若く盛んなる時に還る由もなければ、ここに老い果てて奈良の都を再び見る事も無いであらう、といふ甚だ簡明率直なものであるが、この歌の迫力は、そして一般に旅人の歌の迫力は、その表現の率直性の上にあるやうに思ふ。飾がなく、所作がない點にあるやうに思ふ。

○　落合京太郎

旅人が太宰帥として赴任した年は、大體古義の推定して居る通りであらう。「年表」では神龜二年赴任かと考へてある。神龜三年には旅人は既に六十二歳である。邊境異域の生活は、中央の文化に馴れた旅人には必ずや不便と焦燥を感ぜしめたに相違ない。京を離れるといふことすら既に一の不平であつたらう。その裡に神龜五年になつて妻大伴郎女を喪つた。翌天平元年二月壬申（十一日）に、同僚の太宰大貳多治比眞人縣守が權に參議に（同時に民部卿にか）せられて上京した。同年三月甲午（四日）には、旅人よりも二年も後れて養老四年に中納言となつた藤原武智麿が大納言になつた。

三三一乃至三三五の一聯の作は恐らくは旅人が以上の事實を觀來つた後の作であらう。そしてこの直ぐ前にある「藤浪の花は盛になりにけり平城の京を思ほすや君」（三三〇）に和した歌らしいから、天平元年または天平二年の晩春の作であると思はれる。和の歌でありながら僅にこの三三一の一首に對咏的な句を

殘して居るだけで其餘は皆獨咏的であることも、此一聯製作の際の作者の心裡が窺へるのである。過去を追想回顧するのは作者が老齡の故のみではない、現在の境涯に比して過去が美しく、將來の希望が保し難いからの故である。「わが盛また變若めやも」とは、必ずしも年齡のことのみを指して居るのではあるまい。沈潛低吟、老と時運とを嘆ずると共に思を故郷に馳せて居るのである。

諦念の裡に猶一縷の望をつないで居るところ惻々として迫る思がする。此一聯皆斯の如き味のものである。又謂へば情到つて自ら成るの概がある。而も之を遣るに作者の態度が如何にも醇朴であつて、その人間性が藹々として讀者の共感を誘はないではおかない。この一聯を味讀して作者の天稟を云爲することも出來よう。然し天稟といふことだけで片附けてしまつては、何か物足らぬ氣もするのである。作者の閲歴境涯の明と不明とが、短歌のやうな短い形式の文學の鑑賞の上に與へる影響といふやうなことも、反省して宜いのであらうか。

○　　　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

題詞に「帥大伴卿の歌五首」とあることだけでは、太宰帥在官中の作とは定められないであらうが、作品の内容から考へて、前評者達のやうに九州在住當時といふ認定が成立するわけである。それ以上の細かい時期の考察は、もはや鑑賞者の主觀に任すべき問題でもあらうが、落合氏の說は内面の機微に觸れてゐて面白いと思ふ。この歌は今言はれた通り、老を歎ずる感慨、都を思慕する情懷が相融合して實に自由な姿で流露してゐる。少しも技巧を凝らしたやうな痕がなく、むしろ無造作と言つてもいいやうな歌ひぶり

の中に、言ひ難い滲み出るものを持つてゐる。「見ずかなりなむ」で止めて他に何の感慨も附加して居ない處なども味ふべき風格のやうに思はれる。五首中でも最も渾然とした作であらう。「わが盛」は、後に引くやうに同じ旅人が「わが盛いたく降ちぬ」（八四七）とも使つてゐて、やはり年齢上のことと解釋するのが妥當であり、それ以上の落合氏の言ふやうな氣持は、意識されない背後的感情の域に止めて置く方がいいと思ふ。第二句を「マタヲチメヤモ」と訓むのは、これも他の旅人の用例（八四七・八四八）から推しても、動かない所であらう。この「をつ」といふ言葉は、玉の小琴や新考で說くやうに、もとに復するといふ意味であらうが、集中の用例は殆ど若返る場合に限られてゐる。そして年次作者の明かな中では旅人の使用がその最初のやうである。

わが盛いたく降ちぬ雲に飛ぶ藥はむともまたをちめやも（卷五、八四七、旅人、天平二年）

雲に飛ぶ藥はむよは都見ばいやしき吾が身またをちぬべし（卷五、八四八、旅人、天平二年）

吾妹子は常世の國に住みけらし昔見しよりをちましにけり（卷四、六五〇、大伴三依）

古ゆ人の言ひくる老人のをつとふ水ぞ名に負ふ瀧の瀬（卷六、一〇三四、大伴東人、天平十二年）

石綱のまたをちかへりあをによし奈良の都をまた見なむかも（卷六、一〇四六、作者不審、天平十六年）

今の歌とともに旅人に三用例があり、他の三例は皆旅人、家持關係の作と考へられることも注意していいと思ふ。もつとも右の外に

朝露の消易き我が身老いぬともまたをちかへり（若反）君をし待たむ（卷十一、二六八九）

露霜の消易き我が身老いぬともまたをちかへり（若反）君をし待たむ（卷十二、三〇四三）

天橋も長くもがも高山も高くもがも月よみの持たるをち水い取り來て君に奉りてをち得しむもの

（卷十三、三二四五）

のやうなものがあつて、これら特に卷十三の作品などは、旅人以前と認めるのが通說らしい。この通說はなほ檢討の餘地があるものと思ふが、しばらく其點はさし置いても、作品を更に內容的に觀察すれば、旅人のやうに純粹にみづからの老を歎じた、いはば自己心境的な感動とは、相當距離があるといふことは言へるであらう。なほ考へればこの點では旅人以後のものも旅人のやうな趣はない。更に「をつ」といふ言葉を離れて、一般にかういふ老境を歎ずる感慨といふものは、旅人以前には見當らぬやうである。石川女郎の「古りにし嫗にしてやかくばかり戀に沈まむ手童のごと」（一二九）の如きは少し趣を異にした氣持だと思ふ。前に擧げた卷十三の歌の反歌「天なるや月日の如く吾が思へる君が日にけに老ゆらく惜しも」（三二四六）などでも違ふ。「わが盛またをちめやも」と表現された結果として見ると、ごく當然自然な感じであるが、旅人が支那文學に接してその特有の老境を歎ずる觀念などに親しんで居たであらうといふことをも考へて見ていいかも知れぬ。然も憶良の「水沫なす脆き命も栲繩の千尋にもがと願ひ暮しつ」（九〇二）などに比べても、なほ旅人の特異性が認められるやうである。「ほとほとに」は「殆」の一字を古來さう訓ませてゐるが、これは「吾殆見レ欺乎」（垂仁記）「幾失レ人哉」（雄略紀）、のやうな訓み方と關聯してゐるのであらうか。他に集中には「ほとほとに」と「に」を添へた例はない。又「ほとほと」といふ語としても集中この歌以前と認むべき用例はない。この言葉はこの歌に於いて、意味以外に同音を重ねたその音調からの感じが、一種の效果を醸し出してゐるやうであるが、さういふ感じも人麿の音韻技巧の場合などには

見當らなかつたものを思はせる。他の旅人の「つばらつばらに」とか「ほどろほどろに」とかの表現法と共通した一種の氣持があるやうである。最初に無技巧と言ひ無造作と言つたが、注意すると以上のやうに從來の作品になかつたものが見出されて、この歌の新鮮な境地といふ點が浮び上つて來る氣がする。

○　土屋文明

柴生田氏が老に對する旅人の感じ方を旅人特殊なものと說かれたのは甚だ面白いと思ふ。旅人のこの感じ方などは確に支那文化の影響下に成立した所と思ふ。旅人は恐らくこの時代に於ける尖端的文化人であつたに違ひない。さういふことを考へて「をち」の用例に對する柴生田氏のあげた所を見ると興が深い。一體旅人の作風はよい意味の素人藝といふべきであらう。この作の如きは旅人のさういふ作風と一致した境地なので殊に出來がいいのではないかと思ふ。落合氏の言はれた製作時期のことは、私もかつてこの歌を大伴四綱の「藤浪の花は盛になりにけり平城の京を思ほすや君」(三三〇)に對する答の歌ではないかと考へたことがあるが(すでに代匠記に其說あり)、今もその考へは變らない。旅人の卷六の「八隅ししわが大君の食を(を)す國は大和も此處も同じとぞ念ふ」(九五六)は、神龜五年小貳石川足人の「さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君」(九五五)に對する歌であるが、それからの心境の變化とすれば、間に妻の死去といふ如き事件を挾むのではないかと想像したのである。しかし卷六のは役人同士の贈答として考へ、この卷三の歌は家の子四綱に對する本心の吐露とみればさういふ都合のいい想像は成り立たなくなるかも知れないが、何れにしてもこの歌は太宰府在任やや長きにわたつた時の作ではあるまいか。又裏か

ら考へれば着任早々の方が却て望郷の念がつよいといふことも云へようが、私はやはり正面から考へて前說の方におちつくのではないかと思ふ。

○ 吾が命も常にあらぬか昔見し象(きさ)の小河(をがは)を行きて見むため　(卷三、三三二)

藤森朋夫

かつて見た懐しい自然の姿相に對して限りない憧憬を寄せてゐる。實體驗を想起せしめるものとして四句に「象の小河」を詠み込んでゐるが、この歌句は音調から來る快律と、何か幽邃感を聯想せしめるやうなものとから齎される潤ひのある詞として生かされてゐる。曾遊の印象深い土地であるからであらうが、この句を焦點として、作者の情感が一首に響いてゐるやうに思はれる。

「吾が命も」は字餘りになつてゐるが、この「も」には特に感慨がこめられ、寧ろ悲觀的な詠歎さへきかれる。「常にあらぬか」の「ぬか」は、もともと感動的にある事實に對する否定を意味する形であるが、この場合の用法は轉化されて、願望の意を表はすものとなつてゐる。かかる用例は「人も無き國もあらぬか」(七二八)等集中に散見する。またこの二句と相似た形に、「ぬか」の下に更に「も」がつづき願望を表はす例として、「川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黑馬の來る夜は常にあらぬかも」(三三一三)等が見出される。既に擧げられた「昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりにけるかも」(三一六)の後に、この作のあることを思ひ合せると、旅人は「象の小河」に對しては特に忘れがたい感慨を抱き、その深さの上に

なされたる詠出は、一見平明の如くではあるが、實感をあるがままに表現してゐて、深く心を惹かれるのである。

○

柴生田　稔

一二句に就いては、「眞葛はふ夏野の繁くかく戀ひばまことわが命常ならめやも」(卷十、一九八五)、「皆人の命も吾もみ吉野の瀧の床磐の常ならぬかも」(九二二、笠金村)の如き用例があり、金村の作は神龜二年五月吉野離宮行幸の時であるから、或は旅人も知つてゐたかと思はれる。然しこの「わが命も常にあらぬか」は如何にも實情的で沁々とした感慨になつてゐる。「昔見し象の小河を」のやうに前作の句を繰返して使ふのは、先に落合氏が言はれたやうに旅人の作に屢々あることであるが、これは人麿の長歌などでも目につく所である。のみならず現代の歌人などにも案外多く見られる傾向で、かういふ現象は歌の世界に於いては、簡單にその作者の語彙の貧弱とか變化の乏しさとか言ふだけでは濟まない問題かと思ふ。結句の「ため」といふ言葉に就いては後に更にいふつもりであるが、「ため」は集中案外古くは用ゐられず、天智天皇崩御の時石川夫人作の「ささなみの大山守は誰がためか山に標結ふ君もあらなくに」(一五四)位しかこの旅人の歌以前には見當らない。「ため」といふ言葉のみの問題はとにかく、「行きて見むため」といふ工合に結句に据ゑたのは或は旅人の新工夫ではないかとさへ思ふ。この歌以外に同じ五首中の「香具山の故りにし里を忘れぬがため」、卷五に於ける「青丹よし平城の都に行きて來むため」(八〇六)などが見出される。「ため」といふ助詞的に使用された名詞に依つて、他の用言助詞などで重々しく据ゑた場合

と異つた一種の新鮮味を出して居るのは、やはり注意していい所だと思はれる。

○

淺茅原つばらつばらにもの思へば故りにし郷し思ほゆるかも　（卷三、三三三）

山口茂吉

奈何にも旅人卿の歌らしい線の太い歌で、一氣に詠み下してゐて滯るところがない。それにも拘らず、どことなく哀韻がこもつてゐて捨てがたい佳い歌である。この三三一から三三五までの連作五首は、それぞれ同情を惹くところのある、哀れふかい歌ばかりであるが、しかしこの一首は他の四首に見るやうな強い主觀的の語句が目立たないでゐて、却つて旅人の生地に直接に觸れるやうな心持がするのである。つまりこの一聯五首の歌を綜合統一し單純化したといつたやうな味ひを、この一首から感得することが出來るやうに思ふ。そして他の歌よりも旅人の沈潛獨吟のしんみりしたところの特色がよく現れてゐるやうに私は思ふのである。それからこの歌は聲調の點から云つても快い調子をもつてゐるやうに思ふ。「淺茅原つばらつばらに」「故りにし郷し」「もの思へば……思ほゆるかも」などの類似音の語若しくは同じ意味の詞を重ねて一首が成立つてゐる。これは人麿などとは異り意識してやつたのではなく、案外容易に樂々と歌ひあげたもののやうに考へられるが、これは惡い意味ではなくて、底に強い望郷の心の動きがあるために自然に流露したもののやうに思へる。つまり沈潛獨吟の賜のやうに思ふ。それであるから三句に「もの思へば」と云ひ、また結句に「思ほゆるかも」などと云つて、普通ならば概念的に響くところであるが、さ

う感ぜしめない。これは旅人の人格のしからしめるところではあるまいか。不思議に餘響のあるものとなつてゐるのである。今私は旅人の人格云々と云つたが、私かにおもふに、旅人卿は俗に云へば律義者で、義理堅く實直で友情にも厚く、部下の面倒をもよく見たりして、下からも慕はれた人であつたのではあるまいか。さういふ義理堅いやうなところは、この一首からも窺ひ得られるやうな氣がするのである。

なほ「淺茅原」は、「つばらつばら」「ちふ」「をぬ」等に係る枕詞であるが、「つばらつばら」に冠して用ゐられたのは萬葉集中この一首のみである。又「つばらつばらに」と云ふ句も、集中この歌と卷十八の四〇六五の歌「朝びらき入江漕ぐなる楫の音のつばらつばらに吾家し思ほゆ」の二首あるのみである。卷十八の「つばらつばら」は、楫の音の審かである如くに審かに吾家し思ほゆと云ふので聽覺から來てゐるのであるが、この旅人の歌のは「淺茅原」が枕詞ではあるが、これを枕詞と見ずに「淺茅原のつばらつばらに」として、旅人卿が或る時に太宰府の郊外などを逍遙しつつ茫々とした淺茅原の一面の茅花（私の鄕里の北播地方では茅花のことをツンバラと云ふ）の起き伏してゐる有樣を見て詠まれた寫生の歌と考へることは出來ないであらうか。これは同じ旅人の歌で、この一首と非常に調子のよく似た一六三九の歌、「沫雪のほどろほどろに零り重けば平城の都しおもほゆるかも」の題詞に、「太宰帥大伴卿冬の日雪を見て京を憶ふ歌」といふ題詞があるのなども參考になると思ふ。さうすれば旅人のは視覺から來る「つばらつばらに」と云ふことになる訣である。私は一寸さういふ氣がしたのであるが、それにこの一聯は、どうも晩春の歌で五首とも時を同じくして作られたもののやうに思はれるのである。なほ、「故りにし鄕」といふのは故鄕を斯く詠みくだいたもので、これも實感の伴つたよい句である。天武天皇が藤原夫人に賜へる御

製（巻二、一〇三）「わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後」の「古りにし里」は、大原は後ノ飛鳥ノ岡本ノ宮の舊跡なるため古りにし里とよませ給へるものと云ふ一説もあり、故郷とも稍〻ちがつて居るやうに思はれるし、巻十一の「大原の古りにし郷に妹を置きて吾寢ねかねつ夢に見えこそ」（二五八七）などになると、「大原のふりにし里」を一つの歌の名所のやうに用ゐてゐるやうにも考へられる。

○　　　　藤森朋夫

一二句に於ける類音の反覆は流石に巧みである。この音調的布置の變化は自らに生動して、あたかも作者の感情が快律にのりきつてゐるやうに思はれる。人麿が用ゐ、また赤人、家持なども試みた「つがの木のいやつぎつぎに」（二九・三二四・四二六六）も同音の繰返しを採擇して效果を出したもので、この場合それらを合せ考へると參考になる。旅人らしい何か氣のきいた詠みぶりといふやうなものが、この邊に首肯出來るやうである。同じく「つばらつばらに」を詠みこんだ歌「朝びらき入江漕ぐなる楫の音のつばらつばらに吾家し思ほゆ」（四〇六五）は、三句までを序詞として表現してをり、素材を海にとつてゐるが、郷家を偲ぶ點に於てはこれと同想の歌と見られる。「ふりにし里」は、既に言はれた處であるが、「古郷之飛鳥はあれど」（九九二）、「藤原の古郷之」（二二八九）等に見られるやうな、榮えたあとの寂れた里の意ではなくて、「心ゆも我は思はざりきまた更に吾が故郷に還り來むとは」（六〇九）に於けるやうに、過去に於て自らが棲息した場處の意にとるべきである。卽ち大伴氏の舊地、次の歌の「香具山の故りにし里」を指すのであらう。尙この四句の原文は「故郷之」で、舊訓「フリニシサトノ」であつたのを、古義に「フリ

ニシサトシ」と訓み改めてから現在に至るまで多くこの訓が行はれてゐる。然るに「全釋」には「シ」と訓んでは餘り强すぎるから、舊訓の通りにしたいと述べてゐる。が、この場合は、寧ろ感情を强く表はす爲に置かれた助詞であつてこそ、はじめて落着くのであり、これを「の」としては感情が遲緩し格調上にも不足する所が生じるであらう。「シ」と訓み、しかもその「シ」は、「强く指示する」作用を効果的に示し得てゐるものとして、これを認容するのが妥當であらう。この一首形も整齊されてをり、技巧的な部分も挿入されてゐるが、それが良い意味に於て効を奏し、旅人らしい風格の一面を偲ばしめる作と思ふ。

○　　柴生田稔

私も第四句「故郷之」は、卷八の同想同巧の作（一六三九）の第四句「平城京師」と共に、「故りにし里し」「奈良の都し」と訓む方がいいと思ふ。この歌は前評のやうに哀韻の籠つた佳作ではあるが、やや情緖本位で内容が稀薄な傾もありはしないか。「つばらつばらに」は前述のやうに旅人らしい感じではあるが、かういふ同語を重ね伸して音調を整へる方法は、氣分に流れて緊密性を缺くおそれがある。やや似てゐても「ほとほとに」の場合は一語ではあり、適當に効果があがつてゐるが、この歌になると幾分その弊を見受ける。それは卷八の「ほどろほどろに」にも感ずる處であるが、あれは兎に角眼前降雪の寫實である點が强味である。この歌の一二句は、私も山口氏の言ふやうな場合と考へたいけれども、その實際をこのやうに枕詞的乃至序詞的に表現した處が、効果の間接的な所以だと思ふ。「故りにし里し」も「奈良の都し」の方が固有名詞の力が加はつてゐる。「大原の故りにし里」（一〇三）、「香具山の故りにし里」（三三

四）などと用ゐられた場合とも比較して味ふべきであらう。

萱草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れぬがため　（巻三、三三四）

柴生田　稔

○

この歌は結句の「不忘之爲」が問題で、古點ではこれを「ワスレジガタメ」と訓み、即ち「忘れないやうに」といふ意味になる。これに對し仙覺が「萱草ハ、忘憂草也。忘レジガタメトイフベキニアラズ。此歌ノ心者、カグ山ノフリニシサトノワスレガタクテ、心苦シケレバ、ワスレ草ヲ、ワガヒモニツケテ、シルシヲエテ、愁ヲノゾカントオモヘル心ナレバ」と説明して「ワスレヌガタメ」と訓んだ。更に宣長がこの訓に從つて「忘れぬ故にと云はむが如し。然らば忘れぬ故にいかにもして忘れむとて萱草を紐につくるなり」と解釋した。この仙覺説と宣長説とは結句を「忘れないから」と取る點では同じことだが、注意すると歌全體の解釋としてはやや相違がある。仙覺のは、故里を忘れ得ぬ心の憂を拂はうとして萱草をつけるので、和名抄に「兼名苑云、萱草一名忘憂」とある意味に忠實に從つてゐる。宣長のは、忘れ得ぬ故里を忘れようとして著けるので、「忘れ草」といふ名前と結句の忘れるといふ動作との關聯を主にしてゐるらしい。その後この宣長説が大體行はれてゐるやうであるが、然しその「忘れられないからどうかして忘れるやうに」といふのは何だか煩瑣な感じ方で、それならば「忘れむがため」と單純に言ふべきところではなからうかとも思ふ。この點眞淵が「不」を「將」の誤としてワスレンガタメと改訓したのは一見識だ

と思はれるが、無根據の誤字說に從ふわけには行かない。それで私は仙覺、宣長說では、殆ど同じことのやうだが仙覺風に考へる方がこの場合具合がいいと思ふ。集中「萱草」の用例はなほ三首あるが、

萱草わが下紐に著けたれど醜の醜草言にしありけり（卷四、七二七）

萱草わが紐に著く時と無く思ひわたれば生けりともなし（卷十二、三〇六〇）

萱草垣もしみみに植ゑたれど醜の醜草なほ戀ひにけり（卷十二、三〇六二）

いづれも「忘憂」の意味に取つて取れないことは無い。

然し更に私は、「ため」といふ語の意味から言つて、仙覺、宣長のやうに「忘れぬがため」を解釋出來るものかその點に疑問を持つのである。集中の用例では「ため」といふ語は

鶯の待ちがてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため（卷五、八四五）

わが背子が歸り來まさむ時のため命殘さむ忘れたまふな（卷十六、三七七四）

吾妹子が心なぐさに遣らむため沖つ島なる白玉もがも（卷十八、四一〇四）

この時雨いたくな降りそ吾妹子に見せむがために黃葉採りてむ（卷十九、四二二二）

などと言ふ具合に、すべてその上に著くものなり動作なりを對象乃至目的として或る事柄の行はれる場合に用ゐられてゐて、「ゆゑ」といふ語がすべて、

わがゆゑに思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ（卷十五、三五八六）

筑紫なるにほふ兒ゆゑに陸奥（みちのく）のかとりをとめの結ひし紐解く（卷十四、三四二七）

塵泥（ちりひぢ）の數にもあらぬわれゆゑに思ひ佗ぶらむ妹が悲しさ（卷十五、三七二七）

まくらがの許我の渡のから楫の音高しもな寢なへ兒ゆゑに（卷十四、三五五五）

などのやうに、其上に著くものに因つて或事柄の行はれる場合に使用されてゐるのとは、用法上の區別が存するやうに思はれる。普通「ため」と言へば兩方に用ゐられるが、萬葉集の用例では、この「忘れぬがため」の一例だけを「忘れぬゆゑに」と解釋するのは少し危いやうな氣がする。なほ古事記に「ために」と訓んでゐるのが三例、「……ゆゑ」が一例、「…ゆゑに」と訓んでゐるのが二十例あるが、やはり

我爲ニ汝命一作ニ善議一

卽爲レ鎭ニ御腹一取レ石以纏ニ御裳之腰一

初土は膚赤らけみ底土はに黒き由恵三栗のその中つ土を頭著く眞日には當てず眉畫き濃に畫き垂れ

僕者欲レ罷ニ妣國根之堅州國一故哭

といふやうに用法が分れてゐる。もつとも日本書紀の訓讀に「汝國爲ニ吾國一所レ破非レ久矣」「夫惡子孫巳爲ニ百姓一所レ憚」の如きがあるのを認めれば、以上の區別も成立たなくなるのであるが、この點は更に漢語の「爲」と「ため」との關係などをも考へることとして再考を他の機會に讓りたい。それで勿論斷定的には言へないけれども、ただ前述のやうに萬葉集としては、相當多數の用例が皆一方的なので、この場合も「忘れないやうに」と解釋するのが穩當のやうに思ふのである。そして訓み方としては、集中これ以外に否定形から「ため」に續いた例は無いが、他の用言から續いた假字書きの例は、「夜良無多米」（四一〇四）「美勢牟我多米爾」（四二二二）「安波牟多米」（四三〇六）「由吉帝已牟丹米」（八〇六）など未來を示す形式である點を考へると、この場合も或は古點のやうに「ワスレジガタメ」と訓むのが妥當かも知れぬ。こ

の點もなほ考へるべきである。

次に以上のやうに結句を解釋した場合「萱草わが紐につく」との關係が問題になるわけであるが、これも「忘れないやうに」著けるのでも解釋出來ないことは無いと思ふ。即ち「忘れ草」の「忘れ」といふ語感に重點を置けば、「忘却」といふ現象に關係した草といふ氣持であるから、心理的に肯定にも否定にも移動し得る餘地があるのではないかと思はれる。一方內在的な氣持としては、萱草が忘憂の草であるといふ感じも働いてゐるとすれば、「わが紐に著く」といふ動作が現代人にもかなり自然に受入れられるのではないだらうか。或は又萱草の觀念が毛詩の諼草等から來てゐるものならば、旅人の使用心理には土屋氏のいはゆる文化人としての趣味を考慮に入れてもいいかも知れぬ。なほ「忘れ草」と似た語に「忘れ貝」があるが、これは

若の浦に袖さへぬれて忘貝拾へど妹は忘らえなくに（卷十二、三一七五）

あま處女かづき取るとふ忘貝世にも忘れじ妹が姿は（卷十二、三〇八四）

といふ具合にも用ゐてゐるが

等のやうに忘れない場合の序詞的表現に多く使用されてゐる。即ち「忘れ」といふ語感を主にしてゐるらしい。この事も參考になるかと思ふ。もつともこの「忘貝」の場合には「忘憂」の意味は不明で、前例のやうに或る對象を忘れる場合に用ゐてゐる。この點萱草の方は漢文學との關係などがあつて面倒であるが、「戀忘貝」「戀忘草」などと同じやうな用法のある方面から見ると、一般的には忘草も忘貝も似たやうな氣持になつてゐたかも知れぬ。最初に述べた「萱草」の用例三首などは或はこの考へ方の方がいいかも知

れぬ。以上疑問の點が多いが、なほ諸氏の説を聞いて考へて見たい。

○　土屋文明

柴生田氏の「ため」に關する引例は理由あることのやうに思はれるが、しかしこの歌の場合萱草は忘れようためにつけるといふことに歸着するのではないかと思ふ。率直簡明にいへば眞淵の改訓の如く「ワスレンガタメ」とあるべき所であるが、旅人は前にも述べた如く文化人であり教養人であるから、その旅人のその方面が、この一首の理路行文にあらはれて來て、幾分まはりくどく歌つて居るのではあるまいか。

○　五味保義

仙覺や宣長のやうに解するには、結句の「ため」といふ語義につまづく所があるのは、柴生田氏と同様な感じを持つ。特に新釋に「人妻ゆゑに」(二二)の「ゆゑに」が「何々のためのに」と譯せられるから、この歌の「忘れぬがため」も「忘れぬがゆゑに」と解釋出來るといふのは、現今の「ため」「ゆゑ」の關聯を萬葉集に直ちに持つていつた如くであつて、やや早急の感があり、どうも不安定なところが殘つてゐるとおもふ。土屋氏の評のやうに、そこに旅人の文化人云々の見方を持つて來て考へると、さうも思はれるが、旅人の作風には又一面とどこほらぬ率直な詠風もたしかにあるのであるから、この「忘れぬがため」と「萱草」の作用とをさう密接に關係づけることなしに考へてもよくはあるまいか。今のところ私は柴生田説に傾いて居る。

○　　吉田正俊

柴生田氏が「忘貝」の場合に必ずしも「忘る」に因果關係がなくこれを緣由として「不忘」といふ感慨も起り得るといふ例をあげ、猶又「ため」といふ語義を理由としてひどく嚴密に解釋し、五味氏も亦これに贊したが、私は聊之に疑問を持つものである。「忘貝」の歌の場合は集中いづれも序詞中にあり、作者の主たる感慨は「不忘」にあるので、この場合「忘貝」は單なる心持の發想起點にすぎない用ゐざまである。之に反してこの歌に在つては「萱草吾が紐につく」が作者の主たる動作で、作者はまづ何よりも先に當時いはば忘憂の習俗ともいふべき動作の表現句を借りて自己の感慨を敍べたのである。その忘るべき對象としての「香具山の故りにし鄕」は作者の胸中すでに形を成してゐて、强ひて云へば「忘れむがため」といふ表現は蛇足とでもいふべき場合であつたらう。すでに斯の如くであれば作者はその表現を「忘れぬがため」としても或は又「忘れむがため」としても、それはさまで重要視したところとならなかつたのではあるまいか。更に云へば「忘れむがため」とすべき表現をその單なる作者の語感に對する好みから不用意に「忘れぬがため」としたとも考へられるのである。これは恰も「惜し」といふ考へを表現するに「惜しからめやも」といふ類であらう。猶一首全體の歌の價値から云つても、忘れないやうに萱草を紐につけるよりも、忘れるやうに萱草を紐につけるの方が、廻りくどいといふ評もあつたが望鄕の感としてはすなほではないかと思ふ。私はやはり以上の理由で土屋氏と同じく古來の說に從ふものである。

吾が行は久にはあらじ夢の囘淵瀬とはならずて淵にしあらも　（卷三、三三五）

〇　佐藤佐太郎

三句「夢の囘淵」は、卷七の芳野作と題した五首中にも「夢の囘淵言にしありけり」とあり、懷風藻にも吉田連宜の從駕吉野宮詩に「夢淵」の語があつて、吉野川にある淵の名である。結句の「淵有毛」は、「フチニアリトモ」「フチニテアレモ」「フチニテアレヤモ」「フチニアリコソ」「フチニテアルカモ」などの訓があるが、私は一二句の語氣を承けるこの場合は願望の結句でなければならないやうに思ふ。さうすれば「フチニテアレモ」「フチニテアレヤモ」などであらうか。初句「吾が行」は、例へば攷證に「吾行は、ゆくといふを體言にして、下へつづけたり。ここは、吾旅行といふに同じく、帥の任にて太宰府に下りしかど、任も限りあれば、吾この旅中も久しくはあらずと也」といふやうに、先進が解釋してゐるが、私には此の解釋は未だ全的に諒得し難い點がある。

萬葉集にある「ユキ」の用例について見るに、

君が行けながくなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり（卷五、八六七）

吾が行は七日は過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風にな散らし（卷九、一七四八）

君が往もし久ならば梅柳誰とともにか吾が蘰かむ（卷十九、四二三八）

此他數例あるが、何れも「行旅」「出旅」とでもいふべき語として「ユキ」を用ゐて居り、「ユキ」は「ユ

ク」が名詞になつたので、本來「ユキ」は一定の出發點を前提とした言葉だからこれが自然であり、旅人が筑紫にゐて自ら「吾が行」と云つたとするのは言語の自然に添はないものであると思ふ。殊に、ここに引いた一七四八の歌は「春三月諸卿大夫等下難波時歌」といふ長歌の反歌で、長歌には「殘れる花は　須臾は　散りな亂りそ　草枕　旅行く君が　還り來むまで」といふ句もある。又四二三八は家持宅集宴の歌であるが、左註に「右判官久米朝臣廣繩以正税帳應入京師仍守大伴宿禰家持作此歌」とあり、旅人のこの歌を考へるのに有益である。旅人の「吾が行」も、これらと同じ場合と解釋してよいのではあるまいか。

そこで私見を言へば、この旅人の歌は、或は太宰帥に任官した旅人が當に筑紫に下らんとする時に奈良に於て作つたものではなからうか。さうして見れば、前に引例した「君が行けながくなりぬ」（八六七）の歌が天平二年筑紫に在る旅人に贈つたもので此邊の關係も具合よく、一首の感情も順直で無理なく解釋が出來る。もつとも、「吾が行」をば私の如き前提の下に解しても、筑紫を出發する時の作とする想像も可能のやうであるが、併しそれでは如何にも不自然である。次に、題詞の「帥大伴卿歌」に就いていへば、攷證が三一六の歌のところで「集中極官をしるす例なれば、旅人卿を中納言としるすべきよしなけれど、こは行幸のをり、中納言にておはしたりしかば、その當官を書るなるべし」と云ふ如く既に帥に任官して居つたからかう書いたと解釋すべく、旅人の太宰帥任官は神龜二年で、此年筑紫に下つたとしても、その間には相當期間の時日が介在したものと想像されるから、これも亦矛盾する事がない。

以上私は三三五の歌を奈良に於ける作歌と推定したが、更に「帥大伴卿歌五首」一聯をもさう想像して味ひたい。この五首は一様に故郷思慕の情を歌つた連作の態をなすもので、時を隔て處を異にした作と見

做し難いためである。そして他の四首も亦奈良に於ける離京時の作として受納の出來るものであるが念のため一言したい。

三三一の歌でいへば、旅人の太宰帥任官を神龜二年として、此時既に六十一歳の老年であるから「吾が盛また變若めやも」の感慨は自然であり、「寧樂の京を見ずかなりなむ」といふ嘆きも離京時の作として更に切實を加へるものと思ふ。次に三三二の歌で、「昔見し象の小河を行きて見むため」とあるが、「象の小河」は吉野だから「行きて」と云つて決して不自然でなく、又神龜元年作と推定せられる旅人作三一六に「昔見し象の小河を今見れば」の句があるが、さういふ以前の經驗を含めた語として、神龜二年の作と假定しても無理なところがない。更に三三三及び三三四の歌に「故りにし鄕し思ほゆるかも」「香具山の故りにし里」の句があるけれども、同じ旅人の天平三年の作に「在寧樂家思故鄕歌二首」（九六九・九七〇）があり、「神名火の淵」「栗栖の小野」の句がある程で、これらの地は契沖が「相傳せられけるか」と想像した如く、奈良に居て「フリニシサト」と云つて聊も不自然でない。寧ろ「故りにし鄕し思ほゆるかも」「香具山の故りにし里を忘れぬがため」と歌つて「寧樂の京し思ほゆるかも」「寧樂の京を忘れぬがため」などと云はなかつたのは、却て筑紫に於ける作歌でない事を傍證するものといふ氣もする程である。

○　　　　落合京太郎

「吾が行」は「君が行日長くなりぬ」の行と同じく、旅行きの意であらう。卽ち此處では旅なる筑紫に在ることを指す。赴任後五年にもならうとする筑紫も、作者には旅を行く感じがして居たのであらう。讀

み來つて此一首に到ると何か悽愴の感さへする。「夢の囘淵」に言掛ける形をとつては居るが、同時に、消えむとする希望の燈火をかき立てながら、作者が吾と自らを搔口說き祈つて居る樣子さへ見えるのである。「瀨とはならずて淵にしあらも」といふ所に作者の自然觀もはつきり現れて居る。結句は色々の訓が行はれて居るやうであるが「フチニアリコソ」といふ訓が僕には捨て難く思へる。

○　吉田正俊

佐藤氏が萬葉集にある「行（ゆき）」の用例を擧げて、この旅人の歌は正に筑紫に下らんとするとき奈良において作つたものではなからうかといふ說を出してゐる。佐藤氏の引用された歌の中

吾が行は七日は過ぎじ瀧田彥ゆめこの花を風にな散らし（卷九、一七四八）

とは全體の結構が似てゐるし、この一七四八の歌の場合は成程まさに旅立たむとする時の氣持と解釋するのが妥當であらう。しかしながらそれは單に「行」といふ言葉が一定の出發點を前提とした言葉であるからと嚴密に解釋しなくとも、「この花を風にな散らし」の「この」といつた邊から來る感じではなからうか。萬葉集にあつては「行」「來」さへも同意語に用ゐられた歌もあるくらゐだから、この歌の「行」も從來の說通り旅行といふ具合に漠と考へて差支ないものと思ふ。佐藤氏は筑紫に數年滯在しながら旅行とまで言へるかどうかに疑問を持たれたが、それは落合氏の說のごとく、「赴任後五年にもならうとする筑紫も、作者には旅を行く感じがして居たのであらう」と解釋出來ないことはない。もつとも私もこの歌一首のみを切離して考へるならば、佐藤氏の說も十分に肯定し得らるるやうにも思ふが、これは佐藤氏のやう

に「行」を嚴密に解釋しての結果からのみ起る事とは思はぬ。佐藤氏はこの歌を奈良に於ける作歌と推定して、更に「帥大伴卿の歌五首」一聯をも奈良に於ける離京時の作であると類推し、その一首一首についてその然る所以を詳說されたが、これは如何であらうか。私は佐藤氏の說にも拘らず、前四首は離京時のあわただしい感慨でなく、むしろ筑紫に數年の日月を經て靜に京を偲ぶ情懷であらうと思ふ。この類推から、佐藤氏とは逆に筑紫說を採つて、更に思ふに、この「吾が行は」の歌は一七四八の歌と比較して心持が幾分異るやうで、「夢の囘淵瀨とはならずて淵にしあらも」の幾分稚拙で理窟めいた感慨も、遠く邊土にあつて故鄕を思ふがゆゑに一種の哀韻が加つて來るやうな氣がする。私のこの說は甚だ主觀的で困るけれども、現在のところどうも仕方がない。

君がため釀(か)みし待酒(まちざけ)やすの野に獨や飮まむ友無しにして　（卷四、五五五）

○　　藤森朋夫

この歌は太宰大貳丹比縣守が民部卿に遷任された時に贈つたもので卷四に出てゐる。「萬葉集年表」では天平元年（旅人六十五歲）の事と推定してゐる。「釀みし待酒」は集中に類例のない特殊の歌句である。「釀む」は、酒を「かもす」に云つた古語で、米とか粟のやうな穀物を口に入れて嚙み、唾液を混入して醱酵せしめたといはれる原始的な酒造法から來てゐる。用例は古事記の中にも、「八鹽折の酒を釀み」（上卷）、「酒(みき)を釀むことを知れる人、名は仁番(にほ)」（中卷）等とあり、更に歌の中に詠まれてゐるものとしては、

建内宿禰の歌に「この御酒を釀みけむ人は其の鼓臼に立てて」（記・中卷）がある。又「釀二八醞酒一」（神代紀）、「大物主の介彌し御酒」（崇神紀）等が見られ、更に集中にも卷十六に「味飯を水に釀み成し吾が待ちしかひは曾てなし直にしあらねば」（三八一〇）が擧げられる。待酒は古事記中卷に、品陀和氣命が敦賀から大和に御還りになられた所に「其の御祖息長帶日賣ノ命待酒を釀みて獻らしき」とある。人を待ちうけて飲ませる爲の酒の意であらう。「やすの野」は、今の太宰府址から東南二里餘の所に在る地で、當時太宰府の官人たちが遊行した野と思はれる。一首は前述の如く同僚の轉任に臨んでの送別的贈歌である。かうした機會の歌は、兎角形式的儀禮的になりやすいのであるが、これは作者の眞情が比較的よく表明されてゐるやうである。遠き異國に在る身の寂寥を歎き、老を沁々と感ずる作者が望郷の念やる方ない一方、又心の友を送らねばならなかつた。その心境を思ふとまことにあはれである。これは離れ行くものに對する單なる挨拶的詠作とのみは見られまい。そこに人間的な心情の動きが感じられる。結句の「友なしにして」は如何にも簡明であるが、この一首の据りを安定ならしめ、深い友情さへ感ぜしめられる。同じ作者の沙彌滿誓への返歌「草加江の入江にあさる蘆鶴のあなたづたづし友無しにして」（五七五）にも、この作と等しく結句に「友無しにして」を用ゐてゐるが、やはり效果をあげてゐるやうに思はれる。

○　　　　　　　　　　吉田正俊

前評者も言及されたところであるが、人に贈れる歌としては、作者の日常生活に準據して詠まれてゐるので流石によそよそしいところが少く、半ば獨詠の風をなしてゐるのは注意してよい點であらう。しかも

自己の感慨を粉飾しないで投げ出すといふやうな行方で、そこに哀韻も帶びて來てゐるやうである。しかしながら稍標準を高くして論ずれば、この歌も亦對詠歌の常として何處か心持の形式的なところが感ぜられて物足りない。結句の「友なしにして」については、私は前評者といささか考へを異にして、同じ結句でも「草加江の入江にあさる蘆鶴のあなたづたづし友無しにして」（五七五）に於けるが如く緊密でなく、この一首にあつては、むしろここに作者の人に贈る歌といふ意識が現れ過ぎてゐて、餘計に形式化を覺えしめるやうに思はれる。

○　　　　　五味保義

結句に就いては吉田氏の批評に贊成で、どこかよわい處があると思ふ。この結句は割合用例少く、また比較的新しいものが多い。旅人は「友無しにして」を二度使用してゐるがそれと類似の用例には

　君に戀ひいたもすべなみ蘆鶴の音のみし泣かゆ朝夕にして（巻三、四五六）

　若き子のはひたもとほり朝夕に音のみぞ吾が泣く君なしにして（巻三、四五八）

といふのがある。而もこれは旅人の薨じた時金明軍の咏んだ作であるからこの作者には旅人のこの句法が一種の魅力となつてゐたのであらう。その外では

　畏きや命かがふり明日ゆりや草が共寢む妹なしにして（巻二十、四三二一）

　韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ來ぬや母なしにして（巻二十、四四〇一）

といふ防人の二首がある。猶これに類似の例は、「鴨ぞ鳴くなる山陰にして」（三七五）、「石木にもならまし

ものを物思はずして」(七二二)、「梅の花咲く含めらずして」(一六四八)等十數首に上るけれども、旅人以前と思はれるものがなく、又その多數が作者不詳の作の中に見出される。一首の調べに餘韻をのこす如く見えるが、それは形の上でさう感ぜられるので、氣持は却つて流動せぬ結果を生じてゐるやうに思はれる。この句法はまとまり易いといふ難があるのではないか。もつともさうした例の中にあつて旅人の「友なしにして」は何處か透つたところがあると思ふ。さうして第四句との緊密性に於ても「獨や飲まむ」から、きはめて自然に響き通ずるものがあつて、一種甘美な味ひがあると思ふ。「待酒」といふ詞はやや通俗的な感じがあるが、これは今の私の語感だけなのであらうか。

沫雪のほどろほどろに零り重けば平城の京師し念ほゆるかも　(巻八、一六三九)

○　　　　堀内通孝

巻八、冬雜歌の部にをさめられ、「冬の日雪を見て京を憶ふ歌」といふ題がある。やはり太宰府在任中の作と認められる。この歌も素直な點で旅人的である。「ほどろほどろ」は、離れ離れに、はらはら切り離れてふる意で、この表現技巧が一首に緊密に働いてゐる。苦心の見える歌ではないが、その點が旅人らしいのである。意識的に無技巧の技巧といふ事も考へられるが、それでは、ここまでは至りつけないであらう。

○　佐藤佐太郎

上代人殊に萬葉の歌人にとつては言語が生活に直接であり、語としての概念的意味表象以外に一種の韻があつて、これは理論を超えた語の息吹として後世の我々に強く響くのである。旅人について見てもやはり同様であつて、既に言及された如く同音を重ねたり同巧類似の手法が旅人には相當にありながら、それでゐて一首一首の語がそれぞれ個の相を具備しつつ不思議に生きてをり、例へばこの歌の「ほどろほどろに零り重けば」といふ一句にしても、言葉の意味以外に作者の肉聲に接する如き哀愁の情調を感受することが出來る。此一首は、歌調が太く直線的であり、その中に感情の旋律があつて、旅人の歌の中でも秀れた歌である。旅人には「讃酒歌」によつて代表される他の一面もあるが、この「沫雪のほどろほどろに」の歌などは旅人の天成の歌人であることを物語るもので、堀内氏が「素直な點で旅人的である」と言はれたが、私はもつといい意味の愚直とでも云ふべく、感情に盲目的に沈潜し得た所があつたやうに思ふ。それから「ほどろほどろ」といふ句は氣分を主にした語で、齋藤茂吉先生の說（新撰秀歌百首）の如く視覺も聽覺も共に含む語として受入れたいと思ふが、これは例へば人麿の「み山もさやに亂れども」の「さや」などと共に比較的無理なく成立ち得るのではないかと思ふ。

○　吉田正俊

この歌と殆ど同巧異曲ともいふべき「淺茅原つばらつばらにもの念へば故りにし郷し思ほゆるかも」

（三三三）と比較すれば私はどちらかと云へばこの歌の方に重厚さをよけいに感ずるのである。それは前者にあつても勿論「淺茅原」の光景を現實に見て、由つて來つた感慨であらうが、それが心持に融合しすぎてその嘱目の情景がやや稀薄に流れてしまつたのに反し、後者に於ては「沫雪のほどろほどろに零りしけば」と飽くまでも現實を鮮明にし而も「零りしけば」から下句に連續する工合の妙を出してゐる點にあるのではないかと思ふ。

（昭和十二年一月）

三十一　大伴旅人の歌八首

柴生田　稔

○

橘の花散る里のほととぎす片戀しつつ鳴く日しぞ多き（卷八、一四七三）

神龜五年旅人の妻大伴郎女が太宰府に病死したとき、石上堅魚を勅使として喪を弔せられた。事終へて後勅使及び太宰府の官人等が記夷城に遊んだとき、堅魚が「ほととぎす來鳴き響もす卯の花の共にや來しと問はましものを」（一四七二）と詠じた歌に答へたのが即ちこの歌である。堅魚の歌は三四句あたりが一寸不明瞭で、諸説があるが、多分をりからほととぎすの鳴くのを聞いて、亡き人の魂も共に訪れたことであらうかと旅人を慰める意味で歌つてゐるものと思はれる。この答歌は、そのほととぎすの鳴くといふ所を受けて、更に橘の花を取合せ、亡き妻を慕ひ嘆く氣持を、散る花に片戀して鳴くほととぎすによそへたものと、解釋すべきであらうか。橘とほととぎすとの配合は、集中割合に後期の風流趣味のやうに見受けられるが、これと旅人との關係は別に考へて見ていいことかと思ふ。ただこの歌では、故人を思ふ哀情か

ら出てゐるので「片戀しつつ鳴く日しぞ多き」といふ句が、旅人自身の直接な嘆きとして迫つて來るのを覺える。それで、解釋としては上述のやうに、ほととぎすが片戀して鳴くといふことに歸着するのであらうが、氣持の上ではむしろ三句までは序として、四五句は一氣に自己の感懷をのべてしまつたととりたい位である。「片戀しつつ鳴く」までは容易に言ひ得ても、「日しぞ多き」に至つては、既に「寄物」的態度を超えた表現ではあるまいか。ほととぎすに託したのは堅魚の歌に答への作爲であつて、その手際も堅魚の歌に比べて自由で鮮かであるが、それが更に心情の流露を妨げてゐない點に敬服するのである。

○　五味保義

この歌の製作された事情は前評の如くであるが、それは前評に擧げられた堅魚の歌の左註に明記される所で、從來それに依つて旅人の妻の死期が神龜五年初夏の候と推定せられてをる。ここに擧げられた二首の內容、及び次に批評される歌の左註の神龜五年六月二十三日、及び憶良が旅人の妻の死を悼んで旅人に代つて詠んだといはれてゐる、卷五の日本挽歌(七九四)の反歌五首の左註に、神龜五年七月二十一日とあることと共に、旅人の作歌年次推定の材料になつてをり、さういふ意味からこの唱和二首は注意されてゐるものである。「片戀しつつ鳴く日しぞ多き」と詠嘆した旅人のこの一首は、以上の旅人の經歷探索の材料としての價値以外に相當味ふに堪へる眞實性があること、前評の說及び評價に贊成する所であつて、特に堅魚の「卯の花の共にや來しと云々」の表現に比較して「ほととぎす片戀しつつ云々」の方が、略同樣趣向でありながら、旅人の方に物の核心に觸れてゆく氣持のある所は、比較して見て大變參考になる所で

ある。ただし旅人の代表作として數首を選ぶ場合にこれが入るかどうかは問題である。ついでに附言すれば、この歌は在來次の七九三より後に創作されたやうに思はれてゐるが、この方が却つて先であると思はれる節もあるので、前例を破つてこれをまづあげて見たのである。私はほととぎすも橘の花も全くの序詞的素材でなく、現前の事實でそれを唱和の際巧妙に活用したものと思ふ。

○　　　　土屋文明

この歌は前評者の言はれた通り、唱和の歌であるから、そこが幾分よそよそしく響いてをるやうに思はれる。殊にその相手方が勅使であるから、幾分堅苦しい氣持が避けられなかつたものと見える。前回に引いた「やすみしし吾大君の食國(をすくに)は大和も此處も同じとぞ念ふ」(九五六)などともその點で通じてゐるのであらう。しかし、さういふ場合を斟酌して同情して對へば、どこか素直な所があつて、「橘の花散る里のほととぎす」の句の形式的に響くのなども決して反感を呼ぶ程ではない。

世の中は空(むな)しきものと知るときしいよよますます悲しかりけり　(卷五、七九三)

○　　　　落合京太郎

この歌の製作された時期は、題詞を讀んだ時の感じは、天平二年六月に旅人が瘡脚を疾んだ際庶弟の稻公と姪胡麻呂の兩名を勅許を得て筑紫に呼んだことが、五六七の歌の左註によつて知れるので、その時の

作かとも思つたが、それはこの歌の左註の年月日と相違するので右の推定は採用出來なかつた。それで、自分はこの題詞に「但依兩君大助」とある兩君とは、前揭の歌に言はれた勅使の石上堅魚と、これに副うて來た副使を指すのであらうと想像してゐる。前に擧げた「ほととぎす來鳴き響もす卯の花の」及び「橘の花散る里のほととぎす」等は、柴生田氏、五味氏の說もあつたが、寧ろ序詞的に解してよいので、必ずしも事實に卽したものと考へなくてもよいのであるから、一四七二、一四七三の兩首はこの七九三の製作された後、しかも葬送の事が濟んでからの作と見てよいのであらう。それゆゑ、この七九三の作は、旅人の妻が死去した直後、勅使として來た堅魚及他の一人に示した作と見てよいのではあるまいか。

歌の意は明かで、多く說明を須ひない。佛敎に所謂無常觀を言つてゐるのであるが、それが佶屈な概念の羅列に終らないで、作者が諦念俯俛して居る態度を一種の柔軟性をもつて滯らず表現してゐる所は、注目すべきであると思ふ。旅人の歌には、鑑賞する段になれば思想をテーマにしたやうな歌があり、これもその一であるが、孰れも自然に味まれてゐてその聲調に破綻がない。これは旅人自身の天性にもよるのであらうが、恐らくは作者が思想そのものを歌はうと意識してゐない製作態度による所が多いのではあるまいか。憶良の歌と比べると特にさういふ感が深い。

○　　　　　　　　　　**五味保義**

詞書の「兩君」について、落合氏に勅使及びその副使ではないかといふ推定があつたが、更に思ふに、「凶問に答ふる歌」ともあるし、正式な朝廷の使に對したといふよりは、作者の私交上の贈答往來の一首

ではないかと考へられる。その「兩君」は誰を指すかといふことは、この一首を味ふ上に是非明かにする必要があるのではないが、想像をほしいままにすれば、憶良ともう一人の歌友ではないであらうか。「大助」とあり、「傾命纔に繼ぐ」ともあり、老齢にして太宰府在任の久しい旅人が、作歌とその歌友に心を寄せてゐたであらうことを思ふと、これは必ずしも無理ではないと思ふ。殊にこの歌の次ぎに憶良の日本挽歌が掲載され、その内容は前言の如く旅人の一身に關聯すること深いものであるやうに思はれるから、以上のことを考へて見たのである。又この卷五の成立が、憶良に關連することがかなり密であることなどが、參考にならう。前評にある稲公と胡麻呂とすれば、兩君の名前が揃つて具合がよいやうであるが、やはり憶良と考へた方が無理が少いと思ふ。

○　　　　　　　　　　　　佐藤佐太郎

落合氏はこの歌を旅人妻死去直後の作と想像され、從つて妻死去の時期をばこの歌の左註「神龜五年六月二十三日」（陽曆八月七日）を中心として考へ、卷八の勅使堅魚との贈答の歌を、この歌より後に作られたやうに解釋してゐる。然し惟ふに前の一四七二の歌の左註には「共に記夷城に登りて、望遊する日、すなはちこの歌を作る」とあり、「橘の花散る里のほととぎす」の句を序詞的に受取るとしても、實際はその時ほととぎすが頻りに鳴いてゐたと解釋する方が自然であり、さうすれば旅人の妻は晩春から初夏の交にかけて歿したものと思はれる。殊に半ば旅人自身の氣持になり、半ば自家の同情を旅人に寄せた歌と見て殆ど間違のない憶良の日本挽歌の反歌には、「妹が見し楝の花は散りぬべし」といふ句もあり、大體さ

う解釋して誤りないものと思はれる。

さて、この歌の旅人記の題詞を見れば、「凶問累りに集る。永く崩心の悲を懷き、獨斷腸の泣を流す」とあつて「永く崩心の悲を懷き」といふから、妻死去の後數旬を閲した時の作歌とみても受取れる訣で、さうすれば左註との關係も無理なく諒得出來るのではあるまいか。又、題詞の「凶問累りに集る」は、代匠記に「今歌後註に六月二十三日とあるは私の弔は勅使よりも遲く」と想像した如くであつてもよいと思ふ。妻死去の時期及びこの歌の作歌の時期を私は凡そ以上の如く考へるが、題詞に「獨斷腸の泣を流す」といふやうに、この歌は、旅人が私かに人生無常の感慨を遣るために一首をなしたものと想像することが出來るほど獨詠的色調が濃厚である。直接の動機は妻の死去であることは勿論であるが、必ずしもそれに局限する必要がなく、抒情詩本來の通有性をもつた悲哀感として讀者に迫る聲調がある。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

旅人の亡妻に對する感激は旅人の遺作の殆ど半數以上に亙つてをるのであるが、これは其中でも最も直截に歌はれてゐるので、すでに屢々取上げられた歌であるが、これ等も旅人の味風とよく一致してをる歌境なので、その點が申分のない作となつたのである。滿誓の「世の中を何にたとへむ朝びらき榜ぎ去にし船の跡なき如し」（三五一）などは譬喩を用ゐてゐるので、一見巧みにも見え分り易くもなつてゐるのであるが、この歌の方にはさういふものがなく、單純に始終してをる。旅人は滿誓を敬ひ交つてをつたらしいから、思想の上では何か通ずるやうなものがあつたかも知れないが、表れる所になると違つて來る。さう

いふ所も興味を牽くのである。

愛しき人の纏きてし敷妙の吾が手枕を纏く人あらめや　（巻三、四三八）

藤森朋夫

○

題詞に「神龜五年戊辰」とあり、巻八（一四七二）の左註にも、「神龜五年戊辰太宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇レ病長逝焉云々」とあるから、この年に愛妻を逝くしたことになる。従つて同じく題詞の「思二戀故人一」は、亡妻を思慕する意を表はすことに解せられる。そして、左註によれば、この一首は、妻の死後數旬を經て製作せられたことを知る。

先づ語句について二三を見る。第一句「愛」は、童蒙抄に「ウルハシキ」とよみ、略解はこれに從ひ意味は「うらぐはしといふに同じ語也」と云つてゐるが、これは舊訓「ウツクシキ」のままでよく、意味も、「人を愛し言ふ」と見て差支ないであらう。この意味の用例を探るならば、孝德紀の歌に「于都倶之伊母我云々」、齊明紀の御歌に「宇都倶之枳阿餓倭柯枳古弘云々」とあり、集中には、巻二十「愛し母にまた言問はむ」（四三九二）、「愛しけ眞子が手離り島傳ひ行く」（四四一四）、「愛しみ帶は解かなな」（四四二二・四四二八）、巻五「愛しく其が語らへば」（九〇四）等が見出される。

第三句「敷妙の」は枕詞であつて、集中には三十二例ばかりある。この歌に見るやうな、枕に續けたのは約十九例ある。それらにつき作者の判明してゐるものを年代順にながめると、やはり人麿の用例が最初

に置かれるやうである。

敷妙の　手枕纏きて　劍刀　身に副へ寢けむ　若草の　その夫の子は（卷二、二一七）

浪の音の　繁き濱邊を　敷妙の　枕にして　荒床に　より臥す君が（卷二、二二〇）

右は二首とも人麿の長歌の一部を抄出したのであるが、これについでは、藤原宇合の「敷妙の枕の邊」（卷一、七二）、それから旅人のこの歌といふ順序になる。旅人以後に於いては、安貴王の「敷妙の手枕纏かず」（卷四、五三五）、赤人の「敷細の枕も纏かず」（卷六、九四二）外十四例ある。旅人はやはり人麿等の如き先進の歌句の用法に影響されるところがあつたと見られよう。

結句「纏く人あらめや」は反語で、旅人の作品には此の語法の使用が相當に多く、「あに若かめやも」（卷三、三四六）「また變若めやも」（同、三三一）（卷五、八四七）「我戀ひめやも」（卷五、八五八）「忘らえめやも」（卷三、四四七）等が拾ひ擧げられる。「あらめや」と同形の歌句は見出されないが、さらにこれに「も」を加へた形は、卷十一に「百世しも千代しも生きてあらめやも吾が念ふ妹を置きて嘆かむ」（二六〇〇）がある。

一首に表明されてゐるものは、眞率な孤獨を歎く心情であらうが、內容は單純平板である。形態上からは、第三句に枕詞を挿入し、結句に反語法を採用してゐるが、これとて特別に目立たしい技巧とも見られまい。結句の表現法は相當に强味を出すべく試みられたものとも思はれるが、この場合の效果はどうであらう。自分は何かこの部分に直接的でない一種の不足するものを感ずる。もつとも、作者のここにとつた作歌態度は、亡妻に對する悲情の直接的表現といふよりは、寧ろ自らの姿態を中心にして、これが描寫を

試みるといふ風であつて、此處に又旅人らしい特異性があるといへば、さうも見られるところであらう。それ故人麿にみたやうな豊潤なる抒情味とか律動美とかいふものの流動は、これには汲み得られない。むしろ教養あるものとしての或る知性的な感慨に蔽はれてゐる如くであつて、さうした點から淡々といはうか、平板といはうか、潤へるものとしての感受が割合に稀薄の如くである。この問題は一面作者の年齢といふ點に卽して考へられてもよいであらう。老者としての歎きが自らかかる内部外部を構成せしめたものであらうか。

○

柴生田　稔

私は藤森氏の平板であり、潤ひが足りないといふ批評に異見を持つ。この歌は實に情緒纏綿と言つてもいい程に作者の思慕の感情が盛上つてゐて、しかも一首としていかにもすがすがしく淸らかな餘韻を持つてゐる。旅人の作風には、一種貴族的とも言ふべき上品なところ、また理智的に垢拔けしたところがあつて、其點が同じく生活的であつても憶良などとは餘程違つた感銘を受けるが、この歌は前述のやうな濃厚な戀愛的感情がさういふ特色と融合して獨得の風格を生じてゐる。「愛しき」を新考では「今のカハユキなり」と說明してゐるが、「愛しき人」と言へば、つまりさういふ甘美極まる詞であるのを、旅人は實に自然に素直に用ゐてゐる。「手枕を纏く」などといふ肉體的な表現によつて愛情を表出するのは、人麿に於ても目立つた所であるが、旅人に於ては又別種の感動がある。藤森氏が直截的表現でないと言ひ、人麿のやうな豊潤なる抒情味が汲取れないと評したのは、さういふ差異の感じから來てゐるのであらうが、俄

に贊成し難い。なほ、結句を略解で「心は他人に又あはじといふ也」（攷證等同說）と說明したのは、古義の反對する如く不當であつて、これはさういふ決心の表白のやうなものではなく、作者にとつての嚴然たる事實の强調であり、さう解して始めて旅人の悲痛な心奥に觸れ得るのであると思ふ。用例については藤森氏の所說に詳しいが、なほ「朝寢髮吾は梳らじ愛しき君が手枕觸りてしものを」（卷十一、二五七八）の如きかなり相似た表現のあるのは注意していいであらう。

○　五味保義

「わが手枕を纏く人あらめや」の四五句に就いては、前評に記されたやうに「他人に云々」と解する說があるが、これは勿論贊成することが出來ない　攷證などは「あだし女にあはじと也」とまではつきり言ひ、略解もほぼ同樣であるが、これは由豆流及び千蔭の師である眞淵の萬葉考から示唆されたものである。卽ち考には「この故人の如きは又あらじと思ふ心より出でたるなるべし」とある。眞淵の眞意は「あだし人」といふ意味までは無かつたのを後にさう解釋したかに思はれる。其を比較的形式的な解釋の仕方をする古義によつて是正されて居る點が面白い。すなはち「わが手枕をまきて相宿る人の更にあるまじきが甚だ悲しと歎きたまへるなり」とある程度でよいと思ふ。いま由豆流千蔭の說に依據する說はないし內容は特にあげていふ程のこともないが、學說所傳の經路が辿られる所が少し興味を惹いた。一體に旅人の「うつくしき人」「見し人ぞなき」「室の木見し人」などと屢々用ゐる人の一語には、作者の故人に對する係戀の情が滲んで居るやうに感ぜられて、その點から言つても攷證や略解のいふやうな意味合は到底出て來さ

うに思はれないのである。

還るべく時は成りけり京師にて誰が袂をか吾が枕かむ　(巻三、四三九)

○

佐藤佐太郎

この歌は題詞に、「神龜五年故人を思ひ戀ふる歌三首」とあるうちの一首であるが、左註にはこの歌と次の「京師なる荒れたる家に」との二首をば「京に向ふ時に臨み近づきて作れる歌」と註してある。旅人の上京は天平二年であるから、左註によれば天平二年の作歌といふことになり、題詞によれば神龜五年の作となる訣である。「萬葉集年表」によると、旅人は神龜二年に太宰帥に任官したらしく、續日本紀の記事に、寶龜十一年に筑紫太宰にある官吏の任期を從來四年のところ改めて五年としたことが見えてゐるから、旅人の時代は四年の任期であつて、神龜二年から數へれば神龜五年に任が滿つる訣であり、作歌後の事實は如何ともあれ、滿期に近づきつつあつた時の感慨として想像することも一應可能である。これならば題詞との食違ひもなく解釋出來るのである。然し、「還るべく時は成りけり」といふ語氣は事の確定したことを思はせるので、やはり天平二年の作歌として受取る方が自然のやうに思ふ。前の四三八の歌は、その左註に「別れ去りて數旬を經て作れる歌」といふやうに、これは神龜五年の作であるが、萬葉集の編者は類を以て玆に三首を編したものと解釋出來るやうに思ふ。旅人が上京の近づいた時その旅中に喪つた妻を偲び、携へて共に京に歸るべき妻の既にないことを思ひ、寧樂の家に於ける自らの荒凉たるべき生活

をさへ豫め嘆く趣の歌であるが、歌調が緊張してゐて讀者の同情を牽くものがある。しかし、この歌は旅人として極めて出來のよいものと言ふことも出來ないやうに思はれ、調子は緊つてゐても、「沫雪のほどろほどろに」の歌などに見る聲調の滲透が足りないやうな氣もする。一首がやや形式的感情表白に傾いたうらみがあり、更に具象的なものを要求したいやうな氣がするが、或は之は「誰が袂をか吾が枕かむ」といふ嘆息に現在の私などと古人との間には相當の距離があるためかも知れない。

○　　　　　　　　　　　　　　落合京太郎

この歌は前評者が左註について言つて居る如く天平二年の作で、しかも旅人がまだ筑紫を出發しない以前の作であらう。更に想像を逞しくすれば、旅人が大納言に任ぜられて上京が確定してから間もなくの作ではなからうか。天平二年九月八日には大納言多治比眞人池守の薨じて居ることが續紀に見え、九六三の題詞によれば十一月大伴坂上郎女（旅人の妹）が筑紫を出發して京に向つてゐることが窺へる。旅人の任大納言は同年十月一日と補任及び萬葉集卷三卷末の履歷に記されてある。「還るべく時は成りけり」は佐藤氏の言はれた如く、還ることが決定したことの意で「なりけり」は作者の嘆息が含まれてゐるものと解してよいのであらう。京に歸る喜びと共に亡妻を偲び、上京後の自己の生活をも嘆いてゐる樣が窺へる。佐藤氏がこの歌に對して更に具象的なものを要求される氣持も分るが、それは佐藤氏の述べて居る理由の他に枕を纏くといふやうな表現が集中數多くある所にも據るのであらう。この歌はやはり連作中の一首として味ふべきものであるから、僕はこれでよいのではないかと思ふ。この歌に對して佐藤氏のやうな要求

をするならば、旅人の作には同じやうな要求をすべき歌が相當多いといふことになりはしないだらうか。

○　　　　　　　　　　　　　五味保義

この歌の製作時期については前二評者の如く天平二年と考へて見た方が解し易いと思ふ。これは代匠記にも「吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき」(四四六)の歌に始まる「京に向ひて道に上る」時の一聯の前に置くべきものだと言つて居る。もしこれを、年表や作者類別年代順萬葉集の如く「愛しき人の纏きてし」(四三八)の歌に次いで載せるならば、この次の歌「京師なる荒れたる家に」(四四〇)も神龜五年の作となり、この四四〇から前掲の四四六に至る間に、旅人の房前に贈る歌、縣守遷任の際の歌、梅花の宴の歌等が入らなくてはならないことになつてどうも具合が惡い。想像するにこの前の歌の左註「別れ去りて云々」及び四四〇の左註「京に向ふ時に臨み云々」及び上道の際の歌の「鞆の浦を過ぐる日云々」「敏馬の埼を過ぐる日云々」は孰れも同一人の筆法で、恐らくそれは卷三の編者であつて四三八の「吾が手枕を纏く人あらめや」と、この歌の「誰が袂をか吾が枕かむ」が類を以て並べるに具合よいので上述の如くに編し且つ左註を加へたのであらうと思ふ。だから元來は四三八の一首と他の數首とは時を隔てて製作されたものではあるまいか。或は四三八の題詞さへ編者の附加したもので、すべて天平二年の作として考へても差支ない程に思ふが、そこまでは餘り行き過ぎた解し方であらう。少くとも出發時日の切迫してからの作として略疑ひのない所と思ふ。「カヘルベクトキハナリケリ」は舊訓に「カヘルベキトキニハナリヌ」とあるのを代匠記がかう訓んだもので、やや意味新しい語調であるが、どこか清新な

ところがあつて、それより後の註釋者が「カヘルベキトキニハナリク」或は「カヘルベキトキハキニケリ」等と訓んだのよりもいいやうに思ふ。契沖の訓を後人が訓みかへたのは、「時は成る」といふのが不消化のやうに感ぜられたからであらうが、それも一應無理もないやうに思ふ。

○　　土屋文明

この歌は私も大納言に任ぜられ出發が確定しての作と思ふ。さうすれば天平二年十月一日後と想像されるのである。佐藤氏の批評の心持も分るやうに思ふが、旅人の作中ではやはり出來のいい方と思ふ。「聲調の滲透が足りない」といふことは、この歌の他にも旅人の歌には屢々感ぜられる點で、それは私は旅人の所謂素人藝の短所の方が出てゐるのだと同情的に見てをる。それに關聯して訓方も舊訓の「カヘルベキトキニハナリヌ」といふのに私は執著を持つ。この方が聲調の上では幾分深くなつて來るのではないかと思ふ。しかし、「應還時者成來」を舊訓の如く訓むのが正しいといふ理由が私には擧げられないので困る。

京師(みやこ)なる荒れたる家に獨り寢(ね)ば旅に益りて苦しかるべし　（卷三、四四〇）

○　　柴生田稔

この歌の製作時期に就いては既に前の歌に於て詳説されてゐるが、私も後の「旅に益りて苦しかりけり」はこの「旅に益りて苦しかるべし」の延長とも見るべき製作意識に發してゐるやうに思はれ、兩者は餘り

時期を隔てない作のやうに思はれる。此歌も製作に凝るといふやうな所がなく、自然に言流した感じで、それが又稀薄に陷らず、要所に力の籠つた所があるのは他の歌に於けると同樣に感ぜられる。「苦しかるべし」といふ結句が最も注意すべきもので、これによつて他の主觀語によつては不可能な特異な生活感情の陰影が生じてゐると思ふ。「べし」の聲調などははなはだいい。前述のやうに歸京後この歌の想像を裏書したやうな作があり、公式的にはその後作の方が現實感に立脚する點でこの豫め思遣つた作よりも力の籠つたものである筈だが、私の感じではこの「苦しかるべし」の方により多く牽かれる。これは、後の作にあたつて旣に意識的或は無意識的に前作に賴る氣持が動いてゐたためではなからうか。

○

吉田正俊

四五一の「人もなき空しき家は草枕旅に益りて苦しかりけり」とこの四四〇の歌との比較については私も前評者に同感である。かういふ粉飾のない現實的味風は旅人以前に餘り見當らないやうに思はれるが、それにしても「荒れたる家に獨り寢ば」のあたりは同情のない見方を以てすれば、ややドラマチツクな獨りよがりの所があり、後世の纖弱なる神經を以てすれば粗笨誇張の感がないでもない。ただ上代人の人見知りをしない大膽な感情表白はなかなかに嫌味を覺えしめないのが私には參考になる。この歌に關連して思ふことは、現在の吾々が所謂無產派短歌などに對して懷く感情の粗笨表現のおほげさといふやうなことも、時代を經て之を觀察すればその可否孰れなりや分らないといふことである。

吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞ亡き（卷三、四四六）

○

藤森朋夫

天平二年冬十二月、京に向ひて道に上る時の作五首の第一首である。一首の意は極めて明白である。些のこだはるところもなく、眞率に徹つてゐる。「鞆の浦」とか、「室の木」とか、固有名詞が素材として採用されてゐるが、その据ゑ方、生かし方が自然であつて、頗る效果的である。この一聯の作には、かつては赴任の途次共に見た感慨ふかい風物を、今再び嘱望しつつ、寂しい沈潜の裡に、更に新しく湧き上る、やむにやまれぬ悲情が、純眞に吐露せられて、哀愁の情切々たるものが感ぜられる。自分にはこの一首を味つてゐると、人麿の「去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる」（二一一）が想起されて來る。殆ど同樣の境地をうたひあげたもので、表現形式等には自ら異るものは存するにしても、此彼何れにも哀れ深い響がきかれる。

用語としては、二句に「見し」、結句に「見し」があつて、かつては氣になつたこともあるが、作者がこの場合の氣持としては、やはり結局かかる表現によつて落著いたものであらうことが解るやうに思ふ。嚮には共に眺めた妹、今は既に世にないといふ場合に於ける感情の高まりは、やはり「見し人」と自ら强く疊みかけて訴へさせたものと思はれる。

不變なる自然の姿相に、變轉極り無き人間の現實生活を配して、其處に一種の「あはれ」を表示する手

法は、古來詩人の多く依據したところである。吾々は人麿の作品によつてその秀逸なるものに接した。今この一首を味つて思ふことも、自然に對する作者の把握が確かであることである。「鞆の浦の室の木は」の描法は、まことに平明淡々としてゐるが、現實的に寫生された强味をもつてゐる。

○　　　　吉田正俊

前評者が人麿の歌「去年見てし秋の月夜は」を引合に出されたのは、甚だ興味深いことである。人麿の歌は「去年見てし秋の月夜は照らせれど」と三句に小休止を置いて下句に連るのであるが、この旅人の歌は「吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど」と四句に小休止を置いてゐるのである。かういふ些細なところに二者の相異が看取されるので、前者にあつては勿論その對象を現實的に把握してゐるのは疑のない所であるが、一首全體としてどこか所謂現實を超えた漂渺たる風韻を有してゐるに反し、後者にあつては何處までも魯鈍のやうでより現實の感慨が深い。四句を受けてゐるのであるから、結句を「見し人ぞなき」と重く表現したのは流石に調子を心得てゐるといふべきである。「鞆の浦の室の木」については全く前評者の言はれる如くであり、寫實にあらずしてはかうは行かないものである。それにしても現在の吾吾ならば、「常世にあれど」といふ表現は到底この場合なし得ないだらう。かういふ風に無造作に「常世」といふ詞を持ち來り得た古人は羨望してよい。第四句までずつとつながつた表現は一種の稚拙を帶びて人麿の歌にない味ひを釀し出してゐる。個性の差を玆に見ることは牽强附會のやうにも感ぜられるが、先づ以て三十一字の小詩型に於てはさう大した無理でもなからう。

吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞ亡き　（卷三、四四六）

〇　藤森朋夫

天平二年冬十二月、京に向ひて道に上る時の作五首の第一首である。一首の意は極めて明白である。些のこだはるところもなく、眞率に徹つてゐる。「鞆の浦」とか、「室の木」とか、固有名詞が素材として採用されてゐるが、その据ゑ方、生かし方が自然であつて、頗る效果的である。この一聯の作には、かつては赴任の途次共に見た感慨ふかい風物を、今再び囑望しつつ、寂しい沈潜の裡に、更に新しく湧き上る、やむにやまれぬ悲情が、純眞に吐露せられて、哀愁の情切々たるものが感ぜられる。自分にはこの一首を味つてゐると、人麿の「去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる」（二一一）が想起されて來る。殆ど同樣の境地をうたひあげたもので、表現形式等には自ら異るものは存するにしても、此彼何れにも哀れ深い響がきかれる。

用語としては、二句に「見し」、結句に「見し」があつて、かつては氣になつたこともあるが、作者がこの場合の氣持としては、やはり結局かかる表現によつて落著いたものであらうことが解るやうに思ふ。嚮には共に眺めた妹、今は既に世にないといふ場合に於ける感情の高まりは、やはり「見し人」と自ら强く疊みかけて訴へさせたものと思はれる。

不變なる自然の姿相に、變轉極り無き人間の現實生活を配して、其處に一種の「あはれ」を表示する手

法は、古來詩人の多く依據したところである。吾々は人麿の作品によつてその秀逸なるものに接した。今この一首を味つて思ふことも、自然に對する作者の把握が確かであることである。「鞆の浦の室の木は」の描法は、まことに平明淡々としてゐるが、現實的に寫生された强味をもつてゐる。

○　　　　　　　　吉田正俊

前評者が人麿の歌「去年見てし秋の月夜は」を引合に出されたのは、甚だ興味深いことである。人麿の歌は「去年見てし秋の月夜は照らせれど」と三句に小休止を置いて下句に連るのであるが、この旅人の歌は「吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど」と四句に小休止を置いてゐるのである。かういふ些細なところに二者の相異が看取されるので、前者にあつては勿論その對象を現實的に把握してゐるのは疑のない所であるが、一首全體としてどこか所謂現實を超えた漂渺たる風韻を有してゐるに反し、後者にあつては何處までも魯鈍のやうでより現實の感慨が深い。四句を受けてゐるのであるから、結句を「見し人ぞなき」と重く表現したのは流石に調子を心得てゐるといふべきである。「鞆の浦の室の木」については全く前評者の言はれる如くであり、寫實にあらずしてはかうは行かないものである。それにしても現在の吾ならば、「常世にあれど」といふ表現は到底この場合なし得ないだらう。かういふ風に無造作に「常世」といふ詞を持ち來り得た古人は羨望してよい。第四句までずつとつながつた表現は一種の稚拙を帶びて人麿の歌にない味ひを釀し出してゐる。個性の差を玆に見ることは牽强附會のやうにも感ぜられるが、先づ以て三十一字の小詩型に於てはさう大した無理でもなからう。

○

鞆の浦の磯の室の木見む毎に相見し妹は忘らえめやも（卷三、四四七）

山口茂吉

この「太宰帥大伴卿、京に向ひて道に上りし時作れる歌五首」の中、鞆の浦を過ぐる日作れる歌三首は、何れにも「室の木」を詠みこんでゐるが、亡き妻を悲しむ歌に、海濱に生えてゐる室の木を捉へ來つて詠みこんでゐるあたりは、一種の清新味を感ぜしめるやうに私は思ふ。そして形式的になり勝ちなところを救つてゐる點が少くない。時は冬十二月であり、あたり一帶は末枯れてその寂しさも一入であつたことと思はれるが、その荒涼とした海岸に生えてゐる室の木を見のがしてゐないところは、旅人卿の感覺の凡庸でないことを示して居り、その室の木を中心に三首を連作的にまとめてゐるあたりは、やはり專門家的歌人としての力量を認めぬ訣に行かない。それから注意すべきことは、この三首の歌には枕詞を用ゐて歌の調子をととのへるといふやうなことをしてゐないが、これも特色といへば特色であり、どこまでも眼前の實景に卽して悲しみの情を遣つてゐる。しかも室の木を中心として、第一首に於いて言ひ表しきれない感慨を第二首へ移行して行き、更に亦第三首へと連續的に感情をうねらせてゐる如くである。また、第一首目の歌では、「鞆の浦の室の木」と云つて概觀的に表して居り、第二首目になると、「鞆の浦の磯の室の木」といふやうにやや具象的に「室の木」を點出して來て居り、第三首目には、「磯の上に根蔓ふ室の木」と段々に印象的になつて來てゐるごときも、專門的歌人としての技巧の確かさであると思ふ。併し、この

歌の、「鞆の浦の磯の室の木見むごとに」の如き哀韻のこもつた調べは、單に作歌の技巧のみを以てしては出來難いところであり、旅人卿の亡き妻を悲しむ心の奥から滲みいづる孤獨感とも云ふべき咏歎に外ならない。今もかくのごとく悲しみに堪へがたいが、この後もこの鞆の浦の室の木を見むたび每に、相共にこの室の木を見た妻のことが思ひ出でられて忘れられようか、決して忘れられない、と云つて、將來にまで思ひ及んで、現在の悲しい心持を述べてゐるあたりは、形式的に見えて決して形式的でないものを感得することが出來よう。殊にこの歌を作つた時（天平二年庚午冬十二月）から一年を經ない天平三年辛未秋七月に、旅人卿自身も亦薨じてゐることを考へると、一層哀切の感に打たれるのである。

なほ、「相見し」は、普通「逢ひ見る」といふ意味に用ゐるのを、この歌では、「相共に見る」の意味に用ゐてゐるのは例が少いやうに思ふが、集中に例を求むれば、

鶉鳴く古りにし鄕の秋萩を思ふ人共相見つるかも（卷八、一五五八）

などが參考になるであらう。

○　五味保義

第三句「見む每に」を譯する場合に、前評の如く「この後も見む度每に」とするのは古義にも見える譯し方で、それが「今より將來云々」とあるのだが、助動詞「む」の慣用例からもそれ程時間の上に關聯を持たせないで「見る每に」と解していいのではないかと思ふ。これは「見む每に」が「見る每に」と全く同一意味の表現であるといふわけではないが、一首を味ふといふことから古義の如くに理詰めに解さなく

てもいいといふ意味である。「相見し」の兩意に就いてはすでに新釋などにも云はれてゐるが、人麿の「去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる」(二一一)などもこの歌と同じ「相共に見た」と解する方が自然であるやうに思はれ、この歌及び前歌の「吾妹子が見し」「見し人ぞ亡き」「相見し妹」云々はその人麿の感化があるかとも思ふ。この歌の哀調の自らに詞句の間に漂ふこと山口氏の評にある如くであるが、この邊の連作の中に置いてみると哀切感といふ點では餘り目立たない歌のやうに思はれる。殊に前の四四六の歌に比すると、さういふ氣がするのである。

○

磯の上に根蔓(ねは)ふ室の木見し人を何在(いかなり)と問はば語り告げむか　(卷三、四四八)

落合京太郎

この歌を一讀しての解釋としては、(一)磯の上に根を張る室の木に、その室の木を見た亡き人を如何になつてゐるかと問うたならば、室の木は語り告げてくれるであらうか、といふ說と、(二)磯の上に根を張つてゐる室の木が、室の木自身を嘗て見た人(卽ち旅人の妻)はどうしたのかと自分に(旅人に)問うたならば室の木に對して亡妻のことを語り告げようかなあ、といふ二つの解釋が成立ち得るやうに思ふ。古來の說としては第一の說が多數說らしい。一四五の「鳥翔(つばさ)なす在り通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ」などの用例もあり、古事記にも「尾張に直に向へる尾津の埼なる一つ松吾兄(あせ)を」などの例もあるので、室の木を擬人化して、これに問ふといふことも、又室の木に問はれるといふ思想も必ずしも無理で

なく、僕の常識として右兩説の孰れに從ふべきかに就ては疑問をもつてゐる。しかし、代匠記などにも言つてゐるやうに、この室の木は恐らく當時にあつての鞆の浦の名木とされてゐたものであらうから、一種これを神聖視して冥界の事象にも通じてゐると見て、これに問うたならば亡き妻が現在彼の世で如何樣にしてゐるかといふことを告げてもくれるだらうかと老の愚痴にも似たやうな感慨を洩らしてゐるものと取つてよいやうに思ふ。ただ代匠記などのやうに「物言はぬ木なれば語りだに得告じ」とまで、解釋として言つてしまふのは、理に陥ちて面白くないと思ふ。それまで言ふのは作者の謂はば取り亂したやうな感傷の氣持を壞してしまふのではなからうか。自分は以上の如く解するが、然し第二の説に對してもこれを否定し去る程の勇氣は持たない。この一首は一六六の「磯の上に生ふる馬醉木を手折らめど見すべき君が在りといはなくに」などと一脈通ふ所があるかも知れない。大伯皇女の一六三乃至一六六の挽歌に比すると、その純粹性に於ては、旅人のこの一連三首の作は劣るやうにも思へるが、大伯皇女の作に比すると旅人の作は何と言つても成人の作の感があり、皇女の作よりは思想性も含まれて居ることが看取出來る。「何在（いかなり）と問はば」といふ第四句の訓はいろいろあるやうで、俄かに孰れを善しと決めることは難いやうであるが、「何在（いかなり）と問はば語り告げむか」とすげなく言ひ切つたやうな表現の中に却つて作者の悲しみが含蓄されてゐるやうに思へる。

○　　　　　　　　　　　　　　　　山口茂吉

前評者の落合氏が言及されたやうに、この歌は二通りに解釋が出來る。第一の説を代表せしめて古義の

說を引けば、「歌の意は、相共に見し、妹がうへのことを、いかなりと室の木に問はば、もし語り告ることもあらむかとなり、過去し冥途の事をも、室の木に問見むとせめて思へるが、いとあはれなり」といふのである。第二の說として、井上通泰博士の萬葉集新考の說を擧げると、「意はムロノ木ガソヲ見シ人ヲ我ニ問ハバとなり」といふのであるが、第二の說は從來井上博士ただ一人と云つてもいい程で、第一の說が大多數である。ところが私は只今まで井上氏の第二說のあることも知らずにゐたのであるが、古義などを讀んで、どうもしつくり自分の氣持に副はないものを感じ、一人勝手に次のやうに解してゐたのである。「鞆の浦の磯に根蔓うてゐる室の木が、今京に向つて上る自分（旅人卿）に對して、『下向の時にはあなたと御一しよに私（室の木）を賞め見たまひし御夫人は、今日はお連れになつてゐないやうですが、如何なされたのでありますか』と問うて吳れるならば、太宰府に於て病歿したことをせめて語り告げようものを。さうすれば室の木も孤獨の自分に同情して吳れるだらう。この切ない胸中をせめて二人を知つてゐる室の木にでも問ひ慰めて貰ひたいものである」と大體かういふ氣持の歌であると思ふのである。この方が、室の木を名木化し神聖化して、その室の木に問はば冥途の妻の消息が分かるかも知れないといふやうな解釋よりも直接的のやうに思ふ。なほ「鞆の浦の室の木」はその當時名木として世に知られた大木があつたといふよりは、海濱に茂つてゐるのが注意を惹いたものと考へられる。なほ、第四句は「何在(いづら)と問はば」でも「何在(いかなり)と問はば」でも、解釋上はどちらでも差支へはないが、「何在(いかなり)と問はば」と訓む方がこの歌の場合は悲痛にひびくところがあつていいやうに思ふ。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

私もこの歌の解釋に就いて色々疑問を抱いて來たが、今のところ「何在と問はば」は、落合氏と同じく自分が問ふといふ解し方に傾いてゐる。第二説は略解も言ふやうに結句が具合が惡いし、一首の氣持も結局第一説の方が自然のやうに思はれる。但し名木云々は考へる必要のないことであらう。なほ右のやうに解した上で、「室の木」といふ句の下への續き具合に就き、「室の木ハ語り告げむか」と、「室の木」を主語にするのと、「室の木ニ問はば」と客語にするのと、又「室の木ヨ」と呼懸けたとするのと、三通りの解が成立するやうだが、私はこれは「室の木ハ」と主語に取るべきではないかと思ふ。卽ち「磯の上に根言ふ室の木は、曾て見た人はどうしてゐると聞いたならば、それを語り告げるだらうか」といふ具合になるのである。從來の解釋は此處をあまり嚴密に考へてゐないやうであるが、これは單なる文法上の穿鑿ではなく、一首の鑑賞に微妙な關係があることと思ふ。

（昭和十二年二月）

三十二　大伴旅人の歌七首

落合京太郎

○

妹と來し敏馬(みぬめ)の崎を還るさに獨して見れば涕(なみだ)ぐましも　（卷三、四四九）

歌の意は極めて明かである。淡々と直線的に敍して居ながら、平板に陷らずに潤ひのあるところは矢張旅人の特徴を示して居ると看てよい。四四六乃至四五〇の一聯五首の中ではこの一首を推して宜いのではあるまいか。「妹と來し敏馬の崎を」と言ひ「還るさに獨して見れば」と言ふあたりは、巧まずして大まかな言ひ方ではあるが、結句の「涕ぐましも」に續けて味ふと、自らな單純化の行はれて居ることが感ぜられる。この時旅人が上京の道を海路にとつたことは、左註によつても、又九六七の「大和道の吉備の兒島を過ぎて行かば」によつても推測せられるし、「家思ふとこころ進むな風守り好くしていませ荒き其の路」（三八一）を遊行女婦兒島が旅人を送る時の作とせば、これをも證左に援くことが出來る。

それ故「獨して見れば」といふのは船の上から崎を望見して居ることになるのであらう。冬十二月と言

へば、太陽曆では一月か或は二月であつたらうから、往路に亡妻と共に見た時よりも恐らくは黼餘とした崎の風光であつたらう。その崎を漕ぐましく船より望みつつ、亡妻を偲んで居る老いた作者の姿が彷彿として目に見えるやうな氣がする。「漕ぐましも」といふ句がよく活かされて居るばかりでなく、作者としても僞らざる感慨であつたらう。

全體から言へば多少割切れた感のする表現とも言へようが、それは「黄葉の散りぬるなべに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ」（二〇九）などを念頭に置いての感じかも知れない。

「漕ぐましも」といふ句は萬葉集のなかでは旅人のこの一首に使用されて居るのみであるが、先例としては「山代の筒木の宮に物申す吾が背の君は漕ぐましも」（古事記）、「山代の筒木の宮に物まをすわが背を見れば漕ぐましも」（日本書紀）がある。旅人の作は右の日本書紀所載の國依媛の歌の影響があつたのかも知れない。

○　　　　　　　　　　藤　森　朋　夫

流石に哀音のふかく籠められた作である。歸途舟行中、次々と展開されてゆく自然の景相に接して、作者にはその場所場所に於て沈痛な感慨が湧いたことであらう。一體に旅人の作は表現が率直眞實で、內容が單純平明であると云はれてゐるが、この一首にも亦さうしたものの一面は感ぜられる。「妹と來し」とか、「獨して見れば」とか、「漕ぐましも」とかいふ歌句についてみるも、そこには特別に凝らされた技法らしいものを覺えしめない。寧ろ淡々たる表現が自然に行はれてゐるやうである。それでゐてこれらの作

になると、作者として抱懷してゐる情感がなかなかよく表示されて、一見平明と思はれるものの裏に、釀し出される生活的のにほひが感受されるのである。

「敏馬の崎」の歌語など極めて自然によみ込まれて、これあるがために切實な歌情はより深く滲透せしめてゐる。一見通りのいい平淡のやうな歌ではあるが、味つてゐると何か底からにじみ出て來るものが感得される。人麿が「玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に船近づきぬ」（二五〇）とやはりこの土地を覊旅の歌に詠み込んで秀作をのこしてゐるが、吾々は特にこの「敏馬」の地名に快い愛著を感ずる。そして人麿の作は純然たる敍景歌として生かされ、これは底に湛へる抒情の豐かさに融けこんで、むしろ敏馬も悲劇的素材として把持されてゐる。「妹と來し敏馬の崎を」は單純化された歌句であり、これが「還るさに獨して見れば」に自然に氣持と調とが押流されてゐて、對立的に見られるところが少しもなくて流動性が感じられ、結句にいたつて「涕ぐましも」といふ主觀句で緊密な落着きを示してゐる。

第四句について一言するならば、この原文「獨而見者」の「而」は、古葉略類聚鈔には「之」となつてゐるので、これによつて槻落葉には「ヒトリシミレバ」と七音に訓んでゐる。其後、古義、新考、總釋（吉澤博士）等がこれに從つてをり、古義には倚「之はその一すぢなるをいふ助辭」とあり、强意の說明が加へられてゐる。しかしこれはことさらに改めることはせず、そのままにして、流布本の通り「ヒトリシテミレバ」と八音によむのに從つて置く。音數を整へるといふ點からすれば、「ヒトリシミレバ」も具合がよいのであるが、さうかといつて誤字說などをたてて俄にこれを定めることも出來ない。此の場合七音に訓むと、古義の說明の如く、强意も出て來るが、調子に堅く響くところが生じては來ないだらうか。八

音にして字餘りにすると、調子は或る種の穩健さを齎し、舟行中作者の靜觀してゐる姿態と緊密になり、比較的やはらか味が感ぜられるやうに思はれる。

○　　　　五味保義

前二評者が克明にこの歌のいい點を擧げられたが、この歌はさういふ風に克明に味へば味ふほどその優れた所が感ぜられる歌である。形が整つてゐるのに形式的な所がない。萬葉集の秀歌を批評するとき、寧ろ定り文句として出るこの評語を、この歌を見てゐると飽きずに繰返さざるを得ない。私はこの一首に內包される氣持の豐かさを羨しく思ふ。嘗ては「常世にあれど見し人ぞなき」の一首の方がこの歌よりも立勝つたもののやうに思はれてゐたのであるが、これはさう簡單に言つてしまへないもののやうに感ぜられる。落合氏が、この一首を一聯五首の中から第一に推さうとする氣持は十分肯くことが出來る。同氏の擧げられた記紀の歌の「渧ぐましも」と比較するに、記紀の歌が說話風な背景を持つてゐるといふ事から來る「渧ぐましも」の感情であるよりも、この旅人の歌の結句の響の方が獨立した、いはば純藝術品としての氣韻を以てしつくり心持に入つて來て好きである。

○　　　　土屋文明

旅人の歌には「沫雪のほどろほどろに零り重けば」(一六三九)や、「世の中を空しきものと知るときしいよよますますかなしかりけり」(七九三)などの如く極めて單純なものもあるが、一方にはこの歌などの如

く事を擧げ理を判ち事細かに述べて居る行き方がある。これは旅人以前の短歌には割合に少い行き方で、短歌の本來はもつと單純に行くべきもののやうに思はれるが、旅人の場合にはこの事理を盡した言ひ方も餘り嫌味なく煩瑣に亙らないで居る。例へば憶良などともその樣子が多少違つてゐるやうに思ふ。旅人のかういふ詠風は或は漢詩の手法から來て居るのではないかと思はれる所がある。漢詩中の成句を用ゐたりした萬葉中の歌のことは屢々注意されたのであるが、旅人の作風には語句の末梢などでなしにもつと根本的な手法が移つて居るのではあるまいか。現在或は將來かういふ行き方がどれだけ短歌として發展の餘地があるか、さういふ事は全く分らないのであるが、短歌の新しい手法としてこれを取り擧げようとする者にとつては旅人の歌は參考になる所が少くないやうに思はれる。憶良でも長歌よりはかへつて短歌の方に成功したものがあるやうに思はれる。旅人の作は大體皆短歌であるから、或は長歌と短歌の間に根強い相違があつて短歌の方が成功しやすいのかも知れない。兎に角旅人のこれらの行き方の歌については、考へて見るといろいろの問題が含まれて居るやうに思ふ。

　○

往(ゆく)さには二人吾が見しこの崎をひとり過ぐれば心悲しも　一云、見もさかず來ぬ（卷三、四五〇）

落合京太郎

この歌は、製作の時期も內容も前揭四四九と異るところがない。嚴格な要求をすれば四四九、四五〇の二首はその內何れか一首があれば他はなくともよいと言へるのかも知れない。然しそれは批評者の側に立

つての言ひ分であり、作者の身になつて見れば四四九の一首のみでは飽足らなかつたのであらう。謂はば作者の感情表現の衝迫が一首の量を以てしては滿足しなかつたと看るべきである。四四六乃至四五〇の一聯の中では四四九を採るべきかと言つたが、讀み來つて更に考へて見ると、それは評者の主觀に依據した言で、客觀的には一概に決められぬかも知れない。「往さには二人吾が見しこの崎を」なども觀方によつては、多少の姿態が眼につくといふ非難もあらうが、他奇なくして味ひのある表現といつて宜いだらう。「古に妹と吾が見しぬば玉の黑牛潟を見ればさぶしも」(一七九八、人麿歌集)などに比すると、旅人の作の方が遙に個性に富んで居る。「二人吾が」は、「大船の津守が占にのらむとは正しに知りてわが二人寢し」(一〇九)、や、「葦原のしけこき小家に菅疊いやさや敷きてわが二人寢し」(古事記)などにその先蹤を認め得よう。「こころ悲しも」といふ成句は集中では旅人のこの作に初まつて居るやうである。記紀などにありはしないかと思ふが、いまは調べて見ない。

○　五味保義

「二人吾が見し」について前評に擧げられた例の他に、人麿の歌の中に「取持ちて吾が二人見し」「吾妹子と二人わが寢し」(二一〇)の如きも擧げられる。旅人は先の大津皇子や古事記の歌よりも人麿の「吾が二人見し」などから直接示唆される所があつたのかと思ふ。結句についてこの「こころ悲しも」が集中に於て旅人を最初とするといふのは大變面白いが、旅人以後に於ても用例がなくて、家持の「うらうらに照れる春日に雲雀揚り心かなしも獨りし思へば」(四二九二)などがその唯一の例であることは興味がある。

家持が若くして妻を喪つた時「時はしもいつもあらむをこころ哀くいにし吾妹か若き子を置きて」（四六七）といふ歌があり、この「心哀く」も後に家持がもう一度使用してゐる（四四八三）。他には巻十一に「磯の上に立てる回香樹心いたく何に深めて思ひ始めけむ」（二四八八）とあるだけである。（この巻十一の歌は偶然であるが旅人の歌に酷似してゐる。）そこで「心哀く」も「心悲しも」から示唆されたものと考へたのだが、ここらに旅人家持作歌の交渉が考へられるやうな氣がする。序に言へば、一云の「見もさかず來ぬ」は亡き妻を思つてその悲しさに邊りの風光も眺めやらず來たといふので、これもいい句だと私は思ふが、多少作者の動作を思はせる所があつて、本文の結句よりは落ちるのであらう。人麿には一云が屢々あるけれども旅人としては珍らしい例であるが、恐らく作者自身の一案で、巻三の編者が異傳を注したのではあるまいと想像される。

○　　　　　　　吉田正俊

四四九とこの歌とを比較して考へる段になると、私は前者の方が「敏馬の崎」といふやうな固有名詞を挿入してやや簡素で、前者に一疇を輸せねばならぬと思つた。「二人吾が見し」と言つて、「一人過ぐれば」といふあたりは强ひて言へば卽きすぎてゐて氣になる所だと思ふが、作者はさういふ局部的の表現を氣にする餘裕がなかつたのであらうし、味ふ方でも其所までこだはつては作者の情緒に同化しにくくなるのであらうか。前評者も言及されたやうに、旅人は往々集中にその例の少い表現法を用ゐてゐても、讀む者はそれが普通のありふれた詞のやうに感ずるのであるが、かういふ點などはなかなか興味がある事柄であつ

て、作者の息吹はいつもかういふ具合に語句を淡々とせしめる妙味がある。

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり　（巻三、四五一）

○　山口茂吉

この歌は、「故郷の家に還り入りて、即ち作れる歌三首」の第一首である。この一聯は旅人卿の亡妻を悲しむ歌、即ち、「神龜五年戊辰、太宰帥大伴卿、故人を思ひ戀ふる歌三首」（四三八—四四〇）「天平二年庚午冬十二月、京に向ひて道に上りし時作れる歌五首」（四四六—四五〇）等に關聯あるもので、是等の歌と共に連作とも見られるやうな結果となつてゐる。それゆゑ一首一首の味ひの他に、是等をまとめて讀み味ふと亦別種の趣があり、注意すべき一聯と思ふ。前號（二三四頁）にて柴生田氏は、「京師なる荒れたる家に獨り寢ば旅に益りて苦しかるべし」（四四〇）を評釋せられた時に、この四五一の歌は右四四〇の歌の「延長とも見るべき製作意識に發してゐるやうに思はれる」と云はれたが、さういふことも云へないことはないかも知れないが、若しさうだとすれば、「旅に益りて苦しかるべし」と思つたが、果してその通りで、「旅に益りて苦しかりけり」だといふだけに終つてしまひ、この歌がつまらぬ歌のやうに取られることとなる。けれどもこの歌は前の四四〇の歌の想像の裏書程度に止まつてゐるものとも思へない。「人もなき空しき家は」の現實的にして、緊切なる句と、「京師なる荒れたる家に獨り寢ば」の想像的の緩漫な句とは既にその出發點から響きが違つてゐるやうに私は考へる。第三句の枕詞「草枕」も、この場合は上下の緊

密な句の中間にあつて冗漫のやうであるが、決してただの冗漫ではない。長かつた旅即ち京師を離れてゐた長い間のさまざまな感慨をも「草枕」の句に籠らしめてゐる如くに私は感ずる。そしてその長い旅中の苦しさにも益して「人もなき空しき家」はなほ苦しいと云つてゐる。その結句の「苦しかりけり」も、これも實際の感慨である。空想でなく現實感であるから、奇のない句ではあるが、平常にして切實の響を有つに至つて居ると思ふ。四四〇の「苦しかるべし」はやや自己の感情に甘えたやうなところがあり、この歌の結句の切實さには及ばぬ如くである。この歌は右の如く奇はないが、平凡な詞を平凡に感ぜしめないだけの生氣があり、孤愁といつたものの痛切に感ぜられる歌である。なほ、四四〇の歌は、神龜五年七月二十一日、筑前國守山上憶良が亡き妻を悼んで作つた歌「家に行きて如何にか吾がせむ枕づく嬬屋不樂しく思ほゆべしも」(七九五)から多分に影響をうけてゐるやうに思ふ。しかし影響があるからと云つて、四四〇の歌それ自體の價値を云々出來ないのであるが、私は前述の理由により、この四五一の歌の方が四四〇よりも上位に置かるべき作と思つてゐるが、大體それで間違ひない筈である。

〇　佐藤佐太郎

前に評した四四〇の歌について柴生田氏がこの歌に言及されたことは今山口氏が言はれたが、古い註釋書にもさういふ說があつて代匠記に「京師なる荒れたる家に獨り寢ばの歌をふまへたるなり」といひ、攷證に「ここに至りて推測りしが如く、くるしき由をいひて歌をなせり」といふ如きである。前の四四〇の歌に「旅に益りて苦しかるべし」とあり、この歌は「旅に益りて苦しかりけり」と言つてゐて非常に似た

句であるから、さういふ想像も成立ち得るとは思ふが、幾分立入りすぎてゐるやうな氣もする。かういふ感情はごく普通のもので、前の歌の有無に拘らず、歸り着いた京の家に起居しつつ當然湧起すべき嘆きであると思ふから、しばらく前の歌を念頭に置かず味ひ得るといふことも出來、山口氏が言はれたやうに奇のない表現のうちに相當に感情の出てゐる歌と思ふ。なほ思ふに旅人には同樣の手法を用ゐ同樣の語句を用ゐた歌が割合にある。例へば「磯の室の木見む毎に」といひ、「植ゑし梅の木見る毎に」といふやうに語句の似寄りなども氣にせず平然として一首を作すといふ趣がある。この歌の場合などもさう考へられるやうに思ふ。「旅に益りて」の旅は道中といふ意味にも取れるが、ここは筑紫在住の生活を籠めたものと受取るべきであると思ふ。

私は先に三三五の「吾が行は」の歌を評した時、「行」といふ詞について云々し、これを筑紫在住のこととと解するのは言語の順直に副はないといふことを言つたが、後に思ふにあの場合もやはり前賢の解釋通りに筑紫在住の意味の旅中といふことに解すべきであつたやうに思ふ。蘇東坡の詩の中に「我が行未だ遠しと云はざるも、回顧すれば慘として風涼じかりき」といふやうな例もあつた。右序を以て一言する。

○　　　　　　　　　　　　柴生田稔

私が先にこの歌を前の「旅に益りて苦しかるべし」の延長とも見るべき製作意識に發してゐるやうだと言つたのは、兩者の間に連續した一つの製作意識の流れが認められるといふやうな氣持であつて、山口氏が取つたやうに單に前作に辻褄を合はせただけの作品だといふ意味ではなく、佐藤氏が引いた代匠記の前

の歌をふまへたといふ解釋よりも、も少し内面的な製作心理に觸れての考察だつたつもりで、それ位は作者仲間にはすぐ解ることと思つてゐた。成程佐藤氏の言ふやうに、この歌の感情は別に豫備的な心がまへが無くても歸來當然起り得べきものであらう。然し既に前歌のやうな製作があつた後に、その歸來の感情がこの歌のやうな表現形態を取るに至つた製作過程を考へれば、やはり其處に一つの心理的關係を認めていいのではないか。他の場合に於ける語句の反復使用とは同一視出來ないと思ふ。事實山口氏も「連作とも見られるやうな結果となつてゐる」と言つて兩者のつながりを結局認めてゐるのではないか。兩首の價値に就いては、改めて前號の言葉(二三五頁)を繰返すより外ないが、なほ言へば「都なる荒れたる家に一人寢ば」と「人もなき空しき家は」の二つの句にしても、やはり後の方が感情がより多く整理されてゐる。私は前者が「緩漫」で後者が「緊切」だとは思はない。第一「寢ば」「苦し」といふ方が、「家は」「苦し」といふよりも、どうしても直接で一次的である。ところで今一昨年の百首選を見ると、私はこの「苦しかりけり」を取つて、前の「苦しかるべし」を落してゐる。これは甚だ汗顔であるが、今訂正を許されるとすれば、勿論前の歌をとつて今度の歌を止めるのである。

妹として二人作りし吾が山齋(しま)は木高く繁くなりにけるかも　(卷三、四五二)

○　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

「妹として」は「妹と」といふのを強めた氣持であらう。集中珍しい使ひ方である。「二人」は「二人

で」の意味である。つまり「妹として二人」は「妹と二人で」といふ表現の「妹と」の部分を强めた氣持で、古義のやうに「妹と二人して」の意と言つて了ふのは妥當でないと思ふ。この上句の參考例として先に五味氏の擧げた「取持ちて吾が二人見し走出の堤」「吾妹子と二人わが寢し枕づく妻屋」、それから「形見にせむと我が二人植ゑし松の木」（二四八四）などがある。人麿のやうに「吾妹子と二人作りし」とでもいへば普通なのを、特に「妹として」と變つた言ひ方をしたのは、作者の心裏にこの事を特に强く表現したい氣持が働いてゐた爲であらうか。又一面、臆測すればこの「として」などは或は當時の一種の口語調で、旅人の拘らない、土屋氏の所謂素人的の作風から來てゐるのかも知れない。

この歌は、これまでの諸作と同樣情景備つた眞率な作品だと一應考へられるが、又一面どこか人情的に要領を得すぎたやうな感じがないでもない。この場合「妹として二人作りし」といふ感情は、次の「吾妹子が植ゑし梅の木」の歌に任せて下の句だけの感慨で一首を纏めたいやうな氣もするし、或はこの一二句を生かすならば、やはり次の歌のやうに下句で主觀を端的に述べる方が效果が直接ではなかつたかとも思はれる。この歌では「妹として二人」といふのが、前の「妹と來し敏馬の崎を」「往さには二人吾が見し」などの場合よりも何だか甘くて具合が惡いやうな氣がするのだけれど、其の邊をどう言つていいか實はよく判らない。結句の「なりにけるかも」もこの場合どうも物足りないやうである。

○　　　　　　　　　　　　　　吉田正俊

「妹として二人作りし」といふ句は甘いといへば甘いと言ひ得るが、六十七歳の老翁が見榮も外聞もな

の歌をふまへたといふ解釋よりも、も少し内面的な製作心理に觸れての考察だつたつもりで、それ位は作者仲間にはすぐ解ることと思つてゐた。成程佐藤氏の言ふやうに、この歌の感情は別に豫備的な心がまへが無くても歸來當然起り得べきものであらう。然し既に前歌のやうな製作があつた後に、その歸來の感情がこの歌のやうな表現形態を取るに至つた製作過程を考へれば、やはり其處に一つの心理的關係を認めていいのではないか。他の場合に於ける語句の反復使用とは同一視出來ないと思ふ。事實山口氏も「連作とも見られるやうな結果となつてゐる」と言つて兩者のつながりを結局認めてゐるのではないか。兩首の價値に就いては、改めて前號の言葉（二三五頁）を繰返すより外ないが、なほ言へば「都なる荒れたる家に一人寢ば」と「人もなき空しき家は」の二つの句にしても、やはり後の方が感情がより多く整理されてゐる。私は前者が「緩漫」で後者が「緊切」だとは思はない。第一「寢ば」「苦し」といふ方が、「家は」「苦し」といふよりも、どうしても直接で一次的である。ところで今一昨年の百首選を見ると、私はこの「苦しかりけり」を取つて、前の「苦しかるべし」を落してゐる。これは甚だ汗顏であるが、今訂正を許されるとすれば、勿論前の歌をとつて今度の歌を止めるのである。

妹として二人作りし吾が山齋（しま）は木高く繁くなりにけるかも　（卷三、四五二）

○　柴生田　稔

「妹として」は「妹と」といふのを强めた氣持であらう。集中珍しい使ひ方である。「二人」は「二人

で」の意味である。つまり「妹として二人」は「妹と二人で」といふ表現の「妹と」の部分を强めた氣持で、古義のやうに「妹と二人して」の意と言つて了ふのは妥當でないと思ふ。この上句の參考例として先に五味氏の擧げた「取持ちて吾が二人見し走出(はしりで)の堤」「吾妹子と二人わが寢し枕づく妻屋」、それから「形見にせむと我が二人植ゑし松の木」(二四八四)などがある。人麿のやうに「吾妹子と二人作りし」とでもいへば普通なのを、特に「妹として」と變つた言ひ方をしたのは、作者の心裏にこの事を特に强く表現したい氣持が働いてゐた爲であらうか。又一面、臆測すればこの「として」などは或は當時の一種の口語調で、旅人の拘らない、土屋氏の所謂素人的の作風から來てゐるのかも知れない。

この歌は、これまでの諸作と同樣情景備つた眞率な作品だと一應考へられるが、又一面どこか人情的に要領を得すぎたやうな感じがないでもない。この場合「妹として二人作りし」といふ感情は、次の「吾妹子が植ゑし梅の木」の歌に任せて下の句だけの感慨で一首を纏めたいやうな氣もするし、或はこの一二句を生かすならば、やはり次の歌のやうに下句で主觀を端的に述べる方が效果が直接ではなかつたかとも思はれる。この歌では「妹として二人」といふのが、前の「妹と來し敏馬の崎を」「往さには二人吾が見し」などの場合よりも何だか甘くて具合が惡いやうな氣がするのだけれど、其の邊をどう言つていいか實はよく判らない。結句の「なりにけるかも」もこの場合どうも物足りないやうである。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　吉田正俊

「妹として二人作りし」といふ句は甘いといへば甘いと言ひ得るが、六十七歲の老翁が見榮も外聞もな

く平然としてかういふ句を作した心情に同情すれば、そこに何處か稚拙を帶びてただ一概に甘いと言ひ得ないものがあるやうな氣がする。下句で主觀を端的にのべる方が效果が直接ではないかと前評者が言はれたが、この一二句を受けては却つて煩瑣で「二人作りし」が餘計に吾々に反撥心を唆るやうな具合になりはしないか。勿論下句の感慨だけで一首に纏め得れば現在の評者にとつてはそれに越したことはないことになるが、旅人の作風に之を求めるのは或は無理な註文といふ氣がする。「木高く繁く」としたあたりはややくどくて氣になる所があるが、この「なりにけるかも」は案外重くならず、もの足りないやうな所が一首の甘さとか誇張とかいつたやうなものを、幾分でも低めてゐる效果があるのではないかと私は思ふ。

○　　五味保義

吉田君の批評はこの一首の表現に觸れてゐて暗示されるところがあるが、柴生田君の提出した問題がそれによつて全く解決したやうにも私には思はれない。一體私は旅人の作品に接した初めからこの歌が好きであつた。それで柴生田君の「一面どこか人情的に要領を得すぎた」といふ評に一度は反撥するのであるが、又他の旅人作品の佳作に思ひを致すと多少考へ直さねばならぬと思ふ。この歌は旅人が自分の現在身をおく雰圍氣に育まれて、心理的には混沌とか追求とかがなくして作つた歌のやうに思はれ、そのため讀者を自然に作者の有する情緒に包むといふ德があるのだと思ふ。更に云へばこの歌の作られたさうした雰圍氣の方に讀者は餘計に心を惹かれがちであつて、いはば一首の弱さといふものが氣付かれずに過ぎ易いのではないか。私の從來のこの一首に對する好感はさういふ所に多く根據を置いてゐたやうに思はれる。

一首としてはもう少し鋭角的な心理において詠まれた作品の方が短歌として優れたものとなるのであらう。但作者は自分の作歌によつて孤獨寂寥を慰めた點において他の作よりこの一首が特に效果が著しかつたのではないかといふ氣がする。だから作者に同情すれば、現在の評者の氣持をもつて下句だけの感慨で一首を纏めるといふ要求をするのは無理な程に思はれる。

吾妹子が植ゑし梅の樹見るごとに心咽せつつ涕し流る　（卷三、四五三）

○

落合京太郎

旅人の時代に筑紫太宰府を發して京に入るまでにどの位の日程を要したであらうか。主計式に上廿七日、下十四日、海路卅日とあるが、實際の所要日數を續紀の例によつて少しく拾つてその要を記して見る。

（一）文武元年冬十月辛卯（廿八日）新羅の使が來朝、十一月癸卯（十一日）朝廷より新羅の使を迎へるため人を筑紫に遣す。二年正月壬戌朔に新羅の一行が朝廷にて拜賀。其故入京は元年十二月末と見なければならず、十二月三十日に入京したと假定すれば、迎を出してより入京まで五十日を要して居る。

（二）慶雲二年冬十月丙子（三十日）新羅貢調使來朝、入京同年十二月癸酉（廿七日）。此間五十九日。

（三）和銅七年十一月乙未（十一日）新羅使來朝、入京同年十二月己卯（廿六日）。此間四十六日。

（四）養老二年冬十月庚辰（廿日）太宰府より遣唐使多治比眞人縣守の歸朝を報ず、同年十二月壬申（十三日）縣守等入京。此間五十五日。

（五）　天平四年三月戊申（五日）新羅の使を太宰府より召す（既に同年一月廿二日來朝）、夏五月壬子（十一日）入京。此間六十八日。

（六）　天平六年十二月癸巳（六日）太宰府より新羅使來泊を報ず、七年二月癸卯（十七日）入京。此間八十四日。

以上を綜合して考へると、新羅國使の來朝又は遣唐使の歸朝の場合は、先づ筑紫に至り太宰府より朝廷に報告があり、朝廷の命を待つて入京したことが推測せられる。それ故右に記した各日數の中には、京より入京の許可が筑紫にもたらされる期間も加はつて居るので、筑紫から京までは大體前掲の日數の半即ち二十日以上三十日前後の日數を要したものと推定され式の行程とも大體一致する。

そして八七六乃至八八二の題詞竝左註によつて天平二年十二月六日憶良等が旅人のため送別の宴を催したことが推せられるし、同月中に上京の途に就いたことは四四六、九六五の題詞により明であるから、旅人の太宰府出發は天平二年十二月六日を幾日も過ぎなかつたであらう。十二月六日は「萬葉集年表」に據れば、陽曆一月二十二日に該る。それ故前記の推定に基く上京の日程に從へば、旅人が京に着いたのは恐らく天平三年二月下旬（陽曆）頃で梅の咲いて居た頃でもあつたらうか。「吾妹子が植ゑし梅の樹」と詠じて居るのは右推定を確める一證左ともならうかと想へる。

「見る毎に」といふのは何かことわり過ぎた感がして、多少歌の價値を低めて居ると言へるのではなからうか。僕には、三首中ではこの一首が少し劣る樣に思へる。然し「こころ咽せつつ涕し流る」などと言ひながら全體として少しも厭味を感ぜしめない所は、やはり考へさせられるものがある。

「文選」所收の潘安仁の「懷舊ノ賦竝序」に「今九載ニシテ來リ歸レバ、空館閴（ゲキ）トシテ其レ人ナク、陳

茭堂除ニ被リ、舊圃化シテ薪トナル。庭廡ヲ歩シテ徘徊スレバ、涕泫流シテ巾ヲ霑ス」や同作者の「寡婦ノ賦并序」に「空館ニ歸リテ自ラ憐ミ、衾幬ヲ撫シテ以テ嘆息ス、思纏綿シテ以テ瞀亂シ、心摧傷シテ以テ愴惻ス」などといふ詩句がある。いま、此等の詩章と旅人の四五一乃至四五三の作との間に直ちに關係を云々する意思はないのであるが、當時の文化人として旅人は恐らく「文選」などをも讀んで居たらうと想像せられるので、參考のため掲げて見た。

〇　　佐藤佐太郎

落合氏が言はれたやうに、旅人が十月に大納言に任ぜられて上京の途に着いたのは十二月六日頃であらうから、この歌の梅の木といふのは花の開いてゐる情景を想像し得るやうに思はれる。詞の上から言へば、それはどうでもいいことのやうでもあるが、味ふ上から言へば、さう想像する方が情緒的に訴へて來る氣持があるやうに思ふ。さうすれば、「見る毎に」といふ句も其所に作者の愛著があるわけで、落合氏が言はれるよりも同情して見ることが出來るのではあるまいか。代匠記に「孟子の中心壹ぶが如し」の句を引き、落合氏が文選の例を擧げてゐられるが、この歌の下句の表現には漢詩との類似も云々すれば出來る點があると思ふ。この下句の表現は同じ旅人の「水城の上に涕拭はむ」などと同様の表現で、前言の如く姿態の露はなものであるが、落合氏も言はれたやうに讀者に厭味を感ぜしめる點がない。藝術には多少の差はあつても大體として作者の姿態が伴ふものであり、第三者は其所に厭味を感ずるといふこともあるが、この姿態といふことも平然として押切る力倆を有する場合は厭味云々といふことも言へなくなつて來るのであ

らう。人麿とか旅人の歌などにはさういふ姿態の多い作品で相當高く評價されるものが多いやうに思ふ。それからこの歌は三首中では幾らか落ちるやうに落合氏が言はれたが、僕はこの三首は大體甲乙のない揃つた作のやうな氣がしてゐる。ただこの一聯の前には歸途の作が五首並んでゐて、これ等は旅人作歌中での秀作であるから、そこから續いて見て來た時に見劣りすることになるのではあるまいか。

しましくも行きて見てしか神名火（かむなび）の淵は淺（あ）せにて瀨にかなるらむ　（卷六、九六九）

○　　　　吉田正俊

旅人は天平三年辛未秋七月に歿してゐるのであるから、この歌はさういふ事實を考慮に入れるためか、もの靜かな落著いた感慨の作であるやうに思はれる。「吾が盛（さかり）また變若（をち）めやもほとほとに寧樂の京を見ずかなりなむ」「吾が命も常にあらぬか昔見し象（きさ）の小河をゆきて見むため」「吾が行は久にはあらじ夢の囘淵（わた）瀨にはならずて淵にしあらも」（三三一・三三二・三三五）等は同じく老境を嘆じた歌ではあるが、まだ何處か感情の高揚があるけれども、この歌になるとさういつた所も次第になくなつて來て、謂はば沈潛して、寧樂から程遠からぬ故里の神名火を思ひ遣つた風があつて哀れである。「淵は淺せにて瀨にかなるらむ」といふのは現在瀨になつてゐるだらうかといふのか、瀨になるであらうかと未來を言つてゐるのか、判然しない言ひ方ではあるが、これはさう穿鑿すべき所ではないのであらう。淵が瀨に變つてゆくといふことは、集中でも相當歌に詠まれてゐる一般感情であるが、さういふ類型的な見方を氣にしないで、その感情

發生を虛心にとればなかなか地味な趣があつて、この場合にはそれが如何にもさながらに表現されてゐて私の好きな歌である。

○　　　　　　　　五味保義

「しましくも行きて見てしか」の表現は線が細いと言へるかも知れないが、洗練された言ひ方で、それが第四句の「淺せにて」といふ表現にも通じ、更に結句の「瀨にかなるらむ」にも通じて、理詰に考へれば多少無理な下句の表現であるのをかなり順直に響かせてゐるやうに思ふ。その洗練された順直さは次の歌にも言はれる所で、吉田君の靜かな感慨が感ぜられるといふ說は私も同感である。一二句の如き表現をなし得るといふことはやはり作歌上の手練なくしてはかうは行き難いと思はれる。卷十一、十二あたりの歌とはその邊の呼吸がどうしても異つた所があると私は思ふ。

○　　　　　　　　土屋文明

感慨とはいふものの、その奧は平坦に歸してをる老境の心持をそのまま歌つてをるのであらう。萬葉集を讀み下してゆけば、これらの歌は或はそのまま通過してしまふのではないかとも思はれる。旅人の生活を考へて始めてその深い靜かな所に心を惹かれるやうに思ふ。と言つて、これは決して歌に表現されてゐない所を傳記的材料によつて補ひ味ふといふのではない。かういふ行き方がよいか惡いかは、一般論としては決定出來ないことであらうが、心持を素直に言ひ表して置けば、何時かはその事實の力といふか、背

景の生活といはうか、さういふものの光が作品の上に乘つてくるのではないか。そこへゆくと所謂技巧などといふものが實に無力なものだといふ氣もする。この歌など何所かたどたどしいのであるが力がある。ただ訓にはなほ問題があるのではあるまいか。「しましくも」の「も」、「あせにて」の「に」などはなくて訓めれば一層氣持がしつくりするのではないかと思ふ。

○

指進(さしすみ)の栗栖(くるす)の小野の萩が花散らむ時にし行きて手向けむ　（卷六、九七〇）

藤森朋夫

前歌と同じく寧樂の家で故郷を懷しんで詠んだ歌である。齡耳順を越えて筑紫の邊境に哀愁にみちた長い年を過し、其間ひたすら大和を戀ひ鄕里を慕つた。再び京に還つても終にその土地を踏むことさへ出來ない有様のやうであつた。しかもこの作をなした年、すなはち天平三年七月には他界してゐる。

この歌の初句「指進(さしすみ)の」は二句「栗栖(くるす)」にかかる枕詞のやうであるが、その語意は未詳である。今試みにその訓についてみるに、舊訓はサシスキノであるが、拾穗抄にはサシズキノ、代匠記にはサシススノ、童蒙抄にはサスズミノ、考にはサシズミノとあり、其後略解・攷證・新訓・全釋・年表・總釋等これに從ひ、古義には誤寫說を揭げて、ムラタマノ又はカキハキノと訓み、新考にはフルサトノと試訓してゐる。かくの如く諸訓が存するのであるが、古義の寫誤りとして其上に考へられた訓、新考の創見的試訓は共に俄に賛することは出來ない。他の中にあつては右にあげた如く、考の訓に多く據つてゐるが、やはりこれ

がいやうに思ふ。その接續の語義に關しても亦諸説あるが、比較的妥當と思はれる冠辭考の所説に暫く從ふことにする。卽ち「すみつぼなる墨をさし墨ともいふべく、且墨斗に墨縄を卷のぶるくるめきのある故に、さし墨のくるとはいひ續けたらん」とあるのに據る。

次に「栗栖の小野」も場所は確と定めがたい。和名抄には大和國忍海郡栗栖とあるが、若しこの地とすれば、現在の南葛城郡忍海村に含まれることとなる。さうすると飛鳥からは數里を隔てる地にあることになり、前歌と關聯せしめて考へるとどうも少し遠すぎる。そこで此地は飛鳥の近くにやはり栗栖とよばれる土地が古くあつたのではないかとも思はれるのである。新考には前歌にある神名火の近傍でなければならぬとし、神名火を龍田の神南と見做し、「栗栖も亦平群郡ならざるべからず」としてゐる。尙、栗栖は類多い地名であるから鄕名を冠らすべきで、寧ろ枕辭など置くべき餘裕ある處でないとし、原字に拘らず初句を塡めるとフルサトノといふべきかとの意をも述べてゐるが、これはひがごとといふべきであらう。既に正月號に扱つた（二〇五頁）「萱草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れぬがため」（三三四）の歌から類推しても、新考のごとく取るのは不自然といへよう。

結句「行きて手向けむ」については、略解には「故鄕の神かまたは先祖の墓などに手向せんとなるべし」と解し、古義また「土地神などへ供養む」の意とし、新考には「筑紫にて死別して故鄕に還し葬りけむ妻大伴郎女の墓にたむけむと云へるなるべし」としてゐるがどうであらう。この場合は此處に餘り深く意を持たせないで味つたらどうかと思ふ。つまり作者の心に何時も冀つてゐたのは故鄕への歸還であり、今萩の花の空しく散るのをいたくかなしんでゐるのであつて、さうした氣持の裡にある手向ける動作を想像し

たいのである。

一首には以上の如く問題の箇所も見出されるが、「栗栖の小野の萩が花」には自然な快い調がきかれる。「散らむ時にし行きて手向けむ」といふ表現にしても、「手向けむ」にあまり拘泥することなく寧ろおほらかな調べの中にその氣持を自然に汲み取るべき所であらう。斯く故里を戀ひ慕ひつつも、恐らく懐しい土を踏みしめることなくして寂しく逝つたであらう作者の生涯を思ふと、何か沁々とした哀愁の湧き來るものがある。沈潜した氣持が洗練されて自らに流露してゐる點流石に晩年の高手を偲ばしめる。

○　山口茂吉

この歌及び前の歌九六九は、共に旅人卿の作中でも優れた歌の部類に入るべきものであらうと思ふ。これは前評諸氏も大體同意見である。この歌は少しも隙のないまでに整つた歌でありながら、平板にならず力のこもつた作であり、九六九は下の句の澁滯したやうな調子の中に言ひ難い哀韻のこもつたものとなつてゐる。旅人卿の歌を年代順に讀み來ると、ここで何かに突當る如く讀みごたへがあり、餘韻を永く聽くおもひのする歌である。この歌の、「行きて手向けむ」の句とか、前の歌の「淵は淺せにて瀬にかなるらむ」などは、强ひて意味内容を吟味しなくとも、意おのづから通ずる底の佳調であり、私としては、そこにこだはらずに感得出來ればその方がいいやうな氣がしてゐるのである。

この歌には、「天平三年辛未、寧樂の家に在りて故郷を思ふ歌」と題詞がある如く、故郷を戀ひ思ふ歌であるが、私は、普通の健康狀態の時の歌ではなくて、病中に在つての作と考へるのである。しかも辛うじ

て歌を作り得る程度の相當の重態になつてからの歌と考へる。前の歌の「しましくも行きて見てしか」の、病床に於て叫びあげたともとれる切實必死の句や、「淵は淺せにて瀬にかなるらむ」の絶望的とも見られる咏歎などは、どうも病中の作として味つて初めてその眞實さに觸れ得るやうに思はれる。また、この歌の「萩が花散らむ時にし行きて手向けむ」の句なども、自分が遂に行き得ず、遂に見ることを得ずして散つてしまふであらうといふやうな感慨がこもつてゐる。

それから、旅人卿が病臥してゐたことは、「天平三年辛未秋七月大納言大伴卿の薨ぜし時の歌六首」の中、

見れど飽かず坐しし君が黄葉の移りい去けば悲しくもあるか（卷三、四五九）

に對する後注に、「右の一首は、内禮正縣犬養宿禰人上に勅して、卿の病を檢護せしむ。而も醫藥驗無く、逝く水留らず。斯に因りて悲慟して卽ち此の歌を作れり」とあるのによつても明かであり、卿の病を檢護せしめてゐる位であるから、突發的の事故とか急病でないことも明かで、病中で歌を作つてゐても少しも不思議ではない。また、同じく、「大伴卿薨ぜし時の歌六首」の中には、「右の五首は、資人金明軍が、犬馬の慕心に勝へず、感緒を申べて作れる歌」といふ後注ある（四五四―四五八）五首中に、

斯くのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも（卷三、四五五）

がある。これは、資人金明軍が、卿の枕頭に侍してゐたときのことを歌つたものと解釋出來、この旅人卿の歌の「萩が花」と深い關係あること勿論であつて、この歌が病床吟であるといふ私見の最も積極的な證據となるものである。

○　　落合京太郎

題詞によつて知らるる如く此歌は前掲の歌と共に天平三年に同時に作られたものである。續紀によれば同年秋七月辛未（二十五日）大納言大伴旅人薨となつて居り、旅人の薨じた際の金明軍の挽歌に「斯くのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも」（四五五）とあるところよりして、九七〇が旅人の病にならぬ以前の作なりとすること古義に引ける契沖の說の如くにも言ひ得るであらう。因に旅人薨去の日附は萬葉集卷第三の卷末及「補任」には七月一日となつて居る。然し題詞に「在寧樂思故鄕」ともあり、「しましくも行きて見てしか」、「散らむ時にし行きて」といふ所より推せば、この歌及九六九は或は既に病床にあつての作とも想像出來る。さうすれば恐らくは旅人の最後の作であらう。金明軍の前掲の挽歌よりすれば、同人に對し旅人は病床にて栗栖野の萩の花信を問うて、この歌をものしたのではあるまいか。（年表が一五四一、一五四二を同時の作と推定して居るのには多少私は疑問を持つが、少くとも金明軍の前掲の歌はこの九七〇に關聯せしめて考へる方がより自然だと言へると思ふ。）

「散らむ時にし行きて手向けむ」といふあたり、淸純にして哀音がこもつて居る。この哀調の點も「病床の作」と推定する一つの理由にしたいやうに思ふ。

この歌が亡妻に關するであらうといふことは早く土屋氏が觸れて居り、私もその說に賛成である。必ずしも亡妻一人のみに關して居ると解しなくても宜いのかも知れぬが、少くとも亡妻をも含めた一族先祖に手向けしようといふ意はあるのではあるまいか。「自分の病が癒ゆる頃は栗栖野の萩の花が散るだらう。

その頃行つて亡き妻たちに手向しよう」といふ程の意であらうか。

但だ「タムク」といふ語はこの一首以外集中では用例なく、神に對して之をまつる意に用ゐ、佛乃至は死者に對する場合に用ゐて居ない如く思へる。「百足らず八十隅坂に手向せば過ぎにし人に蓋し逢はむかも」(四二七)なども疑問はあるが、矢張神に對する場合であるらしい。それ故九七〇の一首だけを亡き人に對する手向の意に解するのは、用例の上から躓きがあるらしくも考へられる。當時既に神佛の兩者に對して「タムケ」といふ語が用ゐられて居たと解すればそれまでであるが、其には客觀的な根據が乏しいのではなからうか。

ただ一九〇四の「梅の花しだり柳に折り雜へ花に供養者君に逢はむかも」の「供養者」を「タムケバ」と訓ずるのが正しいとすれば、供養は勿論佛典語であらうから、萬葉集より先に又は同時代に之を「タムケ」と訓んだ例があれば都合がよい。

(一)十四年二月壬申詔。諸國毎家、作二佛舍一。乃置二佛像及經一。以禮拜供養。(二)朱鳥元年春正月庚戌。請二三綱律師。及大官大寺知事佐官。幷九僧一。以二俗供養一養レ之。(三)朱鳥元年六月丁亥。勅遣二百官人等於川原寺一。爲二燃燈供養一。何れも天武紀にある。(一)(三)は何れも音讀で「ライハイクヤウ」「ネムトウクヤウ」なりとして釋日本紀に特に「四字音讀」と註して居る。(二)は「タダヒトノクラヒモノヲモテクレキ」と訓んで居る。何れも供養を「タムケ」とは訓まないらしい。元正紀にも、養老五年の條に「恭敬供養」の文字が見えて居るが矢張音讀であらう。それ故今のところでは、佛に對する「供養」といふ字を持つて來て神に對する「タムケ」と訓んで居ることは、逆に「タムケ」を佛に對しても使つて居た

證左とはならないが、之に就ての一つの暗示を與へる、といふ程度のことしか私は言へない。

○

五味保義

落合説の中の「手向く」に就いて思ひついた事であるが、憶良の歌に「稚ければ道行き知らじ幣はせむ黄泉の使負ひて通らせ」(九〇五)、「布施置きて吾は乞ひ禱む欺かず直に率ゆきて天路知らしめ」(九〇六)といふのがあつて、この二首には「黄泉の使」「布施」のごとき佛教の言葉があるかと思ふと、「天路」といふ神道關係の言葉もあるといつた風で、當時すでにさういふ神佛混合の傾向がみとめられる。これは落合氏の疑問とする「手向く」の問題に直接な材料ではないが、作者が旅人と同時代の憶良であることから考へれば多少の參考になるかと思ふ。(略解、古義のやうに「天路」を六道の一とする解によれば、又別であるが。) 旅人の心中に往來してゐたのは亡妻の靈であつたかも知れず、それがたとひ「佛」であつても、「手向けむ」といふのは作者として自然な感情表出であつたらう。因に一九〇四の供養をタムクと訓み得るかどうか未だ疑問であらう。この歌は私もすぐれた作品と思ふ。「栗栖の小野の萩が花散らむ時にし」などこまかく觸れて來る。落合氏の口譯のやうな意味だらうが、「散らむ時にし云々」のあたりは、さういつてしまつては何だか具合がわるい。或は「病がいゆる頃は」といふ感情をあらはに云つてしまつてはいけないのではないか。

(昭和十二年三月)

三十三　大伴旅人の讚酒歌

太宰帥大伴卿讚酒歌十三首

驗なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべく有るらし（卷三、三三八）

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ（卷三、三三九）

いにしへの七の賢しき人等も欲りせしものは酒にし有るらし（卷三、三四〇）

賢しみと物いふよりは酒飲みて醉哭するしまさりてあるらし（卷三、三四一）

言はむすべ爲むすべ知らに極りて貴きものは酒にし有るらし（卷三、三四二）

なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ（卷三、三四三）

あた醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る（卷三、三四四）

價なき寶といふとも一杯の濁れる酒に豈まさめやも（卷三、三四五）

夜光る玉といふとも酒飲みて情を遣るにあに若かめやも（卷三、三四六）

世のなかの遊びの道にさぶしくは醉哭するに有りぬべからし（卷三、三四七）

今の代にし樂しくあらば來む生には蟲に鳥にも吾はなりなむ（卷三、三四八）

生者遂にも死ぬるものにあれば今世なる間は樂しくをあらな（卷三、三四九）

默然居りて賢しらするは酒飲みて醉哭するになほ若かずけり（卷三、三五〇）

〇　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　堀内通孝

旅人の讃酒歌は、人口に膾炙されてをり、一般からは恰も旅人の代表作のごとくに見られてゐるが、これらの歌が、たとへ萬葉集中異色な作品であるとしても、その作品價値に於て、旅人を代表すると見做すことが出來るであらうかどうか。當時にあつては誠にハイカラな作品であり、旅人自身相當に得意の作であつたらうとは想像されるが、今から見ればこれを旅人の代表作とする事には否定的ならざるを得ない。一體、この讃酒歌十三首を如何いふ風に吾々は受入れるべきであらうか。そのことに就ては、この作品に現れた思想内容を、旅人の相當本質的な思想と見做すか否かが、重要な基底となると思ふ。卽ちここに表白された思想を以て旅人の相當本質的なるものと見做す時は、この現世至上主義的な思想は、武人旅人が當時隆興を極めた佛儒思想への反撥であるとも云はれ、また漢籍を涉漁した旅人が、老莊などの思想に影響せられて、虛無的、デカダン的思想を抱懷してをつたとも云ふを得るのであらう。

然しながら、私はどうもこれを旅人の本質的な思想と見る事に贊成出來ないやうに思ふ。大體ここに表はれてゐる思想などは、今の言葉で云へば、文學青年的であるし面皰臭いものであるから、既に相當の老齡であつた旅人の本物の考へであるとは思はれない。それは當時と現代との時間的距離を念頭に置いてもである。尤もこれは一つの人生態度であるから、一概には言へぬかも知れぬが、斯く十三首もの連作的作品を成した事については、その作歌動機の重心は他の點に求めねばならぬやうに思ふ。又たとへ「世の中

は空しきものと知るときしいよよますます悲しかりけり」(七九三)などの悲劇的作品を成してゐる旅人であるとしても、「吾が盛りまたをちめやも」と詠嘆した旅人であるとしても、その人生的不遇が、彼をしてかかる晩年に、かかる思想に到達せしめたとは思はれない。況や、その立身榮達といふ點に關しては、極めて順調に大納言にまでなつてゐる旅人であるに於てをやである。

旅人が飲酒家であつたであらう事は、契沖も卷四(五五四)の丹生女王の旅人に贈つた歌

古の人の食せる吉備の酒病めばすべなし貫簀賜らむ

を擧げて指摘してゐるし、又旅人が大貳丹比縣守卿が民部卿に遷任せらるる時に贈つた卷四(五五五)の歌

君がため釀みし待酒やすの野に獨や飲まむ友無しにして

等を見ても分ると思ふ。

以上のやうに考へると、私は此等の歌は、要するに酒を讃ふる歌であつて、旅人の本質的な思想として取上げるべきものではないと思ふ。詞書の「太宰帥大伴卿讃酒歌十三首」は、萬葉集編者が入れたもので、この中に旅人の意志は無いとしても、旅人の意志も讃酒にあつたので、寄酒遣思ではなかつたと思ふ。つまり酒のよさを表現する爲に、才氣煥發故事を巧妙に採り入れて作歌したもので、旅人としては相當得意であつたのではあるまいか。當時迄の萬葉の歌を見ても、この一連は實に劃期的な華々しさを持つてゐるし、又「酒の名を聖と負せし」にしても、「いにしへの七の賢しき人」にしても、又「酒に染みなむ」「價なき寶」「夜光る玉」等にしてもみな出典を持つてゐて、旅人はさういふ點でも相當得意であつたのではなからうか。

私は、今これらの歌を旅人の本質的な思想として取上ぐべきでないと云つたが、それはここに表れてゐる思想が、旅人の出まかせであるといふのではない。かういふ思想も、旅人のある瞬間の、又ある時期の思想であつたであらう。そして又、人はそれ自身の中に矛盾的なものを持つてゐても一向差支はない。しかしながらここに表はれた思想が、旅人の生涯を通じて又は晩年を通じて本質的に持つてゐた思想ではなく、讃酒がその重點をなしてゐる歌であるといふのであつて、それは以上の様な理由によるのである。この歌は又即興歌とも言はれるが、以上の意味で私もこの即興歌説に贊成である。

○　　　　　　　　　　山口茂吉

私も堀内君の説に大體贊成である。この「酒を讃むる歌」十三首は、萬葉集中の變り種であつて、いろいろの意味で古來注意されて來た歌である。しかし一々それ等の學者の説を顧慮してゐる事が今は出來ないから、手近なところから赤彦先生の批評を擧げて見る。「小生はこれらの歌を以て、旅人が身邊の實相に直面し切れずして、世に拗ねた心から生れた歌、少くともやけくそ心が主調となつて詠まれた歌と解するのである。痛切な身邊事相に何處までも正面から對しとほすといふこと、餘程强い心の持主でもむづかしいのであつて、この點旅人も同軌にあつたと思はれる」云々と言つて居られる。これは赤彦先生自身の作歌態度を投影した確乎たる評言であつて、動かすことの出來ないものであり、我々に參考になるところが尠くなく、また面白い看方であると思ふ。けれども「燒け酒三斗、痛快淋離な十三首」とか、「拗ねても拗ね方が思ひ切つて大柄である。そこがこの歌の命であつて」云々とまで言つて居られるのはどうであら

うか。私は、此一聯の歌は、酒好きの旅人卿が酒を愛し尊ぶ純一な心から、どこまでも酒そのものを中心にして正面から歌ひ上げ、正直に心持を吐露して居り、そこにこの一聯の歌の生命があるやうに考へる。ただただ酒を愛する氣持があるばかりで、愉んで作つたもののやうに思はれる。而も非常に氣乘りして作つて居り、その作歌態度の純粹さを思はしめる。ここに歌はれたやうな氣持は前々からあつたにもせよ、作歌する際には恐らく一氣呵成に出來たもののやうに思はれる。ややもすると卽興歌とさへ取られるやうな、流暢な調べがあるのもそのためと考へる。用ゐられた詞句なども、「酒にしあるらし」(二例)、「まさりたるらし」「有りぬべからし」の如く、或はまた、「豈まさめやも」「あに若かめやも」等の如く、類似の句が多い。また、「賢しみと」「賢しらをすと」「賢しらするは」「醉哭するに」(二例)「醉哭するし」等同じ詞が幾つも入つてゐる。これは精一ぱいの力を内にこもらせて一氣に歌ひあげた一つの證據ではあるまいか。つまり私の言はむとするのは、世に拗ねたとか、燒け酒三斗とか、酒に託して儒佛を譏るとか、其他いろいろ意味がありさうに云はれてゐるやうなさういふ氣持よりも、酒を愛する故に、ひたすら酒を讚へてゐるその純一の氣持が、この歌に溢れて居り、そこがこの歌の取柄であると云ふのである。つまり、酒が中心で、いろいろの事物は從屬的のものであるやうに考へる。

この一聯を通讀する場合は、第一意味が明快で一々尤もな節があり、輕妙で氣が利いてゐるだけの歌のやうにも感ぜしむるけれども、この中のどの一首でも、拔出して來て、その一首をしづかに反誦して見れば、輕快でない澁い味ひがあり、不思議に沈潛した好い味ひを有つてゐる。これは亦旅人の歌の特色でもあり、老境に入つてからの作であるから、おのづから寂寥感、孤獨感とも云ふべきものが籠る結果となつ

てゐるのであらう。少くとも私には赤彦先生が「燒け酒云々」と云はれたやうな氣持でなく、今少し內面的にこもるものがあるやうに考へる。

なほこの歌には、竹林七賢人、隋の夜光珠、魏書吳の鄭泉の故事などが詠み込まれて居り、新知識を振り廻してゐるやうにも見えるが、然し、「必我を陶家の後に葬れ。化して土となり、幸に取られて酒壺にならば實に我が心を獲む」と吳の鄭泉が遺命したと云ふ魏書中の故事などは、旅人が最も我が意を得たる言葉として常に念頭にあつたものかも知れず、文學靑年が新知識を振り廻してゐるのとも違ふやうに思ふ。

○　吉田正俊

前二評者がこの十三首の歌に對して、要するに酒そのものを讃ふる歌であつて、それ以外に色々と作者の心持なり思想なりを忖度するのは、正しい鑑賞の態度でないと言つて居られるのは、恐らく古來の諸說が、あまりにさういつたものに捉はれ過ぎて云々して居るのに對する一種の反撥心の故であらうか。さういふ點に於ては私も前評に近い考へを持ちたいやうに思ふ。然しながらその一を採つて他を全然捨てるといふ前批評の如き明確なる態度は、短歌のやうな抒情詩に對する場合には聊か無理があるやうに私には思はれる。この點については堀內氏も後段に於て聊か餘裕を殘した曖昧なる態度を採つて居られるが、それは正にさうあるべきことと思ふ。私はこの讃酒歌十三首の背後には、やはり若しそれが思想と言つて言ひ過ぎとなるならば、一種の鬱々たる氣持が動いて居ることは、どうしても否定出來ないやうに思ふ。只その心の動きをあまり穿鑿しないで受けとるといふのが、素直な鑑賞といふことになりはすまいか。どうも

「酒好きの旅人卿が酒を愛し尊ぶ純一の心からどこまでも酒其物を中心にして正面から歌ひ上げてゐる」とのみ言ふのでは私にはもう一つ物足りないものがある。その先に鬱々たる心の動きといつたのを强ひて今少しく詮索すれば、世のさかしらする者に對する反撥を中心として、そこから浮び出た心情と言ひ換へてもよからう。それからこの一聯は、何處か全體として言葉が目立つたところがあるので、才氣煥發とか飜譯思想とか言はれ勝ちであるが、もう少しかういつた所が內に沈んで來れば、旅人特有の淡々たる詠嘆歌になつて行つたのではあるまいかと、それを私は殘念に思ふのであるが、實際の作歌はいつもさう思ひ通りになるものではないから、これも致し方なしとせねばなるまい。

○　佐藤佐太郎

「驗なき物を思はずは」「賢しみと物いふよりは」「價無き寶といふとも」「夜光る玉といふとも」「世のなかの遊びの道にさぶしくは」「この代にし樂しくあらば來む世には」「生者遂にも死ぬるものにあれば」かう歌句を抽出して見ても、ここに旅人の人生觀があり、生活價値の批判がある。それであるから、守部や赤彥などの說が出て來るのも極めて當然ではあるが、唯これらの先進は旅人の歌を通して稍恣に自家の義憤を洩したといふ傾きがあるだらう。この旅人の人生觀ともいふべきものは、誰でも氣付くことではあるが、支那文學との交流の著しいもので、その根本色調は六朝風、七賢思想であり、特に陶淵明あたりを主流として唐宋以下に一貫して傳統を永在せしめた虛無的風流主義である。さういふ支那文學で、旅人當時我邦に舶載せられたと想像し得る詩文のうち、私は先づ陶淵明を想起するのであるが、淵明は我朝の仁

てゐるのであらう。少くとも私には赤彦先生が「燒け酒云々」と云はれたやうな氣持でなく、今少し內面的にこもるものがあるやうに考へる。

なほこの歌には、竹林七賢人、隋の夜光珠、魏書呉の鄭泉の故事などが咏み込まれて居り、新知識を振り廻してゐるやうにも見えるが、然し、「必我を陶家の後に葬れ。化して土となり、幸に取られて酒壺にならば實に我が心を獲む」と呉の鄭泉が遺命したと云ふ魏書中の故事などは、旅人が最も我が意を得たる言葉として常に念頭にあつたものかも知れず、文學青年が新知識を振り廻してゐるのとも違ふやうに思ふ。

○　吉田正俊

前二評者がこの十三首の歌に對して、要するに酒そのものを讃ふる歌であつて、それ以外に色々と作者の心持なり思想なりを忖度するのは、正しい鑑賞の態度でないと言つて居られるのは、恐らく古來の諸說が、あまりにさういつたものに捉はれ過ぎて云々して居るのに對する一種の反撥心の故であらうか。さういふ點に於ては私も前評に近い考へを持ちたいやうに思ふ。然しながらその一を採つて他を全然捨てるといふ前批評の如き明確なる態度は、短歌のやうな抒情詩に對する場合には聊か無理があるやうに私には思はれる。この點については堀內氏も後段に於て聊か餘裕を殘した曖昧なる態度を採つて居られるが、それは正にさうあるべきことと思ふ。私はこの讃酒歌十三首の背後には、やはり若しそれが思想と言つて言ひ過ぎとなるならば、一種の鬱々たる氣持が動いて居ることは、どうしても否定出來ないやうに思ふ。只その心の動きをあまり穿鑿しないで受けとるといふのが、素直な鑑賞といふことになりはすまいか。どうも

「酒好きの旅人卿が酒を愛し尊ぶ純一の心からどこまでも酒其物を中心にして正面から歌ひ上げてゐる」とのみ言ふのでは私にはもう一つ物足りないものがある。その先に鬱々たる心の動きといつたのを強ひて今少しく詮索すれば、世のさかしらする者に對する反撥を中心として、そこから浮び出た心情と言ひ換へてもよからう。それからこの一聯は、何處か全體として言葉が目立つたところがあるので、才氣煥發とか飜譯思想とか言はれ勝ちであるが、もう少しかういつた所が内に沈んで來れば、旅人特有の淡々たる詠嘆歌になつて行つたのではあるまいかと、それを私は殘念に思ふのであるが、實際の作歌はいつもさう思ひ通りになるものではないから、これも致し方なしとせねばなるまい。

○　佐藤佐太郎

「驗なき物を思はずは」「賢しみと物いふよりは」「價無き寶といふとも」「夜光る玉といふとも」「世のなかの遊びの道にさぶしくは」「この代にし樂しくあらば來む世には」「生者(いけるもの)遂にも死ぬるものにあれば」から歌句を抽出して見ても、ここに旅人の人生觀があり、生活價値の批判がある。それであるから、守部や赤彥などの說が出て來るのも極めて當然ではあるが、唯これらの先進は旅人の歌を通して稍恣に自家の義憤を洩したといふ傾きがあるだらう。この旅人の人生觀ともいふべきものは、誰でも氣付くことではあるが、支那文學との交流の著しいもので、その根本色調は六朝風、七賢思想であり、特に陶淵明あたりを主流として唐宋以下に一貫して傳統を永在せしめた虛無的風流主義である。さういふ支那文學で、旅人當時我邦に舶載せられたと想像し得る詩文のうち、私は先づ陶淵明を想起するのであるが、淵明は我朝の仁

德天皇時代に生れて、允恭天皇時代に歿して居るから、この時間的關係からしても相當に根柢を主張し得るもののやうに思ふ。近時の萬葉學界には漢文學との交流を云々する傾向もあるらしいが、旅人對淵明の關係は、その中でも相當有力なる結果を齎し得るものではなからうか。もつとも、讃酒歌と淵明との關係は夙く契沖も注意したらしく、代匠記は「濁酒聊自適」の一句を引いてをり、近くは林古溪氏の「萬葉集外來文學考」に淵明の數句を引いて居る。併し林氏は同時に他のものをも擧げ、やや取捨選擇を欲しない態度のやうであるから、私は暫く對象を淵明に固定せしめて、「讃酒歌」を考へたいのである。今試みに淵明作「飮酒」二十首中より數句を抄して見ようと思ふが、淵明と云へば直ちに酒を思ひ、菊を思ふといふのが常識であつて、この「飮酒」以外に酒を歌ふ語句を求めれば、用例多く煩に堪へないと言つてもいい程であるから、私はしばらく「飮酒」中より數句を抄することにしたのである。

「衰榮は定まりて在ること無く、彼此更はる之を共にす。……寒暑に代謝有り、人道も每に玆くの如し。達人は其の會を解し、逝いて將た復た疑はず。忽ち一觴の酒と與にして、日夕歡んで相持す」「善惡苟に應ぜず、何事ぞ空言を立てたる」「但だ世間の名を顧みる。我が身を貴うする所以は、豈に一生に在らずや」「行くと止まると千萬端なり、誰か非と是とを知らん。……咄々俗中愚なり、且く當に黃綺に從ふべし」「汎たり此の忘憂の物、遠し我が世を遺るの情。一觴獨り進むと雖も、杯盡きて壺自ら傾く」「提壺寒柯に挂け、遠望時に復た爲す。吾が生夢幻の間、何事ぞ塵羈に紲がれん」「裸葬何ぞ必ずしも惡からん、人當に意表を解すべし」「規々たるは一に何ぞ愚なる、兀傲は差穎なるが若し」「金を揮ふの事無しと雖も、濁酒聊か恃むべし」「若し復た快飮せずんば、空しく頭上の巾に負かん。但だ恨むらくは謬誤多からん、君當に醉人を恕すべし」（漆山又四郎氏譯）。

以上の例を以つて見ても、その愛酒の姿とか人生思考の態度とかいふものの彼此接近の具體相は、私をして旅人が淵明にまねび、秘かに日本國の淵明を以つて任じてゐただらうと想像せしむる程である。かういふ漢文學攝取は憶良にもあつて、旅人と共に双璧とも言ふべきであるが、旅人に於ては彼の詩人的天性によつて、その樣相がより感情的であり、より具體的であつたといふ氣がする。

堀内氏が卽興歌云々といふ事を言はれたが、この點は私も同感であつて、旅人が陶然の醉に乘じてこの一聯を成したといふ氣もし、恰も先の淵明作「飲酒」の序に「餘閑居して歡び寡く、兼ねて秋の夜已に長し、偶ゝ名酒有り、夕べごとに飲まざるは無し。影を顧みて獨り盡し、忽焉として復た醉ふ。既に醉ふの後、輒ち數句を題して自ら娯しむ」云々。といふ如きではなかつただらうかと想像するのである。

さてこの讚酒歌一聯は、前評諸氏の意見もあつたが、愛酒といふ事も、人生觀といふ事も、二つながらともに一抹の風流味を湛へた心の狀態である。興に乘じた歌として自由自在の技巧であり、斯くの如き感情の積極面を歌つた歌としては、この邊が一頂點といふ氣もし、內容の特異性と共に集中注目すべきものであると思ふ。山谷が評して「淵明に至りては則ちいはゆる繩削（じようさく）を煩はさずして自ら合ふ者なり」と言つたといふが、天性の詩人としての旅人の才を又この一聯に見ることが出來、出典のある言葉の攝取などでも、極めて自在であると私は思ふ。

○　五味保義

この十三首の歌はいろいろに批評されてゐるけれども、それは外形的な方面に於て批評がいろいろに違

つて居るのであつて、さて短歌としての價値批評に至ると、さう立入つた批評が從來存在したわけではない。この歌を材料として、旅人を目して享樂主義者と言つて見たり、又は古くから言はれるやうに日本古來の現世思想をここに見得ると言つて見たり、或はデカダンの思想を持つた作者だとして西歐のさうした藝術作品と比べて見たり、老莊思想の影響を受けてそれを言ひ現したのだとする如きは、近年の注釋書に必ず擧げられるところのやうであるが、どうもそれらには私の氣持にはぴつたりしない所が多く殘されて居るやうに思ふ。それは十三首、酒を題材にした、そして調べに於て一貫した一聯を纏めて論じ易いといふところから來る結果であつて、確かにこの一聯は特殊なものであり、さういふ批評の的になり易いものと思ふが、それだけに止り勝なのは結局物足りない感じがする。さういふ意味で、從來の諸說は一々擧げて批評するのが寧ろ煩はしいやうに思ふのである。これは吉田氏の所謂反撥といふ氣持とも亦違つて居ると私は思ふ。

此等の歌がかなり自在な趣を有し、一讀して滯らぬ感じを受けるのであるが、それは堀內氏の謂はれる本質的なる旅人(この本質的といふ意味がやや不明瞭であるが)と全然關聯のないものとは思はない。やはり旅人でなくては現れない調べが、その自在なるが如く見える一首一首の中に窺はれるのである。

驗なき物を思はずは一杯(ひとつき)の濁れる酒を飮むべくあらし

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ

此等の歌を讀み味ふに、たとへばその助詞の活用の如き、かなりに手に入つたものがあつて、その點だけでも旅人は必ずしも素人であるとは言ひ切れない程に思ふ。漢語と助詞との連續の間から生じて來る響

きの具合には、何處かに、溢るやうな趣があつて、一首を恣に誦した時に受ける滯りない姿態といふもののなかに、かういふ極めて地味な細かな言葉の活用が潛んでゐることを私は注意して見ようと思ふ。或はその助詞の煩はしさが眼につき過ぎると言ふ人もあらう。十三首の中には「賢しみと物いふよりは」の「と」「は」のやうな具合、「遊びの道にさぶしくは醉哭するに」の「に」「は」、「來む生には蟲に鳥にも吾はなりなむ」の「は」「に」「も」等の如く、やや其の技巧が眼に立ち過ぎるものもあるのだが、それ等は結局、その煩はしさだけに終つて居ないことを私は注意しようと思ふ。

それで「七の賢き人」「酒壺になりにてしかも」「猿にかも似る」「夜光る玉といふとも」等の句に接して直ちにその語の意義內容に興味を持つて、次々に十三首を讀み過さうとすることは、惜しいと思ふのである。但し斯く考へることは作者に對する同情の心持の多きに過ぐるとも思はれよう。勿論旅人の作の中から佳作を抄するとして、此等は或は選び殘されるものであらうといふことは私も考へる。しかし同情して見れば何處かに良い所が見出される德を旅人の歌は持つてゐるのであつて、その材料の特異なるが爲に、讀者がその方面にのみ眼を奪はれ勝ちであるのは殘念であると言ひたかつたのである。實際に於て旅人の周圍の人ですら、斯の如き作、斯の如き調べの追隨を爲すことが出來なかつた。例へば沙彌滿誓が「世の中を何に譬へむ」と詠んでも、それは「この世にし樂しくあらば來む生には」の如き近代的哀調を生み得なかつたのである。

吉田氏が一種の欝々たる氣持の動いてゐると言はれたのは私も同感である。その氣持は、やはり旅人流に、重苦しくなく、淡く、然し淚脆く底の方に動いて居るやうに私に思へる。さういふ點になると極めて

主觀的な評價になつて言ひにくいのであるが、例へば

なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ

今の代にし樂しくあらば來む生には蟲に鳥にも吾はなりなむ

生者遂にも死ぬるものにあれば今世なる間は樂しくをあらな

のやうな歌は、採りやうによつては、拗ねたとも、自棄的な氣分を現したとも考へられるのだが、又思ふに「蟲に鳥にも吾はなりなむ」といふ口吻を虛心に味ふ時、旅人獨特の悲しみが流れてゐる如くに思はれる。この邊の呼吸は人麿の歌などとは違つて、その坌湧する主觀の强さがないために、決定的に說くを躊躇するやうになるのだが。

私の今言ふやうな見方に對して、或は卷五に見える旅人の松浦河の歌、或は琴の歌等に根據を置いて、その趣味的なる旅人の作風をあげ反撥する人があるかも知れない。然しさういふ論じ方は時に成功するのであるが、さうでない場合も十分にあると思ふのである。

以上のやうな意味からして、私は旅人の作歌態度を論じた在來の說の中から「大伴旅人の生涯」(アララギ十四ノ三)の中にある「內に悲しみを藏し、不平を抑へて居る彼が、謂はば近代的の惱みの極のせめてもの自らの慰み」であるといふのに最も惹かれて居るものである。

○　　　　柴　生　田　　稔

既に說かれて居るやうに、私もこの讃酒歌一聯を旅人の太宰府在住中の作と想像し、その背後に當時の

旅人の心境を考慮したいと思ふ。つまり「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（七九三）、「吾が盛またをちめやもほとほとに奈良の京を見ずかなりなむ」（三三一）などに流れてゐるのと同様の生活感情から發して居ると取りたいのである。一面私はこれらの作品を卽興的な輕い味はひのものだとする說にも從ふものであり、酒興に乘じ自ら樂しんで詠じてゐるのではないかなどといふ想像にも敢て反對ではないが、それは必ずしも一部で說かれるやうに明るい陽氣な平穩無事の心境を意味するものではなく、一脈生活苦の陰影ともいふべきものの其處に漂ふのを否定出來ない氣がする。「醉哭するしまさりたるらし」といひ、「酒飮みて情を遣るに」といひ、「今の代にし樂しくあらば」といふ、皆ある苦味を帶びた心情表出の狀態と考へられる。「あな醜賢しらをすと」「賢しみと物いふよりは」などと言つても、昂然として他を罵ると言ふよりも、自ら人間生活の煩に堪へない氣持の方が感ぜられるやうである。「なかなかに人とあらずは」といふ句は、卷十二に「桑子にもならましものを玉の緖ばかり」（三〇八六）と續けた例があつて、或は當時の慣用句でもあらうが、旅人の作になると一面にはより輕妙であると同時に、また卷十二の戀愛表白の場合とはやや趣を異にした厭人的色調が感ぜられはしないだらうか。兎に角「驗なき物を思はずは」といふ觀念の基には、亡妻・老齡・家鄕・官職等旅人自身の思ふに「驗なき物」のさまざまを私は認定したいのである。

只この場合、さういふ生活感情が「奈良の京を見ずかなりなむ」といふやうな直接的な表出法を採らずに、「驗なき物を思はずは」と一般的觀念に抽象された點が問題となるわけである。「一杯の濁れる酒を飮むべくあらし」に就いても同樣のことが言へる。そして「一杯」といひ「濁れる」といひ、そこに一つの

狙ひと擴大とが存してゐる。この一聯に感ずる私達の物足りなさは、分析すれば大體右のやうな點に基づくのであらうか。「酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ」「言はむすべ爲むすべ知らに極まりて貴きものは酒にし有るらし」などといふ言葉を、一途な眞劍な氣持で言へるやうな、神經の太い素朴人だとは旅人は思はれない。酒興に任せると言つても、やはり「擴大」の效果を意識し、愚直の不手際を避ける用意を忘れない。輕妙と淺露の感は竝にこれに基くのである。或は文化人旅人の弱味がここに現れてゐるといふことも出來よう。

「世のなかの遊びの道に冷者（さぶしくは）」の第三句を、考の說によつて右のやうに訓めるとすれば、これなどは取りやう次第で甚だ到り着いた心境であり、奈良朝文化人の生活もこの段階にまで達してゐたかと思はれるほどである。表現の上から見ても如何にも端的で要核を捉へてゐる。これは「生ける者遂にも死ぬるものにあれば今世（このよ）なる間は樂しくをあらな」などに就いても感ぜられるところで、觀念的は觀念的として、その表現はどこまでも直接明瞭で現實的である點は、後の勅撰集の思想歌などの間接的な效果とは趣を異にしてゐる。だが結局かういふ觀念的表現といふものは現實具象の底力には及ばない。作者としては自由率直に言ひ放つた積りでゐても讀者の立場からは、おのづから別個の感銘が生ずるやうである。現在の私達は餘程この間の消息に思を致すことが必要ではあるまいかと思ふ。

一體旅人に於けるかういふ觀念的な詠風の由來をどう考へるべきであらうか。或は文化の發展、詩歌の發達途上に於ける自然の現象とも言へよう。卷一に於ける額田王が春山秋山の美を「歌を以（も）ちて判（ことわ）れる歌」（一六）などは既にこの傾向であり、この讃酒歌にすぐ續いてゐる沙彌滿誓の「世間を何に譬へむ朝びらき

榜ぎ去にし船の跡なきごとし」(三五一)、笠女郎の「相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後へに額づく如し」(六〇八)なども關聯して想起される。それから巻十一・巻十二あたりの相聞歌などにも相當の作例を拾ふことが出來よう。しかもこの旅人の十三首には如上の作品とは又趣を異にした或るものが認められる。この點佐藤氏が支那文學思潮の影響を說き、「一抹の風流味を湛へた心の狀態」云々と言はれた意見に私も同感である。兎に角この一聯には卽興は卽興なりに或る思想なり觀念なりが表されてゐるのであるから、その內容に就いて考察することは作家旅人を理解する上に等閑視出來ないことではないかと思ふ。或は日本固有の現實的人生觀といひ、或は外來老莊思想といふのは、大いに懸け離れた見方であつて、これを一括して不必要の穿鑿と評し去ることは如何なものであらうか。私はやはり「今の世にし樂しくあらば」「生ける者遂にも死ぬるものにあれば」といふ表出は、古事記あたりの現世思想とは大いに異るものがあると思ふ。しかも佐藤氏の引くところの陶淵明の詞句と比較するに、彼に於ける風流はいかにも生活的であり沈痛の氣をさへ伴つてゐて、我が旅人の攝取し來つたところとは遂に大いなる隔絕である。これは單に一旅人の問題ではなく、日本文學思潮上の重要なる現象として考察せらるべきものであると思ふ。

〇

落合京太郎

讃酒歌十三首が旅人太宰府在任中の作であり、而も妻を喪つた以後の作であることは、殆んど通說として行はれて居るやうである。

巻第三にはこの十三首の前に憶良及滿誓の歌があり、それに先んじて旅人の三三一乃至三三五の五首が

載せられて居る。さらにこの十三首の後には滿誓の一首が見えて居る。そして右の三三一乃至三三五が筑紫在任中の作であることは既に言つた如くであり、又右の憶良及滿誓の作をも筑紫に於ける作と推定するにさして妨ない様である。そして四三八乃至四四〇、四四六乃至四五三等の卷三所載の旅人の作が何れも製作日時の順を追うて居り、その作の排列に就て卷第三の編者が意を用ひて居ることが窺へるのだから、以上の事實と此歌の內容等より考へると矢張通說に從つて宜いのであらう。「君がため釀みし待酒やすの野に獨りや飮まむ友なしにして」（五五五）が、題詞によつて天平元年の作で妻の死後に屬することも、右の說を支持する多少の根據になるかも知れない。

　讃酒歌を以て現實を謳歌する我國古代思想の現れであるとか、當時の官學たる儒敎に對して老莊、清談の思想を以て酬いたものであるといふやうな見解は以前から行はれて居る。

　なるほど此等十三首には現實謳歌にもとれる樣な作もあるが、「命の全けむ人は　疊薦（たたみこも）平群の山の　くま檮（かし）が葉を　うずに挿せ　その子」（古事記）などに比べると明かである樣に、旅人の作には一種の暗さを帶びて居り、從來の現實を讃美するものとは餘程ニュアンスを異にして居る。そして實際も作の根柢をなして居る傾向は、現實を謳歌するものと觀るよりも、寧ろ、現實に對する不平不滿焦燥の色彩である。況して此等の作から滑稽の分子などはなかなか抽出し得るものでない。

　また人の說くが如く、題材內容よりして此等十三首が無爲を事とし禮法に遵はない老莊乃至は清談の徒の聲を寫したものと言へないこともなからう。事實懷風藻などを見ても、さういふ方面に當時の宮廷人が興味を抱いて居た痕跡を幾つか拾ふことも出來るし、あらはに「文藻我所レ難、莊老我所レ好」（越智直廣江）

などと言つて居る例もある。然し早く土屋文明氏がアララギに於て指摘し、更には島木赤彦氏が「鑑賞及び其批評」のなかで指摘して居る如く、右の如き觀方も結局は行き過ぎた觀方であり、一定の型を用意して置いて作物を律しようといふ批評態度といふことになるであらう。

老いし旅人が筑紫の邊境に在つて身邊の不幸と時運の非とに不滿不平焦燥を感じながら一時の自己を遣らむとして物したものであり、思想の主張といふやうなことを意圖したものではないのであらう。色々な思想的な持味もあるにせよ、謂はば「慨き獨り余(われ)に在り」の作である。世を罵り酒を讃して居るのは自己の悶々を遣り、不平のやり場を求めて居るのである。其處に實作に當り何か對他的なものを豫想する意識が生ずるのではあるまいか。製作の時の還境も明であり、之に同情しながらも、何時もの旅人の作と異り何か表面的な感がして我々の共感を誘ふことと割合に尠い。自己の咏嘆が純粹な形であらはれて居ないといふ點があるのではあるまいか。更に言へば酒を讃むるといふやうなこと自體が、漢詩などと違つて短歌の題材としては工合が惡いものなのかも知れない。この邊はよく判らない。私は讃酒歌十三首にも自分では同情を持つて居たつもりであつたが、今夜讀みながら考へて見て多少案外な氣もした。それにしても「今の代(よ)にし樂しくあらば來む生には蟲に鳥にも我はなりなむ」「生けるもの遂にも死ぬるものにあれば今世なる間は樂しくをあらな」の二首などは矢張旅人のよい所があらはれて居り、思想的抒情歌などを論ずる場合には參考になるやうに思へる。

この十三首が思想を主眼としたものでないことは既に言つたごとくであるが、それがために旅人の思想的教養といふ方面を否定し去る譯ではない。人間の思想感情は複雜であり、一つのイズムを以て表さうと

いふことは難い。旅人などに就ても同じことである。强ひて言へば、旅人の作を貫くものは文人氣質である。これは近世のデイレツタンチスムスの謂でなくして、情懷と靜寂を主とする氣質を指したつもりである。漢學的敎養はその重要な一要素をなして居る。この十三首に依つても旅人の漢學の素養の一斑が窺はれること人の說くが如くである。懷風藻にも旅人（淡人）の作として「初春侍ㇾ宴」の一首が載せられて居る。「寬ㇾ政政情既遠。迪ㇾ古道惟新。穆々四門客。濟々三德人。梅花亂ニ殘岸一。烟霞接ニ早春一。共遊ニ聖主澤一。同賀ニ擊壤仁一。」擊壤が彼の「日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力於我何有哉」の擊壤歌から來て居ることは明かであらう。

人生の短きを悲しみ酒を歌ふ詩は、支那古來其例に乏しくない。當時文選などの外に種々な形に於て此等の詩文が將來せられたことは勿論で、旅人も亦其等の內の幾つかに親んだのであらう。

「西門ヲ出デテ歩ミテ之ヲ念フ、今日樂ヲ作サザレバ、當ニ何レノ時ヲカ待ツベキ。夫レ樂ヲ爲シ樂ヲ爲スハ當ニ時ニ及ブベシ、何ゾ能ク坐愁怫鬱トシテ、當ニ復タ來玆ヲ待ツベケンヤ。醇酒ヲ飲ミ肥牛ヲ炙リ、請フ心ニ歡ブ所ヲ呼ベバ、用テ愁憂ヲ解ク可シ。人生百ニ滿タス、常ニ千載ノ憂ヲ懷ク、晝短クシテ夜ノ長キヲ苦シム、何ゾ燭ヲ秉リテ遊バザル」云々（西門行、漢詩、無名氏）

「酒ニ對シテハ當ニ歌フベシ、人生幾何ゾ、譬ヘバ朝露ノ如ク、去日苦ダ多シ、慨シテ當ニ以テ慷スヘク、幽思忘レ難シ、何ヲ以テカ憂ヲ解カム、惟ダ杜康有ルノミ」云々（短歌行、魏詩、武帝）

などは人生を悲しみ酒を歌つたものとして古くから人口に上つて居る。

濁酒（ニゴレル酒）といふ語が陶淵明の詩に屢〻現れて居り、（濁酒半壺、濁酒聊自適、濁酒且自陶、

濁酒聊可恃)、又前揭の旅人の詩中「穆々四門客」の穆々といふ語も淵明の作に二三現れて居る(穆々良朝、穆々司徒、於穆仝族)なども興味がある。淵明に飲酒、述酒などと題した作があるのみならず、幾んど毎詩に酒を味じて居ることは人の知るが如くである。

「中觴遙情ヲ縱ニシ、彼ノ千載ノ憂ヲ忘ル、且(シバラ)ク今朝ノ樂ヲ極メン、明日ハ求ムル所ニ非ズ」(遊斜川并序)

「清歌新聲ヲ散ジ、綠酒芳顏ヲ開ク、未ダ知ラス明日ノ事、余カ襟良(オモヒ)ニ已ニ殫(ツ)キタリ」(諸人共遊周家墓柏下)

「常ニ恐ル大化盡キテ、氣力衰フルニ及バザラムコトヲ、撥置シテ且ク念フコト莫レ、一觴聊カ揮(ツク)スヘシ」(還舊居)

「道喪ビテ千載ニ向トス、人々其情ヲ惜シム、酒有ルモ肯テ飲マス、但タ世間ノ名ヲ顧ル、我身ヲ貴クスル所以ハ、豈一生ニ在ラスヤ、一生復タ能ク幾クゾ、倏トシテ流電ノ驚クカ如シ、訂々タリ百年ノ內、此ヲ持シテ何ヲカ成サムト欲ス」(飲酒、其三)

淵明の作は文選にもあり、旅人などよりも遙に時代の古い人であるから、其作に親んで居たと推定せられないこともない。

○　　　　　　　　藤　森　朋　夫

既に前評者たちも述べられた所であるが、この一聯には素材となつてゐるものが特殊である爲、從來旅人の作品の中にあつても多くの者が問題視し、所謂有名歌になつてゐる。旅人としての眞に性格的特徵の滲透せるものは他にこれを求め得るであらう。酒を飲みこれを讃へて作つたこの作は、やはり卽興的のも

いふことは難い。旅人などに就ても同じことである。强ひて言へば、旅人の作を貫くものは文人氣質である。これは近世のデイレツタンチスムスの謂でなくして、情懐と靜寂を主とする氣質を指したつもりである。漢學的教養はその重要な一要素をなして居る。この十三首に依つても旅人の漢學の素養の一班が窺はれること人の說くが如くである。懷風藻にも旅人(猿人)の作として「初春侍ㇾ宴」の一首が載せられて居る。「寬ㇾ政政情既遠。迪ㇾ古道惟新。穆々四門客。濟々三德人。梅花亂ニ殘岸一。烟霞接ニ早春一。共遊ニ聖主澤一。同賀ニ擊壤仁一。」擊壤が彼の「日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力於我何有哉」の擊壤歌から來て居ることは明かであらう。

人生の短きを悲しみ酒を歌ふ詩は、支那古來其例に乏しくない。當時文選などの外に種々な形に於て此等の詩文が將來せられたことは勿論で、旅人も亦其等の內の幾つかに親んだのであらう。

「西門ヲ出デテ步ミテ之ヲ念フ、今日樂ヲ作サザレバ、當ニ何レノ時ヲカ待ツベキ。夫レ樂ヲ爲シ樂ヲ爲スハ當ニ時ニ及ブベシ、何ゾ能ク坐愁怫鬱トシテ、當ニ復タ來茲ヲ待ツベケンヤ。醇酒ヲ飲ミ肥牛ヲ炙リ、請フ心ニ歡ブ所ヲ呼ベバ、用テ愁憂ヲ解ク可シ。人生百ニ滿タス、常ニ千載ノ憂ヲ懷ク、晝短クシテ夜ノ長キヲ苦シム、何ゾ燭ヲ秉リテ遊バザル」云々（西門行、漢詩、無名氏）

「酒ニ對シテハ當ニ歌フベシ、人生幾何ゾ、譬ヘバ朝露ノ如ク、去日苦ダ多シ、慨シテ當ニ以テ慷スヘク、幽思忘レ難シ、何ヲ以テカ憂ヲ解カム、惟ダ杜康有ルノミ」云々（短歌行、魏詩、武帝）

などは人生を悲しみ酒を歌つたものとして古くから人口に上つて居る。

濁酒（ニゴレル酒）といふ語が陶淵明の詩に屢〻現れて居り、（濁酒半壺、濁酒聊自適、濁酒且自陶、

濁酒聊可恃）、又前揭の旅人の詩中「穆々四門客」の穆々といふ語も淵明の作に二三現れて居る（穆々良朝、穆々司徒、於穆全族）なども興味がある。淵明に飲酒、述酒などと題した作があるのみならず、殆んど毎詩に酒を詠じて居ることは人の知るが如くである。

「中觴遙情ヲ縱ニシ、彼ノ千載ノ憂ヲ忘ル、且ク今朝ノ樂ヲ極メン、明日ハ求ムル所ニ非ズ」（遊斜川并序）

「清歌新聲ヲ散ジ、綠酒芳顏ヲ開ク、未ダ知ラス明日ノ事、余カ襟良ニ已ニ殫キタリ」（諸人共遊周家墓柏下）

「常ニ恐ル大化盡キテ、氣力衰フルニ及バザラムコトヲ、撥置シテ且ク念フコト莫レ、一觴聊カ揮スヘシ」（還舊居）

「道喪ビテ千載ニ向トス、人々其情ヲ惜シム、酒有ルモ肯テ飲マス、但ダ世間ノ名ヲ顧ル、我身ヲ貴クスル所以ハ、豈一生ニ在ラスヤ、一生復タ能ク幾クゾ、倏トシテ流電ノ驚クカ如シ、鼎々タリ百年ノ內、此ヲ持シテ何ヲカ成サムト欲ス」（飲酒、其三）

淵明の作は文選にもあり、旅人などよりも遙に時代の古い人であるから、其作に親んで居たと推定せられないこともない。

○　藤森朋夫

既に前評者たちも述べられた所であるが、この一聯には素材となつてゐるものが特殊である爲、從來旅人の作品の中にあつても多くの者が問題視し、所謂有名歌になつてゐる。旅人としての眞に性格的特徴の滲透せるものは他にこれを求め得るであらう。酒を飲みこれを讃へて作つたこの作は、やはり卽興的のも

のと見る說に贊成であつて、この中に思想的要素として、老莊的なるもの、神仙的なるものが色濃く顯されてゐるといふ見方には左袒しかねる。現實的に刹那主義、快樂主義を歌つてゐるのを强く見るといふ說は、比較的多くの者の據る所であつたが、これは更に考へ直して見るべきであらう。

旅人は實作にあたつて漢籍の影響をうけてゐることも從來に於て指摘され、又前評者の中にもそれに觸れられた。例へばこの十三首についても、諸註によつてその出典の擧げられるものは六首の多きに亘る。即ち「酒の名を聖とおほせし」(三三九)は魏書に、「古の七の賢しき人等も」(三四〇)は晉書列傳に、「酒壺になりてしがも」(三四三)は吳志に、「價無き寶といふとも」(三四五)は法華經に、「夜光る玉」(三四六)は史記に、「生ける者遂にも死ぬるものにあれば」(三四九)は史記に、それぞれ負ふ所あつたらうとするのである。確かに彼は時代人文化人として、當時の貴紳階級にあつては教養あるものとして重視せられてゐたと思はれる。外來文化の攝取、さうした點も認められようが、彼の場合にあつては、それは單に知識が知識としてのみに終つてはゐない。むしろ彼の抒情によつてこれが生かされ、生活環境から來る眞率な態度で命あるものとして扱はれてゐると見られよう。

それからこの十三首の製作時についてであるが、題詞「太宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首」のみにては何時であつたかは判明しがたい。恐らくこれは彼が九州に赴き間もなく愛妻を亡くした以後の作と見られるのではなからうか。歌情の底には、むしろ世をはかなむといつたやうな氣氛が漂つてゐるやうに思はれ、さうした氣持が割合に嫌味なく、しかも目立たぬやう自然に現されてゐる。ただ單なる讃酒歌、即興歌とは自ら姿相を異にしてゐる點を注意したい。酒宴の席などにあつて刹那的感興的に詠む歌等にあつて

は、歌情に輕薄感が伴ひやすい傾向があるが、この場合には、旅人自身の內感がある度合をもつて作品の中に滲み込んでゐるやうに感ぜられる。表面的に滑りやすい卽興歌であるが、これには一種の寂寥感哀愁感がひそんでゐるので、この點吾々は心を惹かれるのである。卽ち吉田氏が言はれた鬱々たる氣持といふやうなものも感得されるのである。

（昭和十二年四月）

三十四　大伴旅人の作風

○

落合京太郎

懐風藻に旅人の年を六十七と註してある。疑問はあるがしばらく此の説に從つて置きたい。續紀によれば旅人の薨じたのが天平三年秋七月辛未(廿五)であることは既に述べた。卽ち筑紫より寧樂に歸來してから約半歳の後である。

旅人が筑紫へ赴任した時期は判然しないので結局は想定の域を出でない。神龜元年七月にはまだ在京して居たことは續紀の記事に依り明かであるが、爾後天平三年春正月に至るまでは旅人に關する記事は缺けて居る。神龜五年の春夏の交に筑紫に於て妻を喪つたことは萬葉集に現れて居るので、神龜元年七月から五年春夏の交迄の間に赴任した事は明かである。天平二年十二月六日憶良の敢布私懷歌三首の中に「天ざかる鄙に五年住ひつつ京の風俗忘らえにけり」(八八〇)とあるので、憶良の筑前守赴任は恐らく神龜三年中のことであらう。渡唐の經驗もあり、また養老五年東宮に侍せしめられたことのある憶良は、筑紫在任以前より旅人と親交があつたと思へるから、憶良の赴任は帥としての旅人の推挽乃至は慫慂によるものと

も想像せられ、さすれば旅人の赴任は神龜三年乃至は其以前とも推測せられ得る。しかし神龜五年七月の憶良の日本挽歌を、旅人の地位になつてこれに同情して作つたものと觀ると、右の神龜三年乃至其以前赴任の想定は、「大王の、遠の朝廷と、しらぬひ、筑紫の國に、泣く子なす、慕ひ來まして、息だにも、未だ休めず、年月も、いまだあらねば」(七九四)といふのと若干の矛盾を來す如く思へる。「神龜四年冬十月庚午(二)以₂從三位阿部朝臣廣庭₁爲₂中納言₁」と續紀に見えて居るから、これが當時中納言であつた旅人の後を補つたものと推し得られるならば(此點は既に土屋氏が「大伴旅人」に於て觸れて居たと思ふ)、旅人の赴任は其頃といふことになり、從つて日本挽歌とも割合に矛盾することなく解し得られる。

然し以上の如きは何れも想像でしかない。それ故私は暫く古義の說に從ひ神龜三年赴任として置きたい。筑紫で旅人を迎へた官民の中には、觀世音寺造營のため早く養老七年二月より來て居た俯滿誓の顏が見えたであらう(續紀參照)。ことによると憶良の顏もまじつて居たかも知れない。筑紫に於ける旅人の生活は妻を喪くしながらも、さういふ友人同僚達にまもられ、帥老などと親しまれながら時に風流に遊んだりして居た如く想へる。妻の死後は妹の大伴坂上郎女が身邊の世話をして居たのだらう。子の家持もまだ少年で父と共に筑紫に居たに違ひない(九六三の題詩及五七九並其題詞參照)。

萬葉集に旅人の作として明記されて居る作は、長歌一首、短歌(反歌をも加ふ)五十六首であり、「奧山の菅の葉凌ぎ」(二九九)と「み吉野の」(三一五)の長歌及びその反歌「昔見し象の小河を」(三一六)との三首を除く外は、皆神龜五年以後卽ち在筑紫の時からその薨去に至るまでの作と看てよいのであらう。酒に親しみ、老を嘆じ、思を時運に致しながら、綿々として亡妻に思慕を寄せて居た晚年數年の生活が卽ち

旅人の作の殆ど全體を占めて居ると言つて宜い。

彼の作に發展の跡の著しくないことや、流動性の多くを求められないこと、同一の詞句を屢々くり返して居て製作態度の峻嚴でないかを想はしめる樣な點なども、以上に述べた作者の年齡製作期間などを考慮に容れて論じないと酷に失するのではあるまいか。

旅人は或期間は人麿とも生を同じくして居た筈であるが、その作品は人麿よりも遙に近代人的な味ひがある。謂はるる如く人麿の作には渾沌蒼溟といつた持味があり、原始人の息吹きが感じられるのであるが、旅人の作品になると淸澄平明であり所謂細みが多分に加はつて居る。人麿に比すると、作者の把握態度(Auffassungsweise)からして既に多分に分化して居ると謂へるやうに思へる。「もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行方知らずも」(二六四)と「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」(七九三)とを例に採つて見ても、其間の消息は明である。それは、抽象的に言つてみれば、旅人の成長した世界は人麿の時代よりも遙に分化した世界であることの反映だとも言へる。

旅人は名家の子弟として又宮廷人として縱に經學を修め橫に老莊の敎や佛敎の洗禮などをも享けると共に、舶載せられた詩文殊に陶淵明の詩などに親しんだことであらう。そしてまた當時既に相當に集積せられて居た人麿及其以前の作品にも接して居た筈である。古事記日本書紀なども何れも旅人の生前に完成して居る。人麿の作や記紀の中の歌謠の影響を推測せしめる詞句のあることは、既に指摘された如くである。

旅人の作品には苦澁生硬なところがない。淡々と敍しては居るが必ずしも平板ではない。その描寫も狹い意味での自然を對象として居るよりも、多くは自己の情懷を寫すに專念して居る。その點でも野心的な

作者ではない。狭い道をゆくアマトゥールといふ批評も生ずる所以である。情懐を寫すのを旨として居る點などは、その稟質にもよらうが、漢詩の影響などが餘程多いのではあるまいか。情懐を主としては居るものの、作者の姿態が眼について讀者を反撥せしめるといふ所は尠い。これは聲調にもよるだらうし、題材自體に我々の共感をひく所があるにもよるだらう。批評の埒外かも知れぬが、作者の人德といつた樣なものが作品ににじみ出て居るためかも知れない。

「今の代にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にも吾はなりなむ」(三四八)「生けるもの遂にも死ぬるものにあればこの世なる間は樂しくをあらな」(三四九)などにも、「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」と同樣に、私は作者の世間苦に對する諦念俯俛の態度の現はれて居るのを看る。清澄平明を旅人の作品の特徵の如く言つたが、これ等の作や讃酒歌などを見ると濃くはないにせよ、思想的な暗さも陰をさして居る。これも見逃し得ないところであらう。そして此等の作品と「昔見し象の小河を」などを見ると、作者の聲調にやや monoton なところのあるのは認めらるるにせよ、もうアマトゥールの語は適用せられない樣な氣もする。外來思想の影響などをも思はしめながら、一首が渾然として破綻を示さない所などは、巧んだと否とを問はず、矢張敬禮してよいと思はれる。外來の思想文化と日本のそれとの融合調和といふ樣な點からも旅人の作品は興味がある。萬葉集の作品を品評する場合、除外することの出來ない人だと思へる。

前述の如く旅人の作品は淸澄平明で多分に細みが加はつて居るが、さういふ點に纖細に墮し平板に陥つた萬葉後期の危険が、包藏されて居るとも言へる。此等の點も一々の作品に當つて考へたいが、いまその

餘裕がない。

〇

鈴江幸太郎

旅人のやうな單純清素な歌は和歌史を通じてまづ無いといつてもいいと思ふ。記紀の短歌の單純なものも枕詞、地名、疊語等が多く用ゐられて旅人程單純な印象を受けず、又旅人のやうに一本調子にいつて居ない。旅人の歌の內容は單純であるが、大まかでなく常にきめが細かく、潤ひを持つてゐて抒情味が強い。

昔見し象（きさ）の小河を今見ればいよよ淸（さや）けくなりにけるかも（卷三、三一六）

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（卷五、七九三）

沫雪のほどろほどろに零りしけば平城の京師（みやこ）し念ほゆるかも（卷八、一六三九）

この作風は單純化の一方向を極度まで押し進めたものであるが、勿論新風を出さうといふ意識などでは出來ない、自らなる詠嘆であり、旅人が一歌人としてよき天性を持つたといふことが窺はれる。そして旅人の作は贈答歌の或もの、宴席の歌等を除けば現實の生活なり感情なりが親しく讀者に觸れて來、又察知せられることが、赤人は勿論人麿憶良に比較しても多く、境涯の吟味といふ氣がする。これは強ちその生涯が比較的分明であるとか、妻の死に關聯する作の多いとかいふことから受けるのみでなく、前述の抒情的性格から、作歌に當り第一義的な生活感情の直接な發露を自ら遂げてゐるのに依るのだと思ふ。讃酒歌等から窺はれる技巧の修練乃至新時代的敎養といふことが根柢には成つてゐても、旅人の作を高くしてゐるものはその人間性と境遇といふ感が強いので、旣に三月號（二六一頁）の批評中九六九の歌について土屋

氏がこの點に觸れて感慨をのべられてゐる。

又人麿の妻を哀しむ短歌五首（異傳二首）と旅人の挽歌とを比較すると、人麿の方は

　家に來て吾屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕（卷三、二一六）

の一首の外は

　秋山の黃葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも（卷三、二〇八）

　黃葉の散りぬるなべに玉梓の使を見れば逢ひし日念ほゆ（卷二、二〇九）

　去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる（卷三、二一一）

　衾道（ふすまぢ）を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし（卷三、二一二）

と現實の對象物を出しても、昇華した感情を歌つてゐるのに對して、旅人の作は「吾妹子が見し鞆の浦の室の木」「妹と來し敏馬の埼」「妹として二人作りし吾が山齋」「吾妹子が植ゑし梅の樹」と多くが對象物と妹との關聯を強くあらはに言ひ出してゐる。憶良の「妹が見し楝（あふち）の花はちりぬべし」（七九八）の影響が考へられるが、憶良の何處か形式的なのと異つて對象に深く纏りついて詠つてゐる。この句法は憶良の影響を言ふまでもない、最も自然で直接な詠嘆法であるが、前代のものにはありさうで見當らない。對象を身邊から強く捉へて、綿々と感情を現す手法は人麿作との價値の比較、又は態度の高下を別にして現實的詠風の一進展と考へられる。又我々が親しみを感じ境涯の吟味といふ感を持つ主な原因であると思ふ。

○

五味保義

一月號（一八九頁）以來各首について評して來た旅人の作品三十六首以外に、猶二十六首程が殘されてゐる。それには次のやうな類が大半を占めて居る。

龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて來むため（卷五、八〇六）
如何にあらむ日の時にかも聲知らむ人の膝の上吾が枕かむ（卷五、八一〇）（日本琴）
吾が苑に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ來るかも（卷五、八二二）（梅花宴）
わが盛いたく降ちぬ雲に飛ぶ藥食むともまた變若めやも（卷五、八四七）（同上）
梅の花夢に語らく風流たる花と我思ふ酒にうかべこそ（卷五、八五二）（同上追和）
山の名と言ひ繼げとかも佐用比賣がこの山の上に領巾を振りけむ（卷五、八七二）

右はいづれも旅人が妻を喪つて後の作品である。旅人の亡妻追慕の歌はすでに評せられたやうに切々として人の心を衝くのに、これらはそれと趣を異にしてやや趣味的な詠風である。今この詠風に對して特に意見を述べようとするのではないが、これらの作に次いで

吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞ亡き（卷三、四四六）
妹と來し敏馬の埼を還るさに獨して見れば涙ぐましも（卷三、四四九）
指進の栗栖の小野の萩が花散らむ時にし行きて手向けむ（卷六、九七〇）

のごとき心境が、きはめて鮮明に作者の個性を示現し來るのを見ると、旅人の素質のすぐれたものであつたことを思はざるを得ない。旅人の世間的環境から考へて、前者のやうな心境に止まつても居られた人であることは想像されるのに、結局そこに止まらなかつたといふ意味から云つても、旅人の個性がどこか眞

率で、生活を粗忽にすごす類の人でなかつたことが知れる。又思ふに前者のやうな作歌の經驗が晩年の佳作を生むに役立つたかどうかは疑問であるが、斯のごとく作歌に親しんでゐた事實といふものは、全然無視することは出來ないのではあるまいか。切實な境涯に入りさへすれば、人は直ちに咏嘆の切實なるものを作し得るとはきまらない。作歌の道程には目立たぬ幾多の事情が存在する。だから佳作を殘した人にはそれだけの道程があつたことを尊重しなくてはならぬと思ふ。

旅人の作品には人麿と近い時代の作者でありながら、憶良や赤人の樣に人麿の影響を見ない。さういふ點では人麿を目標としなかつたやうに思へる。ただ短歌の歴史を見てゆくと旅人もやはり人麿流風の中の一人と云ふべきであると思ふ。殊に取材の方面に於ける基調には、どうしても人麿といふ大きな存在を無視出來ない處がある。旅人はしかしその中に在つて、自由な拘はりのない作歌をつづけ、自分の生活を根柢とした聲のみを發して居たために、上述の結果をもたらしたやうである。はじめは憶良等から刺戟された傾向であつたが、晩年に於てはみづから作歌の雰圍氣を作り、そこに娛しみつつ、遂にみづからも離れ得なくなつたやうで、終始旅人らしい足迹を殘した。それに比すると現在の吾々は吾々相互の影響とか感化とかをずつと神經質に考へるやうになつて居ると思ふ。又それ程意識して單なる追隨を自戒しつつも、結局吾々は旅人の人麿に對する關聯の形に於てよりも、家持の人麿憶良赤人に對する關聯の形に於て、作品を成してゐるやうに思ふ。この邊の消息を思ふに、旅人の作品の獨特といふ事も、單に作者の素質が優秀であつたと考へるだけでは足りない、何かが存在するのではなからうか。

旅人の作歌上の交渉のあつた人々は數に於て少くはない。具體的にさういふ人の名のあげられる點では、

人麿赤人又は憶良とは比較にならぬ程多い。憶良、房前、滿誓、縣守、四綱、金明軍等と數へ、更に梅花宴に會した人々を數へれば決して少い數ではない。しかしそれは流風を成す底のものではなかつた。ここにも旅人の自由な態度を考へることが出來るのである。現在吾々が旅人の作品に親しみを感ずることは事實であるが、恐らくこの交友等もまた旅人の親しみ易い人柄に心をよせたものではないかと思ふ。

藤波の花は盛になりにけり平城の都を思ほすや君（卷三、三三〇、四綱）

さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君（卷六、九五五、足人）

人皆のうらぶれ居るに立田山御馬近づかば忘らしなむか（卷五、八七七、憶良）

凡ならば左も右もせむをかしこみと振りたき袖を忍びてあるかも（卷六、九六五、兒島）

眞十鏡見飽かぬ君に後れてや朝ゆふべにさびつつ居らむ（卷四、五七二、滿誓）

み埼廻の荒磯によする五百重波立ちても居てもわが念へる君（卷四、五六八、石足）

君に戀ひいたもすべ無み蘆鶴の音のみし泣かゆ朝夕にして（卷四、四五六、金明軍）

上役旅人に對する挨拶の歌もあらうが、さうばかりではない。そしてさやうな交渉の間から生れ來つたものは、作風の樹立ではなくして、特に後の坂上郎女や家持中心の時代の一面へ殘された、いはば「風流」の氣分であつた。相互の影響感化を神經質に考へるだけに、現在の吾々はもう少し切實な作歌交渉の境に立つてゐるのだと思ふ。これも後世から見ればどうかわからぬが、今はさういふ氣がする。從つて旅人の作品は後人に對しても獨立してゐる觀がある。ただ妹と子息に與へた血緣的な遺產は、後人に與へた足迹と考へるに足る材料を拾ひ得よう。詳細に說くことを止めるが

淺茅原つばらつばらにもの思へば故りにし郷し思ほゆるかも（卷三、三三三、旅人）

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ（卷六、九八二、坂上郎女）

雨晴れて清く照りたるこの月夜（つくよ）また更にして雲な棚引き（卷八、一五六九、家持）

の如き細く清い作風が見られるので、これは感化といふ言葉が不適當ならば、形質の傳承とでも云ひ得ようか。

○

柴生田稔

旅人の作風一般についての考察は今到底その準備も餘裕もないので、僅にその句法上から見た一二の點を書きとめて置くことにする。

旅人には所謂三句切の歌は見當らない。もつとも萬葉集全體として三句切が極く少いことは、夙く橘守部が指摘してゐる通りであるが、實際に調べて見ると守部の言ふよりももつと古くから、守部の數へたよりもつと多くの作品が存在する。これはなほ三句切の定義そのものが相當曖昧になつてゐる點を考へねばならぬが、今私は成るべく解りいい客觀的な標準を採つて、第三句で文が終つてゐる場合を總べて指すことにする。さうするとこれは古事記にも

山城にい及（し）け鳥山いい及けいい及けあが愛（は）し妻にい及き逢はむかも

のやうなものがあるが、萬葉集でももつとも古い頃のものとしては

み吉野の玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく（卷二、一一三、額田王、藤原朝）

が擧げられる。この休止はまだかなり短いものとも思はれるがなほ

ほととぎす無かる國にも行きてしかその鳴く聲を聞けば苦しも（卷八、一四六七、弓削皇子、文武三年前）

後れゐて戀ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈回（くまみ）に標結へわが背（卷二、一一五、但馬皇女、藤原朝）

わが船は比良の湊に榜ぎ泊てむ沖へな放りさ夜ふけにけり（卷三、二七四、高市黒人、藤原朝）

等の如く奈良朝以前から幾つかの作例を見出すことが出來る。但し人麿には一首もない。人麿の作品には

ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らに戀ひわたるかも（卷二、二〇〇）

のやうに第三句までが連續する傾向が強いのは既に氣づかれてゐることであるが、それでゐて三句切にならない處を注意すべきだと思ふ。奈良朝に入つては三句切は相當に多い。憶良には

妹が見し楝の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに（卷五、七九八、神龜五年）

牽牛（ひこぼし）の嬬迎へ船榜ぎ出らし天の河原に霧の立てるは（卷八、一五二七、天平二年?）

その他三三七・九〇五・一五二九・三八六五（三三七及び九〇五は二句三句で切れる）計六首が數へられる。

海（あま）をとめ棚無し小舟榜ぎ出らし旅のやどりに楫の音聞ゆ（卷六、九三〇、笠金村、神龜二年）

島がくり吾が榜ぎ來れば羨しかも大和へ上る眞熊野の船（卷六、九四四、山部赤人、神龜三年）

海つ路の和（な）ぎなむ時も渡らなむかく立つ浪に船出すべしや（卷九、一七八一、高橋蟲麿歌集）

ひさかたの天の露霜置きにけり家なる人も待ち戀ひぬらむ（卷四、六五一、大伴坂上郎女）

等旅人當時の著名歌人にはいづれも三句切の作品が存在する。なほ旅人關係の作品に

藤浪の花は盛になりにけり平城(なら)の京を思ほすや君（卷三、三三〇、大伴四綱）

今よりは城の山道はさぶしけむ吾が通はむと思ひしものを（卷五、五七六、葛井大成）

などがある。家持になるとなほ一層多いがこれは今省略する。かういふ情勢の中にあつて旅人に三句切の歌が一首もないといふのは單に偶然の結果であらうか。特に旅人と關係の深い憶良を考へあはせる時、この二人の相違が目に立つのを覺える。

一方旅人には前述人麿に於けるやうな第三句までの連續した作品がやはり割合に目に著く。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（卷五、七九三、神龜五年）

京(みやこ)なる荒れたる家に獨り寢ば旅にまさりて苦しかるべし（卷三、四四〇、天平二年？）

かういふ類の作品が旅人作短歌六十二首（二九九・八一四・八五三―八六〇を暫く除く）の中二十首程數へられる。（これは三句切と違つてかなり標準が微妙になるが、今作品を擧げる餘裕がない）もつともこの一・二・三句の連續する傾向は既に初期時代からの萬葉集の特色と考へられ、旅人の頃には殊に一般的な現象だとも言へるのであるが、これを一方の三句切が皆無といふ事實と結びつける時には、そこに何等かの暗示が與へられるやうに思ふ。とにかく萬葉集中相當歌數の多い著名歌人で三句切が一首もないのは人麿と旅人の二人だけである。

旅人にはなほ二句切の歌が十三首、四句切の歌が八首あるが、一首中二箇所以上で切れたもの、即ち憶良の

稚ければ道行知らじ幣は爲む黄泉(したべ)の使負ひて通らせ（卷五、九〇五）

のやうなものは一首もない。この點は人麿は

飼飯の海の庭よくあらしかりごもの亂れ出づ見ゆ海人の釣船（卷三、二五六）

の如き二句切四句切の格調のものを一首持つてゐる。全體として旅人の句切のある歌の全歌數に對する割合は約三十四%で他の一般歌人と餘り相違がなく、人麿の二十三%よりもかなり多くなつてゐるが、これも理解出來ることのやうに思ふ。

もつとも憶良と旅人との類似といふやうな點が見當らないではない。

悔しかも斯く知らませばあをによし國内ことごと見せましものを（卷五、七九七）

あな醜さかしらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る（卷三、三四四）

の如き初句切とも見られるやうなものも兩者に存在してゐる。然し全體としては憶良に比べると旅人の作風は、より多く聲調が連續的であるやうに思はれる。人麿と旅人との相違は勿論かういふ大ざつぱな形態比較からだけでは說明出來ない。

それから旅人の句切のある歌は不思議にまとまつて存在してゐるやうである。

帥大伴卿歌五首

吾が盛またをちめやもほとほとに寧樂の都を見ずかなりなむ（卷三、三三一）

わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため（卷三、三三二）

淺茅原つばらつばらにもの思へば故りにし里し思ほゆるかも（卷三、三三三）

萱草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れぬがため（卷三、三三四）

わが行は久にはあらじ夢の囘淵瀨にはならずて淵にしあらも（卷三、三三五）

これは一團五首中四首が二句切である。

歌詞兩首

龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて來むため（卷五、八〇六）

現には逢ふよしも無しぬばたまの夜の夢にをつぎて見えこそ（卷五、八〇七）

後追和梅歌四首

殘りたる雪に交れる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも（卷五、八四九）

雪の色を奪ひて咲ける梅の花いま盛なり見む人もがも（卷五、八五〇）

わが宿に盛に咲けるうめの花散るべくなりぬ見む人もがも（卷五、八五一）

梅の花夢に語らく風流びたる花と吾思ふ酒に浮べこそ（卷五、八五二）

これらは一連全部が或は二句切或は四句切になつてゐる。一方讚酒歌十三首などは僅に三四三の一首のみが四句切かと認められる外は皆句切のない作品のみである。かういふ現象はやはり旅人の作風が感興に從つて一氣に詠ずる傾向のあつたことを示してゐるものではなからうかと思ふ。そしてまたこの考へは前掲三三一―三三五の一連を同時の連作と認めたい氣持と關聯してゐるのである。

○　　　　土屋文明

旅人の歌に對する關心が、どの程度に彼の生活に本質的に働きかけて居たかは、推測する材料が乏しい。

旅人の作歌ははやく神龜元年に見え、それは未逕奏上歌とはいふものの奉勅の作歌であるから、彼は當時すでに歌人として、或る力量を認められて居たと想像してもよいかも知れない。併しながら、萬葉集に傳へられてゐる彼の作歌は、多く神龜五年以後太宰府に於ての作であると思はれるから、歌に對する關心が彼の生活に稍深く食ひ入つたのは、太宰府赴任後であると想像してもあまり間違はないと思ふ。

旅人は名族の長者で、懐風藻に作詩を採錄されてゐることによつて、又卷五所載の尺牘等によつて、その漢文學に對する教養といふものを想見することが出來るのである。從つて旅人は當時の文化の尖端に立つてをつた文化人であり、所謂知識人でありしたことは疑ふに及ばないと思ふ。併し又、社會的地位や乃至教養の高さから見て、旅人とくらぶべき者は當時決して少くはなかつたらうと思ふ。不比等の四人の男子等の如き、すぐに旅人と比べて考へることが出來るのである。然るにそれ等の人々の間にあつて、旅人だけがあれだけの歌を殘したといふことは一體何によるのであらうか。房前、宇合、麿等にも作歌はあるのであるが、その生活に本質的に關係を持つてゐるといふことからすれば、旅人とは比較にならない様に思ふ。

旅人の作歌の一々に就いてはすでに評論を盡くした様に思ふのであるが、兎に角旅人は如何なる機緣によつたとしても、晩年の數年をかなり强く作歌に打ち込んでをつたといふことは考へられる。新來文化の教養の複雜なるものを持つてゐながら、この自國の單純なる抒情詩に引きつけられて、それによつて生涯の歸結を見出したやうに思へる所に、我々は意義深い暗示を見出すことが出來る。旅人の歌は人麿やその以前のすぐれた作家の様に、純粹で力强いといふわけには行かないものがあるかも知れない。抒情詩とし

ての純粹といふことを第一として考へれば、そこに多くの挾雜物のあるのを擧げることが出來るかも知れぬ。けれども、人麿よりは遙かに複雜な實生活を背景として考へる時、彼の作歌に對して我々は一段の同情を感じその意義を見出すことが出來るやうに思ふ。そのことは一々の作品に就いて言つたことでもあるが、繰り返してみてもいいやうに思ふ。一方、同時代の金村や赤人の作と比較してみると、旅人の歌は決してそれ等のものよりも無意義だとは言へないと思ふ。むしろ、金村や赤人の作品に前代を繼承した部分が多く獨創の少いのに對して、旅人には旅人の生活から出て來た旅人獨自のものがかなり著しく認められるやうに思ふ。技巧の上から言へばそれには漢詩の影響といふやうなものもあるのであらうが、もつと根本には旅人の性格といふことにつながりがあるといふ他あるまい。我々は旅人の樣な環境に於て、旅人に見るやうな抒情詩的な性格が顯現したことを、苟且ならぬものとして考へてもよいのではないかと思ふ。

（昭和十二年五月）

三十五　山上憶良の歌八首

白浪の濱松が枝（え）の手向草（たむけぐさ）幾代までにか年の經ぬらむ　一云、年は經にけむ（卷一、三四）

○　　　　　　　　　　　五味保義

大伴旅人の歌に次いで、山上憶良の作品を三四箇月に亙つて問題にしようと思ふ。作品の順序は萬葉集年表の排列によつて數首づつを擧げ、最後に憶良の作風の概論が附加されること、旅人の例と等しい。

この一首憶良の作とは決しかねる歌で、題詞によれば川島皇子の御歌となり、その左註によつて製作年月は持統四年となるので、他の憶良の作品よりは十年餘を遡ることになる。題詞の註に或云山上憶良作とあるによれば、大體大寶元年の作品と見做すべきものと思はれることは年表の註にある如くである。しかし、さういふ點に就てはなほ面倒な問題が多くある歌で、上述の如き說によつて落著いたとも思はれないのであるが、今假に題詞の註を根據として憶良作として考へることにする。

○　　　　　　　　　　吉田正俊

「白浪の濱松が枝」は白浪の寄する濱の松が枝である。作者はその情景をいくらかでも表現したいといふ欲望があつたのであらうが、いくらか様式化した表現で、どこか煩瑣な感じがないでもない。それから「手向草」は左千夫が萬葉集新釋に於て述べてゐる如く、手向草といふ一箇のものでなく、手向草をする一つの人事と解するといふ工合に鑑賞の態度をとらないと、實際餘りに表面的で、作者の作歌衝動といつたものに疑問を持ちたくなるやうな所がある。しかし、さういふ工合に作者の意圖を忖度して解釋するにしても、前例のない新しい表現ながら、どこかマンネリズム化した見方なり表現なりを感ぜしめ、おのづから溢れる感慨を抑へて然したとも思へない、極めて個性の稀薄な歌のやうである。

○　　　　　　　　　　落合京太郎

この歌の解釋については吉田氏が引かれた左千夫說の如く手向けをするといふこと、卽ち「手向をする習ひはもう幾代までにかなつたのであらう」といふ說と、「枝に懸つてゐる手向の料は幾代までにかなつたのであらう」といふ二說があり、その他にも說をなしてゐるやうであるが、私は文法とは少し懸離れるけれども「手向草の懸つてをるこの濱松は今は幾代を經たものであらうか、隨分齡を重ねたものであらう」といふ程の意味に解釋していいのではないかと思つてゐる。「幾代までにか年の經ぬらむ」といふのは作者としても手向草を指してゐるのか、松自體を指してゐるのか、はつきり意識してゐないのかも知れない。し

かし、私の解釋は行き過ぎたものと言はれても、文法上から言へば仕方がないと思へる。前評者の言へるが如く稍〻形式になじんだそしりは免れぬが、「白浪の濱松が枝の手向草」などは何か淸らかな感じもする。

年表が題詞により「山上憶良の歌とせば、一四五と同じく大寶元年作となるべし」といつてゐるが、續紀によれば大寶二年六月乙丑に憶良を含む遣唐使が出發したとあり、なほ前年の大寶元年に一度筑紫より出發したが、風浪のために渡海することを得ずして、ここに及んだものだとの記事があり、大寶元年五月己卯に入唐使粟田朝臣眞人に節刀を授くとあるから（同人が遣唐使に命ぜられたのは大寶元年春正月である）大寶元年の出發は恐らくは同年の五六月頃であらうし、大寶元年に紀伊行幸のあつたのは同年の九月であるから、遣唐使の一行に加へられて居た憶良は恐らくは右の行幸には從ひ得なかつたのであらう。年表の說にはなほ疑問がある。

○　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

前評二氏の解釋上の要求はそれぞれ一理あるやうに思ふが、辭句の解釋としてはやはり平凡に、現在作者の眺めてゐる手向草が果して幾許の年を經たであらうかといふ意味にとるべきであらう。さうしてその言葉の中に色々の氣持を補充すればいい。私はこの歌はやはり古來の一說にあるやうに、有間皇子の故事に關聯してゐると思ふので、それは皇子の結松を直接指してゐるとは言ひ切れないが、作者がかういふ感慨を發した心理には、有間皇子の御歌が背景に浮んでゐたのではないかと考へられる。山田孝雄氏は行幸の時にさういふ忌はしいことを詠む筈はないと言はれてゐるが、これは大寶元年紀伊行幸の時に結松を詠

んだ歌（卷二、一四六）のやうな例があつて、必ずしも當らない。作歌年次については私も落合氏と同樣大寶元年の行幸時とするのは無理のやうに思ふ。また作者についても、主觀的ではあるが、どうも憶良の歌調ではないやうな氣がする。

○

落合京太郎

有間皇子の歌に「磐代の濱松が枝を引結び眞幸くあらばまたかへり見む」（一四一）とあるが、橘守部は檜嬬手のなかで、この故事を援いて「さて然か松を結ぶも、神に獻る幣代なりければ手向種とは申し給ふにぞある」と言つて「白浪の濱松が枝の手向草」を「有間皇子がその枝を引結むで手向草とした松」の意に解して居る。

この說が私には最も落着く樣に思へる。それ故一首の意は「有間皇子は白浪の寄する濱松の枝を引き結んで手向草とした、その松は今もここに見えて居るが、（有間皇子の時から）幾代の年を經たことであらうか」といふ意味になるであらうか。この說は手向草を卽ち松そのものと見てをり、「白浪の濱松が枝」といふのは、有間皇子の「磐代の濱松が枝」とも相似てをり、「松が枝を引き結び眞幸くあらば亦かへり見む」といふところには、守部の謂ふが如く、神に祈る心持も汲まれるのだから、その松が枝を手向草と看ることも寧ろ素直な看方であらう。當時の人には恐らくは有間皇子の松を指して居ることは註釋を要しなかつたのであらう。ただ守部がこの手向草とした松が「結ばれながら、幾世までにか年の經行くならむ、今に解けざるは魂ののこりたるにこそ」といふやうに歌の後半を解して居るあたりは、解釋としては如何かと

思はれて、私には從へない。

○

鳥翔なす在り通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ　（卷二、一四五）

五味保義

山上憶良追和一首と題されたもので、長忌寸意吉麿の結松を見て哀咽せる歌二首に次いで掲げられてゐる。これが年表に擧げられた如く大寶元年の歌とすれば、憶良と明記された最初の作品である訣であるが、これはこの歌の次に、人麿歌集所出の一首「後見むと君が結べる磐代の小松が末を又見けむかも」（一四六）が大寶元年と明記してあるのによつて、これも又その年と推定した、その事が既になほ疑ひ得るのであり、又落合氏の說く如く、この年九月の紀伊行幸に從ひ得たかどうかが疑はしいとすれば、この一首は人麿歌集の歌よりも後れるかも知れない。

此歌は前揭の三四の歌と比較するに、どこか憶良らしい調子があり、又意吉麿の歌（一四三・一四四）に比較すれば更にそれが明かになるやうに思ふ。即ち「在り通ひつつ見らめども」とか「人こそ知らね松は知るらむ」とかいふ所が一種新しい表現の仕方で、意吉麿の「人はかへりて又見けむかも」、或は「心もとけず古へ思ほゆ」といふ風な單純な風格とは異つた態度が窺はれる。しかし、現在からみて、それが非常に清新な感じがするかといふと、反對に外廓的な作品といふことを思はせる、むしろ弱い歌だといふ氣がする。しかしながら、拵へ上げた形式一點張りの歌とまでは言へないのであり、どことなく氣持の上で、

讀者をその作者の在る所の感慨及びその感慨を生む雰圍氣に誘ふやうな一面はあると思ふ。それだから、有間皇子の二首（一四一・一四二）に心牽かれて「あるがままによみ給へれば今唱ふるすら思ひ測られてあはれなり」といひ、意吉麿の哀咽せる歌を讀んでは「更に哀しさを添へたり」と言つた眞淵は、この歌に至つて、「また哀しさ加はりぬ、いにしへ人の歌はかくこそあれ、後の人おもへ」と激賞してをるのである。讀者をさういふ心持に誘ふ所もやはりあるので、私どものやうに一首を獨立させて見ずに、史實と關聯させて味ふ人には相當に面白くおもはれるのかと思ふ。一體挽歌の性質は多かれ少かれさうした所があると思ふ。序に言へば、前の三四の歌が憶良の作であるか否かは疑はしいこと前評の如くであるが、持統四年には憶良は既に三十歳に達してゐたやうであり、その作品が存在しても別に不思議ではない。しかし、旅人も又當時二十五、六歳で一首の歌も遺してゐないのであるから、さういふ例からも憶良の作歌の始つたのは、持統四年は勿論のこと大寶元年あたりの歌も疑はしく、いよいよ確實なのは次の慶雲年中だといふことになつて、吾々が集中に於て憶良の作品として接し得る確實なるものは、彼が四十歳以後のものだといふことになるのである。

○　佐藤佐太郎

題詞にある如く意吉麿の歌に追和したものであるが、特に「磐代の崖の松が枝結びけむ人はかへりて亦見けむかも」（一四三）を念中に有つた歌であらう。そこで「人はかへりて亦見けむかも」に對し「鳥翔なす在り通ひつつ見らめども」と一轉した憶良の感傷が表白せられたのであるが、この句はさういふ經緯の

如何にかかはらず、讀者に何か悲哀感を傳ふる哀韻のある表現である。矢張り憶良にはさういふ多恨な感じ易い素質があつて、例へば「貧窮問答歌」「令反惑情歌」などにしても、これが一要素として考量に入り得るのではないかと思ふ。五味氏が前言に「外廓的な作品」又「弱い歌」と評されたが、私はさういふ感じも拒否し得ない。「人こそ知らね松は知るらむ」などは特にさうであつて、聲調に波動がなく佶屈である。さうして「青旗の木旗の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも」（一四八）などを想起すれば如何にもこの感が深い。

○　柴生田稔

私もこの歌になると成程憶良らしいといふ氣がする。聲調のぎごちないところも、概念的なところも、それでゐて大柄なところもみなさうである。倭太后の御歌が「目には見れども直に逢はぬかも」といふ表現どほりの眞實の體驗であるのに對し、これは「見らめども」といひ「人こそ知らね」といふやうに、觀念的な想像に過ぎぬ。只さういふ觀念を平氣で露出さして感情的に詠ひ上げることの出來る點が一つの特色で、いはゆる理智的な作風とはそこが違ふ。これはやはり作者の素質であらうか。ただ後年の憶良の佳作には、觀念的は觀念的なりに、聲調のぎごちなさはぎごちなさのままに、全體として迫つて來る人間的な力がある。この歌にはさういふ特徴はまだ認められないやうである。

いざ子どもはやく日本（やまと）へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ　（卷一、六三）

○　大村呉樓

憶良は在唐二年の後、慶雲元年七月に歸朝してゐる。右の歌はその間の作だが、當時すでに四十五歲、人生の盛時に値ひ、新知識でありながらなほ微官で、作歌方面においても右の歌が年次明かな最初のものとなつてゐる。由來憶良には、さういふ境涯が然らしめたものか、生活苦、社會苦といつた種類の歌が多く、集中特異な存在をなしてゐるのだが、概括的にいふと、それが思想的、道學的、觀念的になり勝ちでどこか理窟ぽく、臭味があり、率直に力強く詠みすゑてゐながら讀者の感情を反撥せしむるものがある。右の一首は憶良の癖の少い佳作に屬するが、「いざ子ども」と強く出て「はやく日本へ」と大きく締め、「大伴の御津」と續くあたり甚だ快調、緊密で堂々たる發想といへる。しかし憶良本鄕作歌としては何か表面的な科白を聞く空虛感を伴ひはしまいか。「濱松待ち戀ひぬらむ」の響き返す力に乏しいためもあるが、要するに臂を張り肩を怒らした態度が素直に受け入れ難いのである。これはまた憶良の大伴の作についての評語ともなり得るのである。併し、同じ憶良の「人こそ知らね松は知るらむ」(一四五)の理窟ぽさに比べると右の如きも遙かに上乘な作といへるであらう。また後の類歌「ぬばたまの夜明しも船は榜ぎ行かな御津の濱松待ち戀ひぬらむ」(三七二一)に比較するとやはり憶良の力量がよく判り、さすがに貫祿あるを思はしめる。最後に黑人の作「いざ兒ども大和へ早く白菅の眞野の榛原(はりはら)手折りて行かむ」(二八〇)は憶良作以前であるだけに一應考慮に入れて品隲せねばなるまいと思ふ。

落合京太郎

○

憶良が唐より歸朝前の作と歸朝後の作との間に、どのやうな變化があるかといふ事も、實際の作品の上から識別出來るならば興味のある問題であるが、歸朝前の作品として明確に云へるものは、この一首より外にはないやうである。それ故右のやうな穿鑿も結局は成功しないのであらう。私が憶良の作品に就て興味を感じてゐる事は、出來上つた作品の成功不成功と云ふやうな點よりも、寧ろ憶良が從來の作者と行き方を異にして、所謂思想的抒情歌の方面に開拓者としての鋤を入れて、いろいろと試をしてゐると思はれる點にある。憶良の作品の聲調に就いてはいろいろ云はれるのであるが、憶良の稟性や學問等にも依らうが、その題材によつて聲調が規律されてゐる點も少くないと思ふ。私は憶良の作品に就て更に吟味して行つたならば、從來憶良に就て爲された批評には、更につけ加へられる何物かがあるやうな氣がする。此の歌は、題詞に在大唐時憶本郷歌とあるから、恐らくは唐を出發する直前頃の作であらう。

唐土に於ての任務を果して故郷へ歸る喜びの氣持が一首の中に躍動してゐる。二八〇の「いざ子ども大和へはやく白菅の眞野の榛原手折りて行かむ」に較べると、憶良の作の方が何か聲調に迫つたものがあるやうに感じられる。「大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ」と云つて、故郷の家人らの待ち佗びてゐる事を現はしてゐるあたりも、古代の人でなければ云へないやうな氣もする。八九四の長歌に「大伴の、御津の濱邊に、直泊（たゞはて）に、御船は泊てむ」云々とあり、又八九五にも「大伴の御津の松原かき掃きてわれ立ち待たむ」ともあるので「御津の濱」は舟航の果てる港であることが知られる。「ハヤクヤマトヘ」は、いろい

ろの訓があるやうであるが、この訓が私には一番いいやうに思はれる。

○　五味保義

この歌は大村氏の擧げた黑人の歌の一二句と卷十五の歌（三七二一）の下句とを合せれば一首が出來上るやうな形ではあるけれども、一首の聲調は、それを結び合せたのでは出て來ないものである事云ふまでもない。憶良の歌として割合に平坦であるから、この歌を味ふ事からいへば甚だ主觀的であるが、聲調といふ問題に多く目標を置かないと「表面的な科白を聞く空虛感」といふやうな批評が出て來るのではなかろうか。私は今少し高くこの一首の價値を見ようとしてゐる。從來御津の濱松は松ではなくて、松と云ひながら人間を暗示してゐる、即ち家鄕の人々であるといふ解釋が行はれて、その結果か否か濱松は遊女であるといふ奇說さへ近年出現してゐるのである。それはこの坦々たる聲調を誤解して、寧ろ自然な在外羇旅の心持を考へずに、何か特殊の事柄を想定しようとする註釋者批評家の惡癖であると思ふ。

○　柴生田稔

私はこの歌はやはり「憶良らは今はまからむ」（三三七）の歌と同樣な卽興的對人的なもので、それ以上の深みは求められぬやうに思ふ。故鄕に歸る喜びが躍動してゐるといへばその通りでもあらうが、それは結局外面的の域に止まつて、滲み出るやうな感懷といふものは感じ難い。憶良の癖のない佳作といふ評語もあつたが、この歌は憶良としては凡作に屬するのではあるまいか。憶良の長所はむしろその癖とともに

存してゐるので、癖のない歌、すなはち佳作といふ考へ方は危險であらう。「御津の濱松待ち戀ひぬらむ」は言葉の意味としては「濱松が待ち戀ふ」と解すべきであらうが、主としてマツ・マチの語呂合せの效果が働いてゐることは「吾妹子をはやみ濱風大和なる吾松椿吹かざるなゆめ」（七三）などの場合と同樣であらう。なほ落合氏も引いた「大伴の御津の松原」（八九五）といふ歌の示すやうに、當時實際に御津の濱に松原があり、さうして古事記の「一つ松我夫を一つ松人にありせば」や憶良自身の「松は知るらむ」（一四五）などの歌が當時容易に受容れられたことをあはせ考へると、鄕人の戀ひ待つ氣持を松に代表させた心理は割合自然に納得出來るやうである。高野辰之氏の濱松遊女說の如きは、結局後世の俗謠趣味的な思ひつきであらう。最近森山啓氏がこの高野氏の說を萬葉集の現實的な取扱ひ方の例として引いてゐるが（文藝五月號）、萬葉集の現實性とはさういふものではないと思ふ。この歌が憶良の年次明瞭な作品の最初であることは五味氏の言はれた通りであるが、實質的に見ると憶良はやはり神龜以後の作家と言つていいであらう。

家に行きて如何にか吾がせむ枕づく嬬屋不樂しく思ほゆべしも　（卷五、七九五）

〇　松井一郎

山上憶良の作歌は長短歌旋頭歌合計八十七首といふ相當大量的な數に上つてゐるが、之を質的に見る場合に一定基準に達する歌は案外少ないといふ感がある。その中にあつてこの一首の如きは聲調に相當熱度があり憶良の作品中矢張佳作として注意すべきものだと思ふ。然しながらすぐ前に、旅人の同じく妻の死

を詠める歌があつて、これと比較鑑賞する時吾々に興味深いものがある。卽ち旅人の歌の至純にして挾雜するものなきに比し、又腹の底からぢつと搾出した如き作に比べると、憶良の作は幾分常識的で表面に稍歎聲を上げすぎたといふ感がある。殊に三四句あたりは巧みに過ぎて一首を却つて觀念的ならしめたといふべきではあるまいか。これは勿論兩者の本質的相違に負ふものであり、他の多くの作品にも見る如く憶良として一流作家に伍し難き弱味を物語るものであらう。序にこの一連に代作云々の問題もあるが今は憶良自身がその妻の死を詠じたものとして暫く鑑賞しておきたく思ふ。

○

佐藤佐太郎

この歌は「日本挽歌」の反歌五首中の第一首で、「日本挽歌」とは、この一聯の前に悼亡の漢文序と漢詩とがあり、之に對して題したものであらう。此一聯の製作動機に就いて、代匠記に「山上憶良筑前守たりし時神龜五年に京より妻の慕ひ下りて程なく死去せられし時作らる」と云ひ、後人は多くこの說に從つてゐるやうであるが、又別說には憶良が旅人の妻の死を悼んだ代作であらうとも云つてゐる。私は先に旅人の「世の中は空しきものと知る時し」(七九三)の歌を評した時、この「日本挽歌」に言及して「半ば旅人自身の氣持になり、半ば自家の同情を旅人によせた歌と見て殆ど間違のない憶良の日本挽歌」と云ひ、旅人の妻を悼んだ歌として解釋したが、松井氏の前言もあつたから少しくその理由を言はうと思ふ。

憶良の妻が神龜五年に歿したといふ事は、此一聯を根據とする以外に資料がないのであるが、長歌を見れば、既に人の注意を引いた所ではあるが語句使用の有樣が、例へば「泣く子なす慕ひ來まして」とか「妹

の命の」とかいふやうに縦ひ死者の上を云ふとしても、自身の妻を歌つたものとしては腑に落ちない點があり、何か長上に對する語氣である。さうすればこの歌の作られた神龜五年に歿してゐる旅人の妻を悼んだものと推定するのが自然である。殊にこの一聯の前にある、旅人の「凶問に報ふる歌」の後記には、「神龜五年六月二十五日」とあり、つづいてこの憶良作の一聯があつて、その後記には、「神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上」とあるのを見ても、先づ旅人が「凶問に報ふる歌」を憶良に示し、憶良は二十數日後、之に報へて此一聯を旅人に上つたものであらうと思はれる。旅人作は漢文序と短歌一首であり、憶良作は漢文序と漢詩、それに長歌と短歌五首であつて、かういふ形體的近似を合せ考へても私は前言の如く斷じて殆ど疑ふべき所がないと思ふ。「代作」といふのも變な言葉であるが、前言の如く「半ば旅人自身の氣持になり半ば自家の同情を旅人に寄せた歌」と解釋するのが自然であらう。旅人作と推定して、私かに若干の根據を示し得るやうに私の考へてゐる松浦河の聯作とか松浦佐用姫の歌の如きを合せ考へても、かういふ作歌態度といふものは、漢文學に自在に文學的感興を遊ばしめえた旅人・憶良等にとつては又怪しむべき事ではない。

〇　　　　五　味　保　義

以下五首が憶良自身の妻を悲しんだ歌か、旅人の妻を旅人の心となつて悲しんだ歌かについてはすでに度々問題になつてゐるので、（特にアララギに於ては大澤寺安居會席上に於て詳論があつた）殊更にあげなくもいいと思ふが、前二評者も言及されるところがあつたから、その說の經路を整理して參考としたい。

（一）憶良の代作説はすでに古く契沖あたりから唱へられてゐるので、その理由は長歌（七九四）の「慕ひ來まして」「妹の命」「家離り坐す」が敬語であるからといふ事が一つ、左註に山上憶良上とある事が一つである。（二）憶良自身の悲傷亡妻歌とする説は、理由として、(1)自身の妻を悼む場合にも敬語をその妻に對して用ゐる例が人麿の歌（二一〇）にある。(2)旅人の妻の死は春夏の間と思はれるのに、憶良は七月二十一日に始めてその挽歌を作るといふのは遅すぎる。(3)七九五の歌の「家に行きて」云々、七九八の「妹が見し」云々は代作の調ではない。(4)旅人の妻は旅人と共に筑紫に下つたのに、憶良の長歌には「泣く子なす慕ひ來まして」とあつて後から妻だけが來たやうに詠んである等をあげて第一説に反對してゐる。井上博士等が主として從ふ所の説である。（三）再轉して憶良代作説になるが、之は敬語云々は第二説にいふ如く代作説の根據にはならぬが、「慕ひ來まして」は旅人と共に下つたその妻の樣子を言つたととつて差支なく、それがかへつて他人の妻の狀態を情深く言ひ現はしたものと考へられるとし、長歌も反歌五首も或興に乘じた作調があり、憶良が旅人の妻の死といふ特殊題材にあつて、自らの作歌の興に乘じて一氣に之をなした作であらうとするのである。從つて全體にどこか餘所餘所しい趣があると考へるのである。この説は土屋氏も早く述べて居られるので、佐藤氏の批評も之と同一觀點にある樣に思ふが、語法用例以外に聲調の問題をここに持ち來せば、やはり第三説が私としては一番引かれる所がある。聲調といふことは主觀的な問題であるから、第二説の批評者が之に從ひ得なくてもそれは致方がない。第三説に依らうとする私は從つて第二説にある聲調論、即ち「家に行きて」「妹が見し楝の花は」等の調を「貴人の妻の死を悼める調ならむや」（新考）といふのに從ふ事が出來ない。今新考を讀んで氣附いたのであるが、この貴云々の

斷定の基礎として擧げられてゐる憶良の句の「アレヲバモイカニセヨトカ」「家ニユキテイカニカアガセム」「ワガナク涙イマダヒナクニ」には何れも「アレ」「アガ」「ワガ」とあるのを見ると、博士はそれによつて憶良自身の挽歌とすべき聲調を感ぜられたらしい。之はどうも形式的な聲調論だと私は思ふ。

島木先生の「鑑賞及び其批評」には「愛妻の九州にて死せる時の歌の如きは、慟哭の姿眼前に髣髴する。憶良は斯ういふ方面に深入りして居ればよかつたのである」とあるのであつて先生は契沖の說は勿論、土屋氏井上博士等の諸說を知つて居られた筈であるが、この口調では先生の主觀には憶良觀がはつきり決つてゐて、それ等諸說によつて些かも動ぜられない自信が存したらしい。聲調によつて短歌を批評することは斯くの如く難かしいのであるが、先生に憶良家持に對して今少しの同情が生じて來た場合、この歌の批評も幾何かの變化があつたらうといふ氣がする。

○　　　　柴生田稔

大澤寺安居會で土屋文明氏が說かれたことを記憶するが、この歌などは憶良に人麿の影響が認められる一例である。「枕づく妻屋の內に」(二一〇)「若草のその夫(つま)の子はさぶしみか念ひて寢らむ」(二一七)「家に來て吾屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕」(二一六)かういふ用例が既に人麿に發見される。一首全體としてもどこか人麿乃至前代の格調を踏襲した跡が見えるやうである。かういふ歌の、憶良の作品中に於ける地位についてはかなり評價の相違があるやうだが、これは結局憶良に於ける前代踏襲的な方面と自己開拓の方面との、そのいづれに意義を認めるかといふ點、更に言へば短歌の本質と憶良の新風との關

係如何といふ點に於ける認識の相違に歸着するのではあるまいか。

はしきよし斯くのみからに慕ひ來し妹が心の術もすべなさ　（卷五、七九六）

○　扇畑忠雄

此歌を含む一連の作の鑑賞に際して、憶良の作歌機緣云々が先づ問題となるが、大體に「半ば旅人自身の氣持になり、半ば自家の同情を旅人に寄せた」（佐藤佐太郎氏言）と見て差支へがない。旅人が自らの妻の死を悼む樣にして俛伏哀慕の迫力に缺けてをり、いささか形式的に處理した傾がうかがはれるのは止むを得ない。右の顧慮に拘らず、この一首になほ順直な歎聲を聞き得るのは、彼の抒情的本性がおのづからに顯現したものと言へよう。初句の「はしきよし」は四句の「妹」にかかると一般に解かれてゐるが、一首全體にひびく歎聲とみてよいのではないか。七九七の初句「悔しかも」の詠歎の仕方と共通を感ずる。「斯くのみからに」「術もすべなさ」の如き特異なそして概念的な措辭もよく緊縮されてをり、細部に行きわたつた手堅い手法を示してゐる。この點、巧妙を感ずると共に一面の不滿を持つのであるが、又純直な作歌の心構へによつて此等の作を產んだことに彼の力量の歸著をみたいのである。

○　五味保義

扇畑氏も云ふ如く第一句の「はしきよし」の用例は集中特例と云つてよい。これは次の歌の第一句「悔

しかも」及び第三句「青丹よし」などが矢張り普通の用例に異つてゐるのと等しく、憶良が作歌衝動に乘つて爲した結果であらうと思ふ。憶良自らも、亦之を示された旅人も、かう云ふ句法には新しみを感じてゐた事であらう。さうした意味の新しさは憶良の歌に屢々見られる所で、これは必ずしもその內容がかくの如き句法を規定したものとばかりは思はれない。この點落合氏とやや考を異にする。それはさておきこの句法の成功不成功を云へば、よく据わつてゐて動かない程度のものとは思はれない。これは結句の「術もすべなさ」もさうであるがやや煩しい感じが伴ふ。然し憶良の歌にはどこか當りが柔かく間伸びがしてゐるやうでありながら、その故に親しみの感情が包藏されてゐて愛好すべき風格があると思ふ。

「かくのみからに慕ひ來し妹が心」などは如何にも垢ぬけのした言ひ方だと私は思ふ。高市皇子尊の挽歌「神山の山邊眞蘇木綿短木綿かくのみ故(から)に長くと思ひき」（一五七）の第四句は、憶良のこの歌の第二句と同じで集中唯二例である。憶良が高市皇子の御歌から暗示されたとは斷言するのではないが、古歌を消化しようとして努力した迹の見える憶良であるから、注意しておいてもよいかと思ふ。但し一五七の本文は「かくのみゆゑに」ともよめる。

悔(くや)しかも斯く知らませばあをによし國內(くぬち)ことごと見せましものを　（卷五、七九七）

○　　　　山　口　茂　吉

山上憶良が大伴旅人の妻の死を悼んで代つて詠んだ歌であるといふ說のあることは、既に述べられてゐ

るとほりである。そのためでもあるまいが、この一首に就いて云へば、幾らかよそよそしいところが感じられるやうに思ふ。第一、初句の「悔しかも」といふ句が強すぎて落着きを得てゐないところなども餘所餘所しさを感ぜしめる因であらうし、第二句以下の「……ませば……ましものを」といふ行き方が常套的に感ぜられ、切實さが稀薄になつて來るやうに思ふし、「國内ことごと」の「ことごと」といふやうな稍概念的な句のあることも一つの原因であると思ふ。しかし、どこか率直な心持がこの歌の底に流れてゐるので、よく讀み味ふと、以上のやうな難點をも大いに救つて居る點があり、相當の歌であると思ふ。

「あをによし」は、「奈良」の枕詞であるのを、「國内」などと「奈良」以外の句に用ゐてゐるのは、集中この一例のみであるが、この「國内」は奈良のことにして云つてゐるのであらう。その用法の正否は兎に角として、「青丹よし國内」といふのは一種新味ある快い調べを成して居り、飛躍的な巧みな用法であつて、流石に專門家的技倆といつてもいいと思ふ。

それからこの歌は、現代から見ると一見形式的常套的に感じるのであるが、この歌の作られた頃は手法に一種の新しさがあつたものではあるまいか。そのために多くの人が模倣するやうになり、集中にこの歌のやうな行き方のものが多いのを見て、現代の吾々は前後の區別なく一樣に萬葉集の歌として、模倣歌もその本歌をも讀み過すために、かういふ歌を引くるめて形式的に感ずるやうになつたものではないかと思ふ。例へば次に擧げる歌などは皆恐らくこの憶良の歌の影響あるものと見てもいいと思ふ。

愛しきやし妹が在りせばみ鴨なす二人雙び居手折りても見せましものを（四六六、天平十一年、家持）

吾が屋前に咲ける秋萩常ならば我が待つ人に見せましものを（二二一二、年代及作者未詳）

妹が家道近くありせば見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましものを（六三五、天平八年、作者未詳）

かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを（九五九、天平十八年、家持）

右は、「見せましものを」の入つた歌を例示したのであるが、右の内、二一一二の歌は年代未詳であるが恐らくこの歌よりも後の作であらうと考へられる。なほ、この憶良の歌より前に、かういふ種類の歌がないわけではなく

　斯からむと豫ねて知りせば大御船泊てし泊に標結はましを（一五一、天智十年、額田王）

の如き歌があるけれども、右に擧げた大伴家持の歌などは憶良の歌の影響が直接であるやうに考へる。

なほ土屋氏は、「萬葉集名歌評釋」の、七九八の歌の評釋のところで、「旅人が太宰帥であるに對して、憶良は筑前守として其の下に附いて居たのであり、太宰府に於ける旅人の數年中憶良は常に其の風雅の友であり、旅人に多くの作歌のあるのは憶良の刺戟によるのではないかとさへ思はれる關係にあるのである」云々と書いて居られるが、旅人の子である家持も亦、憶良の歌の刺戟乃至影響をうけた形跡のあること前例の如くであり、右の他にも、例へば、天平十九年四月作の家持の歌（巻十七、四〇〇〇）に、「越の中國內ことごと」と早速「國內ことごと」を用ゐてゐる如きである。また、天平十一年の亡妾を悲傷して作つた一聯の歌の中の

　出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ關も置かましを（巻三、四六八）

　妹が見し屋前に花咲き時は經ぬ吾が泣く涙いまだ干なくに（巻三、四六九）

の如きも、この歌（七九七）及びその次の

妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに（七九八）

の歌などを意識的に模倣してゐるとさへ思はせる位よく似てゐるのである。

つまり、この歌の一見形式的に感ぜしめ易いのも、かういふ風に模倣歌が多くその本末が分からぬまでになつて來たことが、原因であるといふことが出來ると思ふのである。

○　　五味保義

山口氏が引かれた額田王の歌は、憶良のこの歌の原歌ではあるまいか。さういふ先進の歌や、追隨者特に家持の如き後人があつた爲に、漠然と萬葉集に接する時は憶良が單なる形式歌人と思はれ易いといふ山口氏の言葉は、確かに當つてゐると思ふ。この一首は後に至つて、はなばなしく生長した短歌の一領域を持つてゐるといふのではない。併し特殊な句法がかなり淸新に生かされて居る歌である。又一首の氣韻といふのも未だ汚れのつかない感じを有つてゐる。ただ廣い意味の發展性を有するか否かは疑問であると思ふ。一讀快的た聲調があつて「國内ことごと見せましものを」などといふ着想も前の二首（七九五・七九六）の姿態に存する或垢拔けのしたものがここにも現はれてゐると思ふ。

○　　藤森朋夫

すでに前評者たちによつて詳しい批評がなされたあとであるが、一言つけ加へる。形態上初句切は特に目につき、この用例は集中にも珍らしい。普通ならば「悔しき」として「かも」に接續すべき所でもあら

うが、ここには終止形から續ける古形に從ひ、五音となしてゐる。作者の感動の强味を表現する爲にかうした句法を採用したものと思はれるが、その結果は既に言はれた通り、落著がなくよそよそしい感じを抱かしめられる。三句の「あをによし」の用法も特殊的であり、從つてその解釋にも諸說が行はれ、今俄にこれを定めるには至らない。しかしそれらの中にあつても、代匠記に見える、「あをによし」は「奈良」の枕詞であることから、奈良をあらはすのに用ゐたのであらうとする說が、比較的穩當ではなからうか。たとへば、「たらちね」を母の意に、「草枕」を旅の意に使用することもあるから、此の場合にあつても、特に「あをによし」は「奈良」と密關した枕詞であることから、かかる意に代用せしめたものと想像される。一首には何か形にとらはれて、感情がこれに順直に乘るといふ風でなく、哀感を訴へてゐながらも、直接に響くといふ所が少いやうに感ぜられる。

妹が見し棟（あふち）の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干（ひ）なくに　（卷五、七九八）

○　　　　　　　　　　　　藤　森　朋　夫

五首の反歌の中では一番目立つ作品のやうである。先づ句法上から見れば、三句切でしかも倒置法によつてゐるのが注意される。初句「妹が見し」は、妹が何處で見たのであるか。これについては略解に、奈良の家に於て見た棟ととつてゐるが、それは當らないであらう。卽ち太宰府にあつて旅舍の花を眺めたものと見るべきであらう。しかもそれは病床にあつて、しみじみと見入つた花であらうことが想像せられる。

三句「散りぬべし」の「べし」は、勿論推量として据ゑてゐるのであるが、語からうける感じ、又響には、この場合最適のものとして用ゐられてはゐないやうである。言ひ方が適當でないが、何かよそよそしいとでもいつたやうなものが含まれてをり、幾分理張つた、形に墮した傾が感ぜられないでもない。楝は、五月頃淡い紫色のささやかな花をつけ、棄てがたい味をもつてゐる。旅先の庭にこの花の姿を見た妻に對して、その死を悼む歌として、この自然物を素材として生かしてゐるのである。清新な氣象と哀愁の情感とが融合され、生動してゐるのを思ふ。この一首を誦しつつ自然に想起されるのは、大伴家持の歌「妹が見し屋前に花咲き時は經ぬ吾が泣く涙いまだ干なくに」（卷三、四六九）である。おそらくこれは憶良の作品の影響をうけての上になつたものと思はれるが、二首を對照してみると、憶良の方が、遙かにすぐれてゐることは認められよう。此の一聯の作歌動機に就いては既に佐藤氏の言葉もあつて、さうした折衷說にも心惹かれる所があるが、今はやはり代作說に足場を置いてみた。三句の結び、下句など比較的形式的に感ぜられるのは、結局さうしたところから生れる感情の稀薄ではあるまいか。

○　落合京太郎

「楝の花は散りぬべし」といふところは前評者の言ふが如く固い感じがする。それは語感にも依らうが、むしろ三句で切り、そこまでが四五句と意味の上で一種の對立を示して居るあたりに胚胎して居る樣にも思はれる。しかし句法の點から言へば、在來のものと異り何か眼あたらしい所がある。けれどもその新しさに就ても、一四五の批評の際五味氏の言はれたことが直ちにあてはまる樣である。憶良のかういふ作品

は漢詩文あたりの表現や聲調から影響を受けて居る所が少くないのではあるまいか。

○　　　　五味保義

棟の花を妹が見たのは大和の國に於てであらうといふのは、藤森氏の言はれる如く從はれまい。ついでにいへば七九五の「家に行きて」の「家」は大和の家であり、七九七の「青丹よし國内」も「青丹よし」といふ枕詞があるにも拘らず、種々の理由をつけて筑紫のことであるとしたりする說がある。之はやはり作歌動機をあまり合理的に考へ過ぎる證據であり、又他の作家との比較によつて直ちに知られる憶良の新手法といふのに氣づかないからであると思ふ。製作の實際に少しく心を致し得れば「家に行きて」はその樣に煩瑣に考へなくても、直ちに筑紫の家として理解出來るし、「青丹よし國内」もそのまま理解されるし、「妹が見し棟」に至つては、大和か筑紫かをいふ餘地は些もないのであつて、作歌者からすればかやうな問題はあげて言ふ必要もないほどであらう。

大野(おほぬ)山(やま)霧立ちわたる我が嘆く息嘯(おきそ)の風に霧立ちわたる　（卷五、七九九）

○　　　　落合京太郎

息嘯(おきそ)は息嘯(オキウソ)の約だと註して居る。息(イキ)といふのに同じである。調子が張つて居て丈夫振と言つてもよい歌であるが、調子に倚り過ぎた嫌があり、吹棄氣吹之狹霧(フキウツルイブキノサギリ)（古事記）や呼吸氣息(イブクイキ)似ニ朝霧ー（雄略紀）等を引合に

出すまでもなく、三句以下の表現には、何かその態度に現實を離れた古代人のやうな所が感ぜられ、作者の嘆息に共感を催さしめる力を弱くして居る。作品を價値づけるものは、個性的でありながら一般に妥當するところにある。憶良のこの歌なども、問はれるならば、面白いと答へ得る樣に思ふが、それは作品そのものの價値を肯定するといふ意味ではなくして、寧ろ作品を通して、何かもやもやとした作者の個性に興味を感ずるといふやうな結果になりさうである。憶良が粗大であるかの如く言はれるのも、謂つて見れば個性の特異さが現はれ過ぎて居るのに因るのかも知れない。旅人も情懷を寫すといふ點では憶良と共通であり、又その詠風の粗大なのを謂はれる樣であるが、同じ粗大といつても旅人は憶良よりもまだ手際が細かい。そのあたりの比較も私には興味がある。

三六一六の「吾妹子が嘆きの霧に飽かましものを」三五八〇の「海邊の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ」三五八一の「何しかも霧に立つべく嘆しまさむ」等の類句があるが、これ等は憶良の作の影響の下にあるのかも知れない。又天平七年作の大伴坂上郎女の長歌（四六〇）に「吾が泣く涙有間山雲居棚引き雨に零りきや」とあるのなどを見ると、當時の人は「我が嘆く息嘯の風に霧立ちわたる」なども案外素直に享け入れたのかとも思へる。

○　　　　　　　　　　　　佐藤佐太郎

落合氏が引かれた古事記の例などは、是は作者の個性といふやうなものを絶した原始人の偉力とでもいふべき感じであるが、この憶良の歌になると、それが餘程形式的になつて來て借物の感じが強く、かうい

ふ强い誇張をして居りながら、何處か餘裕を感ぜしめる。「我が嘆く息嘯の風に霧立ちわたる」といふ誇張は云はば常識的であつて、之を文化人憶良が一首の中に生かす爲には强烈な主觀の燃燒がなければならぬ。この歌はその點に於て未だ作者の姿態が表面的であり、何處か機智と形式で一首を構成してゐる所が見える。それから第一句で小休止があり、第二句で切れてゐるあたりの聲調も、柔弱ではないけれども、脆い氣息の短い所があつて、亦作者の氣魄が必ずしも熾烈でない事を思はしめる。同じやうな結句の例でも「あしびきの山川の瀨のなるなべに弓月が嶽に雲立ちわたる」（一〇八八）などに比すれば、矢張り前言の如く表面的で且つ形式的であるといふ感を免れない。

○　　　　　　　　柴生田　稔

憶良が記紀歌謠にかなり興味を持つたらしい形跡は色々見出されるのであるが、この歌などもその一例であらう。「息嘯の霧」については落合氏の言ふごとくであるが、「霧立ちわたる」を二句四句で繰返した處なども前代歌謠趣味と言つていいと思ふ。さういふ點に私も佐藤氏と同樣の不滿を感ずるのである。

（昭和十二年六月）

三十六　山上憶良の歌八首

藤森朋夫

○

久方の天道（あまぢ）は遠しなほなほに家に歸りて業（なり）をしまさに（卷五、八〇一）

この歌は「惑情を反さしむる歌一首並に序」の次に置かれ反歌と書かれてあるが、題詞や目錄によると「歌一首並に序」とのみあつて反歌を數へてゐないのが注意される。目錄の方には更に冠らせるに「山上臣憶良」の五文字を以てし、此の作者が憶良であることは明瞭である。この短歌を見るのには前の長歌並に序をよく咀嚼することが要請される。即ちそれら一聯についていへば、素材的に特に異色を鄰してゐる。即ち思想文學としての內容を具備し、しかも時代的性格が作品に反映してゐることが看取される。所謂老莊思想のごとき外國思想に對して深き關心をもち、自らが踏まへてゐる儒教的地盤の上に立つて憶良は寧ろこれを批判し、慨嘆し、更に反駁さへなして、延いてはここに見るごとき教訓的作詠をなすに至つた。即ちここには儒教的思想を基調として說いてゐるのが窺はれるが、それは換言すればむしろ憶良自身の思

想的性格的なものをもつて表明してゐる如くであつて、そこにこの作品の特殊な位置づけがせられるやうに思ふ。

今此一首についていふ前に、その一二句について記して置く。「久方の天道は遠し」は、長歌の中に「天へ行かば汝がまにまに」とあるのを受けてゐるのはいふまでもない事であり、天は自由であるが、それに到る道は遙かに遠いといつて、暗に彷徨せるものに禁止的な訴をなしてゐる。三句「なほなほに」は、巻十四に「蔓ふ葛の引かば依り來ね下なほなほに」(三三六四、一云)とある如く、素直に、逆らはずにの意であり、結句「業をしまさに」の「業(なり)」は「生(な)る」の連用形から名詞となつた形で、生産の意であらうが、ここには更に轉意して生業、主として農業を指すといふ說に從ふべきであらう。「しまさに」の「に」は、古葉略類聚抄には「爾」とあつて、これによる時には「ね」と訓めるが、舊本には「爾」一字であるから、やはり「に」と訓んでその上に解釋すべきである。この「に」は「ね」と同じやうに動詞の未然形について願望を表はす助詞と見られよう。

さて一首全體を見るに、二句までに自由に行動の出來る所、即ち天を憧憬するものに對し、これを善導するかの如く、道は遠いのであるから云々と迷へるものに呼びかける聲がきかれる。三句以下に於いては正順に自らの家業につくことを、溫情をもつて希求してゐる氣持が表明されてゐる。教訓的にうたはれてゐる作としては憶良の作の中にあつても特に目立つものであらう。兎角理張つて出る所を、これには一脈の曖昧ある心情によつて、むしろ柔かに訴へてゐるかの如き點に、作者の氣息も窺へるやうである。しかしかかる作品は素材が素材だけに、そこに表現されるものには藝術的價値といふ點になると、餘り高くは

かひ得ないであらう。此の作は特殊的な地盤にあつて、見るべきところのあるものといふべく、一首の聲調などにも比較的素直な點も感ぜられ、又兎角此の種の作品に隨伴しやすい嫌味といふやうな分子も感ぜられない。尙家持も憶良のかかる作品に示唆影響されるところあつたと見られる。卷十八の尾張少咋を敎へ喩す歌（四一〇六）には、歌句として類似する部分が見られるのによつても證し得られようか。

○　落合京太郎

この歌は八〇四及び八〇五の左註に「神龜五年七月二十一日嘉摩の郡にて撰定す」とあるところより考へて、年表の言ふが如く恐らくはその頃の作と考へてよいのであらう。續日本紀には異端を學習し幻術を蓄積する者、邪說を爲す者、山澤に亡命する者等を處罰禁斷する旨の記事等があり、（例へば天平元年夏四月癸亥、同二年九月庚申、養老六年七月己卯、天武三年五月丁丑等の記事に之を見ることが出來る）當時の謂はば公認保護されてゐた儒佛の敎へを外にして、神仙老莊等の敎乃至は妖邪の說にはしつて居た者が相當にあつたことが窺へる。しかも佛敎を奉ずる者の間にすら既に異端者が少からずあつたらしい。憶良は養老五年正月に東宮に侍せしめられた閲歴をも持つて居り、謂はば儒學に就ては正統派を代表する地位にあつたもので、しかも佛敎をも可なり究めて居たらしい。かやうな地位からして當時の異端視せられてゐた學徒又は之に追隨する者に對して八〇〇、八〇一の長歌及び短歌をものしたのであらう。

八〇〇及び八〇一の歌の內容は思想的に見ても深遠なものとは言へないし、常識的なものとしか思はれないのであるが、時代といふものも考へねばならず、且つ作者がかやうな思想そのものを直ちに採り上げ

て短歌の對象としてゐる點は、憶良にあつては偶然的なことでなく、既に一つの傾向となつて居るのであるから、實作者の立場から見れば、やはり好意をもつて迎へていいやうに思ふ。

つまり作者の製作意欲とそれが如何樣に作物の上に實現せられてゐるかといふ點が、私などには實作上の參考にもなり、興味があるやうに思へるのである。

現實を離れた空理の世界の把握すべからざることを「ひさかたの天道は遠し」と言つてゐるのは、平凡といへば平凡に相違なからうが、作者としてはやはり工夫をした點であると見てやるべきであり、「天道は遠し」あたりには漢詩文の聲調の影響が認められるのかも知れない。當時にあつては一種の新しい型の歌であつたと思はれる。

○　　　　柴生田　稔

前評者の言はれたやうにこの歌などはやはり儒教精神の影響を窺ふことの出來る例であらう。儒教と日本文化との關係は重要な問題であるが、すでに萬葉集あたりにこのやうな作品が見出されるのである。然し全體として見れば萬葉集では儒教の影響は極く微々たるものと考へられる。人麿の皇室に關する作品を以て御用歌人等と評する意見も出てゐるが、人麿の場合はもつと原始的な直接性を持つてゐるので、此の頃の國體明徵論者のやうな態度とは性質が違ふ。萬葉集の作品が大體に於てさういふ道德臭味から自由なのは、儒佛の影響を非難する復古學者の立場とは又別な意味で考へて見ていいであらう。一括して萬葉集に於ける外來思想の影響と言つても、佛教や老莊思想などの方が、短歌の本質とよりよく融合する所があ

りはすまいか。同じく憶良の思想的な作品でも、さういふ儒教以外の觀念に立脚したものの方が結局すぐれた效果をあげてゐると思ふ。これは然しこの歌を儒教道德概念だけのものと定めて了ふわけではない。そこにやはり憶良の生活感情が籠つてゐるのだが、「なほなほに家に歸りてなりをしまさに」といふやうな態度からは抒情詩としての發展性を見出せさうには思はれない。なほ神龜五年には憶良は六十九歲の筈である。この作品の道德愛好の態度は又この作者の年齡とも切り離すことの出來ぬものであらう。

○　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

落合君が製作意欲云々と云ふことを言はれて居るが、私は憶良のこの歌には長短歌兩方を通じて製作の意欲が極めて薄弱ではないかと思ふ。柴生田君が指摘されて居るやうに、儒教以外の思想を扱つた作品の方に寧ろすぐれたものがあると云ふことも同時に考へられるのであるが、これは儒教そのものの本質といふよりも、それを扱つて居る憶良が單なる御用學者であつて、必ずしも儒教の信奉者といふ程でなかつた爲ではあるまいか。憶良がかういふ問題を扱つたといふことは參考になるのであるか、その最も參考になるのは、憶良のやうに賴まれて作るといふのでは駄目だといふ點なのではあるまいか。私は憶良は詩人としても相當によい素質を持つて居るものであると思ふ作品をいくつか擧げることが出來ると思ふが、その最も慊らない點は製作意欲の薄弱な上になされた作が少くないといふ點にある。

銀(しろがね)も黃金(くがね)も玉も何せむにまされる寶子に如かめやも　（卷五、八〇三）

神田矩雄

○

古來人口に親炙した所謂有名歌であるが、この短歌並に長歌の序に記する所の佛典の思想的背景に據つて、序の意を布衍してゐるに過ぎず、一首概念的に流れて調が硬く素氣なくひびく。率直ではあるが厖大な憶良の性格の一面を露呈した歌であつて、平俗な人情的モチーフが一般の歡賞（外邊的な）に堪へて著名になつたのであらう。上句の發想は更に九〇四に殆ど同じ形で踏襲されてをり、そこでは序詞としてよく落着いてゐるが、既に憶良にとつて固着感を示すもののやうである。長歌（八〇二）の方は具象性があり、短いだけに渾然純化されて佳調を作してゐるのに、この反歌が單に理智、概念を出でないのは素材が先に立つた表現に終つたからである。序ながら旅人の讃酒歌（三四五・三四六）の如きは著想、技方ともにこの歌の影響が著しいものであらう。

五味保義

○

第三句の「なにせむに」は意味の上ではそこで切れると見るべきであらう。從つて「戀ひ死なむそれも同じぞなにせむに人目他言（ひとごと）こちたみわがせむ」（七四八）とか、「なにせむに命をもとなながく欲りせむ生けりともわが思ふ妹に安く逢はなくに」（二三五八）等、その他二三の「なにせむに」とは違つた用法であると思ふ。同じく憶良の長歌「七種の寶も我はなにせむに」云々の使ひ方と同じである。この歌は前評にも說かれてゐるやうに一般的な歡賞に迎へられる點も確かにある。しかし近來ではこの歌を概念的な表現に

止まつたといふ風に評價するのが一般的になつてゐるやうに私は思ふ。「銀も黄金も玉も」や「まされる寶子にしかめやも」といふ發想には、さうした評價を反撥し切れない弱味がある。併し赤彦先生の言はれる如くどこかに一貫した調子があることは確かで、かうした材料の取扱に於てこれだけの取柄を存したことは、憶良の手腕を單に龐大と言つてしまへない所である。先に言つた第三句の用法及び「まされる寶」と先づ言つて「子にしかめやも」と結んだあたりは漢文の感化があるに違ひないが、何處か表現の上に心を働かせた跡が見える。それがかへつて近來の率直な作風を良しとする評價から非難の的となる所であらうが、當時憶良の周圍の人々、特に旅人等がさういふ風格に新鮮味を感じたのではないかとも思ふ。併し旅人の讃酒歌とこれとの關係は直ちに言ひ得るか。成程「夜光る玉といふとも酒飮みて心をやるにあに如かめやも」(三四六)の如きは「玉」といひ「如かめやも」といひ、同じ詞句を用ゐてゐるのではあるが、一首としての味ひには大分相違があるやうに思ふ。又前評に求めて反對する樣であるが、長歌(八〇二)の方が具象性があつて反歌の方が理智的概念的であるといふのはどうであらうか。長歌が渾然純化されて佳調をなしてゐるといふのも一面の見方ではあらうけれど、私は長歌は素材があらはになつて居過ぎる樣に思ふし、全體にわたる形式的な調子が氣になつてあまり高く評價出來ない。

○　　　　　　　　　　　　　　　　吉田正俊

今旅人の「夜光る玉といふとも酒飮みて心をやるにあに如かめやも」を引合に出されたが、憶良と旅人の性情はかなりこの邊に差異を表はしてゐる。憶良はやや世情的でそこが物足りない原因となるのであら

う。長歌の「瓜はめば子供思ほゆ」の一句の様な工合に理窟を拔きにして一首を成すのが結局抒情詩としての根本であるやうに思ふのだが、それだけでは何處か自ら物足りなく感じて、いろんな理窟を附け加へねば氣が濟まなかつた憶良は、歌作者として相當なハンデイキヤツプを生來持つてゐたと言はねばならぬ。私はこのハンデイキヤツプにもかかはらず、猶數首を成した憶良の意力に敬意を表するので、さういふ意味合の興味をこの一首の中に感ずるのである。

○　五味保義

常磐(ときは)なす斯くしもがもと思へども世の事なれば留(とど)みかねつも　（卷五、八〇五）

哀世間難住歌といふ長歌の反歌である。「常磐なす」といふ初句は普通の用法ならばこの下に不變なる事柄或は事象の説明が加へられる筈であらう。例へば、「淡雪なす蹴(くゑ)はららかして」の如きであるのが當然であるのに、「斯くしもがも」と續けて居るのは例のごとき憶良流の用法である。之は長歌の中に人生の盛りが過ぎてゆく有様を述べてゐるのに賴つて、かういふ句法が出たものと私は思ふ。この事はこの一首全體を何處か獨自性の乏しいものとした。「世の事なれば留みかねつも」のあたりも反感を催さない程度の概念的表現で、特に取り立てて味ふに足る所が無いやうに思ふ。「留み」といふのは普通ならば「留め」と言ふべきであらうが、本文に「等登尾」とあるのによつて、憶良自身の作がこの形であつたことが信じられる。この前の「業をしまさに」の「に」も同樣に憶良の癖であらうが、共に一首の上に重大な結果を

齎しては居ない。しかしこの歌は前の「銀も黄金も」の歌などに比すると何處にか詠嘆があると思ふ。先に落合氏の言はれたやうに、この歌及び「思子等歌」「令反惑情歌」とを合せて七月二十一日の作と左註があり、更に先月批評に出た「日本挽歌」も同年七月二十一日山上憶良上とあるのを見れば、之等の歌を一括してその日に憶良が新作舊作共に推敲をしたといふ想像がされる。さうしてこれらの長歌には何れも古事記の歌謠を模したと思はれる詞句が多い。つまり憶良の作歌動機は後に幼子古日を悲しんだ時の樣な切迫した感情にあつたのとは違ふのではなからうか。

○　樋口賢治

「戀男子名古日歌」などと比較して作歌動機に間隔のあることは、今五味氏が言はれたが、一首の内容にも何か空白な感じのするところがある。長歌に賴り過ぎたところのあるのは此一首のみに限らず、憶良の作品に多く見られるが、聲調が餘程豐潤でない限り短歌として獨立して味ふ上に稀薄さを感ぜしめる。その點思想的發想の多い彼の作風の一つの弱點を示して居るものと言へよう。唯この歌は概念的な割合に嫌味に乏しいのは後に「沈痾自哀文」や「老身重病經年辛苦及思兒等歌」等を成して居る彼の素質に通ずるものであり、又當時かういふ行き方をして一應押切るだけの力量を所持した點は汲み取つてよいのかも知れぬ。第四句「世のことなれば」は、他に卷三「悲傷死妻高橋朝臣作歌一首並短歌」に「うつせみの世のことなれば」(四八二)があるが、四八一の長歌の措辭構成等から考へると、憶良のこの作あたりが直接影響してゐるのではあるまいか。然し「世のことなれば留みかねつも」の結句は氣魄弱く一首としても形

式的なところが目立つが、特に人麿歌集の「水泡のごとし世の人われは」（一二六九）などと比較して聲調餘韻の乏しさを感ずる。結局、伊藤左千夫の「反覆吟味すれば著想の最も自然にして情懷の極めて痛切なるを覺えずんばあらず」といふのは、彼に對して同情ある批評であるが、この一首を味ふ際には少しく割引して考ふべきではあるまいか。

○

憶良等は今は罷らむ子泣くらむ其の彼の母も吾を待つらむぞ　（卷三、三三七）

藤田清

第四句は古葉略類聚鈔に「其子母毛」とあるに從つて「其の子の母も」と訓みたい。これが一番自然なやうである。「その彼の母も」の訓は今日最も普通に行はれてゐるのであるが面白い訓である。其の他「そもその母」「それその母」等の訓には聲調の上から滯るものがあつて贊成出來ぬ。

此の歌は憶良の家庭的歌人たることを示すものとして有名である。初句からして既に自己の名を提示してゐる點、第四句の素樸なはにかみ若くは洒落などの著しい特色があり、酒宴の興酣なるとき、止めるのを、押して歸るといふのでもなく、輕く應酬してゐる樣が思はれる。そしてその老巧な歌ひぶりからして憶良が、可成り老人であつたに違ひないと考へさせられる。恐らく彼が太宰府にあつた當時の歌であつたことは、すぐ次に太宰帥大伴卿讃酒歌十三首が續いてゐる點からも察するに難くない。

然し鑑賞する上からは、酒席の歌であり、卽席の作であることがすぐ感じられるのであつて、つまり上

乘の作として、その藝術としての價値の上から直ちに彼の代表作と認めるわけにはゆかぬ。なほ第二句、第三句、第五句に於ける「らむ」の音の繰返しは、一首を單純な明るい氣持にさせる上に効果がある。

○　　　　　落合京太郎

この歌の製作時期は前評者の言はれた如く、この歌の前後にある滿誓及び旅人の作が何れも筑紫にあつた時の作と推定出來ることよりして、憶良の筑紫在任中の作と見做してよいのであらう。酒宴の席上での卽興の歌と解すべきで、歌の主限は「その彼の母も吾を待つらむぞ」といふ所にあり、つまり自分の妻が家で待つて居ようからもう歸ると、謂はば家妻を取り立てて言つてゐながら、我妹子とか妻とかいふ言葉を避けて一首を成してゐる所に作者の手前味噌があるのであらう。「子泣くらむ」といふ點にはあまり意味を持たすべきでなく、「子泣くらむ」は「その彼の母」を引き出す爲めに用ゐてゐるのである。それ故この歌を眞面目に解して妻子を思ふが如くにとる說には私は左袒しない。以上のやうな輕い意味の滑稽歌でありながら、何か固苦しく解釋されさうな表現を取つて居り、また左樣に解釋されさうな餘地のある所が憶良の憶良らしいところである。結局輕妙な作品などには成功し得ない素質を持つた作者だと言ひ得るのではないかと思ふ。

○　　　　　藤森朋夫

酒宴の席に於ける卽興歌として概念的であるといふ批評は當つてゐると思ふ。從來の批評が比較的同情

をもつてなされてゐるやうであるが、結局は作品としてはさう深さは求められない。所謂憶良癖ともいふべきものがこれにも感得される。聲調が押し流してゐて、「ら」「らむ」の音が適宜に布置され、それによつて響き出される韻律には一種の獨特性はもつてゐようが、畢竟するに內面的に情感の厚さを滲透せしめるには至つてゐない。只この外面的に輕快な調べで押してゐる點に、比較的一般者から好感をもたれ、又素材的に父性愛とか家庭愛といふものを想定し、それらのものから一種親しみを抱いて佳作と見る趣があるのではないか。結句「その彼の母も吾をまつらむぞ」も特色ある表現であるが、この歌句によつても批評の分岐は存するであらう。直接に妻といはず何か微笑ましいフモールのある氣氛を漂はして、廻り遠くのべてゐる點が面白いと同情的にみるもの、率直でなくむしろある氣取りともいふべきものが感ぜられるとみるもの等があらうが、詮ずるところ憶良としての癖のとれないものが潛んでゐて、かうした種類の歌をなす場合融合性に不足があつたのではなからうか。

○　　　　　　柴生田　稔

藤田氏は第四句は古葉略類聚鈔の「其子母毛（ソノコノハハモ）」を採りたいと言はれたが、私はやはり多くの本の「其彼（ソノカノ）母毛（ハハモ）」に從ふのが妥當だと思ふ。古葉略類聚鈔は類聚編纂の書で、萬葉集そのものとは言へないのであるから、資料とするにはその點を考慮せねばならぬ。他の諸本はすべて「彼（カノ）」とあるのに、只古葉略類聚鈔だけの「子（コノ）」を採らうと言ふには、よほどもつともな理由が必要である。藤田氏はその理由として「これが一番自然なやうである」と言はれるのであるが如何であらうか。この場合意味としては「其（そ）の母（はは）」だけ

で十分で「其」が卽ち「子」を示してゐるのである。これを「其の子の母」とすると、その表はす氣持はよほど間接的になり概念的になるのではなからうか。「其の彼の」といふ「彼の」はつまり「其の」を強めて調子をつけたのであつて、他に用例はなく一見奇異のやうでもあり技巧的とも見られるが、感情表出の心理としてはかへつて「其の子の」よりも直截であると思ふ。

○　落合京太郎

天飛ぶや鳥にもがもや京まで送り申して飛び歸るもの（卷五、八七六）

八七六乃至八七九の四首に就いて契沖が代匠記に於いて「四首はこの宴に預る人々のよめるか、然らば一々の作者知り難し、終りに憶良上とあるは七首に通じて云へるか、敢布私懷と云三首に限るべきか」と云つてゐる如く、此等の四首が憶良の作であるか否かは一應考へてみてよいと思ふが、歌調並に八八二の左註からして、矢張り八七六乃至八七九の四首も憶良の作とみて大體は誤りがないであらう。八七六以下の四首はこれに續く敢布私懷の三首に比すると、何か作者の感情が平俗で表面的形式的に流れて居り、潤ひの足りないことを感ぜしめる。聊か想像にわたるが、この書殿餞酒日倭歌四首は恐らくは太宰府の官人が旅人送別の宴を催した際に、公人として憶良が一同を代表して作つたものであらう。八八〇以下三首の題詞に「敢布私懷」とあるのに徵しても右の想像が許されさうである。そして此の三首の方は八七六以下の四首と異り、憶良が私人として旅人に對し自己の衷情を吐露したものであらう。

八七六以下の四首が形式的表面的にながれ感情が一般的で平俗であるのも、右に云つたやうに官人を代表しての「はなむけ」の作である點に因る所が多いのであらう。八七六の一首などもその意味は極めて明瞭であるが、作者の感情ににじみ出るものがない。さういふ點からして「粗大」といはれても止むを得ない作品であらう。代匠記には「翼々飛鳥。載飛載東。我友云徂。云戻二舊邦一。苟非二鴻鵰一。孰能飛飜。雖二則追慕一。予思罔レ宣。」の文選王粲贈二蔡子篤一詩を引いてゐるが、さう云はれれば確に漢詩の影響も云々せらるる作品である。なほ題詞に書殿とあるのは、色々説があるやうであるが、私は太宰府廳のなかにあつた建物と解してよいと思つて居る。

○　　　　柴生田　稔

私も以下四首はすべて憶良の作であると考へたい。その評價に就いても大體前評に贊成であり、また題詞の「書殿」を憶良の自宅とする説に對しても「新考」の異見をもつともと思ふものであるが、この四首を特に官人を代表した儀禮的なものとして、次の「敢布私懷歌三首」との間に著しい態度の相違を認めようとする點は、それほど明瞭には言ひきれないやうに思ふ。內容としてこの四首は旅人を送る歌であり次の三首は自己を歎ずる歌であることは、從來も注意された通りであるが、態度の上で公人の立場、私人の立場といふやうな根本的な差別は存在しないのではないだらうか。なほこの一首に就いて一二を言へば「送り申して」といふやうに「申す」といふ言葉を、「言ふ」「奏す」といふ意味を離れて形式的な敬語として使つた例は萬葉集にはあまり見當らない。やはり憶良が天平五年に遣唐大使に贈つた好去好來歌（八

九四）の中で「諸の大御神達船のへに導き申し」と用ゐてゐるのと、巻十六の長歌（三八七五）の「わが頸懸る珠の七條取り替へも申さむものを」と位なものであつて、憶良が特に意識してかういふ言ひ方を採入れたと見ることが出來れば面白いが、果して當時の人々はどういふ語感として受取つたであらうか。「飛びかへるもの」と念を入れたところなどは無邪氣と言へば言へるかも知れぬが、またどこか妙に役人的忠實を示す意識が含まれてゐるやうな氣もするのは、あまり穿ちすぎた考へ方であらうか。

人皆のうらぶれ居るに立田山御馬近づかば忘らしなむか　（巻五、八七七）

○　　　丸山東一

切々たる別離の至情、何れの歌にもよくうかがはれるのであるが、特にこの歌他の三首がやや一般的概念的の表現形態なるに比して、直接的具體的表現形態を有する點に於て、その感動の一層切實なるを思ふのである。親愛敬慕の人を遠く送りて、心中自から空虚にうれひうなだれて居る人々の姿が眼に見えるやうであるとともに、更に筑紫の任地より榮進して都に赴く大伴卿が、ふるさと近く立田山のあたりをよろこびに滿ち溢れて、駒を進むる光景を髣髴たらしめて居るのである。

「立田山」は突然のやうであつて、一首生動の中心をなし、中々利いた句の据わり方である。「忘らしなむか」は餘韻のこもつた表現で、汲めども盡きぬ眞情が底深く流動して居る。憶良は漢文學に精通し、外國思想の感化を受くること、萬葉歌人中の隨一であるといふ。このためか理を說くに急にして、情を述

ぶるに疎いといはれてゐるやうであるが、この歌は自から景と情と融合して、氣品のある歌柄であると思ふ。

○

柴生田　稔

「ひともねの」の「もね」は他に用例のない言葉で、多分「みな」の變形であらうと說かれてゐるが、確かではない。まだ疑問を殘して置くべきであらう。これは前にも「しまさに」といふやうな使ひ方があり、この次の歌にも「とのしくも」などといふ變つた言葉が用ゐられてあるので、既に云はれたやうに憶良の特徴の一と考へられる。憶良が古語の使用に特別の興味をもつてゐたらしい事は、種々の點から推察出來るので、この「もね」なども或は今傳はらない奈良朝以前の言葉であつたかも知れない。それにしてもかういふ變つた音の效果をどの程度に考へて憶良が使用し、旅人やその他の人々はそれをどう受取つたかといふ事は、もつと知りたい氣がする。立田山といふのは藤原宇合が西海道節度使に遣はされる時、高橋蟲麿が作つた長歌(九七一)にも「立田路の岡邊の路に云々」と歌はれ、西國から平城の都に歸つて行く時にそこを通過するのである。解釋は契沖などは旅人を待つ人々が憂を忘れるであらうかといふ工合に取つたが、これは童蒙抄以來の通說の通り、太宰府の官人達が寂しがつてゐるのに旅人の方ではもう忘れてしまふだらうと取るべきである。かういふ感じ方は一見非常に率直で無邪氣のやうであり、恐らく憶良もさういふ效果を意識してわざと思ひきつた事を言ひ、讀む人々もその點を面白がつたのではないかと思はれる。然しかういふ種類の率直性といふものは結局卑俗なものではあるまいか。何だかこの歌では率直を

以て旅人に甘えてゐるやうな、憶良の下役人根性が窺はれてその點が不滿である。かういふ傾向が憶良にはいくらか目につくので、つまりいい意味でも惡い意味でも憶良といふ人は貴族的ではなかつたといふ氣がするのである。

○

藤森朋夫

初句「人皆の」は特異の感を抱かせる言葉である。原文にも明らかに「母爾」とあるので、宣長のやうに「彌那」を下上に誤り又「那」を「母」に誤つたと一概にはきめられない。柴生田氏も注意されたやうにこの語は十分に闡明されてゐないが、從來の說の中では攷證に九州方言であらうとしたのが比較的穩當のやうに思はれる。次の歌八七八の「とのしくも」も攷證には方言としてゐるが、假にさうした解釋が許されるとするならば、憶良の方言攝取といふことにもなり、作者の或癖の表現とも見られようが、これも想像說で俄には言ひきれない。この一聯は宴席に侍つて作詠したもので、卽興的儀禮的境地は脫し難いが、四首の中にあつては、この一首比較的心情が表明されてゐるとは言ひ得るであらう。それにしても聲調には一種のぎごちなさが感得される。二三句の接續などには漢詩の風體から脫却しきれないものが存する。「立田山」といひ直ぐこれに「御馬近づかば」と續ける技法にはかなり無理があるのではなからうか。この場合の抒情を生かすのには、もつと流動性といふ問題を考へるべきであつたらう。それが、かかる唐突さを表示してゐるところをみると、やはり憶良癖ともいふべきものが如實にこの邊にも現はされてゐるのであらう。全體の心情に於ても、儀禮的におくつた歌ではあるが、何か自らの感情を持ち廻つて訴へると

いふ氣持、即ち柴生田氏の言はれた甘える氣持が感ぜられるやうである。

言ひつつも後こそ知らめとのしくも不樂(さぶ)しけめやも君坐(いま)さずして　（卷五、八七八）

○　山口茂吉

この歌の第三句「等乃斯久母(トノシクモ)」は難解な句であつて、諸注釋書の說も區々であり、煩を厭はず少しく抄すれば次の如くである。管見及び代匠記の第一說は、乃と毛と同韻にて通ずるから、トノシクモはトモシクモであると云つてゐる。略解は、「乏しくをとのしくといへる例なし。等乃(トノ)の乃(ノ)は母(モ)の誤ならんか」といふ誤字說であり、古義は、宣長の說を引用して「等乃は志萬の誤といへる、さもあるべし」と云つて居るから宣長及び古義は、等乃(トノ)シクモは志萬(シマ)シクモの誤りであらうといふ誤字說に落付くのである。また、代匠記の第二說として、「孝謙紀云、寶字三年六月庚戌、詔云、又此家自久母藤原乃卿等乎波掛畏聖天皇御世重氐於母自岐人乃門自波慈賜比上(アケ)賜來流家奈利　此詔の中に家しくもとある類にて帥殿にておはしますが殿しければ云々」と云つてゐる。攷證は右の代匠記、略解、宣長等の說に就いて、「これ等の說、當れりともおぼえず。されば考るに、等乃は殿にて、太宰帥の館をいひ、斯久(シク)は助辭にて、殿もといへるならん」と云つたが、その後、頭書に、「再考ふるに、これも法言にて、乏しくなるべし」と訂正して居るのである。少し調べたところだけで見ても、右の如くに區々に說が分かれてゐるのである。

私は今攷證の再考說に從ひ、「とのしくも」は「ともしくも」の方言であつて「乏しくも」の意と解する

のである。この前の歌八七七の初句「人もね」も同じく「人皆」の方言と考へる。そして、憶良は旅人卿を送別するに當り、二人共になじんだ土地の方言を一つ二つ歌に取り入れて一種の親しみを表示し、その親しみを汲み取つて貰ひたいと考へたものであらうと思ふ。

この一首は、一聯四首の中他の三首が甚だ明快輕妙であるに比して、調子も詰つてゐてなだらかに行つて居らず、且つ意味の通じ難い缺點がある。初句に「言ひつつも」などの句があつても、何を言ひつつなのかよくは分からない如くである。辛うじて推量するにしても、「言ひつつも後こそ知らめ」などいふ句は、思はせぶりな表し方であつて、眞心が籠つてゐない。「とのしくもさぶしけめやも」も同樣眞實味がなく、ただの言葉の遊びに過ぎないやうに思はれる。さういふ風に考へて來ると、結句八音の字餘りまでが、この場合は何かわざとらしく、意圖が目立つて厭味に感ぜられて困るのである。かう思ふのは私ばかりであらうか。この歌を解釋すれば、「寂しくはない（乏しくさぶし）と今は言つて居るが、別れた後にこそ段々思ひ知ることとでせう。あなたが在さずなつたことが甚だ寂しい（とのしくも寂しけめやも）といふことを」といふ位の意であらう。

かういふ分かりにくい、歌を作つて得意がつてゐた憶良は、所詮人麿などとは旣に大きな隔りがあつたと謂はねばならぬ。人麿と憶良は年代から云へばそれ程離れてはゐなかつたのである。憶良の歌の或るものには一種の素朴さが無い訣ではないが、人麿の歌に見られる如き原始的とも謂ふべきところが無いやうに思はれる。憶良は或は新時代の歌人を以て自ら任じ、新時代の歌を作るべく努力し心懸けてゐたかも知れぬが、現代から見ると、さういふ點がどうも表面的にしか見えないし、人麿の歌などに比べて味ふと、

単に力量の相違ばかりではないやうに考へられる。

○　五味保義

初句にいきなり「言ひつつも」と云つたのは作者がその時に興に乘じてゐたことが窺はれる。それで「言ひつつも」の解釋に就いてこの一首だけでは明確に根據が得られない。つまり連作の興味にかなり頼り過ぎて居ると思ふ。これは現在我々も知らず知らずに陷つてゐる事がかなり多いと思ふのであつて、現在の作家が殆んど連作の作歌態度に基づいて作歌する事を思ふと、憶良のこの歌の不成功といふ事は顧みられてよいと思ふ。卽ち憶良が餞(はなむけ)の宴に於いて、その席上の雰圍氣に乘じて作歌した事は、その場合こそ氣のきいた作品として迎へられたかも知れないが、今からみれば極めて意味不明な印象の茫漠たる作品となつてしまつた。一、二句の如きはその缺點の最も表れた表現で、從つて「今より思ひやりて後の事を云へども眞には別れて後こそよく知らめ」（代匠記）、「別れに臨んで別後のあらましを云へど別れて後こそよく知らめ」（略解）、「君坐ずしても殿の中さびしけむやは、倘人々多かればさびしき事もあらじと口には言ひつつ君ましまさずして實に寂しき事は、君がたたせ給ひて後にこそ思ひ知らめ」（攷證）、「戀しきなど云ひつつも目のあたりはさしもなきを後にこそ思ひ知るべきなれ」（古義）、「口に寂しと云ひつつも眞の寂しさは後にこそ思ひ知らめ」（新考）、「あなたがおいでなさらなくとも寂しい事がございますまい。かやうには云ふものの後こそ思ひ知るでございませう」（新解）、といふやうに混亂してゐる。右の中、新考のやうに解して、意味をそこで一旦切つて、三四句は「少くも寂しからうや、いたく寂しい」と解したい。（新考は、

三四句を「別れ奉りてしばしの程を君がいまさずして寂しからむや寂しからじ」と云つてゐるが贊成出來ない。）山口氏の口譯に就いて言へば「寂しくはないと今は言つてゐる」といふのは攷證に示唆されたので、一、二句と「とのしくもさぶしけめやも」とを結びつけたのはよくない。又「甚だ寂しいといふ事を思ひ知る」といふ風に第二句と三、四句を關係づけた事も工合が惡い。意味は二句と四句と夫々切つて解し、結句は全體のしめくくりになつてゐる。初句「言ひつつも」の內容は「淋しくなるだらうと言ひつつも」位で外の事柄を附加しないがよい。作者の態度に不徹底な所のあつた爲め右のやうな結果を齎したのであつて、矢張り作歌は印象明瞭が必要である。憶良ほどの手腕を有する作家に於いて猶必要である事は吾々として考へてよい。山口氏も人麿と比較して居るが人麿の所謂混沌はこの歌の「言ひつつも後こそ知らめ」の如きものとは違つてゐた。

萬代に坐（いま）し給ひて天の下まをし給はね朝廷（みかど）去らずて　（卷五、八七九）

○　伊達宗雄

作者に就いては、落合氏も云はれる如く契沖の疑義もあるが、終りに天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上と明記しある點を信じてよいであらうし、それよりこの露骨な主觀を臆面もなく云ふ安易さや、外廓的常識的な作風は何よりの證左であらう。この歌の解釋に就いては、諸家の說は大體一致してをり一讀明瞭である。尙、この歌のよりどころとして持統十年「高市皇子尊城上殯宮之時」人麿の「やすみしし

吾大王の天の下申し給へば萬代に」（一九九）あたりを擧ぐることも一應肯定し得るであらうし、和銅三年の七八、七九、八〇或は神龜五年の五四九、五五〇、五五一等が參考になつてをるかも知れぬ。然し結句の「朝廷去らずて」など如何にも煩瑣で蛇足の感がある。平凡の作であらう。尙、この倭歌四首と次の敢布私懷歌三首とは例へば八七六と八八〇、八七七、八七八と八八一、八七九、八八二の如く意味の上から前後相呼應すると見えるのであるが、作者がかかる意識を以て作歌したとするのは極言であらうか。

○

落合京太郎

前評者がこの歌を「外廓的常識的」といつたのには私も敢て反對しないのであるが、八七六以下の四首の中では、この最後の一首あたりは常識的ながら割合に作者の感情が表れてゐるのではあるまいか。前評者が「朝廷去らずて」を煩瑣で蛇足の感があると云つて居るがその點は如何であらうか。遠く太宰府にゐて、思ひを都に馳せてゐた作者憶良――旅人の推輓に思ひをかけてゐた憶良を思ふと、「朝廷去らずて」といふ所には矢張り作者の感慨がこもつてゐたとみるべきであらうか。さういふ點で次の敢布私懷三首にその感情の通ずるものがあり、僞らざる人間の感懷がやや表現せられてゐるやうにも思はれる。

○

土屋文明

この四首も前評者の言はれた如く製作の動機が動機であるから、さう出來のいい作とは言へないのであらう。柴生田君が下役根性と云はれたがさういふ所も見える。又憶良の歌には貴族的なところがないと言

はれたが、それも肯はれる。憶良はどこか現世的榮達の感などが强かつたらしく、死に近づいての「士やも空しかるべき」（九七八）などもさういふ點を考へると嫌に感ぜられるのである。然しやはり眞情を吐露した作には惻々の情の捨て難いもののあることも注意していいであらう。又憶良程度の作家を無視省略してしまふといふことになれば、あまり歌の世界が單調になつてしまふといふこともあらうと思ふ。下役が上官送別の式に詠んだ歌とすれば、その間に幾分の眞情を含んでゐることも諒としてよいと思ふ。柴生田君が古語を使つて居るのではないかと云はれたのは私も贊成である。憶良が古傳說や古語らしいものを用ゐてゐるのは外の場合にもあるし、この第一首の「天飛ぶや鳥にもがもや」なども「天飛ぶ鳥も使ぞ」などと關係してゐるのかも知れない。それ等も憶良の衒學の致す所とすれば又反感の種となるであらうが、緊張して鄭重にする爲に古い言葉を使つて格式を整へてゐるとすれば、その心根を汲んでやつてよいのではあるまいか。私は四首の中では八七八の「言ひつつも後こそ知らめ」が一番心を惹くやうである。「とのしくも」は假に「ともしくも」と解して味ふのである。

（昭和十二年七月）

吾大王の天の下申し給へば萬代に」(一九九)あたりを擧ぐることも一應肯定し得るであらうし、和銅三年の七八、七九、八〇或は神龜五年の五四九、五五〇、五五一等が參考になつてをるかも知れぬ。然し結句の「朝廷去らずて」など如何にも煩瑣で蛇足の感がある。平凡の作であらう。尙、この倭歌四首と次の敢布私懷歌三首とは例へば八七六と八八〇、八七七、八七八と八八一、八七九、八八二の如く意味の上から前後相呼應すると見えるのであるが、作者がかかる意識を以て作歌したとするのは極言であらうか。

○　　　　　　　　　　　　　　落合京太郎

前評者がこの歌を「外廓的常識的」といつたのには私も敢て反對しないのであるが、八七六以下の四首の中では、この最後の一首あたりは常識的ながら割合に作者の感情が表れてゐるのではあるまいか。前評者が「朝廷去らずて」を煩瑣で蛇足の感があると云つて居るがその點は如何であらうか。遠く太宰府にゐて、思ひを都に馳せてゐた作者憶良——旅人の推輓に思ひをかけてゐた憶良を思ふと、「朝廷去らずて」といふ所には矢張り作者の感慨がこもつてゐたとみるべきであらうか。さういふ點で次の敢布私懷三首にその感情の通ずるものがあり、僞らざる人間の感懷がやや表現せられてゐるやうにも思はれる。

○　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

この四首も前評者の言はれた如く製作の動機が動機であるから、さう出來のいい作とは言へないのであらう。柴生田君が下役根性と云はれたがさういふ所も見える。又憶良の歌には貴族的なところがないと言

はれたが、それも肯はれる。憶良はどこか現世的榮達の感などが强かつたらしく、死に近づいての「士やも空しかるべき」（九七八）なども さういふ點を考へると嫌に感ぜられるのである。然しやはり眞情を吐露した作には惻々の情の捨て難いもののあることも注意していいであらう。又憶良程度の作家を無視省略してしまふといふことになれば、あまり歌の世界が單調になつてしまふといふこともあらうと思ふ。下役が上官送別の式に詠んだ歌とすれば、その間に幾分の眞情を含んでゐることも諒としてよいと思ふ。柴生田君が古語を使つて居るのではないかと云はれたのは私も贊成である。憶良が古傳説や古語らしいものを用ゐてゐるのは外の場合にもあるし、この第一首の「天飛ぶや鳥にもがもや」なども「天飛ぶ鳥も使ぞ」などと關係してゐるのかも知れない。それ等も憶良の衒學の致す所とすれば又反感の種となるであらうが、緊張して鄭重にする爲に古い言葉を使つて格式を整へてゐるとすれば、その心根を汲んでやつてよいのではあるまいか。私は四首の中では八七八の「言ひつつも後こそ知らめ」が一番心を惹くやうである。「とのしくも」は假に「ともしくも」と解して味ふのである。

（昭和十二年七月）

三十七　山上憶良の歌七首

天ざかる鄙に五年住ひつつ京の風俗忘らえにけり　（卷五、八八〇）

〇

柴谷武之祐

この歌、憶良の作としてはいい部類に入らぬと思ふ。前の「書殿餞酒日倭歌四首」に比してこの歌以下「敢布私懷歌三首」は其程一般的形式的ではなく、やや作者の眞情を感ぜしめるが、それにしても「京の風俗忘らえにけり」といふあたりは少しく思はせぶりであつて、ここはむしろ八八二に於けるが如く、「春さらば奈良の京に召上げ給はね」と直截に言つた方が好ましく思へる。更にこの歌「鄙に五年」といふところにも私は飽足らなく思ふ。この歌の作された時が天平二年であり、從つて憶良の筑前國赴任が神龜三年であるかないかと言ふ事實の穿鑿よりも、かく小きざみに「五年」と年數を示した點、歌柄を弱めては居ぬだらうか。一種の佶屈が憶良の特質をなすとはいへ、その力量を以てすればもつと大まかに力强く言ひ得るところではないだらうか。一應以上の如く感じたが、當時に於ける國の狀態を考慮に入れるこ

とは勿論必要であるから、さうして今一度吟味すれば憶良が「京の風俗忘らえにけり」と歎く氣持は、現世の地方官が、親任官に榮轉して去る上役に對する氣持などとは全然別個のものなること、容易に想到し得るのである。私の獨斷であるが、憶良として佳作の部類に入らぬとはいつても、前の「天飛ぶや鳥にもがもや」(八七六)の一首及びこの一首にはかなり眞率な氣持を汲取り得ると思ふ。

○

柴生田稔

以下三首の題詞「敢布私懷歌」の「敢」の字は、寛永本には「聊」となつて居るのを、多くの古寫本によつて「敢」とされたものであるが、この一字にも憶良の氣持を窺ふことが出來るやうに思はれる。三首の最後に「天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上」とあるのは、前號に批評した「書殿餞酒日倭歌四首」にまで及ぶものであらう。この四首と三首との比較に就いては前號にも少し言つたが、氣持の點でも出來榮の點でもあまり相違はないやうに思はれる。この歌もやはりさういふ旅人を意識し、旅人に訴へてゐる態度が純粹な效果を妨げるのであらう。前評者も言ふやうに「京の風俗忘らえにけり」といふ句に問題があるので、素直に京を慕つて歎くのとはどこか異なつたものが感ぜられる。「てぶり」といふ言葉も「忘らえにけり」といふ句も、萬葉集中にこの一例だけであるのは、やはり注意していいのではあるまいか。柴谷氏が「國の狀態」とか「現世の地方官」云々とか言はれた意味はよく分らないが、現代の一般官吏の場合などと同一でないことは當然として、私はやはり或る上役に對する意識をこの場合も感ずるのである。「五年」は攷證に言ふやうに、後の家持の用例(卷十八、四一一三)では正確に五年を意味して居な

いから、この場合もこの數字から憶良の筑紫赴任の正確な年時を決めるわけには行かないのではあるまいか。もつとも家持は憶良を眞似てゐるのであらうから、その點は考慮の餘地がある。

○　　　　　　　　五味保義

一首の體裁が比較的單一であるから、分り易い歌になつて居ると思ふ。そして四五句の音調も割合に穩かで「風俗」と云ひ、「忘らえにけり」といふ風に變つた云ひ方をしながら、澁滯するところが少いので、一讀して或る程度の玩賞に堪へるのであるが、結局はあまり作歌の心持に於て單一に過ぎてゐるのだと思ふ。私はこの四五句には作者の詞句使用の技巧の方が感ぜられ、作者の心中にはさういふところに作歌の興味がその內容よりもより多く在つたやうに思はれる。

○　　　　　　　　土屋文明

「鄙に五年」と云ふのは、柴生田君が攷證の說を引いて實際の期間ではあるまいと言はれて居るが、成程家持の例は攷證の說の如く實際の期間でないらしいが、それは家持の心覺えの相違か、或はこの句を模倣したまま後で手を入れるのを忘れたかによるのではあるまいか。この憶良の歌では私は實際の期間を言つて居ると見たい。かういふところへ實際を言ふことは、多分支那の詩などには極めて有りふれた技巧ではあるまいかと思ふ。大體この邊の歌は詠嘆がすでに素樸を出でて、やや複雜な背景を持つて居るのであるが、さういふ感じ方を詩材とすることは日本に於ける自然の發展もあらうが、漢詩の影響が非常に多い

のではないかと思ふ。この事はすでに幾度か繰返したことではあるが、「五年」といふ使ひ方には、そんな意味があるのではないかと思ふ。

○

斯くのみや息衝き居らむあらたまの來經往く年の限知らずて　（卷五、八八一）

落合京太郎

直線的に表現して居り乍ら複雑な氣持を內容に籠めて、而も憶良としては割合に潤ひのある作品と思はれるのは、作者が自己の衷情を僞つて居ないのによるのであらう。「夜はも息衝きあかし」（二一〇、人麿）「鳰鳥の潛き息衝き」（古事記）「あらたまの月は來經往く」（古事記）といつたやうな先例はあるのであるが、さういふ點を顧慮することなしに、この一首は作者の眞情によつて統一せられて居るやうに思はれる。「斯くのみや息衝き居らむ」といふ句は、憶良は一五二〇の長歌にも繰返して用ゐて居る。「息衝き居らむ」といふのは、「京を戀し戀しとばかり長き息を衝く」と言ふ古義の說の如く狹くとるべきではなく、さういふ意味をも含めて作者の現在に對するすべての嘆きを含んで居るものと解釋した方がよいのではあるまいか。此等三首を旅人の三三一乃至三三五の奈良を思ふの歌や、一六三九の京を憶ふの歌等に比すると、作者の性情風格に著しく相違のあることを認められるのであり、齡七十を過ぎて居乍ら、「吾が主のみたま賜ひて春さらば奈良の京に召上げたまはね」（八八二）などと詠んでゐるのも、見方によつては確かに一種の嫌惡を感ぜしめるのであるが、短歌の世界に於ては、凡俗の凡俗としての感懷をも、曇ることな

しに吐露することが許されるならば、此等の三首も私は相當に評價して受け入れていいのではないかと思ふ。前月號で柴生田氏がこの三首と書殿餞酒日の四首との間に「態度の上で、公人の立場、私人の立場といふやうな根本的な差別は存在しないのではないだらうか」と云はれたが、それはその通りである。私は二つの題詞の點と、書殿餞酒の四首が敢布私懷の三首に比して少しく外面的である點からして、此等の一群の製作せられた動機、つまり作歌の緣由について云つて見たかつたのであり、そこを强調したので柴生田説のやうな疑問の起る文章になつてしまつたのであつたが、私の文章は「立場の相違」を謂はうとしたのではなかつた。

○　　　　五味保義

一二句は私も巧い句であると思ふ。解釋は前評者が云はれたやうに取るべきであつて、さうとすればこの歌がよく理解される。第三句の「あらたまの」は年の枕詞で、その間に「來經行く」といふ句が這入つてゐるのは、先に日本挽歌の反歌に「はしきよし」が二句をへだてて「妹」にかかつてゐるのと同じやり方である。ここもやはりそのために一種の諧調を得てゐる。私は三首一連の中ではこの歌が比較的嫌味なく思はれるのであるが、前評者がやや同情的に見て居られるのと違つて、この三首も前の書殿の四首も同じやうな常識的な氣持から發してゐることを否定し得ないやうに思ふ。どこか一首の肉附けが足りないやうに思ふし、直線的であつてもやはり中心となるべき迫力が明確に感ぜられないやうに思ふ。

前評者があげられた一五二〇の外に、平群女郎の「草枕旅にしばしばかくのみや君をやりつつ吾が戀ひ

をらむ」（三九三六）、「かくのみやあが戀ひをらむぬばたまの夜の紐だに解きさけずして」（三九三八）は天平十八年の歌で、憶良のこの歌に影響されたあとが見える。なほ「かくのみし戀ひやわたらむたまきはる命も知らず年を經につつ」（二三七四）、「慰もる心はなしにかくのみし戀ひやわたらむ月に日にけに」（二五九六）、「かくのみに戀ひやわたらむ秋津野にたなびく雲の過ぐとはなしに」（六九三、大伴千室）のごときがある。

吾が主の御靈賜ひて春さらば奈良の京に召上げ給はね　（卷五、八八二）

○　山口茂吉

「吾が主」は大伴旅人卿に對して云つてゐるのであることが分かる。かういふ使ひ方に就ては古義など細かく例證を擧げてゐて參考になる。「御靈賜ひて」は「御恩賴を賜つてと云はむが如し」と古義で云つて居り、日本書紀にも用ゐた例があることを述べてゐる。現代語にくだいて云ふと、この歌の場合では、「御盡力によつて」とか「御引立に預つて」といふぐらゐの意味であらうが、奈何にも要領を得た憶良らしい口吻の句である。なほ、「吾が主の御靈賜ひて」の二句だけ離して考へると、「あなたに肖らせて頂いて」といふやうな意味に取れないこともないやうに思ふがどうだらうか。

一首の意は、「あなたの御引立により來年の春になつたならばどうか奈良の都に召返して頂きたい」といふのであつて、天平二年冬十二月太宰帥から大納言に榮進して、京師にかへることになつた大伴旅人卿に

示したものである事が明かである。題詞に、「敢へて私懷を布ぶる歌三首」とあるが、最後のこの一首などは獨詠歌ではなくて對詠的のところが濃厚である。この歌は甚だ明快で且つ歌調もとどこほるところがなく、それでゐて何か一氣に讀み過ごすことの出來ないやうな、しみじみした感慨をこもらせてゐて人を惹きつけるところがある。おもふに憶良が飾るところなく本心を吐露してゐて、そこが却つて哀れふかいものにしてゐるのではなからうか。しかしこの一首は一聯三首の中では前の二首に稍劣るやうに思ふ。僞らない本心をさらけ出すといつても、かういふ事柄になると、戀愛などの純粹な心持に比べて幾らか自然に行かぬところがあるのかも知れず、形式的になり易いとすればさういふ點が原因であるのかも知れない。

〇　　　　　　　　　　　　　　　　相　澤　正

「吾が主の御靈賜ひて」といふのは上官の旅人を讚賀する氣持から先づ出た句であつて、詰りは諸註釋がミタマノフユを擧げて居る如くであらう。しかも憶良は通俗感情とも思はれる程、現前の具體的の事實を願望してこの句を用ゐてゐるのである。私はそこに集中唯一の「御靈賜ひて」といふ云ひ方の面白味を見出すのである。和魂を以て漢才を驅使する作者の用語の妙味を看取出來るやうに思ふ。「春さらば」といふのも實に氣の利いた詞で、場所を得たとでも許すべきであらう。この一首は措辭に何の陰影もないながら、嘆きの底から出た輕い明るさといふやうな所がある。他奇ない表現は親愛な感を持たれるが、翻つて考へれば又餘りに俗耳に響きやすく與し易いといふ低さがある。しかしながら、齡古稀を越え、なほかくの如き作を爲した憶良には、たとへそれが、好んでかかる素材へ關心を持つ作風の歌人であつたとして

も、京人としての切實な京師への憧れと、地位への望みと、邊疆の生活への倦怠とがあつたのであらう。これ等の消息は昔も現在でも全く同じことである。以上、この一首から享ける感は八七六から讀んで來るときいよいよ深い。

○

五味保義

世間(よのなか)を憂しと恥(やさ)しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（巻五、八九三）

貧窮問答歌の反歌であるが、比較的直線的に言つてあつて、印象も明瞭な歌である。特に結句は他に例の見當らない言ひ方である。その長歌の構成は古事記の歌謠に類似して居ながら、內容に於ては恐らく當時としては新しいものであつたやうに、この短歌も何處か從來の型を破つた所があり、作者のさうした興奮もみえる。「憂しと恥しと思へども」の「恥し」（原文「夜佐之(ヤサシ)」）といふ言葉は集中に於て他に一例を存するのみである。卽ち「玉島のこの川上に家はあれど君を恥しみ顯はさずありき」（八五四）とあるが、この歌は或は旅人と言はれ或は憶良と言はれるのであるが、此の用例から見ると憶良の歌といふのに分がありさうに思はれる。但し「夜佐之(ヤサシ)」といふ言葉は「恥かし」の意味に從來とつて居るのであるが、それは此の八五四の歌の意味から推定されるのみで、まだ根據ある解釋と思はれない。殊に此の八九三に於ては、「恥かし」といふ意味では何か落着かぬ所があるが、もつと別な解釋が成立ち得るならばこの歌はわれわれにもう少し直截に響くところがあるのではなからうか。

○　　落合京太郎

前評者もこの歌の內容の新しいことに一言せられたが、世間苦を歌ひ世間を離脫しようといふやうな思想を歌の題材にしたのは、集中でもこの歌などが最初のものであるかも知れない。さういふ點で興味を感ずるのであるが、一首の鑑賞者に與へる印象からいへば、句々の點で特異なものはあるにせよ、やはり外面的に流れて常識的といふところに落着くのではないかと思はれる。「恥し」といふ語についても五味氏のいはれた如く、現在の吾々にはその意味が直接にひびく所が乏しいのであるが、代匠記は「邦有」道貧且賤焉恥也」の論語の句を引いて、この意だとしてあるのは、憶良の思想的背景を考へると參考になるやうに思はれる。しかし一首を貫く思想はむしろ佛敎的なものではないかと思ふ。

○　　藤森朋夫

素材的にみて、八九二の長歌、及びこの短歌は、比較的新しいものを扱つてをり、この點から問題視され、特に注意されてゐる作品である。一體ならばこの歌は「反歌」とあつて次に置かるべきであらう。しかしその文字は見當らないが、ここはやはり前歌の反歌としてみるべきであらう。この一首は內容的にあまり深味は感じられない。詠風は直線的であるかもしれないが、所謂概念的であり、表面的であつて流動するものがない。長歌の方には特に後半に於いては、當時の貧民者の生活のある部面をうたつてゐるのであらうと思はれる所があり、相當にそれを咀嚼して實感味も伴つてゐるが、これにはさうした點は遂に姿

を消してゐる。何か吾々の氣持とは遠い距離を感ぜしめられる作となつてゐる。

○　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

一首は今のわれわれから見れば極めて常識的表面的なものに過ぎないこと、前評者の言はれた如くである。殊に「飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」は卑淺に聞えること甚しい。常識的に見える思想でも旅人の「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（七九三）などになると直接の詠嘆が聲調の上に強く響いて來るのであるが、この歌では表現が全く間接になつてしまつて居る。憶良の短所を暴露して居る歌といふことが出來るのであらう。ただかういふ問題にまで歌の素材を擴げようとしたことに憶良に何等かの計畫意圖があつたものとすれば、その點は面白いのであるが、恐らく憶良にはさういふ意識的の計畫があつたのではあるまい。憶良の受けた學問やその社會的職務等から、憶良の生活にはかういふ非文學的方面が著しく發達して居たのであらう。唯憶良の如き性格を作つた時代を考へ、その憶良がなほ日本古來の詩形に依存しつつ詩作にふけつたことは、興味なしとは言へないのである。

慰むる心はなしに雲隱り鳴き往く鳥の哭のみし泣かゆ　（卷五、八九八）

○　　　　　　　　　　　　　　柴生田稔

以下は「老身重病經ㇾ年辛苦及思ㇾ子等ㇾ歌」と題した長歌一首短歌六首中のもので、この歌はその反歌第

一首に當る。この一聯の最後に「天平五年六月丙申朔三日戊戌作」とあつて、憶良の年月の明記された作品中の最後のものである。又この一聯の前にある「沈痾自哀文」及び漢詩一首とその序も恐らく同じ時の作で、共通した氣持が窺はれ、相關聯して讀むべきである。「沈痾自哀文」中に「是時年七十有四」と記してゐるが、恐らくこの年に憶良は卒したのであらうとされてゐる。長歌は題名の示すやうに老身の病を歎き、幼い子等を思ふ苦痛を詠じたもので「彼に此に思ひわづらひ哭のみし泣かゆ」で終つてゐる。その氣持を總括的に繰返したのがこの短歌であつて、長歌の結句をそのまま結句に用ゐてゐる。「雲隱り鳴き往く鳥の」は第五句の序で、一首の意味は非常に簡單であり、長歌を承けて只その苦痛の氣持だけを歌つてゐる。これは憶良の兎角中味のつまり勝な作風を考へると注意していいことであらう。但しこの序詞の使ひ具合などは、やはり概念的で不器用で、憶良の特徴を示してゐると思はれる。卷十四の東歌に「昨夜こそは子ろとさ寢しか雲の上ゆ鳴きゆく鶴の間遠く思ほゆ」(三五二二)といふのがあるが、この方がよほど彈力性があつてまた巧である。「慰むる心はなしに」といふ句については、人麿に「慰むる情もあらず」(一九六)「慰むる情もありやと」(二〇七)の先例があり、また神龜三年の金村作に「丈夫の心はなしに」(九三五)といふ用例がある。それから卷十一に「慰もる心はなしに斯くのみし戀ひや渡らむ月に日にけに或本歌云沖つ浪敷きてのみやも戀ひ渡りなむ」(二五九六)、家持の作に「籠り居て思ひ歎かひ慰むる心はなしに」(三九六九)などがある。かういふいはば心理的なやや複雜な表現も人麿が始めらしく思はれるが、卷十一と憶良との關係などはどう考へるべきであらうか。「哭のみし泣かゆ」に就いては金村歌集の靈龜元年志貴皇子薨時の歌に「聞けば哭のみし泣かゆ」(二三〇)、丹比笠麻呂の歌に「明闇の朝霧隱り鳴く鶴

の哭のみし泣かゆ」（五〇九）その他憶良以後と認められる用例は多い。この笠麻呂の作と憶良との關係なども問題になるであらう。ただこの憶良の歌でいふと、「慰むる心はなしに」でも「哭のみし泣かゆ」でも、人麿以下の諸例が皆戀愛とか挽歌とかの場合で、いはば單純な抒情であるのに對し、憶良の場合は可なり複雜な生活苦の表出に用ゐてゐる。そこに或特殊の效果の生じてゐることに注意すべきであらう。

○　　　　土屋文明

この一首は憶良の歌としては調子があり單純で佳作の方ではないかと思ふ。ただ「雲隱り鳴き往く鳥の」といふ序を用ゐたところは、なほ至らぬ點ではないかと思ふ。同情して言へば、この序は作者の當面して居る實景實情をとつて直ちに用ゐたものではないかとも言へないことはないが、憶良の作風からすればむしろ純然たる技巧的修飾の爲に持つて來た句と見るべきであらう。又旅人が引合に出されるが、彼が事もなく「いよよますます悲しかりけり」と言ひ切つて居るのに對して、作歌の常識の一層廣く發達してゐた憶良には、それだけでは滿足し切れずに「雲隱り鳴き往く鳥の」といふ句をもつてその空虛な心持を充塡したのであらう。そんな風に考へると作歌に對して信念や勇氣の持つ役割の重大さも思ひ知られるのではないかと思ふ。

術（すべ）も無く苦しくあれば出で走り去（い）ななと思へど兒等に障（さや）りぬ　（卷五、八九九）

○　　樋口賢治

八九八に引續く「老身重病經年辛苦及思兒等歌」中の一首である。この一聯反歌には何れも作者憶良の個性が強く表はれて居り、思想詩的傾向強く集中に在つても異色ある作品と謂へるが、この一首は其等の中に在つて特に直接的表白に終始して居るのが注意される。一聯五首が連作的企圖によつて成されたかどうかは別として、この一首だけを取上げて見ると、やはり連作中の一首としての味ひの強いのが感ぜられる。例へば一二句の「術もなく苦しくあれば」と言ひ起して居るのなどがそれである。「術もなく」は「妹が心の術もすべなさ」（七九六）「世間の術なきものは」「せむ術もなし」（八〇四）「術なきものか世間の道」（八九二）等、何れも神龜より天平にかけて憶良に用例の多い句であるが、殊に「術もなく寒くし在れば」（八九二）等があり、彼にとつては熟し用ゐられたものであらう。一首の意は極めて明瞭であり、直線的な詠嘆の中に類型に昵まぬ切實な響きを藏して居るのを感ずる。「出で走り去なと思へど」とか「兒等に障りぬ」とかには、やはり多少の詩的誇張が伴つて居り、詠嘆も亦稍平俗で餘韻に乏しい憾みのあるのは、この歌に擧げられる一つの缺點ではあらうが、一首に表現された抒情的衝迫は猶以上の如き評語を成さしめ得るのではないかと思ふ。

○　　土屋文明

この一首も常識的といふ點では上述數首と變りはないのである。然し萬葉集の時代の思想といふものは

或はこの程度が一般であつて、さう深いものや高いものを求めるのは、求める方が無理かも知れない。結句の「見等に障りぬ」なども表面的で現實感が薄く感ぜられるのであるが、前述の如く憶良の時代の思想界といふやうなものを考慮し同情してその上で評價すれば、樋口君の言はれるやうなことも、全然否定する訣にはゆかないのであらう。兎に角、憶良には素朴單純なる抒情の舊套を出でむとしても、まだ新しき思想的の世界といふものは甚だ貧弱であつたのではないかと思はれる。それは彼の思想的作品の凡てに通じて言へることであらう。

○

落合京太郎

憶良が思想的抒情詩の世界を完成してゐないといふことは、前評者のいふ如くである。さうして當時の思想の世界が案外に貧しかつたらうことも、前評者のいはれる如くであるかも知れぬが、憶良の歌の、鑑賞者をして云々せしめる所以は、さういふ背景を考へるよりもやはり作者身の行き方に缺點の多くを有してゐるのだと思はれる。私には、集中の憶良の作品を見ると、憶良には思想的な題材を取上げようとする意圖が矢張多少はあつたやうに思はれる。その點私は同情出來るのであるが、憶良の歌つた如き內容の思想を正面から意識的に歌を以て表現しようとすれば、餘程の多力者で抒情化の力を備へた者でない限り、表面的常識的に終ること、憶良の程度ではないかといふやうな氣がする。それ故憶良のかやうな歌や傾向が實作上參考になるといふのも、結局は前述の如き消極的な意味にをはると言へさうである。

○　鹿兒島壽藏

「術も無く苦しくあれば」は長歌の「老身重病」であり、「世間の厭けく辛けく」なのであるが、この歌のみ讀む場合、この一二句はやや獨合點な感じもしないではない。又「出で走り去ななと思へど」にしてもその感があるやうである。しかし一首全體を讀むに到つて作者の氣持に接近し、同情も出來るやうに思ふ。この歌は現實を直面的に表現したのではなく、想念的に現實苦の情意を詠んだものといへよう。それゆゑ一面に於て概念的だとか理りめくとか云はれることにならうが、この歌などはさうした一面を持ちながら何處か讀者の心を衝くものがある。「兒等に障りぬ」はこの作者としてみれば左程苦心せずに自然に詠めたやうに思はれるので、却つて效果があつたと思ふのである。時にこの歌の內容の程度では一般的人情を出でぬといふ說も出るかも知れぬが、實際の製作といふ點から新に考へるなら、さう易々として出ては來ないのではなからうか、なほ憶良の特異性が非常に強いとも、又、切實に迫るとも思はぬが、この歌をみて外の誰をも考へることは不可能であるし、眞實味がやはりあるので、萬葉集の多樣的存在として十分見るべきものかと思ふ。

富人の家の子等の著る身無み腐し棄つらむ絹綿らはも　（卷五、九〇〇）

○　鹿兒島壽藏

この歌の內容は現代世相に其儘に、或はいつの世にも當て嵌るのであらう。それ故世間に傳はり、人口に膾炙し易いのであつた。さういふ思想的な歌なのである。しかし誰もが思ふであらうやうに、かういふ點に眼をそそいだ憶良の作歌意識といふものは、何か不敵なものを持つてゐたと云へる。この作品は見る時の態度の如何によつて評價が移動し易いやうに思ふが、今主觀的に評するなら私は左程好んでは居ない。從つて興味はあつても良い歌だと思つて讀む程でないのである。內面的な內容でありながら、外面によけいに接觸してゐるやうに思はれる點が私に好ましくないのである。

○　　　　　　　　藤森朋夫

この一聯五首の反歌の中にあつては、作品として最も注意すべきであらう。憶良獨特の素材の扱ひ方であるが、その情感はあまり切實なものとなつて響いては來ないやうである。もつとも所謂彼の詠風の抒情よりも理智を感ぜしめる作中にあつては、この作など比較的單純に詠みあげてゐて、彼としては素直な作と見られよう。この作と次の「麁妙の」(九〇一)とは、內容的にみて貧窮問答歌(八九二)の反歌と思はれるので、實はその反歌としてあるべきものが、紛れてこの部に入つたものであるとの意を「考」に述べてゐるが、これは如何であらう。一應は首肯出來さうにも思はれるが、貧困をうたつてゐるといふ點からかかる憶測をすることは危險といはざるを得ない。この一聯は、すで言はれてもゐるところであるが、連作的作品であり、それらの中には、ひたすらに子を思ふ情が詠み込まれてゐると見られる。憶良には漢學の影響が深かつたらうことは何時も考へられるところであるが、これなども、例へば絶句に於ける起承轉結

の轉句にあたるものではあるまいかとも想像をしてみた。即ち反歌の中に在つて、一の變化を齎すべく、毛色の變つた試みをしてこれを並置したものと見られないだらうか。やはりこれはこの位置を占めて、子を思ふ一聯の作として、しかも反歌としても追補的の役目を果す作として見るべきではあるまいか。

○　　　　　　　　　　落合京太郎

詠嘆が平俗で、少しく酷く謂へば市井の貧女の口吻に似て居る。次の九〇一も亦然りである。かういふ嘆きを歌にする程、憶良の生活は實際に於て貧しかつたのであらうか。八九七の長歌には「五月蠅なす騷ぐ兒等を」と詠んで居るけれども、筑前國司であつた憶良が、特別な事情がない限り、「麁妙の布衣をだに著せがてに」（九〇一）在つた程貧しかつたとは想像がつかない。貧富、幸福のたぐひは人の主觀に依存するところの多い點や、詩的誇張の伴ふ點を考へにいれても、この一首などは作者の感じ方乃至は表現に於て切實性に缺くる所がある。取材の特異なのは勿論であり、「富み人の家の子等（こども）」などの漢詩文あたりから轉化して來た感じや、「著る身なみ腐し棄つらむ絹綿らはも」といふ所などにも語句の上の面白さはあるのであるが、一首としては高く評價が出來ない。作者には貧そのものの體驗よりも、觀念としての貧が先入して居たのではあるまいか。「老身重病經年辛苦及思兒等歌」（八九七）の前に揭げてある「沈痾自哀文」などと讀み合せて見ても、私にはさういふ感じがするのである。

○　　　　　　　　　　土屋文明

藤森氏の起承轉結說はどうであらう。それまで外形を意識しつつは憶良といへども作歌すまいと私には思はれる。「富人の家の子等」は良家の子女といふ意味であらうが、或は直譯語かも知れない。「著る身無み」は如何にもせせこましい語法であるので、私は「身」は身體の意味でなしに「かへるみ」などの「み」と同じく體言を作る接尾語ではないかと考へたこともあるが、語法上の根據が積極的でないのと、憶良はこの位のせせこましい句も用ゐるかも知れないと思ふ氣持とで、猶自分一個の問題として殘して置きたい。この一首も前評者は大分酷評された樣であるが、憶良の作品中では寧ろ上の部に屬するのではあるまいか。「富人」などといふ語にしてもぴたりと使つて居る。近來見えるこの語の用例は皆この憶良の歌に由來するのである。攷證にはトムヒトと試訓が提出されてゐるが、私はトミヒトの方が良いと思ふ。憶良の實際の貧富の問題が引合に出されて居るが、憶良は和銅七年從五位下を授けられて居るから、その位田だけでも決して我々の如き貧乏人でなかつた事は言ふまでもないが、彼の眼には藤原氏をはじめ、諸豪族の榮華があるから、自ら貧しと感じたにしても強ちに誇張とは言へまい。

（昭和十二年八月）

三十八　山上憶良の歌五首

○

麁妙（あらたへ）の布衣（ぬのぎぬ）をだに著せがてに斯くや歎かむ爲（せ）むすべを無み（卷五、九〇一）

五味保義

これは先月批評した八九八乃至九〇〇の三首に續く一首であつて、やはり貧苦を歎いた内容の歌である。嚴密に言へば「富人の家の子どもの着る身なみ腐（くた）し捨つらむ絹綿らはも」（九〇〇）と關聯して味はふべき歌である。特に「着せがてに」と言つて、自分の子らに對して粗布の衣類をさへ著せることが出來ないで云々といふ意味を述べて居るのは、今言つた九〇〇の歌と關聯の密なることを思はせる。一首に對する感じは、先月落合氏が九〇〇に對して述べてゐたのと近く、私もあまりいい歌とは思はない。比較してこの方がまだ窮屈で面白味が少いのではあるまいか。四五句の如きも、巧のやうであつてやや實意が足りないやうに思ふ。因にこの歌の詞句には用例の稀なものが多い。「布衣（ぬのぎぬ）」といふ熟語は同じく憶良に「布肩衣（ぬのかたぎぬ）」といふ類似のものがあるだけであるし、「かくや歎かむ」も後に家持が相聞の歌（三九六四）に用ゐてゐる

外にはない詞であるし、結句もこのままの形は外に認められないやうである。さういふ點は今まで度々注意されたのであるが面白いと思ふ。

○

宮脇武夫

結句は三四句の表現にまかせてよい所ではなからうか。殊に第四句で昂揚した後を受けて「無み」ともたせかけて終つた所、聲調の自然とも受取れるが、言ひさして止めた所に問題がある。かかる用例は集中甚だ多いが數例を拾ふと

朝鳥の音のみし泣かむ吾妹子に今また更に逢ふよしを無み（巻三、四八三）

衣手の別る今夜ゆ妹も吾もいたく戀ひむな遇ふよしを無み（巻四、五〇八）

月夜には門に出で立ち夕占問ひ足卜をぞせし行かまくを欲り（巻四、七三六）

皆人の戀ふるみ吉野今日見ればうべも戀ひけり山川清み（巻七、一一三一）

高島の阿渡河波はさわげども吾は家おもふ宿かなしみ（巻九、一六九〇）

等であるが、何れもやや思ひをこめすぎる結果に落ち、煩累に終つてゐるのではあるまいか。集中相聞は驚くべき多數であるが、自分の子供の歌は驚くべき少數である。此間に介在して憶良の子供の歌は素材的に目立つ。前代の秀歌の後を承けて、旅人憶良家持等が如何なる歌を作つたか、如何に歌の領域を擴げたか、それが如何に評價さるべきか、如何に作歌上學ぶべきかは、實に肝要のことであつて、遠くは萬葉集を、更に長年月にとびとびに現はれた萬葉派歌人を、更に子規以後身近くに多力多數な先進を有して居る

吾々にとつて、誠に切實な問題であると思ふ。

○　　　　　　　土屋文明

布衣(ぬのぎぬ)の用例について五味君が言はれて居るが、かういふのは作者の造語といふよりも、通用の俗語を歌に採り用ゐたのではないかと思ふ。憶良の用語の中には同じやうな例がいくつかあると思ふ。「かくや歎かむ」とか「爲むすべをなみ」とかは、特に用例の前後を論ずべきほどの句ではない。どこにでもあり得べき用法である。憶良にその用例の存するは、たまたまさういふ憶良の歌が保存されたといふに過ぎまい。用語の問題は興味のある、また重要な問題であるが、言葉それ自身の特殊性といふことも考へないと益するところが少いかも知れぬ。私はこの一首は割合に調子が透つてゐて一聯中では佳作のやうに思ふ。憶良の作としては單純なところが特によい。

水沫(みなわ)なす脆き命も栲繩(たくなは)の千尋(ちひろ)にもがと願ひ暮しつ　（卷五、九〇二）

○　　　　　　　落合京太郎

左註に「天平五年六月丙申朔三日戊戌作」とある點竝に長歌（八九七）の題詞よりすれば、憶良の晩年而も死に近づいての作であらう。代匠記は卷十六（三八六五）の註で憶良の都へ歸つた時期を天平三年十二月と推して居るが、此はかの寶字二年冬十月の國司交替に就いての勅などを、念頭に置いての想像であるこ

とは、「天ざかる鄙に五年住ひつつ」(八八〇)の歌につき同書の註する所と照し合はせて見れば明である。それ故固より確實な說とは謂へないが、代匠記の推定に從へば九〇二から八九八に遡る一聯は憶良歸京後の作と言ふことを得よう。

「千尋にもがと願ひ暮しつ」といふあたりには沈痛の響きがあり、作者の嘆息の籠つて居るのが感じられるのであるが、慾を言へば初句から千尋とつづくあたりは稍消化し切れない何かがある如く思はれる。一種の硬さといふか、作者の論理癖といふか、さういふものが讀者をして順直に鑑賞せしむることを妨げる樣である。

先蹤との關聯を言へば、「栲繩の長き命を」(二一七、人麿)「巻向の山邊とよみて行く水の水泡の如し世の人吾は」(一二六九、人麿歌集)等をあげることが出來よう。一二六九と比して見ると詩句の上にも對象を把握する態度の上にも、憶良の作に於ては分化の跡が著しいのであるが、歌柄は却つて狹小になつて居ることは否めない。

○　　　　相澤　正

憶良には神龜二年に既に「倭文手纏數にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも」(九〇三)の歌があり、神龜五年には、「常磐なす斯くしもがもと思へども世の事なれば留みかねつも」(八〇五)の歌があり、この歌を成すまでには一貫した人生に對する詠嘆が常に胸臆に往來してゐたやうに思はれる。一首は極めて單純明晰である。そして「水沫なす脆き命」と「栲繩の千尋」とが排律的な調和を與へてゐる。

詞の一つ一つは概念的、理知的であるに拘らず、斯く一首となつて見ると、さういふ臭味が漂白し去られて立派に藝術品として成功してゐる。ただ僅に「願ひ暮しつ」あたりにその殘滓が浮動してゐるやうに思はれるけれども。又この歌は一見舊作（九〇三）の燒直し乃至は詞句の置換のやうに見えるけれども、やはりそこには憶良の思想のより透徹した冥想的なものが流露してゐて、單なる改作では達しられない眞實性がある。憶良の詠風も、他の有力なる集中歌人のそれと同じく、先人傳統の上に更新を加へ、自らのものを加へて築かれたものである。殊にこの歌人の知識的な素材なり用語なりには、先蹤の露はなるものが見えるが、しかもそれをよく咀嚼消化して自らのものにしてゐる。そこがやはり單なる知識人でなく、又凡庸な作歌人でない所であらう。憶良は人麿の影響下に立つこと勿論であるが、この歌も詞句の上からすれば亦人麿の影響を否む訣にはゆかない。「水沫なす脆き命」といふ思想は古義の擧げた金剛般若經の句や又思ふに人生若朝露などと同じであるが、かかる思想は當時已に一般的觀念として歌はれてをり、憶良はかかる彼土の先蹤よりも先づ、自己の習練せる先人人麿から得てゐると思ふのが至當で、「栲縄の千尋」も同じく人麿よりヒントを得てゐるのであらう。

憶良と同時代人で、その交友のグループ中にあつた旅人と滿誓沙彌に次の作がある。

世の中は空しきものと知るときしいよよますます悲しかりけり（旅人、巻五、七九三）

世の中を何にたとへむ朝びらき榜ぎ去にし船のあとなき如し（滿誓、巻三、三五一）

この兩人は各漢學に通じ、又は浮屠の道に參入して得た知識もさることながら、憶良のこれらの詠と一脈通ずる思想的なところは啻に偶然とはいはれぬ、或程度の交流を思はずに居られない。

憶良はこの年に歿してゐるのであるが、その長い作歌生活はやはり絶えざる勉學と知識の攝取とによつて憶良本然の詩情が燃燒せられて續けられて行つたのであらう。又思ふに、彼は時代人として以上に自ら苦んでゐたのであらう。

○

柴生田稔

前評者のあげたやうに神龜二年神龜五年と同じやうな內容の歌を作つて來て、この一首に到達したことは注意すべきで、神龜以來の憶良の感懷は此處に至つてやうやく圓熟した表出を得たやうに思はれる。すぐ後に前述神龜二年の舊作を併せ載せてゐるのは、憶良の自作に對する氣持が窺はれて面白いが、作品としてはこの「水沫なす」の方が數等上であるやうに思ふ。この歌はすでに言はれたやうに聲調に一種の沈痛な響があつて、他の場合の憶良とはどこか趣を異にしたものが感ぜられる。「願ひ暮しつ」のあたりに疑問をさしはさむ說にも同感出來るが、やはり水沫の如しとだけですまさずに「願ひ暮しつ」とまでいふ所が憶良の特色で、この場合はそれがよく聲調をなして響いて來るやうである。但し一二句と三四句と照應してゐる處などはやはり私も一種の弱さを感ずる。「命も」などのあたりがことにさうである。

なほ「水沫なす」と「栲繩の」は人によつて或は共に枕詞とし、或は「水沫なす」のみを枕詞とし、若しくは兩者とも枕詞と認めない說があるやうであるが、兎に角人麿の枕詞などと較べると、ずつと全體の意味と合理的に接續してゐて、枕詞的な感じが少い。人麿の場合では隨分現在から見て裝飾的な不自然な續き方をしてゐながら、一方一首全體の響はそれと別に本質的なものを傳へてゐる所がある。そこに現在

吾々がそれらの作品から枕詞の意味を除去して味ひ得る所以が存するのであらう。それに較べると憶良のなどは餘程解りやすく理詰になつて來てゐるやうである。

稚ければ道行き知らじ幣は爲む黄泉の使負ひて通らせ　（巻五、九〇五）

○　竹内六郎

「戀二男子名古日一歌三首」中の反歌の一首であつて憶良の個性のよく表れた歌である。反歌二首の次に右一首作者未詳。但以三裁歌之體似二於山上之操一載二此次一焉といふ註が載つてゐるが、これは二首共憶良の作と認むべきである。歌風から言つても、右の長歌をみても、疑問の餘地はないやうに思ふ。

年表に依ると、この一聯は天平五年の作であり、憶良は七十四歳で最後の年に當つてゐる。一首の意は極めて明快であり別に難解の語句もないやうであるが、句法には二三注意したい。「道ゆき知らじ」は、冥界へゆく道のゆき方を知るまいといふのであるが、かういふ特殊な表現は集中他にないのみでなく、後の勅撰集などにも見あたらない。「幣」は、「まひなひ」卽ち「奉物」である。「幣は爲む」といふ句法も、憶良らしき一面があつて、素朴であり、土屋文明氏が萬葉集名歌評釋で、「子の爲に愚痴に歸つたやうな所が見えてなかなか面白い」と言つて居られるが、この反歌は二首共さうしたものが感じられる。「黄泉の使」は冥界の使であり、「負ひて通らせ」と言つてゐるあたり、ここにも亦憶良の面白さがある。落ちついた調子であり、語句の斡旋も巧みである。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　藤森朋夫

この歌には作者名が記してないが、前の長歌（九〇四）とともに觀る時、それは、歌の內容、語句の用法等からして、憶良の作であることが肯定されるであらう。男子古日の夭折したのを悲しみ戀ふる抒情的作品である。製作年代も明記されてゐないが、卷五の歌の排列順序から推測するに、やはり天平五年中の作であらうことが知られる。するとこれは、彼の晩年に於ける詠作であり、その作風の一面には、既に觀來つたが如く、外面的概念的なものが感じられたのであるが、又これらの作にみられる如く、比較的素直に抒情味を漂はせて、純情を吐露してゐる一面もうかがへるのである。

三、四、五句に於ける語についてみるに、「末比波世武」の「末比」は、「幣」字を書紀ではかくよんでゐる。垂仁紀二十七年八月の條に「卜二兵器一爲二神幣一」とあり、仁德紀十一年十月の條に「河神祟之以レ吾爲レ幣」とある。神に獻る幣物、又は人に謝意をこめて贈る物の意である。ここは、後者の意によるべきであらう。集中に「幣」字の見られる用例は

天に坐す月讀壯子幣者將爲今夜の長さ五百夜繼ぎこそ（卷六、九八五）
終日に鳴けど聞きよし幣者將爲遠くな行きそ吾が屋戶の花橘に（卷九、一七五五）

があり、更に假字書の例を擧げると次の如くである。

玉ほこの道の神たち麻比波勢牟我がおもふ君をなつかしみせよ（卷十七、四〇〇九）
我が宿に咲けるなでしこ麻比波勢牟ゆめ花散るないやをちに咲け（卷二十、四四四六）

吾々がそれらの作品から枕詞の意味を除去して味ひ得る所以が存するのであらう。それに較べると憶良のなどは餘程解りやすく理詰になつて來てゐるやうである。

○　竹内六郎

稚（わか）ければ道行き知らじ幣（まひ）は爲（せ）む黄泉（したべ）の使（つかひ）負ひて通らせ　（卷五、九〇五）

「戀（フル）二男子名古日（ヘ）一歌（ヲ）三首」中の反歌の一首であつて憶良の個性のよく表れた歌である。反歌二首の次に右一首作者未詳。但以三裁歌之體似二於山上之操一載二此次一焉といふ註が載つてゐるが、これは二首共憶良の作と認むべきである。歌風から言つても、右の長歌をみても、疑問の餘地はないやうに思ふ。

年表に依ると、この一聯は天平五年の作であり、憶良は七十四歳で最後の年に當つてゐる。一首の意は極めて明快であり別に難解の語句もないやうであるが、句法には二三注意したい。「道ゆき知らじ」は、冥界へゆく道のゆき方を知るまいといふのであるが、かういふ特殊な表現は集中他にないのみでなく、後の勅撰集などにも見あたらない。「幣」は、「まひなひ」卽ち「奉物」である。「幣は爲む」といふ句法も、憶良らしき一面があつて、素朴であり、土屋文明氏が萬葉集名歌評釋で、「子の爲に愚痴に歸つたやうな所が見えてなかなか面白い」と言つて居られるが、この反歌は二首共さうしたものが感じられる。「黄泉の使」は冥界の使であり、「負ひて通らせ」と言つてゐるあたり、ここにも亦憶良の面白さがある。落ちついた調子であり、語句の斡旋も巧みである。

藤森朋夫

○

この歌には作者名が記してないが、前の長歌（九〇四）とともに觀る時、それは、歌の內容、語句の用法等からして、憶良の作であることが肯定されるであらう。男子古日の夭折したのを悲しみ戀ふる抒情的作品である。製作年代も明記されてゐないが、卷五の歌の排列順序から推測するに、やはり天平五年中の作であらうことが知られる。するとこれは、彼の晚年に於ける詠作であり、その作風の一面には、旣に觀來つたが如く、外面的概念的なものが感じられたのであるが、又これらの作にみられる如く、比較的素直に抒情味を漂はせて、純情を吐露してゐる一面もうかがへるのである。

三、四、五句に於ける語についてみるに、「末比波世武」の「末比」は、「幣」字を書紀ではかくよんでゐる。垂仁紀二十七年八月の條に「卜三兵器爲二神幣一」とあり、仁德紀十一年十月の條に「河神祟之以二吾爲幣一」とある。神に獻る幣物、又は人に謝意をこめて贈る物の意である。ここは、後者の意によるべきであらう。集中に「幣」字の見られる用例は

天に坐す月讀壮子幣者將爲今夜の長さ五百夜繼ぎこそ（卷六、九八五）
終日に鳴けど聞きよし幣者將爲遠くな行きそ吾が屋戶の花橘に（卷九、一七五五）

があり、更に假字書の例を擧げると次の如くである。

玉ほこの道の神たち麻比波勢牟我がおもふ君をなつかしみせよ（卷十七、四〇〇九）
我が宿に咲けるなでしこ麻比波勢牟ゆめ花散るないやをちに咲け（卷二十、四四四六）

「したべの使」の「したべ」は、卽ち「下方」の義で、黄泉國を指す。黄泉(よも)つ比良坂を下つた方にある國で、書紀や祝詞に、下津國、根國とあるのに同じである。この冥界の使の意の歌句は佛教思想の影響下に成つたものとみられよう。結句「負ひて通らせ」の「せ」は、敬語の助動詞「す」の命令形である。

幼兒の死に對する親心の至情があらはに表出されてゐる。「稚ければ道行き知らじ」は、率直な調べの裡に哀れ深い感慨がこめられてゐる。憶良の作としては滑りのよい自然性が意識される。これに對して下句の方は、「まひはせむ」等の比較的用例の多い句法も挿入され、幾分形式化された觀念がないでもないが、ひたすらに愛兒によせる情感の濃やかさによつて、それもあまり目立たないやうにまで歌はれてゐるやうである。

○　土屋文明

この歌は作者を正確に知ることが出來ないこと、前註釋者の言はれたごとくであるが、萬葉集編輯者が憶良の作と推定したのを打破るだけの論據は與へられてゐないのであるから、その推定に從ふより外に仕方がない。憶良の歌として見れば、素直な心持の出て居る方ではあるが、嚴密に批評して行けばどこか表出が間接的である。この歌を憶良作と推定するにはそれもよい資料であるが、歌としてはそこに缺陷があるやうに思ふ。「稚ければ道行知らじ」も一般的であり通俗的であるが、「黄泉(したべ)の使負ひて通らせ」に至つては更に間接的で飽き足らないやうに思はれる。「幣(まひ)はせむ」の句とともに幾分そこに芝居がかつたものをさへ感ずるのであるが、然しさういふ廻りくどい中にも割合に僞らない氣持も滲み出てゐるので、その行

き方は「子等を思ふ歌」などと共通の點もあるやうに思ふ。これらで見ても憶良は決して天成の詩人ではなかつたのであらうが、その愚かな俗情を歌つて恥ぢないところは、我々には同情を惹く點が少くない。

○　　鹿兒島壽藏

布施置きて吾は乞ひ禱む欺かず直に率去きて天道知らしめ　（卷五、九〇六）

先に言はれたやうに、此歌には「右一首作者未詳。但以裁歌之體似於山上之操載此次焉」といふ左註があるが、やはり「古日を戀ふる歌三首」を一體と見るべきものと思ふ。この左註あるためや、長歌中の「天神地祇」等の語句が、この歌の佛教的な語句と矛盾するといふことなどに據つて、同時の作ではあるまいとも云はれてゐる。語釋の方に力を注ぎすぎると勢ひ其處までゆくかも知れぬが、作品の眞意には到り難いこととならう。憶良の思想的背景の濃い歌なども特色があり、何か示唆されるところがあつて面白いのであるが、何といつても眞情吐露のこの歌の如きには及ばない。流暢でない語句を多く用ゐながらそれが少しも佶屈にならず、いかにも聲調が底流して、讀者の心に滲み込んで來る歌である。なほ序に云へば、長歌の方よりも反歌の方がいいやうに思ふ。

○　　落合京太郎

咄々とした調子は例の如く憶良らしく感じさせるが、さういふ點が、この歌では老齡にして子を失つた

作者の歎きを寫すのに却つて似合つてゐるやうにも思はれる。表現の單純化を要求出來る歌であるけれども、この作者のこの場合に對して要求してもそれは成功しないとも思はれる。「天道知らしめ」の「天道（あまぢ）」は、佛籍に所謂六道の中の三善道の一なる天上を指してゐるとして佛教的に解する說と、死者の魂が天翔ける古來の信仰を指して佛教に關係せしめない說と、これら兩者を合せた折衷說とあるやうであるが、私は「布施」といふ佛語を用ゐてゐるが故に「天道」をも佛教に言ふ天上と解しなくてはならぬとまで窮屈に思ひたくない。「死者が天行く道」くらゐに漠然と解してよいのではないかと思ふ。「布施」といふ二字は早く持統紀に見えてゐるが、オクリモノの訓を當ててゐることが注意せられる。萬葉集で用ゐたのは憶良のこの一首あるのみである。さういふ點から言へば「天道」も作者は佛語の意味に用ゐたのかも知れない。私のやうに解しても又佛語の意にとつても、この場合の「天道」と憶良の「ひさかたの天道は遠し」（八〇一）の場合の「天道」とは意味が異り、八〇一の「天道」は死者に關するものではなからう。歌としては九〇五よりも私はこの九〇六の方がよいのではないかと思ふ。

○

五味保義

部分的に見ると少しくくどいやうに思はれるのであるが、一首を通じての作者の感情が直ちに詞句を消化して居るので、遂に常識的な域を脫してゐると思ふ。一二句の如きは殊によると煩はしく思はれる言ひ方であるが、それがこの一首として可なり自然に行つてゐるのは注意してよい。「歎かず」「天道知らしめ」なども憶良の親しみやすい性格が現れてゐて、それが嫌味なく受けとれるやうである。これらも技巧

的な意圖がいささかでもあつた場合には、このやうな結果をなし得まいと思はれる。但しこの歌は憶良の行き方として成功したものではあるが、今までしばしば批評された憶良の歌の傾向、すなはち常識的なものと同じ根幹を有するものであることは感ぜられるのである。第一句は長い間「フシオキテ」と訓まれて、或は臥し或は起きと解されてゐた。これは代匠記から考を通じて攷證まで傳はつてゐるので一寸興味を覺えた。つまり前人の説を改めることが中々容易ならぬ仕事であるといふことについてである。

○

士(をのこ)やも空(むな)しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして（卷五、九七八）

落合京太郎

この歌の作時は、代匠記、古義等の言へるが如く八九七の反歌の左註にある「天平五年六月」前後として略誤りないのであらう。天平五年の作とすれば憶良は齡七十四であつたことが「沈痾自哀文」によつて知られる。七月號で土屋氏が、「憶良はどこか現世的榮達の感などが强かつたらしく死に近づいての『士やも空しかるべき』などもさういふ點を考へると嫌に感ぜられる」と言はれた如く、この作の時と處とを考へると詩句の巧拙などよりも、作者の持する所につき何か反撥して見度くも思はれるのである。けれども當時の社會の上層階級殊に宮廷を中心とした官吏の理想は經國齊家の實踐にあつたのであらう。「君子ハ世ヲ沒ルマデ名ノ稱セザルヲ疾ム」（論語）「身ヲ立テ道ヲ行ヒ名ヲ後世ニ揚ゲテ父母ヲ顯スハ孝ノ終ナリ」（孝經）で、利を求むることは措く、名を求め重んずることは士君子の理想であつた。「未だ名利を抛たざ

れば發心と稱せず」「愛名は犯禁よりもあし、犯禁は一時の非なり、愛名は一生の累なり」（道元）の思量を以て憶良の當時に對することは酷であらう。

さやうな點を念頭に置いても、この一首は詮ずるところ通俗的表面的といふ點に落着くのではあるまいか。聲調の點から言つても私には赤彦が「鑑賞及び其批評」で賞して居る程のものとは思へない。

○　　山口茂吉

前評者落合氏は、「この作の時と處とを考へると詩句の巧拙などよりも作者の持する所につき何か反撥して見度くも思はれるのである」と云つて居られる。私もこの歌に對してさういふことを感じない訣ではない。けれどもかういふ考は何處から來るかを考へて見ると、歌そのものよりも、「山上憶良臣痾に沈みし時、藤原朝臣八束、河邊朝臣東人をして疾む所の狀（さま）を問はしむ。ここに憶良臣、報の語已に畢り、須（しばら）くありて涕を拭ひ、悲み嘆きて、この歌を口吟（くちずさ）めり」といふ左註の中の憶良の動作が、何か芝居めいてゐて役者的身振りを聯想せしむるところがあるので、そのためこの歌の鑑賞上いろいろ邪魔になつてゐるのではなからうかと思ふのである。

憶良は、落合氏引用の土屋氏の説のごとく、現世的榮達の感などの強い人だつたらしいけれども、土屋氏が「萬葉集名歌評釋」に於いて、「憶良のは痾に沈んで將に死なんとしてゐるものの聲なので、此の道德的に聞え、むしろ外面的に聞える歌の意味ながら何處か悲しい響があり、憶良の自分の生涯に對する回顧の情といふやうなものが漂つて居るのである」と云つて居られる如く、才氣煥發ともいふべき憶良が老年

となり病に沈んでゐる時の歌であることを考へると、何か哀れふかいものをこの歌から感じ得るやうにおもふ。赤彦先生は、「觀念的であつても、聲調に熱と力があつて、歌全體を具象的人格化してゐるといふ觀がある」と云つてゐるが、私もこの歌は明快單純の調べの內に強い詠嘆が籠つてゐるやうに思ふ。つまり聲調から云つても、この歌を通俗的表面的とのみは斷じられないと私は思ふのである。

なほ、憶良と藤原朝臣八束並に河邊朝臣東人とは、どういふ關係の間柄であつたかは、私には分からないが、この憶良の歌が代匠記、古義等の說の如く天平五年（憶良七十四歳）の作とすると、この天平五年には、右の二人は未だ年も若く、地位も未だ高くなかつた筈である。しかし二人ともその作歌が遺つて居り、藤原朝臣八束は八首、河邊朝臣東人のは一首萬葉集に載つてゐる。いまその各一首を參考に擧げて置く。この憶良の歌の作られたと推定される天平五年に近いものを擧げると、藤原朝臣八束の天平五年の作に

待ちがてに吾がする月は妹が著る三笠の山に隱りてありけり（卷六、九八七）

があり、憶良のこの歌九七八の直ぐ後に載つてゐる。また、ただ一首のみの河邊朝臣東人の歌

春雨のしくしく零るに高圓の山の櫻はいかにかあるらむ（卷八、一四四〇）

は、「萬葉集年表」では、天平年次未詳の項に入つてゐるが、その前後に所載の歌から推して私は天平四年あたりの春の歌ではないかと考へる次第である。

（昭和十二年九月）

三十九　山上憶良の作風

人麿と比較して

五味保義

憶良の作家としての價値については、様々な論が行はれて居るが憶良が集中の一存在であることを認めてゐる點では誰も共通である。これは憶良の强みであると思ふ。たゞその認め方に深淺があり差違があるから、さういふものを全部そのまま受け容れるわけにはゆかぬのである。

人麿は個人的であるのに對して、憶良は常に社會人としての意識の下に作歌した（窪田空穗氏）とか、人麿は感情の色調を表現したが、憶良はその輪廓をしか表し得なかつた（三井甲之氏）とか、かうした人麿との比較に於ても一通りもつともに思はれる說が出てゐる。しかしそれではまだ憶良の作家としての存在が私の心に浸透して來ないやうに思ふ。憶良ほど他の作家、就中人麿などと比較されやすい作家はないのであるが、その多くが存在をみとめようとするに急であつて、內面的な人麿との比較が少いやうである。

憶良は集中の他の作家のいづれにもまして現實に卽して作歌したといふ風な考へ方はその一例かと思ふ。「取材的に見てこそ、集中の特異なる存在として人麿と並稱し、山柿の山とみとめていいが、それは短歌

の本質に交渉を有する第一義的特色ではない」（中村憲吉氏）といふ批評は、憶良の現實性云々の問題に參考にされていい言葉と思ふ。思想的な取材法、常識的色彩のある作歌内容を目して現實的といふのはあたらない。渡唐といふ特殊環境に在つて、「いざ子ども早く日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ」（六三）までしかゆけなかつた憶良と、「印日野も行きすぎがてに思へれば心戀しき可古の島みゆ」（二五三）といふ風に浸透していつた人麿の現實性とは、かなりな相違がある。謂ふ意味は人麿をあげて憶良を否定し去るのでなく、そこに濃淡深淺おのづから品等があることをもつとはつきり認めておき度い意である。

但し憶良が人麿と違つたものを持つて居たことも亦事實である。それは憶良が意識して附け加へたものでないやうに思はれること、嘗て土屋氏が少しく觸れて居られるが、私も憶良が先天的に持つてゐた特色であり、後天的に附加せられたところも、憶良が積極的に人麿に反撥して得たものではないといふ氣がする。左千夫のやうに「人麿の高華雄渾に眩せず其の糟粕を斥け別に一生面を開發せるの抱負と氣慨」ありとし、「千歳の詩人をして愧死せしむるに足る」といふ程には思はない。唯憶良の人麿以外に有するところは憶良個人を中心として考へた時に認められるもので、人麿と相並び或は人麿を超越するやうな確實な地歩といふことは出來ないやうである。人麿に貧窮問答の作歌がなく、男子名は古日を戀ふる歌の如きがなくして、一方憶良には相聞歌が殘されて居らず、純自然詠がないために、人麿との比較に於て憶良の獨自性を認めようとしがちであるが、そこは高い處より見てもつとはつきり品隲を爲す可きであらうか。右の中村氏の言葉はここにも參考になる。その例歌としては憶良の「玉かぎる髣髴（ほのか）に見えて別れなばもとなや戀ひむ逢ふ時までは」（一五二六）と云ふのと、人麿の「もみぢばの散りぬるなべに玉づさの使を見れば

逢ひし日念ほゆ」（二〇九）を擧げて置く。

憶良の作品は素材的であるため、又作歌動機が人に示すといふことに在つた作品が多いため、讀者が自身の氣持をその作品に補つて味ひ易いと思ふ。それは程度の問題であるが、人麿、旅人の歌などとは稍々趣が違ふ。その一つの例として、憶良の作を素材的に二分して、妻子に對する情を詠んだものは渾一化成し、然らざるものは觀念的である（島木赤彦氏）といふやうな批評がある。これは評者の好惡が現はに出て居るのであつて憶良の歌は、長所は長所として終始存在し、短所は短所として終始したのであつて、素材がその優劣を定めては居ない。又晩年の出來のいい作でも仔細に之を見れば、その表現に憶良らしい粗さが眼に著くのである。「鳥翔なす在り通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ」（一四五）といふ歌の表現と「布施置きて吾は乞ひ禱む欺かず直に率去きて天路知らしめ」（九〇六）の表現とは全然違つたものではない。唯この二つの間に進步の跡が見られる所は注意していいのだと思ふ。

憶良の初期の作品が逸せられたのではないかといふ期待の心持は世上屢々見られるのであるが、これは憶良にもつと違つたものを求めようとする心持であつて、前述の評者が自己の主觀を憶良の作品の上に加へて味ひ易いのと同じ心理であらう。然し現在殘つて居る憶良の作品から考へると、その作歌意欲がかなり平坦であるのだから、若し初期の歌が存在したとしても、さしたる變化はあるまいと思ふ。殊に東宮に侍して京に在つたのは筑紫に行かぬ前で、此は初期といつてもいいが、その頃類聚歌林を編んだらしいのであるから、さうした集錄を仕事として居た頃に、憶良の現在の作風よりもつと熱のあり、變化のあるものがあつたやうにも思はれない。此は憶良の初期の歌が逸せられたといふ想像と同じやうに穿ち過ぎた考

へではあらうが。

憶良の作風に於ては出來のいいものに於て感ぜられる、一首全體から來る眞率な力、粗い生地のままに現はされて居る作者の性格などやはり獨自であると思ふ。又所謂手腕も下凡ではない。さうして作者個人としての進歩が認められるのも見逃せない。つまりは歌がひどく好きであつたことが何處かに一存在としての値打を生ぜしめたのであらう。ただ作歌の「仕事」では人に劣らぬが、現實に滲透する力を缺いた。作品の値打は、「仕事」の分量では補ふことが出來ないし、間接的な態度は素材の異色を以て補ふことが出來ぬ。

在來憶良は旅人の作歌を刺戟した指導者の如くに考へられて居り、それは恐らく當つて居るのであらうが、作品自身の持つ力に於ては旅人の方が一歩深く徹して居たのではなからうか。憶良は生前それを認め得なかつたかも知れない。

閲歴と思想と

落合京太郎

憶良は大寶元年正月に遣唐使の一行に加へられ、少錄にせられた。位は无位であつた。遣唐使の一行は最初、同年に出發したが風浪に妨げられたために翌大寶二年六月乙丑に筑紫より出發した。唐國より歸朝したのは翌々年の慶雲元年秋七月甲申朔で、これは筑紫に歸來した月日であらう。遣唐使の粟田朝臣眞人が拜朝したのは同年冬十月辛酉のことである。「慶雲二年八月戊午授二遣唐使粟田朝臣眞人從三位一。其使下人等。進レ位賜レ物各有レ差。」とあるから、この時憶良も亦賞に預つたことと想はれる。越えて和銅七年春

正月甲子には正六位下から從五位下に敍せられ、靈龜二年夏四月壬申には伯耆守とせられた。其後養老五年正月庚午には詔を受けて東宮に侍せしめらるることとなつたから、此時は既に伯耆から歸京して居たのであらう。以上は續日本紀の記事によつて明かである。「久方の天漢瀨(あまのかはせ)に船泛けて今夜か君が我許(わがり)來まさむ」(一五一九)の左註に依れば、神龜元年七月七日にはなほ在京して居たことが窺はれる。八八〇乃至八八二の敢布私懷歌三首の左註と、八八〇の「天ざかる鄙に五年」よりして憶良の筑紫に筑前守として赴任したのを神龜三年中とすること、通說の言ふが如くであらう。憶良が筑紫より京に歸つた時期を代匠記が天平三年十二月と推定して居ることは九月號で述べた如くである。さうして憶良が天平五年に齡七十四歲であつたことは彼の沈痾自哀文に記載する所であるから、これから逆算すれば上述の境涯の夫々に在つた時の憶良の年齡を算出することが出來る。以上の閱歷に於て見る如く、憶良は當時の文化人であり、海外文化の理解者として重きを置かれた官吏であつたといふことになる。憶良に子供の少くなかつたことは八七九、八九九等の歌によつて知られるのであるが、その跡は明かでない。續紀の神護慶雲元年八月癸巳の記事に「授二无正六位山上ノ朝臣船主從五位下一」、同二年六月壬辰の記事に「右京人從五位上山上ノ臣船主等十人賜二姓ヲ朝臣一」とある。この山上ノ朝臣は恐らくは憶良の一族であらうか。

　憶良の作品の評價に就いては五味氏がその概略に就て述べられたが、私も大體その說に贊成したい。憶良の作品に對して好意的な評價を試みるものも、その評價の態度は人麿に對する場合などとかなりに異るのではあるまいか。人麿の作品などに於ては作者の人間的な匂ひといふものから切り離して、作品を作者から遊離せしめて鑑賞することが出來る。然るに憶良の作品などになると作品自體に醇化しきれない人間

的臭味が附隨して居て、そのために作品よりも不完全な作品によつて示唆された作者の人間に對して何か同情を寄せるといふ結果になるのではあるまいか。此は作者として必ずしも名譽でないと共に、批評者の側でも、作者の人間に對する同情を直ちに作品の優秀と同視するの誤に陷り易いのではなからうか。そして憶良の場合には作品の素材の特異性——少くとも目新しさが、その評價の上に餘程有利に影響してゐることも見逃せぬのであらう。けれども有體に言へば憶良の作品はさう高く評價せらるべきものではないと思はれる。思想的な題材を扱つた歌が憶良の意識的製作に出でたものか否かについては疑問があらうが、私はやはり憶良の作品を通觀すると、さういふ意圖を認めていいのではないかと思ふ。唯その意圖が成功しなかつたことは今迄の本研究に於て說かれた如くであり、思想自體も平俗で教訓詩的な匂ひさへ作つて居ると言へるのであらう。思想を抒情詩の世界に取入れると云ふことは、概論的な問題としては色々言へるのであらうが、實踐となれば甚だ困難な問題であらう。「詩人が政治的活動を欲するならば彼は直ちに身を黨派に屬せしむることを要する、然も一度これを爲すや彼は詩人としては終焉するのである。卽ち彼はその自由なる精神と捉はるることなき慧眼とに別れを告げ、狹量と盲目的憎惡との帽子を眼深くかむらざるを得ないのである」（ゲーテ）。思想を抒情詩化しようとする試みも、時に「自由なる精神と慧眼」を失ひ易いのではあるまいか。

備忘小言

柴生田稔

正確に憶良の作と認められる最初のものは慶雲元年七月歸朝以前に唐に於て出來た「いざ子どもはやく

大和へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ」（六三）である。それ以前に持統四年紀伊國行幸の時、川島皇子の御歌「白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の歷ぬらむ」（三四）を別傳によつて憶良の作とし、製作年次は變らないものとすれば、天平五年七十四歳の憶良は此年既に三十一歳であるから、作歌があつても不自然ではない。さうして人麿より恐らく相當の年長者として、持統三年作品初出の人麿と略同時に歌人として出發したといふことになる。然しこの「白浪の」の一首はやはり川島皇子の御作と考へるべきであらう。

類聚歌林の成立は大寶元年以後であると推定されるが、更に憶良の歸朝後の編纂と考へていいのであらう。類聚歌林が支那の詩書等の體裁に倣つたものであることも從來說かれて居るが、歸朝後の憶良がさういふ體裁によつて自國の歌を分類編纂するに至つた氣持はいろいろ興味を惹くものがある。だが歸朝後果して何時頃の編纂かといふことは決定出來ないのだから、これは勿論想像上のものに過ぎない。又この歸朝後神龜天平の、憶良が多くの作品を殘して居る時期に至るまでの約二十年間は、實際に製作がなかつたものか、或は萬葉集に傳はらなかつたものか、さういふ點も興味のある且つ重要な問題であるが、それも結局想像の域を出ることが出來ぬであらう。ただ養老八年（年表によれば養老七年の誤）七月七日應令の、及び神龜元年七月七日の夜左大臣家七夕の歌二首（一五一八・一五一九）があることは、稍〻九州赴任以前の憶良の歌人生活を考へさせるのである。また萬葉集の卷一にすでに一首なりとも作品が採錄されてゐることは、歌人としての憶良が相當先進者と認められてゐることを示すものとも思はれ、此點は旅人・赤人等とはいささか趣を異にするやうに思はれる。

憶良の作歌が人麿や記紀歌謠などの影響を受けて居る點については、前月號以前にもすでに指摘された通りであるが、叉見方を變へるとその間に憶良はいろいろと製作に工夫を試みて居るとも言へる。記紀歌謠からの攝取などは單に影響といふよりはむしろこの新工夫の現れと見るべきかも知れない。卽ち人麿からの影響などとは少し性質が違ふやうにも考へられる。貧窮問答の長歌（八九二）が問と答の二段に分れ、令反惑情歌が三段に分れて居て人麿の連續的な長歌とは性質を異にし、記紀歌謠の復興の如き觀がある點はすでに五十嵐力氏等によつて說かれて居るが、これなども憶良の意識的な試みと考へられる。卷八に秋の野の花を詠める歌二首（一五三七・一五三八）といふのは、短歌と旋頭歌と連作の形になつて居て其一、其二と記してある點、これも五十嵐氏の所說の如く憶良の試みの一つと認められる。熊凝の爲に志を述ぶる歌に和する六首（八八六―八九一）と云ふ一聯は、結句が揃つて「一云」の別句を持つて居るが、これも佛足石歌體と見る說は俄かに從ひ難いとしても、兎に角この場合の「一云」は偶然の異傳などではなく、憶良の何等かの試みのやうに思はれる。かういふ具合に形式的に憶良の新開拓を意圖したと思はれる點はなかなか多い。なほ稍々性質を異にするが、熊凝に代つて製作したり、或は志賀の白水郞に代つて製作したと傳へられたり（三八六〇―三八六九）、旅人に代つて挽歌をこしらへたと考へられる（日本挽歌）、さういふ樣式なども憶良の一つの試みと言へる。七夕の歌なども人麿歌集との關係などが問題になるが、やはり憶良らしい材料だといふ氣がする。唯、かういふ憶良の新工夫といふものは何か外延的で、本質的な必然性がなく、純粹の作歌衝動に由來するものではないやうに思はれる點が憶良の弱味ではあるまいか。

　內容についても同樣に考へられる。憶良の思想と云ふ問題が學者によつていろいろ說かれて居るが、そ

の佛教思想、儒教思想などといふものが何處まで眞の意味の思想として考へ得るであらうか。先に「布施置きて吾は乞ひ禱むあざむかず直に率去きて天路しらしめ」（九〇六）の天路は佛說の天をさすか、我國固有の天の觀念であるかといふことが問題となつた。又「士やも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして」（九七八）に於ける名といふのも儒教思想と我國本來の名を惜むといふ觀念との關係が問題になるであらう。さうして結局憶良に於ける佛教思想や儒教思想といふものは彼の學問的附加物であり、知的裝飾であつて、思索の鍛錬を經た後の一つの思想系統といふやうなものとは考へられず、外來の新奇の思想と自然傳統の國內的觀念とが雜然と混淆して居るやうに思はれる。從來憶良の思想を論じて何か憶良を離れるやうな感じがあるのはこの點に認識が不足してゐるためではなからうか。

だがそれにも關らず憶良の作品には特殊の生活感情の匂ひが確かに存在する。詩人としての素質は結局赤彥の「神經が麁大であつて、多力の割合に秀作をなし得ない素質を持つてゐたとも思はれる」といふ批評が當はまるかと思はれ、聲調に餘韻を缺き、乾燥して居るが、それで居て一個の肉聲・生氣を傳へ得て居る。これは何處から來て居るか。時代や社會の問題も漢文學の影響もそこに關聯させて考へるべきかと思ふ。

落合氏の言ふやうに憶良の作品は、憶良の人間を離れて考へられない。その點は萬葉集初期の作品と全く類を異にし、人麿とも亦性質が違つて居る。これはむしろ旅人と共通する所以であり、又現在の吾々と共通點を持つものだと言つてもいい。憶良の作品には何處か人間苦、世間苦の匂ひがある。旅人に比較すれば旅人が趣味的に洗練され、貴族的であるに反して、憶良は俗人的であり、粗野であり、時に卑陋の臭

味を免れない。漢文學の影響といつても異國的な新鮮な感じはなく何かむさくるしい感じがある。思想に興味を持ちながら理智的な聰明な感じはない。外面的であり、興味的でもある。それで居て結局何處かに人間の臭ひを生かして居る。吾々が惹かれるのはつまり其處に歸着するのであらうか。

記紀よりの攝取

樋口賢治

憶良の作品の初見を土屋氏の萬葉集年表に從ひ、假に大寶元年としても、更に三年を隔てる慶雲元年作「在大唐時憶本郷作歌」以後、養老七年作「七夕歌」十二首を含めて神龜に至る二十年間に於ける彼の作品は極めて寥々たるものである。卽ち現存する彼の作歌の大部分は神龜五年以後天平五年病歿に至る六年間に殆ど盡されて居ると言つてよいのである。この事實は特殊なる卷五成立の問題や、延いては萬葉集編纂當時の事情と關聯して考ふべきであつても、一面又この期間に於ける憶良個人の歌人としての活動を示して居るやうに思へる。嘗て土屋氏が、この時代の作者の作品初見の頃と習練の高度に達する時期とを、殆ど同時と見做してよいことを言はれて居るが、憶良の場合に於ても、この慶雲元年以後の空隙を埋むる他の多くの作品の存在が當然豫想される。然し乍ら、此等豫想された諸作が歌人憶良に、更に加へるものがあつたかどうかは極めて疑はしく、例へば

いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ（卷一、六三、慶雲元年）

天漢(あまのがは)相向き立ちて吾が戀ひし君來ますなり紐解き設(ま)けな（卷八、一五一八、養老七年）

の二首の間には二十年を隔てた作風としての變化進展の跡といふべきものは見られない。偶々一空隙を界

として收錄された二作といふに止まるのみである。殊に後者は令に應じて作るといふ作歌動機や、行事化されんとする七夕傳說の素材そのものから言つて、前者との比較を求めるのは當を得て居ないかも知れないが、何れにしてもこの二首の間に、認むべき態度の變化のないこと以上の如くであつて、これが彼をして神龜以後の作家として人麿等と實質的に時代を異にせしむる所以であらう。然し乍ら、今假に恣いままなる臆測を加へるならば、神龜以後彼が筑前守として下つた太宰府に於て、旅人、滿誓、小野老其他の交游の中に在つて發表された「令反惑情歌」以下の作品には、少くとも彼の意識的なる新境地開拓の努力が伴つた筈である。思想的な素材といひ、表現形式といひ、やはり憶良獨自の角度を持つた創作態度が認められる。斯かる憶良の作風は太宰府に於ける交游の刺戟によつて得たるものとは必ずしも言ひ難く、やはり彼に先行する人麿以下の影響と彼自身の作家としての稟質に由るものであらう。

憶良の作品に記紀歌謠の影響の多いことは、從來も屢々注意されて來たが、遡つて當時の事情を見るに、彼が唐より歸朝して十年目、和銅五年正月に古事記が太安麻呂によつて奏上されたのを始として、翌六年には諸國より令に應じて風土記撰進のことがあり、更に五年を隔てる養老四年には日本書紀三十卷の奏上がある。蓋し此年あたり憶良は伯耆國より歸京せるものと思はれるが、この修史編纂の進行によつて、從來傳誦され來つた歌謠に對する關心の如きも、特に喚起されたであらうことが想像される。憶良の手によつて爲された類聚歌林の編纂の如きも、かかる氣運の中に於て行はれたと見る時、彼と記紀歌謠との關係が他の諸作家に比して一段と密接なことも偶然ではないやうに思はれる。

憶良がその作品に記紀歌謠を如何なる程度に取入れて居るかを少しく見て行きたい。彼の場合に於ては

記紀歌謠が作品に滲透するといふよりは、寧ろ積極的に意識的なる攝取を試みて居るといふ方が當つて居るやうに思ふ。すでに柴生田氏が貧窮問答歌その他の例を擧げて、その形式的方面、長歌の段落、構成等に關して言及されて居るから、此處では單に措辭、語句の類似、同語使用等について例を拾ふに止める。

先づ同語使用の例としては次の如きものが擧げられる。

1 いざ子等はやく日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ（卷一、六三）

いざ子ども　野蒜摘みに　蒜摘みに　わが行く道の　香ぐはし　花橘を云々（古事記　應神天皇）

いざ吾君　振熊が痛手負はずは　鳰鳥の　淡海の海に　潜きせなわ（古事記　忍熊王）

2 天飛ぶや鳥にもがもや京まで送り申して飛び歸るもの（卷五、八七六）

天飛ぶ　鳥も使ぞ　鶴が音の聞えむ時は　吾が名問はさね（古事記　輕太子）

(1)「いざ子等」について黑人の作のあることはすでに注意されて居り再説の要がないが、この外書紀に、初句「いざ吾君」と用ゐた二例を見出すことが出來る。(2)の初句に「天飛ぶ」と來る例は人麿にもあるが（二〇七）、それは枕詞として用ゐられて居て、憶良のこの場合とは餘程違ふやうである。

3 斯くのみや息衝き居らむあらたまの來歴往く年の限知らずて（卷五、八八一）

鳰鳥の　潜き息衝き　級だゆふ　佐々那美道を（古事記　應神天皇）

あら玉の　年が來經れば　あら玉の　月は來經往く（古事記　美夜受比賣）

4 少女等が　さなす板戸を　押し開き　い辿りよりて　眞玉手の　玉手さし交へ　さ寢し夜の　幾許もあらねば（卷五、八〇四）

孃子の　寢すや板戸を　押そぶらひ　我が立たせれば　引こづらひ　我が立たせれば　（古事記　八千矛の神）

沫雪の　弱る胸を　そ叩き　叩きまながり　眞玉手　玉手差し纏き　股長に　寢は宿さむを　（古事記　沼河日賣）

5　しかとあらぬ　鬚かき撫でて　吾を除きて　人は在らじと　（卷五、八九二）

吾はもよ　女にしあれば　汝を除て　男は無し　汝を除て　夫は無し　（古事記　須勢理比賣）

6　布肩衣　有りのことごと　服襲へども　（卷五、八九二）

我が率宿し　妹は忘れじ　世のことごとに　（古事記　火遠理命）

以上の中(5)の「吾を除きて人は在らじと」は代匠記も古義も、孟子の「如欲ㇾ平二治天下一當二今之世一舍ㇾ我其誰也」を引いて居るが、私は寧ろ前出の須勢理比賣の命の作を注意したい。單に詞句の類似相通とのみ言へないものは、此外にも「我が嘆く息嘯の風に」（七九九）が「猪鹿多有云々呼吸氣息似朝霧」（日本書紀雄略天皇卷）「嘯之時迅風忽起」（神代紀）「吹棄氣吹之狹霧」（古事記）とか、「父母は枕の方に　妻子どもは足の方に」（八九二）が「乃匍匐御枕方匍匐御足方而哭時」（古事記）「則匍匐頭邊、匍匐脚邊而哭泣流涕」（日本書紀）等を擧げることが出來る。又詞句連續の調子の相通、表現手法といふ風に細かく言へば、擧げ得る例は多いやうに思はれる。記紀の外に歌經標式に天武天皇作として收錄してある「孃子ども　孃子さびすも（琴歌譜には、孃子さびすと）　唐玉を　手本に纏きて　孃子さびすも」に對しては、直ちに憶良の「少女等が　少女さびすと　唐玉を　手本に纏かし」（八〇四）を擧げることが出來るが、歌經標式そのものを疑へばこれ

は成立しなくなる。又巻九の七夕歌一首幷短歌（一七六四・一七六五）は作者に憶良説と家持説があり、年表ではこれを憶良作と推定して居るが、この長歌一首の措辭構成は人麿作或は記紀歌謠を模してゐることは明瞭である。

ひさかたの　天の河原に　上つ瀬に　珠橋渡し　下つ瀬に　船浮け居ゑ　雨降りて　風吹かずとも　風吹きて　雨降らずとも　裳濕らさず　息まず來ませと　玉橋わたす（巻九、一七六四）

隱國の　泊瀬の川の　上つ瀬に　齋杭を打ち　下つ瀬に　眞杭を打ち　齋杭には　鏡を懸け　眞杭には　眞玉を懸け（古事記　木梨輕太子）

飛ぶ鳥の　明日香の河の　上つ瀬に　石橋渡し　下つ瀬に　打橋渡す　石橋に　生ひ靡ける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひををれる　川藻もぞ　枯るれば生ゆる（巻二、一九六　人麿）

この例は外に巻十三（三三三〇）にも見ることが出來る。更に此種の例を拾ふならば、天平元年七月七日太宰府に於ける彼の作（一五二〇）と次の巻十三（三二九九）との關係も考察の中に入れて然るべきであらうか。

いなうしろ　河に向き立ち　思ふそら　安からなくに　嘆くそら　安からなくに　青浪に　望は絶えぬ　白雲に　涙は盡きぬ　斯くのみや　氣衝き居らむ　斯くのみや　戀ひつつあらむ　さ丹塗の　小船もがも　玉纏の　眞かいもがも（巻八、一五二〇）

見渡しに　妹らは立たし　この方に　吾は立ちて　思ふそら　安からなくに　嘆くそら　安からなくに　さ丹塗の　小舟もがも　玉纏の　小楫もがも　榜ぎ渡りつつも　あひ語らめを（巻十三、三

二九九)

卷十三と記紀歌謠との關係、更に右二作の前後、交渉等については別に吟味考證さるべきで俄かに決定し難い。此處では單に二者を對比するに止める。

記紀の歌謠の題材が殆ど戀愛、戰鬪、酒宴、哀傷の如き人事に限られ、稀に自然を對象としたものも、傳說等の爲に人事的なものに變質されて居ることは、等しく人の言ふところであるが、憶良の外延的傾向を持つ歌風が、上述の形式的方面を別として、かかる記紀の內容とどの程度に結びつけて考へらるべきだらうか、或はそこまで立入つて考へることは表面的な臆測になり過ぎるかも知れない。

(昭和十二年十月)

四十　旅人・憶良周圍の作者

交流圏内の人々

落合京太郎

旅人の太宰帥としての赴任が神龜二三年頃であり、大納言として寧樂に歸來したのが、天平三年二月下旬（陽曆）頃であること、憶良の筑前守としての赴任が神龜三年頃で、上京が天平三年十二月頃であることとは既に述べた。この期間は公人として二人が務を共にしたのみでなく、同時に作家として二人が萬葉集所載の各自の作品の大部分を成した時期である。環境に順應し反逆するのは作家の常である。筑紫にあつて京を懷ひ時運を歎じつつ居た二人が、後に殘した作品の大部分をこの筑紫で成したことは、やはり我々に一種の感慨を起さしめる。

相前後した二人の赴任が、殊に旅人は筑紫に於ける長官である關係からして、周圍の者の作歌欲の刺戟となつたことは言ふまでもない。そして、文化人として邊境にあつた周圍の官人たちが、二人の刺戟を受容する素質と環境とを有してゐたことも亦否めないであらう。萬葉集所載の旅人を中心とした筑紫に於ける幾多の作が、この事情を證明してゐると思はれる。

旅人に先んじて筑紫に居つたことの確實な一人に沙彌滿誓がある。滿誓が筑紫觀世音寺造營のために筑紫に下つたのは養老七年二月のことであり、同人は僧となる以前美濃守、尾張守等に歴任したことがあるので、筑紫で逢ふ以前より旅人とは交りがあつた筈である。造觀世音寺別當が筑紫に於ける官人に比して、官制上如何なる地位にあつたか審にしないが、梅花宴の歌の所載順に從へば、國守並に扱はれてゐることが窺はれる。旅人と親交の深かつたことは、兩者の贈答歌によつても明かである。旅人の「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（七九三）の題詞の中「但依兩君大助」の「兩君」は先に問題になつたが、その一人を五味氏の言ふが如く憶良と解するならば、他の一人は或は滿誓であると言へるかも知れない。

天平元年二月には、旅人は同僚の大貳丹比縣守を送別してゐる。「君がため釀みし待酒やすの野に獨飮まむ友なしにして」（五五五）の題詞と續紀の記事とによつて知られる。丹比縣守は養老年間に遣唐使の役目を果した閱歴の持主である。縣守に次いでの大貳は「紀卿」であることが、梅花宴の歌の中最初の「正月立ち春の來らばかくしこそ梅を折りつつ樂しき竟へめ」（八一五）の脚注によつて知られる。「紀卿」は多くの書がその傳記を未詳としてゐるやうであるが、懷風藻に太宰大貳正四位下紀朝臣男（雄）人の作として三首を採錄して居り、續紀に養老五年正月庚午に、東宮に侍せしめられた一人として正五位上紀朝臣男人といふのがあるが、恐らくはこの人に當るのではなからうか。

旅人の下僚として居たものに、第一に小野老がある。老は旅人の帥當時は小貳であつたが、續紀によれば天平九年六月卒する時には大貳となつてゐるから、旅人の上京の後なほ數年筑紫にゐて、大貳に昇進し

たものであらう。なほ言へば續紀に「天平三年六月庚寅、正五位下巨勢朝臣眞人爲二太宰小貳一」とあるから、老が大貳に昇進したのは此時であらう。「あをによし寧樂の京は咲く花のにほふがごとく今さかりなり」（三二八）は、巻三所載の體裁より推測すれば、筑紫にあつて寧樂に思ひを馳せた歌であらう。年表は旅人太宰府在任中の作と推定してゐる。更に下僚としては、一族の大伴百代・大伴四綱・大伴三依等があり、一族以外のものに葛井大成・山口若麻呂・麻田陽春等があり、何れも二首以上の作を採錄せられてゐる。麻田陽春は旅人に對する送別の二首（五六九・五七〇）の外に大伴君熊凝の歌二首（八八四・八八五）があり、憶良がこれに和して八八六乃至八九一の六首を作つてゐる點より見れば、憶良とも亦親交があつたのであらう。懐風藻にも陽春の作として一首を載せられてゐる。

筑紫の旅人に遠く歌を以て呼びかけたものに、藤原房前、吉田宜、丹生女王等がある。梧桐日本琴一面の授受に就いて、旅人と房前の間に取交された八一〇乃至八一二の內面的考察に就いては、早く土屋氏がアララギに於て說をなしてゐる。房前の作は集中に九首あり、懐風藻にも三首採錄されてゐる。

吉田宜の作は集中に四首あり、この四首（八六四乃至八六七）が旅人に宛てたものか憶良に宛てたものかは疑がないではないが、その題詞を熟讀して見ると矢張旅人に宛てたものと見て宜いのであらう。宜は懐風藻にも二首採錄せられてゐる。

筑紫在任中の旅人を訪うたものに石上堅魚、葛井廣成がある。前者は一首、後者は二首が集中に採錄せられてゐる。廣成は先に擧げた葛井大成の一族であらう。懐風藻には廣成の作として二首を擧げてゐる。

憶良の好去好來歌一首反歌二首（八九四―八九六）の左註によれば、これは天平五年三月遺唐使に獻じたこ

とが知られ、續紀によればこの時の遣唐大使は多治比眞人廣成であることが知られるから、憶良が同人と交游のあつたことも明らかである。廣成は先に擧げた丹比縣守と父（多治比眞人島）を同じくし、恐らくは縣守の弟であらう。廣成も萬葉集には所載の作歌が無いが、懷風藻には三首を採錄せられてゐる。

養老五年正月庚午に憶良と同時に東宮に侍せしめられた者のなかには、先に擧げた紀男人の外に、從五位上山田史三方、從五位下紀朝臣清人、正六位上越智直廣江、正七位上土師宿禰百村、從七位下鹽家連吉麻呂、刀利宣令等がある。右の內山田史三方（三首）、越智直廣江（一首）、鹽家連吉麻呂（一首）、刀利宣令（二首）、は何れも懷風藻にその作品が收錄せられて居る。また刀利宣令は二首（一四七〇・三一三）、紀清人は一首（三九二三）を夫々萬葉集に止めて居る。山田史三方が萬葉集の三方沙彌であることは、「持統六年冬十月壬戌朔壬申、授二山田史御形務廣肆一、前爲二沙門一、學二問新羅一」（持統紀）とあるのと、養老六年四月庚寅の從五位上山田史御方について「朕念、御方負二笈遠方一、遊二學蕃國一、歸朝之後、傳二授生徒一」云々とあるのに徵してかなり明かであると思ふ。三方沙彌は萬葉集に六首採錄せられて居る。以上の一群の人々とも憶良は公的乃至私的に接觸があつたと推して宜いのであらう。なほ右にあげた正七位上土師百村は、梅花宴歌中の八二五の作者、小監土氏百村に當る人ではあるまいか。

續紀、懷風藻等のことに及んだのは、旅人憶良の周圍の文化の程度殊に周圍の人々も亦漢詩文に通達して居る事を實證し度かつたからである。旅人の一首が懷風藻に載錄せられてゐる事に就いては既述した。

旅人が歸京してからその身近に居たものに金明軍がある。明軍の歌は集中八首採錄せられてゐる。一族としては、子の家持、妹の大伴坂上郎女が居た。家持が旅人と共に筑紫に居たことは、天平二年六月に旅

人の庶弟稻公及び姪胡麻呂の上京を送る際の歌（五六六・五六七）の左註に「ここに大監大伴宿禰百代小典山口忌寸若麻呂及び卿の男家持等驛使を相送りて」云々とあるによつて知られる。又坂上郎女が筑紫にあつたことは同人の幾つかの作品によつて明かである。家持は當時少年で作歌がなかつたらしいが、坂上郎女は既に早くから作歌が始まつて居り、「年表」によれば筑紫にあつての作と推せられるものに「黑髮に白髮まじり老ゆるまでかかる戀にはいまだ逢はなくに」（五六三）「山菅の實ならぬことを我に依せ言はれし君は誰とか宿らむ」（五六四）等があり、その他一四三二、一四三三等がある。旅人憶良及びその周圍の人達の作品が、その製作の年次場所の比較的明かな形に於て採錄せられてゐることに就いても、坂上郎女が實際上何等か寄與をしてゐるやうにも推せられるし、その閱歷や家持との交流等に就いても我々の興味を引く女性であるが、その活動の最盛期は旅人憶良よりも後れ、寧ろ家持と同時代のものとして論ずべきものと思はれるので、此處ではその作品につき論及しないことにする。

旅人を中心として

伊澤平喜

旅人の周圍には憶良を別として、どういふ人々がゐたか。滿誓沙彌は旅人の太宰府在任を通じての友であつた。歸京後の旅人と贈答した歌が二首宛ある。「ぬばたまの黑髮變り白髮ても痛き戀には逢ふ時ありけり」（五七三）は滿誓の一首である。交情の深きを思はせるものがある。三三六、三五一の兩首の格調の如きは彼の大ぶりな人柄を感じさせる。小野朝臣老は旅人の下僚であつた。「時つ風吹くべくなりぬ香椎潟潮干の浦に玉藻苅りてな」（九五八）は旅人に從ひ遊んだ時の歌である。「あをによし寧樂の京師（みやこ）は咲く花

の薫ふが如く今さかりなり」（三二八）は此人の作である。この歌は筑紫に居ての作といふ點で、「今さかりなり」の直截な敍法が働いてゐる。他に一首を留めてゐるだけであるが、相當な力量を思はせる。藤原房前は不比等の男で、天平九年五十七で薨じたから、旅人よりはずつと若かつた。旅人との間に二回の贈答がある。詩文を好くする點でも旅人の好友であつたやうである。その上、巻七の一二一八の歌以下七首藤原卿作とあるは此人と認められてゐる。「若の浦に白波立ちて沖つ風寒き暮は大和し念ほゆ」（一二一九）の如き羈旅の作である。これを以て見ても歌を愛した人であらう。同じく名門の而も年下の貴公子、殊に同趣味である。旅人の此人に對する心やりが思はれる。大伴四綱、同百代は同族で下僚である。旅人を太宰府に迎へて三三〇の歌をなした四綱は九七一の作を以て旅人の歸京を送つた。百代には戀歌の外に五六六の如き歌がある。麻田陽春もやはり下僚であつた。旅人を餞する歌が二首ある。「韓人の衣染むとふ紫の心に染みて思ほゆるかも」（五六九）と五七〇である。如何にも理智的な感を受ける。技巧で行かうとするところが見える。此人は大伴熊凝歌二首（八八四・八八五）を作つてゐる。旅次に死んだ熊凝になりかはつて作歌したのである。憶良も共に同じことをしてゐる。此人は憶良と共通性があるやうに思はれる。吉田宜は旅人の舊友であらう。旅人より贈つた梅花の歌、松浦河に遊ぶ歌を見てそれぞれに歌を和し、更に二首の歌を附してゐる。「君が行けながくなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり」（八六七）。宜は諸學に通じてをり圖書頭兼典藥頭をも勤めた。その四首の歌をみるに、平明卽興的なのが特色であらう。思ふに此人にとつては歌は餘技であつたらう。けれども旅人にとつては雅友の主なる一人であつたらう。葛井大成も下僚といふべきであらう。四首の歌を留めてゐるが、歌を好んだやうに思はれる。金明軍は旅人の資人

であつた。旅人薨後作中の「斯くのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも」（四五五）は旅人の末期に哀調を添へる歌である。

其他に下僚で二首以上の作を留める人が五人あるが省略する。なほ注意すべきものとして旅人に歌を贈つた丹生女王の如きがあり、又旅人の妹坂上郎女の如きもあるが省略する。斯る旅人を繞る幾多の歌人の中太宰府に在つた人々は憶良ともいくばくかの交渉を有したに違ひない。

人に答へて「やすみししわが大王の食國（をすくに）は大和も此處も同じとぞ思ふ」（九五六）と詠んだものの、旅人は太宰府着任後幾何もなく妻を失つた悲哀を加へて、轉た寂寥に堪へなかつたであらう。この間にあつて彼を救つたものは卽ち歌であつた。そしてその作歌は周圍の人々との交際に刺戟されるものが多かつた。房前、宜等の在京の友人は旅人の空想を刺戟する仲間であつた。滿誓沙彌、小野老などは旅人と共にあつて屢々打とけて歌を語る仲間であつたらう。獨り憶良は友人として以上に、一面を見てのことであるが、競爭者として旅人の心裏を往來した人であらう。旅人の讃酒歌は取材的に見て憶良の向うを張つたといふ觀が濃厚である。下僚を主とする他の人々は陰に陽に旅人の作歌の機緣をもたらしてゐる。然し畢竟旅人は溫藉な氣質の中に自己中心の念をもつた、いい意味の個人主義人であつたことは、武田祐吉氏の說（萬葉集講座、大伴旅人）の如くであらう。從つて周圍を繞る人々が旅人に作歌熱を加へたことを認めると共に、他に侵されぬ獨特の歌風を持ち續けた事を幾多の歌によつて證し得ると思ふ。甚だ粗漏な論であるが召集を受けて匆々裡に之を草し了へた。

周圏内の歌人

扇畑忠雄

旅人と憶良とは殆ど時を等しくして邊疆筑紫にその任を受けた。旅人は太宰帥であり、憶良は筑前守であつた。兩人は九州に於ける在任の六、七年を公職上は勿論、作歌生活の上に極めて深い交渉を保ち、彼らの歌人的評價はこの間に質量ともに決定されたものと謂つてよい。兩人とも邊疆在任の寂寥と望鄕の情懷とを作歌することにその疏け口を見出したのではなかつたか。如是の實力ある二歌人の存在は必然的に彼らの周圍に追從の諸歌人を據らしめ、そこに筑紫歌壇なるものを現出せしめたと考へられる。兩人とも當時最高の文化知識人であり、外來文化の吸收理解者であつただけに、當然その指導的立場に立ち、一つの歌壇的雰圍氣が釀し成されたに違ひない。その圏內に聚つた歌人達はアマトウルとしての初心者も交へてゐたが、官位的に看て相當な高級者のみであり、又當然撰ばれた少數人でもあつた。例へば天平二年正月十三日旅人宅に於ける梅花の宴につらなつて作歌してゐる者には高位の諸官吏をはじめ、藥師、神司、陰陽師、筭師、僧侶のたぐひも見られる。勿論、帥たる旅人の設けた雅宴であるから出席者は限られてゐた筈だが、而も當時の作歌能力者の大多數はかかる階級的範疇より多く出でてゐないことも明かである。右の梅花の宴の三十二首はとにかく歌壇の一つの表現と見なされてよい。その序に「宜下賦二園梅一聊成中短詠上」とある如く、題詠でもあつた爲に、幾分の儀禮的要素も加つて作品は總じて類型の羅列にとどまつてゐるが、その周圏の空氣を識る上には以て好都合とすべきであらう。殊に天平二年正月といへば旅人の在任最後の年であり、旅人憶良の詠風は數年の接觸を經て或程度まで彼らに浸透してゐたと見なければなら

ない。その點に於いて兩人の作風の受用のされ方が暗示されよう。この作品に、題材の類型や配合趣味が多く見られ、作歌衝迫の稀薄を感ずるのはつまり雅宴の形式が唐風の模倣であり、風雅の社交的集會であつたが故にしても、更に旅人憶良の作風の末期的一面をエピゴーネンが知識的に攝取するに急であつたからではあるまいか。筑紫在任中の兩人の作品には宴、贈答、事故、追和の歌や代作など所謂風流に遊ぶといつた態勢が見られる。殊に旅人は神龜五年妻を喪ひ、榮職とはいへ晩年邊地に任を受けた事に對する內心悒々の悶情と望鄕の念が、彼の知識的欲求の滿足としての如是の傾向を驅り進めたかに思はれる。その投影は當然筑紫歌壇を一つの型に歛めたと言ひ得るだらう。

大伴百代（太宰大監）、大伴三依（豐後守）はいづれも梅花の宴に列し、その他にも數首の歌を殘してゐて相當の作歌經歷を持つてゐる如く見られるが、例へば百代の

戀ひ死なむ後は何せむ生ける日の爲こそ妹を見まく欲りすれ（卷四、五六〇）
念はぬを念ふといはば大野なる三笠の社の神し知らさむ（卷四、五六一）
暇無く人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも（卷四、五六二）

の三首と

戀ひ死なむ後は何せむ吾が命の生ける日にこそ見まく欲りすれ（卷十一、二五九二）
念はぬを思ふといはば眞鳥住む卯名手の社の神し知らさむ（卷十二、三一〇〇）
いとのきて薄き眉根をいたづらに搔かしめにつつ逢はぬ人かも（卷十二、二九〇三）

との對比に窺はれる百代の露骨な模倣はむしろ惡趣味とも言ふべく、又三依の

　　天地と共に久しく住まはむと念ひてありし家の庭はも（卷四、五七八）
　　吾妹子は常世の國に住みけらし昔見しより變若坐しにけり（卷四、六五〇）

と、「天地と共に終へむと念ひつつ」（一七六）「念ひてありし吾し悲しも」（一八三）や旅人の「昔見し象の小河を」（三一六・三三二）「また變若（をち）めやも」（三三一・八四七）「また變若（をち）ぬべし」（八四八）「常世」（四四六）の類句との關係にも三依の意識的な模倣が見られるのであつて、內容空疎のそしりを免れる事は出來ない。
右は類句、類歌の一面から彼らの沒個性的創作態度を看取しようとしたのであるが、その事はなほ

　　世の中を何に譬へむ朝びらき榜ぎ去にし船の跡なきごとし（卷三、三五一、滿誓）
　　世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（卷五、七九三、旅人）

の如く、滿誓が旅人と題材的に共通點を持つてゐることや資人金明軍が旅人の薨去に際して、「犬馬の慕心に勝へず感緒を申べて」作つた歌に、旅人・憶良や日並皇子尊宮舍人の歌よりの類句的影響が認められることにも就いて看られる。然し、滿誓は「養老七年二月丁酉。勅遣二僧滿誓於筑紫一。令レ造二觀世音寺一。」（續紀）の如く、旅人や憶良の赴任よりも先立つて筑紫に在り、作家としても相當の熟練者であつた。「世の中を」の歌にしても、思想的表現的に相通ずるものがあるが、旅人の作に比して一種色調を異にした特色を持つてゐる。「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ」（三三六）の歌にしても單なる概念的詠出に終つてしまはないで、具體的な實感を直接に表現してゐるところに彼の强みがある。梅花の宴の時の彼の作「青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし」（八二一）には趣味的傾向はあるにしても、その直截性の故に三十二首中やはり目立つてゐるのではあるまいか。「太宰帥大伴卿上レ京之

後」満誓が贈つた二首（五七二・五七三）にも眞情の吐露があり、旅人との淺からぬ交渉が見られる。金明軍も續紀養老五年三月の記事によつて知られる如く、資人として旅人に近侍してゐたと思はれる。叙上の如く、旅人の薨去を悲んで作つた彼の歌などは自ら努力して到達した歌風とは言へないが、その單純な表現には嫌味を覺えしめない。

その他、大伴四綱に、「月夜よし河音清けしいざここに行くも行かぬも遊びてゆかむ」（五七一）の作調があり、藤原房前に、神龜元年十月紀伊行幸從駕の作と思はれる卷七の七首（左註の藤原卿とあるのを代匠記に從つて房前となすのであるが之には尙疑問があらう。）があつて相當早くから作歌生活をつづけ、中央の歌風にも通じてゐた傾向が窺はれるが、而もなほ兩人ともに興味本位の作歌のある事は當時の筑紫歌壇の圈内に生活した者として免れがたい運命であつた。満誓その他の優秀歌人は在つたにしても、旅人憶良みづからの内に孕まれた末期的一面をたしかに受け繼いでゐた。かかる圈内にあつてみづからの個性に目覺め、みづからを生きることは或は困難なことであつたかも知れない。

旅人周圍の作家二三

鈴江幸太郎

藤原房前の歌十首（年表に據る）の中「龍の馬をあれは求めむあをによし奈良の都に來む人の爲に」（八〇八）「直に逢はず在らくも多く敷妙の枕離らずて夢にし見えむ」（八〇九）は、旅人の「龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて來むため」（八〇六）「現には逢ふよしも無しぬばたまの夜の夢にを繼ぎて見えこそ」（八〇七）に、「言問はぬ木にもありとも吾背子が手慣の御琴地に置かめやも」（八一二）は旅人の

「言問はぬ樹にはありとも麗しき君が手慣の琴にしあるべし」（八一一）に鸚鵡返しに答へた歌で云々する餘地もない。この殆ど何の工夫も加へず贈答の口眞似をした遺口は、前の二首一對と後の一對と酷似してゐるので作者名を記さぬ八〇八、八〇九を房前作と推定する一根據になると思はれる。右の三首を除く覊旅の歌七首について見ると、「若の浦に白浪立ちて沖つ風寒き暮は大和し念ほゆ」（一二一九）の四五句は志貴皇子作歌（六四）そのままであり、「妹がため玉を拾ふと紀の國の由良の岬にこの日暮らしつ」（一二二〇）は人麿歌集出の「妹がため菅の實採りに行きし吾山路にまどひこの日暮らしつ」（一二五〇）又齊明朝作者未詳の歌（一六六五）の一二句「妹がため吾玉拾ふ」等の影響を云ふことが出來、「紀の國の雜賀の浦に出で見れば海人の燈火浪の間ゆ見ゆ」（一一九四）の四五句は人麿の二五六の一本の歌「海人の釣船浪の上ゆ見ゆ」が想起せられる。かういふ重要な語句に現れた模倣乃至影響を見ると作家房前の影は非常に薄くなる。ただ「黑牛の海くれなゐ匂ふ百磯城の大宮人しあさりすらしも」（一二一八）の一二句位に特色が見られるのであるが、この時代の作家となると既に人麿等の影響の著しいことは一般であり、房前に於てもそれを攝取して整つた素直な歌調をなしてゐる力は認められるが、それ以上高きを求める歌人としての自覺苦勞が無かつたやうである。

この感は太宰府に於ける旅人身邊の作家等にも同樣であつて、憶良旅人に追蹤しての習練は自然ある水準に達し、相當に詠みこなす力量を持つた者の多かつたことは、梅花の宴の歌に一首を殘した人達又微官無名の作者（三八九一―三八九九）の歌に見ても知られるのであるが、滿誓は暫く措き比較的有力と見られる作者等にしても「あをによし寧樂の都は咲く花の匂ふが如く今さかりなり」（三二八、小野老）、「月夜よし河音

清けしいざここに行くも去かぬも遊びてゆかむ」（五七一、大伴四綱）等の數首を除けば殆ど常凡であつて、無名歌人といくらの差も見られないやうである。金明軍の旅人追慕の諸作は眞率で力の張つた所に異色が見えるが、これも仔細に見れば人麿等の影響を一歩も出てゐない。大體この作者達の歌柄は平明溫雅ではあるが迫力が無く個性に乏しい。これは同時代の歌風に通ずる所でもあるし、又梅花の宴七夕の集會等に作歌を趣味風流に傾けた事情等にも關聯するのであらうが、その中にあつて、超然と自己を持つてゐた憶良は兎に角、その雰圍氣をよき刺戟として歌境を進めた旅人は、矢張り器が大きかつたのである。さう言つてもこれ等の作家は又家持に影響を與へ、遠く僧良寛にも影響を與へてゐるのである。この作家群の中にあつて沙彌滿誓は餘程獨自のものを持つた一癖ある作家であらう。「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖く見ゆ」（三三六）は集中でも特異であり、率直明快に言つてゐて清新でもある。綿は女を譬へた等といふ註釋が出るほど珍らしく卑近な感情を取扱つてゐる。「世の中を何に譬へむ朝開漕ぎ去にし船の跡なきごとし」（三五一）も理智的な通俗に向ふ所はあつても新風であり、三句以下は鋭い直觀力を示してゐる。「眞十鏡見飽かぬ君に後れてや旦夕に寂びつつ居らむ」（五七二）も眞率で「寂びつつ」は用例のない句である。しかしこれと同時の歌「ぬばたまの黑髮變り白髮ても痛き戀には遇ふ時ありけり」（五七三）は明かに大伴坂上郎女の「黑髮に白髮交り老ゆるまで斯かる戀にはいまだ逢はなくに」（五六三）の模倣であるが、旅人の家人坂上郎女の歌を眞似て旅人に贈つてゐる事情は、戲れと見るべきでないとすれば、當時の作家が如何に容易に影響を受け、平然と類歌を作つたかといふ一つの證據となるであらう。「沙彌の霍公鳥の歌一首」と題詞のある「あしびきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常におもほゆ」（一四

六九）は常套無氣力で滿誓ではあるまいと思はれるが、五七三の例を見るとかういふ一面もあつたのかも知れない。三九一、三九三の二首は難解であるが獨自な表現といふことは考へられる。

滿誓覺書

藤森朋夫

太宰帥として赴任した旅人と、筑紫の地に於いて、歌道上に交游深かつたと思はれる滿誓は、作家としては如何なる人であつたらうか。彼は始め在俗時代の姓名を笠朝臣麻呂といつた。そしてこの時代の作品は集中には一首も見出されない。彼の作品は、沙彌滿誓として五首、笠沙彌として一首、總計六首で、凡て出家後の詠作である。しかもこれらに接する場合、縱令歌數は少くとも、その獨自の歌風が割合に浮出されて來るので印象は深い。

彼の傳記は、續日本紀によつてみると、慶雲三年美濃守となり初めて地方長官として一歩を踏み出した。靈龜二年には尾張守兼任、養老三年、按察使設置に當つては尾張・三河・信濃の三國を管理せしめられ、同四年右大辨になつた。翌五年太上天皇（元明天皇）の爲め出家入道を請ひ勅許を得て此處に滿誓となつた。同七年筑紫に觀世音寺を建てるに際しその別當となつた。彼は官吏としても仲々手腕があつたことは、褒賞せられたことも時々あつたのによつて知られる。彼の歿年は未詳であると共に、その生年も不明である。しかし續日本紀によると、慶雲元年正月の條に「正六位下笠朝臣麻呂授二從五位下一」とあり、これが年代的に知り得る最初の記錄である。そして最後の記錄天平二年と關聯して計算してみると此の間約二十七年になる。これから想像してみて、まづ二三十歳の青壯年時代を官吏として過し、天平二年頃には相當

の老境に入つてゐたのではあるまいか。兎に角歌人としての生活は出家後である。しかも彼が觀世音寺に在つた時、旅人は太宰帥となつて赴任し、此處に兩者の間には藝道上の交渉が始つたのである。筑紫にあつて彼は寺の賤女と通じ子まであげた。斯かる性格事實は一面又彼の作品と關聯して見らるべきであらう。

彼の作品として最も著名なものは

世間（よのなか）を何に譬へむ朝びらき榜ぎ去にし船の跡なきごとし（卷三、三五一）

である。一種無常的な思想の詠みこめられたものとして注意される。「世間を何に譬へむ」には何か理智めいた發想を思はせるが、しかし案外あからさまに平旦な表明をしてゐるので、三句以下に素直に接續し、又結句とも響應して一首に聲律を生ぜしめてゐる。「朝びらき榜ぎ去にし船」には、實景を想起せしめる寫生的分子が潜在してゐるやうである。この爲め一首はこの種の歌の陷り易い型から救はれ、寧ろ或動きを覺える。乾燥したところがなく、全體から自然に生れて來る快調と想趣とが融和されて、仲々の手腕を思はしめられる。同じ卷三の歌でも、他の三首はこれと少し趣を異にしてゐる。

鳥總（とぶさ）立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材（ふなぎ）を（卷三、三九一）

見えずとも誰戀ひざらめ山の末（は）にいざよふ月を外に見てしが（卷三、三九三）

共に譬喩の歌であり、前者は船木を素材に扱ひながら、自分が愛慕し大切にしてゐる女に他人の通ふのを嘆じてをり、後者は容易には會ひ難い女があつて、それを月に喩へての作であらう。二首とも相當に技巧を思はせる點がある。前者に於ける三句以下に「き」音を頻りに繰返してゐる點、後者に於ける句法上の複雜性等はそれである。これらの歌に直接ぶつかると如何にも僧侶の作とは思はれないやうであるが、

やはり筑紫に於ける所產と思はれる。彼の性格の一片がこれらを通して見られはすまいか。

しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ（卷三、三三六）

著眼と表現とに特殊性がある。題詞には「緜を詠める歌一首」とあるが、これは實際に綿を觀てその時の感情を單純に表明したものか、又は綿を象徵的のものとして、これを愛者の膚などに譬へたものであるか。土地の賤女などの關係もあつたこと等を想起すると、或は後者の意にとるのが自然であるのかも知れない。確かにこの一首にはさうした風にもとられるものが漂うてゐるやうである。さうするとこれは表には餘り出さずに極めて婉曲に工夫した技巧味の勝つた作と見られる。しかしこの考へはどうであらうか。同じ卷の前掲二首（三九一・三九三）などに比べると趣は自然に異なる。それまで穿鑿するのは却つて原作を傷つけはしまいか。土屋氏も「名歌評釋」に於いてこの點を詳しく述べられてゐる。結局「對象に對する單純なる一情趣を歌つて居るもの」とする土屋氏の解が妥當ではなからうか。全體に詠下してゐる調子がなだらかで停滯するところがない。それだけに又平坦であるといふ批評も生れようが、素直な氣持は感受せられる。綿を詠んだ歌といふのは確かに珍らしい。四五句あたりには實際に觀てその境地をうたつたであらうとの感を抱かしめられる。卷五の一首

青柳（あをやなぎ）梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし（八二一）

は、天平二年正月十三日太宰府の官人が、長官大伴旅人の宅に集つて宴會を催した時の詠で、卽興的のものである。身は僧となつても俗風からぬけきる事なく、全く半僧半俗的の生活をしてゐたものと見える。特にいふべき程の歌でもないが、第四句の表現には此の時代としては新しさがあることを「新考」は注意し

た。即ち酒を飲むといはないで、只飲むといつてゐる點である。かうした使用はおそらくこの頃にはじまつたのではなからうかといつてゐる。

巻四の二首は、大伴卿が天平二年十二月上京してしまひ、後にのこされた滿誓は、懐しさと寂しさに堪へずしてこれを贈つたのである。

眞十鏡(まそかがみ)見飽かぬ君に後れてや旦夕(あしたゆふべ)にさびつつ居らむ（五七二）

ぬばたまの黒髪變り白けても痛き戀には遇ふ時ありけり（五七三）

前者の「旦夕にさびつつ居らむ」の句には、實感味の溢れる思ひがある。環境が自然に齎らした佳作と思はれるが、作者の心情が濾化されその上に表出されてゐる。「普通のことを言つてゐるやうで神經が細かく働いてゐる」（萬葉集秀歌評釋）と齋藤茂吉氏も批評されてゐるがその點を注意したい。又三句「後れてや」にも作者の訴へる深い情感がひそんでゐるやうである。後の作は宛然自らの戀人たる女性に情を抒べるやうな味がある。それは一面またそれだけ親しく直接に言ひ得る間柄であつたとも思はれる。旣に記した所でもあるが、天平二年頃には、滿誓も相當の齡に達してゐたと想像される。「ぬばたまの黒髪變り白けても」は、自身に取材した眞實味ある表現で、これと「痛き戀」とを密關せしめて、何か親しさに甘えるとでもいひたいやうな詠み振りを示してゐる。

旅人をめぐる作家の一人として、自分は滿誓をながめた。「滿誓の作品にはすべて一種の洗練された味があつて、この點は旅人と相似てゐる」と齋藤氏も言はれてゐるが、一々の作品にぶつかつてみると特にその感を深くする。邊境に在つたといふこと、歌道に於いて心を通じあつたこと、年齡的にも甚しい距離

はなかつたらうと思はれること、それらのことを思ひ合せると、滿誓が作歌の上に於いて、旅人等の影響をうけ、しかも一種の共通する色彩が見出されるのは、また偶然の現象とはいひ得ないであらう。

沙彌滿誓と金明軍

上村孫作

神龜天平の作歌を見ると、旅人憶良を中心とした交游が相當廣く大きな波紋となつて、其の周圍の人々に及んでゐる。現代のやうに意識的に結社を組織してゐる樣子は勿論ないが、交渉が繰返されてゆくうちに釀すところの雰圍氣といふものはあり得るわけである。實際その邊には親愛の情の漂うてゐるやうに見受けられる。それ等の交游の中に目立つものの一人に沙彌滿誓をあげることが出來る。「旅人は滿誓を敬ひ交つてをつたらしいから思想の上では何か通ずるやうなものがあつたかも知れないが云々」といふのは土屋先生の見解である。

世間(よのなか)を何に譬へむ朝びらき榜ぎ去にし船の跡なきごとし（卷三、三五一、滿誓）

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（卷九、七九三、旅人）

滿誓に先蹤のあるなしに拘らず、この場合この二首を並べることに特別の意味をもつて見るものである。つまり交渉の密接さを言はむとするものである。歌品については旅人の作に劣るかも知れないが、又がつちりとしたよい歌とも言へると思ふ。「靑柳梅との花を折りかざし飮みての後は散りぬともよし」（卷五、八二一、滿誓）に流るるものと、旅人の讃酒歌に流るるものとは同じやうなものであると思はれる。帥老之宅に三十二人集まつて梅花歌を味みあつた時の一であつて、其の中では注目してよい歌であるといふに過

ぎない。次に旅人が上京（天平二年冬十二月）して後の、沙彌滿誓贈卿歌二首と大納言大伴卿和歌二首の贈答歌は二人の呼吸があつて居るやうである。滿誓も親交ある卿に對しては何處か肩の荷を下したやうな輕快さで歌を咏んでゐる。「眞十鏡見飽かぬ君に後れてや旦夕にさびつつ居らむ」（卷四、五七二）は其の理窟つぽい所がとれてゐてよい。

滿誓の歌の數は旅人の八分一に當る程しかないが、それ以上あつたとしても旅人の作品程浸透力は持つてゐなかつたであらうと思はれる。理路を立てたがる彼は堅い殼をもつてゐて動かなかつた人のやうである。而し人を反撥せしめたり、嫌味を覺えしめたり、輕く扱はれたりするやうなものでは更にない。代匠記も「溫和の相ある人は打見るより仁愛ありぬべくおぼゆ」と言つて居るが、それでも何か嚴しい所を感ずることが出來るやうである。

「しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ」（卷三、三三六）は矢張りその代表作といふべきであらう。「綿を多く積置けるを見て」咏んだものとする代匠記の解釋も尤もとは思ふが、筑紫へ來てまだ間もない時、綿の木に綿花の付いてゐる所を見たと思ひたいのである。さうして置いてさまざまな想像を逞しくするわけである。この歌一首でも滿誓の人柄を偲ばしめるに充分であると思ふ。外に「鳥總立て」（三九一）「見えずとも」（三九三）の如き迷晦なものもある。

「あしびきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常に思ほゆ」（卷八、一四六九）は年表には假に滿誓の歌として掲げられてあるが、代匠記には三方沙彌かとしてゐる。これは人麿の「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ」（二六六）に類似のものであつて、滿誓には相應しくないやうな歌と思へ

る。

先に掲げた如く旅人憶良の周圍には幾十人もの交友がをつて悉くあげる暇もないが、今一人金明軍について少し述べてみたい。

金明軍作歌八首の中五首は旅人の死を悲しむ歌であり、二首は旅人の子家持に與ふとある歌である。斯の如くその多くが大伴親子に關する作であるのは生活も旅人に依存し、旅人の埒内に安穩であつた人でもあるので、其の物心の密接さは他の影響はあるにしても、旅人に負ふ所最も多いとしなければならないであらう。卽ち「君に戀ひいたもすべ無み蘆鶴の哭のみし泣かゆ朝夕にして」（巻四、四五六）「みどり子の匍匐徘徊り朝夕に哭のみぞ吾が泣く君無しにして」（巻四、四五八）の如きは純粋に影響を受けてゐるやうである。又一面憶良其他の影響も受けてゐるといふことも否みがたい。それは識らず識らずのうちに時代の空氣に染つて行くやうなもので意識的ではなかつたと解したい。日並皇子の舍人の歌に類似するといはれる「はしきやし榮えし君の坐しせば昨日も今日も吾を召さましを」（四五四）でも旅人の歌から來てゐる所もある。この歌の「榮えし君の坐しせば」「吾を召さましを」など面白いと思ふ。其の次の「斯くのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも」（四五五）又「見まつりていまだ時だに更らねば年月の如思ほゆる君」（五七九）「あしびきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まくほしき君かも」（五八〇）など人のよさそうな所が見えてゐてよいと思ふ。以上詳しい考證は他に讓つて極く概略を記したまでである。

藤原房前

伊達宗雄

萬葉集の中で憶良旅人を中心とする作家群に、藤原房前を加へ得る唯一の資料は、天平元年大伴淡等謹狀として梧桐日本琴一面云々なる長文の詞書をもつ二首（卷五、八一〇・八一一）に對する答歌

言問はぬ木にもありとも吾背子が手慣の御琴地に置かめやも（卷五、八一二）

であらう。他の資料は悉く後世の考證により房前作と傳へらるるのであるが、其の論據を審にする遑が無い。然し單にこれのみを以てしても、房前は太宰府を根據とした諸作者と寧樂京を常住とした藤原氏、橘氏等の諸作者間の恰も一橋梁をなすと言へるかも知れぬ。然るにこの特殊の意味を持つ旅人との唱和形式による之等一聯の作は、その堂々たる漢文學の素養にも拘らず、當時の一傾向たる老莊思想に由來する仙境思想を形骸として涸化した觀念に過ぎない。但し旅人作の如き自問自答の愚劣な構想よりは、房前の下句の如き寧ろ却つて率直な心境を示してゐると言ひ得るかも知れぬ。尙、卷五には之等作品直前に旅人作歌詞兩首（八〇六、八〇七）の答歌二首

龍の馬を吾は求めむあをによし奈良の都に來む人の爲に（卷五、八〇八）

直に逢はず在らくも多く敷妙の枕離らずて夢にし見えむ（卷五、八〇九）

があり、古義は之を作者未詳となすにも拘らず、年表の如く天平元年房前作とすることは、前記日本琴一面と殆ど同一手法の唱和形式であり且つ聲調内容等からも、さまで無理があるとも思へぬのである。果して然らば之等を通じて觀る旅人房前の交流は、相當に緊密深厚であつたと見做し得べく、さすれば斯くの如き詩文唱和が短歌の價値に比し不均衡の觀をなしても、啻に漢文學の氣取と冷眼視することは少しく酷に過ぐるであらう。卽ち斯くの如きは勿論一方より他方への影響といふよりも、寧ろ當時一般貴族階級の

教養としての成果乃至慣習趣味の現れでもあつたことは、懐風藻の作者としてこの兩者が登場してをることからも察知し得るところである。房前（懐風藻には總前に作る）は藤原不比等の第二子、所謂北家の祖であるが疱瘡のため兄の武智麿、弟の宇合、麻呂と共に天平九年に薨じ、行年五十七歳とする一般説に從へば、天平元年（神龜六年）は房前四十九歳、旅人六十五歳、憶良七十歳となる。之等三人の作家としての力量は大體年齢に準ずると見てよいと思ふが、藝術上相互交流の姿を想見するには遺憾ながら頗る資料に乏しい。

次に房前作とせらるるものに倚巻七、一一九五の左註「右七首者藤原卿作未審年月」に依つて七首を得る。この邊の歌の順序は本によつて相違があるが、現在の通説に從ひ元暦校本等に依れば右の七首は次の如くである。

黒牛の海くれなゐ匂ふ百磯城の大宮人しあさりすらしも（巻七、一二一八）
若の浦に白浪立ちて沖つ風さむきゆふべは大和し念ほゆ（巻七、一二一九）
妹がため玉を拾ふと紀の國の由良の岬にこの日暮らしつ（巻七、一二二〇）
吾が舟の楫はな引きそ大和より戀ひ來し心いまだ飽かなくに（巻七、一二二一）
玉津島見れども飽かずいかにして裹み持ち行かむ見ぬ人のため（巻七、一二二二）
紀の國の雜賀の浦に出でて見れば海人の燈火浪間より見ゆ（巻七、一一九四）
麻ごろも著ればなつかし紀の國の妹背の山に麻蒔く吾妹（巻七、一一九五）

この七首の作者「藤原卿」に就いては、代匠記の房前説が一般に認められてゐる如くであるが、果して

これは定說として動きなきものであらうか。私がかかる疑を持つに至つた動機は、結局前揭房前作とした日本琴答歌並に八〇八、八〇九と、之等羇旅歌との間に存する作家態度のかなりの開き、歌柄乃至感動の深淺等の變化が僅々六年間の經過に於てなされた驚きを意識してをつたからであらう。勿論前者は輸入思想の概念化であり後者は現實の經驗といふ取材の根本的相違としてのみ片附けて仕舞ふ前に、尙多くの問題が殘つてをるやうである。然し暫く房前作の說に立てば、この製作年代を神龜元年（房前四十四歲）十月紀伊行幸從駕作とする年表の頭註にも首肯し得るし、從つてこの作家には人麿赤人を始め多く之に先驅する作家作品の感化影響もある筈であり、例へば大寶元年辛丑冬十月太上天皇幸紀伊國時歌十三首（一六六七乃至一六七九）或は大寶二年高市黑人羇旅歌八首等も參考となつたかも知れぬ。下句の同一を以て注意される卷一志貴皇子慶雲三年の御作（六四）の、もはや象徵の域に到達せるに對し、一二一九は尙純寫生的で自然流露の姿態ではあるが、其間影響を認めてもよいであらう。一一九四も透徹した簡淨な歌品を成してをり、之を以て見れば此作者は鎌足の豪壯不羈、麻呂の純眞素朴なるに匹儔し得ないとしても、その作の平明淸淨なるは藤原氏諸作者中、相當天稟に惠まれた人であつたといつてよいであらうし、從つて憶良旅人のといはんより、寧ろ當時一般の輸入思想や階級意識・因襲等に囚はれず、全心的な努力を傾注したならばもつと獨自の發展を期待し得たかも知れぬ。

ふたつの理由

五味保義

旅人憶良を中心にして多くの作家がひとつ雰圍氣の中に在つたことは、萬葉集の中で著しく目立つ事柄

である。その作家達が長上官とその下僚であつたり、又氏族を同じくする血緣關係にあつたりすることは、かつて明日香、藤原宮の時代に皇室を中心にした作家群があつて、そこに又一つの作歌環境が釀成されたのと相似てゐる。事實萬葉集年表を開き見る者は、神龜元年の項から天平五年の項に至る十年間の紀事に於て、逐年この方面に關する事項を見出すのであつて、これは萬葉集に於て特異なる存在であるばかりでなく——時を同じくして赤人、金村、千年の作歌も逐年存在するが、その各人の關係は到底旅人憶良其他の人々の交涉の密接なのと比すべくもない——他の勅撰歌集等に於て決して見ることを得ない處である。その詳細は前記諸氏の說によつてあきらかであらう。

ただ私はその關係交涉といふものが、現在の吾々の場合のごときものではなかつたことをおもふ。歌の歷史を見渡して、かういふ作歌交涉の辿られるのは、やはり現時の狀態以外にその比すべきものはないとはいへ、直ちに全部相等しい條件に置くことは出來ないと考へる。

例へばいま年表を神龜元年からよんでゆくときに、表面に浮きいでて來るのは旅人である。あらゆる方面から旅人は中心となつて現れ來るのである。さうしてあれ程作歌に熱心であり、又作歌經歷からいつてもつとも古い憶良が、作歌交涉の圈內に於ては旅人の中に影を沒してしまふ。この理由の一は當時の作歌交涉が社會の限定された一面に於て成立してゐたことに在ると思ふ。なほ云へば政治的に中心を得て發展しつつあつた雰圍氣であると思はれる。純粹に作歌そのものから發展された交友でなしに、長上官と下僚との關係が下地となつて出來上つていつたものである。この條件が、出來上つた作品價値そのものを左右するのでは決してないと同時に、雰圍氣としての內面的價値を問題にするときには忘れてならぬ事柄であ

る。もう一つの理由はこれらの作品を採錄した經路如何に在る。そのことで從來しばしば問題にされるのは巻五の採錄者であるが、旅人筆錄と憶良筆錄と旅人周圍の某人筆錄と、三つにわたつて夫々少からぬ說が出てゐるのである。それらを參照しながらもう一度實際作品にあたつてみると、旅人がその十年の間の紀事に著しく目立つて來て、私の氣持は次第にその第一、むしろ第三に近づいてゆくのである。

つまり旅人が作歌の中心人物であつたことは否定出來ないが、それを更に表立つて見えるやうに集錄されてゐるのである。

梅花宴の歌がその官位職分によつて排列されて居たり、巻五が旅人を主人としてそれに集り來る書簡の集錄であるやうに見えたりするのは、以上の二つの理由から說明が出來る。さうした交渉關係に於ての憶良が旅人に比してかなりさびしい位置に在るのは、やはり以上二つの理由から說明されよう。又それによつて日本琴歌や松浦河歌、松浦佐用比賣歌等、乃至は梅花宴歌三十二首同追和六首の連作を通ずる氣分もかなり說明され得ると思ふ。そして旅人中心の作品をかういふ形に於て現在に殘した作業には、坂上郎女が相當大切な役割を演じてゐることも、落合氏が推察されるごときであらう。

從つて旅人周圍の人々の作品は、多かれ少かれ對詠になつてゐる。身振りが多くなり、そのため味噗が個々のひびきを發しない憾みがある。そして初期の作家や人麿にみられるやうな獨詠的色彩が乏しくなつてゐる。前說二三氏の非難的批評はさういふ所から來る作品の弱さを云つてゐるやうに思ふ。そのなかで旅人が亡妻悲傷の作いくつかを珠玉として成したことは、旅人の本質をうかがふに足るべく、且寮閑氣醸成の先驅者であるところの德をなしてゐる。丁度子規の作品には誰も及ぶことの出來ぬ新鮮清潔な風が、

開拓者の德として永久に與へられてゐると同じである。

旅人を中心にして考へてゆくとき、その追隨者として存在する房前、陽春、百代、四綱、金明軍、また滿誓ごときさへ不利な批評を受けなくてはならない。先人の迹を踏んだ作風とか卷十、十一、十二あたりの作品と通ずる作歌態度等をあげようとすればたやすい。扇畑氏評の後半のごときそれであり、更に世間にはもつと酷評をこれらの作家の或ものに加へてゐる事實がある。しかし吾等が「自らの力量を忘れずして」（齋藤茂吉）批評すれば、なほいくつかの及び難きものを見出すのであり、大體に於て純直に滯りなき作風を成してゐるのである。ここまで牽引した旅人憶良の作歌熱心もその裏にみとめなくてはなるまい。

憶良の存在は以上の空氣を著しく多彩にし角度を加へてゐること云ふ迄もない。憶良が周圍の人と贈答したものは集錄法が旅人中心のために殘らないものが多からう。さういふ意味から失はれた憶良作品はきつとあつたことと思ふ。しかし作歌上では憶良はひそかに自らを持して獨り作をなし、獨り心をやつてゐた一面があつたのではあるまいか。それも旅人と比較してであるが。旅人中心の多くの集會に華々しくうごいたのはむしろ坂上郎女の方であつて、そのにぎはひの中から憶良はときに苦笑ひしながら時刻早く立つた。「憶良らは」などいひながら。旅人が水城の上で娘子兒島に別れるとき、坂上郎女はその一月まへに筑紫を去つてゐなかつたが、憶良はその傍にゐたに相違なく、旅人の「丈夫とおもへる吾や水城（みづき）の上に涙拭はむ」（九六八）をどんな面持で讀んだことであらうかと思ふのである。憶良の「士やも空しかるべき萬代に語り續くべき名は立てずして」（九七八）と思ひ合せると、二人の風貌が髣髴するやうである。

（昭和十二年十一月）

四十一　在來の旅人憶良論

在來の傾向瞥見

五味保義

手近にある旅人憶良論を一通り目を通してみた感想を述べる。これは凡そ十五篇に及ぶ論文及び解説であるが、眞淵の萬葉考のやうなものから、佐佐木、久松、武田、澤瀉諸博士の說、伊藤、島木、中村、土屋氏の說に及び、加ふるに窪田空穗、三井甲之、土田杏村、森本治吉四氏のごとき特殊な論文をも含んでゐるのであるが、世上に發表せられた旅人論、憶良論中のごく一部分にすぎない。いま右の諸篇を一括通讀してみると、その內容は中々多種であつて、これを系統立てて論ずることは容易でない。從つて私の文章も今の場合感想といふ形に墮ちざるを得ないのである。

旅人憶良論といふものは態度論におちつく傾向がきはめて强い。たとへば「柿本人麿」の中で「人麿は全力的である」と說いてあるのと同じやうな批評の態度であるが、人麿の作歌態度についての論は、それに附帶する感情的乃至感傷的な尾緖が少いが、旅人憶良になると、やや煩瑣にそれが附きまとふ。人生觀、社會觀、人生詩人、享樂歌人といつた風である。そして二人の性格、嗜好にまで詳細に立ち入つてその人

物をいま目睹する如くに、描き出すのであり、概論ではあまり差異を見ない場合でも、そこまで立ち入つた時には夫々多彩な風格を以てあらはれ、讀者にその適歸するところを知らしめない程である。人麿論に於てはその程度がこれ程甚しくなく、赤人論に於てもまた見得ざる事柄であらう。

かういふことは結局旅人憶良の作歌內容が現在人の興味を惹きやすいことや、その思想的觀念的作風の致すところであつて、旅人論のそれは讚酒歌十三首の評價の混亂にあらはれ、憶良論のそれは貧窮問答歌の評價の混亂にあらはれて居る。所謂「論」をなすには好餌となる融通性を持つてゐるともいへようと思ふ。民俗學的な說き方の材料にもなり、國家中心主義的な說き方の材料にもなり、哲學的乃至社會主義的な說き方の材料にもなる。しかしこれは旅人憶良の作品の融通性にのみその因由を置くことは出來ず、評者の頭腦の融通性により多く因由があると思ふ。卽ち一種の思ひつきとして興味を惹くものが、この諸說の中からいくらも拾ひ出せるのだが、それらにもう一步踏み込んでみると外廓的であつて、作品の眞の風格から遊離してゐるものが多いのである。勿論それらがすべて役に立たぬ論で存在を否定し去るべきものとは思はないのであつて、何等かの形で旅人憶良研究の刺戟になつて居るのであらうが、作品に卽けば卽くほど、その論じ方がにぎやかにすぎるやうに思はれるのである。

或は若くして死にし熊凝のために、我子の死に對すると同じ樣な悲みをうたつてゐる如き、彼の愛がただ自己及び自己の直接のもののみに限らずして、更に廣く大きくなつて行く事を感ずるのである。ここに憶良の人類愛的な思想の發展があるのである。（久松潜一、萬葉集の新硏究）

これらは一例であつてその外あげれば限りはない。今迄作品中心に旅人憶良を論じて來た吾々からいへ

ば、立場の差違があまり甚しいので、あげていふべきものとも思はれないが、私の今述べる感想の空論でない證左に博士の舊著から拜借したのである。本當はここでその評論史を作つて示すべきであらうが。

私の今感じてゐる旅人憶良論の混亂は、一つには昭和に入つてから著しくなつた講座の發行にもよるのである。「山上憶良」（三井甲之）（窪田空穗）、「山上憶良小論」（森本治吉）、「大伴旅人」（武田祐吉）（土田杏村）等みな然りである。さうしてこれが國文學諸雜誌と相俟つて「論」を世上に增加した。かくの如き研究が世からかへりみられぬ頃、自らの眼識と作歌意欲とによつて、ひそかに且つ力づよく論をなしゐた左千夫、赤彦乃至文明あたりの迫力と異る所以であらう。十月號にも一言したが左千夫の憶良論も我流が多い。たとへば憶良が人麿以外の新風を樹てたと主張して、自己の作歌意欲にひきつけすぎた所などである。しかし憶良の作品そのものの評價にいたるとしつかり捉へて居る所があつて、吾々の據るべき點を示して居る。赤彦の旅人憶良を遇すること、末期的歌人を以てし、そのあつかひに我流が多いが、同じく作品の評價に至ると雋鋭なる判定をしてあつて、永久性のある旅人論憶良觀をいくつか殘してゐる。左千夫赤彦の我流は評者の生地の滲んだ我流であるが、學究者的我流は、理智的なそして變化融通性のある「聰明」が基調をなしてゐるやうに思ふ。つまり前者の我流は個々の作品をつよく把捉することが先づ在つて生れて來、後者は作品の總體的な感觸乃至取りいそいだ分類を基として生れて來てゐるやうに思ふ。今私のよんだ諸說の中に、旅人は常に空想の世界に住み、悲しみながら華麗であり、憶良は現實から離れることがなく、その作品の哀調は眞に肝に徹するといつた批評に出あつた。かういふのになると最早改めて批評する心持を失ふものである。本研究の「大伴旅人の讚酒歌十三首」「大伴旅人の作風」「山上憶良の作風」に於ける

諸氏の說は、そのまま今のやうな所說の批評となして十分である。

萬葉集研究年報をひらいて見ると、その第四輯（昭和八年度）に次のごとき雜誌發表の論文があつたことがわかる。

山上憶良論（井澤義雄、國文學誌）山上憶良を禮讚す（森伊左夫、嚴橿）山上憶良（池谷勝、不二）山上憶良の歌（瀨古確、短歌春秋）旅人と憶良の感傷の因（須藤春杉、短歌街）旅人と憶良の個性に就て（同上）吾が憶良（同上）山上憶良を語る（井澤義雄、國漢）人生詩人としての山上憶良（高田四郎、かぐのみ）山上憶良（青い港）山上憶良論（半田良平、短歌研究）大伴旅人の書牘（染谷進、槻の木）

每年これと相似た數の憶良論があり、それに旅人論が混入されてゐる實狀である。旅人の方があつかひにくいのであらうか、年々憶良研究に對する旅人研究の比は凡そ右の如きものである。右の如き事實は一般には憶良がむかへられ、それも素材的に魅力があることを示してゐるやうに思ふ。又論文題名の感傷的な傾向も、今私が概括的に述べて來たことの一つの證左になりはしないかと思ふのである。

在來の評言について

相澤　正

旅人、憶良に就て系統立つた理論といふものはいざ漁つて見ると殆んど見當らない。個々の作品に就ては相當立入つて述べられてゐても、それを綜合すると收拾しがたい結果になつてしまふ。これは兩者が夫々その作中に矛盾し合ふやうな作品群を有してゐるためであるとも思はれる。併してさういふ作歌群の批評が各兩者の概論なり作風論なりと混同される傾向があるのではないか。

先づ旅人に於いて必ず逢著するのはその讃酒歌論であり、之によつて旅人の性格や作風が様々に論ぜられてゐる。さうしてこの十三首から他の諸作を多少なりとも律せんとしてゐる。この一聯の分析によつてなされた評を見ると、彼の享樂思想、現世思想、佛教否定、儒教反抗、老莊的生活、日本固有精神等々である。又是等と松浦河の歌、梧桐日本琴の歌等が關聯されて仙人思想、現實逃避などといふ評言が出て來る。が、かういふ論は既に本年四月號の本誌上で諸氏により取上げられ批評し盡されてをり、私もその一々に傾聽して來てゐる。ただ私は旅人の作風を見る上に就ては此十三首は傍系的のもので、實際の旅人論となつた時には系列外に置いてみて差支へないもののやうに思ふ。この讃酒歌があるためにその陰翳が他の作に及ぶことを私は欲しない。けれども度外に置いて然る後に如何に考へても、それは批評者鑑賞者の自由として大變面白いと思ふ。

> ただ旅人にはこの人間的な悲哀の體驗から出發して享樂思想や仙人思想にまで思想を導いてゆくには餘りに明るい深刻な點の少い人であつた。花やかな種々な思想や事象をとり入れては之を歌にしたのであつて深めてゆく事は出來なかつた。旅人の特質はここにあるであらうが、不滿もここにある。（久松潜一、萬葉集の新研究）

けれども、實際には旅人の亡妻に關する歌や望鄕の歌等は集中にあつても有數の力作で、さういふ遊離した批評は既に當て嵌めるべくもないのである。この歌の中にこそ現實的な詠嘆があり、人生の眞率さがある。讃酒歌等と異つた意味で哀愁あり、冥想あり、享受もある。つまり讃酒歌はあまり問題になりすぎて本質論を犯す傾向があるのである。

又武田祐吉氏が旅人の作品は特に之を三類に分けられる（萬葉集講座作者研究篇）として評してをられる

のであるが、全く機械的で批評のための批評となつてゐる。凡そ旅人の作風論は何時か旅人の人間論になつて行くやうである。これは旅人も憶良も同じく老に入つてからの歌のみが對象となつてゐるせゐかとも思はれる。現代作家の如く多數の作品を擁してゐる者に就ても、その作風を云々するのは難事である。況や數首を以て一律に之を言ふことは出來ない。これには私は箇々の作品に就て的確明快な鑑賞批評が必要であると思ふ。その點になるとやはり實作者側から出た言の方が時に偏つた所があつても、土臺がしつかりしてゐる。學者の評言は高踏的で、どうもしつくりと受けることが出來ないのである。

憶良の作品は皆といつてもよいほど同情ある目で見られてゐる。そして人麿と並ぶものは彼であるとさへ言はれてゐる。

萬葉の歌人中、人麿と並べ稱すべき作者を求むれば、そはむしろ赤人にあらで憶良なるべきことは吾人の認むる所なり。憶良は漢學を習んでよくそを消化し、學識あり、且つ實社會に接觸し、又同情の念に富める歌人にして、その貧窮問答歌、好去好來歌等にあらはれたる深き情緒と雄大なる伎倆の如きは到底他人の作中に見出し得べからざる所なり。（佐佐木信綱、歌學論叢）

憶良の作はその素材の新奇であるために、又集中有數の長歌作者であることから、その一つ一つが問題にされ易く、殊に學問的方面の探究が活潑であり、其批評といふのも大抵貧窮問答歌や令反惑情歌等を中心とした憶良の作品の意義論であつて作品そのものの價値論ではない。この點吾々の不滿とする所である。

彼が人性を基調として人間をうたつてゐることは先づ注意される。（中略）自己の生活、自己の家庭進んでは貧民生活を描いてゐる所に日本の詩歌史の上に特色を放つてゐる。人生主義的な詩人といへる。（久松潜一、萬葉集の新

研究）

憶良は家庭生活を樂しんだ子煩惱の人である。萬葉歌人の多くが數限りない戀愛觀を詠んだのに對して、憶良が父性愛の溢れた歌を數首遺してゐるのは、極めて注目すべき事である。（次田潤、萬葉集新講）

憶良の集中に於ける獨歩の地位は實に社會詩人としてである。生活難人間苦を歌つた點にある。（佐佐木信綱、萬葉集概說）

私は憶良の作品殊に長歌には何か試みとしての域を終生脫却出來なかつたやうな所が氣になるのである。人麿のやうな渾然たる域にはどうしても達してゐないのではないだらうか。憶良に就て貶黜的な言を擧げれば

好漢理を說くに急にして情を敍ぶるに疎し。その用語また甚だ粗笨にして全然詞句の烹鍊を看却し時に俚諺をつらねて顧みざるが如きは寧ろ其放膽に驚かざるを得ず。（藤岡作太郎、國文學史講話）

である。これは偏しすぎてゐるやうに思はれるが、さりとて

彼の詞として現れてゐるものから、私の聞き得たのは、現實に對する彼の批評ではなかつた。その批評し去つた心をさらに鬱した重い聲を以て詠み上げてくる所の彼の情熱の力であつた。彼は知識を知識としてそのままに置くにしのびず情熱を以て押出してゐる。愛著の心を抑へつけられる所から來る怒りの心を以て詠んでゐる。私はその聲の響きに親しさを感じて來たのである。（窪田空穗、短歌隨見）

といふ程の同情ももち得ない。憶良の作は間接的なところがある。彼が人生主義博愛主義の歌人といはれ、倫理道德の實踐者のやうに思はれるのは、旅人と同樣にやはり作品の樣相に災される所があるやうに思ふ。

旅人にしろ憶良にしろ、らしきものはあつたであらうが、眞にさうあつたかどうかは私には言ひ得ない。實際彼の長歌なり短歌なりの多くには間然としてぎごちない空虚さがある。これは一面には歌は單なる周圍への同情や素材の如何のみでは、どうにもしがたいといふことを示すもののやうである。「藝術とは絕對に自分自身であることだ」といふヴエルレーヌの言は憶良の作を見てゐる時私の腦裏に浮んで來る。

憶良の長歌に就て、その形態の特異性や技巧の地味な點等を諸註釋書が擧げてゐる。これは形式論的に學問的に言へば興味ある問題であらうが、人麿に於て完成した長歌が如何なる方面へ更に進むかといふことを見る時、新精神をもつ知識人憶良としては或は當然の歸結であると思はれる。が、憶良は遂に完成の面を持たぬ歌人であつた。

憶良の歌は足がしつかり地を踏みしめてゐる所はあるが、沓が泥へ食ひ入つて動きの取りにくい觀がある。併し、足をずんずん運んでどうにか先方へ到達するだけの力がある。多力に見えて、高くも深くも澄み入らないのである。貧窮問答の長歌などは殊にその感が多い。難きを望んで取りついたのは偉いが、純化し切れずに、ごたついてしまつたのである。この人の長歌は、大抵、事柄や思想が先きに目に立つ。そこが足どりのごたつく所であつて、そのごたつく所を外邊から鑑賞する人は、複雜であり多力であるといつて感心するし、內面的に鑑賞する人は、純化の不足を遺憾に思ふのである。（島木赤彥、歌道小見）

私は今この言に心ひかれてゐる。

旅人と憶良とは共に九州の任地にあつて歌の贈答をして互に風流の友として相許してゐたやうであるが、人として又歌人としての風格に於ては全く異つた色彩をもつてゐる事は兩者の歌の形式、伎倆、內容の上に十分認めること

が出來る。（澤瀉久孝、萬葉集新釋）

旅人と憶良とは全く對照をなして論じられるのが一般である。しかし一概にさう兩者の歌風の間に劃然と一線を引いてしまふことは出來ない。兩者は既に新時代的色彩の中に生を共にしてゐたのであるから、やはり同時代人として交友として、その教養の上からも、又思想なり、素材の攝取の上からも共通點を拾ひ出したいとさへ思つてゐる。旅人と憶良との相違は、さういつた具體的なものではないと思ふ。ただ旅人はどこまでも素人であり、憶良には始めから玄人としての意識的なものが感じられるやうな氣がする。

（昭和十二年十二月）

四十二　山部赤人の歌六首

沖つ島荒磯(ありそ)の玉藻潮干(しほひ)滿ちてい隱ろひなば思ほえむかも　（卷六、九一八）

○

鹿兒島壽藏

この歌は代匠記に「鹽のみちきて、ひかたのかくれゆかは、玉もかりしなこりのあかすおほえん」云々と出てゐるが、恐らくそのやうな心持であらう。中村憲吉全集を見るとこの歌に就いて中村氏は精到な鑑賞をされてゐる。「主觀の露はな歌でありながら、やはり作者の自然に對する鋭敏な感受性の閃いてゐる」「寫實によらなければ生れて來ない細かい觀察」などは全體評として頷くべきものと思ふ。「荒磯の玉藻潮干滿ちて」「い隱ろひなば」とゆくところは對象に刺戟される作者の情緒の移行するさまが纏綿としてをり、その想像は實に的確だと思ふ。この歌では第五句の「思ほえむかも」によつて一首の定位を得た訣であるが、この點に問題が幾分あるやうに考へる。今それを具體的に簡明に云ふ術を知らぬが、とにかく廻りくどい云ひ現し方とも云へるのではあるまいか。かういふ點で赤人作中に於て他の傑れたものと同等に價値

づけられぬものがあるやうに思ふのである。

○　　　　　　　　　　　　　　堀内通孝

赤人の歌としては、めづらしく主情的な作品である。「潮干滿ちて」は、その言ひ廻しが少しく變つてゐる爲に、古來「潮滿ちて」の異訓が行はれてゐるが、恐らくそれは赤人の意志に添はないものであらう。「潮干滿ちて」と「潮滿ちて」の二つの語から、想起させられるものは、相當の相違があつて、前者に多分の複雜性が感ぜられるが、人麿と並稱される赤人の敍景歌人的力倆を思へば、「潮干滿ちて」が本來のものと考へて差支へないであらう。「潮干滿ちて」は單に語義から云へば、玉藻が見える程度の干潮が滿潮になつて、と解してもいい譯であるが、實際の吾々のこの語に對する語感は、潮干潟に潮が滿ちて來て、といふ風にとるのであつて、それ故に單に「潮滿ちて」との間に大きな距離がある譯である。この語感は「和歌の浦に潮滿ち來れば」（九一九）等の歌を補足して考へるからではないのであつて、そこに言葉の驅使のうまさがあると云へよう。「思ほえむかも」は、土屋氏の説（萬葉集名歌評釋）のやうに「何をといふことでなしに自らに心に感慨が生ずる」といふ風にとれば、歌柄はなほ深くなるが、赤人の傾向から見て、そこまで本人の意志が赴いてゐたかどうかは、尙一考の餘地があるのではあるまいか。

○　　　　　　　　　　　　　　五味保義

第三句の「シホヒミチテ」はやや佶屈の感があらうが、實景に卽した感じを持つて居つて捨てがたい。

これは從來もあつた訓であるが、近くは多く「シホミチテ」と「干」字を訓まずになだらかにして居た。やはり「シホヒ」とする方がいいと思ふ。次の「イカクロヒナバ」は古寫本によると、寛永本の「伊」は「伹」と直すべきであるやうに考へられ、その「伹」は「滿」につけて「ミチテ」の「テ」と訓み、第四句は從つて「カクロヒユカバ」と訓む方が合理的である。ただ結句の「思ほえむかも」と相應ずる氣持を尊重すると、「イカクロヒナバ」といふ、「イ」「ナ」の音がやはらかに入つた句に執着を持つべきやうにも思へる。一方「カクロヒユカバ」のはつきりした音は結句の甘美なよわさを救ふがごとき趣を感じて味へば、またなかなかいい訓である。

神龜元年十月紀伊行幸の折の製作で、玉津島山を讃稱した長歌の反歌であるが、赤人の他の諸作よりも少しく異色がある歌として目につく作である。四五句の「い隱ろひなば思ほえむかも」が情趣的で、作者の情緒のたゆたひを想はせる所がある。殊に結句には相聞戀愛の情緒を感じても差支ない程である。しかしこれは一首總體の姿態から味ふとそれほどのものではなくして、荒磯に生ふる海くさが潮のみちゆくに伴ひ、ひたひた隱れてゆく相を目睹しての、きはめて漠としたもの戀しい心持であると思ふ。この上句はごたついて居るやうだが、よく味ふと實物をとらへてゐる確實な所があり、やはり古歌の良い尊い所を持つて居り、その方がむしろ作者の本領で、四五句は旅に在るときの特殊感情も手傳ふ、作者としては珍しい興奮であつたかと思はれる。どこか赤人としては出來上らない、生まなましたものを殘した歌であつて、そこが又一種の魅力になつてゐる。「イカクロヒナバ」「オモホエム」の未來形を、そのまま語法的に受容すると、作者の思ふ對象は玉藻に限定され、又玉藻の生ふる荒磯は今は潮干でやがて滿潮になるべき筈の

所といふことになつて、妙にぎごちない歌に解される。そこは土屋氏（萬葉集名歌評釋）のいはれるやうに、「事實問題でなしに、主觀上の問題として會得」すればいいのであつて「玉藻が隱れて行けば深く思はれることであらう」（同書）といふ、文章にあらはすと物足りないものにならうが、味ひ得る所は前者よりずつとゆたかになる。分析的にこの歌を考慮しない中は、讀者は凡そ不識の中にこの後者の味ひ方に居るらしく、少し念慮を解釋にめぐらすと前者のやうな所に入つてゆくやうに思ふ。

○　　　　土屋文明

「潮干滿ちて」は、それと決定して示されれば享受出來ない詞ではないが、もつと自然的な訓であるべきではないかといふ感じもされないではない。「隱ろひ行かば」も理のある詞であるが、「行く」といふ所が重すぎるやうに思はれて「い隱ろひなば」の訓が捨てられない。「思ほえむかも」は、作者が意圖しての表白のやうに思はれないでもない。そこがこの歌全體を幾分輕くしてゐるのではないかと思ふ。赤人にはかういふ行き方の歌が少くないので、「止めば繼がるる戀もするかも」「居りし鶯鳴きにけむかも」等其他擧げられると思ふ。空想をめぐらすならば、赤人は性格の弱い作者であるので、かういふ露出をしないでは居れなかつたのかも知れない。

若の浦に潮滿ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る　（卷六、九一九）

○　　　　　　　　　　　鈴江幸太郎

前の「沖つ島」(九一八)の歌と竝んでゐる、同じく紀伊行幸時長歌の反歌である。「葦邊をさして鶴鳴き渡る」といふ適確な把握を活かすものとして、「潮滿ちくれば潟をなみ」といふやうな平凡らしく說明がかつた句を用ゐることは、普通ならば先づ考へにくいと思ふ。然るにここでは說明めいた點は餘り氣にならないで、自然に潮とか潟とかが寫象に生きて、初句の地名を受けて大きな情景を含ませ、調子も微妙なものがあり、四五句に著實な足場を與へ一首を濃密にしてゐる。赤人の理路を整へる克明丁寧な歌風を代表する佳作である。「沖つ波邊波安(しづ)けみ漁りすと」(九三九)もよく似た手法であるが矢張りくどさや常識感が目障りになつてくる。これを見ても所謂描寫と說明の差を云々することは簡單でなく、ただ力量の問題のやうである。かういふ事情は中村憲吉の作風に通ずる所があり、中村先生が赤人論に深い理解を示されたことも思ひ合される。又人麿の長歌(一三一)の「よしゑやし潟はなくとも、勇魚取り海邊をさして」の影響を考へてもいいと思ふが、赤人はこれを自己の現實描寫に移してうまく活用してゐる。

○　　　　　　　　　　　落合京太郎

聖武紀によると神龜元年冬十月五日紀伊の國に行幸があり、八日に玉津島頓宮に到り、十餘日を止まり、岡の東に離宮を作られたこと、十六日に附近の弱濱の名を改めて明光浦とし、春秋二期に玉津島之神、明光浦靈を祀ることに定められた紀事がある。九一七の長歌と九一八及びこの九一九の反歌はその時の作で

あること明かである。この一首はさういふ背景と切離して鑑賞するに堪へるものであり、その歌境が新しく清澄な作品といふことが出來る。然し評者の專恣な注文が許されるならば、やや肉附が足りないやうな感じもする。それは「潟を無み」と小刻みに理に墮ちる傾を持つ句などに胚胎するとも思はれるが、更にいへばむしろ作者の現實に對する把握態度にまで溯らなければならぬのではないかと思ふ。この歌を圖案的な作品として鑑賞するものも少くなく、それがよい意味でいふのか惡い意味でいふのか必ずしも明かでないが、何か型にはまつてゐて割合に動きのないやうな感じがしないこともない。その點で圖案的といふ批評も生ずるのではないか。先例との關聯を言へば、黑人の「櫻田へ鶴(たづ)鳴き渡る年魚市(あゆち)潟(がた)潮干にけらし鶴鳴き渡る」(二七一)をあげることが出來よう。

○

柴生田　稔

集中異色のある作品で、やはり一つの新風を拓いたと言ふ點は否定出來ないであらう。これはただ客觀的とか自然觀照的とかいふ概念では盡せないものがあつて、集中の所謂客觀的作品の中でも、かういふ行き方はあまり類例が見當らないのではないかと思はれる。それは今落合君が引いた黑人の歌と比較しても明瞭である。兩者の相違については、中村憲吉氏の「山部赤人」(萬葉集講座)や、最近では森本治吉氏の文章(文學昭和十二年五月號)などに說があるが、兎に角黑人の歌は割合に安定した鑑賞態度で對することが出來るのに比べて、この歌の方は何か簡單に言ひ切れないものを感ずる。落合君の、整頓されて動きがないといふ評言も肯けるけれども、さりとて從來の一般批評のやうに、自然を繪畫的乃至模樣的に捉へた

作品だといふだけでは不十分のやうである。第三句の「潟をなみ」は、赤彦も「多少理智的に行つてゐる」と言つたやうに、誰でも不滿を覺えるのであらうが、さて此を除いてしまつてはまた平凡に流れるのではないか。さうした點を實はどう說明すべきか苦しむのであるが、中村憲吉氏の「鶴の習性や生活に對する作者の懇ろなる理解と愛情を示してゐる。この歌は由來繪畫的な描法の歌として喧傳されて居るが、單にそれだけと見るのは淺い」（萬葉集講座「山部赤人」）とか、齋藤茂吉氏の「自然界、動物界の顯象乃至生活をあらはして遺憾がない歌である」（新選秀歌百首）とか、土屋文明氏の「あの割合に複雜な海陸の景觀の中に、潮滿ち來り田鶴鳴き渡るといふ景物の更に加へられ來つた時にただ『和歌の浦に潮滿ち來れば』とのみ單純に言ひきつてしまひ、『潟をなみ』と幾分去來する心の跡を存して直ちに『葦邊を指して田鶴鳴き渡る』と續けてしまひ得ることは、やはり一つの態度であり、作者の力であると言ふ風にも思はれるのである」（萬葉集名歌評釋）とかいふ意見は、いづれも從來の見方以外の何物かをこの歌に認めてゐるものだと思ふ。假に私見を形づけて見れば、この歌は作者が一歩退いて自然を全體的に眺めながら、其處に行はれる或必然的な動きといふやうなものに感動してゐる、卽ち潮が滿ち干潟が侵されそれに續いて鶴が鳴き移る、その謂はば止み難い自然の進行、生命の顯現に對する感動に發したものであつて、それを自然の理法とか何とか概念的に持つて行かないで、もつと根本的な具體的な詠歎として受容れたいと思ふ。言ひ方が何だか大げさになつたが、例へば往還集の「秋あつき風と思へる堀水にみぢんこ赤く吹きよせられぬ」のやうな現代人的な感じ方に通ずるものがあつて、「潟をなみ」の句なども或はさういふ氣持から用ゐられたものかとも思ふのであるが如何であらうか。兎に角これは何か特色を持ち問題を持つた歌ではないかと思ふ。

み吉野の象山(きさやま)の際(ま)の木末(こぬれ)には幾許(ここだ)も騒ぐ鳥の聲かも　（卷六、九二四）

○　　藤森朋夫

神龜二年五月吉野離宮行幸時の笠金村の歌につづき、「山部赤人作歌二首竝短歌」と題されて同じく吉野行幸を詠じた一聯中の作で、初めの長歌の反歌である。既に先進によつてこの歌の高さは幾度かいはれた所であり、又赤人作品の傑作の一であることといふまでもない。先づ上三句を觀るに、その結構には並々ならぬ工夫の潛在してゐるのを思ふ。「み吉野の」と極めて大きく全面的にうたひ出して、これを次の「象山の際の」に自然に聯繫せしめ、さらに「木末」と押進め、自然の姿相を次第に作者がねらふ焦點にひきしぼつて行く手際には、流石に冴え冴えしさを感ぜしめられる。靜寂な山間に立つ作者は心を自然に滲透せしめ、それと深く交流することによつて濃やかな神經のはたらきを簡明に表出してゐる。四五句「ここだも騒ぐ鳥の聲かも」からは、動中の靜を感ずる。聲あるによつてより深き靜けさを汲み得る境地が、遺憾なきまでに披瀝されてゐるといへよう。一首まことに快く徹つた聲調を持ち、しかも觸感の柔かさの中に一種の張りをもち、明るくうたひ上げられてゐるのを覺える。眞に寫生に生きた傑作といへよう。

○　　上村孫作

象山は、象谷とか象の小川とか今も細かくその場所が言ひ傳へられてゐる。「大和には鳴きてか來らむ

作品だといふだけでは不十分のやうである。第三句の「潟をなみ」は、赤彦も「多少理智的に行つてゐる」と言つたやうに、誰でも不滿を覺えるのであらうが、さて此を除いてしまつてはまた平凡に流れるのではないか。さうした點を實はどう說明すべきか苦しむのであるが、中村憲吉氏の「鶴の習性や生活に對する作者の懇ろなる理解と愛情を示してゐる。この歌は由來繪畫的な描法の歌として喧傳されて居るが、單にそれだけと見るのは淺い」（萬葉集講座「山部赤人」）とか、齋藤茂吉氏の「自然界、動物界の顯象乃至生活をあらはして遺憾がない歌である」（新選秀歌百首）とか、土屋文明氏の「あの割合に複雜な海陸の景觀の中に、潮滿ち來り田鶴鳴き渡るといふ景物の更に加へられ來つた時にただ『和歌の浦に潮滿ち來れば』とのみ單純に言ひきつてしまひ、『潟をなみ』と幾分去來する心の跡を存して直ちに『葦邊を指して田鶴鳴き渡る』と續けてしまひ得ることは、やはり一つの態度であり、作者の力であると言ふ風にも思はれるのである」（萬葉集名歌評釋）とかいふ意見は、いづれも從來の見方以外の何物かをこの歌に認めてゐるものだと思ふ。假に私見を形づけて見れば、この歌は作者が一歩退いて自然を全體的に眺めながら、其處に行はれる或必然的な動きといふやうなものに感動してゐる、即ち潮が滿ち干潟が侵されそれに續いて鶴が鳴き移る、その謂はば止み難い自然の進行、生命の顯現に對する感動に發したものであつて、それを自然の理法とか何とか概念的に持つて行かないで、もつと根本的な具體的な詠歎として受容れたいと思ふ。言ひ方が何だか大げさになつたが、例へば往還集の「秋あつき風と思へる堀水にみぢんこ赤く吹きよせられぬ」のやうな現代人的な感じ方に通ずるものがあつて、「潟をなみ」の句なども或はさういふ氣持から用ゐられたものかとも思ふのであるが如何であらうか。兎に角これは何か特色を持ち問題を持つた歌ではないかと思ふ。

み吉野の象山（きさやま）の際（ま）の木末（こぬれ）には幾許（ここだ）も騒ぐ鳥の聲かも　（巻六、九二四）

○　　　　藤森朋夫

神龜二年五月吉野離宮行幸時の笠金村の歌につづき、「山部赤人作歌二首竝短歌」と題されて同じく吉野行幸を詠じた一聯中の作で、初めの長歌の反歌である。既に先進によつてこの歌の高さは幾度かいはれた所であり、又赤人作品の傑作の一であることといふまでもない。先づ上三句を觀るに、その結構には竝々ならぬ工夫の潜在してゐるのを思ふ。「み吉野の」と極めて大きく全面的にうたひ出して、これを次の「象山の際の」に自然に聯繫せしめ、さらに「木末」と押進め、自然の姿相を次第に作者がねらふ焦點にひきしぼつて行く手際には、流石に冴え冴えしさを感ぜしめられる。靜寂な山間に立つ作者は心を自然に滲透せしめ、それと深く交流することによつて濃やかな神經のはたらきを簡明に表出してゐる。四五句「ここだも騒ぐ鳥の聲かも」からは、動中の靜を感ずる。聲あるによつてより深き靜けさを汲み得る境地が、遺憾なきまでに披瀝されてゐるといへよう。一首まことに快く徹つた聲調を持ち、しかも觸感の柔かさの中に一種の張りをもち、明るくうたひ上げられてゐるのを覺える。眞に寫生に生きた傑作といへよう。

○　　　　上村孫作

象山は、象谷とか象の小川とか今も細かくその場所が言ひ傳へられてゐる。「大和には鳴きてか來らむ

作品だといふだけでは不十分のやうである。第三句の「潟をなみ」は、赤彦も「多少理智的に行つてゐる」と言つたやうに、誰でも不滿を覺えるのであらうが、さて此を除いてしまつてはまた平凡に流れるのではないか。さうした點を實はどう說明すべきか苦しむのであるが、中村憲吉氏の「鶴の習性や生活に對する作者の懇ろなる理解と愛情を示してゐる。この歌は由來繪畫的な描法の歌として喧傳されて居るが、單にそれだけと見るのは淺い」（萬葉集講座「山部赤人」）とか、齋藤茂吉氏の「自然界、動物界の顯象乃至生活をあらはして遺憾がない歌である」（新選秀歌百首）とか、土屋文明氏の「あの割合に複雜な海陸の景觀の中に、潮滿ち來り田鶴鳴き渡るといふ景物の更に加へられ來つた時にただ『和歌の浦に潮滿ち來れば』とのみ單純に言ひきつてしまひ、『潟をなみ』と幾分去來する心の跡を存して直ちに『葦邊を指して田鶴鳴き渡る』と續けてしまひ得ることは、やはり一つの態度であり、作者の力であると言ふ風にも思はれるのである」（萬葉集名歌評釋）とかいふ意見は、いづれも從來の見方以外の何物かをこの歌に認めてゐるものだと思ふ。假に私見を形づけて見れば、この歌は作者が一步退いて自然を全體的に眺めながら、其處に行はれる或必然的な動きといふやうなものに感動してゐる、即ち潮が滿ち干潟が侵されそれに續いて鶴が鳴き移る、その謂はば止み難い自然の進行、生命の顯現に對する感動に發したものであつて、それを自然の理法とか何とか概念的に持つて行かないで、もつと根本的な具體的な詠歎として受容れたいと思ふ。言ひ方が何だか大げさになつたが、例へば往還集の「秋あつき風と思へる堀水にみぢんこ赤く吹きよせられぬ」のやうな現代人的な感じ方に通ずるものがあつて、「潟をなみ」の句なども或はさういふ氣持から用ゐられたものかとも思ふのであるが如何であらうか。兎に角これは何か特色を持ち問題を持つた歌ではないかと思ふ。

み吉野の象山（きさやま）の際（ま）の木末（こぬれ）には幾許（ここだ）も騒ぐ鳥の聲かも　（巻六、九二四）

○　藤森朋夫

神龜二年五月吉野離宮行幸時の笠金村の歌につづき、「山部赤人作歌二首竝短歌」と題されて同じく吉野行幸を詠じた一聯中の作で、初めの長歌の反歌である。既に先進によつてこの歌の高さは幾度かいはれた所であり、又赤人作品の傑作の一であることいふまでもない。先づ上三句を觀るに、その結構には竝々ならぬ工夫の潜在してゐるのを思ふ。「み吉野の」と極めて大きく全面的にうたひ出して、これを次の「象山の際の」に自然に聯繋せしめ、さらに「木末」と押進め、自然の姿相を次第に作者がねらふ焦點にひきしぼつて行く手際には、流石に冴え冴えしさを感ぜしめられる。靜寂な山間に立つ作者は心を自然に滲透せしめ、それと深く交流することによつて濃やかな神經のはたらきを簡明に表出してゐる。四五句「ここだも騒ぐ鳥の聲かも」からは、動中の靜を感ずる。聲あるによつてより深き靜けさを汲み得る境地が、遺憾なきまでに披瀝されてゐるといへよう。一首まことに快く徹つた聲調を持ち、しかも觸感の柔かさの中に一種の張りをもち、明るくうたひ上げられてゐるのを覺える。眞に寫生に生きた傑作といへよう。

○　上村孫作

象山は、象谷とか象の小川とか今も細かくその場所が言ひ傳へられてゐる。「大和には鳴きてか來らむ

呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる」（七〇）の象の中山とは廣狹の差はあらうが同じ山を指して居る。今は明確に一つの峯を象の中山、隣つて三船山といふやうになつて居るが、この歌では一つの峯を指して居るのではなく漠然と其の邊の山容を指して言うて居るのである。さてこの歌は島木赤彦先生の推奬せられた歌であつて傑れた作であるとは私も思ふ。然し前の「い隱ろひなば思ほえむかも」の歌と比較すれば何うであらうか。上句は「沖つ島荒磯の玉藻」と同一手法ではあるが「み吉野の象山の際の木末には」の方がなだらかな調であると思ふ。然るに四五句に至つてはこの方が劣るやうである。少し力が薄いのではないか。何か匂がついてゐて其の匂が力を弱めてゐるのではないかとも思ふ。

○　　　　松井一郎

赤人の詠風は、閑寂幽雅清淡であるから常に心を潛めて味讀するに適ふやうである。この歌などは殊に清楚端正な感を與へるし、一首の主眼をなす四五句の邊などは極めて靜肅簡淨であるから、或は聲調の波動乏しきを感じさうである。然しながら「幾許もさわぐ鳥の聲かも」といふところの表現には、決して表面に甘美に張り出さない所があつて、吾々實作者にとつて非常にいい手本として示唆されるものがあることを痛感する。

○　　　　五味保義

一首に表現せられた情景がひそかな寂しいものであると同時に、この歌の音調がいかにも清く虔しく感

ぜられる。むしろ後者が主となつてこの歌を在來諸評家が、よつて以て佳作となし傑作となすのではなからうか。息をひそめて咏ずる趣である。特に「ミヨシヌノキサヤマノマノコヌレニハ」は非常にしづかな澄んだ感じがある。かつて本研究の合評に人麿歌集の「み食向ふ南淵山の巖にはふれる斑雪(はだれ)か消え殘りたる」(一七〇九)の第三句の「には」あたりに姿態を感ずるといふ批評があつたが、それに較べてこの「には」、特に「は」は輕くひびく所があつて目立たない。それは又全體が伸びのびとした、たくましい感情のうねりを持たぬ證左でもある。中村憲吉氏が、この上句を懇篤なる寫生の道程に於て、自然に生れた、所謂無技巧の技巧を藏する語と評されたのは、島木先生の批評と同じくいかにも評者の風格のにじむ見方である。神經が細かく物に到る作風の到達點を示した佳作なのではあるまいか。卽ち赤人のゆき方の成功した一型ではあるまいか。從つてものに對する「懇篤」をもつと違つた態度で扱ひ、いはば腹のある技巧によつて、しかも到達する所は緊要缺くべからざる勘どころをとらへる作風からは、この赤人のよき所が煩瑣になるのであらう。赤人の場合とは違つた「無技巧の技巧」があるといふことになる。

○

吉田正俊

これは甚だ端正な歌である。この歌の中心は「木末には」の「には」に在り、それが上句と下句の集中點をなしてゐて甚だ效果を齎してゐるのではないかと私は思ふ。それだから前評者の言もあつたが、それ自身としては相當につよい言葉ではあるまいか。故に若し人麿歌集の歌の「には」の邊に姿態を感ずるなら同樣、赤人のこの歌でもその强調性に姿態を覺えるとも云つていへなくはなからう。ただ赤人のは南淵

山の歌に於けるがごとく、「降れる斑雪か」といふやうなおつかぶせた云ひ方と違つて、「騒ぐ聲かも」と尋常に表現してゐるので、五味君の言ふ樣に兩者の「には」の間に自ら差異ある如く感ずるのではあるまいか。尙もう一つの原因として、この歌にはカ行の音が多くて、それが或韻律をなし「には」といふ言葉の强調性をよわく感ぜしめる樣である。

○　　土屋文明

赤人の主觀的の句には、幾分とつて着けたやうな感じのあることは前の九一八の歌について言つたが、この歌の如くになると全體が透明で綺麗ではあるが、何か水晶細工に對するやうな不滿がなくもない。詞の隅々まで理路井然として行亙つてをるのであるが、其以上の雰圍氣といふものには乏しい。端正といふ批評が出てゐるが、その言葉は直ちに道德的乃至常識的といふ方へも通じてゐるやうにも思はれる。ここにもやはり赤人の個性の力の足らない點があるためではないかといふやうな氣がされる。

ぬばたまの夜の更けぬれば久木(ひさぎ)生ふる淸き河原に千鳥數鳴(しばな)く　（卷六、九二五）

○　　鈴江幸太郎

前の歌と同じく吉野行幸供奉の長歌（九二三）の反歌である。初二句枕詞をつかつて單純に、柔く快い調子で起し、三四句の要を得た寫生で讀者を强く現實感に引き込み、「千鳥しば鳴く」と細かく又端的明快な

動詞の直說法で止めてゐる。完成された隙のない歌でありながら、自然であつて微妙な滋潤があり矢張り傑作といふ外ない。「更けぬれば」と「千鳥しば鳴く」の間に落着いた描寫のあることは安らかに情感に浸つてゐる作者を思ひ、腰を据ゑた態度を感じる。又「久木生ふる淸き河原」といふ至極簡單に見える句にこの歌の生命がかかつてゐるのを見ると、今更ながら寫生の效果が不思議なものに思はれる。尤も「淸き」は巧みであるが。「久木」は「木ささげ」說と「あかめがしは」說があるが、私は灌木といふ印象を受ける。兎に角現在の何であるか知れなくとも「久木」といふ確な詞及び調子は指呼しただけの力をもつてゐる。

○　　　　　　　　　　　　　　　松井一郎

この歌も又淸純簡潔な歌であつて、前の「み吉野の」の歌などと同じく赤人代表作として先進の指示され來つた所である。「久木生ふる」と第三句は字餘りになつてをるが、ここの句法は重厚で、靜に湛へ溢るるが如き聲調の妙趣をなしてゐる。三句から續く四五句の表現もさすがに緊迫してゐて、景情さながらを讀者に投げかけてくるものがある。從來この歌は第三句が問題視されることを聞くが、矢張りこれは月明の夜の歌と解すれば自然で從順であり、餘り穿鑿せずに味ふ工夫をすることは吾々實作者には必要で、土屋氏解說（萬葉集名歌評釋）等によつて解決していいと思ふ。又さうまでこの一句が歌の生命を混亂させるものとは思はない。第二句の訓み方も「夜のふけゆけば」より「夜のふけぬれば」と讀む方が私には今鑑賞上工合がいい。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

この歌を讀むとアララギ先進諸家の評言が直ちに想起されて、更に加ふるが如きことは至難である。この歌をこころみに舌頭にのせて幾度も讀み下してみると、滯るやうな所が全くなく、次々に移つてゆく語感は淸らかで、一音は一音を加へつつ美しく流露してゐる。無論平らかに滑らかにすべるなどといふ點がない。その引締つた、淸く澄んだ聲調は內容を形づくる語句の「久木」「淸き河原」「千鳥」等々の爲ばかりでないことと今更云ふ迄もない。斯の如き意味內容の境地は或は今でも味へるのであらうが、ただこの聲調の特質に到つては、やはり赤人の沈潜透徹をまたなければならなかつたのであらう。

一二句から三句に移る氣持は河原の景觀を初めて其夜見たといふのではなくて、旣に經驗を持つてゐるもののやうであり、自然に對する親しみ心が潤ひをもつて現はれてゐる。それゆゑ月明の夜かといふ赤彥先生の說も頷かれる。しかし又一面から考へると、必ずしも皎々として月が照り渡つてをらなくとも、以上のやうな氣持は充分味へるやうに思はれる。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

第三句に「久木生ふる」とある處から、この歌を月明の夜の作かと疑つたのは多分赤彥の創見で、爾來屢々この點が問題にされることは、前評諸說の通りであるが、これは或は赤彥說が先入主となるのと、久木といふ名稱が我々に耳馴れぬのとから來る處のもので、虛心にこの歌に對すれば、案外かうした疑問を起

さずに濟むのではなからうか。「久木」といふ植物は、集中「去年咲きし久木いま咲く徒に地にや落ちむ見る人なしに」(一八六三)、「浪の間ゆ見ゆる小島の濱久木ひさしくなりぬ君に逢はずして」(二七五三)の二例ぐらゐしか出てゐないが、然しその歌ひ方から見ても、恐らく當時の人々には極く普通の木で、「久木生ふる」は現在の我々が「松生ふる」とか「杉生ふる」とか言ふのと同樣の感じではなかつたらうかと思はれる。さうすれば特に月明でなくとも、直に「久木生ふる」と言つて自然なのではあるまいか。さうして作者は別に月夜の感じに訴へようとしてゐないのだから、讀者もさうした寫象の助けを借りずに味ふべきではないだらうか。これは既に中村憲吉氏の「山部赤人」に「作者はその樹種の何たるかを熟知するが故に、久木と指摘して云つたのである」と言はれ、又土屋文明氏の萬葉集名歌評釋には特に吉野川岸に「あかめがしは」の多い事を指摘して、「其の河瀬に沿うて立つ木を見れば晝間の經驗からして理窟を加へずに『ああ久木が』と感ずるのは極めて自然であらうと思ふ。夜目には久木を區別することは出來まいといふやうなことは、此處では問題にするに足りないと思ふ」云々と言はれてゐて、今更言を重ねる要もないやうであるが、兩氏ともにやはり月夜の歌といふことは言はれてゐるのは少し趣が違ふとも思ふし、私の意見はこの前の比叡山安居會で述べたこともあるので、この機會に記し留めて置くのである。

○　　　　　　　　　　　　土屋文明

久木のこと、月夜のことなどこのままでも味へる歌であることは前評にも出で、私自らも考へを述べたこともあるが、更に立入つて作家の心理にまで及べば、作者の構想其物に幾分明瞭を缺くものがあつたの

かも知れない。即ち晝間の經驗、夜になつての印象、見える時の見た記憶、見えない所の感じ、それらのものを組立てるに幾分無理な所があるのかも知れない。かういふ無理は赤人のやうに透明的な、理路を立てる作者に却つて多いのかも知れない。始めから模糊たる作風ならば、かへつてかういふ無理は起らないとも言へる。つまり簡單に言へば、作者は分るやうにと苦心していろいろの說明を用ゐてゐるので、却つて分らない所が出來てしまつたのである。

○

あしひきの山にも野にも御獵人得物矢手挾み散動りたり見ゆ　（卷六、九二七）

堀内通孝

「山部宿禰赤人作歌二首並短歌」の中、前出の二首（九二四・九二五）とは別に、御獵のありさまを歌つた長歌（九二六）の方の反歌である。意味も明快であるし、聲調も整つてゐる。一二句を大まかに言つてゐるので、形式的な感もあるが、以下の句との調和を考へると、さう非難すべきものでないと思ふ。結句の強い調子は一首を引締めてをり、矢張よい歌であると思ふ。

○

吉田正俊

對象を的確に見て明瞭に表現していささかの挾雜物を交へない態度は、直ちに同感が出來て吾々の作歌に或暗示を與へるところがある。そして一讀その情景を眉間に再現せしむる所は一つの力量とおもふので

あるが、慾をいへばそれが執拗性のない日本畫的であつて、嫌味のないすがすがしさを感ずる反面、何か物足りなさを覺えるのである。「得物矢手挾み」といふ句は、前に言つた的確性といふことに關聯した表現であるけれども、この邊が或は一首に要求するゆらぎといふやうなものを不足せしむる所にもなつてゐるのではないかといふ氣がする。

○　　　　　　　　　　　　　　　　落合京太郎

群衆の動きを鳥瞰圖的に描寫してゐる手法は新しいものであり、その點に興味を惹かれるのであるが、寫實が記述的にをはつてゐて、平板の誹を免れないと思はれる。レンズをとほして見たやうな鮮かさはあるが、作者の主觀を濾過せられた所が乏しいのであらう。敍景客觀の歌を否定する謂でないこと勿論であるが、この歌などは赤人の主觀の痩せてゐることを想はしめるのではあるまいか。

○　　　　　　　　　　　　　　　　五味保義

結局平板な歌で物足りないといふ點で前二評に贊成である。情景がはつきりして居るのだが、なにか面白味を缺いてゐる。ただかういふ歌でも赤人らしい所はたしかにある。たとへば「山にも野にも」とか、「得物矢手挾み」とか、畫中の人物でもみるやうな事をいひながら、そこは決して想像でなく現實直視の感じであるが如き眞面目な詠風がそれである。吉野の宮瀧邊の視野のせまい地理を知る人には、この二句が虛假のものでないことが更に明瞭になるであらう。その上、嫌味がなくておとなしいから割合一般の好尙

には向くのである。今云つた二つの句は實際の情景動作であるとはいへ、二つ共平坦であり立ち入りすぎたものであることは云ふ迄もない。「山にも野にも」は集中では赤人がはじめのやうだが、その外の數例も、山にも野にもほととぎすが鳴く、鹿が鳴く、鶯が鳴く、といつた風に形式的な表現になつてゐる。

○

朝なぎに楫の音聞ゆ御饌（みけ）つ國野島の海人（あま）の船にしあるらし（卷六、九三四）

藤森朋夫

これは聖武天皇が神龜二年難波の宮に御滯在遊ばされた時、その御威勢を讃仰し奉つた長歌（九三三）の反歌である。長歌に比してこの作はまことによく單純化せられ、すつきりとした裡に或る氣品をそなへてゐる。穩和にしてしかも爽快な朝の海に、楫の音をとらへ、これを中心に作者の感慨を吐露してゐる。自然に對する態度、またその實相を把握する確かさ、さうした點に於ける勝れたものがこの作からも直感される。土屋氏は嘗てこの歌を金村の「海未通女（あまをとめ）棚無し小舟榜（こ）ぎ出らし旅のやどりに楫の音聞ゆ」（卷六、九三〇）と並べ、赤人との比較をされ、「この二首の如きは吾々の蒙を啓くために作られた標本の如き好題目である」と述べられた。金村が表面的に輪廓的に自然を視ての上になされた描寫であるのに反して、赤人は眞に實相の奥底に入つて、把持すべき大切なるものを確かと摑みこれを生かしてゐる點注意される。尙本歌を誦してゐると、東歌の「都武賀野に鈴が音きこゆ上志太の殿の仲子し鳥狩すらしも」（三四三八）が、自ら想起されて來る。

○　　　　柴生田稔

藤森氏の説明のやうにこれは難波宮行幸供奉の歌であつて、長歌の「御饌つ國日の御調と　淡路の野島の海人の　海の底奥つ海中岩に　鰒珠多に潜き出　船竝めて仕へまつるし　貴し見れば」を受けてゐるのであるから、この反歌で「御饌つ國野島の海人の」云々と云つたのは、やはり讚歌の體をなしてゐるものととるべきである。しかしそれを人麿の吉野宮供奉の作「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の」（三七）や「山川も依りて仕ふる神ながら」（三九）の歌などが、思ひ切つてあらはに讚歎の感動を歌ひあげてゐるのと比較すると餘程趣が違ふ。恐らく赤人にはさういふひとむきな態度にみづから安んじ得ないといふやうな氣持が働いてゐるので、その點人麿より進歩的とも見られると同時に、反面そこに赤人の弱みがあるのではないかとも云へる。だがさうした態度の問題は別にして、結果としての出來榮からみると、この歌は赤人流のよく成功したもので、穩かな快い詩情を感ずることが出來る。餘り一般的に認められてゐないが、赤人作中の佳作といへるのではあるまいか。そのすぐれた點は藤森氏の引かれた土屋氏の金村作との比較によつて實に明瞭であるが、たとへば初句の「朝凪に」の一句にしても作者の詩人的素質が遺憾なくうかがはれる。集中「朝凪」といふ言葉はかなり用ひられてゐるが、他の用例、例へば同じ時の車持千年の長歌にある「朝なぎに千重浪寄り　夕なぎに五百重浪寄る」や、其他「朝なぎに水手の聲喚び　夕なぎに楫の音しつつ」（五〇九）とか「朝なぎに眞楫榜ぎ出て見つつ來し三津の松原浪越しに見ゆ」（一一八五）とか「之乎路から直越え來れば羽咋の海朝凪したり船楫もがも」（四〇二五）などに比べて、この赤人の場合が

いかに說明を越えた情趣の表現として働いてゐるかがわかるであらう。ちなみにこの幸は冬十月十日（太陽曆十一月二十三日）のことで、一首は卽ち初冬の朝の海邊の趣である。

（昭和十三年一月）

四十三　山部赤人の歌六首

扇畑忠雄

○

沖つ浪邊浪安けみ漁りすと藤江の浦に船ぞ動める　（卷六、九三九）

沖つ浪と邊浪とを對照的に羅列し、同時にそれが圖案的な效果を齎すかの如くであり、しかも「安けみ漁りすと」のあたりには理窟に過ぎたところが目に立つとさへ思はれるのに、下句にいたつて「藤江の浦に船ぞ動める」と言ひ切つた赤人の手腕には、一つの行き方として驚嘆せしめられるのである。勿論、上句だけを取立てて云へば右の如き不滿も感ずるが、下句への連續に於いて快い調子が生み出され、生動の趣が宿されてゐるのである。「既に『沖』にも『邊』にも波が靜かであると云ふから、そこに漁りする船の廣く散在する樣は想見すべきであつて、廣闊なる白晝の海の靜寂のうちには船人の聲もきこえるのである。『船ぞ騷げる』と云つても、これは海面に停止してゐての騷ぎの如くに感ぜられる」といふ中村憲吉先生のすぐれた批評も、上句と下句との交錯から織り成された妙趣を指摘されてゐるが如くである。

「藤江の浦に船ぞ動める」には動的描寫の積極性はないけれども、つつましい寫生によつて漁船のどよむ様を、靜謐境の裡にありありと再現せしめ得る程の力を藏してゐると思ふ。「海人とか見らむ旅ゆく吾を」（二五二、人麿）の主觀の昂揚はそこにはないが、或距離を持つた作者の自然に對する眼の淸々しさが感ぜられる。

〇　　　　　　　　　　　落合京太郎

この一首は赤人の九三八の長歌の反歌中の一首であり、その製作は金村の九三五乃至九三七の作と同時で、神龜三年秋播磨國行幸の時とすること諸註釋書の說くが如くであらう。中村先生の批評を引かれた扇畑君の言もあり、短歌のやうな短い形式の文學に於ては、その鑑賞にあたつて殊に深切な心を要すること言ふ迄もないが、この一首は私などにはやはり平板で調子の高からぬ作品と思はれる。句々の問題といふよりも作歌衝動の稀薄といふことになりはしまいかと考へられる。人麿の「飼飯の海のにはよくあらし刈ごものみだれ出づ見ゆ海人の釣船」（二五六）と比較すると、「藤江の浦に船ぞとよめる」がいかに平板であるかが看取出來ると思ふ。赤人の作は「住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆいづる船人」（二八三、黑人）にその聲調や描寫の態度が類似してゐるのであらう。「沖つ波邊波」といふ語も赤人の獨創ではなく、石川大夫に「沖つ波邊波立つとも吾背子が御船の泊波立ためやも」（二四七、年表は慶雲二年作と推定）がある。詞句の點からいつてもこの一首は必ずしも赤人の力量を認めしめるものではないであらう。

○

山口茂吉

私も何かこの歌に不滿を感じてゐるのであつて、それは結局平板であるといふのに落著くのかも知れない。落合氏も例に引かれた人麿の歌「飼飯の海のには好くあらし苅薦の亂れ出づ見ゆ海人の釣船」と比較して私も味つてゐた。私は、四五句のみではなく、上句の「沖つ浪邊浪安けみ」にしても、「飼飯の海のにはよくあらし」の句と比較して見ると力量の相違がよく分かるやうに思ふ。人麿の歌は、「苅薦の」と枕詞を入れたりして餘裕ある如く見えるが、つまりは全身的に歌ひ上げてゐて、一首がどことなく緊つてゐるのに反して、赤人のこの一首は少しく調子に乘つてやりすぎたといふ感があるのではなからうか。「沖つ浪邊浪」と對照的に並べた點に就いては扇畑氏も云はれてゐるが、これも赤人の一つの行き方と謂つてもよく「吾も見つ人にも告げむ」とか、「山にも野にも」とか、「丈夫は……未通女らは」とか、「昨日も今日も」とか、まだあるかも知れない。是等の行き方が必ずしも成功してゐないとは考へないが、この歌の場合はやはり氣が利きすぎてゐるといふ感じがするやうに思ふ。

○

五味保義

中村先生がこの歌と人麿の飼飯の海の一首とを比較された文章は扇畑氏によつて引用されたが、私は同じく「山部赤人」の中で興味ある一節を見出した。それは赤人の作風をいはれた中に、「赤人の歌は一事象を委しく分析して描寫してあつて、それは必ずしも道具立の多い事を意味しないが、語意の上から情趣を

詳かにせむとするので、結果として一首の感情を複雑にはしても、決してその調子を高めることにならない」といふやうな意味が述べてある。これも人麿との比較上からであるが、この一首の「沖つ浪邊浪安けみ」も亦赤人式分析描寫の例としてあげてある。私もこの一二三句はさういふ意味で工合がわるいと思ふ。中村先生の批評の中にはかうした懇篤な趣があつて、赤人を單純に稱讚して居らないのは注意しておいてよい。私は第三句で「漁りすと」とことわつたのも、下句を生動せしめぬ原因になつてゐるやうに思ふ。つまり現實に卽くといふのはかういふ仕方ではまづく、これでは現實をとらへたやうに見えて實は分析したのだと思ふ。人麿の「にはよくあらし」でも、「刈薦のみだれ出づ見ゆ」でも、やり放しのやうだが却つて單純に透つて生々の趣があり、より現實的である。一首一首の比較もかう適切なものを示されるとまことに味ひがあつて有難い。赤人のこの歌は氣品ありといはば云ひ得るのだが、亂に至らぬ用心をした氣品で、ここを通過した後の氣品でないと、つひに作者の息吹を持つに至るまい。

印南野（いなみぬ）の淺茅（あさぢ）押しなべさ宿（ぬ）る夜の日（け）長くあれば家し偲（しぬ）ばゆ　（卷六、九四〇）

○　藤森朋夫

續日本紀の神龜三年九月の條に「以二十八人一爲二造頓宮司一爲レ將レ幸二播磨國印南野一也。冬十月辛亥、行幸。癸亥、還至二難波宮一。癸酉車駕至レ自二難波宮一。」とあるが、聖武天皇のこの行幸に赤人も供奉して長歌（九三八）並に反歌三首（九三九・九四〇・九四一）を作つたものであらう。この歌（九四〇）良い意味に於

ける赤人的作風の表現された作品であると思ふ。「印南野の淺茅おしなべ」の歌句は、旅中に於いて觀取した自然が、如何にも素直に再現されて素材の配置とその把握の確かさとには根強い力が感じられる。「淺茅おしなべ」は一見極めて平明な言ひ方ではあるが、此處には實景を生かした新しさと、調べの上に流動する大切なものが存じてゐる。廣野に淺茅を枕として寢るといふ體驗、さうした寂寥感が全體にしみわたつてゐて、家郷を思慕する深さをより一層あらはにし得てゐる。四五句の運び方も自然であり、眞實感が滲透してゐる。既に注意されてゐるところでもあるが、巻七にある「家にして我は戀ひむな印南野の淺茅が上に照りし月夜を」(一一七九)の作は年代未詳の歌ではあるが、この歌を問題とする時直ちに聯想される。歌情に相通ずるものがあり、又その詠風にもすぐれたものが見出される。

○　　　　新井深美

第四句は原文「氣長在者」であるが、略解は「ケナガクシアレバ」と訓み、古義も「長の下に之(シ)の助詞をよみ付べし、之は例のその一すぢなることをおもく思はする辭なり」としてゐる。島木先生もこの訓を採つて、「八音字餘り句によつて音調の一跳躍をなして餘勢が他の句へ及んでゐる。平坦にして凡ならざる所である」(萬葉集の鑑賞及び其批評)と言ひ、中村先生も「山部赤人」(萬葉集講座)中にこの訓に從つてゐる。然し現在諸本多く「ケナガクアレバ」と訓んでをり、結句の「イヘシシヌバユ」に對しては、字餘りとせずになだらかに訓み下した方が、作者の嘆聲の自然に流露した引締つたつつましい聲調を感得する事が出來よう。結句にシ音の連續してゐるのも耳ざはりでなく、細かい感情を捉へてゐる所があるやうに思

はれる。

さてこの歌「日長くあれば家し偲ばゆ」と言つて、積り積つて來た感情が自らにしてこの一首となつたものであつて、懷鄕の情の切なものが感ぜられる。結句は調子が強く張つてゐる。この第一句に地名を詠じ、つづいてその地の情景を現す「淺茅おし靡べ」の調子高い寫生句を用ゐ、以下隙のない詠みぶりをしてゐる所、赤人の力量が思はれる。第二句は强ひて言へば人麿長歌中の「しのをおし靡べ」（四五）あたりに先蹤を見出すであらうが、兎も角一二三句の寫生によつて、表面的には平凡にも見え形式的にも聞える四五句の咏嘆が、讀者の心に自然に響くのであらう。

○　　　吉田正俊

第四句の原文が「氣長在者」であれば、强ひて「シ」といふ助詞を附け加へて訓む必要のないこと前評者の言の如くであるが、それかといつて「日長くあれば」と字餘りにせずなだらかに訓み下した方が、結句の「家し偲ばゆ」に對して作者の嘆聲の自然に流露した引締つたつつましい聲調を感得することが出來るとする、新井氏の說もやや自說に强引にひきよせたといふ感じであつて、「之」があるないによつてそこまで微妙な差異が生ずるものとは私には思へない。どちらかといへば調子からいつては赤彥の說の方に心がひかれてゐる。「印南野の淺茅おしなべ」が寫生句で、これあるが故に一首全體として大變な佳作となつてゐるといふのは、すでに赤彥の說もあり、前評者もまた之に言及してゐる。私はあながちこの句の重要性を否定するわけではないが、この程度のものはさう赤人の力量と驚嘆すべき程のものでなくて、ご

く普通の表現法ではないかと思ふ。一體に一首の安定した氣持は感得せられるが、やはり表面的にも內面的にも平凡で形式的といへるやうな氣がする。ただその表現が至極おとなしいので、讀む者の心持に反撥を感ぜしめる所がなく、そこから何となく作者の氣持に同感し同情する雰圍氣が生ずるものの如くである。それだからさういふ邊に關係して赤彥のいふ如く、八音字餘りの句に依つて音調の飛躍をなすといふ感じ方が、私は原文に忠實ならざるとしても、まことに興味があるのである。

○

田中四郎

明石(あかし)潟(がた)汐干(しほひ)の道を明日よりは下咲(ゑま)しけむ家近づけば　（卷六、九四一）

第四句「下咲異六」舊訓「シタウレシケム」は契沖によつて「シタヱマシケム」と訓ぜられたのに從つて憾はない。集中他に用例もなく赤人らしい味のこまかい、虔しやかな且つこころよいひびきをもつ句である。この歌は「明日は還御あるべきに定まりてよまれたるなるべし」といふ契沖說に贊成で、「歸路におもむきて云々」といふ略解には從ひ難い。一二句は環境を明快に呼び起した佳句である。「汐干の道」ときり込んだところに赤人の手腕があり、既に中村憲吉氏によつて指摘されてゐるやうに、一見無造作の如くであるが、深き實感に根ざしたところに力がある。つまり供奉の間、朝夕に親しんだ干潟の道であり、家に通ずる、家に近づくべき道である。「下咲ましけむ」はここに緊密に關連して躍動してゐる。

「家近づけば」は一首の情意を一層濃密にしてゐる（中村氏說）とも思はれるが、そこまで言はずとも只

下咲ましい氣持で歩むといふ程度で現在の吾々は足りるのではあるまいか。又「明日よりは」といふ句は一首をやや危くしてゐるがこの場合、下咲ましさの出發點として自然に受入れられる。

要之この一首は赤人の傑作とまでは行かぬが佳作たるべく、同時の作（九三九、九四〇）に比して更に複雜した情趣を、下咲ましい快調で貫いてゐる點に心惹かれるものがある。

尙「下咲ましけむ」などといふ氣持は前月評釋された九一八の結句「思ほえむかも」などと共通したものと思はれる。

○　　　　柴生田　稔

私も「汐干の道」といふ表現は注意すべきものと思ふ。一首の意味から言へばここは必ずしも「汐干」と言ふに及ばない。たとへば「濱べの道」とか「磯みの道」とか位でも筋道は通るのである。理路上必要でもない所に作者は何故特に汐干と言つたか。これはやはり作者の心理に浮ぶところがただ漠然とした若しくは抽象的な海岸の道ではなくて、どこまでも具象的な明瞭な「汐干の道」であつたことを示すもので、其處に赤人の藝術家としての素質を見るべきである。かういふ點は憶良よりも或は旅人よりも素質的に優れたところがあつたのではないかと思ふ。但し「明日よりは下咲しけむ」といふ處はいかがであらうか。作者は現在既に歸路に就くことを心に喜んでゐるのである。その心情を率直に言ひ切らないで、かういふ明日からを推測するやうな遠廻しな形で現さうといふのは、結局間接的で思はせぶりとも言へるのではあるまいか。田中氏の言ふやうにこの表現法は「隱ろひゆかば思ほえむかも」と共通する氣持であつて、或

は赤人の一つの新工夫かとも考へられる。即ち一種の心理的な味はひが意圖されてゐるとも見られるのであらうが、現在から批評すればかうした試みは結局正しい方向ではなかつたと言へるのではあるまいか。「下咲（したゑま）し」といふ言葉も何か生ぬるくて好い感じがしない。

○　土屋文明

「汐干の道」は事實に卽した句で、實際干潟を直ちに道に利用して居つたのであらう。尤も、そこの所は隨分大まかに感ずるのであらうから、「川瀬の道」などと同じやうに餘り詮議する必要もないやうに思はれる。或場合は干潟を通る道であり、或場合は干潟の近くを通る道であつて差支へない訣である。結句の「家近づけば」は理になづむといふよりも事理を立てた言ひ方で、私は差支へのない、寧ろ把へ得た句法と思ふが、「明日よりは」以下の調子が何處か表面的で力のないのは、殊によると赤人は自分の個人的感動に立脚せずに、從駕の公卿たちの心を推測り代つて歌ふといふ程ではなくとも、それらの人の氣持をも外らすまいとする心持が行屆き過ぎた爲に、率直に調子が伸びなかつたのではないかとも思はれる。さう云へば前の「印南野の」の歌にしても似通つた生溫さが感じられる。更に前の歌に溯るが「沖つ波邊波安けみ」の句も光景を眼前にしてゐないのではないかといふ憾みがある。比較された人麿の「飼飯の海のにはよくあらし」には實景を確かに眼前に捉へてゐる所があるのであらう。この邊は赤人としては油の乘つて居る年齡だと思はれるが、何か慊りない感じのする三首である。

玉藻苅る辛荷（からに）の島に島回（しまみ）する鵜にしもあれや家念はざらむ　（巻六、九四三）

○

藤　森　朋　夫

これは赤人の覊旅の歌で、播磨國辛荷島を過ぎた時作つた長歌の反歌三首中の第一首である。辛荷の島については地名傳說が播磨風土記の中に見られる。卽ち「韓荷の島韓人の破れたる船と漂へる物と、この島に漂ひ就きき。故、韓荷の島と號く。」とある。同國揖保郡室津村の南方に在つて、地辛荷・中辛荷・沖辛荷の三島から成つてゐる。三句「島回爲流」は舊訓「アサリスル」と訓んでゐたが、古義に「シマミスル」と訓むべきを說いてから、諸書多くこれに從つてゐるやうである。赤彥は舊訓を踏襲しその上に批評を試みてゐる。「島回する」の解については比較的新しい註釋書についてみるも、新解、新講等は「島めぐりをする」と解し、全釋、總釋等は「島で餌をあさつてゐる」と解してゐる。島回（シマミ）は集中にも磯回（イソミ）（卷七、一一六四）、磯廻（ミ）（巻三、三六八）灣廻（ミ）（巻十九、四二〇二）等の例があり傍證となる。それでこの解は「島をめぐる」意が原義で、さらにその島をめぐる動作をして餌をあさる意にまで押進めて解するに至つたものであらう。夙く古義に「島めぐりして、食を求る」の意としてゐるが、それでよいであらう。四句「鵜にしもあれや」のあれは命令形、それにやの感動助詞が添つた形と見られる。反語の意にとつてゐる解も見られるが、この場合はさうではない、むしろ願望にちかい意味にまで解せられよう。

旅路にあつて眼新しい自然に次々と接した作者は、そこに一脈の旅愁を覺えたであらう。辛荷の島の實

景に觀入りつつ切實に感じたのはやむにやまれぬ望郷の念である。この實感が赤人的の聲調と寫生とによつてありのままに吐露されてゐる。「玉藻刈る辛荷の島に島回する」には實に滑らかな響を感ずる。しかも新鮮味豊かに自然の實相が生かされ、四句に於いて無心の鳥と自らとを比照して感慨をのべ、さらに結句へと屈折を置いて內感の高まりを訴へてゐる。四五句の連續には從來何か氣になるものがあつた。しかしよく味つてみるとこの點に一工夫試みられてゐるのではあるまいか。情と形の上に變化と新味を齎してゐるやうに思はれる。

○　　　　　　新井深美

前の歌と同じく神龜三年丙寅秋九月十五日に播磨國印南郡に幸せる時の從駕作歌であらう。第四五句については代匠記に「鵜は番ひ離れず打つるる上に、人の如く思慮なければ何となくあさるを見て、あの如くのものにてあらば、我も家における妻をも思はでうしろやすからむや」とあるが、ここまでさし入つた解釋をせずとも、率直に「アレカシと願ふなり」(略解)と解して充分理解出來よう。この歌、作者は對象を確りとみつめてゐて「辛荷の島に島回する」と手堅く克明に表現してゐるのであるが、「シマニシマミスル」は小刻みに過ぎてやや堅い感じがする。又三句までの發想のこまやかな所は流石に赤人らしい聲調であるが、第四句で一應休止させ「家念はざらむ」と結句に推量の句を据ゑたあたり、何か問題があるやうに思はれる。つまり主情的な感慨を端的に表現せずに、反省を加へ理路を整へて常識的にまとめた爲め歌柄を小さくしてゐるのではあるまいか。

○　吉田正俊

「鶏にしもあれや」に就いては願望であるといふ說と、假定と取り度いといふ說と二樣あるやうであり、新井氏は前說を取り、赤彥は後說を採用してゐる。私は「鶏にしもあれや家念はざらむ」といふ工合に第四句で終止させず、繼續的な句法に取り度いので或は文法上からはいかがといふ點もあらうが、赤彥のいふ如く「鶏であつたならば家を念はないであらうに」と解釋するのである。强辯を用ふれば「鶏であり度い、さうすれば家を念はないであらう」といふ、つまり願望の說はそれを押し進めてゆけば結局「鶏であつたならば家を念はないであらうに」といふ假定の說と裏腹になりはしないか。ただ兩者の間に幾分感情の强弱があるだけではないかと思ふ。もう一つ「鶏にしもあれや」で終止した形とすると、新井氏もいはれたことであるが、更に理智的の度合が强くなつて感情の細みがあらはになりすぎる。それから「島に島囘する」は小刻みすぎると前評にあつたが、小刻みでなくて案外鷹揚がない方ではないか。この一首は感じ方にやや後世ぶりの所があらはれ始めてゐて、一歩行きすぎると甚だ厭味なものに陥る危險性を含んでゐるやうに思ふが、そこを危く食ひ止めてゐるのは、赤人の力量といふよりは時代の賜物であらう。自己と對象とを混淆し勝であつた、所謂古代ぶりとはこの一首はやや趣を異にするので、さういふ點から次第に細みを帶びて來た、いはば新風であつたかも知れぬ。

○　佐藤佐太郎

「鵜にしもあれや」を疑問として解するならば「鵜であるからか、鵜は家を念はないだらう」といふことになると思ふが、感情に曲折がありすぎて自然でないやうな氣がするから、願望として「あれよ」と解する方が自然であるやうに思ふ。この歌は長歌を見ても海上にあつての歌であることがわかり、さうすれば「島囘する鵜」といふ表現も一層適確なものとして受け容れることが出來る。しかしこの一首はさう出色の作とも思へず、反歌三首中ではやや見劣りがするのではないだらうか。「島に島囘する」が問題になり、吉田氏のいふ所も氣持はわかるのであるが、「タマモカルカラニノシマニシマミスル」といふ同音の連續は諸調の美といふよりはやや表面的單調であり、聲の微妙なる顫動がない。

島隱り吾が榜ぎ來れば羨しかも大和へ上る眞熊野の船　（卷六、九四四）

○　田中四郎

既に定評ある傑作である。三句「羨しかも」が四五句全體へかかり、「眞熊野の船」の名詞止がどつしりと据つてゐる點は赤彥氏が指摘された通りである。「羨しかも」の三句絕が後世のそれと趣を異にしてゐる微妙さは土屋氏が指摘してゐる。試に神龜三年迄の短歌から（年表による）、第三句に「かも」を用ゐた歌を拾ひ出してみると左の如くであつて、約五百五十首に近い短歌の內、僅かに六首に過ぎず、且つ名詞止のものを一首も見出し得ないことは、この歌の位置を定める上に多少の興味となるであらう。

　橘の島の宮には飽かねかも佐田の岡邊に侍宿しにゆく（卷二、一七九）

み吉野の玉松が枝は愛しきかも君が御言を持ちて通はく（卷二、一一三）
釵著く手節の崎にけふもかも大宮人の玉藻苅るらむ（卷一、四一）
吾妹子をいざ見の山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも（卷一、四四）
百重にも來及けかもと念へかも君が使の見れど飽かざらむ（卷四、四九九）
うちたをり多武の山霧しげみかも細川の瀬に波の騷げる（卷九、一七〇四）

○　山口茂吉

播磨灘の辛荷の島あたりを小舟に乘つて西に向つてゐる時、偶々熊野船の東方大和の方に向つて上り來るに出會ひ、望鄕旅愁の情をこの熊野船に寄せてゐる歌で、少しも無理なく自然に咏まれてゐて、斯くまで感慨をこもらせてゐるのは、さすがに赤人の非凡さを示すものである。「ともしかも」の句はこの歌の中心をなして居り、渾身の力を引しぼつて叫び上げたといふ感じがする。そしてこの「ともしかも」を受けた「大和へ上る眞熊野の船」といふ四五句も、赤人には珍しいぐらゐ重厚な堂々とした据ゑ方であり、「マクマヌノフネ」といふ聲調には一種云ひがたい寂しさがこもつて居て、旅愁の感の滲みいづるやうな趣がある。

「熊野の船」といふのは、神代紀に、「熊野諸手船」などと見えて居り、古義でも、「みくまぬの舟は、早船の類なるべし」と云つてゐる如く、熊野は波の荒い外洋に面してゐるから、相當大きい船を造つたものと想像することが出來、「熊野の船」といへば當時世に聞えたもので、途中で出逢つてもその形を見て

直ぐそれと分かるまでになつてゐたものではなからうか。それに比べて、赤人の舟は長歌の方にもある如く樺皮纏造りの小舟であつて、次の九四五の歌「風吹けば浪か立たむと伺候に都多の細江に浦隱り居り」の如くに、少しく風が出たり浪が立つたりすると航行出來ないやうなものだつたらしい。家郷を離れつつ行く海路の旅の寂しさに加へて、こんな有樣で心細さは一入堪へがたいものだつたと思はれる。そこへ風など物ともせぬ熊野船が東へ上つて行くのを見て、故郷へ向ふ船に對する羨しさだけでなく、もつと何力強いものにすがつてゐたいやうな心許なさから、「熊野船」そのものに對して一種の羨望を感じたものではあるまいか。つまり「鵜にしもあれや家念はざらむ」の望郷の切なさと、「浪か立たむと……浦隱り居り」の心細さとをこめたやうな複雜な感慨がこもつてゐるやうに思ふのである。

○　　　　　五　味　保　義

田中君の擧げた第三句の「かも」の例は、赤人の後にもかなり澤山にあつて、集中でおよそ五十數例を見ることが出來るが、赤人のやうな「ともしかも」云々は外に例がないと言つてよい。然しこれが非常に成功した、しかも清新な句法とは私には思はれない。むしろ他の用例の方が自然でもあり、伸々とした聲調を持つて居るのではあるまいか。人麿の句法にも意外に新工夫があり、人麿以外には見られない用法をしばしば發見したのであつたが、それにはも少し積極的な問題があつたやうに思ふ。そこで私は山口君のやうに、この句が渾身の力を引きしぼつて叫び上げたといふ風には感じてゐない。また既に赤彥說にあるやうに、四五句がそれに應じて堂々と据つた優れた名詞止だといふ程に思はれず、むしろ全體として聲調

が穏かで無難な趣があり、それに語意から感ぜられる作者の旅愁が、讀者に穏かに感ぜられて來る歌ではないかと思ふ。「島隱り吾が漕ぎ來れば」あたりは靜かな情緒を誘はれるところがあるけれども、それかと言つて生々しく流露する趣に一歩足りない處があつて、言葉として好感が持てるのであるが、それが一首全體に對して左程の效果をもたらしてゐないやうに思はれる。「眞熊野の船」と言つたからには、船の形か何かに特殊なところがあつたものかと思はれるが、この歌は大和に向ふのを「羨しかも」と言つたのが中心で、眞熊野の船が自分の船に比して結構が大きかつたといふ風に、その船の名前に意味をつけない方がこの歌として素直に響くところがあると思ふ。

○　　扇畑忠雄

風吹けば浪か立たむと伺候(さもらひ)に都多の細江に浦隱(がく)り居り　（卷六、九四五）

都多の細江といふのは姫路市の西南方飾磨川口を指すと思はれるが、一首に歌ふところは海波を避けてその細江に船を停めてゐる狀態である。

第三句「伺候」の訓については、「マモロフニ」「マツホドニ」「サモラフニ」等の諸訓をしりぞけて、「サモラヒニ」が最も据つてゐると思ふ。「サモラヒ」と體言にした語調には、全體のつつましい淸雅な風格に適つたものが感ぜられる。古義に、「今現に、風發りて吹ばなり」と釋いてゐる如く、一二句は現實の急促した狀態が簡素な表現に託されてゐるのであるが、そこには何らの主觀の叫喚はない。むしろ冷た

いまでに取りすました落著きが下句に移行してゐて、端正沈潜の佳調を成してゐる。ただ「伺候に」の句が上下句間の調子の均衡をとつて、平板より救つてゐるのが感得される。

「浦隱る」と熟した表現は集中稀であるが、「浦」は大川旁曲諸船隱風所也（和名抄）であり、「細江」といひ、「浦隱る」といふ所にも作者の細かい客觀的詠風が見られる。そこには混沌とした力の發動はないが、對象が客觀的に、知的に處理されてゐる點に、鑑賞者が或ひは反撥する所があるのではあるまいか。然し、そこに一つの「美」のあることとも肯定されなければならないだらう。中村憲吉先生の「未だ來らざるものに對する警戒といふ知的活動がある」「恐怖を消極的に說明するのみであるが、作中の主人公には周到なる警戒と一種の怯懦とがある」といふ批評言も知的なものの美しさに觸れた味到の語と思ふ。この一首をつらぬくものはあらはな訴へではなくて、作者の細かい神經の顫動であらう。

○　落合京太郎

自然の中にかすかな自己を置いて、それを客觀してゐるやうな趣のある歌である。これはこの一首に限らず赤人の作品の何處かに通じて見られる特徵であり、人麿が自然に對して自己の息吹を注入し、自己の主觀により自然を躍動せしめてゐるやうな趣があるのに反し、赤人の場合は自然に對して自己を反映せしめずして、いはば自然を靜的に描寫し、主觀をも自然と同一の平面に置いてゐる。そしてそこにあらはれた主觀は人麿のやうな古蒼なものでなく、近代的ともいふべき纖細な感覺を有してゐる。それゆゑにこの一首なども割合に近代人向のする新しさがあり、反感の唆られる所がない。「浦隱り居り」の如く「居り」

を結句とした作は近頃の歌人によつてきはめて多數に作られて居り、吾々が實作にあたりこの句を用ゐる場合には引目を感ずる位であるが、それを早く赤人が用ひて居り、而も萬葉集中「居り」の結句は、赤人の外には高宮王の「波羅門の作れる小田を食む烏瞼腫れて幡幢に居り」（三八五六）の一首しかない事なども興味がある。一首を通讀した時は割合に素直な感じがするが、仔細に考へてみると「都多の細江に浦隱り居り」の新しみのあること云ふ迄もないが、「風吹けば浪か立たむと伺候に」は小刻みにすぎ結局は平板にして動きを缺くといふべきではあるまいか。さういふ點で自分にはやはり不足が感じられるのである。

○

柴生田　稔

扇畑氏によつて中村憲吉氏の言葉が引かれてゐるが、これはこの歌を人麿の「三津の崎浪をかしこみ」（二四九）の歌と竝べ、赤人と人麿の作風を比較しての評言であるから、其處を考へないで單純に赤人のこの歌の批評と見ては、中村氏の眞意を誤るおそれがある。この歌は落合君のいふやうに近代的な纖細な感覺が働いてゐて、赤人全作品中の佳作であると思ふ。さうして一首の根柢をなすところのものは、やはり冷嚴な客觀の透徹ではなくて穩和な主觀の節度である。落合君の不滿の氣持にも同感出來るが、この程度に成功してゐれば、一境地を認めて作者の力量を尊敬していいと思ふ。曾て萬葉集を讀んで初めてこの一首に接した時、意外に新鮮な感じに打たれたことなどをも想起する。

土岐善麿氏が昨年五月の「文學」に於いて、この歌の第三句を「待つほどに」又は「さもらふに」、結句を「浦がくり往ぬ」と訓み、作者の船が浪を恐れて辛荷の島際に低徊してゐる時に、眞熊野の船が風を冒

して浦がくりに都の方へ漕ぎ去るのを羨んでゐる歌であると解釋し、「僕は、この機會において、この一首の現在普及されてゐる定訓を改め、解釋の上にも、鑑賞の上にも、右によつて變更の行はるべきことを提言する」と言明して居られるのは、遺憾ながら從ひ難い。土岐氏の說は、結句の字面の「浦隱居」が寛永本其他には「浦隱徃」となつてゐること等の客觀的根據も擧げてあるが、根本的には氏のやうに訓み解する方が、歌に「變化屈折」が出來、旅愁が一層深く、一首の價値が高まるといふ、鑑賞上の要求から來てゐるのである。これは古寫本の字面や、「浦隱り」の意味などからも難點があつて、純粹に訓詁的にも成立しがたいのではないかと思ふが、更にその方が歌の價値が高まるといふ根本理由の方も私は感じ方を異にしてゐる。主語が省かれた用例は、たとへば「立ちて見に來し印南國原」(一四)などといふ工合に確かに古歌に存在するにしても、この場合土岐氏のやうに、この歌の「浦隱り徃ぬ」の主語は前の歌の「眞熊野の船」だといふやうな省略はどうも不自然で、或は現代歌人の安易放修な連作癖に影響された考へ方ではあるまいか。曲折が出來望鄕の感が強くなるといふのも、一首を理を以て解し喜ぶ通俗的常識的な見解のやうに思はれる。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

この一首は私もどこか清新の趣があつて、形式以上のものを傳へてゐるやうに思ふ。さういふ點では赤人作中注意してよい作かも知れない、ただ三句の訓については前說で多く認められた「サモラヒニ」ではまだ落著かないやうな氣持がする。結句は「浦隱り居り」に落著くのではないかと思ふ。旣に風が吹いて

居るので海波を恐れて碇泊して居るのであらう。さういふ自然の感じ方が、前評にも出たやうに近代的で、しかも其處に力づよい單純化の行はれてゐる所が注意される。この複雜な事象を全體的に把握しつつ強く單純化する力は、赤人の作風の一特色であることを私は豫々考へて居つた。

（昭和十三年二月）

四十四　山部赤人の歌七首

縄の浦ゆ背向(そがひ)に見ゆる奥つ島榜(こ)ぎ回(た)む舟は釣為(せ)すらしも　（巻三、三五七）

〇　　　　　　　　　　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

當時「背向に見ゆる」といふのは今日の人が種々に解釋するやうな面倒なものでなくて、氣持のよい言葉として使はれもし、從つて理解され易いものであつたのだらうと思ふ。さういふ具合に考へてみれば、「縄の浦ゆ背向に見ゆる奥つ島」といふのが或點まで印象が瞭然としてくるやうであつて、面白い廣潤な景色といふことが分かる。「榜ぎ回む」にしても、現代歌人は早速に用ひ難い言葉なのであらう。然し鑑賞上理解するには、さう難かしいものではない。第五句へ讀み下していつて順當な氣持の言葉で一首が成つてゐると思ふ。人麿の羇旅歌八首等の作と比べると別の意味の物足らなさはあるが、何れかといへば人麿のよりも、近づき易く親しみ易い旅の氣持が汲みとれるやうに思ふ。赤人作中傑作とは云へまいが佳作とはいへよう。淸楚樸純の歌である。

五味保義

○

「背向」について前評のごとくに云つてもしまへるが私は猶この語の意義に執してゐる。「背向」の語の用例で最も多い形式は「粟島を背向に見つつ」（五〇九）ですべて五例ある。次に「左日鹿野ゆ背向に見ゆる」（九一七）で二例であるが、どちらも赤人の作。「ここにして背向に見ゆる」（四二〇七）といふ家持の作も之に類すると思ふ。次に「筑波嶺に背向に見ゆる」（三三九一）といふ東歌の例は趣が違ふやうだ。但赤人の九一七の「ゆ」を、「に」に解すれば同一例にならう。（山田博士の講義に説くやうに「見ゆ」を動作にとらないで「在る」といふ意味だと考へれば猶更同一範疇に屬する用ひ方となる。）さて殘された「朝日さし背向に見ゆる　神ながらみ名に帶ばせる　白雲の千重を押分け　天そそり高き立山」（四〇〇三）といふ家持の歌は形が違つてゐて特例といふべく、卷七の「吾背子をいづくゆかめと辟竹の背向に寢しく今し悔しも」（一四一二）（卷十四、三五七七はその類歌）は更に違つた用法（見ゆ、見つつ等の附屬せぬ）である。以上がその全部である。

従來は最も用例の多い「春日野を背向に見つつ　足引の山べをさして　夕闇と隱りましぬれ」（四六〇）の如きに依り、又「背向に寢しく」を「後むきにそむき寢た」と解し、又「背向」の字面などからも考へて「背向」を「後方」の意にとつて居るやうだが、それが右の諸例に通じる意義づけではないのである。この歌でも「縄の浦から後方に見える」云々としてみても、その「後方」は如何なる標準によつて「後方」であるかがわからない。そこで「斜ぐらゐの意」（新解、全釋）としたり、「作者は舟に乗つて或方向に進ん

であるから、その作者から後方に」云々（新考）としたり、「網の浦に立ちて顧みれば海上に見る沖の島」（講義）としたり、諸説多いので前評者が之を「面倒」と云はれたのももつともである。

此度私は「背向」十二例の新古を考へ、また作者をも考慮に入れてその語義を探つたが判明しない。又右の如く形式上からは分類出來ても、前後の意義からは頗る融通性に富み、一定の法則をとらへることが出來なかつた。結局今の吾々と違つた語感があつたとするより外はないが、此度私は十二例に幾度か執してみた結果、次のやうな考へが不明瞭ながら出來かけてゐる。それは距離感を主とした、いはば「離れて在る」とか「離れゆく」とかいふ意味を持つてゐるのではないかといふことである。實景實狀に向ひながら、「離れる」の意を述べるとき、作者たちはその場合々々によつて、「離れる」動作或は狀態の中心、標據で、この語を驅使したために各用例に通じて「後方に」とはならなくなつてゐるのではないか。この歌では赤人が「網の浦」を心の中心において、それに對して海上の「奥つ島」を對照して描いてゐるのではなからうか。これは用例が例ど「見ゆる」「見つつ」とあるために私がさう考へるやうになつたのでもあらうが、「見ゆ」のない「背向に寢しく」でも「後むきに」よりは「離れて」の意を加へて解した方が面白くはあるまいか。以上は用例をもつと詳細にあげて述べねば不徹底であるが。

この歌、手堅いのかと思ふがうるほひが乏しく、さして面白いともおもはない。中村先生が結句に注意され、自然の風景の中に人間生活の營みを心にとめたことにより、一層自然の風景が作者の愛著を惹く所となつたといはれたが、私は今そこまで忽然として入つてゆけない感情を持つてゐる。

武庫の浦を榜ぎ回む小舟粟島を背向に見つつともしき小舟（卷三、三五八）

○

山口茂吉

この歌は古來樣々に解釋されてゐて、それ等の說を一々參考して居ると、この歌を一層難解ならしめるやうな氣がするばかりでなく、一首の價値を引下げることにのみ役立つてゐるやうにさへ思はれる。さうむづかしく考へるまでもなく、この歌は、作者が武庫の浦の邊を舟行してゐて、その武庫の浦を榜ぎめぐりつつ漁する小舟の群を、やや離れたところから見、更にその小舟群の背景に粟島をもこめて大觀的に見るその風景に心を惹かれて、明媚なる風光を賞讃する氣持を端的に表はしたものと思ふ。一首の意を約めて云へば、武庫の浦を榜ぎ回む小舟は常に粟島を背景に見つつ何といふ羨しい小舟なのであらうか、といふぐらゐの意であらう。

やや難解なのがこの歌の難點であらうが、かういふ荒削りの未完成とも思はれるやうな表現の中に、滋味を具備してゐるやうに思ふ。つまり意味的內容よりも一種稚拙とも云ふべき表現からくる素朴單純な聲調がこの歌のいい點ではあるまいか。

なほ、粟島に就いても諸說があるらしいが、卷四（五〇九）に、丹比眞人笠麻呂が筑紫國に下る時作つた長歌があり、その中に「天放る夷の國邊に　直向ふ淡路を過ぎ　粟島を背向に見つつ　朝なぎに水手の聲喚び　夕なぎに梶の音しつつ　浪の上をい行き割くみ　磐の間をい往き廻り　稻日都麻浦回を過ぎて」云

々といふ句があるが、粟島の位置を知るのに参考になるのではあるまいか。

○　落合京太郎

山口氏も觸れられた如く、この歌の解釋にはいろいろあつて、私にも實はよく判らないのであるが、「この粟島をよそに見捨て、武庫の浦を漕ぎめぐりつつ大和の方へ上りゆくは、うらやましき小舟ぞといへるなり」といふ古義の說にしばらく從つて置き度いと思ふ。歌の印象が不明なのは二句切で、一二句と三句以下がなにか對立的なやうな感じを起させ、而もその意味上の聯絡に疑問を起させるところがあるのと、一つには背向といふ言葉が、吾々の現在理解してゐるのと違つた意味を當時は持つてゐたらしくも思はれる點に胚胎してゐるのかも知れない。前評者は荒削りで未完成のやうな表現といはれたが、それは恐らく二句切のあたりから受ける感じではないかと思はれる。しかし私にはこの作品は歌柄が小さく小じんまりとした表現であり、荒削りといふやうな感じはしないのではないかと思はれる。表現にゆとりがあるために却つて歌に鑑賞の餘裕を與へる作品もあるが、この歌はさやうなゆき方の作品ではなく、なにか感情にうるほひを缺いて居るやうに感じられる。

○　相澤正

武庫の浦と小舟、粟島と小舟といふ見方が一見清新な味ひを生んでゐる如くであるが、意の疏通しない所が憾みである。大きな光景を簡明に仕上げようとする所から來る纏め方の一工夫と見てもよいが、結果

は武庫の浦、粟島といふ固有名詞が漠として内容を緊締してゆく力に乏しい。歌全體が浮動して安定感のないのが物足らない。「背向に見つつ」といふ詞は私は實景に就て知識がないからであらうが、「繩の浦ゆ背向に見ゆる」といふのと同樣に或一つの氣分として味つてゐる。當時はもつとはつきりと規定されてゐたのであらうか。年表の推定の如く行幸供奉の時の作と思ふので、その製作動機といふことも考へるべきであらうが、この歌は矢張機械的で自然流露に缺けてゐる。

○　土屋文明

「背向」は作者の進む方向を規準として言つてをるのであらう。從つて作者の位置の變化により「背向」の絕對的方向は移つて來る筈であるが、そこまでは作者は顧慮せずに、主觀的に背向と言ひ切つてをるのは面白いと思ふ。然しそのためにこれをあとから地理的に說明しようといふことになれば、とりとめどころがなくなるのは是非もない。

高桉の三笠の山に鳴く鳥の止めば繼がるる戀もするかも　（卷三、三七三）

○　土屋文明

結句は「コヒナキスルカモ」といふ新訓萬葉集の訓が次第に信奉者を增して居る樣であるが、私は古來の「コヒモスルカモ」の方が宜いと思ふ。文字の事は別にしても「コヒナキスル」などといふ言葉は第一

西洋臭くていけない。この短歌は春日野に登つて詠んだものであり長歌に續いて居るのであるが、その長歌の方を參照して見ても、此戀なるものが特定の人に對する實感であるか否か甚だ覺束ない。長歌の結句が「逢はぬ兒ゆゑに」となつて居るが、全體からすると春日野の野遊びに際して、所の景色を歌ひつつそれを戀に關聯させたまでで、謂はば今日の流行歌謠の如く野遊びの子女が口にのせて喜んだ程度のものではないかとも思はれる。その趣は三二五の神岳に登つての作「明日香川川淀さらず立つ霧の思ひすぐべき戀にあらなくに」が、懷古の情を述べて居るのと幾分似ては居ないかと思ふ。一首は赤人風の淡白に過ぎてねばり氣の足りない風の所もあるが、序を長く取つて單純に歌つて居る所は嫌味のない一首である。

○

落合京太郎

春日野に登りての長歌もそれにつづくこの反歌も、作者の調子に油が乘つて居り、柔軟にして滑らかな趣があり、ことに結句の「戀もするかも」あたりにやや調子の輕さを思はしめるところがあるので、前評者の「謂はば今日の流行歌謠の如き」感もしないのではない。しかし私はやはり素直に「相聞に入るへきを野望に因て物に感して詠まれたる故ここには載するか」（代匠記）といふやうにとりたい。春日駘蕩の中に間なく鳴く鳥が音に、自己の戀情をかへりみるといふやうなところは、やはり幾分の年齡を重ねた作者を想像させ、さういふ點から言つても常識的なところがあり、口あたりがよく、從つて歌謠的といふやうな批評も生ずるのであらう。けれども一首の持つてゐる聲調には捨てがたきものがあり、何か近代人の有する生活的疲勞に似た感じなども暗示せられてをり、赤人の作としては代表的な作品ではないかと思ふ。

○

柴生田　稔

結句は原文「戀哭爲鴨」で、古來「コヒモスルカモ」と訓んで來たのを、新訓萬葉集で新しく「コヒ哭(ナキ)スルカモ」と訓み改めたのである。「哭」を「モ」と訓むことに就いては、從來契沖等は喪には哭する故かとし、眞淵等は喪の誤としたが、最近山田孝雄氏が「哭」は「喪」の略體であらうとされた（萬葉集講義）のがもつとも無理のない考へ方のやうに思はれる。新訓の改訓は「哭」を「モ」と訓むことを疑つた結果かと先づ考へられるが、集中なほ「在りがほし住みよき里の荒るらく惜哭(ヲシモ)」（一〇五九）、「沖つ浪さわぐを聞けばあまた悲哭(カナシモ)」（一一八四）、「山をとよもしさ牡鹿鳴哭(ナクモ)」（一六〇三）、「結びし紐を解くは悲哭(カナシモ)」（一六一二）の四例（總索引による）があつて、これらはすべてモとしか訓みやうのないやうな場合であるから、やはり「哭」に「モ」と訓む理由を見出さうとする態度の方が妥當であらう。もつとも以上の四例はいづれも終助詞の「も」の場合であつて、この「戀哭(モ)するかも」だけは係助詞の場合であるが、兩者の間に別に文字使用上の區別はないのであるから、この點は問題とするに及ばない。新訓萬葉集でも以上の四例はすべて「哭(モ)」と訓んでゐるから、この場合「哭」がモと訓めないからといふ理由は、新訓としては成立ち得ないわけである。

次に「戀もするかも」といふ結句は集中になほ幾つか使はれてゐて、それらは一首としての構造が相似していはば一つの型をなしてをり、その點からもこの歌の結句は「戀もするかも」と訓むのが一番自然のやうに思はれる。

をみなへし佐紀澤に生ふる花がつみかつても知らぬ戀裳摺可聞（卷四、六七五）
この山の嶺に近しと吾が見つる月の空なる戀毛爲鴨（卷十一、二六七二）
容鳥の間無く數鳴く春の野の草根の繁き戀毛爲鴨（卷十、一八九八）

右の三例は明かに「コヒモスルカモ」と訓まれ、そして「序詞＋形容句＋戀もするかも」といふ一つの共通した構造を持つてゐるのである。

君が著る三笠の山に居る雲のたてば繼がるる戀爲鴨（卷十一、二六七五）
には淨み沖へ榜ぎ出る海士舟の梶とる間なき戀爲鴨（卷十一、二七四六）
言に出でて云はばゆゆしみ朝貌の穗には咲き出ぬ戀爲鴨（卷十、二二七五）

この三例もやはり同樣の構造のもので（二二七五だけがやや異るが大體準じて考へることが出來る）、諸註が結句に「モ」を補つて「コヒモスルカモ」と訓んでゐるのは素直な態度だといふことが出來る。新訓で最初の「君が著る」だけは「コヒモ」と訓みながら、後二首は「コヒヲスルカモ」としてゐるのは、殊更異を立てるものであり、第一態度が一貫してゐない。（コヒヲスルカモといふ假名書は集中に一例もない。）

さうしてこの赤人の歌もまた「高桉の三笠の山に鳴く鳥の」といふ序詞から「止めば繼がるる」といふ形容句に續き、そして結句が「戀哭するかも」であつて、然もその「哭」は他の場合「モ」と訓まれた例があるとすれば、これを「戀モするかも」と訓むのはもつとも自然穩當な態度ではあるまいか。特に「君が著る三笠の山に」の歌とこの歌とは無關係のものとは考へ難く、その一方に「モ」を補つて「たてば繼がるる戀爲鴨」と訓みながら、他はわざわざ「モ」を「ナキ」に改めて「止めば繼がるる戀哭爲鴨」と訓

むが如きは到底不自然たるを免れない。

なほ左の如き例も參考となるだらう。

夕べ置きて朝は消ゆる白露の消ぬべき戀毛吾者爲鴨（卷十二、三〇三九）

朝咲き夕べは消ぬる鴨頭草の消ぬべき戀毛吾者爲鴨（卷十、二二九一）

もののふの八十氏川の早き瀨に立ち得ぬ戀毛吾爲鴨（卷十一、二七一四）

志珂の海人の一日も落ちず燒く鹽のからき孤悲乎母安禮波須流香母（卷十五、三六五二）

須磨人の海邊常去らず燒く鹽のからき戀乎母安禮波須流香物（卷十七、三九三二）

他に「戀毛吾爲鴨」（二七四二）、「戀吾爲鴨」（二四一二）の二例は矢張「コヒヲモワレハスルカモ」と訓み、「戀我更爲鴨」（二四一七）は「コヒヲモワレハサラニスルカモ」と訓むべきであらう。以上が集中「戀……スルカモ」と結んだ短歌の全部であつて、その中に「コヒナキスルカモ」のやうな種類のものは一首もない。それから又「コヒナキスルカモ」と同形式の「名詞＋スルカモ」の結句を持つ歌としては、「船出するかも」（三九）、「潜するかも」（一三〇二）、「廬するかも」（三六二〇）、「宿するかも」（三六四六等）、「磯廻するかも」（三六八）、「別するかも」（三六九五）、「侍宿するかも」（一七四）の十首があるが、此中にも新訓の「戀哭するかも」のやうな構造の歌は矢張一首も見出す事が出來ぬ。さうして以上が集中「スルカモ」で結んだ短歌の總てなのである。

更に「戀哭」といふ用語例は集中他に見出すことが出來ない。數鳴（之波奈吉）、哭泣、夜哭（夜喧・夜鳴）、和備鳴、醉泣（醉哭）等はあり、妹戀吾哭涙、君戀吾哭涕の例はあつても、戀哭といふ熟語はな

い。記紀等にも見當らぬやうであつて、只後に源氏物語などに「戀ひ泣き侍るは」の如きが見出されるのみである。あたらしく一語を作り出すといふやうなことは、餘程愼重を要することで、よくよくの場合でなければ爲すべきではあるまい。

要するに「戀哭(ナキ)するかも」といふ訓は、各方面から見て客觀的に必然性のあるものではなく、所詮改訓者の勝手な鑑賞上の好みに基くものと言ふの外はない。その鑑賞に就いての批判はもう省略するが、學者の態度としてはもう少し愼重を心掛くべきであらう。

この歌の評價については、私も大體落合君と同感であつて、流麗な聲調に纖細な感情を籠めてをり、上に引いた多くの類歌と比較してやはり赤人の技倆を知ることが出來る。「君が著る三笠の山に」(二六七五)の歌と製作の先後はしばらく別問題として、鑑賞上この歌の方を優位に置くことは異論のないところであらう。ただこの歌はやはり巧に整へ周到に運ばれた感じであつて、內心の感動がおのづから迸り出たやうな力强さに不足してゐる。特に「繼がるる」と受身の形を用ゐたあたりに間接的な感じを抱かせられるのである。元來「戀もするかも」といふのが、巧みとはいひながら既に一種の反省的感慨であるところに、上句から序詞を用ゐてその戀を形容するのであるから、全體としてかなり理知的な技法だといふことが出來る。それは相當多くの類歌が生じてゐることによつても考へられることである。赤人の場合は流石にその優れた詩人的才能によつて、感情感覺の自然を失つてゐないが、やがてこれは一つの機智に陷りやすい技法である。多くの萬葉集の類歌を經て古今集の「ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな」などに至る本質は、既にこの赤人の作に存してゐると見るべきではないだらうか。

〇

昔者（いにしへ）の舊き堤は年深み池の渚に水草（みくさ）生ひにけり　（卷三、三七八）

藤森朋夫

太政大臣藤原不比等の家の庭池をその薨後に詠んだ作である。不比等は養老四年八月に薨じ、十月には太政大臣を贈られてゐる。一句の「昔者之」は舊本に斯くあるのを童蒙抄では者は見の誤とし、玉の小琴道麿說では省の誤とし、略解には看の誤として、訓は何れも「むかしみし」と改めた。しかしこれは舊本通りにして「いにしへの」と訓むのに據るべきであらう。卷七の「昔者之　事波不知乎」（一〇九六）はやはり「いにしへの」と訓んでゐる例もある。一首から滲み出る懷舊的の情感は素直に受けとれる歌である。「いにしへの」「舊き堤は」「年深み」の接續は如何にも疊みかけたといふ觀を呈してゐる。互に相交錯する部分があり、これがもつと赤人的に澄んで來るといいのであるが、このままの句法では問題にされるであらう。しかし「池の渚に水草生ひにけり」は極めて淡々と、あるが儘の自然の相を描寫して、その中に故人を偲ぶ情感が素直に表現されてゐる。一首を通して詠むと上句と下句とは自然に徹つて、部分的に意識されたものが割合に目立たなくなつて來るやうに思ふ。特に秀れた作品といふ譯ではないが、これからは一種のあはれが感受出來て、何か心をひかれる所がある。卷二の日並の皇子尊の宮に仕へた舍人の挽歌「みたちせし島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも」（一八一）と相通ずる感慨がある。

○　吉田正俊

前評者もいはれたことであるが、「池の渚に水草生ひにけり」といふやうに、いはば虚しい欲氣のない表現は確に一種の新しさを感ぜしめたであらう。しかし何と云つてもやや氣魄に缺くるところがあるので、現在に於てはいくらか物足りなくなつてゐる。「昔者の舊き堤は年深み」の表現に就ては、中村憲吉氏が「ほぼ似た言葉を重ねながら、その意味の小異の間におのづから作者の情調の移行する跡がしつくりと表れてゐる點に注目すべきである」と、まことに痒い所に手のとどく批評をされて居て、甚だ教へらるる所があるけれども、それは中村氏の作歌力乃至表現力に關係せしめないと妙味の失はれるところがあらう。

○　土屋文明

「昔者(いにしへ)の」「舊き」「年深み」は如何にも煩瑣であるから、別に訓を求める努力が拂はれて、「昔見し」といふ様な所に向はうとしたのであらう。これは昔の訓詁學者が無學であつたと考ふべきではなく、反つて歌を讀み味ひつつ解釋に向つて居た事を示すものかも知れない。然しそれにしても矢張煩瑣たる事を免れぬやうに思ふ。作歌の動機に幾分儀禮的の要素が動いて居た爲かも知れない。何處か生彩の缺けた所があるやうに思ふが、さりとて一概に詰らない作とも言へない所がある。藤森氏の引かれた舍人の歌に比すればその感慨の弱く生彩の足りない所が一層明かになるであらうと思ふ。下句の落着いた句法は赤人らしい要領を得た句であるから古人も早く注意したと見えて、田邊福麻呂の歌集中の「立ち易り古き都となりぬ

れば道の芝草長く生ひにけり」（一〇四八）等の外にもまだこの歌の手法と思はれるものが有るやうに思ふ。

○

丈夫は御獵に立たし未通女等は赤裳裾引く淸き濱邊を　（卷六、一〇〇一）

山口茂吉

この歌は、天平六年春三月、聖武天皇難波宮に行幸の時の歌六首中のもので、赤人のは六首中この一首のみである。御供の男女宮人の行動を端的に寫し得て餘すところがなく、殊に三句以下甚だ印象的であつて、優美華麗な官女の身裝行動を眼前に髣髴せしめてやまない。また、文學的技巧の達した歌であるとも謂ひ得るであらうが、單にそれだけに終つてゐるとも思へない。暢達な聲調の中におのづから典雅淸潤のひびきを傳へてくるやうに思ふ。もとより最高の評價は出來ないかも知れないが、よく比較される人麿の「玉裳の裾に潮滿つらむか」（四〇）ともまた別の趣があるのではあるまいか。なほ、赤人の歌には、「久木生ふる淸き河原に千鳥數鳴く」（九二五）といふのもあり、「淸き河原に」とか、「淸き濱邊に」とかいふ句は如何にも赤人らしい感じのする句で、この歌の中でもその特色をよく現してゐるやうに思ふ。

○

藤森朋夫

前評者はこの作品のもつ特色をあげ、相當に價値高く見てゐるやうであるが、私はいささか見解を異にする。この歌に描き出された場面も、人物も和やかに一種の線の美しさはあるが、全面的にうける感じに

は何かものの足りないものが潜んでゐるやうに思はれる。男女の姿相さへも想像はなし得られるのであるが、結局それは畫面上に於ける平面的の美しさであつて、立體的とか面の厚さとかいふものは隨伴して來ない。調べも素直で、形も整つてゐるのであるが、何か響に不足するものが感ぜられる。赤人的な句法はあつても、私には前評者のいふ程には評價は出來ないのである。

○　　　五味保義

嫌味なく繪畫風に構成された歌であるが、やや現實味に乏しい。作者にとつては眞面目な作であらうがどことなくなつかしみが無い。視覺のみが刺戟される歌で、悠々たる海邊の逍遙の氣分をのびのびと感ぜしめるといふ所がない。「淸き」について山口氏もいはれたが、土居光知博士も早く「淸き」の語を以て赤人の性情の純なる淸らかなるものを好んだ證左として居られる。(因に同博士がその意味を延長して「赤人」の「赤」の字義まで持つて來て居られるのは如何かと思ふ。) 赤人の「淸き」は其の全用例を見ると、直ちに聲調を整備しやすいところ、成語的になるところに用ひられてゐて、その「淸き」が感情の雰圍氣を伴つて生かされてゐるといふより、詞句連續から來る虔しい緊つた音を目標とし、理解に訴へる態度に於て用ひられてゐるやうに思ふ。「淸き」と赤人性情の純粹とをむすびつけるのも一つの考へ方であらうが、作歌技巧上からいふと、注意してむしろ戒心して味得すべき用語のやうに思ふ。

○　　　土屋文明

之も赤人の一面の特色を現して居る歌であらうが、この一首に依つて代表される赤人の特色は、或は赤人のためには餘り喜ぶことの出來ない特色であるかも知れない。卷一の舍人娘子の歌「丈夫（ますらを）がさつ矢手挾み立ち向ひ射る的形は見るにさやけし」（六一）は、一首の大部分を序に使ひ、意味の部分は「見るにさやけし」のみであるが、一首の與へる感銘はこの方が强いのである。左千夫流に言へば歌の主とすべきものは意味ではない、聲調であるといふことにならうが、私は意味があつて邪魔をするといふよりも、作者の作歌動機に何か缺けたものがあるのではないかと思ふ。作者の心中にさへ强く動く動機があれば、意味があつても感銘を强くすることが出來るであらう。不幸にして赤人のこの歌は意味あるが爲めに氣魄を失つた形になつて居るのである。然しかういふ歌は割合に理解され易いので、古來赤人の呼び値を高くして居るのは、この邊の歌によつて支持されて居るのかも知れない。

○

吾も見つ人にも告げむ葛飾（かつしか）の眞間の手兒名が奥津城處（おくつきどころ）（卷三、四三二）

藤森朋夫

赤人時代既に傳說として有名であつたと思はれる眞間の手兒名の墓を見て、その感慨をうたひあげた作である。赤人の作としては線の比較的に太い直線的な詠風をもつてゐる。土屋氏は「わが欲りし野島は見せつ」（一二）の歌と「立ちて見に來し印南國原」（一四）の歌を擧げて之に比較し「古名作を思ひ起させるやうな詠み方であるが、時代のためか、作歌力量のためか、或は其他の如何なる爲であるかは知らないが、

作品其のものの價値には、相當のひらきのあることは否めないであらう」（萬葉集名歌評釋）と批評されたが適評である。逞ましい強さ、餘韻の深さといつたものは認められない。寧ろ赤人としてはずばりと詠んだ部類の作品で、その點に於いては特殊のものといへよう。描寫の爲方も極めて簡單である。「葛飾の眞間の手兒名が奧津城どころ」は坦々として屈折に乏しいが、作者の感激はこの句法の中にこめられてゐると見られよう。寧ろかくうたつても當時にあつては相當の響應を覺えしめたのであらう。吾々の感じからすればこの句に對してはさまで迫力を覺えしめられない。しかし傳説にまつはるといふ意味のみからではなく、この作にも赤人の匂ひは感じられ、反歌としての持味は有してゐるやうに思ふ。

○　　　　　　　　　　落合京太郎

前評者が「餘韻の深さといつたものは認められない」と云つてゐる批評には私も贊成である。赤彥は鑑賞及び其批評」に於て、この歌を赤人の感激が至つたあまりに出來た率直純粹な作品だとして、いたく稱揚してゐるが、私にはむしろ赤人の作品としては卽興的な作品であり、もし意識的に「ぶつきら棒の歌」を作さうとしたならば、それは結局失敗ではなかつたかと思はれる。赤人の持つて居る纖細なうるほひにも缺けてゐて、平板な作品と思はれる。「吾も見つ人にも告げむ」といふあたり、「感激の情到つて成つた」句といはんよりも、赤人の表現のことわりすぎる點、いはば論理癖といつたやうな所が、思はずあらはれてゐるのではないかと感じられる。「葛飾の眞間の手兒名が奧津城處」は、「住吉（すみのえ）の岸の松原遠つ神わが王の幸行處（いでましどころ）」（二九五）等に影響されてゐると思はれる。

葛飾の眞間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手兒名し思ほゆ（卷三、四三三）

鹿兒島壽藏

○

傳說の眞間の手兒名といふ人物を想起するに甚だ悠長な調子の歌である。作者は無論其邊の入江になびく藻草を見たことでもあらうが、それが惜しむらくは生々の氣を以つて詠み出されてゐない。緩漫な彈力が一首を形作つてはゐるが、又、嫌味などもなく素直な位ではあるが、初期萬葉作家にあるやうな感じと力とが稀薄になつてゐるといふ趣である。まだこの前の「吾も見つ人にも告げむ」の方が心惹くものがあるやうに思ふ。

吉田正俊

○

「葛飾の眞間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手兒名」と一見素氣ない表現の如くであつて、どこか沁々と情緒を感ぜしめるのは、赤人の作品一般に通ずるところである。その點にいつも贊成者と不贊成者とを兼ね持つのであつて、反對者はもう一歩、より客觀的に、そこに漂ふ情緒といつたやうなものを拭つて欲しいといふ欲望が出るのである。しかしここまでいつては結局赤人の作品の妙味に緣がなくなることになるのであらうが、いつもさういふ感じを懷かすことは、作者として不足した一點があるのではなからうか。私の言はんとすることは、やや曖昧になつたから具體的にいへば、「田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ不

盡の高嶺に雪はふりける」(三一八)までに到り着かなかつた作品が多いといふことになる。この「田兒の浦」の歌ではさきに述べた情緒といふものが全くとはいへないが影をひそめて、平々坦々に到り着いてゐるのである。赤人に私がひそかに惜しむのは「田兒の浦」の歌に到る作歌意欲が、今少しく逞しかつたならばといふのである。比較しては變になるが、この點正岡子規などには、さういふ作歌意欲を通じての平坦味があつたやうに私は思ふ。もつともこれは現代人の好みに偏した鑑賞の仕方で、普遍的なものとは或ひは云ひ得ないかも知れない。

〇　　　　　　　　柴生田　稔

「手兒名し思ほゆ」といふやうな止め方をした短歌は少くない。更にこの歌のやうに第四句までが連續して結句の名詞を修飾してゐる例としても、はやく額田王の「秋の野のみ草刈り葺き宿れりし兎道の宮處の假庵し思ほゆ」(七)の如きがある。この形は一般に整然と安定した感じを生ずるもののやうであるが、右の額田王の歌などは、さうした端正な表出のうちに、何か深い感情のゆらぎを湛へてゐて、子規の所謂「平淡の中に至味を寓する」といつた趣があり、これに比較すると、赤人の方は何處か奥行に乏しく物足りない感じがする。「打靡く玉藻苅りけむ」といふあたりは、或る象徴的效果を持つてゐて作者もそれを自覺してゐるのであらう。そこらが額田王の歌の眞率自然なのと違つて、目立たぬやうで情趣に頼つてゐる。恐らくこれは人麿の好んで用ゐた、「波のむたか寄りかく寄り玉藻なす寄り寢し妹を」(一三一)とか、「玉藻なすか寄りかく寄り靡かひし夫の命の」(一九四)とか、「立たせば玉藻のもころ臥せば川藻のごとく靡

かひし」(一九六)などの影響ではあるまいか。さういふ人麿の手法は初期作品の卽實直情的なのに比較して、非常に作爲的であるが、一面人麿にはその作爲の無理を、大膽に押し切つて一種の混沌を醸し出してゐるところがある。赤人はその技巧に引かされながら、又既にその無理不自然を自覺してその中に沒頭し得ないやうな反省的なところがあるのではないか。さうしたいはば詩的作爲を合理的に薄めた結果の平淡である爲め、初期作品と形は似てゐても違つた感じを齎すのであらうか。

(昭和十三年三月)

四十五　山部赤人の歌八首

田兒（たご）の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡（ふじ）の高嶺（たかね）に雪は零（ふ）りける　（卷三、三一八）

伊澤平喜

○

赤人の名と共に周知の名歌である。六言の初句八言の二句を重ねて、これを承くる第三句、就中その「ぞ」の力、更に四五句にてがつしりと受け止めたる趣、誠に聲調の妙を極めてゐる。而して次の三二〇、三二一の同じく不盡山を詠める二首に比して、この歌の三四五句に於ける寫生の簡淨にして的確なるを思ふ時名品に違ひないと思ふ。「文學」（昭和十二年五月號）に於いて齋藤先生が「赤人作中の優れた歌で、また萬葉集中でも選ばねばならぬ歌に屬してゐる」とせられた通りである。しかし又次のやうにも考へる。これを「あしひきの山川の瀨の鳴（な）るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る」（一〇八八）と並ぶる時、人麿の「全力的」でその聲調雄勁無碍なのに對し赤人は著しい對蹠をなすやうである。又、「文學」に於いて幸田露伴翁は「薩埵を下り田子にかかり忽として秀靈ならびなき大山に見えて呀と驚嘆せるさま如實にあらはる」と言はれ

たが、さういふ生々しい感動でなく諦觀久しき後の靜かなる感激として味はれるのではあるまいか。それだけにこの歌も作りすぎ整理されすぎてをり、その爲に迫力が弱められてしまつたと思ふのである。

○　　　　　　　　　　　　鹿兒島壽藏

この歌の「田兒の浦ゆうち出でて見れば」の解釋は、「田兒の浦より船で榜ぎ出して」といふのと、前評者の引用された幸田氏の說（尙、これに似た說が眞淵にもあつたやうに記憶する）の如き解釋、第三に「ゆ」を「より」と取らずに「に」に通じた「ゆ」として、「打出でて」は必しも船で榜ぎ出たのではないとして、つまり「田兒の浦に出て見れば」位に解釋したのが其の大體のやうに思はれる。私はこの歌を口誦する度に、「ゆ」の一音に微かな不服を感じてゐるのであるが、結局は以上あげた三つの解釋のうちでは最後のものが、一番無難に思はれるし氣持も徹る。さてこの歌は格調、姿などの雄大な點で赤人作中傑れてをり、且つその表現上の平淡さは純に至つてゐる。かの渾沌とか綜合的な旋律とかはこの一首にはない。それはやはりそれを求むる方が無理なのであらうし、海景を前にして雪を被いだ富士山といふものは、實際に遭遇してみると、中々至難の境地だといふことは誰しも思ふことだと信じる。この歌の手近なところで比較の對象を求めれば、高橋蟲麿の不盡山の歌であるが、赤人のこの作品に比べると實に見劣りがする。ここでは先づ問題にならぬとも云へよう。兎に角、さうして見れば、現代の複雜多端な對象に常に面してゐる吾々としては、前評の如く一種の不滿をこの歌に感ずるとしても、やはり赤人は赤人としての全き刀を振つたものと考へてよいのではないかと思ふ。尙、赤彥先生は「眞白にぞ」を大正四年の輪講で「『眞白

にぞ』よりも『眞白くぞ』の方がこせつかなくて調子が張つてゐる」と云はれたが、それから十年後の著書(鑑賞及び其批評)では「『眞白にぞ』を鹿持眞澄は『眞白くぞ』でなければならぬと主張してゐるが、小生は從はぬ。調子が鈍るか緊まるかの問題である」と全く反對の說をとつてゐられる。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　落合京太郞

この製作年次は不明であるが、强ひて推定すれば卷三の記載の次第よりして、神龜年中とすること「年表」の言ふが如くであらう。一首の意は明確と言つて宜いのであるが、一二句に就ては異論があり、或は田兒浦より海上に漕ぎ出でて見れば(古義)とか、田兒浦より東へ打出て見れば(略解)とか、更には打出て田兒浦より見れば(考及攷證)といふ工合に解して居る。そして古義、略解などは薩埵坂(今の東海道線由比驛と興津驛の中間)の道を東へ打ち出づればといふ地理的說明をすることにより、薩埵越をして田兒浦から見ればといふ解釋を爲し得るかの如き暗示を與へて居る。考、攷證などの說は寧ろ斯く解すべきであらう。殊に「相坂をうち出て見れば淡海の海白木綿花に浪立ち渡る」(三二三八)などを念頭に置くと、右の如き說をも樹て得ると思はれる。けれども解釋としては、海上に漕ぎ出づる說と共に、矢張事實に卽し過ぎる說であらう。一二句は鹿兒島氏も言はれた如く「田兒浦に出て見れば」といふやうに、漠然と解して置く方が歌柄にも相應しい。一首は主觀の陰が無く調子に悠揚たるものがあり、先進も認めて居る作品であるが、現在の私などには、夫れが如何いふ點に基くのか明確に觀念し得ないが、何か消化しきれない一抹の不滿がない譯ではない。

〇

明日香河川淀さらず立つ霧のおもひ過ぐべき戀にあらなくに　（卷三、三二五）

神田矩雄

登神岳作歌（三二四）の反歌である。長歌の方は序の用法、一首の構想が大體人麿の後を追つてゐるが、對句などにより整然として柄が小さく見える。さて反歌は矚目の情景を捉へて三句までの序詞に當ててゐるが、上下の關係甚だ緊密である。既出の「潮滿ち來れば潟をなみ」「なく鳥の止めば繼がるる」の如き克明な描寫の手法はここでも「川淀去らず……おもひ過ぐべき」といふ工合に遺憾なく須ゐられ、其處に滋味を釀して懷古の歌に適つてゐる。この歌、赤人としては主觀的の表現をとつてゐるが、島木氏が鑑賞及び其批評）引く所の「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ」（二六六）の積極的に沈痛に表白するに對比して、自から兩者の性格の强弱が窺はれ、赤人のやうな性格に於てこのゆき方は恐らく不得手としたので、この結句のあたり稍々自然に行かない感があるのであらうか。

〇

佐藤佐太郎

この歌は明日香舊都に對する係戀の情を寄せたもので、ここに云ふ「戀」は代匠記に「此戀と云は故鄉を戀ふ感慨なり」と言ふ如くに解すべきであらう。しかし現代の讀者にはこれを男女間の愛戀として見ることも可能であり、そこが抒情詩の特徵でもあるが、何れにしても、この歌の係戀の情緒は華かでなく亦

執拗ではない。一首は何處といつて目立つ技巧がないやうでゐて而も緊密であり、同時に靜かに纖細である。これは歷史的に見れば、藝術の變遷の必然として移行する洗練の姿であるが、赤人の力量がこれを既に早く成就したのである。洗練は同時に素朴の威力を失ふことを意味するが、同じ萬葉集といつても赤人に見る洗練された優雅をも無視することは出來ないだらう。「さらず」「思ひ過ぐべき」といふやうな語例は、集中相當にあるが、この歌の破綻なく而も清新な愁の情調は依然として特殊である。萬葉後期の特徴は前言の如く赤人の洗練の中に夙く見ることが出來るが、家持は後にこの歌に學んで、その長歌中に「可多加比河の清き瀨に　朝夕ごとに立つ霧の　思ひ過ぎめや」（四〇〇〇）といふ句を作つてゐる。

○　　五味保義

神田氏の言はれたやうにこの歌は反歌であるが、一首獨立の味ひを持つて居ることは勿論であつて、これを明日香の古き都の追懷の歌とせず、相聞の歌と解することも出來る。然し本當は佐藤氏の言はれるやうに代匠記の說に從つて置くべきで、それは三二四の長歌を讀めばもつとはつきりするのである。卽ち、「朝雲に鶴はみだれ　夕霧に蝦（かはづ）はさわぐ　見る每に哭（ね）のみし泣かゆ　古へおもへば」とあつて、その氣持の連續をこの歌の如く詠んだのである。長歌から反歌への氣持の連續は赤人流に整然として居つて、この意味からいへば、この「戀」は代匠記の云つた意味以外には取れないのである。

この歌の靜かで整然として技巧の細かい用意が隅々まで到つて居る趣は、前評者の言はれる如くであり、この調は一種の氣品を持つて居るのであつて、容易に見下すことの出來ない作風であると思ふ。但し「川

淀去らず」とか「思ひ過ぐべき」とか云ふ表現は、當時の人には割合に無理なく受けとられた言ひ方でもあつたらうが、稍々手が混み過ぎたところがあつて現在の私には明瞭に響かない。「川淀去らず」は「霧が川淀を立ち去らず」ととれば、寫生として少し煩瑣な感じがするし、「朝去らず夕去らず」を「朝毎夕毎」の意味にとるがごとく、「川淀毎」として考へると、序詞の意味として理路は徹るけれども、「思ひ過ぐべき」の細かい感情に透徹するところが不足する。又「思ひ過ぐべき」といふ句は從來の註釋書に言はれるやうに「思ひを過し遣るべき」といふ意味にとるべきであらうけれど、そこもやや直接性に乏しい。私はさういふ意味に於て赤人の弱さといふものを、この歌にも感ずるのである。

春の野に菫採みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜(ひとよ)寢にける　（卷八、一四二四）

○　吉田正俊

「萬葉集の鑑賞及び其批評」に「歌柄は少し外延的である」と評してゐるのは、「來し我ぞ」から「野をなつかしみ」に續くあたりに不滿を感じたのではないかと思ふ。私もこの續き工合に何かよそよそしさを感じないでは居られぬが、それは現在吾々の作歌態度に起因する一種の不滿であつて、さういふ點を眼をつむつて考へれば、いはゆる嫌味などといふものはけし飛んで了つて、案外すつきりした歌風であると言へるのではあるまいか。中村憲吉氏が「裏に戀愛の心を含めて味はふべき歌であるが」云々と言つてゐるが、その戀愛的情緒も潑剌として若々しいものでなく、どこか冷淡とまで言つては或は言ひ過ぎようが、

投げやりの心持さへ見えるところが感ぜられる。私はかういふ傾向の歌から直ちに學ぶところは現在のところ少いやうに思ふが、これはこれとして一つの行き方であり、老練な歌人が輕々と詠み捨てて、しかも味を含んだ歌としてさう無下に捨て去れないやうな氣がしてゐる。

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　五　味　保　義

吉田君の言はれるやうに技巧を凝らさず詠んだものと思ふが、一首の何處にか情趣が漂ひ、柔かな感情が流れてゐて、謂はば一種の匂ひがあると思ふ。私はこの歌は矢張淡々として水の如き歌とは言ひきれないと思ふ。「春の野に菫摘みに」といふ調子でも、その「春の野」にといふ詞の響き方が既に情趣を含んだものがある。「春の野に心舒べむと思ふどち來りし今日は暮れずもあらぬか」（一八八二）といつた卷十の歌に於て見られる餘裕ある態度に似てゐる。家持の「春の野に菫を摘むとしろたへの袖折返し」（三九七三）の如き固定した氣持の「春の野に」云々とは又違ふが、同じく家持の「春の野に霞たなびきうらがなしこの夕光に鶯鳴くも」（四二九〇）に比する時は、その迫眞の力に於て後進家持に一歩を讓るのではあるまいか。この歌以下四首は、卷八春雜歌の部に「山部宿禰赤人歌四首」と題して收錄されてゐる。

あしひきの山櫻花日並べて斯く咲きたらばいと戀ひめやも　（卷八、一四二五）

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　五　味　保　義

この歌は中村先生も言はれるやうに「語句を曲折せしめ心持を細かに運んで居る」歌である。あまり執拗でない、然し纏綿たる情緒を以つて或一つの心象に親しんで居る作者を想見することが出來る。この歌は謂はば後世風であり、平安朝の歌風に通ずるのであらうが、吉田君が前の歌の批評で述べられたやうにこの一首も亦作者が老練な技巧をもつて、あまり細工を凝らさずに詠んだところに、嫌味を超越した境地が作られてゐると思ふ。萬葉集の中に於て、人麿と言へば直ちに次いで擧げられることが、例になつてゐるやうな赤人の歌の中に、かういふ歌があるといふことは、一見奇異な感がするのであらうが、それは極く大雜把な見方で、今すこしく萬葉集の各作者を、各作品について考へて行くとき、この歌の存在は赤人の傾向として不思議なものではないことに氣づかう。中村先生の言はれるやうに、恐らく技巧の圓熟した赤人の晩年の歌と思へるのである。一首の意味だけを考へると、かなり嫌味が表れさうに思はれるにもかかはらず、淡々と讀む時には、それが調の上にまで表はれて居ないのであつて、赤人は案外若々しい氣分に終始した作者ではないかといふ氣がする。先進に人麿を置き、後進に家持を置き、その作風を比較對照する時に浮び上つて來る赤人の風貌を知ることも興味ある問題であるが、時には赤人をそのままに見るのも亦大切な鑑賞の態度ではあるまいか。

○　　　　　　　　　樋　口　賢　治

一首の聲調は清麗醇和、聊の凝滯するところがなくて如何にも快い。一二句の表現も伸々として居り、一讀して嫌味を感ぜしめないといふ前評にも贊成である。唯老熟の境、淡々として詠じ去つたとしても、

一首の内容にはやはり情緒的、觀念的な要素が目立ち過ぎるのではあるまいか。中村氏の批評はあつても、今の私には赤人晩年の佳吟として論なく享け入れるのに少しく逡巡を感ずるのである。「斯く咲きたらばいと戀ひめやも」から直ちに後世の歌風を聯想するのは、先入觀念に災ひされて居て、あまりに大摑みに過ぎるかも知れないが、さりとて人麿から家持へと推移する歌風の中から、赤人のかうした一面の傾向と、更に言へば斯かる纖細優艶の中に在つて、古今集歌風への萌芽を求め得られるといふやうな事實も、十分に取上げられるべきであつて、赤人個人の作風から言つても無視出來ないやうに思へる。「日竝べて斯く咲きたらば」に就いては既に土屋氏の說（文學第五卷第五號）がある如く、やはり理知的な句法が目立つ。櫻花を一女性に象徵して居る點などは當時として新鮮な情感を伴つて居たと見られるが、現在吾々がこの歌だけを對象として味ふ時、譬喩として少しく平面的な物足りなさをも覺える。結局、この一首の根柢をなす行き方の力弱さに對する不滿であるかも知れない。

吾背子に見せむと念ひし梅の花それとも見えず雪の零れれば（卷八、一四二六）

○　　　　伊澤平喜

「吾背子」なる語が男と男との間にも用ゐられた例は、二四七の歌や卷十七以下に於ける家持等の歌に往々見えてをり、この歌を赤人が或る女性に代つて作つたかなどと考へる必要はない。この歌は宴席に於いて披露するか或は贈答のために作られたものと思ふ。獨詠歌らしい沈潛の趣がない。第四句に出てくる

も知れない。この四句も寫生味に乏しく觀念的傾向がまさつてゐる。然し「梅の花それとも見えず雪の零れれば」に新鮮さの效果を狙つたのかも知れない。要するに平明な措辭、纖細な聲調で一とほり景情を言ひおほせたもののやうであるが、割合に餘情に乏しいのは、やはり理知的態度から來てゐると思ふ。

○　佐藤佐太郎

梅花を弄ぶのは上代にあつても風流事であつた。太宰府に於ける梅花宴歌三十二首を例としても明かである。この歌はさういふ風流の相聞として詠まれたものであらう。代匠記に「此吾勢子は妻なり」とあるが、ここは伊澤氏が言はるる如く、男性の友を指してゐると解していい訣である。所謂、對詠歌であつて、發想に機智を用ゐた點はあるけれども、調子に騷がしい所がなく、靜に緊張してゐる。これはやがて赤人の長所であつて、この一首のみに就いて强調すべきではなく、又、この歌は赤人作中出色のものともいへないが、纖細で品格のある歌として、讀む者の心を牽引する點のあるのはやはり注意すべきである。この「無爲の愁」とも謂ふべき情緒は、萬葉後期から古今以後に繼承せられたが、卷十七の紀朝臣男梶の歌「山のかひそこととも見えずをとつひも昨日も今日も雪のふれれば」(三九二四)などはその表面に現はれた一例である。吾々はかかる傾向の傳承を短歌の幸福なる歷史として見る訣ではない。如何に安易に走る事の易く、如何に末流の哀れであるかといふことを知らうと欲したのである。卷十に「梅の花それとも見えず零る雪のいちじろけむな間使遣らば」(二三四四)があり、作者不詳の歌であるが、必ずしも赤人以前の作と

断じ得ないやうな氣がする。

○　　　　　　　　　　　　　　柴生田　稔

ごく淡々と、いはば無造作に詠じられた作品であらう。佐藤君のいふやうに、梅花の風流は集中に多くの作例があり、特に梅の花と雪との相似を趣向にした作品が相當に多い。例へば「春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る」(八三九)、「妹がへに雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも」(八四四)、「わが苑に梅の花散るひさかたの天(あめ)より雪の流れ來るかも」(八二二)等は露骨にこの趣向を弄んでゐる。それに較べると赤人の「梅の花それとも見えず雪の降れれば」はずつと自然で、花と雪との比較に機智を弄したといふよりも、實際木々の枝に雪が降つて咲いた花のはつきりと見えない、ありのままの景色を詠じただけのやうに受取れるのである。「平坦であつて、寫生から生れてゐるから生きてゐるのである」(鑑賞及び其批評)といふ批評もその意味でうなづけるのである。老巧者が詠み捨てたといふやうな熱のない作ではあるが、やはり赤人の自然觀照の特色はうかがへるやうに思ふ。

○　　　　　　　　　　　　　　神田　矩雄

明日(あす)よりは春菜(はるな)採(つ)まむと標(し)めし野に昨日も今日も雪は降りつつ　(卷八、一四二七)

一見何の奇をも求めず、淡白に寧ろ稚いまでの詠みぶりであるが、他面「昨日も今日も」に對して「明

日よりは」など用意を置いて一首理めいたものとしてゐる。何か題詠的に作り上げたものの如くであり、赤人の一傾向として餘り平氣に讀み下してしまつて、いつもの懇篤なる寫實に徹せず、一の平板な記述に止まり、結局不足感許りを覺えしめる。當時もかういふ低調な常識的な所が、容易に一般的になり得ることとなつて、すでに早く天平の末年に「山の峽そことも見えずをとつひもきのふもけふも雪の降れれば」(三九二四)などと、この一四二七及一四二六の外形に倣つたものが出て來てゐる。

○　　吉田正俊

現代人はやや神經が過敏であるから、「明日」「昨日」「今日」といふやうに重ねられた表現が氣になるのであるが、或はかういふところは形を變へて、現在の作歌にも現はれてゐないと言ひ切れぬであらう。それは兎に角として、この一首に於いては、作者もまたそこまで深く考慮をめぐらさないで、一種の調子で「昨日も今日も」といふ工合に表現したのであらうし、讀者もまたさうまで穿鑿せずにさらりと鑑賞していいのではなからうか。それから「雪は降りつつ」といふ結句は、落著きが無いやうに見えるが、又一面重くなくて變つた味はひの附加されて、この歌のやうに欲氣のない言はば風流めいた表現には似つかはしいとも考へられるやうである。

○　　藤森朋夫

二句「春菜つまむと」の「春菜」は古義には文字通りに「ハルナ」と訓んでをり、新考又これに從つて

ゐるがこれはどうであらう。やはり舊訓に「ワカナ」と訓み、諸家がこれによつてゐるのに從ふべきではあるまいか。三句「標めし野」は野の或場所を占領した意味をもち、それをあらはす爲めに或は杭を立て、或は繩を張りなどしてしるしをつけるのである。額田王の歌にも「あかねさす紫野行き標野行き」（卷一、二〇）がある。そして此處に於ける赤人の用法も、特にあるものを占めた、卽ち思ふ女を領したといふ氣持を根にもつて譬喩的にこれを表現したと觀る方面からすれば、この句は相當に重く又力をいれて置かれたものと解すべきであらう。又さうした意味にとらず純粹に自然を描寫し、その情景をうたつたものであるとする方面からすれば、これは何も現實的具體的に占めたとか、しるしをつけたとかいふ意ではなく、只作者の心理に春野の若菜を摘まうと定めて置いた位の意にとつて差支ないであらう。此處から出發して一首に於ける全面的意味も二つに分かれて來る。又この一首は獨立してこれを味ふ場合と、他の三首と關聯せしめて連作的に味ふ場合とに於てもそこに一種のひらきを生じて來るであらう。武田博士の新解には「若菜を摘む爲に、野に標示しておくといふこと、仰山なやうである。これも譬喩歌で女子を娶らうと約しておいたが、昨日も今日も障害が出來たといふ意であらう」といひ、象徵的意味にとつてゐる。さらに一首の中に明日とか昨日とか今日とかいふ語を布置してゐるのも、何物かを意圖してゐるのではあるまいかとの說もある。寫實的に深く踏込んで行つた赤人の他の作品などに比較すると、この作などには何かさうした譬喩的なものを思はしめる分子も潛在してをり、相聞的だとも思へないこともない。しかし自分はこの作にさうした色づけをする觀方には未だ割りきれぬものを持つてゐる。全然これを否定するといふ譯でもないが、一首全面に流れてゐる氣雰はやはりさうした相聞的の色濃さではなくて、所謂赤人の自然觀

日よりは」など用意を置いて一首理めいたものとしてゐる。何か題詠的に作り上げたものの如くであり、赤人の一傾向として餘り平氣に讀み下してしまつて、いつもの懇篤なる寫實に徹せず、一の平板な記述に止まり、結局不足感許りを覺えしめる。當時もかういふ低調な常識的な所が、容易に一般的になり得ることとなつて、すでに早く天平の末年に「山の峽そことも見えずをとつひもきのふもけふも雪の降れれば」(三九二四)などと、この一四二七及一四二六の外形に倣つたものが出て來てゐる。

〇　吉田正俊

現代人はやや神經が過敏であるから、「明日」「昨日」「今日」といふやうに重ねられた表現が氣になるのであるが、或はかういふところは形を變へて、現在の作歌にも現はれてゐないと言ひ切れぬであらう。それは兎に角として、この一首に於いては、作者もまたそこまで深く考慮をめぐらさないで、一種の調子で「昨日も今日も」といふ工合に表現したのであらうし、讀者もまたさうまで穿鑿せずにさらりと鑑賞していいのではなからうか。それから「雪は降りつつ」といふ結句は、落著きが無いやうに見えるが、又一面重くなくて變つた味はひの附加されて、この歌のやうに欲氣のない言はば風流めいた表現には似つかはしいとも考へられるやうである。

〇　藤森朋夫

二句「春菜つまむと」の「春菜」は古義には文字通りに「ハルナ」と訓んでをり、新考又これに從つて

ゐるがこれはどうであらう。やはり舊訓に「ワカナ」と訓み、諸家がこれによつてゐるのに從ふべきではあるまいか。三句「標めし野」は野の或場所を占領した意味をもち、それをあらはす爲めに或は杭を立て、或は繩を張りなどしてしるしをつけるのである。額田王の歌にも「あかねさす紫野行き標野行き」（卷一、二〇）がある。そして此處に於ける赤人の用法も、特にあるものを占めた、卽ち思ふ女を領したといふ氣持を根にもつて譬喩的にこれを表現したと觀る方面からすれば、この句は相當に重く又力をいれて置かれたものと解すべきであらう。又さうした意味にとらず純粹に自然を描寫し、その情景をうたつたものであるとする方面からすれば、これは何も現實的具體的に占めたとか、しるしをつけたとかいふ意ではなく、只作者の心理に春野の若菜を摘まうと定めて置いた位の意にとつて差支ないであらう。此處から出發して一首に於ける全面的意味も二つに分かれて來る。又この一首は獨立してこれを味ふ場合と、他の三首と關聯せしめて連作的に味ふ場合とに於てもそこに一種のひらきを生じて來るであらう。武田博士の新解には「若菜を摘む爲に、野に標示しておくといふこと、仰山なやうである。これも譬喩歌で女子を娶らうと約しておいたが、昨日も今日も障害が出來たといふ意であらう」といひ、象徵的意味にとつてゐる。さらに一首の中に明日とか昨日とか今日とかいふ語を布置してゐるのも、何物かを意圖してゐるのではあるまいかとの說もある。寫實的に深く踏込んで行つた赤人の他の作品などに比較すると、この作などには何かさうした譬喩的なものを思はしめる分子も潛在してをり、相聞的だとも思へないこともない。しかし自分はこの作にさうした色づけをする觀方には未だ割りきれぬものを持つてゐる。全然これを否定するといふ譯でもないが、一首全面に流れてゐる氣霧はやはりさうした相聞的の色濃さではなくて、所謂赤人の自然觀

照の態度を割合に平淡に表明してゐるものと感ぜられるのである。淺春の野邊の狀景を敍し「明日よりは春菜つまむと」などと、春に對する作者の期待感が如實に示されてゐて、一種の淡々しさの中に自然を味つてゐる氣持をより深く味はひ度いのである。倚序ながら家持の「三島野に霞たなびき然すがに昨日も今日も雪は降りつつ」（卷十八、四〇七九）を思ひ出したのでここにつけ加へて置く。

〇

百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも　（卷八、一四三一）

鹿兒島壽藏

「百濟野」といふ固有名詞による發想、「萩の古枝」に目を着けたところ、「春待つと居りし」といふ巧みさ、而して「鶯鳴きにけむかも」と想像して、曾つて歩んだ百濟野の道とその季節とを思はせ、そして今の春來の氣分に浸るがごとく詠んでゐるのは有繫に老巧な歌といふべきである。情を同じうして讀めば野をなつかしんだ情緒は何となしに、じはじはとして温むやうな思ひするものがある。これは寫實がその根にあるために、或る感動を與へしめるからであらう。「春の野に菫採みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜寢にける」（一四二四）の作がある赤人として、この百濟野の歌が生じたのも領けよう。ただ「萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも」といふ見方はやや巧緻で、所謂歌になり過ぎた傾きがあつて私は今この傾向をよろこばない。

○

柴生田　稔

第四句を「來居し鶯」と訓んだのがあるのは、原文「居之鶯」を古義が「來居之鶯」と改めたのによるのであるが、これは別段客觀的に根據のある説ではないから、從ふべきではあるまい。「古枝」といふ言葉は集中他に見受けないが、この場合葉の落ちた枯枝といふぐらゐの意味に取つて、後の用例のやうに新しい枝に對する古い枝、あるひは元の枝といふやうな意味には解しない方がいいと思ふ。但し古枝といふ言葉を使つたのは、やはり春になつた現在の氣持から、冬の當時の枝をさう呼んだものだとも考へられるので、さう見るとそこに幾分感じを持たせすぎたやうな氣持もしないではない。兎に角この一二句は注目すべき佳句であつて、中村憲吉氏が「百濟野の固有名詞の使用極めて自然なる、萩の古枝と特に具體的に云つて、そこに重要なる情趣を宿せど態とらしからざる」（山部赤人）と評された如くであらうし、又「萩の古枝に來居し鶯は、實に、しをらしき心の現れた寫生である」（鑑賞及び其批評）といふのも動かせない批評であらう。一首としても集中に一異彩を放つてゐる作品だとおもふ。ただ私の現在の氣持では「春待つと」及び「鳴きにけむかも」の二句に就いては未だ釋然としないところがあるので、そこに何か藝術心の過剰といふやうなものが感ぜられ、特に「鳴きにけむかも」にはやや作者が意識して幼く興じたやうな印象を受ける。さういふ點、一寸近代の歌のやうな異色を感ずる反面、現在の眼からは既に物足りないといふ氣持を否定出來ないのである。もつともかういふ私の感じ方は、大正初期頃の短歌の傾向を通じ、「けむかも」などの一種の成心を以て使用された歴史を通じて、この作品に對するところから來てゐるので、

萬葉集の赤人を直接對象としては、或はもつと素直に受入れるべきものだかも知れぬ。

〇

藤森朋夫

あしひきの山谷（やまたに）越えて野づかさに今は鳴くらむ鶯のこゑ　（巻十七、三九一五）

最初に題詞と左註とについて少し記して置く。「山部宿禰赤人詠二春鶯一歌一首」について、西本願寺本・神田本・温故堂本・大矢本・京大本には赤を明に作つてある。左註「右年月所處未詳審但隨聞之時記載於茲」は、この作品に關する製作時、並にその場所に關しては不明であるが、この巻の編者が傳へ聞いたままをここに記録したのであるといふ説明と見るべきである。それならばその傳聞した時は何時かといふに、この作の掲載されてある順序位置によつて推測するに、おそらくそれは天平十三年四月から同十六年四月に至る間と思はれる。そして既にいはれてゐる所でもあるが、この歌の前に載せられた田口馬長の作品と共に、大體天平十三年と見るべきではなからうか。

第三句「野づかさに」の「つかさ」は、代匠記にある如く「野のたかき所をいふなるべし」に従ふべきであり、集中にも用例としては巻四の「佐保河の岸のつかさの柴な刈りそね在りつつも春し來らば立ち隱るがね」（五二九）、巻十の「里ごとに霜は置くらし高松の野山づかさの色づく見れば」（二二〇三）が擧げられ、これらの意味もそれぞれに於ける高い所を指すのであらう。第四句「今はなくらむ」を古義一説には「者」字は「香」の誤として「いまかなくらむ」と改訓し、新考もこれに従つてゐるが、別に根據となる

べきものもないので殊更改める必要もないであらう。

一首は單純化されてゐて徹りはいい作である。赤人らしい詠風を持ち、淸楚とでもいひたい氣持が感受され、線の細さと、滯るところない調べとが諧和して觸りのよさを思はしめる。が、全體的には輪廓の案外不明確なものも藏せられてゐるやうである。家持の「高圓の宮の裾廻の野づかさに今咲けるらむ女郎花はも」（四三一六）の作は、この作品の影響下に成つたものであらうか。

○

落合京太郎

調子に滑な所があり、「あしひきの山谷越えて野づかさに」あたりには何か新味も感じられないことはないが、具象性直接性に缺くる所があるやうに思はれる。一四三一の「百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも」に一脈通ずる氣持があり乍ら、直接性具象性といふ點では三九一五は一四三一に劣るのであらう。山谷と續けて用ゐた例は集中この一首にしかなく、「山や谷」と解すべきか、或は「山谷」といふ熟語にして「山あひ」の意位に解すべきか疑問である。「山や谷」と分解して解するのは（古義などはその說である）私には稍煩瑣に思はれる。四五句の如き形は集中にも「蝦鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山振の花」（一四三五）等があるが、その調子は細くして寧ろ後世風といふべきである。

かはづなくかみなみ山に影見えて今やさくらむやまぶきの花（新古今集）

いもが家のはひりにたてる青柳に今やなくらむうぐひすのこゑ（後撰集）

あふさかのせきの淸水にかげ見えていまやひくらむもち月のこま（拾遺集）

等その模倣乃至類句を後世の歌集に多く發見し得ることに依つても明かである。自然觀照の態度に具象性を缺いて纖弱な語調に頼らうとする後世風な危險が、この一首などには萌して居る樣にも思はれる。一首の價値は高く評價し得ないのではあるまいか。

（昭和十三年四月）

四十六　山部赤人の作風

扇畑忠雄

○

赤人の作風を考察するにあたつて先づ賀茂眞淵の言葉

山部宿禰赤人は人麿とうらうへ也、長歌は心も言もただに淸らを盡せり、短うたこそ是も一人のすがたなれ、巧みをなさず、有がまにまにいひたるが妙なる歌と成りにしは本の心の高きが至りなり、譬へば檳榔の車して大道をわたるぬしの、あから目もせぬがごとし。(萬葉集大考)

を思ひ浮べたのであるが、之は勿論人麿の作風との對比の上に成されたものであるにしても、作風品評の言としては寔に簡にして要をつくしたものと思ふ。その中に、「心も言もただに淸らを盡せり」と言つてゐるのはその長短歌を通じての特色であつて、人麿の「荒魂和魂(あらたまにぎたま)いたらぬくまなんなき」渾沌を藏した全力的な作風に對し、よくその特質を指摘してゐる。沈潛、幽靜、淸澄、寂寥、靜謐、溫藉、平明などの一般的概念語を以て彼の作風が云々されるのを常とするが、一應かかる樣式的特性は考へられるにしても、往々それらの言葉を鵜呑みにして出發する如き鑑賞や、それらを以て赤人全作風を覆ふが如き論說には、

幾多の外面的な空虚の伴ふことを如何ともすることができない。つまり、個々の作品を通しての具體的考察を俟つて、その因り來る所を求めるのでなければならないといふ事になる。

明日香河川淀さらず立つ霧のおもひ過ぐべき戀にあらなくに（卷三、三二五）

高桉（たかくら）の三笠のやまに鳴く鳥の止めば繼がるる戀もするかも（卷三、三七三）

若の浦に潮滿ち來れば潟をなみ葦邊をさして鶴なきわたる（卷六、九一九）

風吹けば浪か立たむとさもらひに都多の細江に浦がくり居り（卷六、九四五）

の如き短歌にしてもその取材、着想、表現いづれも淸らを盡したものであり、淸潔單純な感覺には感嘆を惜しまないが、同時に「或る弱さ」を内藏してゐる點に物足りなさを覺えしめる。集中にあつてこれらの作品は新鮮な風格を具へてをり、たしかに新風を拓いたものに違ひないが、その開拓の方向に働く作者の性格の弱さといつたものが認められるかと思ふ。つまり、この「淸さ」は赤人作風の一特質であるにしても、その「淸さ」を規定した因由を作者の作歌態度の中に求むべきものと思ふ。對象に向ふ彼の態度に用心ぶかい配慮があつて、人麿の如き、對象との混融による全力的な詠出をゆるさないものがあるが、之が理知的とも言はれる一つの要因であらう。對象把握の仕方に斷截的なものがあると共に、詞の隅々にまで理が行きとどいてゐて、作品の中核を盛りたてる氣寡といふものに乏しい。端正ではあるが玉（ぎよく）のくぐもりの如き渾然たる妙味に缺くる憾がある。例示した三二五、三七三の如き、上句の序の用法には彼獨自の趣向がみとめられるが、下句の主觀表現への移行に於いて理を以て承けた所があつて、生ま生ました現實感に乏しいのではあるまいか。たださすがに三二五の作を「石上布留（いそのかみふる）の山なる杉群の思ひすぐべき君にあら

なくに」(四二二、丹生王)に比する時は、後者の同音繰返の序に對して赤人は譬喩的象徴的な序を用ゐてをり、その詩人的力量をよくあらはしてゐると思ふ。

理知的であるといふ事と共に繪畫的、圖案的といふこともよく擧げられるのであるが、我々にとつては寧ろ之を褒詞と見るよりも、具象性を失つて事物の分析に走りがちな彼の作風に對するアイロニカルな言葉でもある。「若の浦に潮滿ち來れば」(九一九)、「沖つ浪邊浪安けみ」(九三九)、「丈夫はみ獵に立たし」(一〇〇一)などは一讀その感を深うするものであるが、之らの特色もたしかに「淸さ」をみちびく一要素として參與してゐるに違ひない。しかしその點からのみ赤人の「淸さ」を見ようとするならば、皮相の見たるは免かれないであらう。

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける(卷三、三一八)

み吉野の象山の際の木ぬれにはここだもさわぐ鳥のこゑかも(卷六、九二四)

ぬばたまの夜のふけぬれば久木生ふる淸き河原に千鳥しば鳴く(卷六、九二五)

島がくりわが榜ぎ來ればともしかも大和へのぼる眞熊野の船(卷六、九四四)

これらの作品は赤人作品中の傑作であり、集中に於いても優秀品であつて、高い評價を受ける所以は、捉へ得た情景と一首を流れる律動とが緊密にむすびついて、處しい感情のよどみない詠出にあると思ふ。赤人の後期の作品中には手すさびと言つてもいい程な安易なものも見られるが、それらと樣異つて引締つた調子の張りが感ぜられる。赤人の「淸さ」も此處にいたつて高揚されたと見るべきであらう。と同時に、やや臆病な考へ方かも知れないが、赤人の作品を通ずる何處か拔目のない構へ方を此處にも辿ることが出

來るやうに思ふので、その點は一抹の反撥を覺えしめないでもない。之は彼の纖細な詠風に近代的なものを感じたあまりの反撥かも知れないが、今俄かにそれを否定することも出來ない。

「人麿とうらうへ也」といふ評價は、古く溯れば萬葉の當時に於いてさへ存してゐたのではないかと思はれる。人麿と赤人とを對比的に論ずることはむしろ常識であつて、背反した二つの對立を思はしめるのは或點では當然ではあるが、それを唯一の觀點とする時は、相當批評の角度が形式化され固定化されるおそれなしとしない。延いては兩者の歌風の對比を決定的な前提として論を行る傾が見られがちである。動對靜、主觀對客觀などといふ形式的批評の羈絆から脫して、赤人を人麿と同一傾向の作者と思惟する意見に、現在の私としては傾いて居る。

○　鹿兒島壽藏

本研究の對象となつた二十七首の赤人の作品は、批評者の好むと好まざるとに拘らず、又可否の如何に拘らず、それぞれの歌のうちに立派な問題を持つてゐたことは、今回の作風概說をなすに當つて、右の研究した作品を一瞥して首肯し得たところである。さて今回の對象とならなかつた次の九首の歌などは矢張り赤人觀に一つの見方を與へるものと思ふ。煩を厭はず左にそれをあげると

百磯城の大宮人の飽田津に船乘りしけむ年の知らなく（卷三、三二三）

阿倍の島鵜の住む磯に寄る浪の間なくこのごろ大和し念ほゆ（卷三、三五九）

潮干なば玉藻刈りつめ家の妹が濱づと乞はば何を示さむ（卷三、三六〇）

秋風の寒き朝けを佐農の岡越ゆらむ君に衣借さましを（卷三、三六一）

鳰鳩ゐる磯囘に生ふる名乘藻の名は告らしてよ親は知るとも（卷三、三六二）

吾が屋戸に韓藍植ゑ生し枯れぬれど懲りずて亦も蒔かむとぞ思ふ（卷三、三八四）

須磨の海人の鹽燒衣の馴れなばか一日も君を忘れて念はむ（卷六、九四七）

神代より芳野の宮に在り通ひ高知らせるは山河をよみ（卷六、一〇〇六）

戀しけば形見にせむと吾が屋戸に植ゑし藤浪いま咲きにけり（卷八、一四七一）

等の歌であつて、三二三、一〇〇六の二首などは實感動に根指すもの或はその上昇がない。ただそこには大なる破綻がないといふに過ぎず、從つて赤人その人の感ぜられないやうな歌であり、もともとかういふ材料を取扱ふ作者でないことを物語るものである。三六〇、三六一、三六二の一連などは類型的で極めて弱い。三八四、九四七等は一面赤人のにほひがあると思ふが、結果は卽吟的で卽吟のよさがなく、先づ不成功の作であらう。一四七一の歌は「戀しけば」とか「形見にせむ」などの歌句があるけれども生活力の甚しく淡いもので、單に淡白な味を認めようとしても餘りに推す可き感味に乏しい。三五九はそれらの作品よりも、感動の領分が眞實性を基點としてゐるだけ何か惹かれる所がある。

一作家三十七首のうちに、八首や九首の不出來の交るのは仕方のないことであらうが、赤人などは寧ろその數の少いとも思へる方で、右にあげた作品等は殊更に非難すべきではないのかも知れない。しかしこの作者の作歌熱に恩惠を蒙らうとする場合、現代作家の立場と態度とからすれば、さうした缺點への感じ分けも亦必要とし、從つて其處に基いて美點を吸ひ上げる觸覺の活動を敏ならしめねばならぬところでも

あらう。

○

落合京太郎

作品の評價は實作者と然らざる者との間には逕庭のあることを通例とするが、短歌の場合でも然りであり、赤人の作品に對する評價は實作者と單なる文藝鑑賞家との間には、かなり相違があるやうに思はれる。今一々その例をあげないが、世の鑑賞家の類は赤人の作品の清澄さや寂寥感や繪畫的寫實等の點をあげて之を稱揚すると共に、赤人的な作品や之に盛られた自然觀を、日本文學に於ける特徴の大なるものとしてゐるが如くである。一方實作者の立場に立ち人麿等を念頭に置き且作者の發展を考へると、赤人の作品は淸らかではあるが、ゆたかとはいへず、語の意味の寫實的ではあつても、生まなまとした豊かな現實を盛る意味での寫生の點では缺けるものがあり、詩人的ではあるが素質的にゆたかな所は乏しく、むしろ技巧的であり、構成に意識的な所が目立つ。作風に手堅い所があり、强ひていへば御手本的な所さへある。而もその表現內容が通俗性を持つてゐるから一般の鑑賞者には口あたりがよく、愛好されやすいといふことになる。けれども萬葉集中の作品をふるひにかけてゆくとき、どの程度までに赤人の作品がふるひ殘されるかといふ點に就いては、私などはかなりの疑問を持つてゐる。この疑問は赤人の作品の持つ特徴や自然觀が、日本の文學から抹消され得ない程の價値を有するかといふ點に就いても亦同樣である。ただ赤人以前の作品の集積を見て、赤人の作品を通觀すると、作者としての赤人がやはり一種の抱負と熱意とを以て、新しい境地を拓かうとした努力の迹はうかがへるのであり、作品の成功と不成功とは別問題として、その

點はやはり尊敬すべきものがあると思ふ。

○　柴生田稔

「足引の山谷こえて野づかさに今は鳴くらむ鶯の聲」（三九一五）といふ歌は、前月號の批評ではあまり高く評價されなかつたやうであるが、「山谷こえて」といふ感じ方などは、やはり特殊の新鮮な感受性がうかがはれて、ただの概念的な表現とは區別してみるべきもののやうに思ふ。また「島隱りわが榜ぎ來れば」（九四四）といひ、「朝凪に楫の音聞ゆ」（九三四）といひ、その對象の捉へ方が具象的で、型通りの滑らかな表現に終つてゐない所がある。この點は集中他の同じやうな材料を取扱つた作品と比較するとき、案外な程のものであつて、理智的とか意識的とかいはれても、根柢に於てやはり卓越した詩人的能力を備へてゐたと思ふのである。「明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき戀にあらなくに」（三二五）の作にあらはれたやうな流麗な聲調の美しさも、やはり單に技巧の問題で片づけられない所があるやうに思ふ。何か內面的な人間感情の陰影がかういふ聲調の奥には籠められてゐるやうな氣がする。

「和歌の浦に潮みち來れば潟を無み葦べをさして鶴鳴き渡る」（九一九）の歌の第三句のあたりなど、所謂理知的と評される所であるが、さういふ表現を必要とした作者の內面の衝動には、ただ理知的といふ言葉では片づけられない、或自然の捉へ方への意欲がみとめられるのではないだらうか。「風吹けば波か立たむと伺候に都多の細江に浦隱り居り」（九四五）といふ歌に於ける一種の新鮮味なども改めて分析していい問題であらう。

赤人に就いて今私の心を惹かれてゐる二三の點を思ひつくままに並べて見た。さういふ點が、實は萬葉集の本質的な部分に對してよりも、その下向的な方面、古今集的な傾向の方に惹かれてゐるのではないかといふ危險は大いに考へなくてはならぬが、やはりそれだけではない所があると思ふ。赤人はすでに論ぜられてゐるやうに、人麿の後に出てその作爲的な作歌態度を繼承しながら、人麿のやうな内面衝動の壓力に缺けてゐたために、その製作が外面的になり宮廷專門歌人的色彩を著しくした點があるのであらう。さういふ點は赤人の境遇にも個人的な性格にもよるのであらうが、そのいづれがもつとも大きくはたらいてゐるかは今にはかには斷ぜられない。只それが先に述べた赤人の優れた素質とどう交渉してゐるかといふ問題を、私としては今もつと考へて見たいと思つてゐるのである。

○　　　　土屋文明

赤人が人麿と竝び稱せられたのはすでに萬葉集の時代に始るらしいが、その後の時代になると或場合にはむしろ人麿以上に評價されてゐたらしい。殊にその評價は實力ある歌人によつてなされてゐたらしい。勅撰集に採られた歌の數も決して人麿に劣らないし、その模倣者乃至模倣歌はむしろ人麿よりも多數であつたらう。とにかく赤人は人ずきのする作者であつたといふことは爭へまい。それは赤人の歌が普遍的であり、從つて一般的であつたといふことを側面から示すことになるやうに思ふ。現在の評價の標準は、少くとも中世よりは高められて居らうから、赤人の評價が段々低められる方へ向つてゐるのは、これまた當然のことと云はざるを得ない。

赤人の直截な敍法は淸新な所があり學ぶべき所が多いのであるが、いかにも澄明すぎて、結局迫る所がよわすぎる。これは勿論部分的の人麿模倣とかいふやうなことは、模倣は歌人の常として、勘定外に置いての結論ではないかと思ふ。さういふ點からいへば赤人の要領を得た技巧も、實は吾々に與へるところのものは案外少いのではないかとも思はれる。或點では赤人の短歌は人麿などとは又異つた一つの完成したものを持つて居るともいへようが、それだけに後に來るものを約束するところは甚だ少いやうに思はれる。御用歌人とか職業歌人とかいふ言葉は、流行的に萬葉歌人にあてはめて用ゐられたことがあるが、若しその言葉をあてはめるとすれば、赤人は最もあてはまるのではないかと思ふ。これは決して行幸供奉の歌を作つて居るとか、他人の爲めに代作らしい歌が殘つて居るとかいふ外面的のことではなしに、物の觀方、感じ方に獨自のものを缺いて、ただ普遍的に一般的にと取まとめていつて居る態度について云へるのである。從つてその聲調にも險難の風がなく、ただ一路平坦にとはこんでいつて居るのである。

勿論赤人も萬葉歌人であるから、古今以後の歌人群などと比較すれば、云ふ迄もなく段違ひであり、すでに別世界のものであつて、今迄、その一々の作品に於て指摘された美點特徴は、その通りに違ひないが、同じ萬葉の中に在つて各作品を相互比較するといふことになれば、赤人の作品のすべてを最高に品等することは色々支障が生ずるのではないかと思ふ。

さてさういふ赤人の缺陷を何に歸すべきかといふことになれば、今はただ天禀によるといふ以外、系統的に理論的に云ひあらはすことの出來ないのを、私は自ら遺憾とするのみである。

○　　　　　　　五味保義

赤人が人麿と比較されることは、古くから例になつてゐるのであるが、我々の先輩も殆ど例外なく人麿を論ずる場合には赤人を引合に出し、赤人を云々する時は人麿をそれに對照させて居る。卽ち人麿、赤人の比較は單に形式的なものでなしに、又單に習慣的なものではなしに、何等かの意味に於て、人麿、赤人の本質に關聯を有するものであると思ふ。赤人を云々する時に人麿を引合に出すのは、單に便宜的なものでなく、さうすることが赤人の本質をよりよく明瞭ならしめるものである。それが時に人麿、赤人對立せる如き感を與へてゐることもあるけれども、各作品に卽して實作の方から論ずる人であればある程、そこの關係は先に扇畑君の言はれた如く、赤人を人麿と同一傾向の作者として、その特異性を論じてゐると私は思ふ。つまり、人麿に比較してさういふ問題を持ち得る所が、赤人の詩人として本質的に優れてゐた所以であると思ふ。萬葉集全體を見渡して赤人の作品がどれ位選ばれるか疑問であると落合君が言つて居るが、私はその點でも赤人と同時代の作者達の中に於て頭角を拔く者であると考へる。

思ふに赤人の作品程近年に於て評價の變動の著しかつたものはあるまい。私自身に於てもそれに伴なつて幾多の變動があつたやうに思はれる。秀れた批評者、例へば赤彥、憲吉の如き人々がこれを賞揚する場合、これに肯く可き幾多の評言が發見出來る。「柹本人麿」の中に於ける批評のやうなものや、又前二三の評者の如くその素質の缺陷を擧げられればそれにも肯くべき所がある。これは私の評價の弱體を暴露してゐるとも思はれるけれども、又一方から考へれば赤人自身の持つ作者としての風貌を示して居ると思ふ。

私はこの頃二三のアララギ以外の赤人論を讀んで見て、赤人を著しく貶す傾向のあることを知つた。このことはさういふ評價が二三の有力な批評者によつてなされた影響とも思へるが、低調な人情味尊重の態度から出てゐる樣に思ふ所もあつて興味を覺えたのである。つまり、赤人を目して反省的理知的であると言ひ、非情熱的であると言ひ、分析的であると言ひ、つひには低調と論じ、性格の弱さを擧げてかなり手きびしく赤人を評價してゐるのである。さういふ論は矢張人麿を引合に出して來るので、赤人は常に著しく不利である。人麿と同じく金村、千年乃至は蟲麿、福麿を竝べて論ずる事をしないから、嘗て短歌の極致とまで論ぜられた赤人が、極めて弱い性格の作者とされてゐる實狀を見出すのである。私は現在落合君の言ふ如き評價に結局は贊成する者であるが、萬葉集全體を見渡し、又短歌の歷史を見渡して矢張尊重すべき存在であり、詞句の驅使とか作品の氣品等の點に於て、現在の放恣なる批評家の眼力などが到底及ばぬものを持つてゐると私は思ふ。私は近來印象不明瞭な作歌をなしつつ、それを抒情的作品の最上なるものと自負し、且勢に乘じて赤人を貶する傾向に贊成出來ないのである。恐らくこの傾向はこれからいよいよ著しくなるかと思ふが、それは必ずしも人麿の眞價を現在に生かすものでもなく、嘗て赤人をいたく尊重する口眞似批評が生じたと同じやうな傾向を生む恐れなしとしない。

（昭和十三年五月）

四十七　山部赤人と笠金村

○

五味保義

赤人と金村とは相似た歌人である。第一に、生存年代について言へば、赤人は神龜元年に作歌が始めて見え、天平八年に其の紀事を沒して居り、金村は赤人に先んじて靈龜元年に初めて作歌があるが、天平五年以後その紀事を見ないのであつて、これは同時代の作家と云つてよい。それから社會的な經歷に於ても、作品の素材から察せられるところ二人とも所謂宮廷詩人であつて、殆ど同等の地位にあつたものと思はれる。作品の素材から言ふと、旅とか行幸供奉とかの作を主としてゐるあたり殆どその揆を一にしてゐる。其他歌數に於ても更に人麿流風中の人であるといふ點でも全く同じであると言つてよい。ことによると二人の在世中には金村の方が地位が稍々上で歌人として重んぜられて居たのではないかと思はれる節もある。

それであるから、外形的な比較をすれば、赤人と金村はほぼ對等の歌人であるといふ事になつて了ふのであるが、作品の內面に一歩入つてこれを比較することになると、今度は赤人を一歩上に立てなくてはならなくなるやうである。實際作歌の心組から言へば、さうせざるを得なくなるやうである。一體金村は人

麿或は赤人に對する世の評價がまちまちであるのと違つて、凡そ世評は定まつてゐるやうである。又、金村を作家研究の對象として取上げた例は極めて少いのを見ても、現代の批評家の標據とする所が解るやうに思ふ。これは、萬葉集の卷三、六、八等に金村と赤人と相次いでその作品が載せられ、その狀態を仔細に觀察する時、これ等の卷々の編者達が、金村を赤人よりも重んじてゐたのではないかと考へられることからすると少しく興味ある事實である。この現代の傾向は既に家持が「山柿」と言つたが金村をあげず、金村を赤人の下に置いたらしい時から始つてゐるとも云へよう。

金村は赤人に比して、くせのない歌を作つてゐる。更に言へば、問題のない歌を作つてゐる。齋藤茂吉氏の新撰秀歌百首に「高古朗々とした歌」と評せられた「山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも」（九〇九）といふ歌にしても、人麿の「見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絕ゆることなくまた還り見む」（三七）に比するときはずつと平坦である。從つて赤人の「み吉野の象山の際の木末にはここだもさわぐ鳥の聲かも」（九二四）等よりも問題がないと言ひ得るであらう。つまり、金村は人麿を目標としてゐたかも知れないが、其の人麿の風格から自己の發展を求め得た度合に於て、赤人よりも一步遲れ、その一步たるや永久に追ひ及く事の出來ない距離であつたのである。短歌製作に苦心するものはこの邊の呼吸を看過してはならないと思ふ。

玉藻刈る辛荷（からに）の島に島囘する鵜にしもあれや家念はざらむ（赤人、卷六、九四三）

鹽津山うち越え行けば我が乘れる馬ぞつまづく家戀ふらしも（金村、卷三、三六五）

島隱り吾（とも）が榜ぎ來れば羨しかも大和へ上る眞熊野の船（赤人、卷六、九四四）

越の海の手結(たゆひ)の浦を旅にして見ればともしみ大和偲びつ（金村、巻三、三六七）
神代より芳野の宮に在り通ひ高知らせるは山河をよみ（赤人、巻六、一〇〇六）
神からか見が欲しからむみ吉野の瀧の河内は見れど飽かぬかも（金村、巻六、九一〇）
朝なぎに楫の音聞ゆ御饌(みけ)つ國(くに)野島の海人(あま)の船にしあるらし（赤人、巻六、九三四）
海未通女(あまをとめ)棚無し小舟榜ぎづらし旅のやどりに楫の音(と)聞ゆ（金村、巻六、九三〇）
昔者(いにへ)の舊き堤は年深み池の渚に水草(みくさ)生ひにけり（赤人、巻三、三七八）
三笠山野邊行く道は許多(こきだく)も繁く荒れたるか久にあらなくに（金村、巻三、二三二）

右のやうなものは何れも題材が同一であるから、右の二首宛を各一對として味はふ時には先に言つたやうな比較を裏づける材料であると思ふ。

以上に關聯して一二、金村の歌の缺點と思はれる實例を言ふと、「越の海の手結の浦を旅にして見ればともしみ大和偲びつ」（三六七）の歌に於て、「見ればともしみ」と言ひ、「天雲の外に見しより吾妹子に心も身さへ緣りにしものを」（五四七）の歌に於て、「心も身さへ」と言ひ、「吾妹子が結ひてし紐を解かめやも絶えば絶ゆとも直に逢ふまでに」（一七八九）の歌に於て「絶えば絶ゆとも」と言ふ如き、これ等は一般的な感情であつて歌柄を低くしてゐるのである。赤人も同じくさういふ傾向があるが、その程度に於て赤人の方が一歩現實に近づいてゐることを思ふのである。「昔者の舊き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり」（三七八）の歌に於ける「年深み」のごとき、「若の浦に潮滿ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る」（九一九）の歌に於ける「潟をなみ」のごときその例となるかと思ふ。赤人の歌は口あたりがよいといふ批

評が先月號にあつたが、金村は更に平坦に行つて居て、更に一般に好まれさうな歌である。「往きめぐり見とも飽かめや名寸隅（なきすみ）の船瀬の濱にしきる白浪」（九三七）のごとき、「高圓（たかまと）の野邊の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人無しに」（二三一）のごとき、矢張氣持のよい風格であるが、金村の歌には一體に他に類歌の容易に求められる點から見ても、非常に一般的な歌風といふことが出來る。だから金村の影響を受けた作家を明かに擧げることは、赤人のそれを擧げることよりずつと困難なことである。

赤人と金村とを比較して結局金村の缺點をのみ擧げたやうになつたが、私はこの二人の差異が究極のところどうにもならぬ二人の素質から出てゐると言ふより他ないと思ふと同時に、又金村自身この事實を作歌しつつ認めて居たらどうなつたであらうかといふことも考へる。恐らく金村は官吏生活の傍ら、この程度の作歌に樂しみ、自らその心を遣り、又世評も相當に良くて生を終へたのではないかと思ふときに、赤人の方が或標準を持つてゐて、今少しその點では苦勞をし、骨折つたのではないかといふ氣がして來るのである。これは現在の我々にとつても興味のないことではない。

眞淵の萬葉考の序文に「笠朝臣金村、高橋連蟲麿などはいたつらに古へをいひうつせしものなれば強きが如くして下よわし」とある。この要を得た究極的批評がある上は私などの言を加ふべき餘地がないやうにも思ふ。

○　　　　柴生田　稔

笠金村は續日本紀や公卿補任に名が出てゐないから、卑官であつたと推定され、それでゐて行幸供奉の

作品が多く傳へられてゐるのは、彼が人麿、赤人等と同樣に宮廷歌人的な境涯の人であつたことを想像せしめるのである。憶良、旅人、赤人、金村等大體同時代の歌人であるが、赤人、金村は憶良、旅人等の一群とは作歌の上に交渉が無かつたやうに見える。赤人と金村との關係の方は、神龜二年十月難波宮行幸の時及び同三年九月印南行幸の時に二人とも供奉して作歌のあつたことが、卷六の記載によつて明かである。兩人相竝んで宮廷歌人として仕へてゐたことは、略ぼ確らしいが、相互に贈答の作品なども無く、作家としてどこまで内面的に親密な交渉があつたかといふことは全く不明である。この點は憶良對旅人の關係などとは趣を異にするもので、一面これが赤人、金村等の作家としての性質を暗示してゐるやうにも思はれる。卷六に於ける作品記載の順序は、すべて金村を先に赤人を後にしてゐるが、これは必ずしも當時歌人としての聲價に於いて金村が赤人の上にあつたことを示すものとは言へないであらう。官吏としての身分とか宮廷歌人的經歷とかいふやうな外形的な理由も考へられるし、編輯の材料の具合なども考慮していいのではあるまいか。左注の樣子では車持千年や赤人の作品よりも金村の方が記錄が確實らしくも思はれるので、さういふ關係から金村の方を先にしたと見ることも出來さうである。一方卷三などを見ると、赤人の方がずつと有力な作家のやうに現れてゐる。五味氏のやうな意見は、既に土屋氏の「赤人と金村」(アララギ昭和四年八月號萬葉集私見)中にも見えてゐるが、今日容易に推定の出來ない問題であらうと思ふ。

金村の評價については五味氏の言ふやうに眞淵の言葉に盡きてゐるとも言へる。赤人との比較に於いても、金村に就いては恐らくあまり新しい問題はなく、兩人優劣の點も異論のないところと考へられ、主として赤人の解釋如何によつて、その差異の程度乃至性質に對する各自の意見の相違が生じて來るので、比

較の意義は其處にあるのではないかと思ふ。この點を今十分考へることの出來ぬのが殘念であるが、ただ現在の私は兩者の隔りをかなり大きく感じてゐる。金村の歌風は主觀的表現が割合に多く、この點で赤人の客觀的傾向と對立するやうであるが、これはむしろ文學上の主觀的とか客觀的とかいふ區別以前の問題で、金村の作品は一般常俗の感情表出の型以上に出てゐないのである。例へば

山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河內は見れど飽かぬかも（卷六、九〇九）

萬代に見とも飽かめやみ吉野のたぎつ河內の大宮どころ（卷六、九二一）

往きめぐり見とも飽かめや名寸隅（なきすみ）の船瀨の濱にしきる白浪（卷六、九三七）

といふ具合に、佳景を詠ずるとなると、時と處とを問はず「見て飽きない」といふやうに槪念的稱讚の辭を平押に言ひ進める以外を知らぬのである。かういふ表現自身が必ずしもいつもさうだといふわけではないが、金村の場合にはそれを類型的表出の一徵候とすることが出來るやうに思はれる。金村のやうな型の人は恐らく如何なる境涯如何なる時代にあつても、かういふ根本的な缺陷を免れることは出來なかつたであらう。これまで色々述べられたやうに、今日赤人には相當大きい不滿が感ぜられ、そこには同類の作家として金村と相共通するものもあるのであるが、右のやうな點に於いては兩者の差異はかなり本質的なものではあるまいかと思はれる。

○　　　　　　　　　　　　　　　　土屋文明

赤人については既に大體の評言が盡され、暗默のうちに評價の歸着點が豫見されると思ふから、先づ赤

人を標準として金村のことを考へて見ればよいと思ふ。第一に歌數であるが、金村歌集を全部金村作と見ても赤人の方が幾分多い。そしてその多いのは短歌の方で差が出來て居る。歌數といふ事は今日では餘り問題にならないが、それでも作者の活動力を或る點までは暗示して居るといへよう。作歌の機緣の單純であつた時代には、作品の數と作者の實力といふものは大體並行して居たと見られるであらう。萬葉でもこれは大體さうであつて、家持が例外となる位である。人麿は赤人より作歌力旺盛であつたから、赤人より上位の作者であり、金村は赤人より作品が少いから下位の作者であるといふと、人はその兒戲にすぎないのを笑ふかも知れないが、どうも實際はそこに一脈の眞理が存するのではあるまいか。

金村の語句の中に人麿の模倣、赤人との共通のものの多いのもよく氣のつくことであるが、これは金村を劣等作者として貶すよりも、同じ方向に向つて相並んで作歌する場合に、如何に新しい領域の開拓が困難であるかを知るべきであらう。これは勿論模倣を大目に見よといふのではなく、新しい仕事の意義を忘れてはならないといふ意味である。赤人金村を見ることによつて人麿の眞價は益〻高められるであらうし、不完成にしろ憶良等の仕事の意味も理解せられよう。

（昭和十三年六月）

執筆者索引

所載歌索引

ア

ウ

オ

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

ス

タ

ム

モ

ヤ

ユ

ヨ

ワ

萬葉集研究 下

一九四〇年一〇月一五日 第一刷発行
一九八一年 五 月二七日 第四刷発行

定価三六〇〇円

編者 斎藤茂吉
発行者 緑川亨
発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京 六-二六二四〇

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします